

千葉県文化財センター

# 研 究 紀 要

## 23

平成14年9月

財団法人 千葉県文化財センター

# 発刊の辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究、普及活動を実施してまいりました。その成果は、発掘調査報告書をはじめとする多数の刊行物等に見られるとおりです。

研究活動につきましては、研究紀要の刊行をはじめ、埋蔵文化財調査に関連する研究事業を行ってまいりました。昭和50年度に第1号を刊行しました研究紀要は、以来第1期から第5期に分けて共通のテーマを設定し、これまでに22冊を著しました。この間、昭和60年度には「創立10周年記念論集」、平成6年度には「創立20周年記念論集」を刊行するなど、房総文化の解明に努めてまいりました。

当センターでは、数多くの遺跡を調査し、調査報告書や研究紀要を通して各時代・各分野の様々なデータを多量に蓄積してきました。しかしながら、昨今の発掘調査により、新事実が解明される一方においては新たな課題や問題点も生まれ、これらの蓄積資料を改めて整理し分析することが課せられてもいます。

このため、第5期ではこれまでの研究紀要ではとりあげられていなかった各時代の遺跡、遺物、文献等の資料集成を主とし、「各時代における諸問題」と題して新たに展開することにし、平成13年度に本シリーズの成果報告の第1冊目として研究紀要22「尖頭器石器群の研究」を刊行しました。

このたび、第2冊目として、研究紀要23号「房総における原始古代の農耕－各時代における諸問題2－」を刊行することになりました。

本書が考古学研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための一助として広く活用されることを期待してやみません。

平成14年9月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 清水新次

# 目次

## 房総における原始古代の農耕 －各時代における諸問題2－

はじめに	3
第1章 原始古代の農耕をめぐる課題	5
第1節 研究史	5
1 戦前の調査・研究	5
2 戦後の調査・研究	6
第2節 農耕の開始と時代区分	11
1 縄文時代の植物栽培	11
2 関東地方における初期弥生文化	13
3 房総における稲作の開始と時代区分	15
第3節 調査対象と研究の課題	22
1 水田・畠遺構の検出	22
2 農具類	23
3 自然科学分析による調査	23
第2章 農耕関連遺構の分析	25
1 農耕関連遺構の概要	25
2 水田・畠跡と治水遺構について	52
1) 水田跡	52
2) 畠跡	53
3) 治水遺構	54
第3章 木製農具の変遷と若干の問題	55
1 木製農具出土遺跡の概要	55
2 千葉県における木製農具の変遷	63
3 鋤の製作工程と木製農具製作における樹種の選定について	69
4 出土遺構から見た木製品構成比率について	74
5 小結	75
第4章 石製農具－特に石庖丁状石器について－	107
1 問題の所在	107
2 関東地方における穂摘具の可能性をもつ石器	108
3 千葉県における穂摘具の可能性をもつ石器	115
4 時期ごとの特徴と地域性	121

第5章	鉄製農具の変遷と農耕技術の内容	125
1	穂摘具	125
2	鎌	129
3	耕起具（鋤鋤先）	135
4	小結	139
第6章	炭化種子から見た農耕生産物の推定	141
1	炭化種子検出遺跡と遺構の概要	141
2	炭化種子の出土傾向	150
3	炭化種子の出土位置と埋没過程について	154
4	いわゆる「おにぎり状炭化物」について	157
5	モモ核の出土状況と祭祀行為	158
6	小結	161
附章	資料・データ集	181
1	関連資料	181
1)	農耕関連遺跡	182
2)	鉄製農耕具出土一覧	192
3)	炭化種子出土一覧	214
2	文献目録	220
1)	論文・書籍等	220
2)	報告書等	237

写真図版

## 挿 図 目 次

### 1-2 調査・研究の今日的課題

第1図	アフリカ大陸・ユーラシア大陸における雑穀の起源と伝播	12
第2図	沖式土器	14
第3図	山梨県韮崎市宮ノ前遺跡の水田跡と出土土器	14
第4図	荒海川表遺跡出土土器	16
第5図	荒海川表遺跡のプラント・オパール資料採集地点	18

### 2-1 農耕関連遺構の概要

第6図	農耕関連遺構検出遺跡位置図	24
第7図	芝野遺跡の位置と基本土層	25
第8図	芝野遺跡弥生時代後期遺構全体図・土器配列遺構出土遺物	27
第9図	菅生遺跡の位置と基本土層	28

第10図	菅生遺跡奈良・平安時代全体図	29
第11図	菅生遺跡第7水田面配置図	31
第12図	菅生遺跡第7水田面	31
第13図	市原条里制遺跡の位置と基本土層	33
第14図	市原条里制遺跡小区画水田・出土遺物	35
第15図	市原条里制遺跡(奈良・平安時代)	36
第16図	長須賀条里制遺跡の位置と基本土層	37
第17図	長須賀条里制遺跡A区・B区全体図	38
第18図	長須賀条里制遺跡C区～E区古墳時代	39
第19図	常代遺跡・郡条里遺跡位置図	42
第20図	常代遺跡古墳時代後期以降全体図	42
第21図	常代遺跡弥生時代～古墳時代前期全体図	44
第22図	常代遺跡堰跡平面図	45
第23図	常代遺跡出土遺物	46
第24図	高部古墳群30・32号墳	48
第25図	芝崎遺跡の位置	50
第26図	芝崎遺跡奈良・平安時代全体図	50
第27図	西根遺跡と堰	51
<b>3-2 千葉県における木製農具の変遷</b>		
第28図	木製農具変遷図(1)	64
第29図	木製農具変遷図(2)	65
第30図	木製農具変遷図(3)	67
第31図	木製農具変遷図(4)	68
<b>3-3 鋤の製作工程と木製農具製作における樹種の選定について</b>		
第32図	直柄鋤の製作工程	70
第33図	曲柄鋤の製作工程	71
<b>3-5 小結</b>		
第34図	常代遺跡木製品	76
第35図	常代遺跡木製品	77
第36図	常代遺跡木製品	78
第37図	常代遺跡木製品	79
第38図	常代遺跡木製品	80
第39図	浜野川遺跡・長須賀条里制遺跡木製品	81
第40図	国府関遺跡木製品	82
第41図	国府関遺跡木製品	83
第42図	国府関遺跡木製品	84
第43図	国府関遺跡木製品	85

第44図	国府関遺跡木製品	86
第45図	国府関遺跡木製品	87
第46図	国府関遺跡木製品	88
第47図	国府関遺跡木製品	89
第48図	国府関遺跡木製品	90
第49図	国府関遺跡木製品	91
第50図	国府関遺跡・村田服部遺跡・西根遺跡・芝野遺跡木製品	92
第51図	五所四反田遺跡木製品	93
第52図	五所四反田遺跡木製品	94
第53図	五所四反田遺跡・菅生遺跡木製品	95
第54図	菅生遺跡木製品	96
第55図	菅生遺跡・郡遺跡木製品	97
第56図	郡遺跡木製品	98
第57図	市原条里制遺跡木製品	99
第58図	市原条里制遺跡木製品	100
第59図	市原条里制遺跡木製品	101
第60図	市原条里制遺跡木製品	102
第61図	三直中郷遺跡木製品	103
第62図	三直中郷遺跡木製品	104
第63図	三直中郷遺跡木製品	105
第64図	三直中郷遺跡・古市場（2）遺跡・不入斗遺跡木製品	106
<b>4-2 関東地方における穂摘具の可能性をもった石器</b>		
第65図	I期の石器（藤岡市沖Ⅱ遺跡）	108
第66図	Ⅱ期の石器（富岡市七日市観音前遺跡）	110
第67図	Ⅲ期の石器（1～4熊谷市・行田市池上遺跡 5秦野市砂田台遺跡）	111
第68図	Ⅳ期の石器1（1～5横浜市折本西原遺跡 6～9逗子市池子遺跡群No. - A地点）	113
第69図	Ⅳ期の石器2（1・2藤枝市郡遺跡 3藤枝市上藪田・川の丁遺跡 4清水市能島遺跡）	114
<b>4-3 千葉県における穂摘具の可能性をもった石器</b>		
第70図	千葉県の石器1（1伝館山市笠名遺跡出土 2佐倉市六崎大崎台遺跡）	115
第71図	千葉県の石器2（君津市常代遺跡）	116
第72図	千葉県の石器3（安房郡富山町恩田原遺跡）	118
第73図	千葉県の石器4（1・2千葉市城の越遺跡 3袖ヶ浦市根形台遺跡群第Ⅵ地点 4四街道市御山遺跡 5市原市土宇遺跡 6鴨川市中原条里跡 7鴨川市根方上ノ芝条里跡）	119
<b>5-1 穂摘具</b>		
第74図	木部挿入式と釘止め式穂摘具	126
第75図	釘止め式穂摘具とコウガイ	127

5-2	鎌	
第76図	鎌 直刃	130
5-3	耕起具（鋤鋤先）	
第77図	鎌 曲刃（1）	132
第78図	鎌 曲刃（2）	133
第79図	鎌 逆刃	134
5-4	小結	
第80図	耕起具（鋤鋤先）板状	136
第81図	耕起具（鋤鋤先）U字形（1）	137
第82図	耕起具（鋤鋤先）U字形（2）	138
6-5	モモ核の出土状況と祭祀行為	
第83図	時期別桃核出土状況図	159
6-6	小結	
第84図	炭化種子出土遺構（1）	164
第85図	炭化種子出土遺構（2）	165
第86図	炭化種子出土遺構（3）	166
第87図	炭化種子出土遺構（4）	167
第88図	炭化種子出土遺構（5）	168
第89図	炭化種子出土遺構（6）	169
第90図	炭化種子出土遺構（7）	170
第91図	炭化種子出土遺構（8）	171
第92図	炭化種子出土遺構（9）	172
第93図	炭化種子出土遺構（10）	173
第94図	炭化種子出土遺構（11）	174
第95図	炭化種子出土遺構（12）	175
第96図	炭化種子出土遺構（13）	176
第97図	炭化種子出土遺構（14）	177
第98図	炭化種子出土遺構（15）	178
第99図	炭化種子出土遺構（16）	179

## 表目次

1-2	調査・研究の今日的課題	
第1表	荒海川表遺跡の資料採集地点におけるプラント・オパール検出個数	18
3-3	鋤の製作工程と木製農具製作における樹種の選定について	
第2表	農具別樹種一覧表	73

5-1	穂摘具	
第3表	穂摘具出土点数変遷表	127
5-2	鎌	
第4表	直刃鎌時期別出土状況	130
5-3	耕起具（鋤鋤先）	
第5表	曲刃鎌時期別出土状況	132
第6表	逆刃鎌時期別出土状況	134
5-4	小結	
第7表	板状鋤鋤先時期別出土状況	136
第8表	U字形鋤鋤先時期別出土状況	137
6-2	炭化種子の出土傾向	
第9表	時期別食用植物比率	153
6-3	炭化種子の出土位置と埋没過程について	
第10表	神奈川県時期別食用植物比率	154
6-5	モモ核の出土状況と祭祀行為	
第11表	住居出土桃核一覧	160

## 図版目次

### 本文中写真

写真1	市原市中潤ヶ広遺跡出土石器	120
写真2	館山市長須賀条里制遺跡出土石器	120

### 写真図版

図版1	上 芝野遺跡空中写真	
	下 芝野遺跡土器配列遺構	
図版2	上 菅生遺跡空中写真	
	下 市原条里制遺跡古代水田跡	
図版3	上 西根遺跡堰検出状況	
	下 長須賀条里制遺跡E区SD-1木樋	
図版4	上 椎名崎古墳群SX-4畠跡	
	下 芝野遺跡農具未製品出土状況	
図版5	上 国府関遺跡木製品	
	下 市原条里制遺跡穂摘具出土状況	
	下 草刈遺跡K区151号住居出土マメ類	
図版6	市原条里制遺跡並木地区SD008-912「おにぎり状炭化物」	
図版7	市原条里制遺跡並木地区SD008-1239「おにぎり状炭化物」	
図版8	市原条里制遺跡市原地区4区SD008-1240「おにぎり状炭化物」	



# 房総における原始古代の農耕

— 各時代における諸問題 2 —



# はじめに

資料部長 菊池 眞太郎

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年に創立以来、埋蔵文化財の発掘調査及びこれに関する研究事業・普及事業を主要な業務としている。

この間、緊急調査と学術調査によって数多くの遺跡を発掘調査し、刊行した調査報告書も440冊に達した。さらに、調査を通じて集積された膨大な資料の整理・検討から各時代・各分野の問題点の解明について積極的に取り組んできたところである。

当センターではそれらの成果を『研究紀要』としてまとめ、昭和51年に第1号を刊行して以来号を重ね、本書で23号を数えるに至っている。

『研究紀要』は、各時代・各分野における文化、遺跡・遺構・遺物等の問題点を抽出し、これらの解明に向けた文献、遺跡・遺物などの資料の収集・整理、そして論考を加えるための共同研究を通して、当センター職員の日頃の研究成果を社会に提示、還元するものである。平成10年度からは第5期として「各時代における諸問題」という新しい主題による研究が開始され、前号（第22号）からその成果を刊行している。本号では「房総における原始古代の農耕」と題して、原始・古代の農耕技術をめぐる諸問題についてスポットをあて、新発見資料もまじえて検討を加えることとした。

千葉県下では、これまで大規模な開発行為が台地・丘陵上に集中したことや遺跡の分布が十分に把握されていなかったことなどから、かつては低湿地の発掘調査があまり行われてこなかった。このため全国的に原始・古代の水田跡の発見が相次いだ時期にも、県内では未見であった。しかし、ここ10年余りの間に低湿地の発掘調査例が飛躍的に増加し、各地で水田跡が発見されるようになるとともに、木製品の出土例も増加し、各時期の木製農具の様相も追求することが可能になってきた。水田稲作農耕開始期の諸問題を解明することは、日本考古学の最も大きな関心事のひとつである。しかしながら、弥生時代前期から中期前半の集落遺跡や生産遺跡が現在なお未見の房総では、議論の俎上にのぼることはなかった。弥生時代中期後半から古墳時代、古代についても、農耕関連遺跡の調査資料が増加しているとはいえ、それらを総括する研究は行われていないのが現状である。

また出土遺物についていえば、木製農具はもとより、鉄製農具についても資料数の増加により、これまでの研究成果についての再検討が求められている。このほか旧来、南関東地方で欠落しているとされていた弥生時代の石製穂摘具についても、新たにその可能性をもつ石器の存在が指摘されるようになるなど、多岐にわたる問題が浮き彫りになってきた。

以上のような状況のなかで、房総における原始・古代の農耕技術の発展を解明すべく、弥生時代から平安時代までを対象として、水田跡・畠跡・水利遺構など農耕生産に関係する諸遺構、掘削・耕起・収穫などの機能をもつ農耕具について基礎作業である資料集成を行い、時期によるそれらの変遷や組成の変化などについて研究を行った。

本書は、平成11年度から平成13年度までの3か年を費やし実施してきた研究成果をまとめたもので、今

後の原始・古代研究に寄与することがあれば幸いである。本書の執筆分担は以下のとおりであり、編集に当たっては資料部資料課渡邊智信が行った。

最後に、共同研究から本編をまとめるまでの間において、関係各位からは多大なるご指導、御協力をいただいた。ここにご芳名を録し、深く感謝の意を表するものである。

#### <協力機関>

(財)市原市文化財センター、(財)香取郡市文化財センター、鴨川市教育委員会、木更津市教育委員会、木更津市立金鈴塚遺物保存館、(財)君津郡市文化財センター、国立歴史民俗博物館、佐倉市教育委員会、(財)総南文化財センター、袖ヶ浦市教育委員会、館山市教育委員会、富山町教育委員会、千葉県立房総風土記の丘、静岡県教育委員会文化課、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所、藤枝市教育委員会、藤枝市郷土博物館

#### <協力者> (五十音順, 敬称略)

荒井世志紀, 荒井 格, 飯塚武司, 稲葉昭智, 扇崎 由, 甲斐博幸, 木村有作, 工藤哲司, 近藤 敏, 佐藤甲二, 斎野裕彦, 谷口 肇, 樋上 昇, 藤崎芳樹, 松井一明, 桃崎祐輔, 山口譲治, 山田昌久

#### <担当者>

平成11年度 加藤正信, 渡辺修一, 城田義友

平成12年度 加藤正信, 渡辺修一, 城田義友

平成13年度 加藤正信, 渡辺修一, 大谷弘幸, 城田義友

平成14年度 渡辺修一, 城田義友

#### <執筆分担>

加藤正信 第1章第1節, 第5章2, 3

渡辺修一 第1章第2節, 第4章

大谷弘幸 第1章第3節, 第3章, 第5章1, 第6章

城田義友 第2章

附章は、担当者全員が集成を行い、城田義友が取りまとめた。

# 第1章 原始古代農耕をめぐる課題

## 第1節 研究史

加藤 正 信

### 1 戦前の調査・研究

農耕という用語についての厳格な定義から始めなければ、本来の農耕の開始時期を捉えることはできないが、そのことについて詳細に述べるだけの業績を持ち合わせていないので、非常に曖昧な定義のまま、各節の研究対象に応じて各論を進めることをご容赦いただきたい。また農耕と栽培との相違、自生植物の利用・採集から栽培・農耕への変化、栽培技術・作物の移入などもあり単純には論じられない。

原始古代の農耕の開始をいつに捉えるかという大きな問題については、植物栽培という観点から見れば縄文時代に始まり、エゴマの栽培、クリの栽培等植物栽培の可能性等が数多く指摘されているが、それだけにとどまらず今回主たるテーマとするイネについても、縄文時代後期・晩期には栽培が指摘され、プラント・オパールの検出例に限ればそれは縄文時代前期前半にまでさかのぼるとする説も見られ、栽培の可能性を検討する必要も十分に指摘されている。縄文時代のイネの検出例や、栽培の可能性の指摘は初現のものは陸稲による畠作が想定されており、その段階では他の植物に対するイネの優位性は取りたててみられないと考えられている。それが何を契機としてイネの水田耕作を主体とする農耕に変化していくのか、またその時期はいつからなのかといった問題は、容易には解決しないと思われる。

ここでは、農耕については水田における稲作の定着とほぼそれと同時期に定着したと見られる金属器の使用を主たる対象とし、それに関連する事項として、農耕の場所としての遺跡・遺構、道具（農耕具類＝鉄器・石器・木器）、農耕の生産物としての栽培植物（種子・プラント・オパール・花粉分析・炭化物）、直接の食料として確認されている植物（穀類、豆、モモなど）を取り上げた。

古くから、弥生時代の出土土器には籾の圧痕が確認されており、また焼け米（炭化米）の出土も確認されていたことから、イネそのものの存在は確認されており、入手方法として農耕栽培によると考えられ、銅鐸の描画にも農耕に関するものが認められ、農耕の存在は十分に認識されていた。一部ではあるが、東北の宮城県多賀城市の柞形冨貝塚では土器に籾の圧痕が確認され、縄文時代にも稲作栽培の可能性を指摘する山内清男の指摘もあり大きな反響を呼んだ。しかし発掘調査では稲作農耕の遺構である水田遺構は確認されず、集落遺跡の建物遺構や埋葬例等の調査例が増加しつつあった。弥生文化に関する森本六爾の研究で、弥生時代を稲作栽培の定着による農業の開始の時期と位置づけたことは、籾の圧痕の検出だけではなく、集落の安定した出現・銅鐸絵画・集落の立地論・土器の用途論などの総合的な視野によって、稲作栽培による農耕の開始時期とする認識であり、正当な研究方法による学問的先進性において極めて顕著であった。

1936（昭和11）年の末永雅雄・小林行雄らの奈良県唐古池の発掘による唐古鍵遺跡の調査などによって、良好な弥生時代の土器類に伴う数多くの木製農耕具類の出土から、農耕の存在が確認される資料は得られており、それらは現在の農具類とあまり遜色のない形状で驚異の目で迎えられた。しかし残念ながら当時の調査方法・技術、問題意識などの問題から、遺跡での直接の水田遺構の検出には至らなかった。

このころ千葉県内においても、1937（昭和12）年から大場磐雄らによって調査が開始された木更津市の菅生遺跡の大溝では、多量の木製農具類の出土によって、調査区内では水田は検出されなかったが、その周辺の低湿地での稲作の可能性が指摘された。しかしその後もしばらくは具体的な水田遺構の検出を得ることができずに、きわめて特異な遺跡の調査例としての認識のままで、それ以上には進展させることができずに後述の1970年代を迎えることになった。

## 2 戦後の調査・研究

戦後になって1947（昭和22）年、静岡県の登呂遺跡の本格的な発掘調査で水田遺構が検出され、畦、水路などの水田遺構そのものの検出によって、水田の構造・形態が明らかになり、世間にも驚きをもって弥生時代の農耕が認識されるようになった。広範な水田区画、精緻な矢板による土留め、配水遺構など現代の水田とあまり変わらない状況が検出され、弥生時代の土木の技術力の高さが認識された。また水田遺構に隣接する集落遺構からは、周提帯の巡る竪穴住居跡、ネズミ返しのついた掘立柱建物跡による高床倉庫群などが検出され、さらには木製農具類の検出がみられ、田下駄・大足・田船などが新たに検出された。穀物の高床倉庫における収穫物の蓄積等が想起され、首長誕生の萌芽と見られた。

同じ静岡県の山木遺跡でも、登呂遺跡同様に木製の杭・矢板を用いた畦畔施設・水路、木製農具・建築部材などの多数出土も手伝って、登呂遺跡の水田農耕集落の理解を助ける追加資料の調査例となった。但し登呂遺跡で確認された完備した水路・畦畔による規模の大きい水田（1枚が400㎡～2,000㎡程度）というものが、これらによって弥生時代の水田のイメージとして強く印象づけられ、既成概念化してしまうことともなった。

1960年代から1970年代にかけて徐々に開発行為が盛んになり、1965（昭和40）年、滋賀県大中之湖南遺跡の調査は琵琶湖東の湖底遺跡で矢板列、杭列による水田で木製農具などが多数検出され、岡山県津島遺跡では花粉分析、土壌学的検討、出土種子の同定などの現在の水田調査法にみられる手法が取り入れられていった。1970年代には、大規模開発による調査が多く行われ、とくに関東北部の群馬県における水田遺構の検出が多くて成果を挙げていった。固有の火山灰の降灰による遺構の年代の確定、使用状況のパック化によって当時の生活状況そのままが保存された遺構が数多く検出され、水田遺構に限らずに集落遺跡・集落構造・建物構造など解明についても大きな成果が得られていった。1973（昭和48）年の高崎市大八木遺跡の調査を初めとして、日高遺跡などで榛名山や浅間山火山灰の降灰による主として平安時代の水田遺構の検出がされていった。

これらから得られる水田の状況は、それまでの登呂遺跡で確認されていた1枚の面積が1,000㎡以上になるような規則正しい広い水田ではなく、小区画に区切られたそれも狭隘な不整形の水田が極めて多数検出されたからであった。それは小区画水田と呼ばれ、時期的にやや古い登呂遺跡の大規模区画水田と後世の小区画水田との比較で、技術力の後退という大きな疑問が投げかけられた。登呂遺跡の低湿地と関東平野の火山裾野では、地形的な条件の差異を水田構造の相違の要因に解釈することも見られたが、それだけでは理由として満足されなかった。

このころから大阪平野・岡山平野・福岡平野など西日本の各地でも、洪水等で水没した複層化した水田遺構が検出されていた。これらもそれまで理解されていた登呂遺跡の水田遺構とは異なり、不定型な小規模な小区画水田がほとんどで、水田形成の際の地形環境に応じて区画され、自然状況に左右されており、

登呂遺跡例と同様ではないことが知られてきた。さらに登呂遺跡においても過去の調査地点の近接地点での最近の調査によって、木製の杭や矢板で区画された広範な整形水田の中に、土盛りによる小畦畔で区画された小区画水田が検出されてきており、大規模水田の認識は当時の調査の方法と技術、遺構認識の差異によるものとも考えられるようになってきている。福岡県板付遺跡、唐津市の奈畑遺跡などで弥生時代初期もしくは縄文時代晩期に相当する最古の段階の水田遺構が検出され、水田は中規模な形状のものやそれより広範なもの2タイプに分けられ、石庖丁、大陸系磨製石斧、紡錘車などと木製農具のエブリ、諸手鋏、炭化米などが検出された。これらの耕作技術は、水田の造成技術・農具の発達の程度から見てかなり高度な技術が認められ、日本における稲作技術は最初の段階からかなり高度であったと考えられている。これは中国大陸での水田耕作の歴史の中で、技術の完成度が高く適応性の高い技術が将来された結果、いろいろな条件に適応した技術・用具が用いられたものと見られる。

北に目を転じると、東北地方でも水田遺構の検出が見られるようになり、青森県垂柳遺跡、砂沢遺跡などから水田遺構が検出され、東北地方での水田稲作の開始が予想以上に早いことが知られた。垂柳遺跡では、1958（昭和33）年に弥生時代中期の土器と共に炭化米が出土していたが、1981（昭和58）年からの調査で小区画の水田が、規則正しくほぼ碁盤の目状に多数検出された。砂沢遺跡では砂沢式土器の中に日本海沿岸の東北地方で幾点か見つかри始めた九州の遠賀川系の土器要素が確認され、砂沢遺跡で検出された水田による稲作の開始は弥生時代前期まで遡れるようになった。宮城県富沢遺跡を初めとする仙台市周辺の水田遺跡の発掘調査では、現在まで継続するような永続的な耕作の営まれた水田地域での調査において、畦畔の検出・埋没過程、擬似畦畔の認識などが解明され、それ以降急激に増加する水田跡検出への技術的・理論的な推進役を果たした。一方、福島県岩下A遺跡では垂柳遺跡水田より一段階古い水田跡が検出され、番匠地遺跡などでも山と山に挟まれた狭い谷間の地形に水田が造成されているのが検出され、水田利用の多様化が知られるようになった。

千葉県内においても、戦前の調査では、1937（昭和12）年から調査された木更津市の菅生遺跡の大溝では大量の木製農具類の出土によって、調査区内では水田が検出されなかったがその周辺の低湿地では稲作の可能性が指摘された。時を経た1973（昭和48）年の館山市江田条里遺跡で初めて断片的ながら畦畔や溝が検出され、条里制水田の復元が考察されている。1986（昭和61）年の千葉市浜野川遺跡での畦畔状の高まりを検出したが水田区画は確認できなかった。1987（昭和62）年の芝野遺跡では弥生時代から古墳時代・中近世までの水田跡、1987（昭和62）年からの市原市市原条里制遺跡の実信地区とその隣接地区では弥生時代中期宮ノ台式期の流路・極小区画水田、並木地区では弥生時代中期の小区画水田と水路、菊間地区・市原地区・郡本地区では古代末から近世にまで至る水田が検出されている。また市原条里制遺跡では木製品も良好なものが多く、隣接する五所四反田遺跡でも、直後に調査が実施され水田遺構を検出し、それらの水田は小区画水田、極小区画、大規模水田の種類が検出され単一種の構成ではなかった。出土した木製品も多種多様で農耕具も多く非常に良好な資料となった。また、1992（平成4）年の木更津市菅生遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての小区画水田と、古墳時代中期から古代にそれよりやや広い比較的整った形状の水田、中世の短冊形水田の検出と複層にわたる水田が検出され、1993（平成5）年の館山市長須賀条里制遺跡で弥生時代の小区画水田と古代の条里地割り水田が検出されている。

低湿地遺跡では木製品の検出例が多く見られるようになり、ほぼ時を同じくして1987（昭和62）年の茂原市国府関遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期の自然流路から、農耕具他の多量の木製品が出土し、鋏

(製品・未製品、広鋤・又鋤)・鋤・掘棒・農具工具類の柄(直柄・膝柄)・杵・槌・木製容器・建築部材その他きわめて多様な木製品が、1988(昭和63)年の君津市常代遺跡では自然流路から弥生時代中期の多量の縦杵・横杵・横槌・農耕具の広鋤・狭鋤・又鋤・横鋤・エブリ・鋤・田下駄・斧柄等多種多様な木製品が出土している。

水田に付随する遺構では水利遺構も検出されている。流路と堰・しがらみ等があげられるが八日市場市南借当遺跡、君津市常代遺跡・隣接の郡遺跡、先述の木更津市の菅生遺跡等で検出されている。

“はたけ(畠)”遺構は、県外では群馬県の黒井峰遺跡、中筋遺跡などが最近調査され、榛名山東麓の特定の火山灰の降灰によって当時の生活状態がそのままパックされており、時期の限定される集落遺跡内のはたけの規模・位置・占地・利用方法・作物などが初めて解明され画期的な調査となり、黒井峰遺跡を指して「日本のポンペイ」と呼ばれることもあった。また、2000(平成12)年には、日本考古学協会の鹿児島大会ではたけについての特集とシンポジウム「はたけの考古学」が開催され、全国的な研究も行われるようになってきている。千葉県内では君津市常代遺跡、戸崎古墳群6号墳、銭賦遺跡、木更津市高部30・32号墳墳丘下、塚原24～26号墳墳丘下、菅生遺跡、袖ヶ浦市西ノ入り1号墳・2号墳、袖ヶ浦市文脇遺跡、千葉市椎名崎古墳群などではたけが検出されているが、多くは古墳の墳丘下に限定してパックされた状態での検出で、水田遺構ほど形状や状態が把握されているとはいえない。遺構としては比較的規則正しい畝状の耕作痕の検出がその概要で、近年、光町芝崎遺跡で規則正しく比較的大規模な畝の集合した区画されたはたけ遺構の検出が報道されたが、その詳細な報告が待たれるところである。

出土遺物としてみると、農耕関連遺物は木製品(農耕具)、石製品、鉄器、(炭化)種子、花粉などがあげられ、木製品はきわめて多種多様にわたる。各遺跡の出土品として取り上げた、農耕具(鋤・鋤)に始まり列記しきれないほどの種類がある。県内の資料では、最近の木製の鋤・鋤類の資料増加によって全国的な分類による千葉県出土例の時期的・機能的な位置づけがされるようになってきたことが特筆されよう。石製品は、全国的には弥生時代の典型的な遺物とされる、定型的な磨製の石庖丁の出土がほとんど確認されず、千葉県周辺地区での石製収穫具の使用が疑われる。ただし砂岩製の石庖丁様石器と呼ばれている石器が何点か検出されており、石庖丁と同様の機能を有したものとも見られている。また石製品に限らず、他の材質でも収穫具の機能は十分に果たせたとの指摘もあり、石製品の様相が元来貧弱な千葉県では別材質のものでも十分に目的を達成していたとも考えられる。また石庖丁の後継農具と見られる鉄製の穂摘具は検出されていることから材料の入手し易さが大いに関連していたものとも見られる。鉄製品は、耕起具として鋤・鋤、収穫具として鎌・穂摘具が主要な遺物として取り上げられるが、農具としての使用に関しては単体で出土する状況とは異なり、木製品の柄・着装具などに組み合わせて使用することが大半の使用例であり、木製品と関連づけた機能・利用を考慮しなければならない。木製品の加工の利便性、柔軟性、材料入手の容易性等と、鉄製品の有する堅牢性、再利用性、材料入手の困難性とは相反するような性質から、廃棄状況で検出されることが多い農耕具では、組み合わされた完成品状態での出土はそれほど多くはない。

収穫具の穂摘具では石製の石庖丁の系統を受けるもので、平坦な鉄板を刃部とし、上端に木製の手持ち部分をつけたものが出土している。機能的には、穂摘みによる収穫方法と考えられ、鎌による根刈り収穫法と対になる収穫法である。これは、次に続く脱穀作業やイネわらの利用と関連して考えていくべき問題である。鎌は根刈りを想定した収穫法で鉄板製の刃部の端を木柄端につけたもので、刃部が柄に直交する



直刃鎌から刃部が内湾する曲刃鎌へ、そして刃部の大型化へという方向性がみてとれる。一部で刃部が外湾する逆刃鎌も見られ、機能・用途は不明確である。

耕起具の鋤・鍬類の鉄製の刃部としての利用は耕起力の驚異的な拡大を生み、効率化を推進した。形状は平坦な鉄板の両端を折り曲げて木部に着柄したものからU字型の土掘り具と呼ばれるものへと大型化している。これらは平安時代になると人力によるものだけではなく、犁・馬鍬が見られるようになり牛馬耕が普及していったことが窺われる。鋤・鍬は、その着柄する柄によって直柄・膝柄に分けられ、耕作方向が押し出すものと引き寄せるものとに分けられる。刃部の大きさ・形状により、狭鍬・広鍬、横鍬・又鍬・ナスビ型鍬などに分けられる。

水田遺構検出の際の科学的検証方法としては、水田土壌の分析、土壌内の花粉分析、プラント・オパール分析などが挙げられるが、植物の花粉の細胞膜が堅牢で破壊されにくいという性質と、イネ科植物の一部の細胞が非常に堅牢なことによる分析方法で、水田の栽培対象がほとんどイネ科植物のため非常に有効であるが、栽培される植物遺体のすべてが遺存していてそれが検出されるというものではない。従ってイネ科ではない植物の場合が多く想定される畑作植物の検出には有効性が劣ってくる。水田土壌の研究は、乾田・湿田と灌漑技術の解明に有効であろうし、水田遺構の畦畔の研究の進展から畦畔の分類・研究により構造や擬似畦畔の指摘・その形成過程も解明されてきている。大局的な水田造成の視点から、地形と占地の関係や水田の形状と灌漑との関連などが研究されてきている。

直接の種子の出土例に関しては、種子が有機物であるために遺存しにくい環境であることは確かで、炭化物として安定した状態での検出がそのほとんどを占める。検出例は炭化米、ヒエ、アワ等穀類、モモ、ヒョウタン等挙げられるが、炭化物であるため炭化した状態で堅牢な部分しか遺存せず、軟弱な植物質は遺存する可能性が非常に低いことは当然考慮しなければならない。古くから重要視され求められてきたイネの伝播の経路（総合的な稲作技術も付随しているとの認識から、稲作文化全般と一体視されている）に関する問題では、国外まで含めた炭化米の出土資料からDNAを抽出し、DNA塩基の配列を鑑定することで種の系統・伝播をたどる方法も開発されてきており、その分野での成果からは非常に独創的な成果が挙げられ、それに対する考古学を含めた他分野からの反論なり検証を求められるようになってきている。

農業技術的な研究では、直播き法と田植え法による相違（作業量・収量・検出遺構等）、除草・施肥の問題、休耕の問題なども指摘されている。食料生産全体から見た稲作の収量とその食物としての充当比率や他の食物との関連なども指摘されている。

水田稲作農耕に始まる文化の変容によって、今日の日本的な文化の始まりであると言われてきた。このことがすべてあたっているかどうかについて、今日の研究ではやや疑問視されてはいるが、居住の定着性ということからみると定住せざるを得ない状況が発生するわけであるから、非常に大きな要素といえる。稲作農耕の開始＝定住の義務、という図式は当てはまるわけで、植物栽培を行うにせよ移動の可能性をもったそれ以前の生活様式とは、発想の原点から大きく変容したことは確かである。生活様式の変容に伴う具体的な遺構・遺物等の変化・相違等の様相の一部を、以下の各節で取り上げて考察してみたい。

なお、本書でこれから論を進めるにあたり、その時代区分に関しては、遺跡出土の土器編年を年代判断の主軸に捉え、下記のように大きく時代区分を設定し、さらに該当する時代を以下の編年資料により細分

し、関係遺物等の時期決定を行った。

時代区分（大別）

- ・縄文時代 荒海2式まで
- ・弥生時代（前期・中期・後期） 荒海3式から（関東地方における水田稲作の定着時期としたいが、周辺地域の稲作の定着により弥生時代の開始時期とする）
- ・古墳時代（前期・中期・後期）
- ・古代

各時代区分の細分とその基礎資料

[ 弥生0（中期末）	高花宏行 「下総地域における弥生時代後期から古墳時代前期の様相」
[ 弥生後期1（後期前半）	『弥生から古墳へ』-時代の終わりと始まり-上高津貝塚
[ 弥生後期2（後期後半）	ふるさと歴史の広場 2001
[ 古墳前期1（前期前半）	小沢 洋他土器B研究班 「君津地方における弥生後期～古墳前期土
[ 古墳前期2（前期後半）	器の土器編年」 『君津郡市文化財センター研究紀要Ⅶ』
	君津郡市文化財センター 1996
[ 古墳中期1（中期前半）	小沢 洋 「上総地域の鬼高式土器」 『月刊考古学ジャーナル』
[ 古墳中期2（中期後半）	342ニューサイエンス社 1992
[ 古墳後期1（小沢編年0）	小沢 洋 「房総の古墳中期土器とその周辺」『東国土器研究』5号
[ 古墳後期2（小沢編年1・2）	東国土器研究会 1999
[ 古墳後期3（小沢編年3・4）	
[ 古墳後期4（小沢編年5・6）	
[ 古墳後期5（小沢編年7・8）	
[ 古代1（7c末～8c中）	房総歴史考古学研究会 『房総における歴史時代土器の研究』 1987
[ 古代2（8c中～9c初）	
[ 古代3（9c初～9c中）	
[ 古代4（9c中～10c初）	
[ 古代5（10c初～）	

## 第2節 農耕の開始と時代区分

渡 辺 修 一

### 1 縄文時代の植物栽培

**問題の所在** 人類が植物を栽培する最大の目的は人類自身の食料の生産であり、ついで家畜の飼料等の生産が目的となる。かかる目的をもって植物を栽培するために、生産手段の根幹であり労働対象たる土地に加えられる人類の営為がいわゆる農耕である。しかしながら、考古学的にみると、数千年の時間を超えて土地に痕跡を残す、すなわち現代のわれわれが遺構として認識しうる痕跡を残す営農形態は、一定の進化を経たものである。とくに何らかの施設や特別な農具を要しない焼畑であれば、遺構という形で農耕の痕跡を知ることはほとんど不可能に近い。したがって、最も原初的な農耕の直接的な痕跡は、農具として使用された可能性のある人工遺物と植物珪酸体を含めた植物遺体に求められることになる。

世界的にみて、原初的な農耕における栽培植物は、今日の世界で栽培されているコムギ、イネ、トウモロコシなどの主要穀物やイモ類のみならず、むしろいわゆる雑穀類が多くを占めている。雑穀類はその大半がイネ科植物であり、その点では植物珪酸体分析が有効となる。

日本列島における農耕の歴史の解明は、もっぱら稲作、とくに水田稲作農耕が議論の対象となってきた。それは、水田稲作以外の営農形態では、遺構として残される痕跡が乏しいこと、そして、水田稲作という農耕のあり方が社会構成に与えた影響がきわめて大きいことが要因となっていよう。縄文時代における農耕の可能性については、縄文時代中期の東日本、縄文時代晩期の西日本において論じられたことがある。いずれも生産用具である石器研究が一定の比重を占める。とくに後者は、晩期前半の九州での畑作によるイネ等の栽培を論じたもので、弥生時代開始前後の水田稲作の伝播につながる汎東アジア的な視野をもったものであった。縄文時代中期農耕論も晩期農耕論も今日ではあまり強調されないが、それはむしろ縄文時代においても何らかの栽培植物があったことを多くの研究者が自明のこととして考えているからにほかなるまい。

**縄文時代に確認されている栽培植物** 縄文時代の植物栽培については、現在ではいうまでもなく植物珪酸体分析、植物遺体そのものの抽出による研究が主体である。中国地方の山間部を中心としたフィールドで植物珪酸体分析を精力的に進めている高橋護によると、イネ科雑穀類を主体とする植物珪酸体が、縄文時代早期から栽培されたと考えられる状態で検出されているという。それを次に列挙しておこう。なお、ジュズダマ属には栽培種としてのハトムギを含む（高橋1999）。

縄文時代早期：ジュズダマ属、キビ

縄文時代前期：イネ、コムギ、キビ、ジュズダマ属

縄文時代中期：イネ、コムギ、キビ、ジュズダマ属

縄文時代後期：イネ、コムギ、キビ、ジュズダマ属

縄文時代晩期：イネ

とくにキビについては、グラムあたり数百個の植物珪酸体を含む土壌が数十cmの厚さで堆積している遺跡があり、施肥技術を伴う常畑における農耕をも考えうるといふ。イネについては、新聞報道で大きく

報じられた縄文時代前期前半の岡山県朝寝鼻貝塚において、コムギ、キビ、ジュズダマ属（ハトムギ）とともに検出されている。縄文時代の西日本においては、イネが早い段階で栽培植物に加わったことになる。

植物珪酸体や植物遺体の研究では、縄文時代のイネ栽培について肯定的な意見が支配的である。イネ遺体から取り出したDNA分析を精力的に進める佐藤洋一郎によれば、古代以前、とくに弥生時代のイネの5割近くが熱帯ジャポニカである。この数値は、時代が降るにしたがって低くなる傾向があるという。このことから、水田稲作が伝来した時点で持ち込まれた温帯ジャポニカとは別に、すでに日本列島には熱帯ジャポニカが存在かつ栽培されていたと推定している。また、熱帯ジャポニカは焼畑に適応するもので、水田に適応する温帯ジャポニカは焼畑にほとんど適応しないことから、縄文時代におけるイネ栽培は焼畑によるものと想定している（佐藤洋一郎1999）。

東日本では、現在までのところ縄文時代のイネはほとんど検出されていない。北海道及び東北部における縄文時代の栽培植物を追及している吉崎昌一によれば、縄文時代早期末の函館市中野遺跡からヒエ種子が出土したのをはじめ、ヒエは東日本の縄文時代の遺跡では卓越する傾向があることを指摘する。また、早期末から中期末までの間に、野生種であるイヌビエタイプのものから形態が徐々に丸みを帯び、栽培型の形態に近づいていく傾向があり、弥生時代及びその並行期にはほとんどが現生栽培型となるとされている。このことから、縄文時代早期末以降、ヒエが栽培されていた事実はほぼ疑いないといえよう（吉崎1999）。

以上のように、縄文時代の日本列島では、農耕の形態が焼畑か常畑かは検証が難しいものの、さまざまな穀物が栽培され、採集または半栽培が想定されるクリ、ドングリ類、トチなどとともに、植物質食料は



第1図 アフリカ大陸・ユーラシア大陸における雑穀の起源と伝播（阪本1988）

かなり豊富であったと考えなければならない。前頁の第1図は、阪本寧男によるアフリカ及びユーラシアの熱帯から温帯にかけての雑穀及び主要穀物の起源地と伝播の推定経路である。日本列島のヒエは起源地を中心とした地域からほとんど拡散していないが、イネ、キビ、ジュズダマ属（ハトムギ）などが東南アジアまたは南アジアを起源地として列島に伝播したと考えられており、それが縄文時代のかなり早い段階に西日本を中心として定着したと考えることができる。地域、時期により、縄文土器組成の中に弥生土器のような壺形土器が出現したり、土掘具や収穫具と考えられる石器が卓越したりする現象は、至極当然のことといえよう。

これらの研究の進展に反して、房総における縄文時代の栽培植物の資料はきわめて乏しいといわなくてはならない。貝塚に残される動物遺存体から、動物質食料の研究ばかりが注目されるが、今後、縄文時代の集落跡及びその周辺の土壌、遺構内覆土を対象とした植物遺体、植物珪酸体の分析が必須であることはいうまでもない。

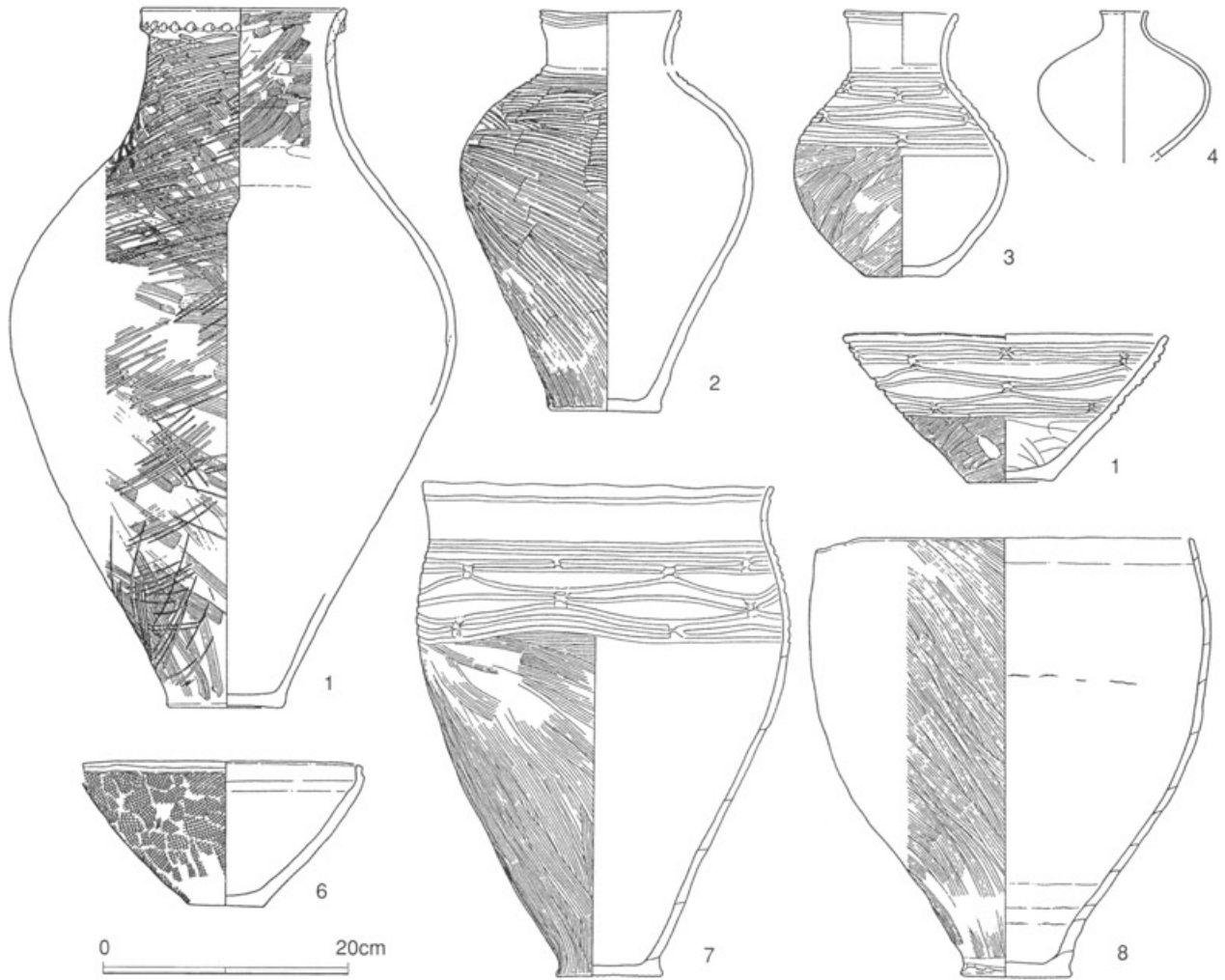
## 2 関東地方における初期弥生文化

縄文時代に何らかの形で農耕という営為が存在したことが確実ならば、弥生時代は農耕の開始を指標とする時代区分ではありえない。しかしそれでも弥生時代という時代区分がその重要性を失わないのは、縄文時代には認められなかった水田稲作という、より集約的な農耕を指標とすることによるのはあらためていうまでもない。

**関東地方及びその周辺における弥生土器の成立と水田稲作** 西日本では、北部九州から瀬戸内海、大阪湾岸を中心とした地域において、突帯文土器群の成立とともに水田稲作の技術が伝播し、さらに遠賀川式土器の成立という第2波の段階において在来の集団を含めて水田稲作の文化が各地に定着していく。中部、関東、南東北では、突帯文土器成立から遠賀川式土器成立の時期にかけて、いわゆる浮線文土器群が成立、展開する。そしてその後葉の段階に、東海西部で突帯文土器の系譜から成立した最初の弥生土器である榎王式土器が、この地域に広範に移動していく。この現象は、情報を伝達するメッセンジャーの動きを跡付けるといわれる。浮線文土器群は、浮線文を施す精製浅鉢、半精製の甕・深鉢、粗製の甕・深鉢、そして少量の精製壺という土器組成をもっているが、東海西部において榎王式土器、つまり条痕文系土器が成立して地域間の交流が活発化すると、前述の土器組成は崩壊に向かう。精製浅鉢が減少、消滅に向かうと同時に条痕で覆われる粗製大型壺が生成、増加する。その結果、壺、甕、鉢の三者によって構成される弥生土器としての組成が完成する。東海西部に距離的に近い東海東部や中部高地においてその現象は顕著に進行する（設楽1982）が、関東西部でも基本的に同様の動きが確認されており、関東北西部の沖式土器にその典型的な姿をみることができる（若狭ほか1980）。

沖式土器にはほぼ並行する段階の山梨県韮崎市宮ノ前遺跡（平野ほか1992）では、同時期の水田跡が発見されている。これは砂沢式段階の水田が発見された青森県弘前市砂沢遺跡とともに東日本最古の水田跡である。中部地方では、浮線文土器群の組成が崩壊して弥生的な土器組成が完成すると同時に、水田稲作が開始されたとみられる。関東地方では沖式段階の水田跡は未見であるが、すくなくとも関東北西部においては同段階での水田稲作の波及は確実であろう。沖式土器の標識遺跡である群馬県藤岡市沖Ⅱ遺跡では、穂摘具と考えられる石器も出土している。

浮線文土器群が東日本で広範に成立するのは、突帯文土器群の東端に位置する五貫森式土器が成立する



第2図 沖式土器 (1/6)



第3図 山梨県韮崎市宮ノ前遺跡の水田跡と出土土器

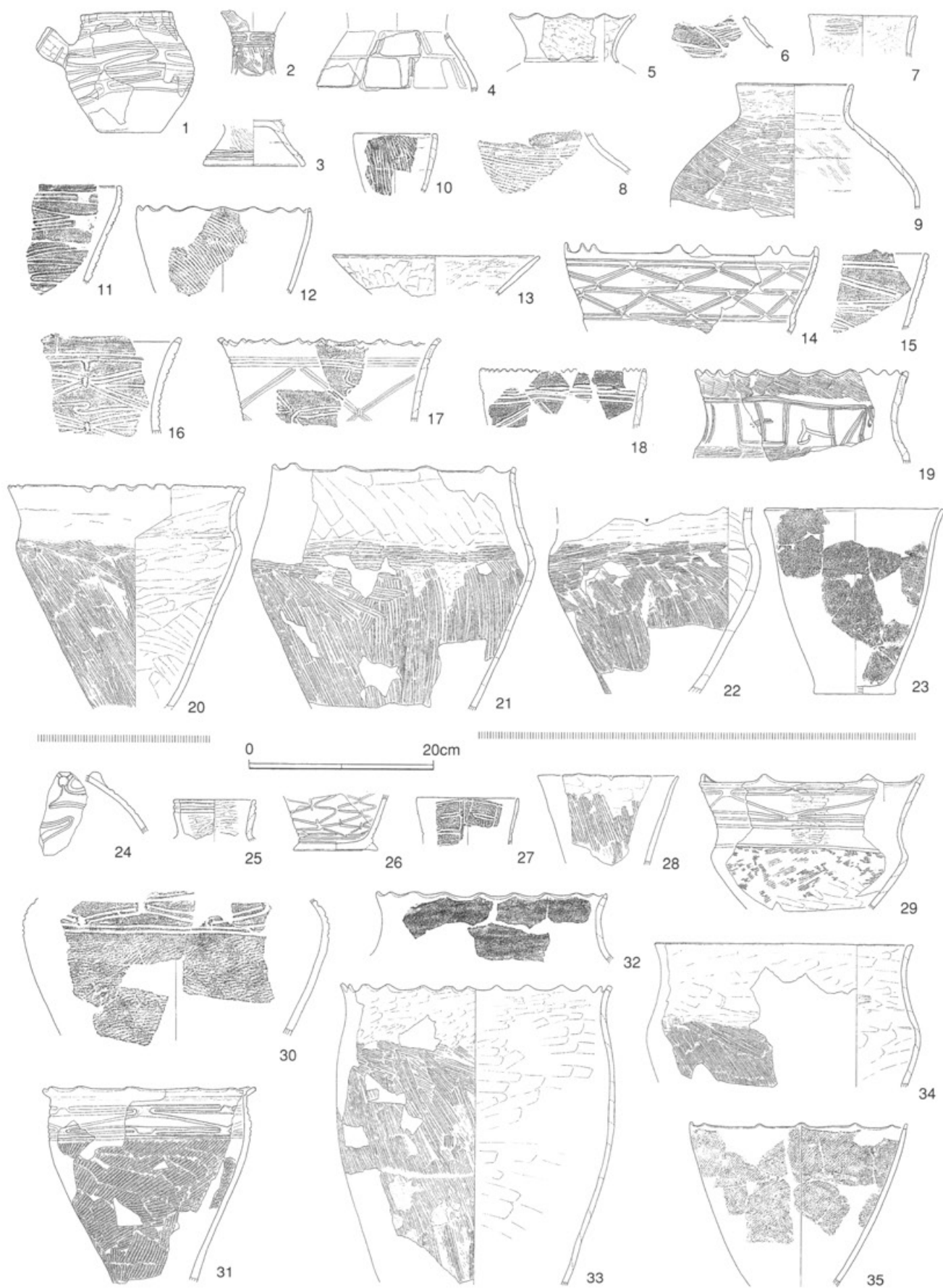
のほぼ時を同じくしている。長野県の遺跡において縄文時代晩期の石器組成が検討された結果、縄文時代晩期中葉までは狩猟具が卓越しているが、晩期後葉の浮線文土器群の段階になると打製土掘具及び穂摘具と考えられる横刃形石器が増加し、相対的に農具が狩猟具を凌駕していく。この現象は浮線文第2期に位置づけられる離山式の段階に始まり、氷I式の段階になるとその傾向が顕著になる(和田1982)。東海西部の最初の弥生土器である檜王式土器は氷I式土器に並行すると考えられるから、離山式段階から農具の増加が開始されるとすれば、西日本で農耕への傾斜をさらに強めつつあった突帯文土器をもつ文化、具体的には五貫森式、馬見塚式土器をもつ文化と連動した現象が浮線文土器群をもつ地域にも現れていたことを意味する。縄文時代全般を通して、有意義な数量のイネの植物珪酸体を含む植物遺体が検出されていない東日本では、この段階になってようやくイネが普及していった可能性が考えられる。藤岡市沖II遺跡で出土している農具は、基本的に中部高地の縄文時代晩期後葉と同様のものである。沖式土器の段階には水田稲作が開始された可能性が高いとはいえ、その時点で新しい農具が出現、普及するわけではない。そして関東地方では、弥生時代前期のみならず、中期中葉まで同様の傾向が続く。

### 3 房総における稲作の開始と時代区分

**荒海式土器における組成変化** 房総においては、遠賀川式土器に並行する土器群は前半が浮線文土器群、後半が荒海式土器である。浮線文土器群の段階は、大洞A式からA'式に並行し、東日本全般で縄文時代晩期後葉とされている段階である。問題は、大洞A'式以降に該当する荒海式土器で、東日本全般で弥生土器が成立したとされている時期にもかかわらず、荒海式土器は縄文土器とする漠然とした認識が支配的であったということができる。

1996年、千葉県史料研究財団によって成田市荒海川表遺跡の発掘調査が行われた。これは県史編さんに伴って、弥生時代開始期の諸問題を究明する目的で実施された調査であった。短期間の調査にもかかわらず、きわめて豊富な成果が挙げられているが、特筆される成果のひとつに荒海式土器が遺構一括資料として得られたことがある。調査によって判明した遺跡の形成過程は、まず10号堅穴建物跡と命名された径3.5m程の円形の堅穴遺構及びいくつかの土坑がつくられ、10号堅穴建物跡の機能停止後、そこに径約12mの不整形円形の貝塚が形成されていく。貝層上面からは17号遺構と命名された径約4mの円形に巡る柱穴列がつくられている。恒常的な居住を目的としたのかあるいは何らかの生産的行為を目的としたのかは不明であるが、当然建物跡としての性格をもつものであろう。またさらにその後、貝塚の北東側に遺物包含層が形成されている。これらの遺構群のなかで、10号堅穴建物跡、17号遺構、そして遺物包含層から出土した土器が、それぞれ異なる特徴をもち、時間差として把握されたのである。さらに、荒海式土器がこれまで主として型式学的な操作によって研究されてきたために不明確であった一時期の土器組成がより鮮明になったことが特筆される(石橋・渡辺ほか2001)。

第4図には、荒海川表遺跡の出土土器で古い段階に位置づけられる10号堅穴建物跡出土土器、中間の段階に位置づけられる17号遺構出土土器を示した。10号堅穴建物跡出土土器は、主要な器種として、壺形土器、鉢形土器、深鉢形土器、甕形土器があり、少数の注口付土器、台付鉢形土器、高坏形土器があって、多様である。ここでは主要器種のうち壺形土器に注目してみたい。壺形土器には、区画系工字文の区画部分全面が陽刻化した精製品、条痕を地文として連続型変形工字文を描く半精製の大型品、ほぼ全面が条痕に覆われる粗製の大型品の3種がある。これらの壺形土器のうち後二者はそれ以前の土器組成には存在し



第4図 荒海川表遺跡出土土器（上段：10号竪穴建物跡，下段：17号遺構，1/6）



なかった器種で、沖式土器における突帯を巡らせる大型の条痕壺に対比しうると考えられる。その他の器種については、浅鉢形土器が消失しているといつてよく、全体の組成は縄文時代晩期後葉の特徴から列島全般に共通する弥生時代の土器群の特徴へと変化していることは明確である。出土土器のうち、甕形土器の頸部文様には雑書文が多く用いられているが、それらは2条の沈線によって構成されている。また、鉢形土器及び注口付土器の主文様に変形工字文が採用されている。四街道市御山遺跡（渡辺ほか1994）や、横芝町山武姥山貝塚（鈴木1963、渡辺1997など）出土土器の検討から、変形工字文は荒海2式段階には採用されないことが論じられており、その点から10号竪穴建物跡出土土器群は荒海3式段階に位置づけられることになる。

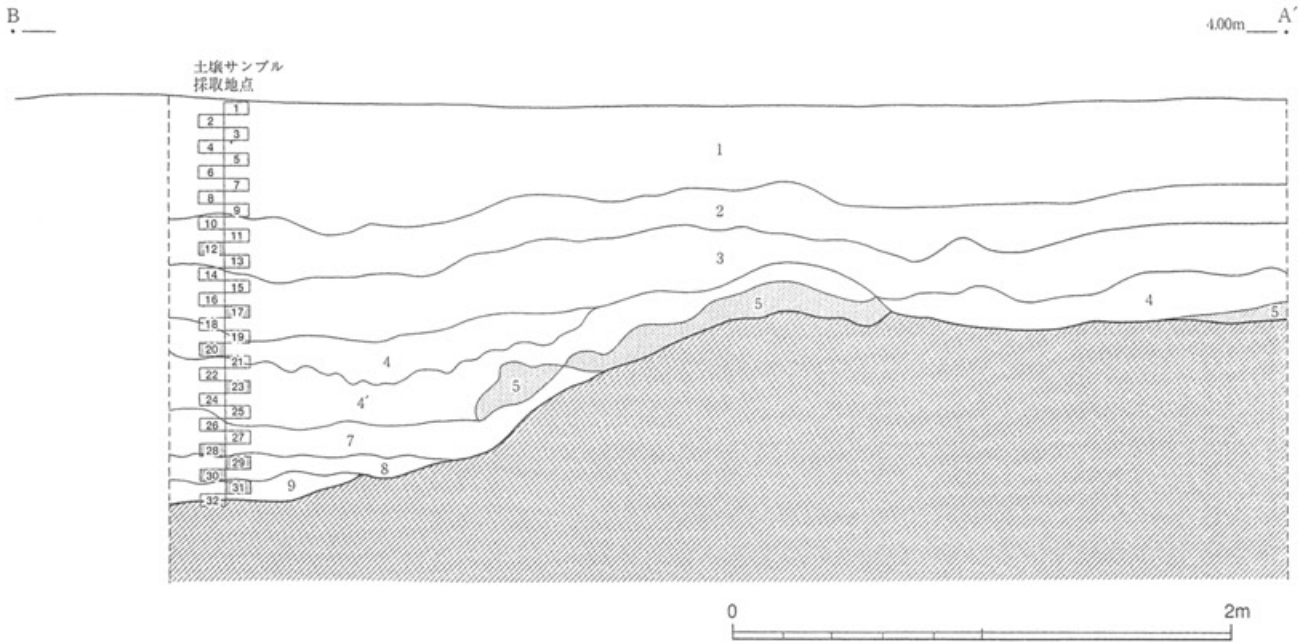
一方、17号遺構出土土器は、全体の構成については10号竪穴建物跡出土土器と比較して大きな変化はないが、甕形土器の頸部文様はみられず、この部分の主文様であった雑書文が消失していることになる。それにかわるかのように、鉢形土器や深鉢形土器には単段構成の変形工字文が採用されており、これも新しい要素と考える。これらも荒海3式段階に位置づけられるであろうが、二つの土器群の時間差は明らかで、10号竪穴建物跡出土土器を荒海3式古段階、17号遺構出土土器を荒海3式新段階と指定することができる。荒海2式土器については、一括基準資料となるべきものがいまだ認められないので、その段階でどの程度の組成変化が起きているのかが明確ではないが、やはり四街道市御山遺跡第Ⅲ地点出土土器においては、浅鉢形土器がかなり減少している様相が看取されるから、縄文的土器組成の崩壊が始まっていたことは確かであろう。しかし現状では、条痕が施された大型の壺形土器の参画という明確な指標が得られた荒海3式古段階において、弥生的土器組成が完成したとみておきたい。

以上のように、中部、関東の諸地域で弥生土器が成立する時期に、房総でも弥生土器の成立が進行していることがあきらかになった。この現象は、浅鉢形土器の減少、消滅と粗製大型壺形土器の生成、増加という形で中部、関東ほぼ全体に共通し、結果として房総は、東海西部を情報発信源とする条痕文系土器の分布域の東端に位置すると考えることもできる。

**弥生時代前期における水田稲作の可能性** 荒海式土器は、明確には荒海3式古段階以降、可能性としては荒海2式以降、弥生時代前期の土器型式といえることになる。その時期は沖式土器の成立期であり、山梨県宮ノ前遺跡の水田跡が営まれた頃にほぼ重なる。それでは、房総においても荒海式の段階で水田稲作が開始された可能性があるのだろうか。

1989年～1990年、国立歴史民俗博物館によって荒海貝塚の発掘調査が行われた際、荒海式期の土層からイネのプラント・オパールが検出され、新聞等で「縄文晩期 関東でも稲作」と大々的に報じられた（春成1990）。また、以前から早稲田大学が荒海貝塚を調査した際に出土した荒海式土器の底部に稲稈圧痕が認められることが知られていた（佐藤敏也1971）。国立歴史民俗博物館の調査成果については、報告書の刊行を待たなければ詳細はわからないが、これらの事実から荒海式段階にイネが知られ、栽培されていたことはかなり確実ではないかと考えられる。その後実施された千葉県史料研究財団による荒海川表遺跡の調査では荒海式期における稲作を追認することも目的のひとつであった。

荒海川表遺跡は、台地上に立地する荒海貝塚とは異なり低位段丘上に立地する。前面の現水田面は近代以降に水田化されたものであり、かつては長沼とよばれる湖沼であったため、弥生時代にそこが水田として利用されたことはまず考えられない。プラント・オパール分析の結果、貝塚が形成される時期に存在した溝状の落ち込みから、一見するとかなり有効な数値が得られている。分析を行ったすべての試料から、



第5図 荒海川表遺跡のプラント・オパール試料採取地点

第1表 荒海川表遺跡の試料採取地点におけるプラント・オパール検出個数

試料番号	イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
12	16,700	6,200	86,100	6,200	6,200	1,800	900	6,200	14,100	20,200
17	11,000	4,600	82,800	5,500	3,700	2,800	0	4,600	12,900	4,600
20	10,900	5,000	58,000	5,900	2,500	800	1,700	2,500	17,700	17,700
23	9,900	5,400	115,100	10,800	900	900	900	6,300	28,800	26,100
28	12,600	9,000	100,400	6,300	5,400	900	0	2,700	21,500	20,600
29	6,600	2,800	153,300	12,200	900	0	900	2,800	20,700	10,300
30	8,300	3,700	89,800	1,900	2,800	1,900	900	1,900	16,700	11,100
31	4,800	0	125,500	18,100	2,900	1,000	0	1,000	16,200	9,500
95	0	0	248,800	16,800	15,000	900	0	900	2,800	16,800

概ねグラムあたり5,000個以上のプラント・オパールが検出され、その数値からすれば、その場所かあるいは近くでイネ栽培が行われたとするに十分なデータである。また、貝層が形成されたよりも下位の土層からも多量のプラント・オパールが検出されたことから、荒海式期あるいはそれ以前にもイネが栽培された可能性があることになる。しかし、このデータには問題点もある。採取地点が元来溝状の落ち込みであり、上位の土層から下位の土層まで連続的にプラント・オパールが検出され、全体としてその数値が徐々に低くなっていくことである。したがって下位の土層のプラント・オパールは上位の土層からの混入である可能性を排除できなくなる。もっとも、貝層が堆積した直下の土層から採取された試料No.28で上位の試料よりもかなり数値が高くなることも見逃せない。結局、試料採取場所の性格上断定は困難であるが、荒海式期あるいはそれ以前にイネが多量に存在した可能性は高いといえる。また、同時に分析を

行った荒海近傍の宝田八反目貝塚<sup>1)</sup>から出土した荒海4式土器の胎土中からもイネのプラント・オパールが検出され、荒海式期の房総にイネが存在し、栽培されていたことは確実視してよいだろう。

荒海貝塚や荒海川表遺跡を営んだ集団がイネを栽培していたとすれば、どこで栽培が行われたのだろうか。周辺の沖積地ではないとしたら、台地上の畑作を想定せざるをえないであろう。荒海式期の遺跡は、荒海貝塚、山武姥山貝塚、市原市西広貝塚などの少数の遺跡を別とすれば、縄文時代晩期中葉以前から長期間継続的に営まれた拠点的な遺跡ではなく、短期間しか営まれない小規模な遺跡か、断続的に反復占地された遺跡であるのが通例である。そういった場所では遺構はまず検出されることはなく、小規模な遺物包含層が検出されるのみである。長期の居住を想定した建物を営んでいない可能性が高いと考えられる。また、かかる遺跡は広い沖積地に面して立地するのではなく、台地のやや奥まった場所に立地するのが通例である。支谷は入り込んではいるが、その支谷自身は生産基盤として機能していたとは想定しがたい。四街道市北部はそういった遺跡がまとまって調査されている地域で、それらは印旛沼に注ぐ中小河川である手繰川と鹿島川に挟まれた台地上に集中的に分布している。千網式期の池花南遺跡（渡辺1991）、氷I式並行期の御山遺跡、千代田遺跡V区（米内・宮入1972）、荒海2式～3式期の御山遺跡、小屋ノ内遺跡<sup>2)</sup>、荒海4式期の池花遺跡（渡辺1991）、池花南遺跡など、一土器型式の時間幅に収まる程度の期間そこに占地し、移動を繰り返したとみられる。そのなかでは御山遺跡が拠点的な様相を示し、唯一建物遺構や墓などが検出されている。しかし御山遺跡も短期間の占地が反復され集積した結果と考えられる。千代田遺跡V区や小屋ノ内遺跡、池花遺跡などは少量の遺物が出土しているにすぎず、そこに占地した期間はきわめて短いことが推測される。遺跡の立地の特徴や占地期間の短さから考えて、実証は非常に困難ながら、焼畑による畑作が行われていたと想定されてよいのではないか。

**房総における縄文時代と弥生時代の区分** 上記のような状況は、すでにイネや雑穀を栽培していたことが確実な西日本の縄文時代における状況と何ら変わらないといえることができる。しかも拠点的な位置にあるいくつかの遺跡では依然として貝塚を形成し、縄文時代晩期からの伝統的な祭祀具も引き継がれる。これらの事実だけをもって時代区分を考えるなら、該期は縄文時代と考えてよいことになる。果たしてそれでよいのだろうか。

元来、縄文時代最後の土器型式として、東北地方の大洞A'式に対比されるべく設定された荒海式であるが、その大半は大洞A'式より後の段階であり、青森県砂沢遺跡（矢島ほか1991）及び山梨県宮ノ前遺跡で水田跡が確認されているように、東日本でもすでに水田稲作が行われている。水田稲作がとくに強調されるのは、それに伴う労働編成と定住的集落の形成が社会変革の礎となることにある。それ故、水田稲作の開始が弥生時代の始まりの示準とされているはずである。東日本における荒海式並行期の水田跡はまだ検出例が乏しいといわざるをえないが、広範な地域で水田稲作が開始された可能性が高いことはもはや誰も否定できないであろう。荒海式土器が、変形工字文や三角連繫文をメルクマルとするがために、それらの文様要素が強調されて論じられ、そのため前代からの系譜や東北地方との関係が云々されすぎてきたきらいがあった。しかし土器群全体の構成は、少なくとも大きな組成変化を経た荒海3式古段階以降は、東海西部を情報発信源とする初期弥生文化、「条痕文系土器」をもつ文化圏の最も東縁に位置する土器群と考えるべきであることはすでに述べた。

房総では、荒海式期において水田稲作が開始された可能性はまだ低い。しかし、イネが房総を含む東日本の広範な地域に普及した原因は、西日本における突帯文土器群成立から遠賀川式土器成立にかけての水

田稲作の導入期に、少なからず東日本にも影響が及んだことにあるのではないだろうか。その一端は、突帯文土器群の成立をインパクトとして、浮線文期の中部高地では石製農具が飛躍的に増加するといった現象にもうかがうことができる。弥生時代前期になっても依然として水田稲作を導入しない地域が一部にあったとしても、小地域ごとに異なる時代区分を用いることはできない。東日本における水田稲作の開始が確実であり、土器組成が変化して弥生土器の組成を整えた荒海3式古段階以降を弥生時代前期とすることをここで提言しておく<sup>3)</sup>。

注

- 1) 2000年12月に財団法人千葉県史料研究財団によって調査が実施された。きわめて小規模であるが、ヤマトシジミを主体とする荒海式期の斜面貝塚が確認された。未報告のため時期の断定は避けなければならないが、前記財団調査執筆員として筆者も一部期間調査に参加しており、その際の所見によると荒海4式段階に位置づけてよいと思われた。
- 2) 未報告であるが、筆者も整理作業にかかわる機会を得て土器を実見したところ、御山遺跡の第IV地点出土土器のある個体と胎土、製作技法がきわめて酷似し、同一製作者を想定できるほどの個体を含む荒海3式段階と考えられる土器群が出土している。
- 3) 荒海2式については、良好な一括資料を出土した遺跡がないため、土器組成が明確ではなく、そのため弥生土器としての組成が完成しているかどうかは判断を保留せざるをえない。また、隣接地域の土器群との比較対照が難しく、並行関係も明断できない。したがって将来的には荒海2式段階まで弥生時代の開始を遡らせて考えることもありうる。

なお、弥生時代前期と中期の境界については、共伴する東海系土器などから判断して荒海4式の時間幅のなかにあることは間違いがない。将来、荒海4式の細分が明確化すれば、前期と中期の区分についても明確化するであろう。

引用・参考文献

- 石橋宏克・渡辺修一ほか2001 『成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書』千葉県  
阪本寧男1988 『雑穀のきた道』日本放送出版協会  
佐藤敏也1971 『日本の古代米』雄山閣  
佐藤洋一郎1999 『DNA考古学』東洋書店  
設楽博己1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34-4 信濃  
鈴木公雄1963 「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器について」『史学』36-1 三田史学会  
高橋 護1999 「考古学とプラント・オパール分析の利用」『水田跡・畑跡をめぐる自然科学 - その検証と栽培植物 -』第9回東日本の水田跡を考える会資料集  
春成秀爾1990 「縄文か弥生か - 荒海貝塚から稲作の証拠 -」『歴博』39 国立歴史民俗博物館  
平野 修ほか1992 『山梨県韮崎市宮ノ前遺跡 韮崎市立韮崎北東小学校建設に伴う発掘調査報告書』韮崎市教育委員会  
矢島敬之ほか1991 『砂沢遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会  
吉崎昌一1999 「栽培植物の検出と研究の現状」『水田跡・畑跡をめぐる自然科学 - その検証と栽培植物 -』第9回東日本の水田跡を考える会資料集

米内邦雄・宮入和博1972 『千代田遺跡 -千葉県印旛郡四街道町-』四街道千代田遺跡調査会

若狭 徹ほか1986 『沖Ⅱ遺跡』藤岡市教育委員会

渡辺修一1991 『四街道市内黒田遺跡群』財団法人千葉県文化財センター

渡辺修一ほか1994 『四街道市御山遺跡(1)』財団法人千葉県文化財センター

渡辺修一1997 『縄文時代が終わる頃の山武』『研究ノート山武』第2号 財団法人山武郡市文化財センター

和田博秋1982 『石器の問題』『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5 昭和52・53年度』  
長野県教育委員会

### 第3節 調査対象と研究の課題

大谷 弘 幸

本節では千葉県を中心として農耕技術に関する研究経過と問題点などについて若干述べることにしたい。

#### 1 水田・畠遺構の検出

原始・古代の水田跡が実際の調査で検出されたのは、有名な登呂遺跡の発掘による。登呂遺跡では集落の南側から広大な区画をもつ水田跡が検出された。この水田跡は洪水によって埋没した弥生時代後期のもので、水田の区画を形成する畦畔は木製の矢板を使用した堅固なものであった。調査では木製の農具も多数出土し、一部に疑問が持たれながらも広大な水田を耕す弥生人のイメージが一般的に広まっていったと言えよう。その後1980年代には群馬県を中心に浅間山と榛名山から噴出した軽石によってパックされた水田跡が相次いで発見され、再び原始・古代の水田跡に対する関心が高まった。また、群馬県の調査事例では登呂遺跡での結果に反して、大畦畔によって大区画を形成し、その中を細かく区画する小区画水田の存在が明らかとなり、原始・古代の水田景観を一変させる内容となった。また、富沢遺跡をはじめとする仙台市域の水田遺跡の発掘調査によって、それまでの洪水や軽石によってパックされた水田ばかりではなく、永続的に耕作されていた土層中においても水田跡が残存することが証明され、その埋没過程や畦畔・擬似畦畔がなぜ残存するかなどのメカニズムも理論的に説明されるようになった。この仙台市の取り組みをもとにして、その後各地で水田跡の検出が相次ぎ今日に至っている。

千葉県では1973年の館山市江田条里遺跡が最初の水田跡に対する調査であった。この調査では調査範囲が狭いこともあって断片的な畦畔や溝が検出されたのみであった。また、その成果をもとに条里型水田の復元も試みられている。その後千葉市浜野川遺跡でも、畦畔状の高まりを確認したものの水田区画を明らかにするには至っていない。県内で本格的に水田跡を調査し、面的に水田区画を検出したのは市原市市原条里制遺跡の調査からである。同遺跡では現在まで耕作が永続して行われているため、仙台市や静岡県での調査実績を参考にして擬似畦畔<sup>b</sup>や炭酸鉄の集積範囲などを目安にした水田区画の確認を行った。千葉県では小櫃川流域の芝野遺跡や菅生遺跡を除き、大半の沖積地で安定した水田耕作が営まれており、市原条里制遺跡によって試みられた検出方法をもとにその後多くの水田跡が検出されるようになった。

畠跡の調査は椎名崎古墳群や高部古墳群などの古墳墳丘下から畝間溝が検出される事例が多く、畠の全容を明らかにする資料はあまりみられなかった。しかし、近年光町芝崎遺跡から大規模な畠跡が検出され、畠を含めた村落景観が明らかになりつつある。

ここでこれまでの調査成果から若干の問題点を指摘すると、まず第1には遺構の時期決定についてである。先に述べたように千葉県では洪水や軽石でパックされた水田跡を検出することは少ない。そのため擬似畦畔<sup>b</sup>などを検出することが水田跡発見の主眼となっている。その際水田の時期を決める遺物が少なく、出土したのもも摩滅していることが多いため、確実な時期を決めることが困難な場合が多い。水田跡の時期決定に当たっては、遺物の出土状況や状態を充分考慮するとともに地籍図や航空写真などを利用して旧地割りとの関係を調べるなど注意深く行う必要がある。第2には畦畔の認定についてで、検出遺構が擬似畦畔であることが多く、また色調も畦畔部と水田部との差が明瞭ではない場合があり、杭や木製品列を参

考にしたり、複数の専門家による現地確認を実施するなど厳しい遺構認定が必要であろう。

## 2 農具類

農具の分類に当たっては、鍬や鋤といった機能的側面による分類と石製品や木製品といった材質による分類の2つの分類方法が行われている。本来は機能面による分類がなされるべきであるが、ここでは便宜上石製品、金属製品、木製品に分けて述べることにしたい。

石製農具には耕起具としての石鍬や収穫具としての石庖丁などが想定されるが、県下ではいずれの出土例も少なく、そのことが当地域の特色となっている。特に弥生時代における石製収穫具の欠落は東海東部から南関東にかけて広く認められる現象であり、石製品に代わるものも見られないことから大きな謎となっている。

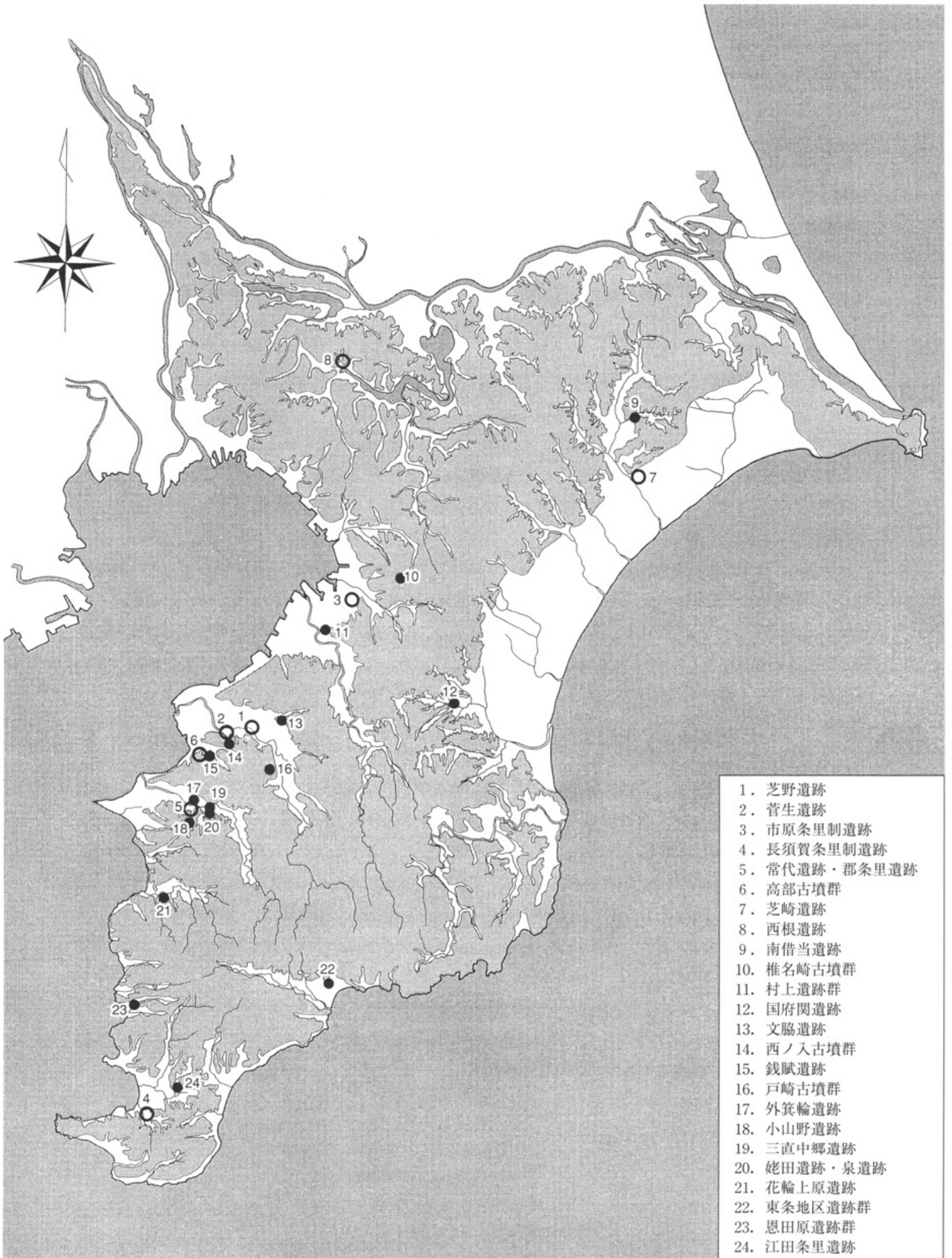
石製農具とは対照的に金属製農具特に鉄製農具は、集落調査の盛んな南関東地方で多く出土し、千葉県においても相当数の出土が報告されている。このような状況から、原始・古代の鉄製農具の研究は1960年代後半以降、南関東地方の資料を基に進められてきたと言っても過言ではない。鉄製農具の研究では、まず形態分類を行い、その分類項目と機能をからめた議論が進められ、鉄製農具の変遷や農具鉄器化の画期、農耕技術の変化などについて盛んに研究された。また、集落における鉄製農具の所有形態についても様々な視点での研究がなされている。

木製農具については、菅生遺跡の発見以来長らく資料数の増加が見られなかったため、西日本や群馬県などの資料をもとに研究が進められてきた。また、全国的な資料の収集と分析により、鍬などの地域的な違いや伝播経路などについての議論が進められるようになった。県下では1980年代以降低地部の調査が活発となり、資料数が著しく増えることとなった。このことによってようやく県内の資料による木製農具の研究がなされる基礎ができたと言えよう。

## 3 自然科学分析による調査

自然科学分析による原始・古代農耕の研究は、炭化種子などの大形遺体の分析とプラントオパールや花粉などの微化石分析に大きく分けることができる。種子同定は比較的古い段階から行われ、佐藤敏也氏による日秀西遺跡の炭化米分析など精力的な研究がなされてきた。しかしながら、その後は各遺跡ごとの資料の集積は認められるものの、県内の資料を集成した研究はあまりなされてきたとは言えない。また、資料の採取方法についてもまちまちであり、同一採取方法による平均化した資料データの蓄積が望まれる。

微化石分析ではプラントオパールや花粉、珪藻などの分析が低地遺跡の調査とともに行われるようになり、ある程度水田が湿田であったのか乾田であったのか、栽培していた植物が何であったのかなどのが推定されるようになった。これら微化石分析は水田や畠跡の調査に伴って行われるのが通常であるため、水田・畠の認定や時期決定と合わせて評価されるものと言えよう。また、これらの評価ののちはじめて原始・古代の農業技術が明らかになるものと考えられる。



第6図 農耕関連遺構検出遺跡位置図



## 第2章 農耕関連遺構の分析

城田 義友

### 1 農耕関連遺構の概要

農耕関連遺構には水田跡と畑跡、及びその補助的施設として水路、堰、溜井戸などの治水遺構がある。

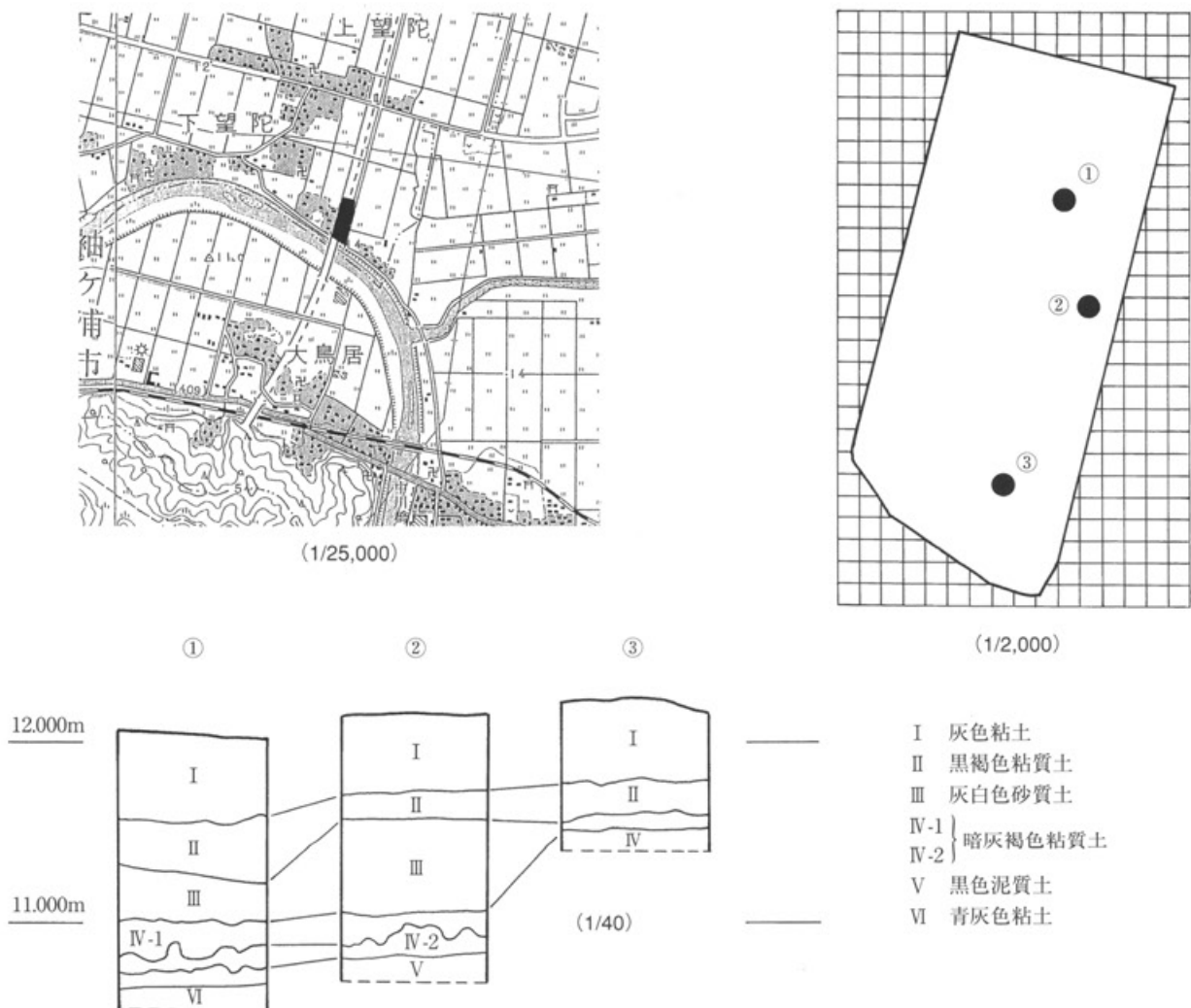
県内ではこれまで水田跡13遺跡、畑跡10遺跡、堰跡3遺跡6基、溜井戸5遺跡10基の調査例がある。このうち比較的状态が良好なものについて例示する。ただし、このうちの幾つかは未報告資料であるため、以下の記述より今後刊行されるであろう報告書の内容が優先されることはいうまでもない。

#### 1. 芝野遺跡

##### (1)遺跡の概要

芝野遺跡は木更津市下望陀字芝野に所在する。房総丘陵に源を発し、東京湾に注ぐ小櫃川下流域右岸の自然堤防～後背湿地上に立地しており、現地表の標高は12m前後である。館山自動車道の建設に伴って平成2年～平成3年にかけて、当センターが調査を実施した。調査面積は8,100㎡である。

検出された遺構は弥生時代後期の水田遺構と竪穴住居跡及び円形周溝状遺構、古墳時代前期の水路跡、古墳時代後期の竪穴住居跡や土器集積遺構、円墳周溝、奈良・平安時代～中世の掘立柱建物跡、溝、竪穴



第7図 芝野遺跡の位置と基本土層

遺構などである。遺物は弥生時代～中近世にわたる土器・陶磁器類が中心だが、古墳時代前期の水路に付属するものと考えられる溜井状遺構から、木製農具(鋤)未製品が出土しており特筆される。

### (2)基本土層

基本土層はⅠ層(灰色粘土)、Ⅱ層(黒褐色粘質土)、Ⅲ層(灰白色砂質土)、Ⅳ層(暗灰褐色粘質土)、Ⅴ層(黒色泥質土)、Ⅵ層(青灰色粘土)であるが、Ⅳ層は更に、Ⅳ-1層(黄白色粘土塊を含む)とⅣ-2層(酸化鉄・マンガン斑を含む)、Ⅳ-3層(粘性が強く堅い)に分けられる。Ⅰ層は近世以降の耕作土、Ⅱ層は古墳時代～中世の遺物を含む層。Ⅲ層は小櫃川の洪水堆積期起源の層で遺物はほとんど認められない。

### (3)農耕関連遺構

検出された農耕関連遺構は、水田跡と水路跡で、調査区中央付近～北部にかけて検出された。検出面はⅣ層である。この部分是小櫃川の旧河道にあたり、南側の自然堤防部分と比較して基盤層の標高が低いことから、その低い部分に厚く堆積したⅢ層によって保護されていたものと考えられる。

#### a.大畦畔・水路

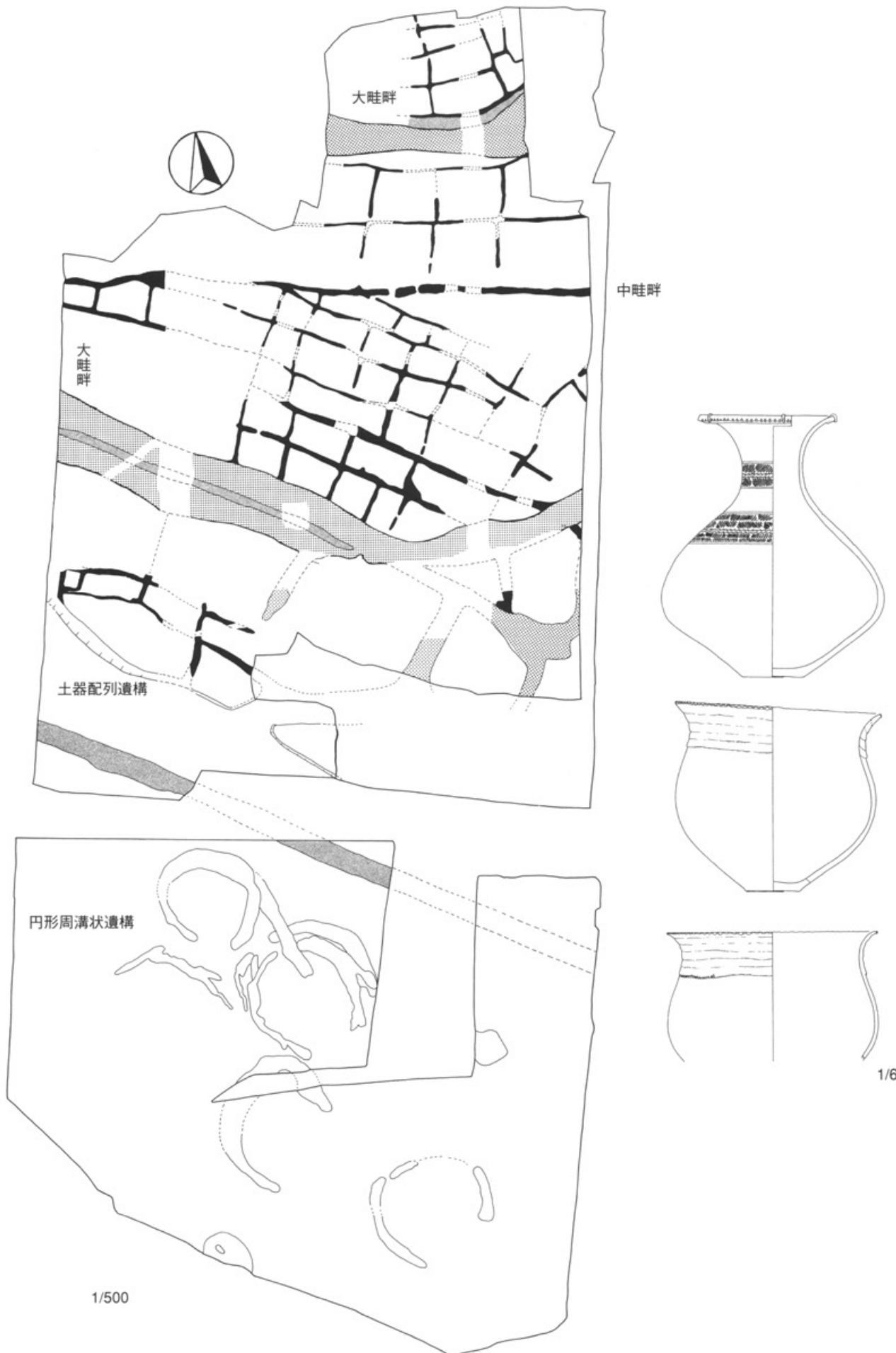
大畦畔は東西方向に南北2条検出され、北側(1号大畦畔)と南側(2号大畦畔)の間隔は概ね35m前後である。そのうち2号大畦畔が中央に水路を伴う土堤型である。軸方向は南北ともほぼ等しく西北西、1号大畦畔は東北東方向へ屈曲し、2号大畦畔はその屈曲する方向に分岐しているが、ちょうどその付近が古墳時代前期の水路(SD-45)により破壊されているため、詳細ははっきりしない。構築方法は地山(Ⅳ-3層・Ⅴ層)の削り残しで、検出された盛土は部分的ということだが、本来は全体的になされていたのであろう。なお、杭や矢板などによる補強の痕跡は認められていない。

2号大畦畔に伴う水路の流水方向は東→西。調査区域内には水口や堰などの給排水施設は検出されていないため、この水路が給水・排水のいずれの用途のためのものかは明確にしえない。ただ、水路の床面レベルが、水田面のレベルと比較してあまり変わらず、基盤地形の傾斜方向(南→北)からみる限り、北側水田区画への給水及び、南側水田区画からの排水の水路と考えてよいかもしい。また、報告書には触れられていないが、1号大畦畔とそのすぐ北側の小畦畔の間にある空白部分も水路であった可能性がある。

#### b.小畦畔と中畦畔、水田区画

小畦畔は全体で東西13条、南北10条程度が確認されている。基部の幅は0.2m～0.6mで高まりはほとんど検出されていないが、遺存する部分も若干ある。土層断面を見る限り、基盤層への掘り込みは明瞭ではないことから、いわゆる「手畔」と呼ばれるものであろう。本遺跡には大きく見て1号大畦畔以北(第1水田ブロック)、1号大畦畔と2号大畦畔の間(第2～第4水田ブロック)、2号大畦畔と南側水田限界の間(第5水田ブロック)という大きく3つの水田区画ブロックがある。それぞれのブロック内での東西小畦畔の軸は、第1水田ブロックが1号大畦畔北辺、第2水田ブロックが1号大畦畔南辺、第3・第4水田ブロックが2号大畦畔北辺(屈曲部以西)の規制を受けている。なお第2水田ブロックと第3水田ブロックそれぞれの東西小畦畔の軸方向は20°前後ずれているが、そのブロック境界に存在する比較的幅の広い東西畦畔が「中畦畔」として報告されているものである。この中畦畔は軸方向が1号大畦畔の南辺とほぼ一致することから、その規制を受けているものと考えられる。

また、小畦畔には途切れる部分が多く見られる。全体的に後世の遺構によって破壊されている部分が多く遺存状況があまり良好ではないので、すべてがそうとは言い切れないが、報告書に記載されているとおり、一部については水口としてよいであろう。



第8図 芝野遺跡 弥生時代後期遺構全体図・土器配列遺構出土遺物

(4)その他の遺構

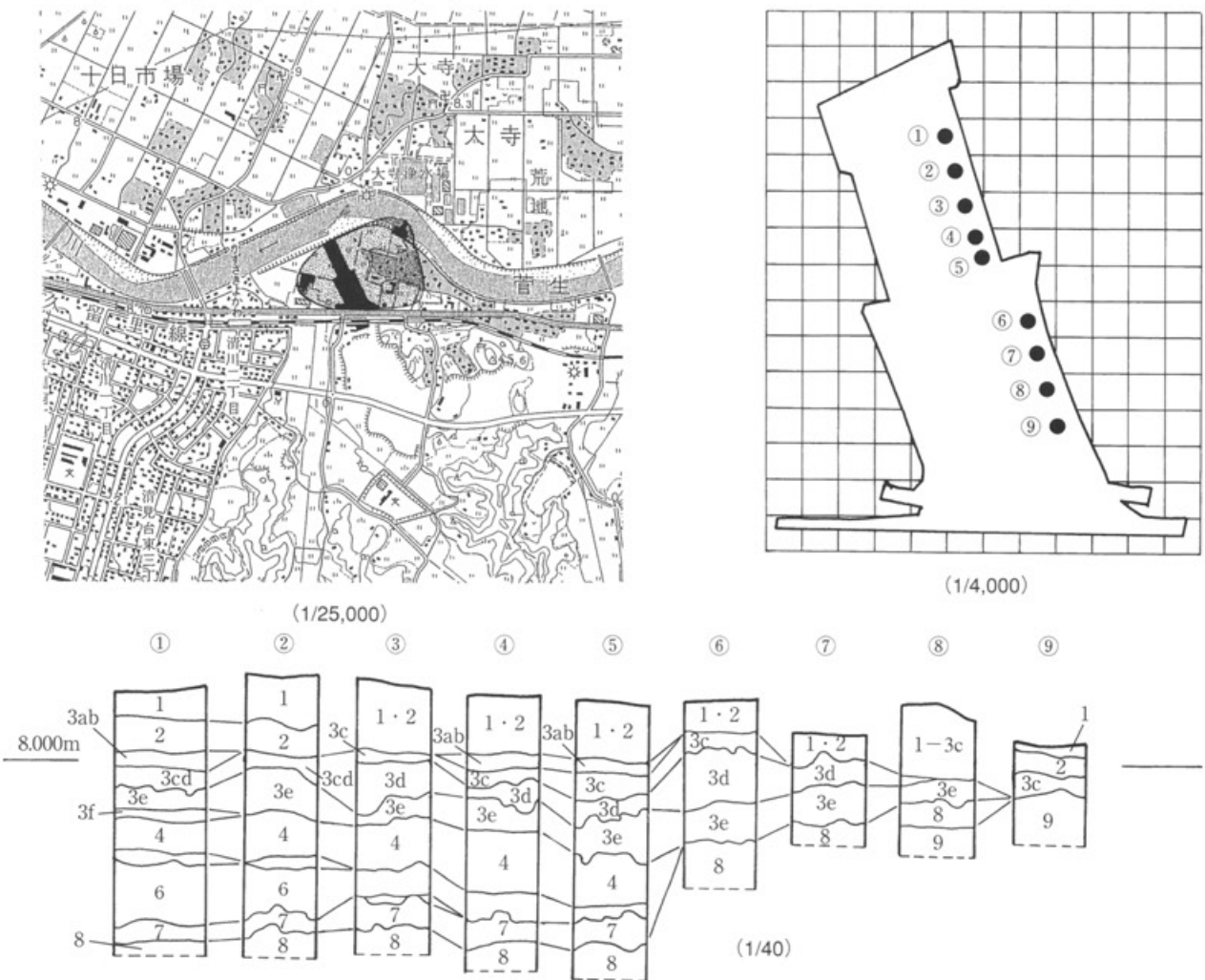
水田跡の南側限界以南に、竪穴住居跡1軒と、円形周溝遺構が5基確認されている。後者は近年、東京都豊島区豊島馬場遺跡などで検証されている住居の周堤帯に伴う周溝と考えられることから、竪穴住居跡と併せ、水田域と集落域が隣接する静岡県登呂遺跡に近い景観を想定することができる。このほか集落域と水田跡の境界にあたる部分に土器配列遺構が見つかっており、報告書では水田を臨んで行われた祭祀的儀礼の跡と推定している。

県内ではこれまでに水田と同時期と考えられる集落がセットで確認された遺跡はなく、稀有な例といえる。

2. 菅生遺跡

(1)遺跡の概要

菅生遺跡は木更津市菅生に所在する。小櫃川下流域の沖積平野に面した小支流により開析された小支谷の出口付近の沖積地、小櫃川の左岸に位置する。現地表の標高は10m前後である。また、前記の芝野遺跡からは直線距離で西に約4kmの位置にある。一般国道409号の建設工事に伴って、平成4年度～平成7年度にかけて、当センターが断続的に調査を実施した(H4-7調査区)。調査面積は20,200㎡である。また、その後の平成9年、民間の病院施設建設に伴って、(財)君津郡市文化財センターが西側隣接地を調査しており(H9調査区)、面積は1,414㎡である。



第9図 菅生遺跡の位置と基本土層

本遺跡の周知は古く、すでに昭和12年以降、菅生遺跡発掘調査団による発掘調査が断続的に実施されている。調査地点はH 4 - 7 調査区の北東側約100m付近で現河道内にあたるが、当時の小櫃川はまだこの東側で大きく北方向に蛇行しており、地勢的にはすべての調査地点が小櫃川の左岸にあった。このほか昭和47年には隣接する(現河道の対岸)菅生第2遺跡の調査が実施されている。

## (2)基本土層

H 4 - 7 調査区の基本土層は、1層(暗灰色～灰褐色砂質土)、2層(暗褐色砂質土)、3(a・b)層(暗灰褐色粘質土)、3(c・d)層(暗褐灰色粘質土)、3e層(黒灰色粘質土)、3f層(灰褐色粘質土)、4層(黒褐色粘質土)、5層(暗灰褐色粘質土)、6層(黄褐色粘質土)、7層(暗褐色粘質土)、8層(黒色泥炭)に分けられている。各層の時期は、1層～3層が中世以降、4層・5層が奈良・平安時代、6層が小櫃川の洪水による堆積層でほとんど遺物が認められず、7層が古墳時代～弥生時代後期にそれぞれ比定されている。ちなみに8層は縄文時代後期頃形成されたものと考えられている。対象範囲は現状では平坦だが、埋没地形では南側の丘陵先端部から北に向かって若干傾斜する様相が明らかになっている。上記の土層はその北側の最も堆積の厚い部分のものであり、南側に行くにしたがって、7層、5層、4層、6層、3f層、3e層の順で欠けてゆき、南端付近では、3d層直下が8層となっている。なお、H 9 調査区も土層の堆積状況は基本的には同様だが、表記が若干異なっている。



第10図 菅生遺跡 奈良・平安時代全体図 S=1/2,000

### (3)農耕遺構

検出された農耕関連遺構は、水田跡、水路跡、畑跡である。このうち水田跡はH4-7調査区で7面、H9調査区で2面検出された。内訳は前者が、近世以降(第1~第4水田面)、中世(第5水田面)、奈良・平安時代(第6水田面)、弥生後期~古墳前期(第7水田面)、後者が、中世(第1水田面)、弥生後期(第2水田面)である。このほか畑跡がH4-7調査区(中世)、H9調査区(奈良・平安時代)でそれぞれ1面ずつ確認されている。ただ、H9調査区については未報告であるため、H4-7調査区を中心に例示する。

#### ①第6水田面

検出された農耕関連遺構は水田跡で、調査区のほぼ全面から確認されている。検出面は調査区北側が5層上面、中央付近が6層上面、南側が8層上面である。

畦畔は調査区全体で、東西22条、南北21条を確認した。いずれも小畦畔である。軸方向は真北から若干( $2^{\circ}\sim 6^{\circ}$ )東に振れている。調査区北端付近での遺存状況は比較的良好であるが、中央部以南では中世以降の水田耕作により削平されてしまっている。いずれも本来の畦畔は遺存しておらず、「擬似畦畔B」での確認である。水田区画は明らかなもので173区画、推定を含めると200区画を超える。形状は方形もしくは短い長方形を基準としているが、若干変形しているものもある。規模は一辺10m~15mと5m~10mのものがあり、北側でやや大きく、南側では小さな区画となる傾向がある。また、北側~中央部付近の比較的大きなものの一部にはそれぞれの水田区画を1:2に区分する手畔が確認されている。

調査区内では大畦畔は確認できなかったが、調査時点での生活道路の間隔が東西・南北共に約100m弱で、道路の方向と検出された畦畔の軸方向がよく一致していることなどから、この部分に大畦畔が存在し、その規格性が現在まで踏襲されていることが考えられる。

#### ②第7水田面

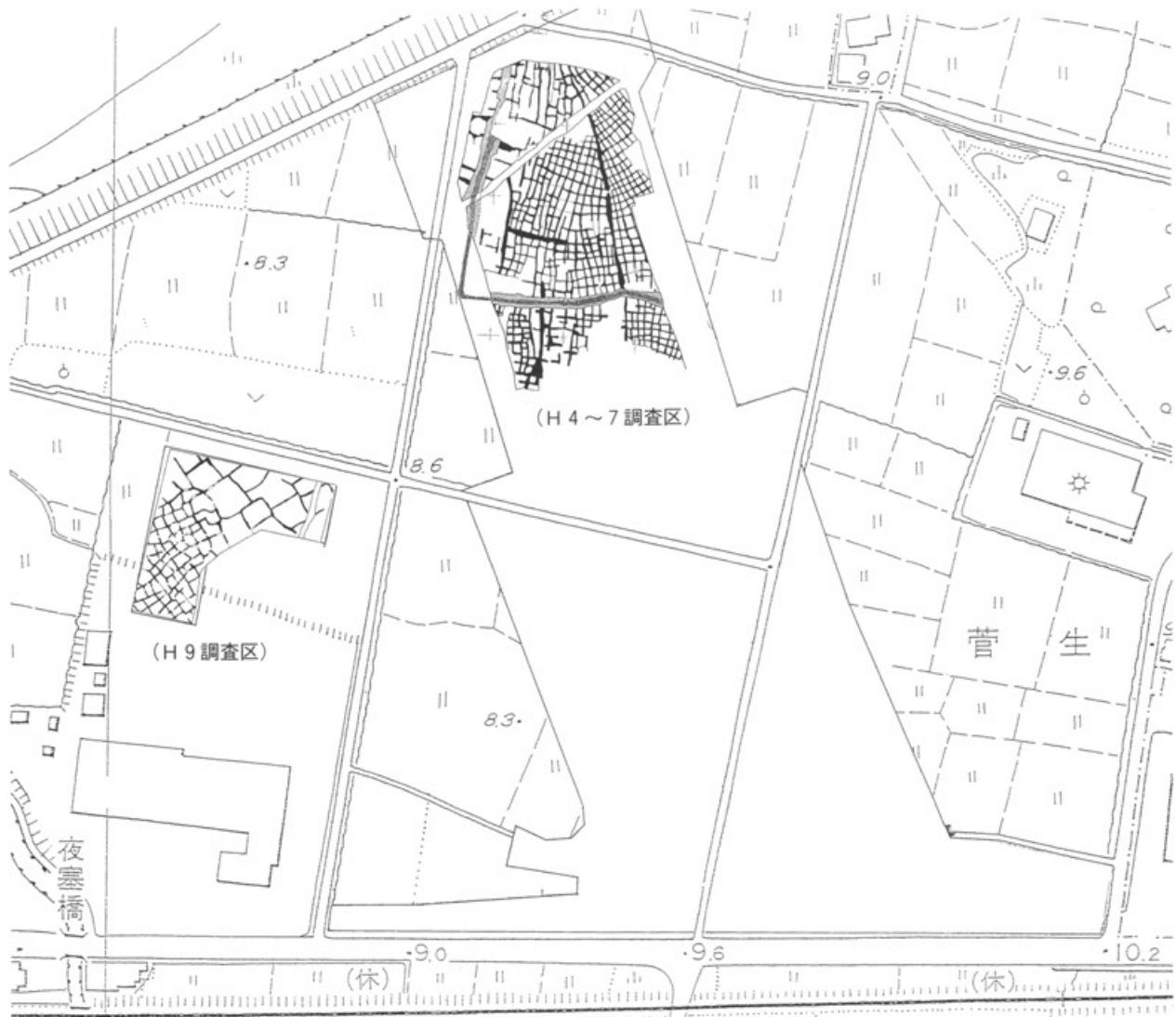
検出された農耕関連遺構は、水田跡と水路跡で、調査区北部から中央部にかけて検出された。検出面は調査区北部が6層直下~7層上面、中央付近が8層上面で、基盤層はいずれも8層である。芝野遺跡と同様に、本水田面が遺存している部分はすべて小櫃川の洪水起源と考えられる6層土に覆われており、且つ、埋没地形ではこの部分が南側よりやや低くなっていることから、後世の耕作による削平を受けずにすんだのであろう。

##### a. 大畦畔・水路

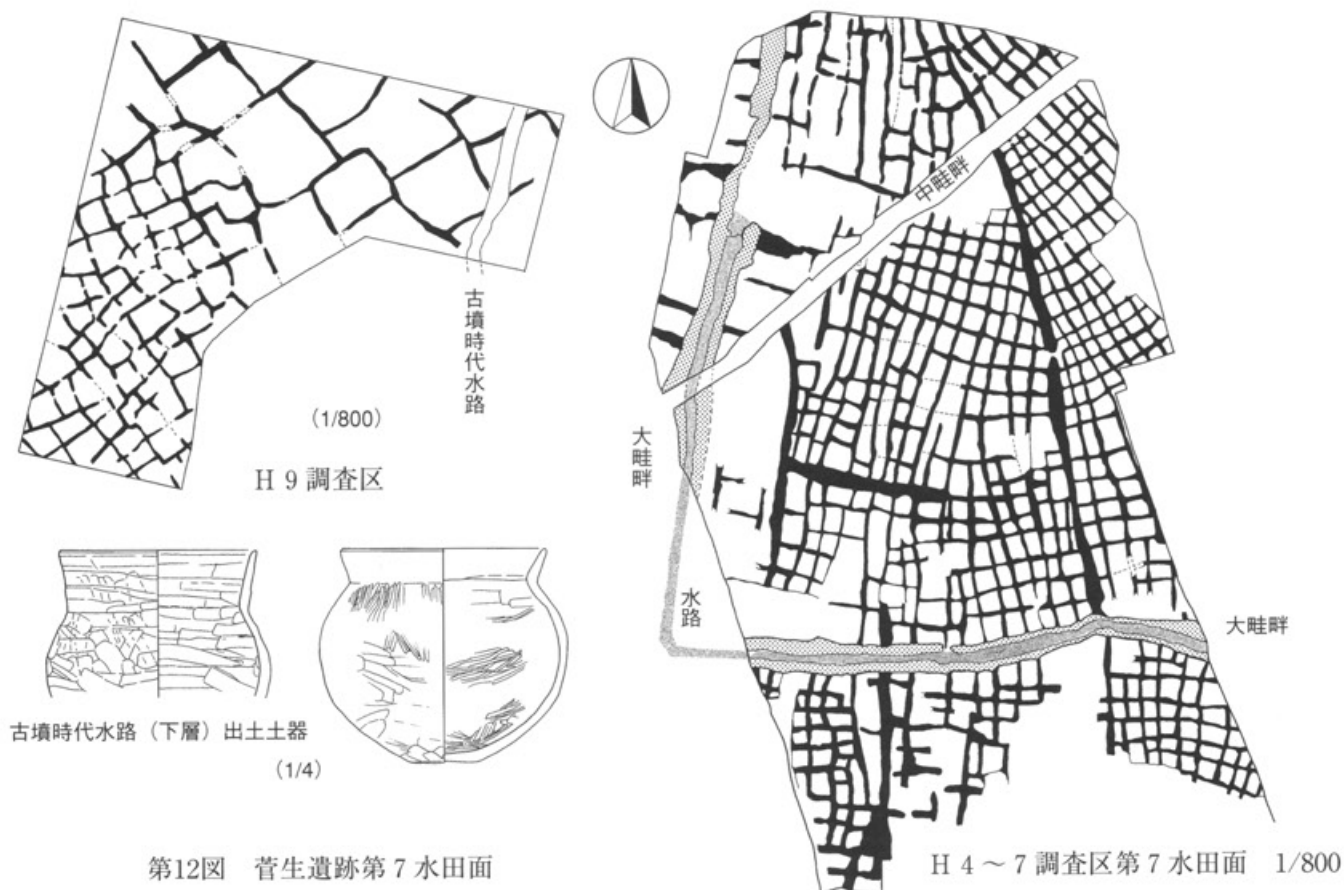
大畦畔は東西方向及び南北方向にそれぞれ1条検出された。いずれも中央に水路を伴う土堤型である。軸方向は、東西大畦畔が若干蛇行するもののほぼ東西、南北大畦畔は東に $10^{\circ}$ 程振れている。いずれも構築方法は地山(8層)の削り残しで、本来は盛土があったものと考えられるが遺存していなかった。なお、杭や矢板などによる補強の痕跡は認められていない。

水路の流水方向は東→西及び南→北である。東西水路中央付近には、北側の水田区画に向けて水口が1箇所あけられている。水路と床面それぞれのレベルを比較する限り、本水路はその北側の水田面への給水用と考えられるが、南側水田区画との関係ははっきりしない。南北方向の水路に関しては、調査区内に水口が存在しないため、給水・排水いずれの用途のものであったかは不明である。

H9調査区では、その中央付近を南東→北東方向に流れる水路が確認されている。ただ、水路の両岸に大畦畔が確認されておらず、部分的に小畦畔と切り合うような検出状況が認められることから、この水路が水田に伴うものか否かは不明である。



第11図 菅生遺跡 第7水田面配置図 (S=1/2,000)



第12図 菅生遺跡第7水田面

H4~7 調査区第7水田面 1/800

b. 小畦畔と中畦畔，水田区画

小畦畔は，東西方向が34条～36条程度，南北方向のものは北部では20条，南へゆくにしたがって分岐しており南端付近では35条程度となる。基部の幅は0.2m～0.8mで，いずれも高まりは検出されていない。土層断面を見る限り，ほとんどの小畦畔で基盤層への掘り込みが不明瞭であるためこれも「手畔」に類するものであろう。また，東西大畦畔にはほぼ直交する方向で北に伸びるやや幅の広い畦畔が確認されており，中畦畔として報告されている。この中畦畔を挟んだ東西で小畦畔の軸方向が異なっているが，小畦畔を規制しているというより，小畦畔がこれに集約されてゆくような印象を受ける。なお，南北小畦畔の軸方向が揃ってくる調査区北端付近では不明瞭となる。なお，小畦畔には途切れる部分があり，基本的には水口と考えられるが，遺存状況があまり芳しくない部分もあるので，すべてについては断言できない。

区画は方形もしくは長方形を基本形とするが，三角形や台形，平行四辺形などさまざまな形態のものを含む。区画の面積も平均は3.3㎡だが，0.4㎡(最小)～11.8㎡(最大)と偏差が大きい。

H 9 調査区では，水路の北東側で比較的大きな区画，南西側では比較的小さな区画が見出されている。未報告であるためはっきりしないが，これも「手畔」であろう。区画は方形もしくは長方形を基本とし不定形のものも多い点はH 4 - 7 調査区と同様である。

③畑跡

H 9 調査区の畑跡は，東西方向1条及び南北方向2条の区画溝と，南北方向に掘られた並行する浅い溝からなる。いずれも6層上面で検出された。大区画の規模は，東西方向がおよそ50m程度，南北方向については不明である。畝立溝と考えられる並行する浅い溝は，東西方向の区画溝の北側で28条，南側で8条あるが，北側では東西方向のものも2条ほど確認されている。区画の方向はH 4 - 7 調査区の第6水田面と同様に，現在の区画とほぼ一致している。

(4)その他の遺構

調査会による調査区は小櫃川下流域の自然堤防および砂堆上に位置しており，弥生時代中期の竪穴住居跡，農具を含む多量の木製品を出土した古墳時代の水路などの集落跡が確認されている。残念ながら水田跡と同時期と考えられる集落の痕跡は確認されていないが，この近辺の何処かに存在した可能性は十分に考えられよう。その場合，前述の芝野遺跡と同様な景観を推定することができる。

3. 市原条里制遺跡・五所四反田遺跡

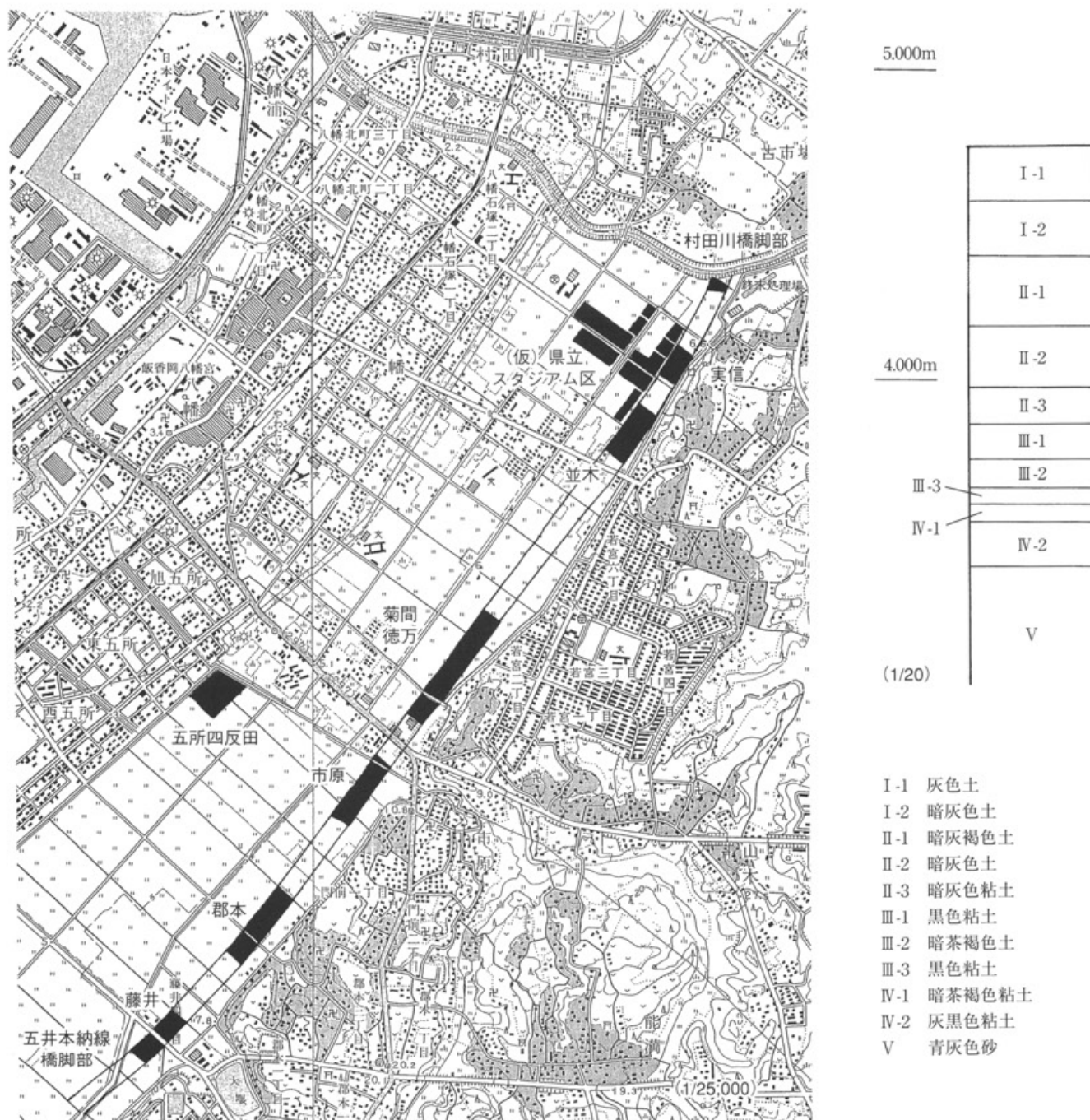
(1)遺跡の概要

市原条里制遺跡は市原市菊間，市原，郡本，藤井などにかけて所在する。標高20m前後の低平な台地を背後に控えた，東京湾に面する海岸平野の後背湿地に立地しており，現地表の標高は4m～6m程度である。館山自動車道の建設に伴って平成元年度～平成4年度，(仮称)県立スタジアム建設に伴って平成8年度に当センターが調査を実施した。調査完了面積は前者が151,346㎡，後者は32,400㎡である。なお，前者は便宜的に菊間，市原，郡本，実信，並木，徳万，藤井，五井本納線橋脚部，村田川橋脚部の計9地区，後者は調査区中央付近で東西に二分(Ⅱ・Ⅲ)し，さらにそれぞれをⅡA～H，ⅢA～Eの計13区に区分けしている。また平成8年度に市原市文化財センターが小学校建設に伴って隣接地を調査しており，五所四反田遺跡と呼称している。

検出された遺構は，弥生時代～古墳時代の水田遺構(実信・並木，ⅡA・ⅡC～F・ⅢB～C)，奈良・



平安時代の水田遺構(菊間・市原・郡本・村田川橋脚, II A~H, III B~E), 中世以降の水田遺構(II A~H, III A~III D)のほか, 縄文時代早期~前期頃と推定される自然貝層上に形成された, 縄文時代中期~後期の低地性貝塚(実信, II C~D), 奈良・平安時代の官道跡(市原)などがある。遺物は縄文時代~中近世にわたる土器・陶磁器類のほか, 木簡や農具を含めた多量の木製品や建築部材, 石器・石製品, 金属製品など極めて多岐にわたる。なお, (仮称)県立スタジアム調査区についても同様に木製農具などが出土しているが, 未整理であるため詳細は不明である。五所四反田遺跡では, 農耕関連遺構は確認されていないが, 木製農具を多量に含んだ古墳時代中期の大溝が検出されており, 特筆される。



第13図 市原条里制遺跡の位置と基本土層

(2)基本土層

大きく、Ⅰ層(暗灰色～灰色土)、Ⅱ1層(暗灰褐色土)、Ⅱ2層(暗灰色土)、Ⅱ3層(暗灰色粘土)、Ⅲ1層(黒色粘土)、Ⅲ2層(暗茶褐色土)、Ⅲ3層(黒色粘土)、Ⅳ1層(暗茶褐色粘土)、Ⅳ2層(灰黒色粘土)、Ⅴ層(青灰色砂)の11層に分けられている。いずれの層も比較的多くの遺物を含む。ただ調査範囲が南北1km以上にわたっているため、地区によって基盤層や堆積状況は多岐にわたる。各層の時期はⅠ層は近世以降、Ⅱ1層～Ⅱ2層は中世以降、Ⅱ3層は平安時代末期以降、Ⅲ1層は古墳時代後期～奈良・平安時代、Ⅲ2層は古墳時代前期以降、Ⅲ3層は弥生時代中期以降とされている。

(3)農耕遺構

検出された農耕関連遺構は、水田跡と水路跡である。

①Ⅱ3層～Ⅲ1層検出水田面

条里地割の水田面である。菊間(1・6～8区)、市原(1～4区)、実信(北・南区)の各地区のほか、県立スタジアム調査区のはほぼ全域で検出されている。調査範囲がそれぞれ狭く中世以降の耕作で削平されている部分が大きいため、はっきりしない面が多いが、長方形を基本とした長地細分型の区画と考えられる。畦畔の軸方向は西に60°程振れており、この地域の表層条里地割(西に45°)とは若干異なっている。

調査区の制約から大畦畔はあまり検出されていないが、市原1区では、多量の本質を基部に埋め込み堅杭を打つことにより補強された坪畦畔の交差部が検出されている。また、同4区では、条里境と考えられる南北の大畦畔とそれに直交する坪畦畔が検出されている。

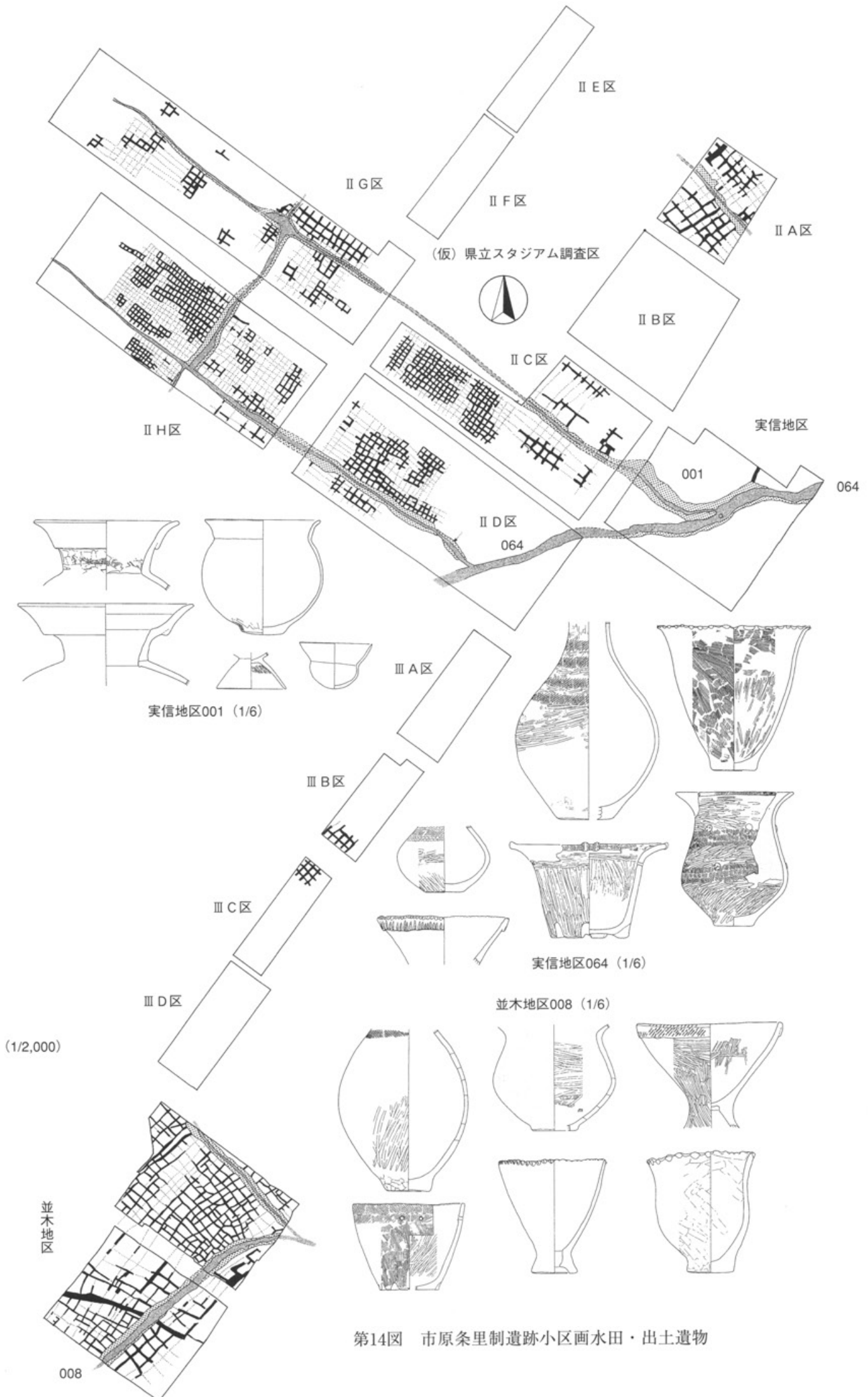
②Ⅲ2～3層検出水田面

市原(4区)、実信(南)、並木(北・南区)、郡本(1～4区)、ⅡA～D・G・H、ⅢB・Cの各地区で検出されている。

大畦畔は実信、並木、ⅡC・D・G・Hで確認されているが、いずれも中央に水路を伴う土堤型である。特に、実信～Ⅱ区にかけての範囲は、大畦畔が約70mの間隔で規則正しく格子目状に走っている様子が伺える。構築方法は地山の削り残しで、本来は実信地区で見られるように盛土を伴っていたものと考えられるが、ほとんど遺存していない。基底部の幅はいずれも1mを超える。水路の水流の方向は南東→北西が基本であろうと考えられる。実信の水路(063・064)は恐らく自然流路を改修した幹水路で、枝水路と考えられる001Cとの分岐点には堰などの取水施設は設置されていない。この幹水路の水源は不明であるが、恐らく当時の村田川がこれにあたるのではないかと考えられる。並木の水路(SD-008)も分岐部こそ検出されていないものの、SD-005とのあり方が実信の063・064と001Cとのあり方に酷似している。推測の域を出ないが、本来今回の調査区と東側の台地との間に、村田川から取水し北から南に流れる幹水路があって、063・064及びSD-008は共にここから樹枝状に分岐する幹水路的な役割を持った枝水路だったのかもしれない。

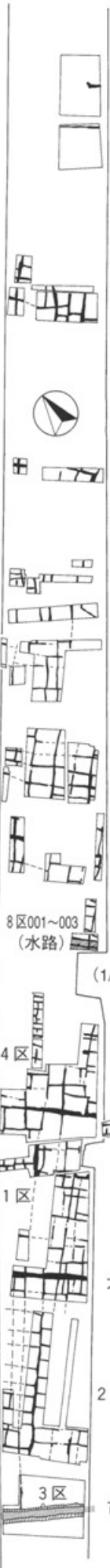
区画は方形もしくは長方形を基本とし、碁盤目状に規則正しく配置されている。特にⅡC・D・G・H区で顕著である。ただ、並木地区など水路が蛇行している部分については、三角形や台形などやや不規則なものも存在する。規模は並木南区、ⅡA区南半部、ⅡC区東半部で比較的大きく一辺3m～5m、他では非常に小さく2m～3m程度で2mに満たないものも多い。

なお、SD-008と063・064からは木製品を含む弥生時代中期の遺物が多量に出土していることから、本水田層はこの時期に比定されている。



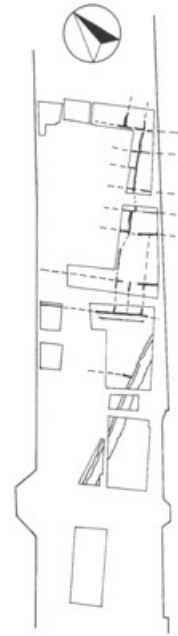
第14図 市原条里制遺跡小区画水田・出土遺物

菊間・徳方地区

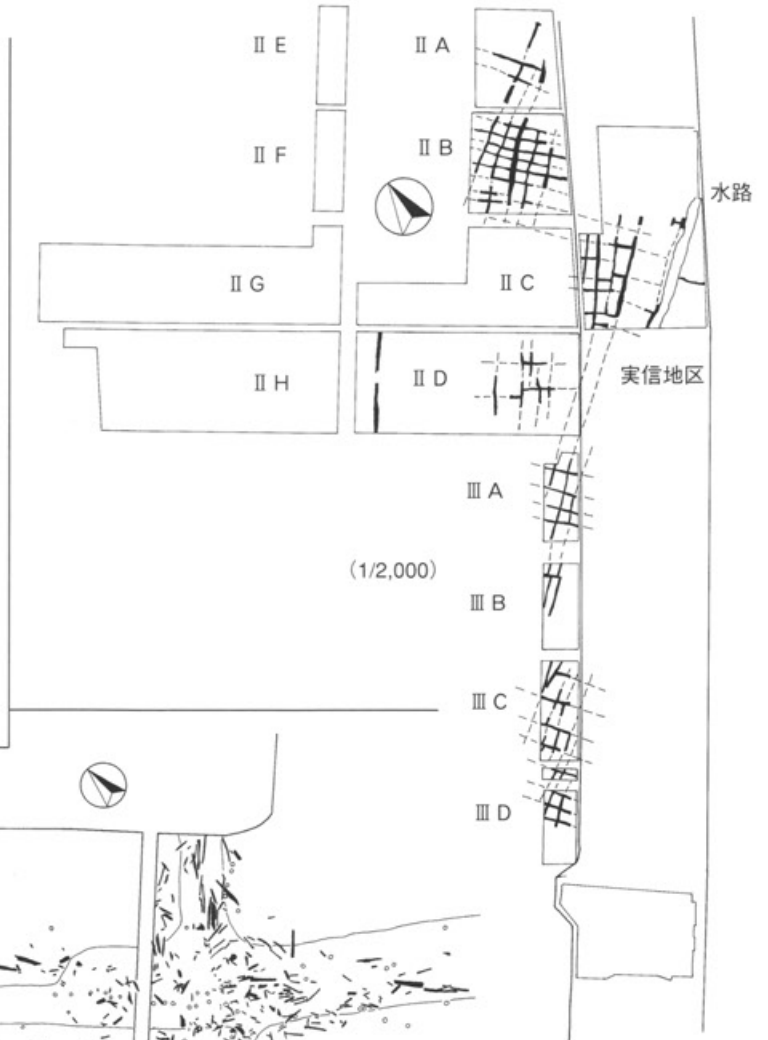


(1/2,000)

市原地区



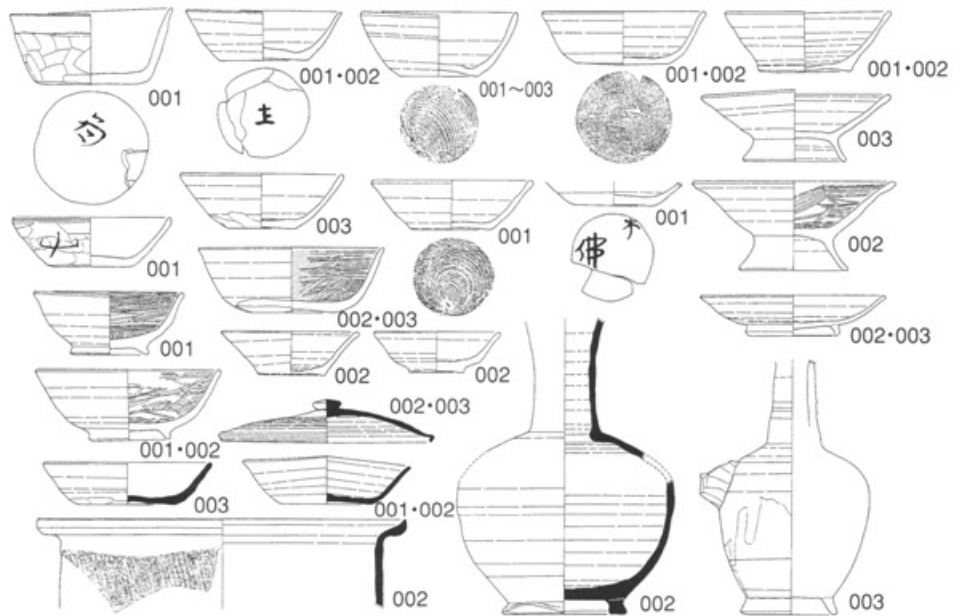
郡本地区 (1/2,000)



(1/2,000)



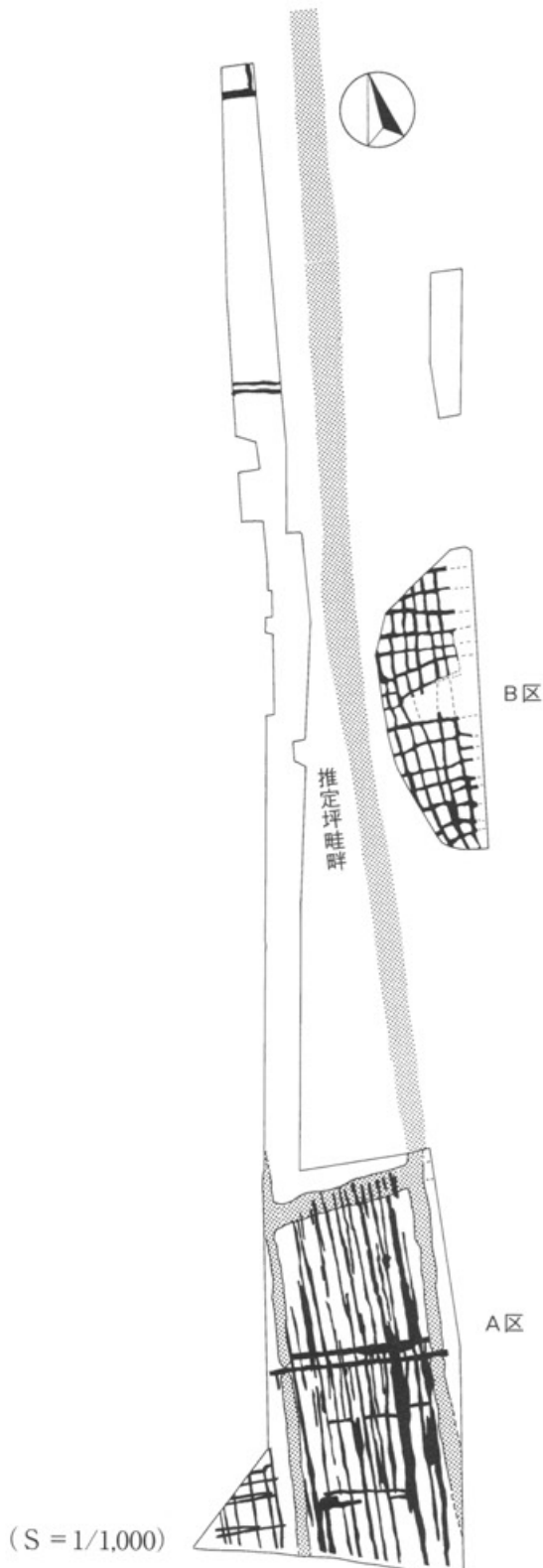
市原地区1区大睦群内の根固め (1/200)



菊間地区8区001~003出土遺物 (1/6)

第15図 市原条里制遺跡 (奈良・平安時代)





第17図 長須賀条里制遺跡A区・B区全体図

5年度～平成10年度にかけて、当センターが断続的に調査を実施した。調査区は南からA区・B区の順で、最も北側のG区まで、7調査区に分けられる。全体の調査面積は20,000㎡である。その他、平成6年度には関連する市道の建設に伴い館山市教育委員会が、平成11年度には県道館山大貫千倉線の拡幅に伴って当センターが隣接地を調査している。

ただし、本遺跡は館山市教育委員会による調査区以外は未報告で、現在整理作業中であるため、以下の記述は来年度以降に予定されている本報告の内容を越えるものではない。

(2)基本土層

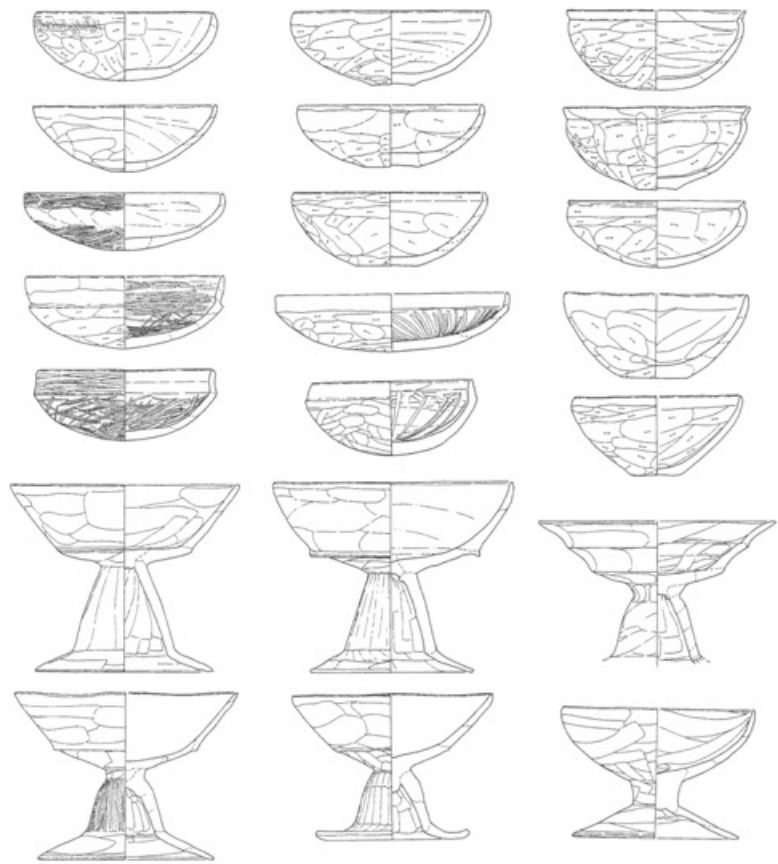
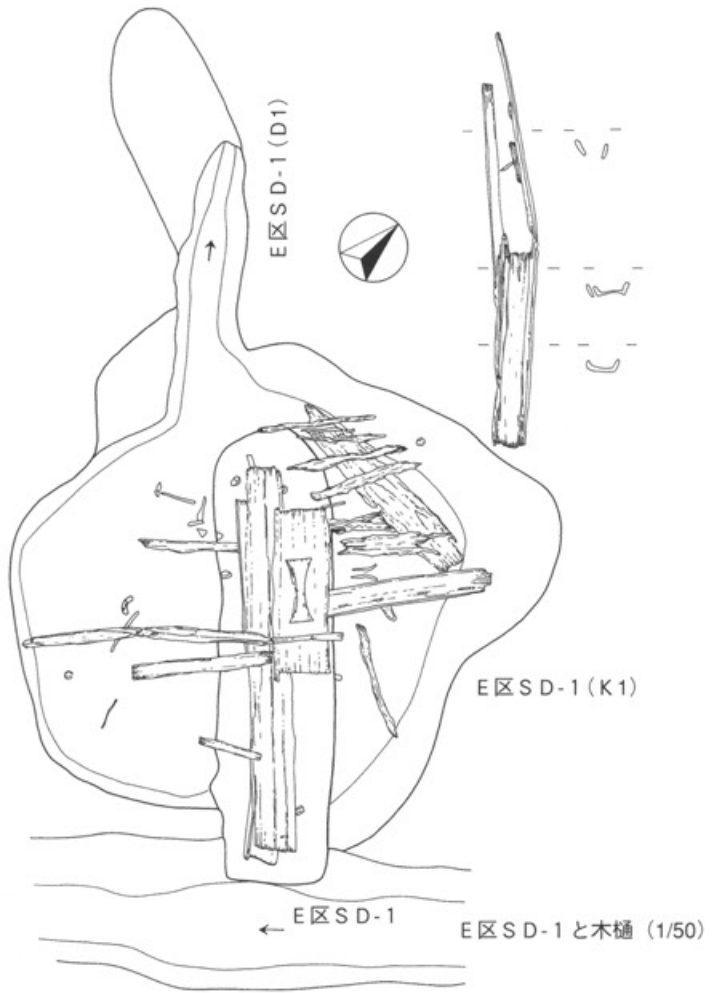
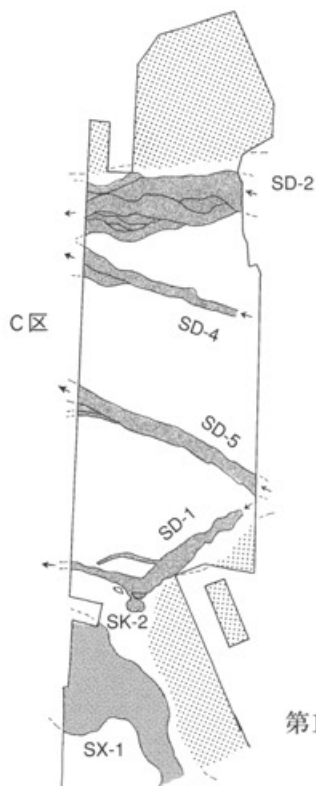
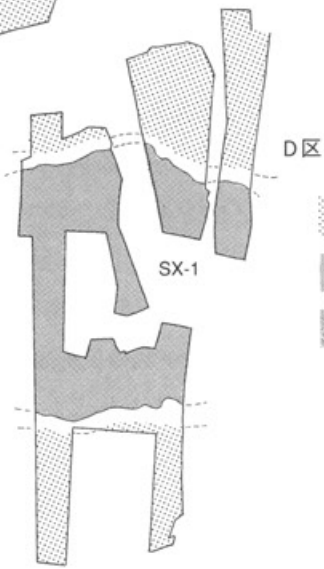
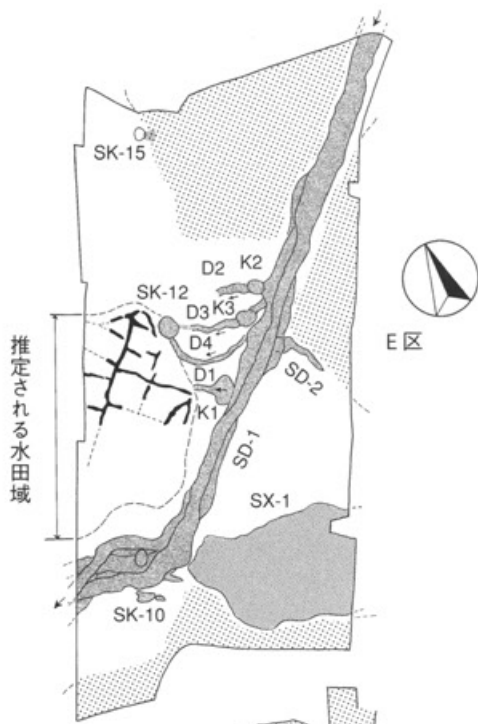
調査区が南北に2 km近くに及ぶため、各地点によって堆積状況はまったく異なっているが、基本的に堆積は薄い。

(3)農耕遺構

検出された農耕関連遺構は、水田跡、水路跡、溜井戸である。このうち水田跡はA区で1面、B区で2面、E区で3面検出された。内訳はA区が条里型、B区が小区画と条里型、D区とE区が小区画2面と条里型である。このほか、G区では、中世以降と考えられる大畦畔の痕跡が確認されている。水路跡はいずれも古墳時代前期～後期でC区、D区、E区、F区、G区で検出された。またE区では水路から水田域に用水を切り落とすための暗渠状の木樋が出土している。溜井戸は殆どが中世以降のものであるが、古墳時代の水路跡に伴うと考えられるものも確認されている。

①条里型水田跡

A区、D区、E区で検出しているが、D区は断片的な畦畔の一部を確認しただけである。A区では南北方向の畦畔2条、東西方向の畦畔1条で区画された東西20m×南北50m前後の半折形と考えられる地割のほか、その区画内には耕作痕と考えられる並行する浅い溝が見出された。調査区全域で土壌の堆積が薄く、検出面直上が近世以降の耕作土であるため、畦畔はすべて疑似畦畔Bでの検出である。特に東側



E区SD-1出土遺物

第18図 長須賀条里制遺跡 (C区~E区古墳時代)

の南北畦畔は幅が1m以上で内部に耕作痕跡を伴っておらず、また調査区が推定条里で南東側の坪境付近にあたるため、坪畦畔の可能性はあるが、断片的な調査であるためはっきりしない。

なお本地域の表層条里からみた推定地割りの方向は東に10°程振れているが、今回検出された畦畔はほぼ真北に近い。時期については推定する資料に乏しく不明であるが、出土遺物から概ね中世以前の時期を考えることができる。

E区では、調査区の北部を中心に確認されている。この部分の基盤層は海成砂層であり、その直上が近世以降の耕作土であるため、手畔を盛る際に掘られた掘削具痕跡を伴う浅い溝を畦畔の痕跡として認定したものである。

#### ②小区画水田跡

B区とE区で検出した。

B区では南北方向7条、東西方向14条～15条の小畦畔と、それにより区画された65区画以上の小区画からなる。大畦畔や利水施設は調査区内には確認されていない。小区画は南北にやや長い長方形を基本としているが、変形したものも多く、面積も偏差が大きい。この地点の埋没地形が東側の丘陵から張り出した微高地と後背湿地にかかる緩斜面であることと、東西小畦畔の軸方向がごくわずかに放射状になっている点を鑑みると、南北の小畦畔を基準とし、これを細分することによって小区画を形成したのであろう。

E区では、調査区を袈姿懸けするように南北に流れる古墳時代の水路(E区SD-1)の西側に、上下2面が検出された。畦畔はいずれも疑似畦畔Bだが、比較的明瞭である。ただ、畦畔部分にも若干の耕作痕跡が認められることから手畔と考えられ、水口と考えられる畦畔の途切れる箇所が数箇所確認されている。確認された範囲が狭いため、区画の形態ははっきりしないが、方形ないし長方形を基本としているようである。軸方向は上下で若干異なり、第1水田面が水田域の西側は調査範囲外となるためはっきりしないが、東側と南側の限界はE区SD-1により規制されていることが伺える。本地点は砂堆と丘陵裾に挟まれた後背湿地に立地するが、その中でも埋没地形の起伏が著しいことが今回の調査で判明しており、低い部分に比較的小規模な水田域を形成したものと考えられる。利水施設は水路、建築部材を転用した木樋による給水の枝水路のほか、枝水路の末端に溜井戸状の土坑を伴っている。時期は枝水路及び溜井戸で出土した遺物から、概ね古墳時代前期後半～中期前半をあてることができる。恐らく水田もこの時期であろう。

#### (4)その他の遺構

多くの遺構が確認されているが、主として祭祀関連の遺構が多く、農耕遺構に伴うと考えられる集落域や墓域は確認されていない。ただ、現在の集落や畑として利用されている本遺跡の東側丘陵の裾付近の微高地に該期の遺物が多く散布されているといわれており、丘陵上にはとても集落をつくる地形的な余裕がないため、この部分に集落が存在した可能性が高い。また、本遺跡は後背湿地に立地しているが、その中においても、現状で1.5m以上の比高差を持つ微高地がいくつも見出されており、中世以降の水田耕作によって削平されているであろうことを鑑みると、この部分に集落が存在した可能性も捨てきれない。いずれにしても、集落域と水田域が比較的近接した景観を想定することができよう。



## 5. 常代遺跡・郡条里遺跡

### (1) 遺跡の概要

常代遺跡は君津市常代字上檜添、郡条里遺跡は君津市郡に所在する。房総丘陵に源を発し、東京湾に注ぐ小糸川下流域左岸の低位段丘および自然堤防上及びその南側から小糸川に流入する支流の松川が開析する谷にかけて立地しており、現地表の標高は16m前後である。土地区画整理事業に伴って平成2年度～平成5年度にかけて君津都市文化財センターが調査を実施した。このほか平成10年度には国道127号拡幅工事に伴って当センターが東側隣接地を調査した。調査面積は常代遺跡の君津都市分が20,000㎡、県センター分が2,000㎡、郡条里遺跡の君津都市分が10,000㎡、県センター分が1,000㎡である。検出された遺構は弥生時代中期～後期の方形周溝墓群、土壙群、自然流路、古墳時代の水路と円墳周溝、小区画水田跡、奈良・平安時代から中世の掘立柱建物跡など非常に多岐にわたる。中でも遺物では常代遺跡の弥生時代中期の自然流路から農具を含む多量の木製品が出土しており、特筆される。

なお、県センター調査分については現在整理作業中である。

### (2) 基本土層

常代遺跡の君津都市調査区については大きく、Ⅰ層(表土・耕作土)、Ⅱa層(黒色の強い黒褐色土)、Ⅱb層(褐色の強い黒褐色土)、Ⅱc層(灰色の強い黒褐色土)、Ⅲ層(黄褐色土)、Ⅳ層(灰色砂)、Ⅴ層(Ⅳ層とⅥ層の間層で、灰色粘質土と暗褐色粘質土の互層からなる)、Ⅵ層(黒色粘質土で、灰白色のテフラを2層含む)、Ⅶ層(Ⅵ層とⅧ層の間層で、灰色シルト中心)、Ⅷ層(灰色粗砂でラミナが顕著)の8層に分けられている。堆積時期はⅠ層が近世以降、Ⅱs層が中世、Ⅱb層が平安～古墳時代後期、Ⅱc層が古墳時代前期～縄文時代晩期終末、Ⅲ層～Ⅵ層が縄文時代後期以降とされている。本遺跡は近世以降の削平が著しく、Ⅱ層の堆積が薄い。県センター調査区も基本的には同様な堆積状況であるが、近世以降の削平が特に著しいためⅡ層は遺存していない。いずれもほとんどの遺構はⅢ層上面で検出している。

### (3) 農耕遺構

検出された農耕遺構は水田跡、畑跡、水路跡、利水遺構(自然流路、取水堰、分水堰、水路)である。

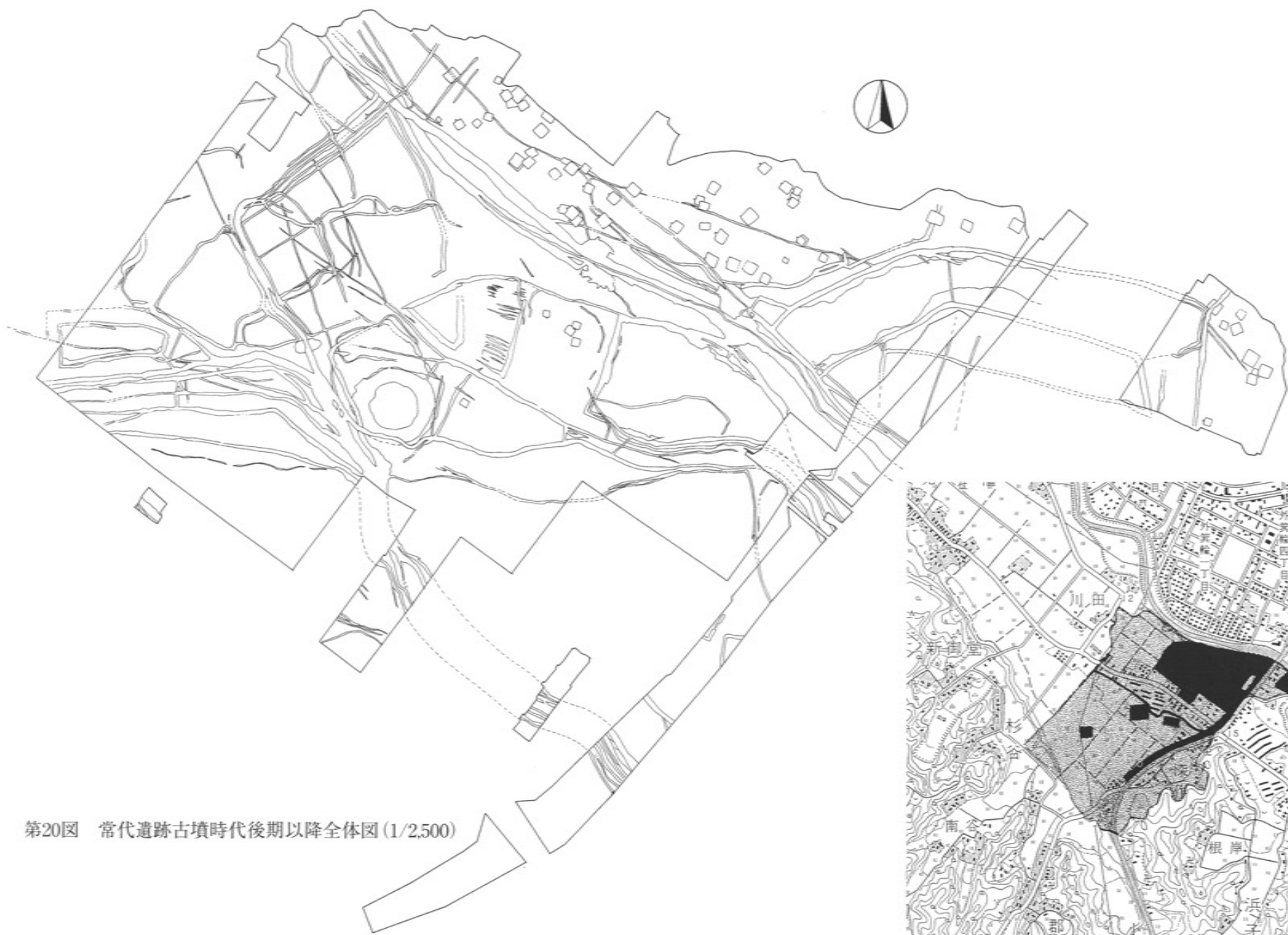
#### ① 水田跡

常代遺跡と郡条里遺跡の県センター調査区から検出された。

常代遺跡では、後述する小糸川の旧河道であるSD-220の北側に位置する。確認面はⅢ層上面で、検出されたのは中央に水路を伴う大畦畔と小畦畔である。近世以降の削平により状況は非常に悪く、いずれも疑似畦畔Bの最下部での検出であり、区画内にもほとんど耕作痕跡は認められなかった。

水路はほぼ直線的で、方向は北から東に約30°程振れている。流水の方向は不明だが、恐らく南→北へ流れていたものと考えられる。なお大畦畔には杭や矢板などによる補強の痕跡は認められていない。小畦畔は水路の東側に南北3条、西側に南北4条、東西方向はともに8条程度が検出されているが、断片的である。区画は一辺2m前後の方形を基本とする小区画だが、形態の判明するものは少ない。

郡条里遺跡では、調査区中央部付近に位置する。確認面は同様にⅢ層上面で、小畦畔のみの検出である。ここも近世以降の削平により状況は非常に悪く、疑似畦畔Bの最下部が辛うじて遺存しているのみで、区画内にも耕作痕跡はほとんど認められていない。小畦畔は東西3条、南北4条、区画は一辺2m前後の方形もしくは長方形の小区画で総数11区画である。なお、常代遺跡とは異なり、南北小畦畔の方向は北から西に30°程振れている。



第20図 常代遺跡古墳時代後期以降全体図(1/2,500)



第19図 常代遺跡・郡条里遺跡位置図(1/2,500)

## ②畠跡

常代遺跡の君津郡市文化財センター調査区から3箇所の畠跡が検出されている。そのうち1号畠は時期不明、2号畠は奈良時代以降、3号畠は古墳時代後期後半～平安時代頃という時期が与えられている。

3号畠は東西方向に並行する浅い溝からなる。溝の間隔は1.2m程で、北側の3-1号～3-3号はほぼ同じ軸方向で再掘削を行っているようであるが、近世以降の削平が著しく遺存状況は不良である。また、この東側には区画溝と考えられる南北に伸びる溝(SD-313)があるが、区画溝はこの他には検出していない。

## ③利水遺構

常代遺跡から自然流路と取水堰、分水堰、水路が検出されている。

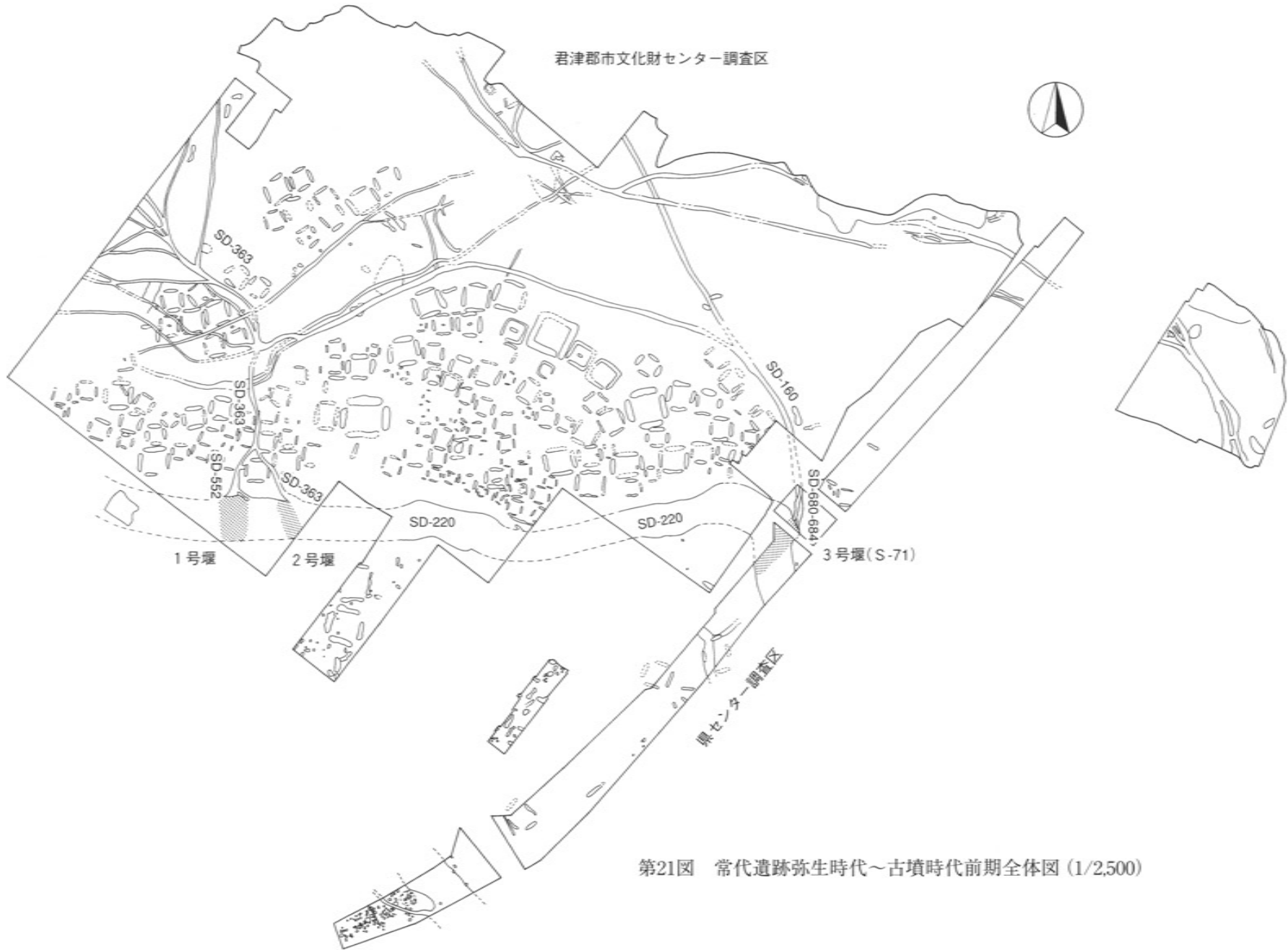
まず自然流路(SD-220)は小糸川の旧流路跡と考えられるもので、幅20m、深さ3.5m、長さ300mにわたって検出された。方向は北東→南西方向である。覆土はラミナの発達した比較的速い流水性の堆積である。河床～覆土中層にかけて弥生時代中期の遺物が多量に包含されており、弥生時代中期後半段階には洪水によってほぼ埋没したものと考えられている。

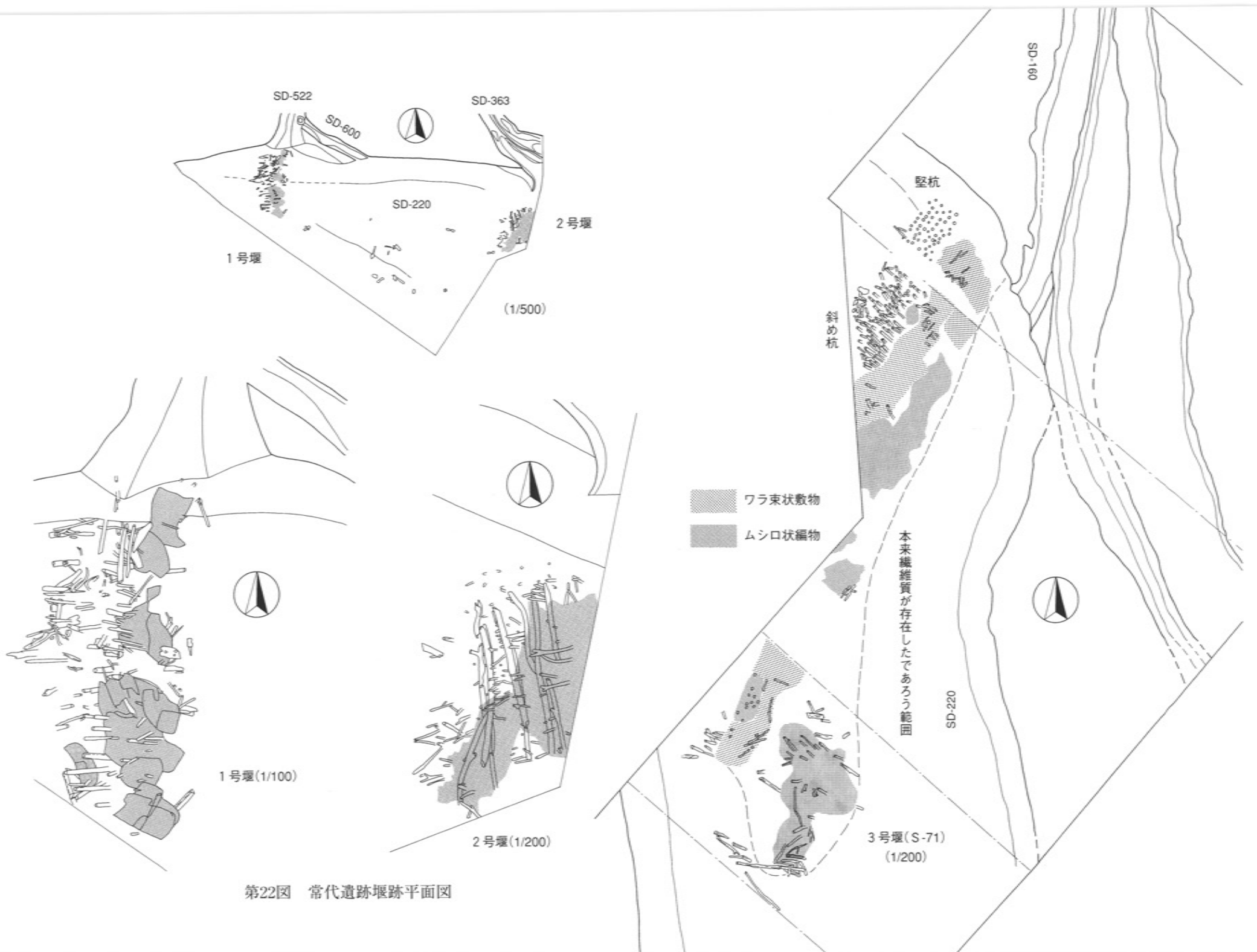
取水堰はこの自然流路に設置され、君津郡市文化財センター調査区で1号堰と2号堰、県センター調査区にS-71の3箇所が確認されている。なお、君津郡市文化財センターで仮に3号堰と報告されていたものが、S-71にあたる。流路から分岐する幹水路は、1号がSD-552、2号がSD-363、S-71がSD-680・684(SD-160)の各溝である。これらは弥生時代中期～後期初頭の時期が与えられているが若干の時期差が認められ、1号→2号→S-71の順となり、幹水路もこれに従う。規模は1号堰が幅4m×長さ8m以上、2号堰が幅4m×長さ5m以上、S-71が6m×長さ30mである。構造は堅杭と横木をかませて骨組みとし、網代を被せる形である。ただ、1号とS-71は堰本体の幅に比して横木が短いのに対し、2号は長い横木を堅杭で抱き込む合掌型である。堅杭に使用する材は、1号堰が角材を多用するのに対し、他では主として丸木を利用している。取水方向にも差がみられ、1号堰では流路方向にほぼ直角、2号堰では流路との角度がほぼ45°である。S-71は流路がやや湾曲する部分に設置されており、湾曲前の流路とほぼ同じ角度で伸びている。いずれも堰と幹水路の角度はほぼ等しい。

分水堰は君津郡市文化財センター調査区のSD-160に検出されている。この堰はSD-160床面に直交する小溝と小ピットのみが遺存しており上部構造が遺存していないため、詳細な形態は不明である。ただ、その状況から板材と杭を用いた簡易な堰であったことを想定している。

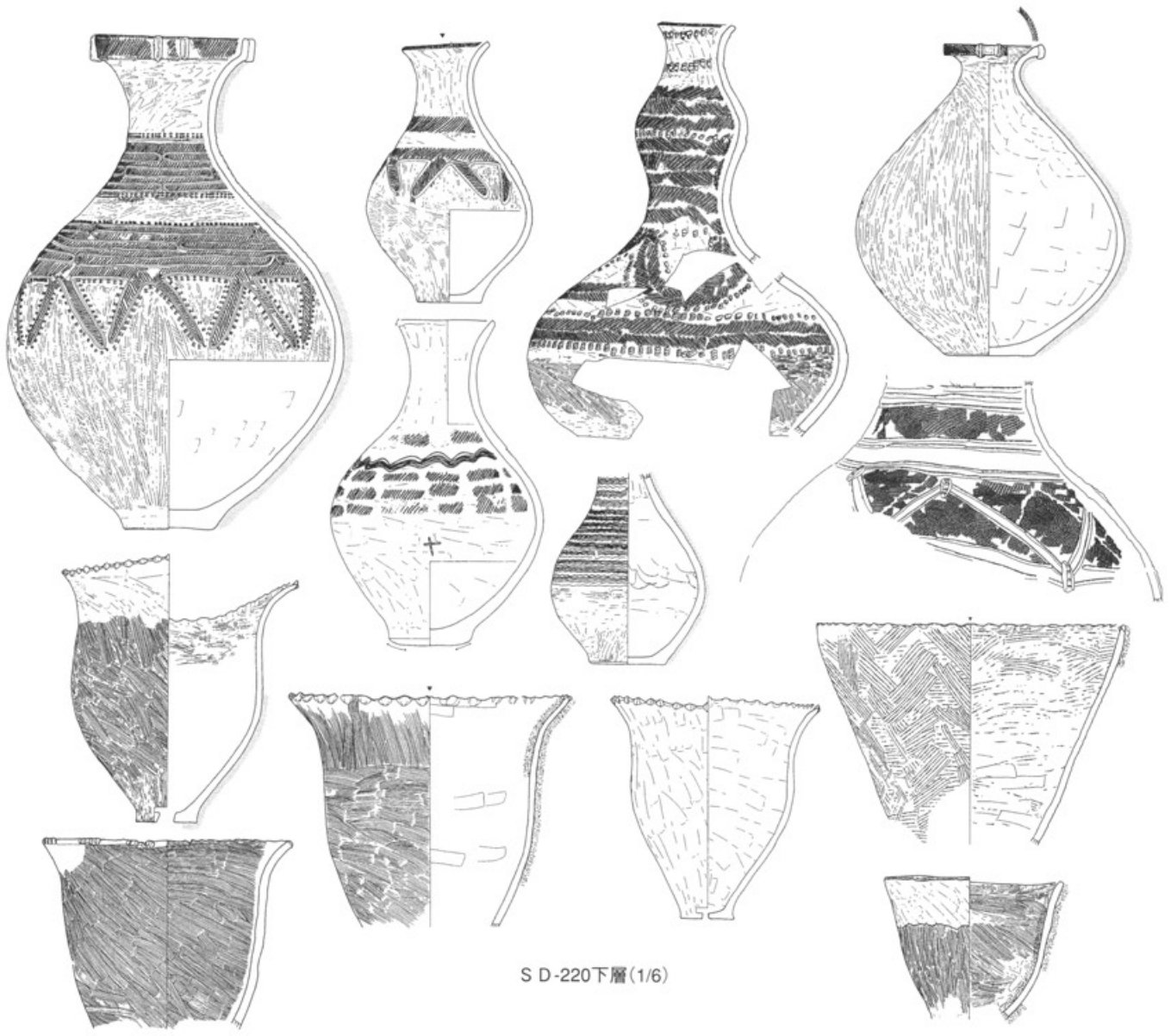
このほか、君津郡市文化財センター調査区では、SD-220の2号堰から延びるSD-363が調査区北西部で多数分岐している。これらの分岐部には特に堰などの構造は確認されていない。合計12条の枝水路が分岐しているが、SD-363の設置当初から存在していたものと、その後掘り直されたものがあるようである。

水路は多種多様なものが確認されているが、基本的にはすべて調査区の東→西へ流れていたような様相を示している。大きなものは調査区北部を東西に流れる溝群(SD-70・150)と南部を東西に流れる溝群(SD-369・370・380など)がある。このほかにこれらに規制されるように走る溝があるが、溝幅より大きい深さを持ち、断面が縦長の長方形を呈するもので、通称「小糸川タイプ」と呼ばれているものである。この小糸川タイプの溝は、水路状の溝群に沿うように、もしくは直交するように縦横に伸びて、それらの内部を区画するような様相を呈している。覆土は人為的な埋め戻しのものが多く、何度も再掘削を行った痕跡を残すものも少なくない。出土遺物や重複関係から古墳時代後期の時期が与えられている。





第22図 常代遺跡堰跡平面図



S D-220下層(1/6)



S D-220中層(1/6)

第23図 常代遺跡出土遺物

## (4)その他の遺構

前述のとおりさまざまな遺構が検出されている。

弥生時代～古墳時代前期の水田及び利水遺構に伴う集落跡はこれまでの調査では確認されていない。常代遺跡では総数160基を超える方形周溝墓群からなる墓域は水路によって区画されている。堰からの枝水路はそれ以前に形成された墓域を縫うように通って北西側調査区域外に流れるが、まとまった水田域はこの下流側にあるものと想定されている。ただ、県センター調査区からは断片的ながら小区画水田が検出されており、場合によると墓域Aと小糸川の現河道の間に比較的まとまった水田が存在した可能性がある。集落については、現在のところ推定しうる資料がない。

古墳時代～奈良・平安時代については多数の竪穴住居と掘立柱建物跡、調査区中央部やや南よりに、比較的規模の大きな円墳が確認されている。本遺跡は大きくSD-70・150とSD-369・370・380によって北部、東部、中央部、南部、西部に区分けされるが、集落域は北部と中央部に集中しており、小糸川タイプの溝は主として東部、西部にみられる。仮に小糸川タイプの溝が農耕に関連する遺構であるならば、集落域と生産域が水路を介して隣接する景観を復元することができる。

## 6. 高部古墳群

## (1)遺跡の概要

高部古墳群は木更津市請西字西千束台に所在する。矢那川下流域南岸の東京湾を望む丘陵上に立地し、現地表の標高は40m～50mである。土地区画整理事業に伴って、平成4年度～平成6年度に君津郡市文化財センターが調査を実施した。調査面積は17,000㎡である。

検出された遺構は縄文時代早期、弥生時代後期～古墳前期初頭及び古墳時代中期の集落跡、前期と終末期の古墳、奈良・平安時代の集落や方形区画墓など多岐にわたる。

## (2)基本土層

1層(黒褐色～黒色土層)、2層(新期テフラ)、3層(黒色～褐色土層)で、それぞれ更に細分されている。基本的には台地上の一般的な様相と大きく変わることはない。

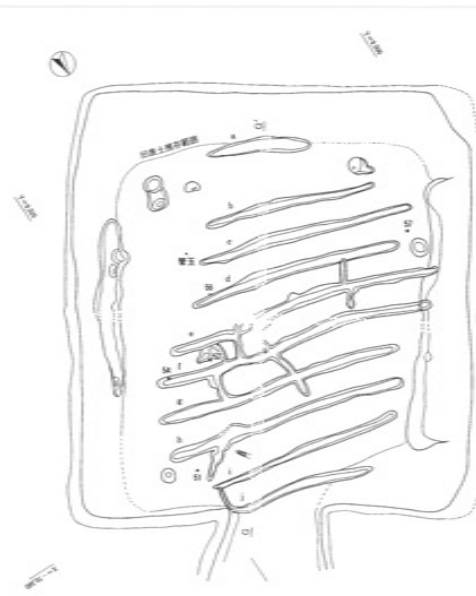
## (3)農耕遺構

本遺跡で検出された農耕遺構は畝跡である。本遺跡では前方後方墳2基、円墳14基、方墳及び方形区画墓23基が確認されているが、畝跡は前期初頭と考えられる前方後方墳(30・32)と方墳(31)の墳丘下、旧表土上(1層上)より確認された。いずれも畝立溝と考えられる並行する浅い溝で、溝の間隔は1m～1.5m、溝幅は大多数が0.2～0.3m程度であるが、0.9m程のものもある。深さは0.2m～0.5m程と一定しない。軸方向は30号墳下が東へ35°、32号墳下が西へ45°～60°、31号墳下が西へ63°と若干のばらつきがある。覆土は黄褐色でローム粒を多く含む。溝床面には農具等の痕跡は確認できていない。

## (4)その他の遺構

本遺跡の畝跡は古墳墳丘下での検出であり、区画溝などがいないため面積ははっきりせず、耕作域の限界も不明である。いずれの古墳も調査区やや北側の比較的平坦な部分に存在していることから、本来はこの部分に広く存在した可能性がある。

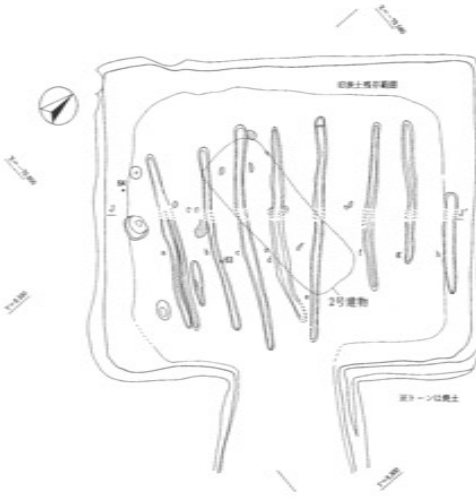
本遺跡は主として弥生時代後期～奈良・平安時代の集落、墓域である。検出された遺構のうち現在のところ前期古墳を除いた集落とその後の墓域に関しては未報告であるため、集落地と畝地との関連は不明で



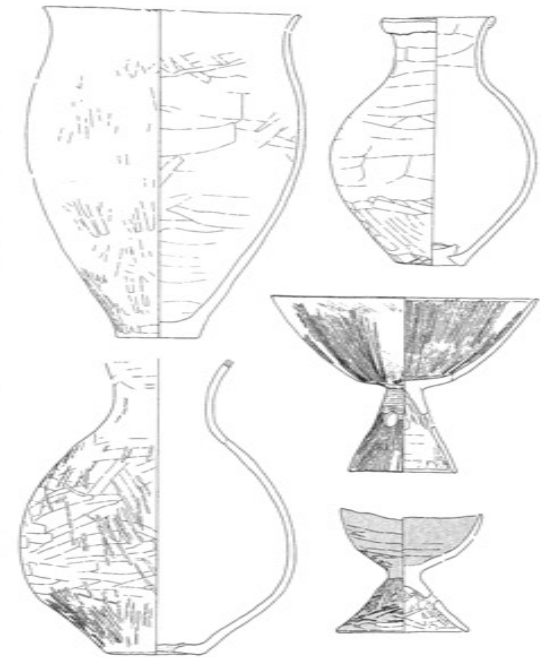
30号墳墳丘下畝状遺構(1/400)



30号墳周溝出土遺物(1/6)



32号墳墳丘下畝状遺構(1/400)



32号墳周溝出土遺物(1/6)



ある。ただ、全体図をみる限り、畠地と重なるようにして集落が占地している様子が伺えることから、恒久的な畑地ではなく、集落内に存在した比較的小規模な畠地であったのかも知れない。

## 7. 芝崎遺跡

### (1)遺跡の概要

芝崎遺跡は匝瑳郡光町芝崎に所在する。九十九里平野の中央付近、下総台地に源を發し太平洋に注ぐ栗山川中下流域左岸の砂堆～自然堤防上に立地し、現地表の標高は2m～3m前後である。銚子連絡自動車道の建設に伴って平成11年度～平成13年度に東総文化財センターが調査を実施した。調査面積は約30,000㎡である。検出された遺構は縄文時代後期の円形竪穴、奈良・平安時代の集落跡と畠跡、中近世の掘立柱建物跡や道跡などである。

### (2)基本土層

現代耕作土層、江戸時代層、室町時代層、古代耕作土層、砂礫層となっており、江戸時代層下部には宝永テフラ、古代耕作土層中に伊豆神津・新島系テフラ(AD.838年・AD.886年)、下部に天城カワゴ平テフラ(BC.800～BC.900)が挟在する。

### (3)農耕遺構

本遺跡で検出された農耕遺構は畠跡である。本砂丘を覆う栗山川の氾濫起源と考えられる黒色土下部から調査区全面にわたって確認された。基盤層は砂礫層を覆う天城・カワゴ平テフラ上面である。幅約0.2m、深さ0.1m～0.2m、長さ20m～30mの溝が約0.7m間隔で数十条並行して掘り込まれており、畝立て溝と考えられる。また、この溝の床面には鋤もしくは鋤と考えられる耕作痕跡が認められるが、これは溝の幅によって2列もしくは3列に並んでいる。

区画ははっきりしないが、畝立て溝とは異って遺物を出土するやや幅広の溝があるようなので、耕地の区画は溝によって行われていたものと考えられる。

### (4)その他の遺構

このほか、奈良・平安時代の竪穴住居跡や墓壙や中近世の掘立柱建物跡や溝、道路跡などが検出されている。このうち奈良・平安時代の竪穴住居跡は主に西区で確認されている。未報告であるため個々の遺構の新旧関係についてはまだはっきりしないが、この区域内においては畠跡と同時に存在したものはなく、畠が機能している段階の集落はややはなれた場所にあった可能性が考えられる。

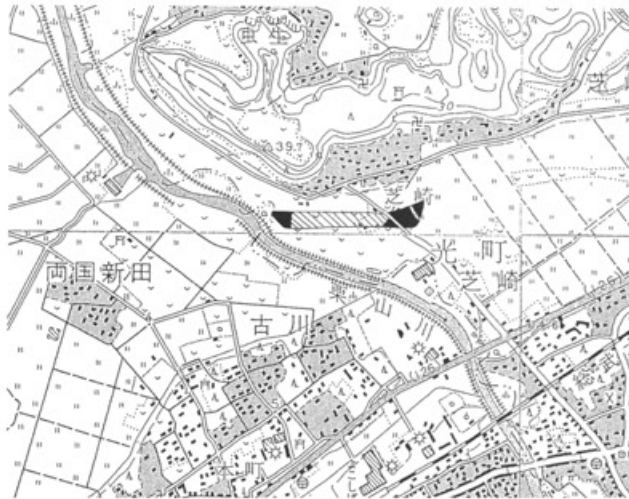
いずれにしてもこれまで県内では、本遺跡のような集約的な様相を示す畠跡は見つかっておらず、貴重な例といえる。

## 8. 西根遺跡

### (1)遺跡の概要

西根遺跡は印西市戸神に所在する。印旛沼に流入する小河川である戸神川の氾濫原に立地しており、現地表の標高は4m前後である。千葉ニュータウン整備にかかる県道建設に伴って、平成11年度～平成12年度にかけて当センターが調査を実施した。調査面積は6,950㎡である。

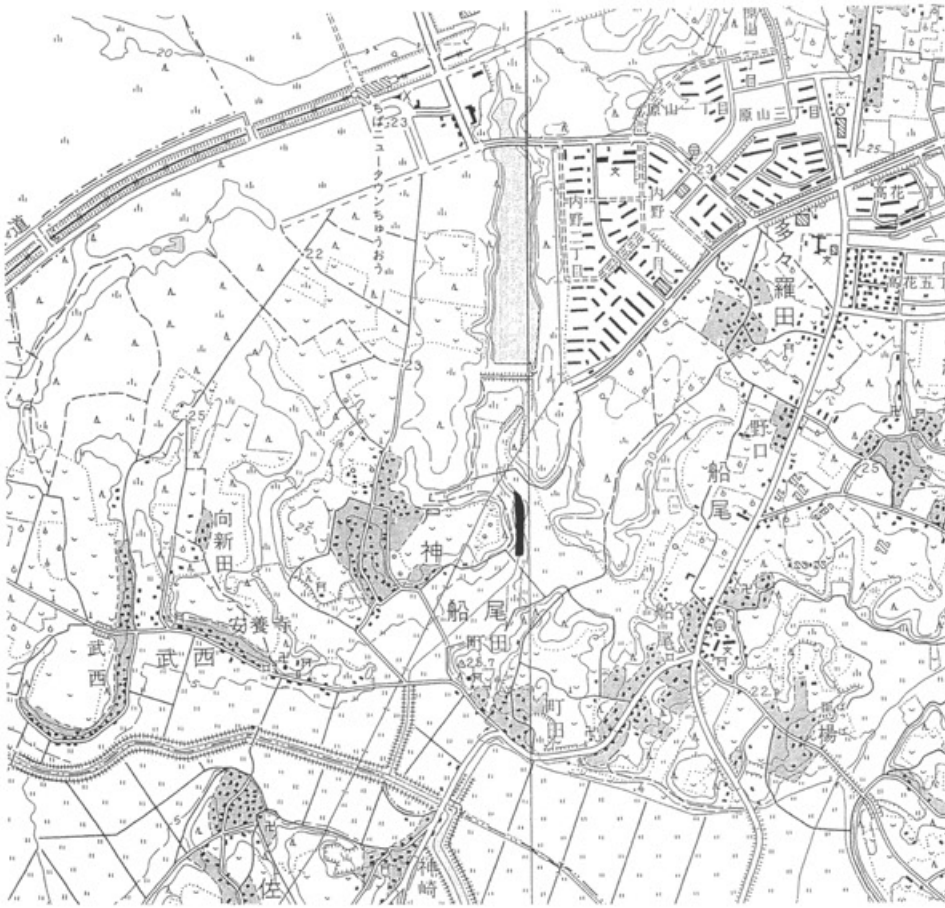
検出された遺構は縄文時代後期の土器集積遺構、古墳時代前期以前の水路と井堰、奈良・平安時代の水路などである。遺物はおびただしい量の縄文土器のほか、奈良・平安時代の土師器・須恵器、農具を含む



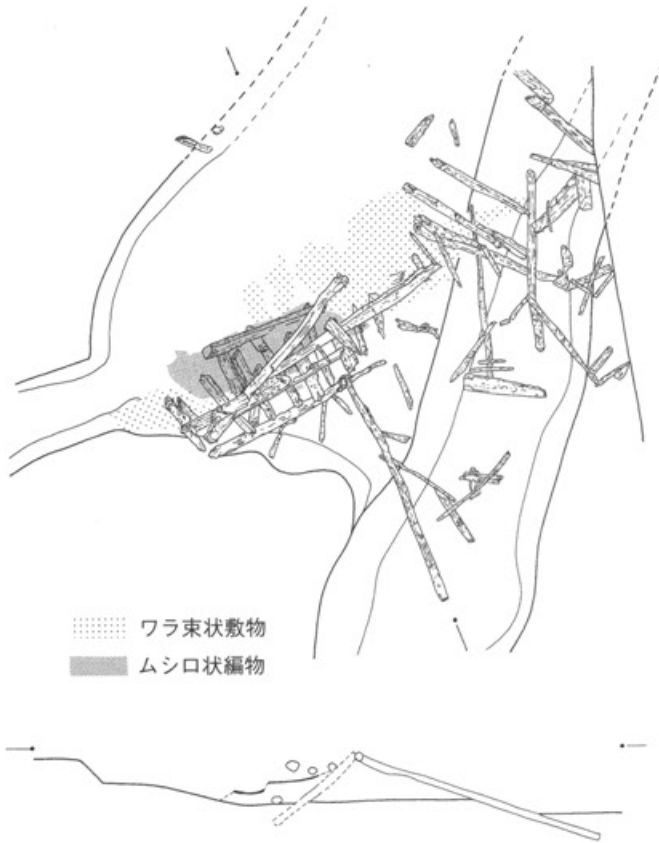
第25図 芝崎遺跡の位置 (1/25,000)



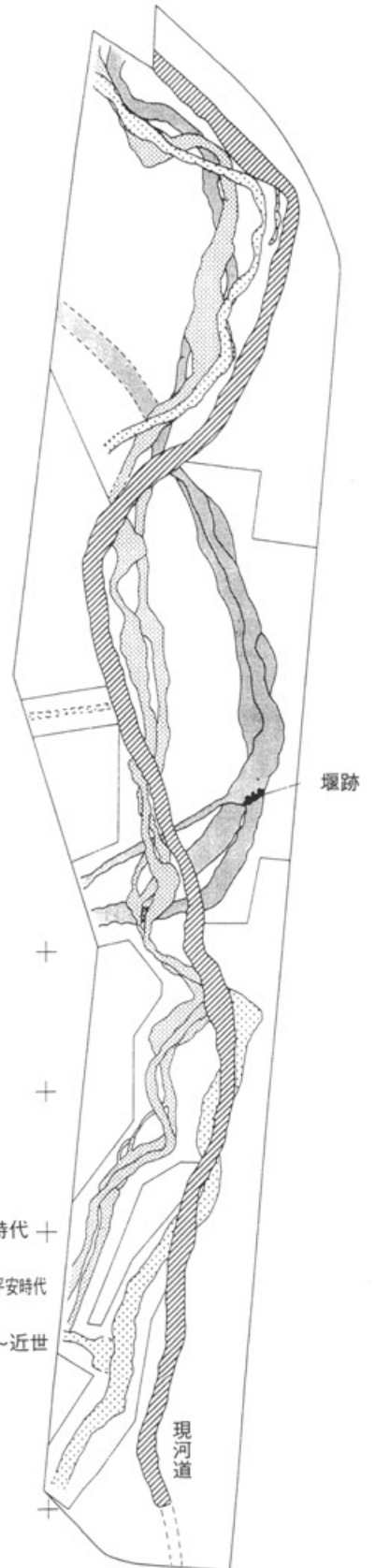
第26図 芝崎遺跡奈良・平安時代全体図 (1/1,000)



西根遺跡位置図(1/2,500)



西根遺跡古墳時代堰(1/80)



西根遺跡全体図(1/1,000)

多数の木製品が出土しており注目される。

(2)基本土層

未分解の植物質遺体を多量に含むシルト質もしくは泥炭質土壌で、いずれも戸神川の氾濫による堆積層と考えられる。また、その下部には埋没林が認められる。

(3)農耕遺構

本遺跡で検出された農耕遺構は自然流路と利水遺構(井堰、枝水路)である。

自然流路は縄文後期、古墳、奈良・平安、中世～近世の各時期のものが確認されており、それぞれの時期で複数の流路が見出されたものもある。いずれも戸神川の旧河道と考えられる。

井堰は調査区中央付近で確認された。新旧二段階に分けられる古墳時代流路の新段階に伴っており、そこから南西方向に枝水路を分流している。堰は、まず川床に縦もしくは斜めに杭を打ち、それに横木をかませて筵や藁束で覆ういわゆる「合掌型」の構造で、幅約5m、高さ約0.5mである。構造は常代遺跡1号堰と似るが、流路方向と直角ではなく、約45°程の角度をつけて設置されている。杭や横木はすべて建築材の転用で、横木には竪穴住居及び高床建物のもと考えられる梯子が使用されていた。

(4)その他の遺構

弥生時代以降では流路と利水遺構以外の遺構は確認されていない。奈良・平安時代の流路からは多量の墨書土器や農耕具のほか形代などが出土している。本遺跡兩岸の台地上、左岸が鳴神山遺跡、右岸が白幡前遺跡として調査され、いずれも古墳時代後期以降の大集落として知られている。この流路はそれらの集落の人々が祭祀空間として利用したものと推察される。

## 2 水田・畠跡と治水遺構について

### 1) 水田跡

水田跡は主として実際に耕作を行う水田区画とそれを囲む畦畔からなる。また大畦畔などに沿って水田に水を供給する水路や、一時的に貯水するための溜井戸、水路から水田面に水を引き込むための施設(水口や導水路なども)これに含めることができる。水田区画の田面には作業者の足跡や稲株痕跡など、大畦畔には心材や矢板、杭などによる補強が見つかることもある。

まず小区画水田であるが、他県の例では、広大な海岸平野などの沖積地に格子目状に配置された水路を大区画として、その内部を埋めるように碁盤目状に整然と小区画が配置されるもの、河川氾濫原など開析河川等に向かう緩斜面上に立地し、蛇行する河川の方向性を利用もしくはこれに規制された不規則な小区画からなるもの、もしくはその両者の性質を併せ持つものがある。前者の例としては静岡県登呂遺跡、道場田遺跡、曲金北遺跡、後者の例としては静岡県川合遺跡、大阪府池島・福万寺遺跡、青森県垂柳遺跡などが挙げられる。県内では市原条里制遺跡(Ⅲ2～3層)が前者の例にあたり、菅生遺跡(第7水田面)、芝野遺跡、長須賀条里制遺跡(A区下層・E区下層)が後者の例として典型である。また、この他に静岡平野で古墳時代中期以降に出現する中區画水田と呼ばれるものがある。

一方、大区画水田は一般に条里制水田とも呼ばれる。条里制とは中国周代の「井田制」に起源を持つとされる土地区画制度で、孟子が提唱したとされる。当時における実現性は疑問視されているが、1里四方の水田を「井」字形に9等分、中央の1区画が公用とし、周囲8区画を私用とするものである。わが国では『養老令・田令』(以下『令』)で規定されている。基本は109m間隔で東西南北軸に合致した坪畦畔(面

積は1町)を設定し、これを10等分するのだが、 $2 \times 5$ に10等分する半折型と直接10等分する長地型が知られている。しかし、日本の国土は70%を山地が占めており、広大な低平地を必要とする条里制は地形的にも無理があったらしく、各地でこれに合致しない例も確認されている。特に洪水の多発する地域や、扇状地、河岸段丘や自然堤防を含む微地形の顕著な地域に多い。千葉県でも同様な傾向が認められるが、一般的に調査範囲が狭いため、坪畦畔を復元しうる例はほとんどない。

『令』は天平宝字元年(757年)に施行され、各地で整備されたとされている。奈良盆地では平安時代前期を遡る例はないという見解が提出されているが、近年、大阪平野や長岡京域では奈良時代に遡る例が検出されており、静岡平野でも奈良時代後期には実施されていたようである。

千葉県内ではこれまでに東京湾岸の房総地域の海岸平野及び河川氾濫原などの低地部を中心として比較的多くの検出例があるが、その大部分は中世以降のものであり、古代あるいは古墳時代以前にまでさかのぼる例は多くはない。イネは多くの栽培植物の中で珍しく優れた連作性をそなえた作物であるため、その主たる耕地である水田が継続して営まれることが多い。このことは房総半島のような隆起地形の環境下では、特に河川の氾濫などによる土砂の堆積がない限り、良好な状態で古代以前の水田が遺存していることは難しいであろう。また、比較的古い時期の例であっても、推定される水田域と比較して調査面積が小さいため、全容を把握しうるものはない。

## 2) 畠跡

一般に畠地は水田におけるイネとは異なり、継続して同一作物を作り続けると連作障害により、収穫量が極端に低下する。その原因には、まず土壤養分(特に窒素)の蓄積を上回る収奪による地力低下、病害虫の集団発生などが挙げられる。これを回避するため、農薬が普及するまでは同じ畠で季節によって異なる作物を栽培したり、一定期間耕作を放棄し地力回復をはかる方法、もしくはこの両者の併用、更に中世以降では水田と畑の転換なども行われるようになる。そのほか、山林の一部を定期的に焼き払い、その跡地を耕地として数年間利用したあと、地力低下を起こすとまた別の場所を同様に開墾し、これまでの耕地は山林にかえすという、いわゆる焼畑と呼ばれる方法もある。

畠跡は通常、畝立溝と解釈されている並行する浅い溝及びその境界を区画する比較的深い溝の両方、もしくはそのいずれかによって認識されている。県内では旧上総地域を中心に、丘陵あるいは台地上、砂丘ないし自然堤防などの低地部分まで、地形的には比較的広い範囲で確認されているが、例そのものは多くない。特に丘陵もしくは台地の例は古墳墳丘下の旧表土上に検出される例が殆どを占めるため、水田跡よりも更に断片的である。これらの例は検出状況からみてほとんどが弥生時代後期～古墳時代後期と推定され、複数地点で畠跡が認められるものについても溝の軸方向に偏差が認められること、台地もしくは丘陵平坦面の規模と集落との関連からみて、いずれも集落に付随する比較的小規模な畠と推定できる。一方、芝崎遺跡における奈良・平安時代の大規模な畠跡は、これまで県内に例のない集約的な耕地経営の様子をうかがうことができる。作物については不明だが耕作土の科学分析(花粉やプラントオパールなど)でこれが判明した場合、当時の畠の耕作の様子が復元できるかもしれない。

### 3) 治水遺構

治水遺構には水路、配水遺構、貯水遺構がある。

まず水路は、文字通り水が流れた、若しくは水を流した遺構の総称である。人為的に掘削したと考えられるものの他、自然の小川を改変したと考えられるものも含まれ、多くは比較的規模の大きい溝状遺構として認識されている。半島南部の低地域を中心として県内ほぼ全域から知られているが、農耕に伴うものかそれ以外の用途かがはっきりしないものが多い。また「溝」という遺構の性格上、時期を特定できないものがほとんどである。

配水遺構は、基幹となる水路から何らかの手段を用いて、取水もしくは排水するための施設である。これには、基幹となる水路から別方向に開削された枝水路、井堰・分水堰、樋などが挙げられる。枝水路は比較的多く確認されているが、堰、木樋は少なく、数例を数えるのみである。貯水遺構は、用水の確保が比較的困難な場所でこれを解消するための施設であり、溜井戸、溜池などがこれに含まれる。溜井戸に関してはこれも低地部を中心に確認されているが、古代以前のものはいくつかは確認されている。なお溜池に関しては、これまでのところ県内で古代以前にさかのぼるものは確認されていないようである。

### 第3章 木製農具の変遷と若干の問題

大谷 弘 幸

#### 1 木製農具出土遺跡の概要

千葉県下の木製農具研究の幕開けは、木更津市菅生遺跡の発見に始まる。その後木製農具の発見事例はあまり増えることなく長い年月が経過することとなった。ところが1980年代以降低地部の調査例が増加し、それに伴って木製農具の出土数も増え、弥生時代以降奈良平安時代に至るまでの各時期の木製農具がおおむね出土するに至った。本節では県内で出土した木製農具を遺跡ごとに集成し、出土状況や農具の構成などについて概要を述べることにする。なお、旧来農具の範疇で捉えていた鍬や鋤について、「農耕具」としての性格よりも「土木具」的な使用方法の側面が強いものもあるとの指摘がなされている<sup>1)</sup>。実際農具とされるものの多くが土木具としても使用されることはまも認められることであり、木製品のみから農具的な側面が強いものと土木具的な側面が強いものとを峻別することは現時点では困難であると言えよう。今回の集成作業においては、鍬や鋤に土木具的な側面があることを念頭に置きつつも農具の範疇としてまとめることとした。

集成は基本的に遺跡を単位として行い、主たる木製農具の帰属時期に沿って掲載することとした。掲載したものは、耕起具として鍬、鋤、掘り棒、補助具として田下駄、大足、収穫具として鎌、穂摘具、調整具として臼、杵、ツチ類などであるが、同一遺跡から同形式の木製品が多数出土している場合には全体の形状が明らかなもののみを図示した。なお、農耕に使用された道具としては本来、箕や籠、田舟などの運搬具も含められるが、今回の集成では除外した。また、出土遺構については第2章第1節「農耕関連遺構の概要」の項で取り上げた遺跡と重複するものが多いため割愛した。集成図に紹介したものの中には、正式な報告書の刊行がまだ行われていないものが含まれており、これらは実測原図を元に推定しトレースしたもので、細部については事実と異なる場合がある。

資料集成の結果、14遺跡（別の時期を含む）から木製農具が出土していることが明らかとなり、内訳は弥生時代中期3遺跡、古墳時代前期6遺跡、古墳時代中期から後期初頭1遺跡、古墳時代後期3遺跡、奈良平安時代5遺跡である。

1. 常代遺跡（第34～38図） 君津市常代字五反歩に所在する。小糸川左岸に面した標高約16mの低位段丘上に立地している。弥生時代中期から奈良平安時代を中心とした墓域・集落遺跡である。木製農具の大半は遺跡を東西に流れる弥生時代中期の自然流路（S D-220）から出土している。この自然流路には堰が設けられており、周辺に展開していたと思われる水田に用水を供給する基幹水路の役割を担っていた。また、木製農具のほかに工具の柄や容器、建築材の類も多く出土している。図示した1から67までがS D-220からの出土である。

直柄平鍬には着柄隆起を持つもの（1～12）と持たないもの（13～18）がある。このうち着柄隆起を持つものには柄穴の両側にヒレ状の突起を作りだしているものがある（1～3・6）。また、6のように背面上部に刃部方向と平行した稜を持つものがあり、泥除けなどの装着も想定されるが、実際に泥除けの出土は見られない。直柄股鍬には、3本、4本、5本、6本歯のものが見られ、歯の本数の少ないものは三

角形(24~26)、歯の本数の多いものはカマボコ形(19~23)の身部を持つ傾向が見られる。いずれも着柄隆起は作られていない。このほか27のようにエブリと考えられる横鋏が出土している。着柄隆起を持つ直柄平鋏の未製品は28~33である。これら未製品によると、ミカン割りにした板材を着柄隆起部分を帯状に残しながら周りを成形し(28・29)、ほぼ外形が出来上がった時点で分割し(30~32)、最終的に柄穴を開ける(33)工程が復元できる。なお、一度に数点以上が同時に製作され、荒削りが終了した段階で2連程度に分割し、さらに最終段階に近くなって単体に分割して作業をしたものと思われる。35~38は着柄隆起を持たない平鋏の未製品であろうか。用材としては、身部は14がクヌギ節であるのを除いてすべてアカガシ亜属であり、柄にはヤマグワ、ムクロジ、サカキが使用されている。

鋤は一木のもののみが出土している(39・40)。40は握部の上端をフック状に作り出しているものである。いずれも用材はアカガシ亜属である。田下駄は2点出土しており、足を固定する紐通しの穴が4つ開いている。41はヒノキ、42はクスノキ製である。

竪杵の出土量は多く、すべて握部にソロバン玉状の突起を持っている。搗き部先端は丸く半円形を呈するものと、一方のみが平らになっているもの(43・46)が認められる。木取りは割材を加工したものと丸木を使用したもの(46・54・55)がある。用材は44がクヌギ節である以外はすべてアカガシ亜属である。横杵は未製品を含めて4点出土している。すべてアカガシ亜属製である。ツチ類は横方向に打面が見られるヨコツチ(61~63)と搗き部が釣鐘形を呈し木口面に打面が見られる「タテツチ」(64・65)があり、「タテツチ」はヒイラギ製である。臼は小形のもので、搗き部は半球状に磨滅している。

このほか68と69はS D-70からの出土で古墳時代後期の所産である。69はムクロジ製の鎌柄で、頭部とグリップ部は刃部方向にむかって突出している。鉄鎌装着の穴の角度は柄に対してほぼ直角で、直刃または基部が直刃で先端が大きくカーブするタイプの鉄鎌が装着されていたものと思われる。

**2. 浜野川遺跡(第39図)** 千葉市緑区南生実町に所在する。東京湾に流下する浜野川に面した標高約6mの沖積低地上に位置している。浜野川遺跡群、浜野川神門遺跡、神門遺跡として報告されている遺跡である。木製農具は遺物を包含した堆積層から出土している。1から3はケース4の弥生時代中期遺物包含層からの出土で、いずれも着柄隆起を持つ直柄平鋏の未製品である。常代遺跡の場合と同様に着柄隆起部分を帯状に残しながら周辺を成形し、その後切断して柄穴を開ける工程が復元できる。1はその長さから3個体程度連結して製作された可能性が考えられる。用材はすべてアカガシ亜属である。4はアカガシ亜属製の曲柄鋏である。いわゆる「東海系」の鋏で、肩部は斜めに削り落とされ軸部先端には紐掛け用の溝が巡っている。この鋏はケース2のIV a層から出土したもので、同層付近では奈良平安時代を中心に弥生時代中期から中世にかけての遺物が混在して出土しており、4にもっと近接して出土したものは、底部回転糸切り無調整の土師器坏であった。また、この鋏よりも下位のIV b層からは6が出土している。6は楕円形の曲物を転用した輪カンジキ型田下駄の横木である。これらのことから4の曲柄鋏は奈良平安時代の所産である可能性が高いと言える。5は膝柄である。緊縛部上部に紐掛け用の突起が作り出されている。奈良平安時代に相当する5層からの出土であり、イヌガヤ製である。

6と7は輪カンジキ型田下駄、9から11は杵型大足の部材、8はヨコツチであろうか。いずれも奈良平安時代の所産である。



3. 長須賀条里制遺跡 (第39図) 館山市下真倉字軽ノ坪に所在する。鏡ヶ浦に面した標高約7mの沖積低地上に立地している。1は弥生時代中期の溜め井施設と思われるE区SX1から出土した、着柄隆起のある直柄平鋏の欠損品である。常代遺跡のものと共通する柄穴両側のヒレ状突起が認められる。2と3は古墳時代前期から中期にかけての溝E区SD1から出土した膝柄鋏の未製品である。両者共に外形を大まかに整えた段階のもので軸部や刃部の加工は行われていない。報告書は刊行されていないため詳細は不明である。

4. 国府関遺跡 (第40~50図・写真図版5上段) 茂原市国府関字中橋に所在する。豊田川の支流に面した標高約18mの微高地上に立地する。古墳時代前期初頭の集落と墓域・自然流路を検出し、自然流路からは古墳時代前期の土器類と共に木製品が多数出土した。出土した木製品には、農具のほか工具や容器、建築材、祭祀用具など多様な種類が認められる。

直柄平鋏は9を除いてすべて着柄隆起を伴っている。これらは平面形が台形で刃部の幅が広く、着柄隆起の先端に刃部と平行する稜線を持つもの(1~7)と、この稜線が無く刃部の幅が狭いもの(8・10・13)とに大別することができる。また稜線を持つものには上部の2か所に穴が開けられているもの(1~3・5・7)や上端部に菱形の突起を作り出しているもの(1)が見られる。これらは泥除けなどを装着する際に使用されたものと考えられる。9は着柄隆起を取り除き他のものに転用したものとも考えられるが、全体に薄く仕上げられていることなどから泥除けの可能性もある。35から48はおもに直柄平鋏の未製品である。37のように外形がほぼ整うまで2点を連結させて製作する例は少なく、初期の荒割り段階で単体に切り離した後、着柄隆起を含めた細部の加工を行っていたようである。このため、36のように曲柄鋏と連結して荒加工が施される例も見られる。直柄股鋏は1点出土しており(11)、4本歯で身部が台形を呈している。12はエブリで刃部は鋸歯状をしている。14と15は着柄隆起下端の刃部が抉れている「横鋏」である。この鋏は、刃部の抉れのほか着柄隆起側に身部全体が内湾する特徴がある。また、身部側面が大きく開くもの(14)や身部側面が股鋏状に加工されているもの(15)がある。この身部側面の形態から諸手鋏的な機能も想定されるが、柄穴の方向性から考えて横鋏の範疇で考えたい。なお、これら直柄平鋏の身部はすべてアカガシ亜属製である。また、5の直柄はヤマグワ製13の直柄はアカガシ亜属製である。

曲柄鋏には二股鋏(17~24)、狭鋏(25~32)、多股鋏(33・34)が見られる。これらの曲柄鋏は共通して軸部と肩部との境に明瞭な段をもち、肩部は斜めに削られ、刃部の裏面は段を残して薄く仕上げられている。また、軸部先端には紐掛け用の溝または突起を作り出している。いわゆる「東海系鋏」の特徴を示すものである。二股鋏はすべて身幅の最大幅が刃部下位にあって下膨れ型をしている。軸部先端の紐掛け部分には、溝状のもの(17~20)と突起を作るもの(22~24)がある。狭鋏は肩部からやや開きながら先端に向けて直線的に作られている。刃部先端は丸みを帯びたものが多く、27や29のように平らな刃部をもつものもある。軸部先端の紐掛け部分には、溝状のもの(28・30・32)と突起を作るもの(25~27・29・31)がある。多股鋏はすべて4本歯のもので刃部は長い。曲柄鋏の未製品は50から65である。軸部の荒成りまで2点連結して製作しているもの(52~54)と比較的初期の段階で切り離し単体で製作するもの(59~63)がある。なお、61は他のものに比べて厚みが薄いため鋏の未製品とすべきか疑問が残る。樹種はすべてアカガシ亜属である。

鋤は一木のもので、身が二股になるもの(68)や、三股になるもの(66)、スリットのはいるもの(70)がある。握部はU字型の窓が開くもの(66・71・72)とT字型になるもの(67)、T字型を呈し軸部との接合部に平たい面を作り出すもの(73)とバラエティーがある。74は鋤または櫛状木製品の未製品である。用材は67がクスギ節、71がトネリコ属である以外はすべてアカガシ亜属である。75から85は掘棒と考えられ、割板材を使用したもの(75~80・82)と丸木を使用したもの(81・83~85)に分けられる。割り材使用にはさらに三角形の刃部をもち、刃部がスプーン状に内湾(75・78)または内湾し段を作るもの(76・77)と靴ペラ状に平坦面を作るもの(79・80・82)がみられる。82が両端に刃部を作るほかは片方のみに刃部を作り、グリップ端部は77以外単に丸く仕上げているのみである。樹種は80がクスギ節であるほかは、すべてアカガシ亜属である。丸木使用には両端をヘラ状に加工したもの(84)と片方のみ加工しもう一方は端部を丸く削ったもの(81・83・85)があり、樹種はイヌガヤ(81・84)、アカガシ亜属(83)、アオキ(85)と様々である。

86から108はすべて膝柄であり、このうち96・97・104は未製品である。緊縛部上部には紐掛け用の突起が作られているほか先端部にも同様の突起を有する例(89・108)が認められる。樹種としては94がスダジイ、102がヒサカキである以外はすべてサカキが使用され、膝柄作成にあたって樹種選定が徹底されていたことを窺わせる。

鎌柄は5点出土し(109~113)、このうち112は未製品である。112以外は柄端部にグリップエンド状の突起をもたない。また、109から111は柄端部が刃部方向に湾曲している。頭部は刃を押さえるために張り出している。鉄鎌挿入用の穴には鎌を固定するための板材が残っているものがある(109・110・113)。鉄鎌の装着角度を見ると、109と110・113の3点は柄に対して直角に近い角度で、直刃鎌などの装着が想定される。111は柄に対して内傾し、かなり鋭角に鎌が装着されていたことを示している。樹種はケヤキ(109)、クマノミズキ類(110)、カエデ属(111)、グミ属(112)、ヤマグワ(113)と一定しない。一木の木鎌が3点出土している(114~116)。外形上は鎌とよく似ており片刃である。この木鎌については3点のうち2点が刃部の形態から左鎌と考えられることや、柄との角度がかなり鋭角になることから鎌としての機能に疑問が示されている。しかし、上述の111も着柄角度が鋭角になることを考えるとやはり鎌の範疇で捉えた方が自然であろう。また、製作上多くの加工痕を残していることから祭祀具と考えるより実用品であつと考えられる。その使用方法としては稲の根株を切断するには不都合であり、収穫具としての機能以外の機能、たとえば周辺の草や水草などを集めるような機能なども視野に入れて検討すべきであろう。樹種はクスギ節(114)、アカガシ亜属(115)、アオキ(116)と一定していない。

竪杵は握部にソロバン玉状の突起を作るもの(117)、握部と搗き部との境が明瞭なもの(119・121~126)、握部と搗き部の境が不明瞭なもの(118・120・127・128)に分類できる。搗き部の先端は半球形を呈するものと平坦なものがあり、用材は丸木を加工したものと割材を使用したものがある。ヨコツチは搗き部と握部との境に明瞭な段が作られるもの(129~131)と段が明瞭でないもの(132~137)がある。「タテツチ」は釣鐘形の搗き部と端部にグリップエンド状の突起をもつ握部からなっており、樹種は138がサカキ製のほかはヒイラギ製である。

5. 村田服部遺跡(第50図) 千葉市中央区村田町に所在する。東京湾に流下する村田川河口付近の標高約2mの沖積低地上に所在する。調査では明確な遺構は検出されなかったが、古墳時代前期の包含層か

らツチ類1点が出土した。あまり胴の張らない釣鐘形を呈しており、軸部先端がグリップエンド状に突起を作っている。使用面が横方向であるのか縦方向であるのか判断しにくいもので、同様のものは浜野川遺跡(8)や五所四反田遺跡(35)でも出土している。樹種はカシ類である。

**6. 西根遺跡(第50図)** 印西市戸神字棚田に所在する。印旛沼に流入する戸神川が形成した標高約4mの沖積低地に位置する。戸神川の旧河道中から古墳時代前期の塚が検出され、それに伴って木製品が出土している。なお、報告書が刊行されていないため出土状況などの詳細は不明である。1は一木鋤で握部には半円形の窓が開けられ、身の肩部近くの両側面には三角形の刻みがみられる。また、刃部に近いところ2か所に円形の穴が開いている。2の堅杵は握部との境が明瞭なタイプで割材を使用している。3は丸木を利用した「タテツチ」で、握部と搗き部の間に大きな段が作られている。

**7. 芝野遺跡(第50図・写真図版4下段)** 木更津市下望陀字芝野に所在する。小櫃川下流左岸に形成された標高約12mの自然堤防上に位置する。古墳時代前期の溝S D45から木製品が出土している。木製品が出土したのは東西に流れる溝の南側に張り出した溜め井状の施設からで、この施設は周囲を板と杭で補強しており、中から曲柄鋤未製品が出土した。このことから、いわゆる木器の水付け施設と考えられる。なお、この遺構からはS字状口縁台付甕が出土している。1は荒削りの段階で単体に切り離されたもので、2は軸部の外形が整えられた状態でも2個体連結して水付けしていたことがわかる。

**8. 五所四反田遺跡(第51～53図)** 市原市五所字四反田に所在する。東京湾に面した標高約3mの海岸砂丘帯上に位置している。報告書は未刊のため詳しい出土状況は不明である。古墳時代前期の井戸状遺構52号跡から直柄平鋤が1点出土している(1)。この鋤は着柄隆起の先端部に稜線を作り出し、肩部には2か所で紐通しの穴をもち、上端部に菱形の突起を作っている。国府関遺跡出土の直柄平鋤(1)と極めて似た形態をとっているが、若干本遺跡のものは小振りである。樹種は身部がアカガシ亜属、残存していた直柄がニシキギである。

五所四反田遺跡で最も多く木製品が出土したのは、古墳時代中期から後期初頭の大溝(2号跡)である。この遺構からは農具のほか容器や建築材、祭祀具などの木製品が多数出土した。2から10と12から16は「横鋤」である。国府関遺跡の項でも述べたような観点から「横鋤」として扱うこととする。五所四反田遺跡からはこの「横鋤」が多数出土し、際だった特徴となっている。柄穴が方形のもの(2～8・15)と円形のもの(9・10・12～14・16)に大きく分類される。また、側面の形態では右側面が二股にわかれるもの(15)や左右の一方が大きく開くものに対してもう一方が台形に加工し、長さ形態共に左右非対称になっているもの(2・3・5・7・8・14・16)がある。27はこの鋤の未製品で、長方形の材を削り込んで着柄隆起と内湾する刃部を作り出している。この段階では側面の加工は行われておらず、最終的に柄穴と刃部の挟り、側面の調整が行われたと考えられる。樹種はすべてアカガシ亜属であり用材の選択が徹底されている。11は横鋤である。17のエブリは着柄隆起をもたず刃部は鋸歯状を呈している。25と26は着柄隆起の先端に稜をもつタイプの直柄平鋤未製品である。形態的には古墳時代前期に属する国府関遺跡や五所四反田遺跡52号跡出土のものと共通しており、この形式の鋤が古墳時代中期から後期初頭にかけても存続していたことを示している。25を見ると着柄隆起や隆起先端の稜までも大まかに製作している段階まで2

点連結しており、初期の段階で単体に切り離して加工を行う国府関遺跡の状況とは異なっている。

曲柄鍬には二股のもの（18～20）や5本歯のもの（21）、スリットの入ったもの（23）がある。二股のタイプには肩部がなで肩で斜め方向の削りがある形態（18）と肩部と軸部との境が直角に近く段をなしている形態（19・20）があり、いずれも軸部の先端には紐掛け用の突起または溝が作られている。21の多股鍬には肩部中央に機能的とは思われない三角形の浮き彫りがみられる。22は身部の平坦面が長いことため狭鍬の可能性もある。23はスリット入りの鍬である。曲柄鍬にスリットを入れるのは長野県から北陸、北関東に特徴的なものであり、南関東においての出土例は他になく、この形式の南限を示すものと言えよう。なお、24は軸部の断面形が円形であり、軸の長さも長いことから菅生遺跡で出土しているフォーク状の木製品（16・19・20）との関連も考えられる。樹種はすべてアカガシ亜属である。

農具柄としては直柄（28）、膝柄（29・31）、反柄（30）が出土しており、反柄はムクロジ製であるが膝柄は2点ともサカキが使用され、国府関遺跡の状況と似ている。30の反柄には柄と緊縛部との境に紐通し用の穴が開けられている。

鋤は1点出土しており一木の二股鋤である（32）。握部には三角形の穴が開けられている。アカガシ亜属製である。33は輪カンジキ型田下駄の足板または横木であろうか。垂字形をした板材である。ケンボナシ製である。

堅杵（34）は握部と搗き部との境が明瞭ではなく、握部にソロバン玉状の突起は認められない。割材を使用したアカガシ亜属製である。ツチ類はヨコツチ（35～37）があるが、35は使用方向が縦であるか横であるか判然としない。アカガシ亜属製である。36と37は搗き部と握部に明瞭な段が作り出されたもので、36がヒノキ製、37がアカガシ亜属製である。「タテツチ」38はやや肩の張った釣鐘形を呈し、握部の先端にはグリップエンド状の突起を作っている。ヒイラギの丸木を使用したものである。

39に示したものは長刀状の形態をもったもので、明らかに農作業に使われたものと断言できないが、長く伸びた雑草や残桿を薙ぎ倒すには有効なように思われる。クヌギ属製である。40も農具と言えるかどうか不明であるが、ヘラ状を呈しており掘り棒の一種とも考えられる。ムクロジ製である。

**9. 菅生遺跡（第53～55図）** 木更津市菅生字長町に所在する。小櫃川中流左岸の自然堤防上および沖積低地に立地する。2の小型の直柄平鍬が弥生時代の遺物包含層出土とされる以外は、大方が古墳時代後期の大溝からの出土である。大溝からは農具類のほか容器や紡織具、建築材などが出土している。

1は着柄隆起をもつ直柄平鍬で身の長さが比較的長い。3は「横鍬」としたもので、着柄隆起の下端部に挟りがみられ、側面は左右非対称に作られている。このタイプの鍬が古墳時代を通じて存在していたことを示す資料といえる。21から23は直柄平鍬の未製品である。いずれも着柄隆起を伴わないタイプのもので、22と23にみるように大まかな外形ができた段階で単体に切り離していることがわかる。また、22からはかなり早い段階で柄穴を開けることがわかり、それまでの直柄平鍬の製作工程では柄穴を開けるのが最終段階であることと対照的である。

曲柄鍬はいわゆる「ナスビ形鍬」が主流を占めている。4と5はナスビのヘタ部分が明瞭に作られているのに対して、6と9は軸部に突起として残っている。軸端部には紐掛け用の突起または溝が作られており、軸部先端の裏面が一部削られ段になっているもの（4・5・9）がある。また、4と6は刃部先端の幅が一段狭くなっており、U字形鍬鋤先が装着されていたものと考えられる。11は軸部にヒレや突起など

をもたない鋤で、東海系曲柄鋤に類似する。16と18から20はフォーク状の木製品で、18を除き軸部の断面形は円形である。鋤のような握部が付く可能性も考えられる。刃部は二股（18）、3本歯（16・19）、5本歯（20）のものがある。

反柄が1点出土している（29）。完形のもので緊縛部の先端には紐掛け用の突起が作られ、柄の端部にはグリップエンド状のコブが付いている。

鋤（24～26）はすべて握部に半円形の透かしが入るもので、26は下端部に段が作られていることから組合せ鋤であろうか。これに伴う身部は出土していない。27と28は一木の鋤になるものであろうか。

田下駄が1点出土している（30）。縦型のもので鼻緒穴が3か所開いている。先端の鼻緒穴がよっており、左右を履き分けていたものである。31は杵型大足の杵木であろう。鎌柄は2点出土している（32・33）。柄部の断面形は共に円形で柄部上端と下端に突起が作られている。

竪杵には握部にソロバン玉状の突起をもつもの（34・35）と握部との境が不明瞭なもの（36～39）があり、搗き部の状態では平らなもの半球状を呈しているものに分けられる。ツチ類ではヨコツチと「タテツチ」が出土しており、ヨコツチでは握部と搗き部の境に明瞭な段差をもつもの（40～42）と不明瞭なもの（43）がある。「タテツチ」の44は搗き部との境が緩やかに作られている。

**10. 郡遺跡**（第55～56図） 君津市郡字下赤磯に所在する。江川左岸に面した標高約17mの低位段丘上に立地している。木製品は複雑に入り組んだ溝から出土したもので、7から9と11の4点が古墳時代前期の可能性があるとされるが共伴する遺物はない。1・3・4・6・10・12・14・15・16の9点はS D451とS D469から出土したものであるが、両遺構は本来同一遺構であり共に古墳時代後期の所産である。これ以外のも木製品も古墳時代後期のものと考えられる。

古墳時代前期とされる7は横鋤様のものであるが、着柄角度から考えて泥除けの可能性もある。8は直柄平鋤の未製品で着柄隆起部分を高く残した段階で単体に切り離している。9は曲柄鋤の未製品と思われる縦方向に割れている。11は櫛状の木製品であるが掘り棒的な機能も考えられる。国府関遺跡からも同様なものが出土している。すべてアカガシ亜属製である。

古墳時代後期のものは、12点図示した。曲柄鋤はナスビ形のもので認められる（4・3）が、ナスビのヘタに相当する部分はあまり発達していない。また、紐掛け用の突起の裏面は削られて段が付けられている。1と2は荒い加工痕が残るため未製品の可能性もある。5と6はヘラ状の掘り棒の可能性もある。4がムクノキ、6がタブノキであるほかはアカガシ亜属製である。10は反柄であるが緊縛部分が約25cmあり、かなり長い軸部をもつ曲柄鋤の装着が想像される。エゴノキ属製である。12は馬鋤である。短い歯が1本残っている。県内では最古の例であり、ほかに館山市江田条里遺跡で奈良平安時代のものが出土しているのみである。クリ製である。13は輪カンジキ型田下駄の足板で、両端に輪を止めるための穴が開けられている。鼻緒穴は3か所でツゲ製である。14は木部挿入方式の穂摘具木台部である（詳細は第5章第1節参照）。縦杵は2点出土している（15・16）がともに握部と搗き部との境に段を作るもので、ソロバン玉状の突起はみられない。アカガシ亜属製である。

**11. 市原条里制遺跡**（第57～60図・写真図版5右下） 市原市市原字一ノ坪に所在する。東京湾に面した標高約5mの沖積低地上に立地する。1と4が溝からの出土であるほかは水田跡からの出土である。水

田跡および溝は条里型水田に伴うもので9世紀後半から10世紀代の年代が与えられる。水田跡では畦畔の補強材として多数の杭とともに木製品が埋められていた。そのため出土層位的には水田耕作土と自然堆積した泥炭層との境部分に集中するが、下位の層が自然堆積層であることなどから前代の木製品が混入したとは考えにくい。

1は風呂鍬で長方形の柄穴をもつ。刃部にはU字形鍬鋤先が装着されていたと考えるが、使用によるスレなどは認められなかった。2はエブリで着柄隆起をもち柄穴は方形である。刃部は鋸歯状を呈する。3は東海系曲柄鍬の系統を引く二股鍬である。軸端部は摩耗しており紐掛け用の突起があったかどうか不明である。軸部の裏面には縦方向に溝が彫られている。1から3まではアカガシ亜属製である。4は鎌の柄で握部の断面形は円形である。端部はグリップエンド状を呈す。イヌガヤ製である。5は釘止め方式の穂摘具で、鉄製の刃部まで完全な形で出土した（詳細は第5章第1節参照）。

6から35まですべて輪カンジキ型田下駄の足板ならびに横木である。市原条里制遺跡出土の木製農具の大半がこの形式の田下駄で、本遺跡の特徴となっている。輪カンジキ型田下駄は大きく板材を加工したものの（6～17）と曲物底板を転用したもの（18～32）とに分類することが出来る。割材使用のものは長方形（6・7）、先端を丸くした長楕円形（8・9・12）、両端を直線的に削ってあるもの（10・11・13～16）、亜字形（17）が認められ、曲物転用のものは長方形（18・19）、先端を丸くした長楕円形（22・23・24）、両端を直線的に削ってあるもの（25・26・29・30）、あまり加工していないもの（20・21・27・29・31・32）が認められる。鼻緒穴は6と22が4穴であるほかは3穴である。輪を止める穴は1穴、2穴、4穴がある。横木は亜字形をしている（33～35）。若干ヒノキが見られるほかは圧倒的にスギ製である。36から44は杵型大足の部材である。

**12. 三直中郷遺跡**（第61～64図） 君津市三直字沖田に所在する。小糸川左岸に広がる標高約18mの沖積低地上に位置する。報告書は未刊行である。弥生時代中期と古墳時代の溝のほか奈良平安時代の木製品集中箇所が検出された。木製品集中箇所は帯状に連なって検出されたもので、本来的には畦畔の補強材として木製品が埋め込まれていたものである。そのため木製品列を追うと畦畔を復元できる可能性がある。木製品列と下部の弥生期、古墳期の溝とは明らかに方向性を異にしている。なお、図示した木製品はすべて同一遺構からの出土でレベル差もあまり認められないことから、同時期のものと考えられる。

1は明瞭な着柄隆起をもたない直柄平鍬である。方形と思われる柄穴があいている。曲柄鍬は2点出土している。東海系曲柄鍬の特徴をもち、二股のもの（2）と4本歯（3）のものがある。ともに軸端部が欠損しているが、軸部と身部との境は明瞭で、肩部は斜めに削ぎ落としている。2の裏面は刃部にむかって段を作りながら薄く仕上げている。一木鋤が1点出土している（4）。握部は三角形を呈し上端部は横方向に突起を作る。

田下駄類は多数出土している。横型田下駄（5～7）、曲物転用輪カンジキ型田下駄（8・9）、輪カンジキ型田下駄（10～18）、輪カンジキ型田下駄横木（19～21）、高下駄型田下駄（22～26）と種類もまちまちである。横型田下駄の鼻緒穴は4つであり、長楕円形と不正円形のものがある。輪カンジキ型田下駄は亜字形と両端を直線的に削ったものに分けられる。鼻緒穴は3か所開いている。高下駄型田下駄では台形を呈するものとカマボコ形を呈するものがある。27から30は杵型大足とその部材である。ほぼ完形になるものが2点出土した。

31は「タテツチ」で、搗き部から軸部にかけて緩やかに細くなっている。32はT字形をした木製品で鋤の握部である可能性も考えられる。

**13. 古市場（2）遺跡（第64図）** 市原市古市場字上鎧に所在する。東京湾に面した標高約4mの沖積低地上に立地する。本遺跡は本来市原条里制遺跡の範囲に含まれるものである。帯状に木製品が並んでおり、畦畔の補強材であったと思われる。

1から3は輪カンジキ型田下駄の足板と横木で、4は杵型大足の前木である。5は釘止め方式の穂摘具木台部で、釘を打った穴がみられる（詳細は第5章第1節参照）。

**14. 不入斗遺跡（第64図）** 市川市国分4丁目に所在する。平川流域の標高約7mの沖積地に立地している。河川改修に伴って出土したもので明確な時期は不明であるが、共伴する瓦や土器類から奈良平安時代のものと考えられる。

1の曲柄鍬は軸部に小突起が付き、ナスビ形の退化したものであろうか。先端には紐掛け用の突起が作られ、突起裏面は一段薄くなっている。身部の肩部は斜め方向に直線的に削られ、表面中央には長方形の窪みが施されている。2から4は輪カンジキ型田下駄の横木である。2と3は曲物転用材である。なお、木製品と一緒にU字形鍬鋤先が1点出土している。

## 2 千葉県における木製農具の変遷

本項ではこれまで集成した資料をもとに千葉県における木製農具の変遷を概略的に述べたい。記述に当たっては木製農具を耕起具・補助具・収穫具・調整具に分類して行うこととした。なお、鍬や鋤については土木具、鎌については穀類の収穫以外に除草具としての性格が考えられるが、今回は耕起具・収穫具として扱うこととしたい<sup>2)</sup>。

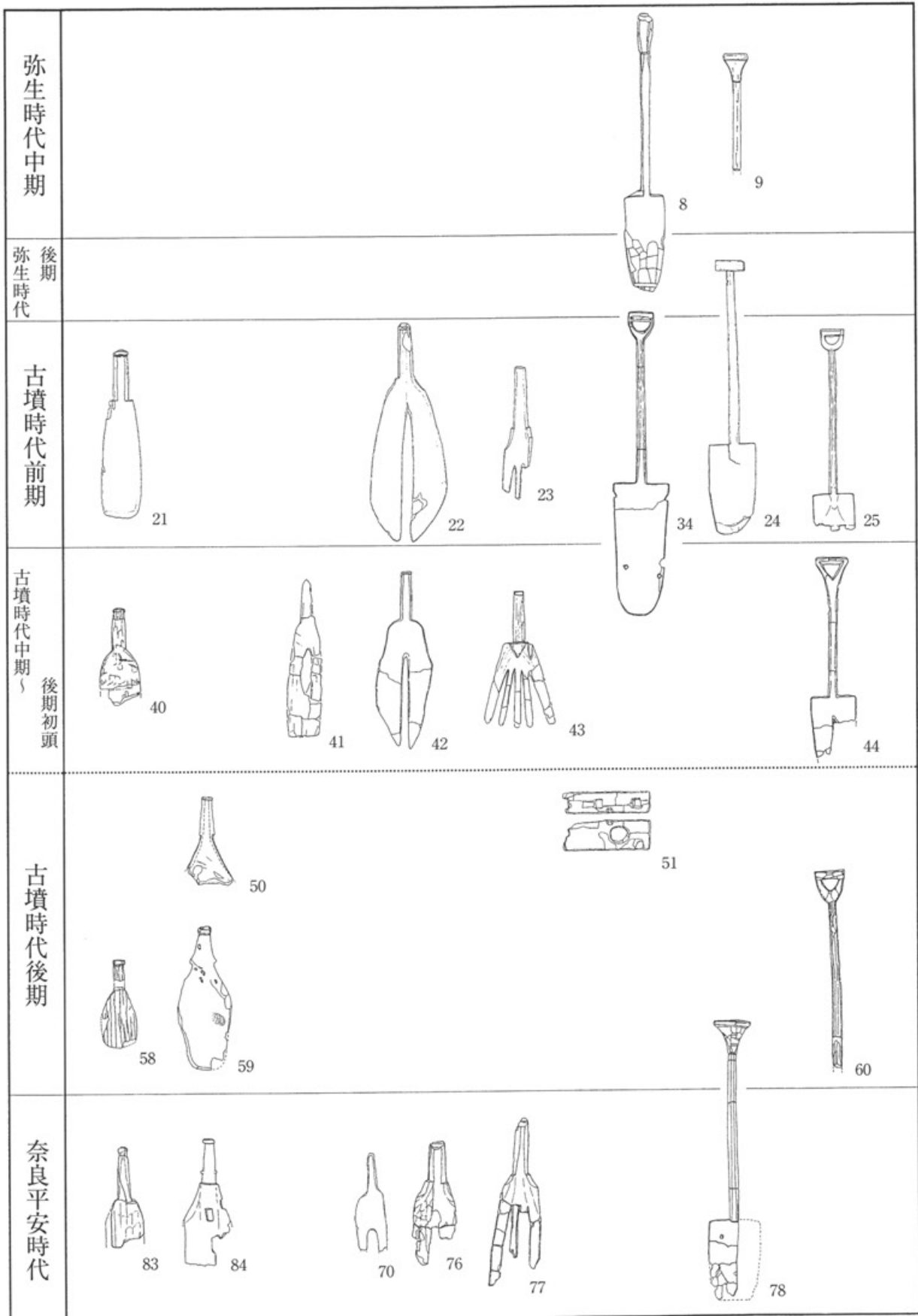
**1. 耕起具（第28～29図）** 県内で最も古い農具資料は弥生時代中期における常代遺跡の資料である。同遺跡の耕起具では、着柄隆起をもつ直柄鍬、着柄隆起をもたない直柄鍬、多股鍬、エブリが確認されている。直柄鍬のバリエーションは豊富で、着柄隆起付きの鍬では柄穴の両側にヒレ状の突起をもつものもたないもの、着柄隆起のない鍬では縦長のものと長さの短いもの、多股鍬では身部が三角形のものとかマボコ形のものがある。このような中で特にヒレ付きの直柄鍬は弥生時代中期を特徴づけるもので、浜野川遺跡や長須賀条里制遺跡などからも製品や未製品が出土している。これまで本県では弥生時代中期の農具出土遺跡を3遺跡確認しているが、常代遺跡から膝柄の可能性のある未製品が出土しているものの工具柄の可能性も残り、いずれの遺跡からも明確な曲柄鍬または膝柄の出土はない。市原条里制遺跡県立スタジアム調査において該期の曲柄多股鍬が出土したとされるが、報告書が未刊行のため詳細な出土状況や共伴遺物などは不明である。しかし、神奈川県逗子市池子遺跡からは同時期の曲柄鍬が出土しており、今後欠落を補う資料が出土する可能性は高いものと考えられる。鋤は一木鋤で握部が三角形で手を掛ける部分に突起を作るものがみられる。

弥生時代後期の資料はまったく出土していない。古墳時代初頭の国府関遺跡からは、直柄鍬として着柄隆起をもつものや多股鍬、「横鍬」、エブリが、曲柄鍬として狭鍬や二股鍬、多股鍬が出土しているが、曲

<p>弥生時代中期</p>	
<p>後期 弥生時代</p>	
<p>古墳時代前期</p>	
<p>古墳時代中期 後期初頭</p>	
<p>古墳時代後期</p>	
<p>奈良平安時代</p>	

1～7 常代 16～20 国府関 36～39 五所四反田 55～57 菅生 68・69 市原条里 75 三直中郷  
第28図 木製農具変遷図(1)





8・9常代 21~25国府関 34西根 40~44五所四反田 50・51郡  
58~60菅生 83浜野川 84不入斗 70市原条里 76~78三直中郷

第29図 木製農具変遷図(2)

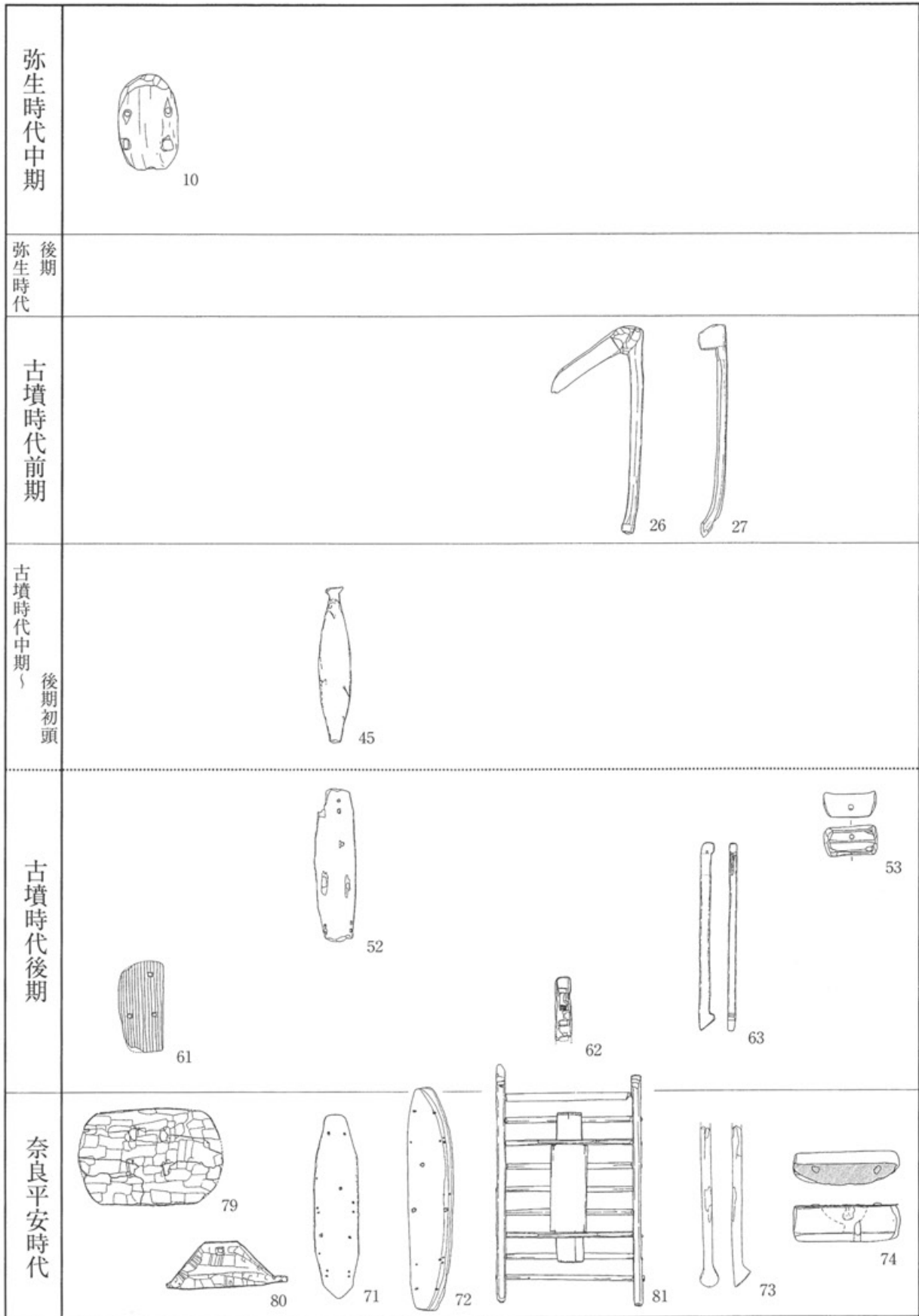
柄鋤のほうが卓越している。直柄鋤では着柄隆起の先端に刃部と平行する稜線が作られるタイプのものが多く出土している。このタイプは同時期の五所四反田遺跡52号跡から出土しているばかりでなく、仙台中在家南遺跡においても報告例が認められ広範な分布を示している<sup>3)</sup>。直柄多股鋤は1点出土しているがこれ以後の時期では認められない。また、このころから刃部に抉りをもつ「横鋤」がみられるようになる。曲柄鋤ではいわゆる「東海系鋤」が特徴的に出土し、芝野遺跡や長須賀条里制遺跡からも類例がみられる。鋤は一木作りで先端が平らになるものと股を作るものがある。

古墳時代中期から後期初頭では五所四反田遺跡の資料から、直柄鋤では着柄隆起のある鋤や横鋤、刃部に抉りをもつ「横鋤」、エブリが、曲柄鋤では狭鋤、スリット入りの狭鋤、二股鋤、多股鋤が確認されている。これらの構成要素は、ほぼ国府関段階の組成を引き継いだ内容で、それぞれの鋤の形態も国府関遺跡のものと同通する点が多い。若干の違いとしては直柄多股鋤が欠落することや新たにスリット入りの狭鋤が出現することである。スリット入りの狭鋤は長野県北部で創出されたと考えられるもので、このタイプのものとしては最南端の資料である<sup>4)</sup>。五所四反田遺跡の最も特徴的な資料は、刃部に抉りをもつ「横鋤」であり、全体の出土点数に対する割合は極めて高い。この鋤は身部側面の形態が二股になっているものや刃部を作り出しているものがあることから「諸手鋤」の範疇で捉える考え方もある<sup>5)</sup>。しかしながら、着柄隆起の形態や着柄角度からみると両端の刃部を常時使用するには構造上不都合であったと考えられる。具体的な使用方法は不明であるが、刃部が大きく内湾していることや刃部の角度が鈍角をしているものが多いことから、主たる使用は強い打撃を伴うものではなく、土や水をかき集めるような使用方法が想定されるのではないだろうか。この際刃部中央に作られた抉りは、必要以上にたまった土や水を排出するのに有効であったとも考えられる。また、両端に作られた二次的な刃部は、必要に応じて植物の根や茎を切断するのに使用されたのではないか。仮に強湿田や沼地のようなところでの田面の整形や水草の除去・収穫などを想定しておきたい<sup>6)</sup>。いずれにしても想像の域を出るものではなく、今後の資料数の増加とその分析、民具との比較、実験的な証明などを通じた説明が待たれる。鋤は一木の二股鋤が出土している。

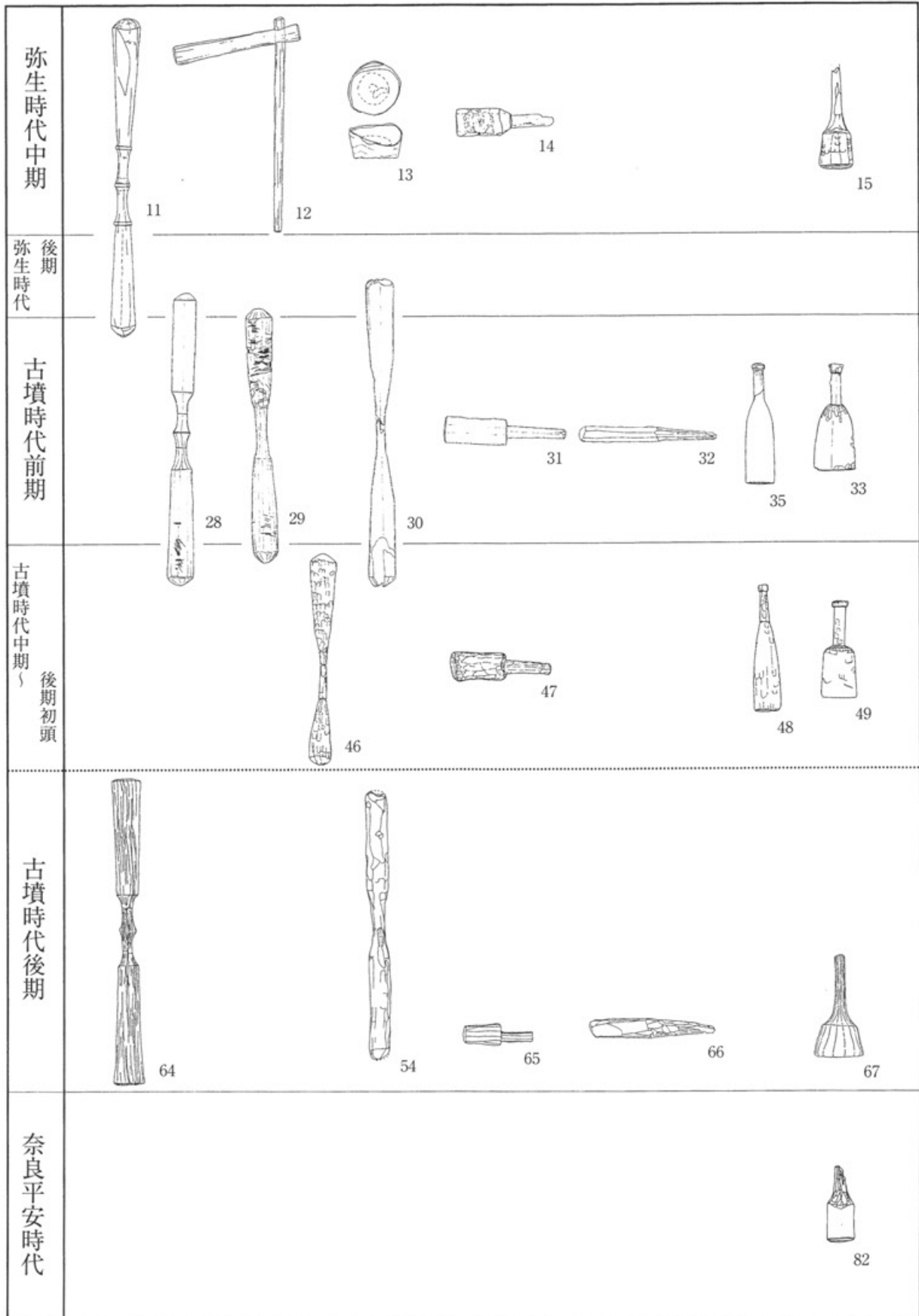
古墳時代後期になると直柄鋤の出土点数は減少する。菅生遺跡から着柄隆起のある鋤や抉りのある「横鋤」のほか着柄隆起をもたない鋤の未製品が出土している。上述の抉りのある「横鋤」はこの時期まで農具組成の一つとして定着している。曲柄鋤ではこれまでの「東海系」に加えて新たに「ナスビ形」の曲柄鋤が出現する。郡遺跡と菅生遺跡から出土しており、菅生遺跡例では刃部にU字形鋤鋤先を装着するための段が作り出されている。また、郡遺跡から馬鋤の一部が出土しており、畜力による田面の耕起が行われていたことを示している。このほか菅生遺跡から組み合わせ鋤のものと思われる柄が出土している。

奈良平安時代には市原条里制遺跡例のようなU字形鋤鋤先が装着される風呂鋤が出現するほか、三直中郷遺跡のように着柄隆起をもたない鋤も依然として使用されている。曲柄鋤については、浜野川遺跡、不入斗遺跡、市原条里制遺跡、三直中郷遺跡の4遺跡5点の出土が知られているほか、南借当川遺跡で曲柄鋤状の木製品（写真のみ掲載）が浜野川遺跡（神門貝塚）で膝柄が出土している。これらはいずれも古代の水田耕作土中または包含層からの出土である。おおむね該期のものと考えられるが、三直中郷遺跡例はやや古相を示しているため、正式報告書の刊行を待って評価すべきものと考えたい<sup>7)</sup>。

2. 補助具・収穫具・調整具（第30～31図） 弥生時代中期では田下駄、竪杵、横杵、臼、ツチ類が出土している。このうち竪杵は握部にソロバン玉状の突起が付くものが卓越する。常代遺跡からは横杵が未



10・63常代 26・27国府関 45五所四反田 52・53郡 61・62菅生 79~81三直中郷 71~74市原条里  
第30図 木製農具変遷図(3)



11~15常代 28~33国府関 35村田服部 46~49五所四反田 54郡 64~67菅生 82三直中郷  
第31図 木製農具変遷図(4)

製品も含め4点出土しており他に例を見ない。ツチ類には打面が側面にあるヨコツチと打面が木口面にあるものがある。後者については便宜的に「タテツチ」として記述することとする。なお、木製農具においてもこの時期の収穫具は欠落している。

古墳時代前期になると収穫具としての鎌柄が登場するほか、一木で刃部まで作られた木鎌が出土している。なお、木鎌については国府関遺跡の項に若干述べておいた。竪杵には握部にソロバン玉状の突起をもつもの、握部と搦き部との境に段差をもつものともたないものの3つのタイプがみられる。ツチ類にはヨコツチと「タテツチ」があり、ヨコツチは握部と搦き部との境に段のあるものと段が無く粗製のものがある。また、使用面が縦方向なのか横方向なのか判然としないものがある。

古墳時代中期から後期初頭になると五所四反田遺跡から輪カンジキ型田下駄が出土するようになる。調整具については前代と内容的に大きな相違はみられず、細部のタイプに欠落するものがあるのみである。

古墳時代後期には左右履き分けの田下駄や枠型大足が出現するほか、木部挿入方式の穂摘具台木が出土している。

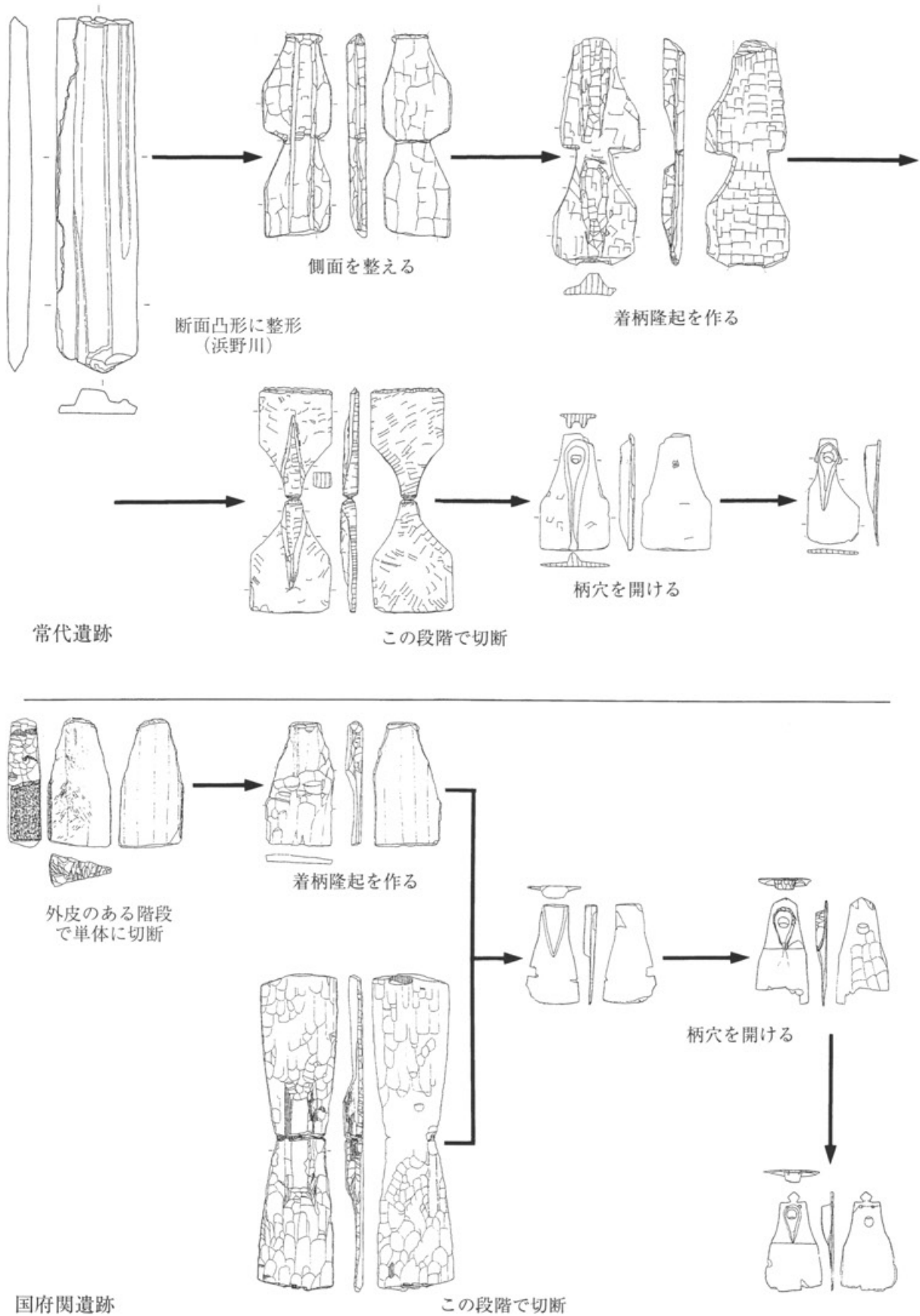
奈良平安時代には輪カンジキ型田下駄を中心として各種の田下駄が認められるほか、曲物転用の田下駄が盛行する。鎌柄は古墳時代まで断面形は長方形であったが、新たに円形のものが見られるようになる。また、木部挿入式に替わって釘止め方式の穂摘具が出現する。

以上のように千葉県の木製農具について大まかな変遷を述べてきた。これらを時代ごとにまとめると、水田耕作が本格的に導入された弥生時代中期において、すでに直柄鍬を中心とした耕起具と他の道具とのセット関係が確立しており、水稻農耕技術に伴うシステム全般が整った状態で当地域に持ち込まれたことを示している。また、耕起具の中心は直柄鍬であるが、ある種特徴的なスタイルのものもみられるが、全体としては多様な形態の鍬が使用されていたと考えられる。古墳時代前期初頭には東海系の曲柄鍬が積極的に導入されるほか、直柄鍬も含め定形化した農具が作られるようになる。この傾向は古墳時代後期初頭まで続くと言えよう。古墳時代後期は前期以来の農具を継承しつつも新たにナスビ形曲柄鍬が出現するほか、鉄製刃先を意識した農具や畜力を前提とした馬鍬の出現など、農耕技術の大きな変化を表している。奈良平安時代は基本的に古墳時代後期に整った農具組成を継承したのものと見えよう。ただし、資料数や出土状況から奈良平安時代として8世紀から10世紀段階をひとまとめにしたため、この時代内での変化のあり方を明らかにすることは出来なかった。また、三直中郷遺跡の評価など、今後の調査結果如何によっては変更が必要な点も多々ある。

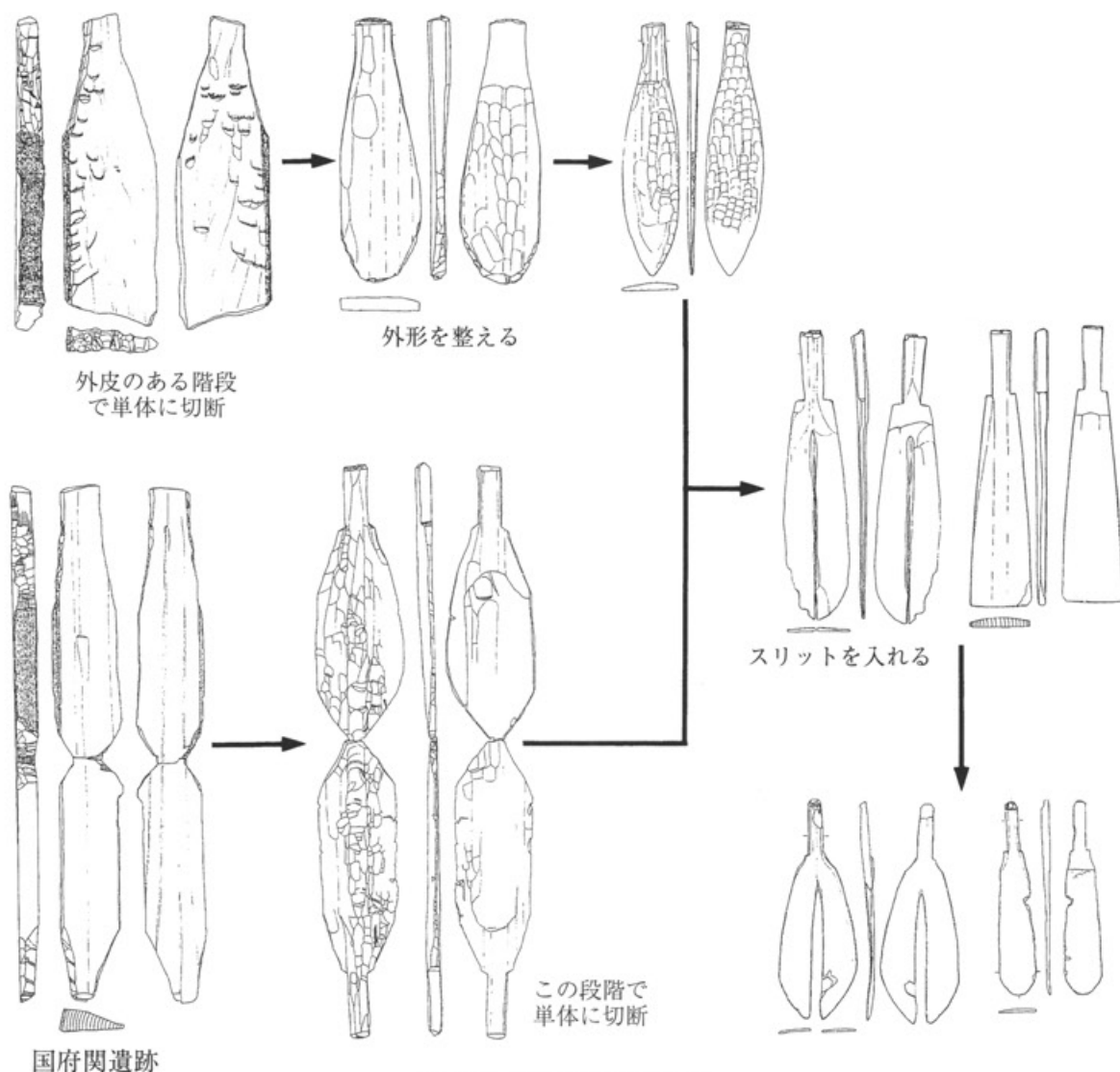
### 3 鍬の製作工程と木製農具製作における樹種の選定について

ここでは、鍬の製作工程を復元するとともに農具の種類と樹種との関係について、常代遺跡と国府関遺跡の成果を中心に若干述べる（第32・33図、第2表）。

常代遺跡では着柄隆起を伴う直柄鍬が14点、同未製品が8点出土している。これらによると、先ず丸太をミカン割りにしたものを板状にし、着柄隆起部分を帯状に残しながら周囲を成形する。この段階では2点から3点が縦方向に連結された状態のまま、同時に作業が進められた。外形がほぼ仕上がった時点で単体に分割され、最終的に柄穴が開けられ完成する。常代遺跡における鍬の作業工程で特徴的なのが、着柄隆起と外形がほぼ整うまで数点が連結したままの状態であり、外形調整の最終段階になって単体に分割し



第32図 直柄鍬の製作工程



第33図 曲柄鍬の製作工程

て柄穴を開けることである。このような製作工程は同時期の浜野川遺跡においても確認でき、弥生時代中期における着柄隆起を伴う直柄鍬の一般的な製作工程であったことが窺われる。

国府関遺跡では着柄隆起を伴う直柄鍬が14点、同未製品が8点出土しているが、常代遺跡のような工程を取るものも若干認められるものの、多くが初期の荒割り段階で単体に切り離しており、着柄隆起を含めた細部の加工は単体で行われている。このように古墳時代前期には、ほぼ最終段階で単体に分割する工程と初期の段階で分割する二系統の製作工程が存在していたようである。最終分割工程は古墳時代中期から後期初頭の五所四反田遺跡でも確認され、初期分割工程は古墳時代前期の郡遺跡、後期の菅生遺跡でもみられることから、両工程は長い間併存していたといえる。なお、今回の検討では両工程の違いと製品の形態差とは必ずしも一致はせず、直柄鍬の形態の違いと製作工程の違いを明らかにすることは出来なかった<sup>8)</sup>。むしろ両者の関係に明確な違いはなかったようである。また、曲柄鍬についても外形がほぼ整うまで2点程度連結したままのものと初期段階で単体に切り離しているものがみられ、直柄鍬の製作工程のあり方と共通している。

このように鍬の製作工程についてみてきたが、弥生時代中期においては一系統の製作工程であったもの

が、古墳時代前期には複数の工程が現れたと言える。このことは農具組成の変化と共に古墳時代初頭が一つの画期であったことを物語っているのではないだろうか。

つぎに木製農具製作における樹種選定がどのようなものであったのか若干述べることにしたい。千葉県の木製品の樹種同定は、鈴木三男、能城修一両氏が精力的におこない、農具製作における樹種選択の実体がかなり明らかになりつつあるといえる。第2表は両氏が分析をおこなった弥生時代中期の常代遺跡と古墳時代前期初頭の国府関遺跡の結果を基に、報告書に図示されている鋤鋤類、杵ツチ類の樹種を表したものである。なお、直柄鋤aとしたものは、着柄隆起を伴うもの。直柄鋤bとしたものは、着柄隆起を伴わないものを指している。また、未製品については、明らかに完成品の器種が判るものに限定してカウントした。

それによると、直柄鋤、直柄多股鋤、「横鋤」、曲柄鋤など鋤類は、未製品も含めて弥生時代中期から古墳時代前期初頭まで一貫してアカガシ亜属を限定的に選択していることがわかる。この傾向は古墳時代中期から後期初頭の五所四反田遺跡や古墳時代後期の郡遺跡、奈良平安時代の市原条里制遺跡でも変わらず、当地域においては終始一貫して鋤にはアカガシ亜属が選択されつづける傾向を示している。鋤に装着すべき直柄と膝柄についてみると、直柄の樹種は常代遺跡で6点中すべてが別の樹種であり、国府関遺跡においても5点で4種類の樹種が使用されている。また、両遺跡で共通する樹種もアカガシ亜属とヤマグワのみであり、多種多様な樹種が選択されている。これに対して膝柄は国府関遺跡で28点図示されているが、28点中26点93%がサカキで圧倒的に選択率が高い。この傾向は五所四反田遺跡でも継承されるが、浜野川遺跡（神門遺跡）出土の奈良平安時代の膝柄はイヌガヤ製で、膝柄にイヌガヤが限定的に使用される伝統は奈良平安時代まで引き継がれなかった可能性もある。また、五所四反田遺跡の反柄はムクロジ製である。このように見てくると、鋤類はアカガシ亜属が、膝柄はサカキがかなり限定的に選択され、直柄は樹種の選定が厳格ではなかったことが明らかである。鋤はアカガシ亜属が卓越するが、クヌギ節やトネリコ属も若干含まれる。

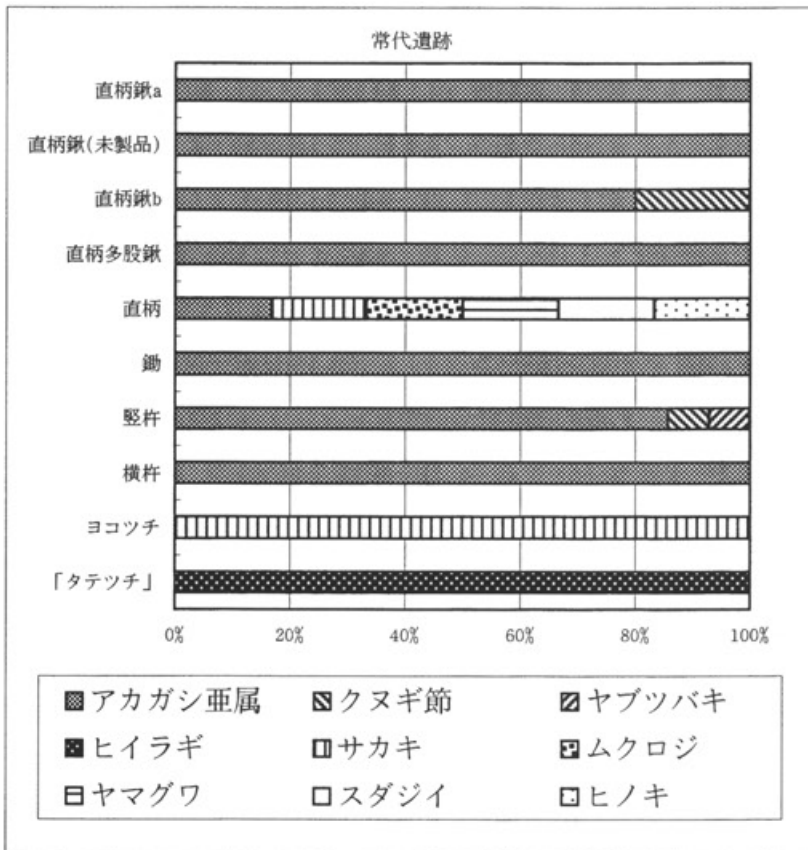
杵ツチ類では堅杵は常代遺跡、国府関遺跡ともに80%以上がアカガシ亜属で若干のヤブツバキとクヌギ節がみられるという比率である。五所四反田遺跡や郡遺跡出土の堅杵もアカガシ亜属であり、同種が主に選択されていたと言える。側面に打面をもつヨコツチは、サカキ、エノキ属、アカガシ亜属など5種類が認められ、特定の樹種への偏りはみられない。また、五所四反田遺跡で出土したヨコツチ3点も、2点がアカガシ亜属、1点がヒノキという内容である。これに対して搗き部が釣鐘形を呈し木口面に打面のある「タテツチ」は、常代遺跡で2点全てが、国府関遺跡で4点中3点がヒイラギ製で樹種選択に偏りがみられる。この傾向は五所四反田遺跡や三直中郷遺跡でも認められ、「タテツチ」とヒイラギは密接な関係を示している。

以上のように、木製農具製作に当たってはかなり樹種を限定して製作されるものと、その選定が緩やかなものに分類されるといえる。用材の選定は遺跡周辺の森林相を反映していることは言うに及ばないが、製作される農具の機能的側面が大きな要因となっていることも当然のことである。逆に樹木がもつ弾力性や硬さなどの特性から農具の機能面を復元することも考慮する必要があるだろう。



第2表 農具別樹種一覧表

鋸の製作工程と木製農具製作における樹種の選定について



常代遺跡

木製品	樹種	点数	割合	
直柄鋸a	アカガシ亜属	14	100%	
	合計	14	-	
〃(未製品)	アカガシ亜属	8	100%	
	合計	8	-	
直柄鋸b	アカガシ亜属	4	80%	
	クヌギ節	1	20%	
	合計	5	-	
直柄多股鋸	アカガシ亜属	8	100%	
	合計	8	-	
直柄	アカガシ亜属	1	17%	
	サカキ	1	17%	
	スダジイ	1	17%	
	ヤマダグワ	1	17%	
	ムクロジ	1	17%	
	ヒノキ	1	17%	
	合計	6	-	
	鋤	アカガシ亜属	2	100%
		合計	2	-
縦杵	アカガシ亜属	12	86%	
	クヌギ節	1	7%	
	ヤブツバキ	1	7%	
	合計	14	-	
横杵	アカガシ亜属	4	100%	
	合計	4	-	
ヨコツチ	サカキ	3	100%	
	合計	3	-	
「タテツチ」	ヒイラギ	2	100%	
	合計	2	-	



国府関遺跡

木製品	樹種	点数	割合
直柄鋸a	アカガシ亜属	11	100%
	小計	11	-
〃(未製品)	アカガシ亜属	14	100%
	小計	14	-
直柄多股鋸	アカガシ亜属	1	100%
	小計	1	-
「横鋸」	アカガシ亜属	2	100%
	小計	2	-
直柄	アカガシ亜属	1	20%
	ヤマダグワ	1	20%
	トネリコ属	1	20%
	ムラサキシキブ	2	40%
	小計	5	-
曲柄鋸	アカガシ亜属	48	96%
	クヌギ節	2	4%
	小計	50	-
〃(未製品)	アカガシ亜属	19	100%
	小計	19	-
膝柄	サカキ	26	93%
	ヒサカキ	1	4%
	スダジイ	1	4%
	小計	28	-
鋤	アカガシ亜属	8	80%
	クヌギ節	1	10%
	トネリコ属	1	10%
	合計	10	-
	小計	10	-
縦杵	アカガシ亜属	10	83%
	ヤブツバキ	2	17%
	合計	12	-
	小計	12	-
ヨコツチ	アカガシ亜属	2	22%
	サカキ	1	11%
	カエデ属	1	11%
	クロモジ	2	22%
	エノキ属	3	33%
	合計	9	-
	小計	9	-
「タテツチ」	サカキ	1	25%
	ヒイラギ	3	75%
	小計	4	-

#### 4 出土遺構から見た木製品構成比率について

千葉県内において木製農具が出土した遺構についてまとめると、(1)河川跡や基幹水路となりうる大溝から出土したもの(常代遺跡・国府関遺跡・五所四反田遺跡・西根遺跡・菅生遺跡・市原条里制遺跡)、(2)小型の溝から出土したもの(長須賀条里制遺跡・芝野遺跡・郡遺跡・常代遺跡)、(3)遺物包含層や水田耕作土から出土したもの(浜野川遺跡・村田服部遺跡・市原条里制遺跡・三直中郷遺跡・古市場(2)遺跡・不入斗遺跡)に分類することができる。

(1)では常代遺跡、西根遺跡で堰が検出され、国府関遺跡においても堰の構築材と考えられる部材や編み物などが出土していることから、いずれも農業用水系統の中で基幹水路となりうるものと考えられる。また、五所四反田遺跡では、大溝がクランク状に曲がっており、人工的に流路を変更している可能性もある。これらの溝からは、多量の土器類と共に木製品がかなり出土する傾向が認められる。木製品には加工途中の未製品も含まれるほか、一部が焼けて炭化したものもしばしば見受けられる。このことは、一見すると同じ溝内で木製品の生産と廃棄が行われていたことを示しているようにみえる。しかしながら、常代遺跡や国府関遺跡における粒度分析の結果では、溝が洪水などで一気に埋没した過程を示しており、本来は生産と廃棄は同じ水路でも区別されていたものが洪水で流され、堰周辺に集積されたと考えた方が自然であろう<sup>9)</sup>。

(2)は(1)とした基幹水路から枝分かれした水路で、長須賀条里制遺跡や芝野遺跡のように同程度の製作段階を示す未製品のみが数点出土する例がみられる。とくに芝野遺跡では溝横に杭と矢板で補強した溜め井状の施設を設置して未製品を水付けにしており(写真図版5右下)、本来(1)においても製作段階ごとに類似の施設が造られていた可能性も考えられよう。

上記の(1)や(2)と様相が異なるのが(3)で、市原条里制遺跡・三直中郷遺跡・古市場(2)遺跡はいずれも木製品が水田畦畔に埋め込まれた状態で出土しており、畦畔を補強するための構築材としての性格が強いものと言える。そのため市原条里制遺跡において樹種同定を行った299点のうち、約半数にあたる148点が大足、田下駄、曲物で、器種の判らない板材も79点と畦畔補強に必要な板系統の遺物が多い。

つぎにこれまで述べてきた状況をふまえて、(1)に相当し木製品の種類・量ともに多い、常代遺跡と国府関遺跡について器種別の構成比率を見てみたい。構成比率は鈴木三男、能城修一両氏による樹種同定表に基づいて行った。それによると常代遺跡では、比率の高い順に建築材(21%)、農具(19%)、杭(15%)、容器(14%)、工具(6%)、弓(2%)、その他(24%)であり、国府関遺跡では、同じく比率の高い順に農具(39%)、建築材(18%)、工具(10%)、容器(9%)、弓(4%)、その他(21%)であった。このように両遺跡とも全体の中で農具の比率がかなり高いことがわかる。さらに建築材には堰の構築材として使用または二次利用されたものが多く含まれることが想定されるため、なおさら農具の突出ぶりが際立つ内容と言えよう。また、農具の中においては特に鍬類が多くを占める結果となっている。このような傾向は、五所四反田遺跡や菅生遺跡でも認められ、弥生時代以降古墳時代に至るまで出土木製品における鍬の優勢は変わらないと言える。このように農具特に鍬が卓越する理由としては、農作業において鍬がもっとも使用頻度の高い農具であることを示しているとともに、アカガシ亜属という堅い性質の木材を使用するため製作に時間がかかる、破損などに対応するため常に代わりを用意する必要があるなどのことが想定される。また、五所四反田遺跡で刃部に抉りをもつ「横鍬」が卓越していることなどは、地域による生産活動の違いを反映しているものか、鍬製作の専門集団が存在していた可能性も考えられるが、現時点では

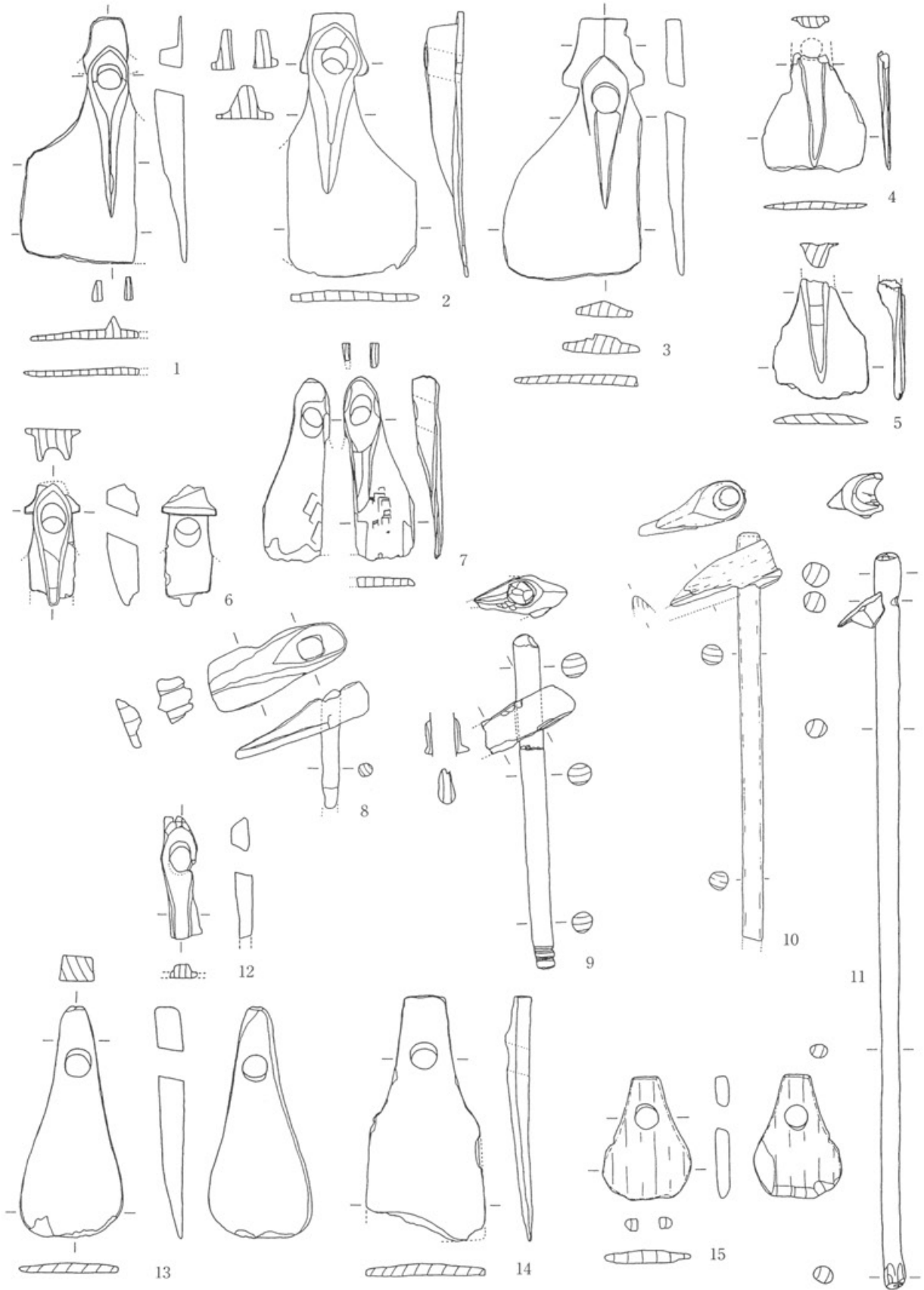
判然としない。

## 5 小結

以上のように県内出土の木製農具について、変遷や製作工程、樹種の選定、構成比率などを概観してきた。それによると大きく見た場合、農耕に必要な道具は水稲耕作が本格的に導入された段階から整った組成を示しており、時代の変化にも係わらず鍬中心の組成に変化は認められないと言えよう。しかしながら、各器種や製作工程の違いなどに目を向けると、古墳時代初頭と古墳時代後期において大きな技術的変化が見られるのではないだろうか。いずれにしても現段階では弥生時代後期の資料が欠落していることや奈良平安時代遺物についての帰属時期問題など、今後の資料の増加と研究の進展に期待するところが大きいのも事実である。また、農具それ自体についても、水稲耕作ばかりではなく畠作や土木工事などを念頭に置きながら機能的側面についても考えていく必要があることを痛感した。

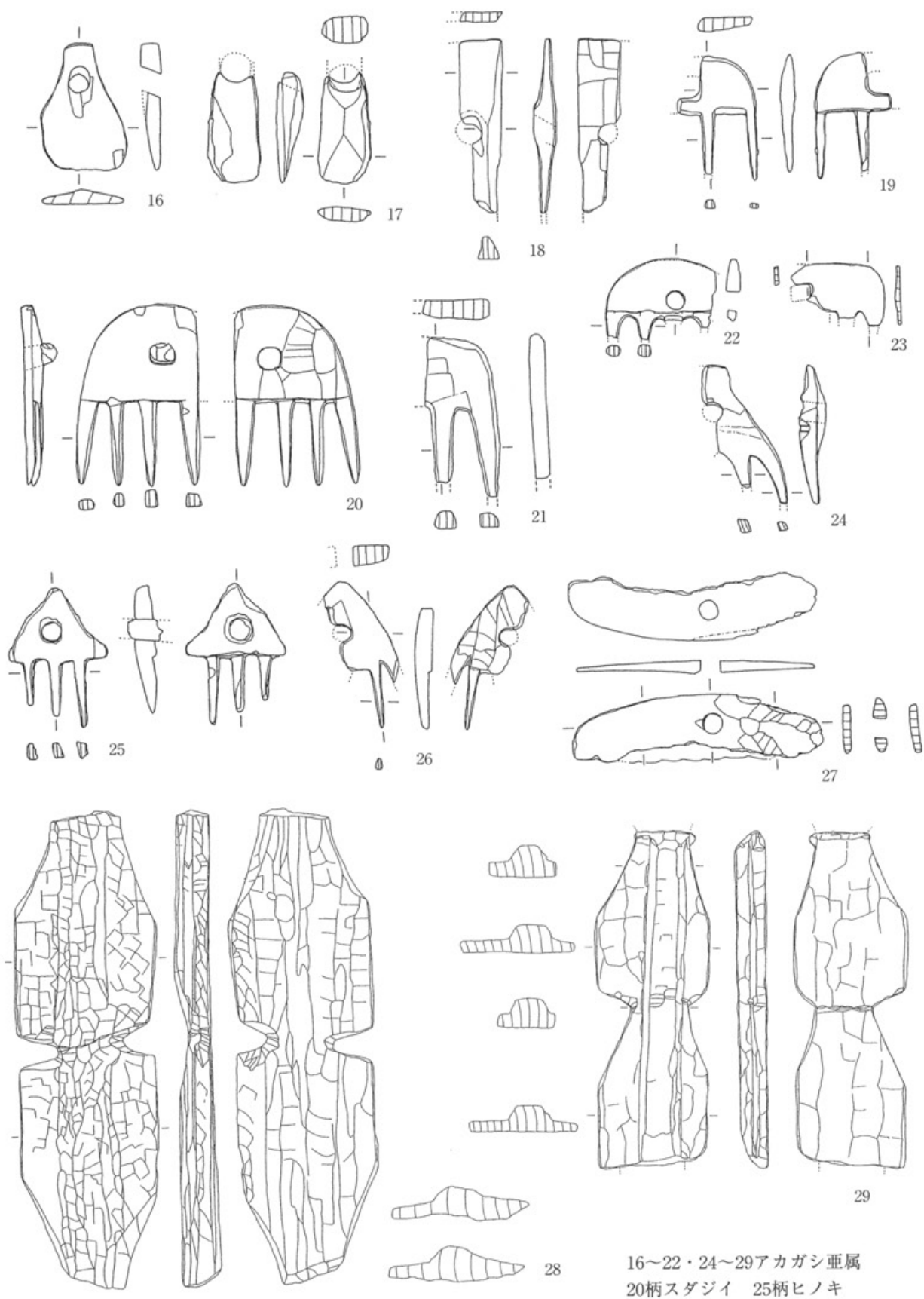
### 注

- 1) 樋上 昇 2000 「木製農具」ははたして「農具」なのか『考古学研究』47-3
- 2) かつて筆者は、千葉県下の農具の変遷についてまとめる機会があったが、以降資料が若干増加したものの概ね従前と変わらぬ変遷過程をとるものと考えている。その後、小川浩一氏により上総地域の木製農具の変遷図が示されているが、器種認定や変遷系統などにおいて本論と相違する部分も見られる。  
大谷弘幸 1994 「千葉県における農具の変遷」『古代における農具の変遷』静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか  
小川浩一 1995 「五所四反田遺跡検出の木製農具について」『市原市文化財センター研究紀要Ⅲ』市原市文化財センター
- 3) 工藤哲司 1996 「中在家南遺跡・押口遺跡出土の木製品類」『中在家南遺跡他』仙台市教育委員会
- 4) 樋上昇氏によると、五所四反田遺跡出土のスリット入り狭鍬の祖形は長野県北部で創出されたナスビ形鍬に求められ、このタイプの鍬が北関東に伝播し、東海系曲柄鍬と融合して南関東へと流入したものと考えられる。  
樋上 昇 2000 「3～5世紀の地域間交流 - 東海系曲柄鍬の波及と展開 - 」『日本考古学』日本考古学協会
- 5) 中山正典氏や小川浩一氏は、これらの鍬を諸手鍬の範疇でとらえ、側縁部にU字形鍬鋤先の装着を想定し、打ち鍬としての機能を認めている。また、小川氏はこれらの鍬を「U字形鍬鋤先の導入に伴い一時的に出現した特異な形態の鍬」としているが、U字形鍬鋤先出現以前の国府関遺跡においてもすでに同形式の鍬が認められ、農具組成のうえで一定の比率で存在していた可能性を示している。(前掲小川論文)  
このほか、山田昌久氏、大村直氏もこの「横鍬」の側縁部に鉄製刃先が装着されていたものと指摘している。  
中山正典 1994 「静岡県における弥生時代・古墳時代の木製農具」『瀬名遺跡Ⅲ』静岡県埋蔵文化財調査研究所  
山田昌久 1994 「関東地方北部における農具の変遷」『古代における農具の変遷』静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか  
大村 直 1996 「鉄製農具の組成比」『史館』第28号 史館同人
- 6) 中山、小川両氏は横長に刃部を置いたエブリ的な使用方法を認めながらも、主要な使用部分は両端部と考えているようである。しかし、本文で述べたように着柄角度や柄部に対して内湾する形態から、常に両端部分を用いた打ち鍬的な使用方法を想定するには無理があると考えられる。また、着柄部分を強化するために設けられているはずの着柄隆起下部部に挟りが付けられていることは、強度的にも問題がある。山田昌久氏はこの挟り部分に着目して「土を山形に造成するのに都合のよい道具」を想定されている。  
山田昌久 1986 「新保遺跡出土木製品・加工材」『新保遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 7) 樋上氏は南関東地域から東海系曲柄鍬が消え、ナスビ形曲柄鍬に変わるの6世紀以降のことであるとしているが(前掲注4)、これまでの集積結果からすると9世紀後半から10世紀段階まで両者が残存する可能性が高いものと考えられる。
- 8) 菅谷通保 1994 「1. 新保・小敷田・国府関(1) - 広グワの検討 - 」『長生郡市文化財センター年報No.8』長生郡市文化財センター
- 9) こうした遺構の多くが失敗品を廃棄した場所であった可能性が考えられているが、今回の集成を通じては、未製品のうちのどの部分が失敗したために廃棄に到ったのか判別することはできなかった。また、国府関遺跡のように外皮が残る未製品も認められることから、単純に貯木場的な施設と廃棄の場所とを区別することはできなかった。  
穂積裕昌 2000 「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について」『研究紀要』第9号 三重県埋蔵文化財センター



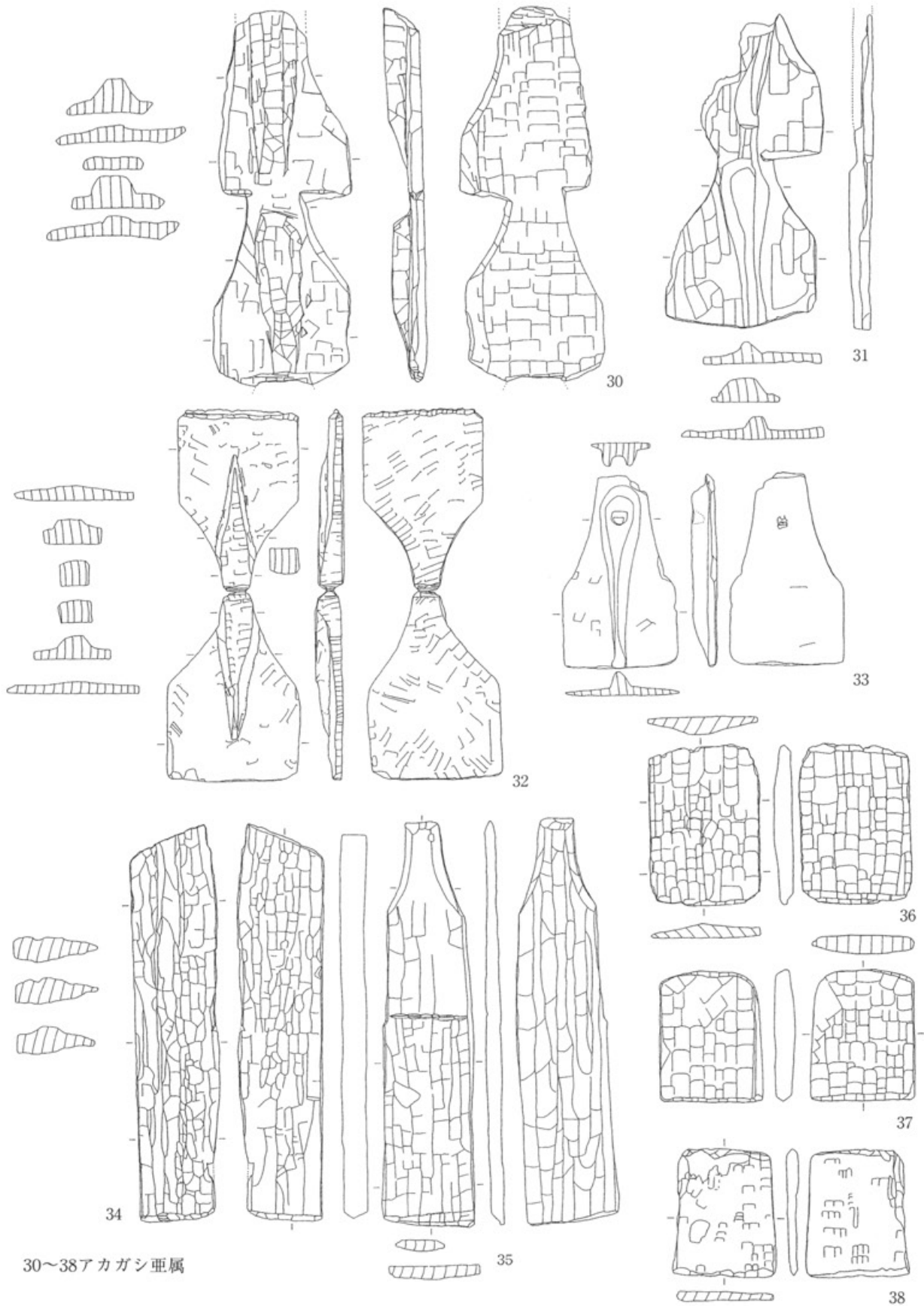
1～13・15アカガシ亜属 9柄ヤマグワ  
10柄ムクロジ 11柄サカキ 14クスギ節

第34図 常代遺跡木製品 (1/8)

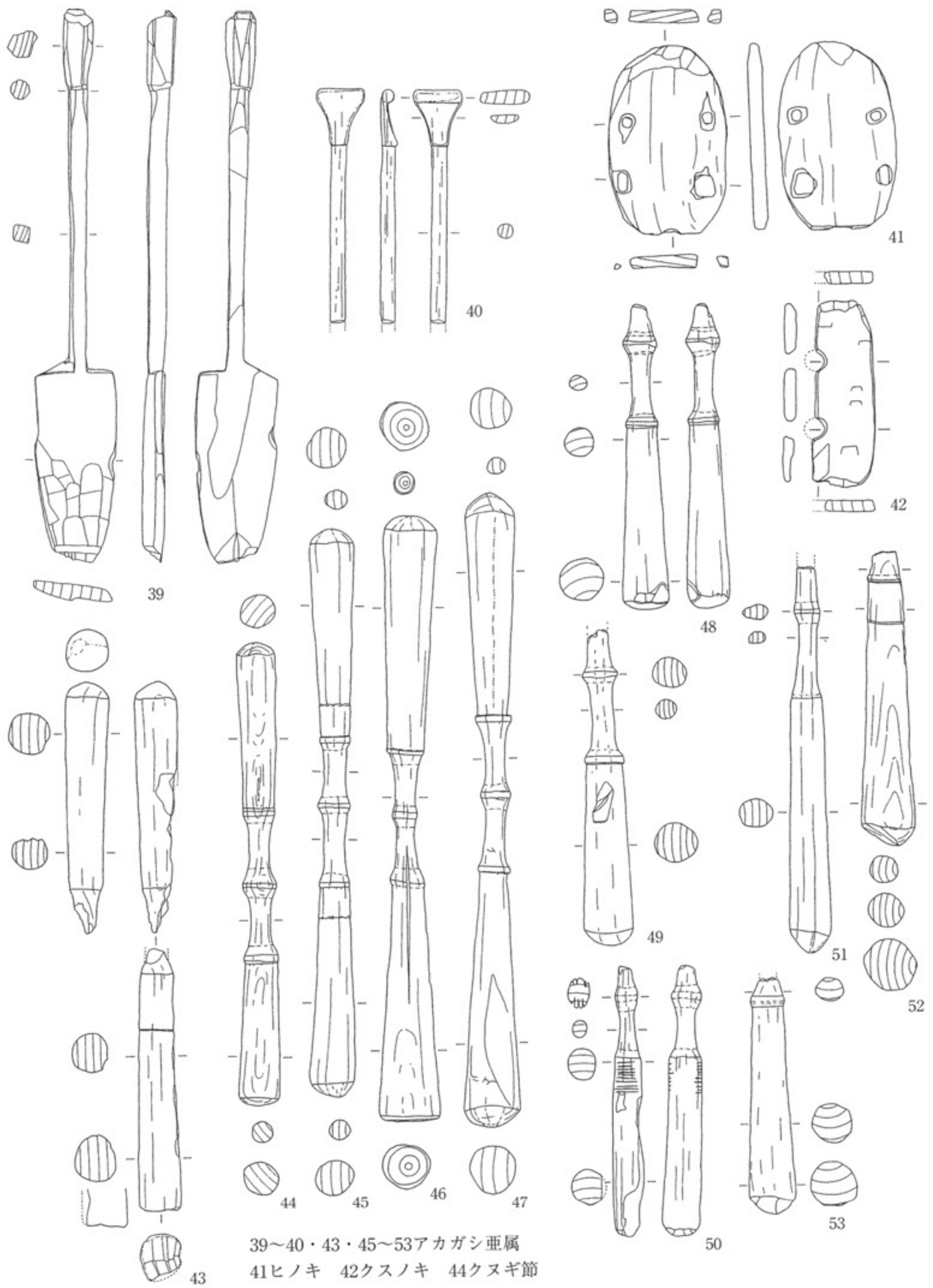


16~22・24~29アカガシ亜属  
20柄スタジイ 25柄ヒノキ

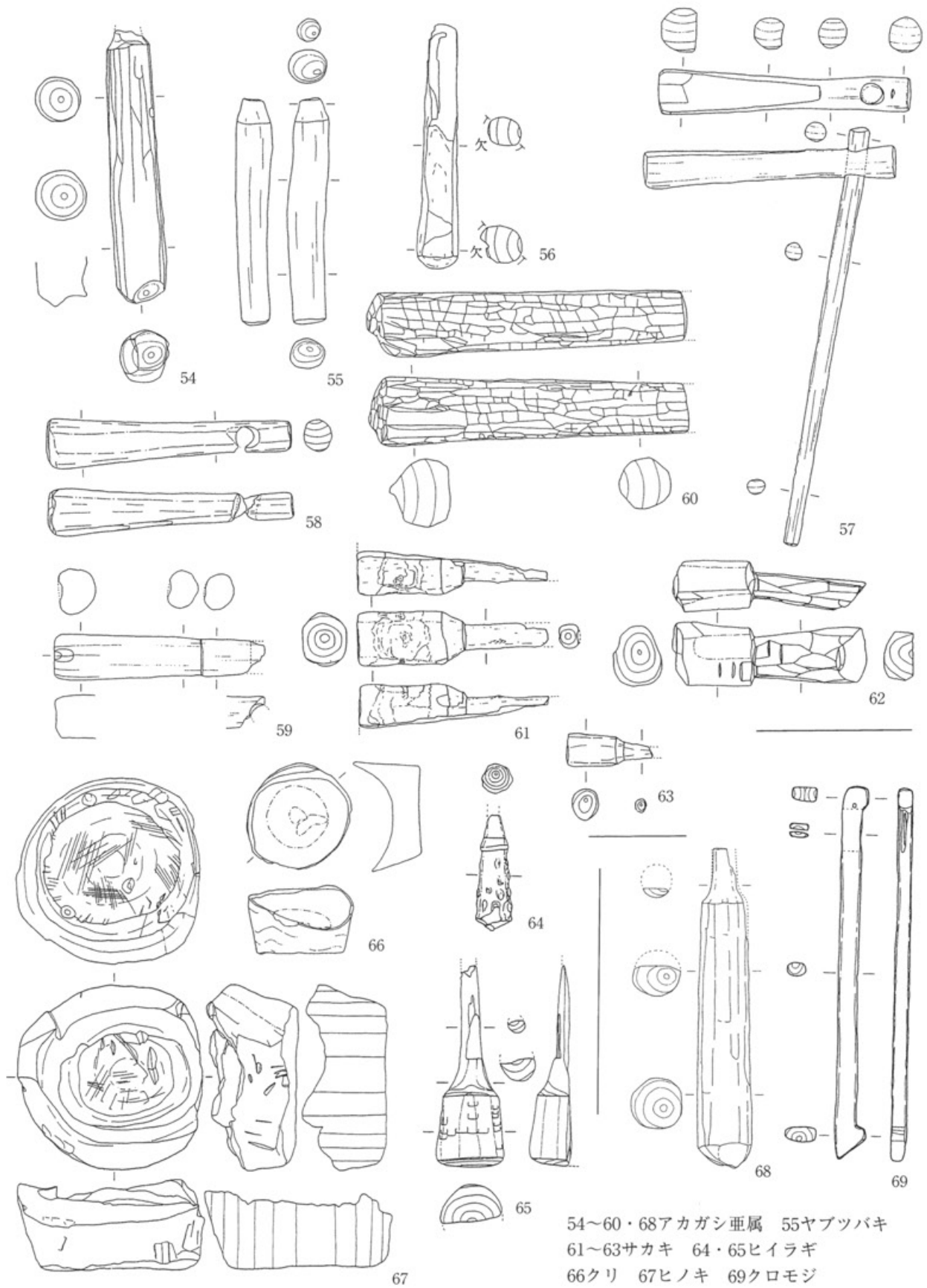
第35図 常代遺跡木製品 (16~27; 1/8, 28・29; 1/12)



第36図 常代遺跡木製品 (1/12)



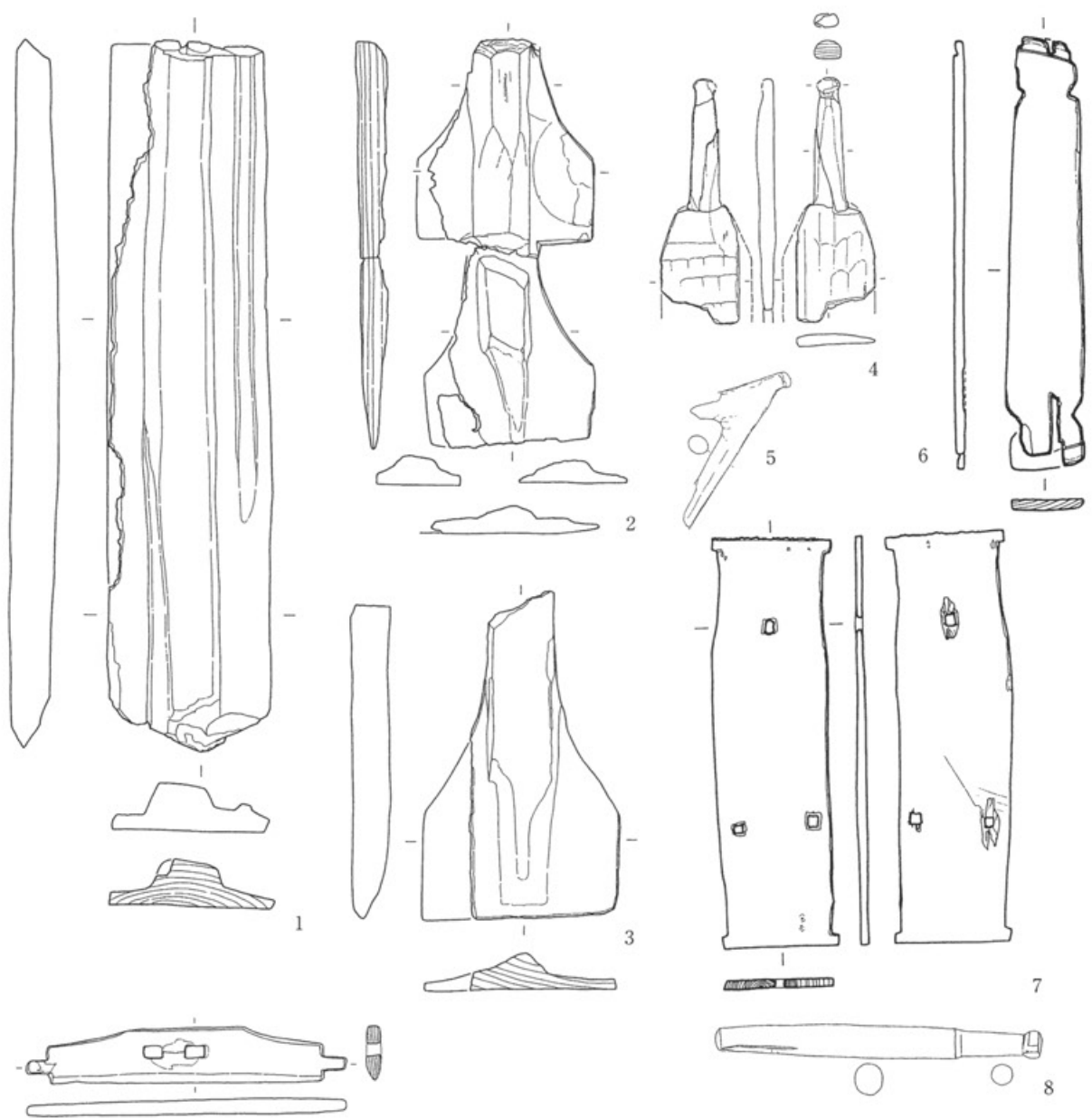
第37図 常代遺跡木製品 (39・40・43~53; 1/10, 41・42; 1/8)



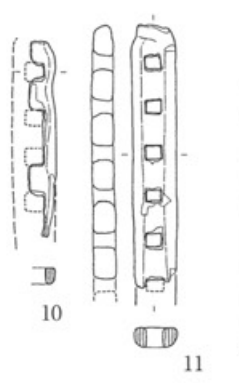
54~60・68アカガシ亜属 55ヤブツバキ  
 61~63サカキ 64・65ヒイラギ  
 66クリ 67ヒノキ 69クロモジ

第38図 常代遺跡木製品 (54~60・66~68; 1/10, 61~65; 1/8, 69; 1/6)

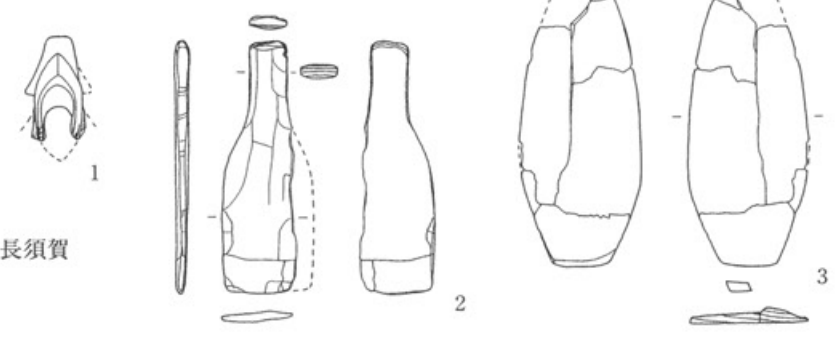




9 浜野川 1~4アカガシ垂属 5イヌガヤ  
6スギ 7ヒノキ 9~11カヤ



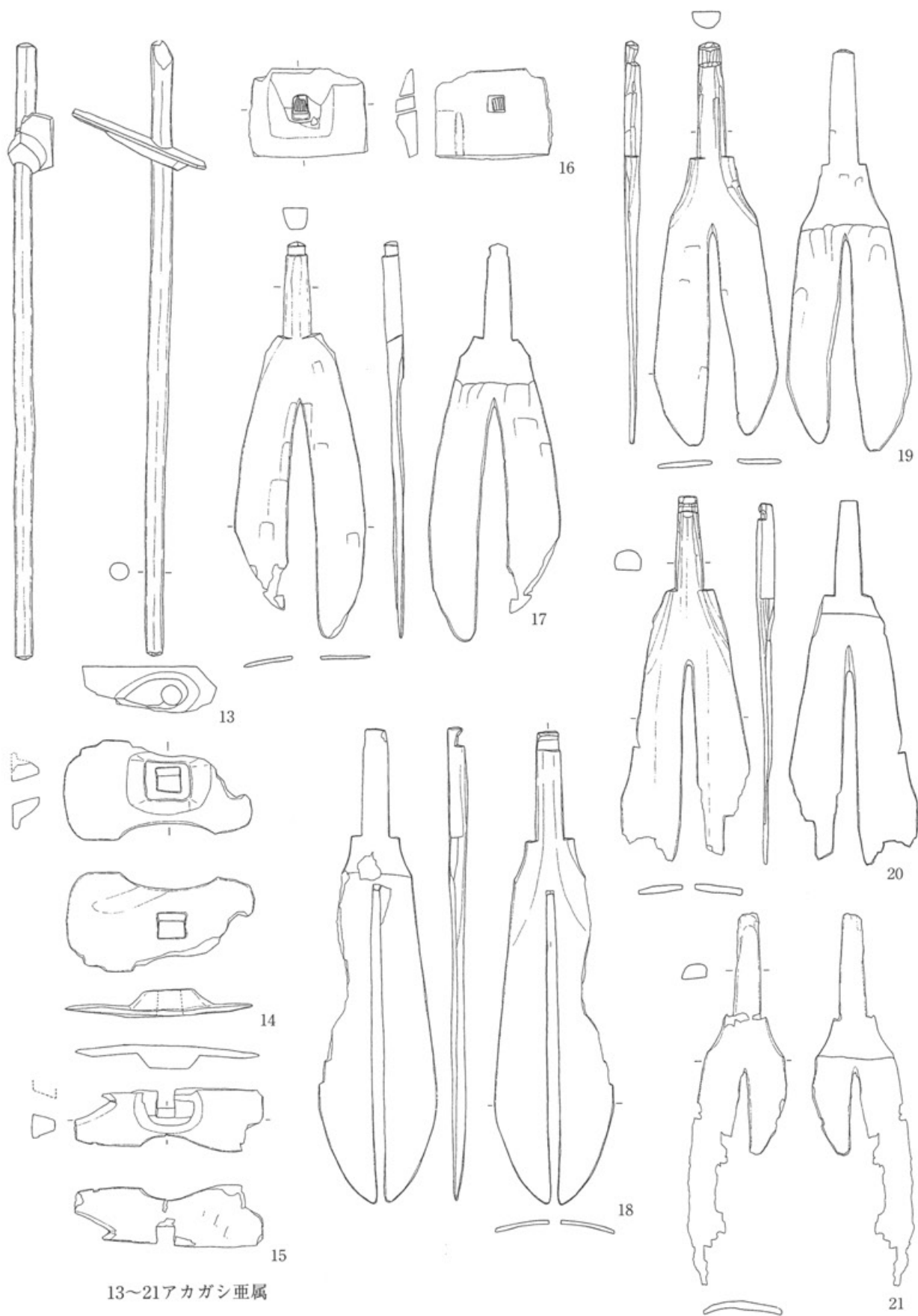
長須賀



(浜野 1~3 ; 1/12, 4~11 ; 1/8, 長須賀 1 ; 1/8, 2・3 ; 1/12)  
第39図 浜野川遺跡・長須賀条里制遺跡木製品

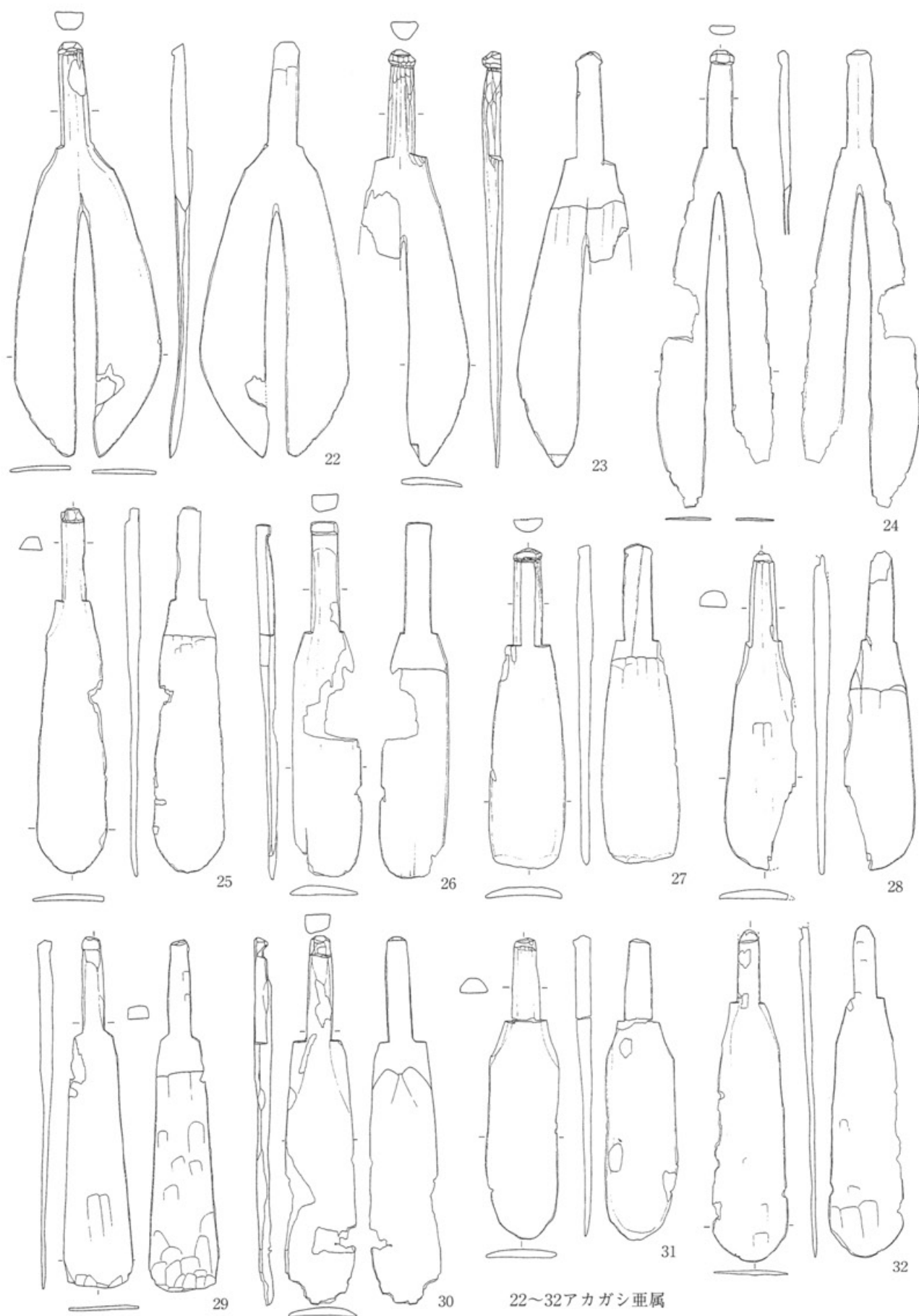


第40図 国府関遺跡木製品 (1/8)

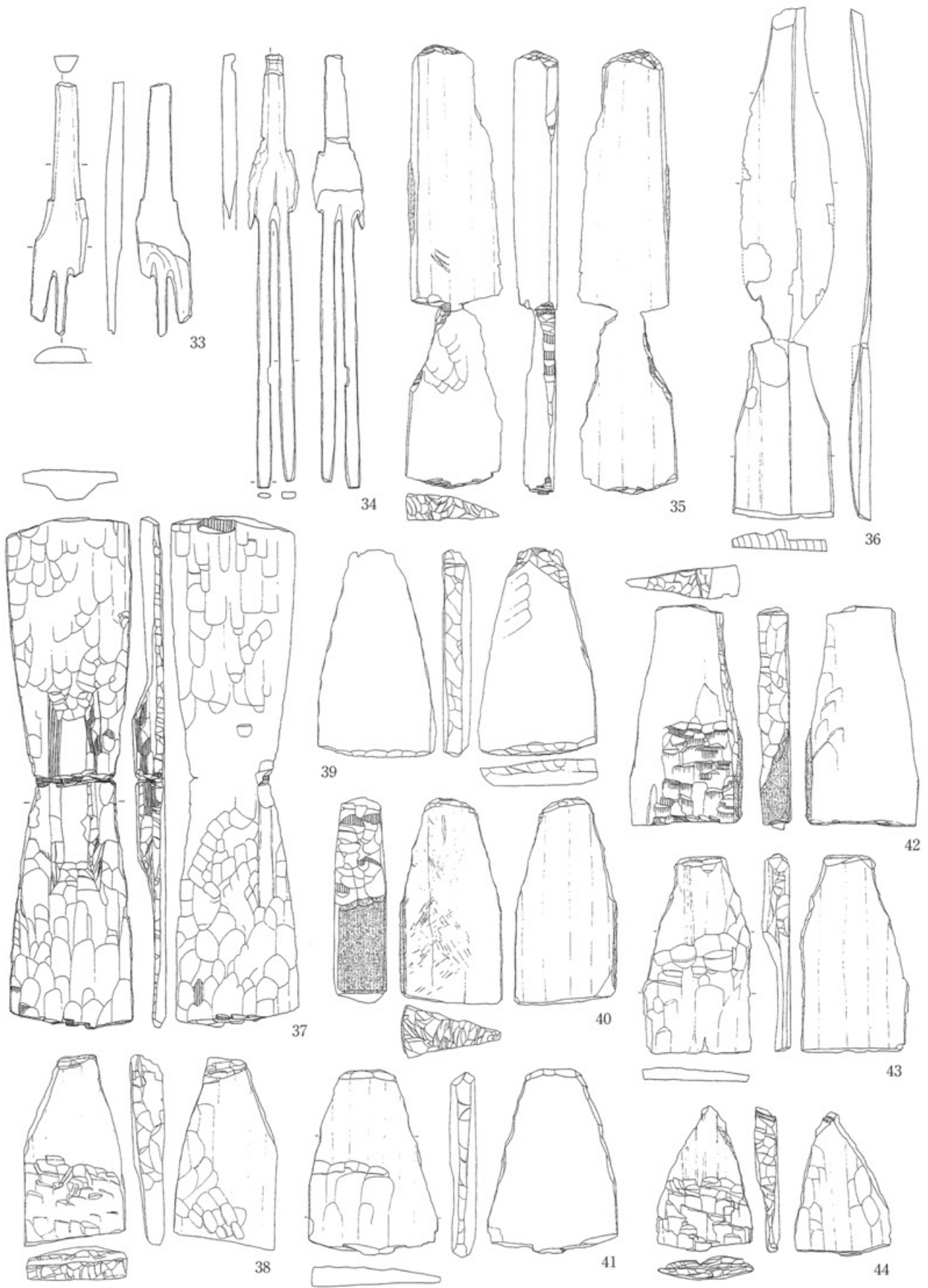


13~21アカガシ亜属

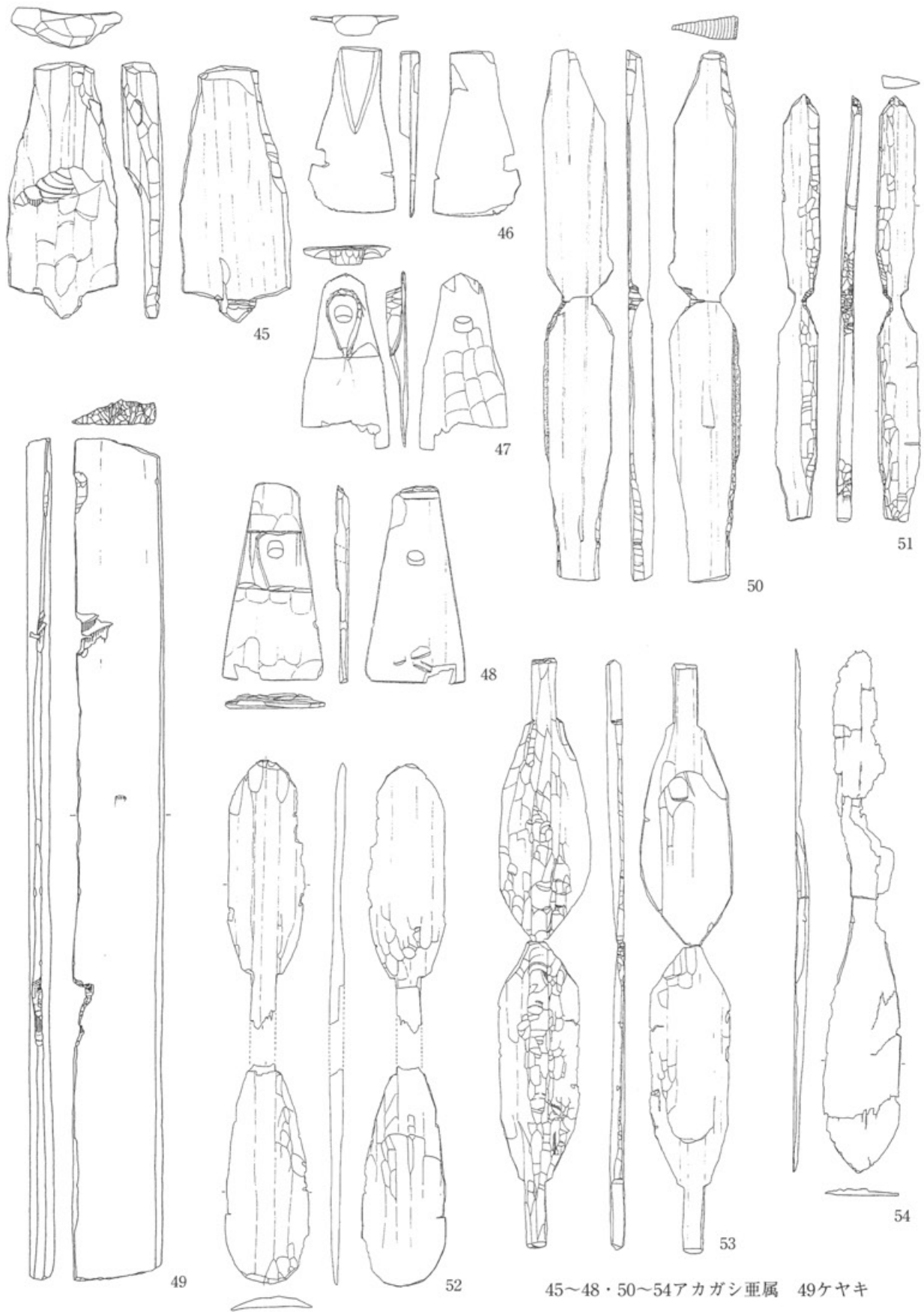
第41図 国府関遺跡木製品 (1/8)



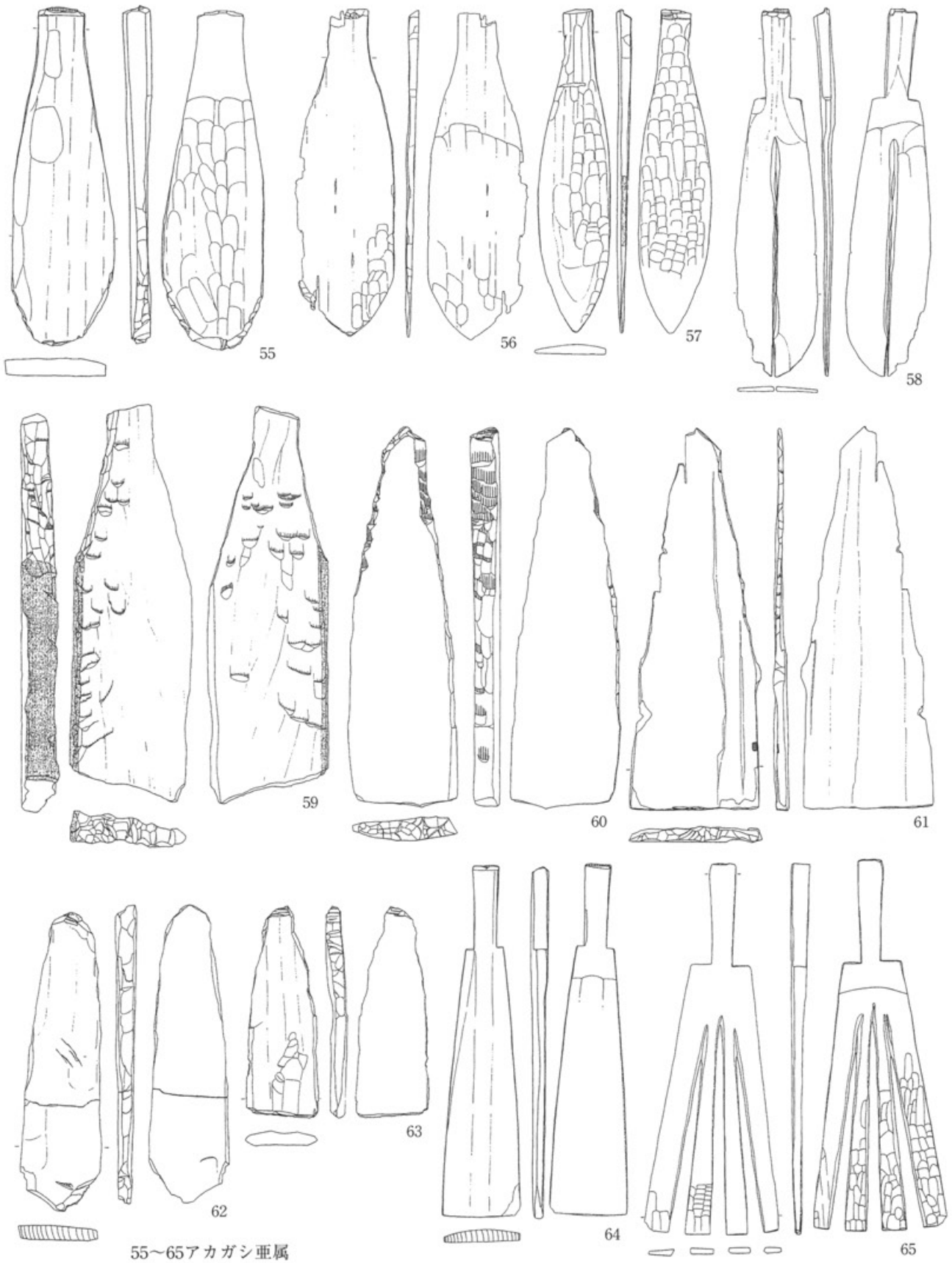
第42図 国府関遺跡木製品 (1/8)



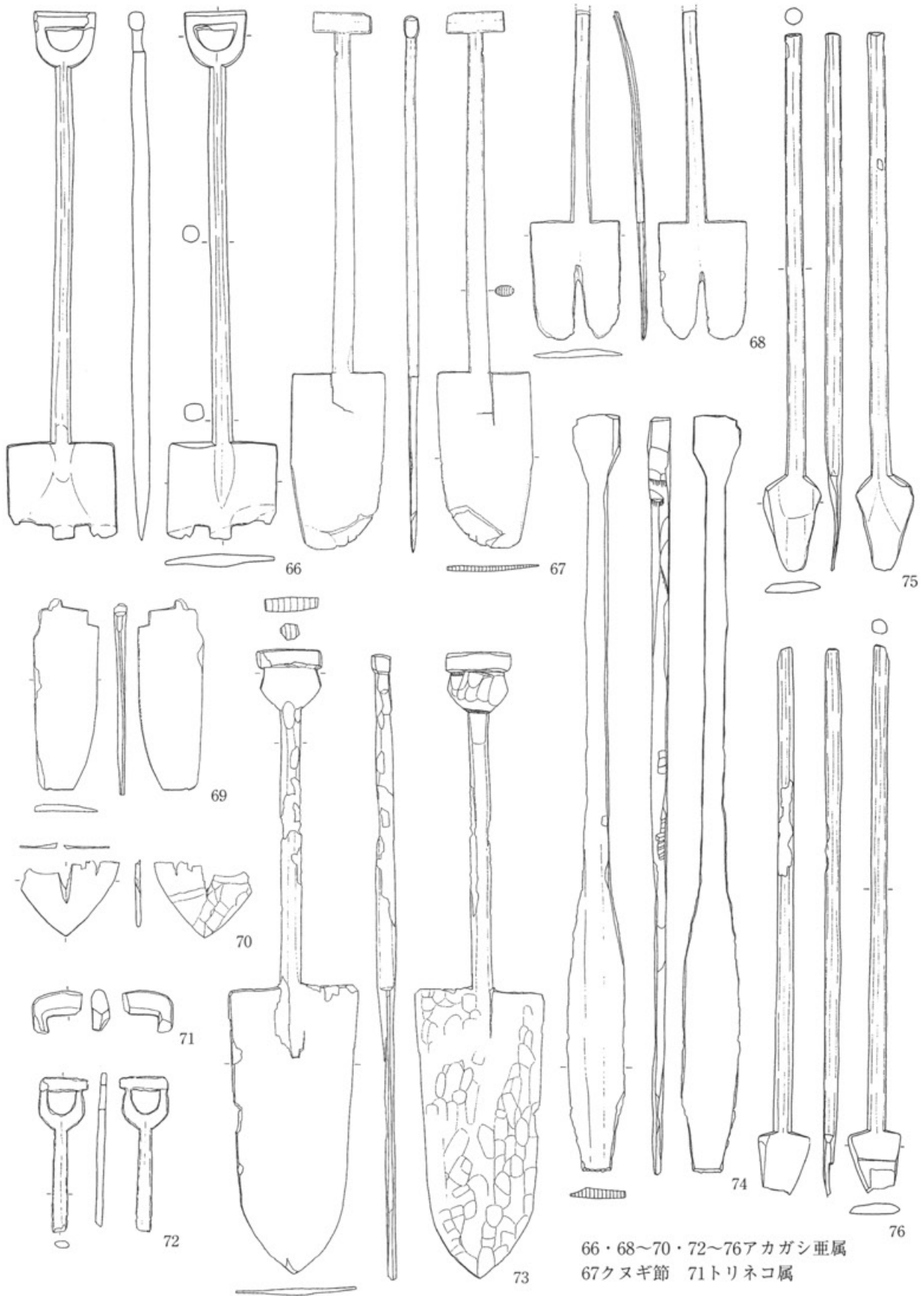
33~44アカガシ亜属  
 第43図 国府関遺跡木製品 (33・34; 1/8, 35~44; 1/12)



第44図 国府関遺跡木製品 (45~48; 1/12, 49~54; 1/15)

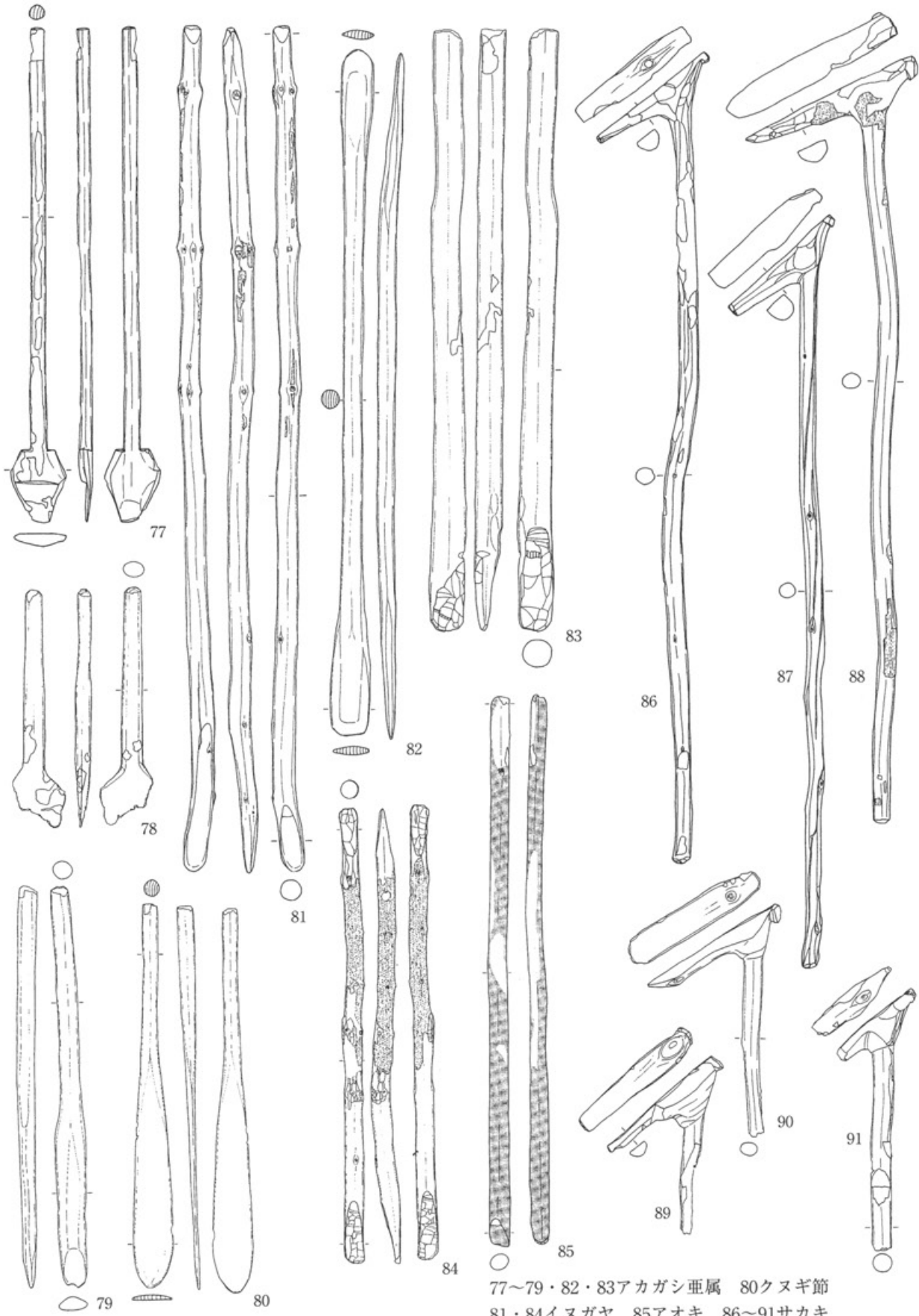


第45図 国府関遺跡木製品 (1/12)



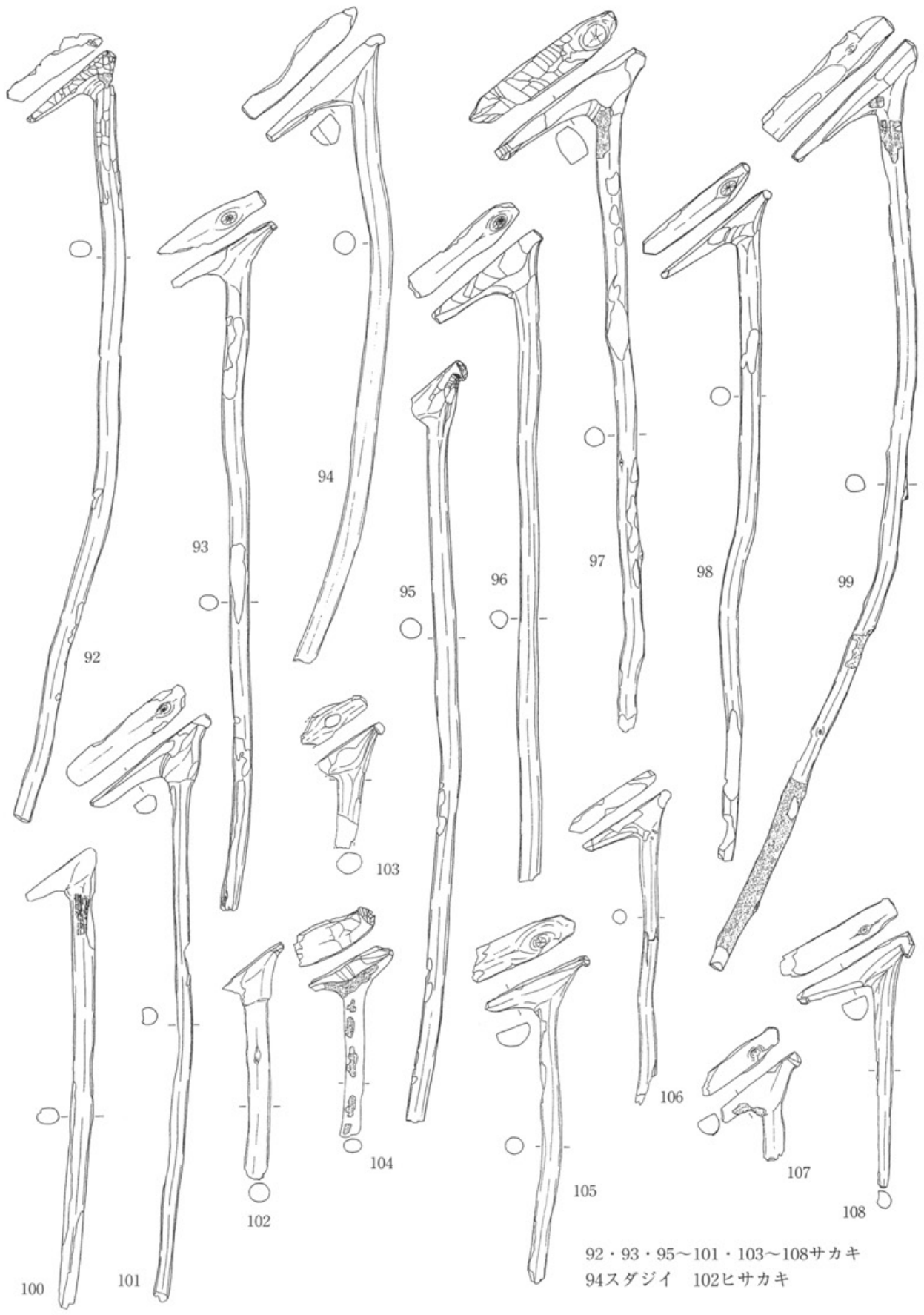
第46図 国府関遺跡木製品 (66～73・76 ; 1/10, 74 ; 1/12)





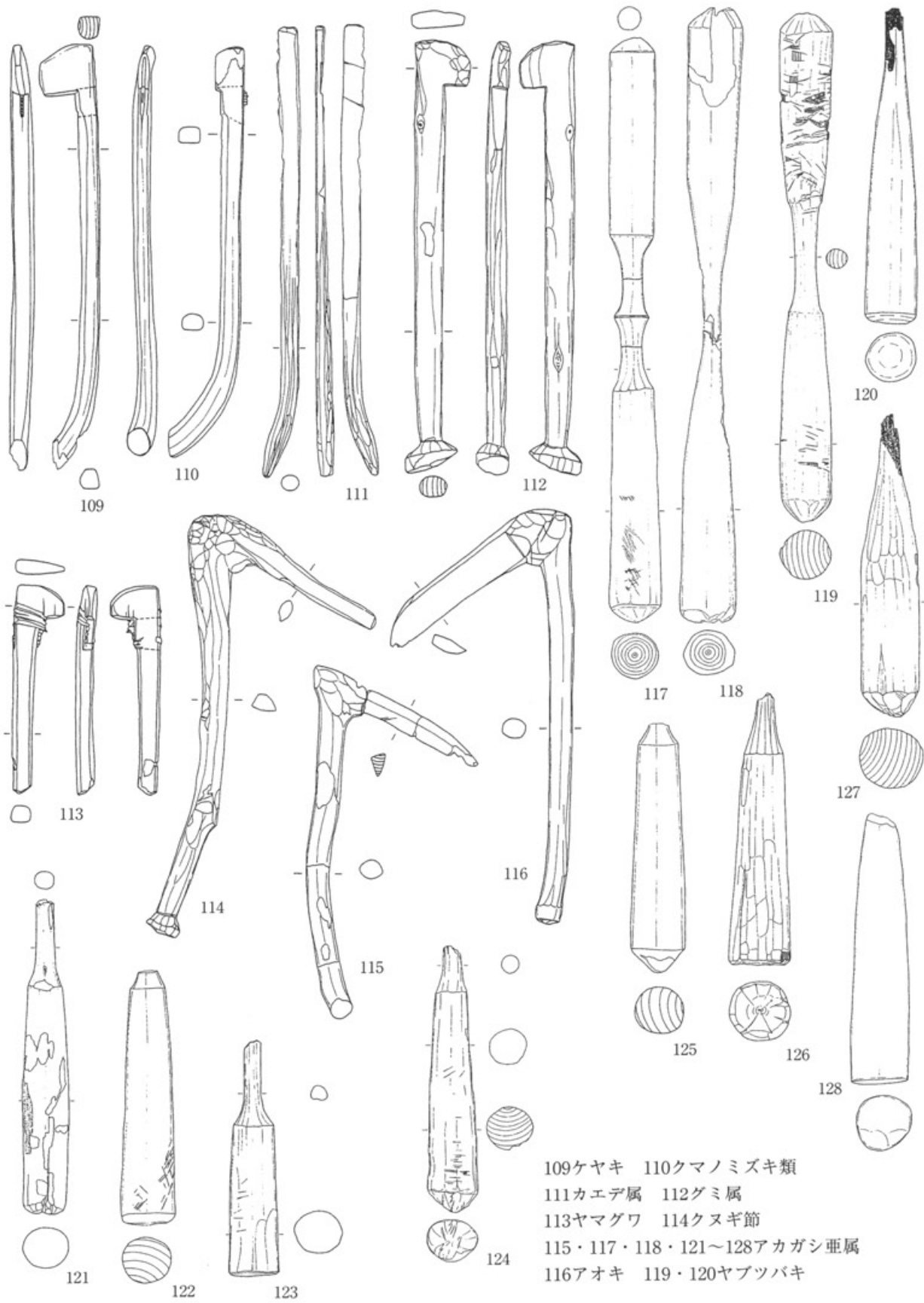
77~79・82・83アカガシ亜属 80クスギ節  
 81・84イヌガヤ 85アオキ 86~91サカキ

第47図 国府関遺跡木製品 (77~85 ; 1/10, 86~91 ; 1/8)



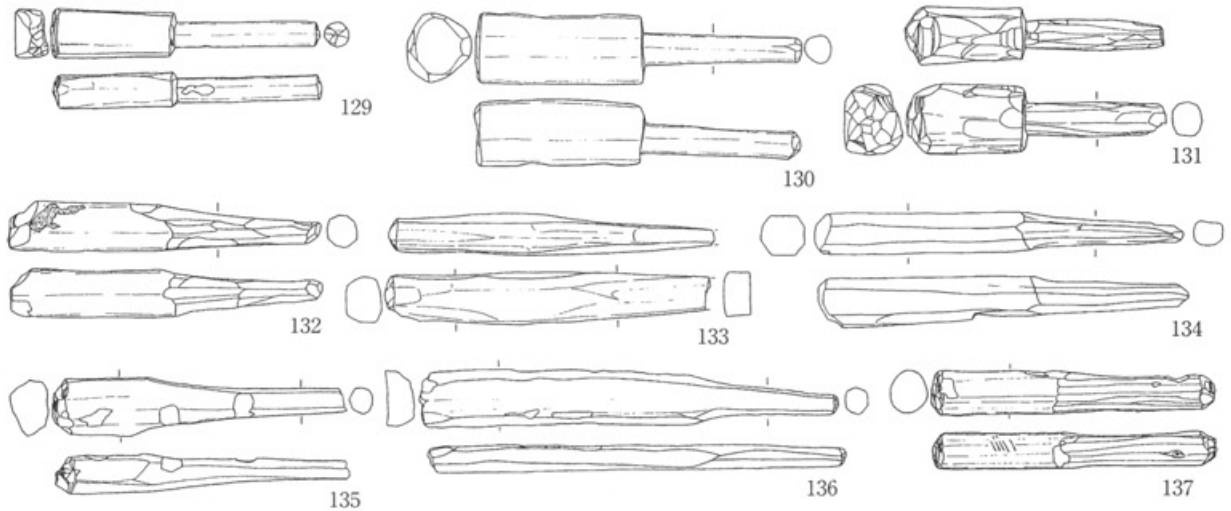
92・93・95～101・103～108サカキ  
94スダジイ 102ヒサカキ

第48図 国府関遺跡木製品 (1/8)

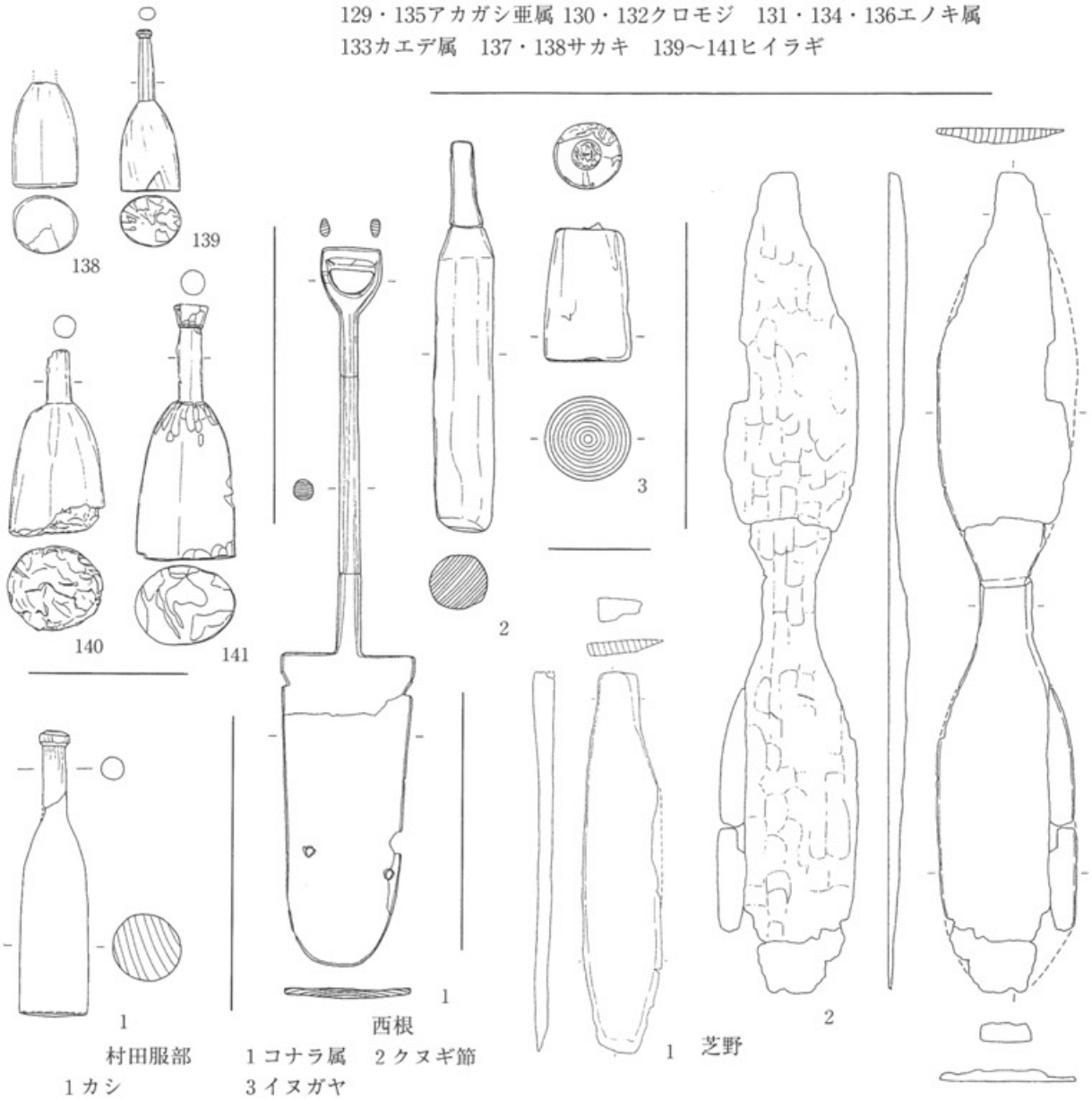


109ケヤキ 110クマノミズキ類  
 111カエデ属 112グミ属  
 113ヤマグワ 114クスギ節  
 115・117・118・121~128アカガシ亜属  
 116アオキ 119・120ヤブツバキ

第49図 国府関遺跡木製品 (109~116; 1/6, 117~128; 1/10)



129・135アカガシ垂属 130・132クロモジ 131・134・136エノキ属  
133カエデ属 137・138サカキ 139~141ヒイラギ

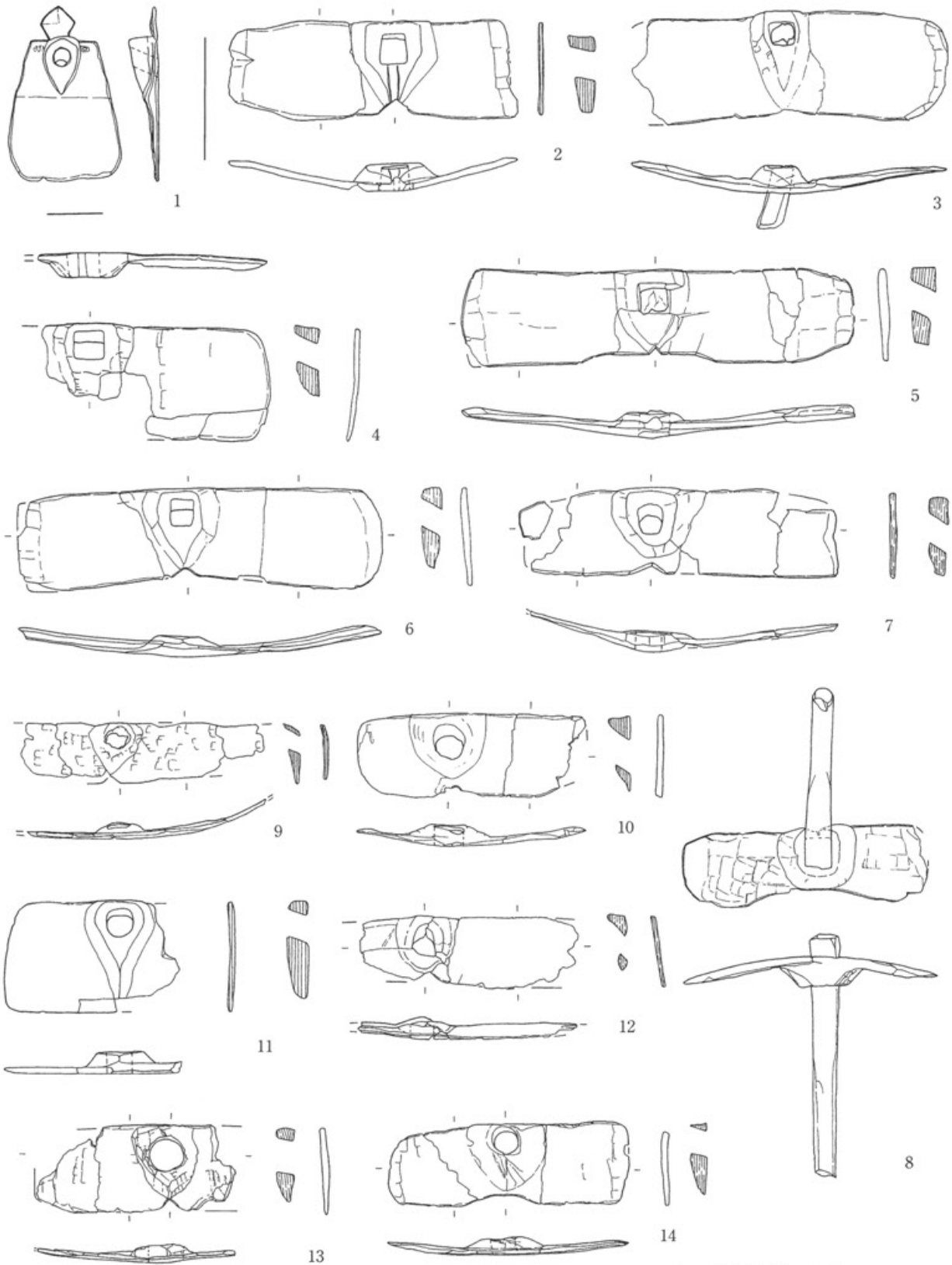


村田服部  
1 カシ

西根  
1 コナラ属 2 クスギ節  
3 イスガヤ

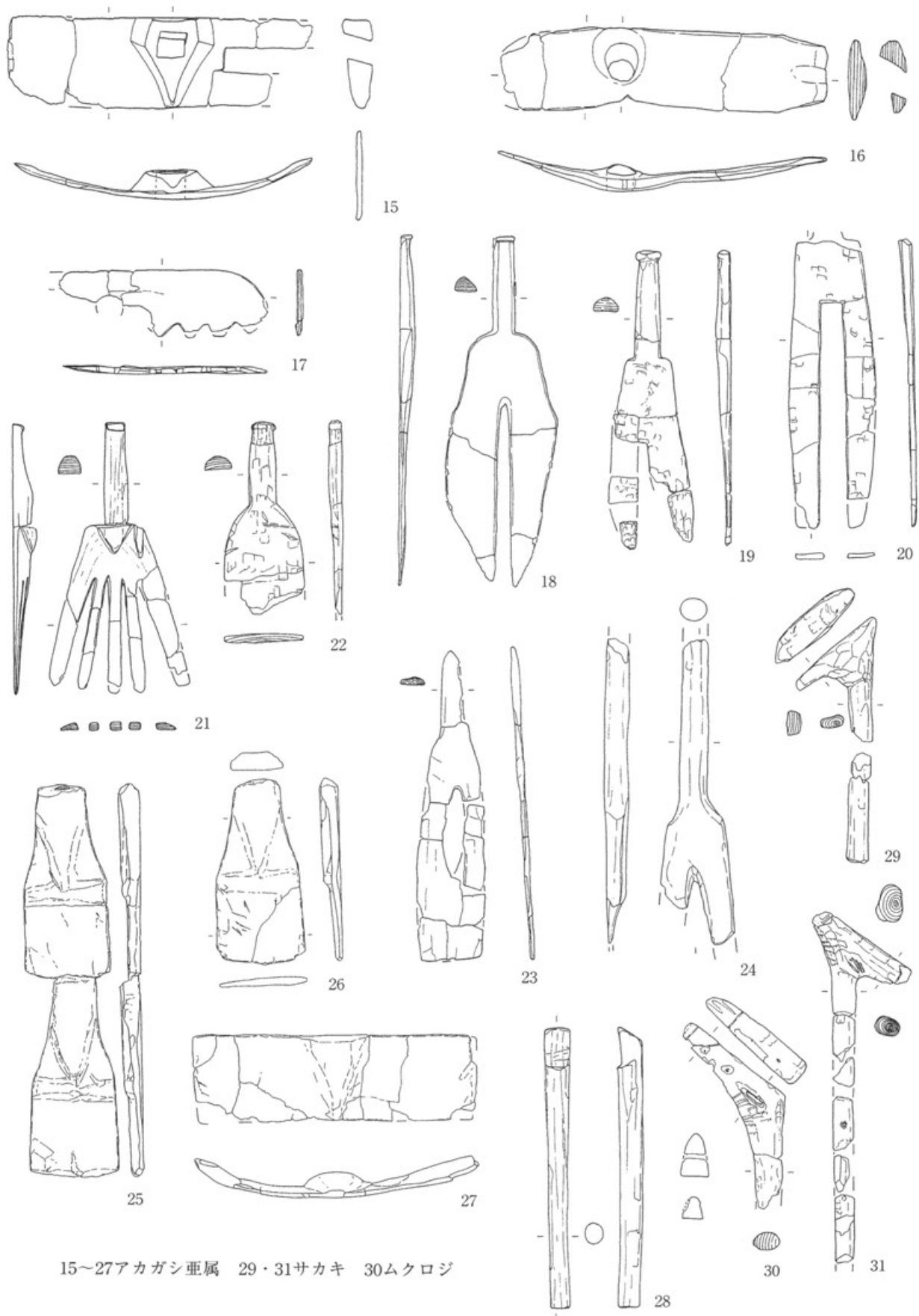
芝野  
1 2

(129~141・村田服部 1・西根 3 ; 1/8, 西根 1・2 ; 1/10, 芝野 1・2 ; 1/12)  
第50図 国府関遺跡・村田服部遺跡・西根遺跡・芝野遺跡木製品



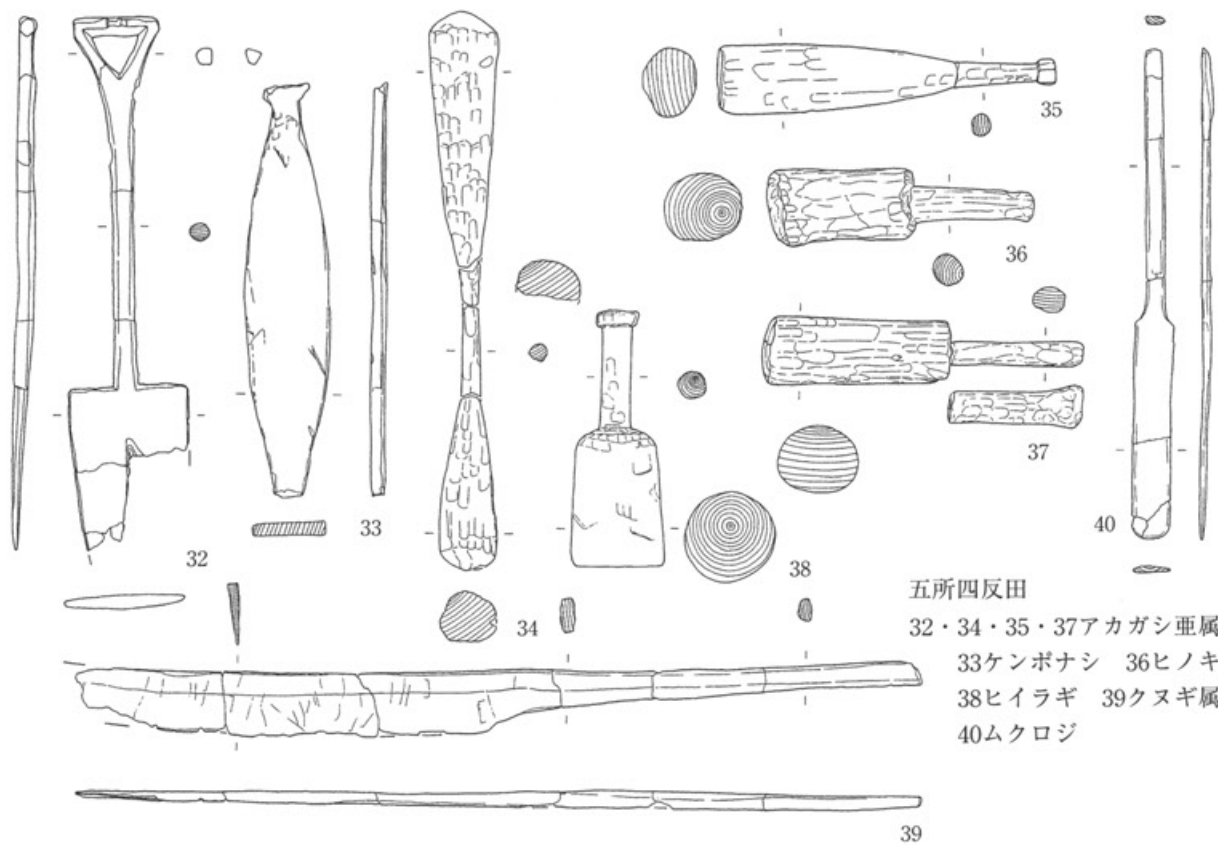
1～14アカガシ亜属  
 1柄ニシキギ 5柄ユズリハ

第51図 五所四反田遺跡木製品 (1/8)

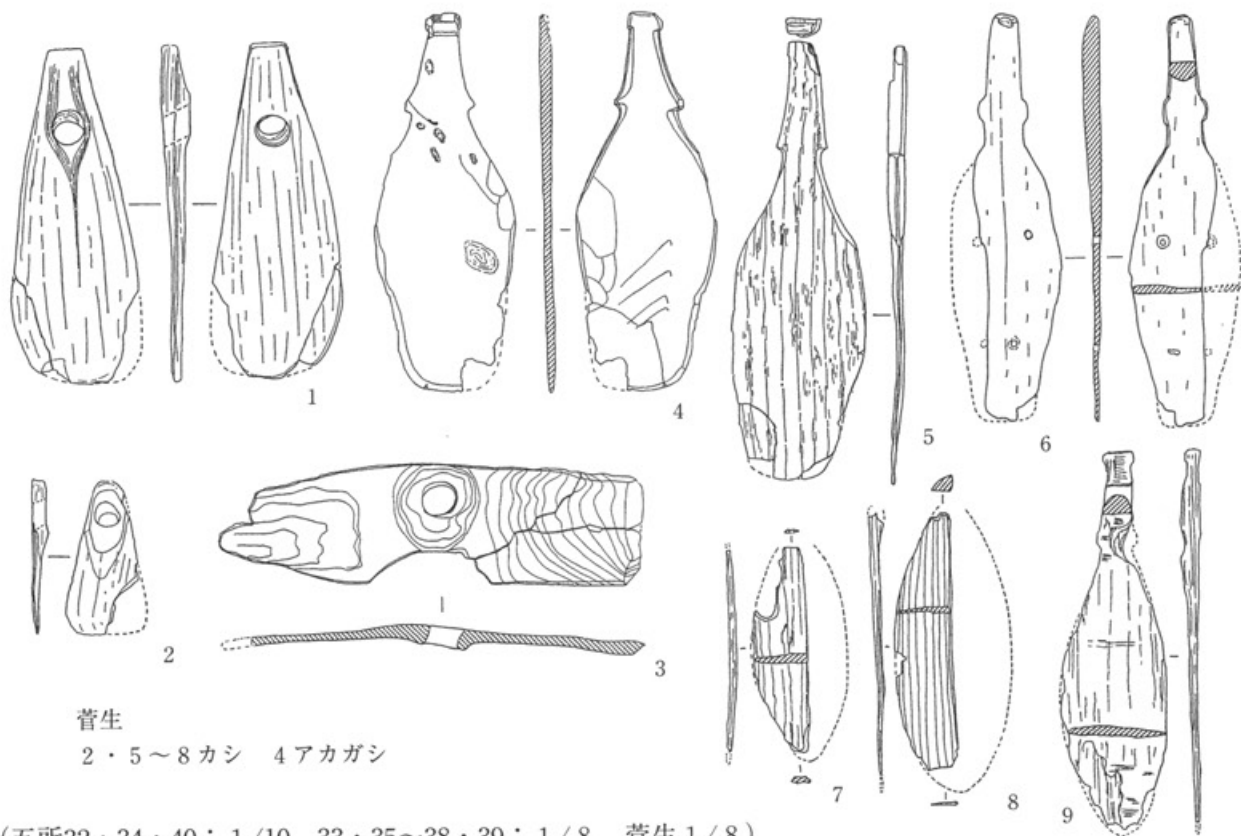


15~27アカガシ亜属 29・31サカキ 30ムクロジ

第52図 五所四反田遺跡木製品 (15~24・28~31; 1/8, 25~27; 1/12)



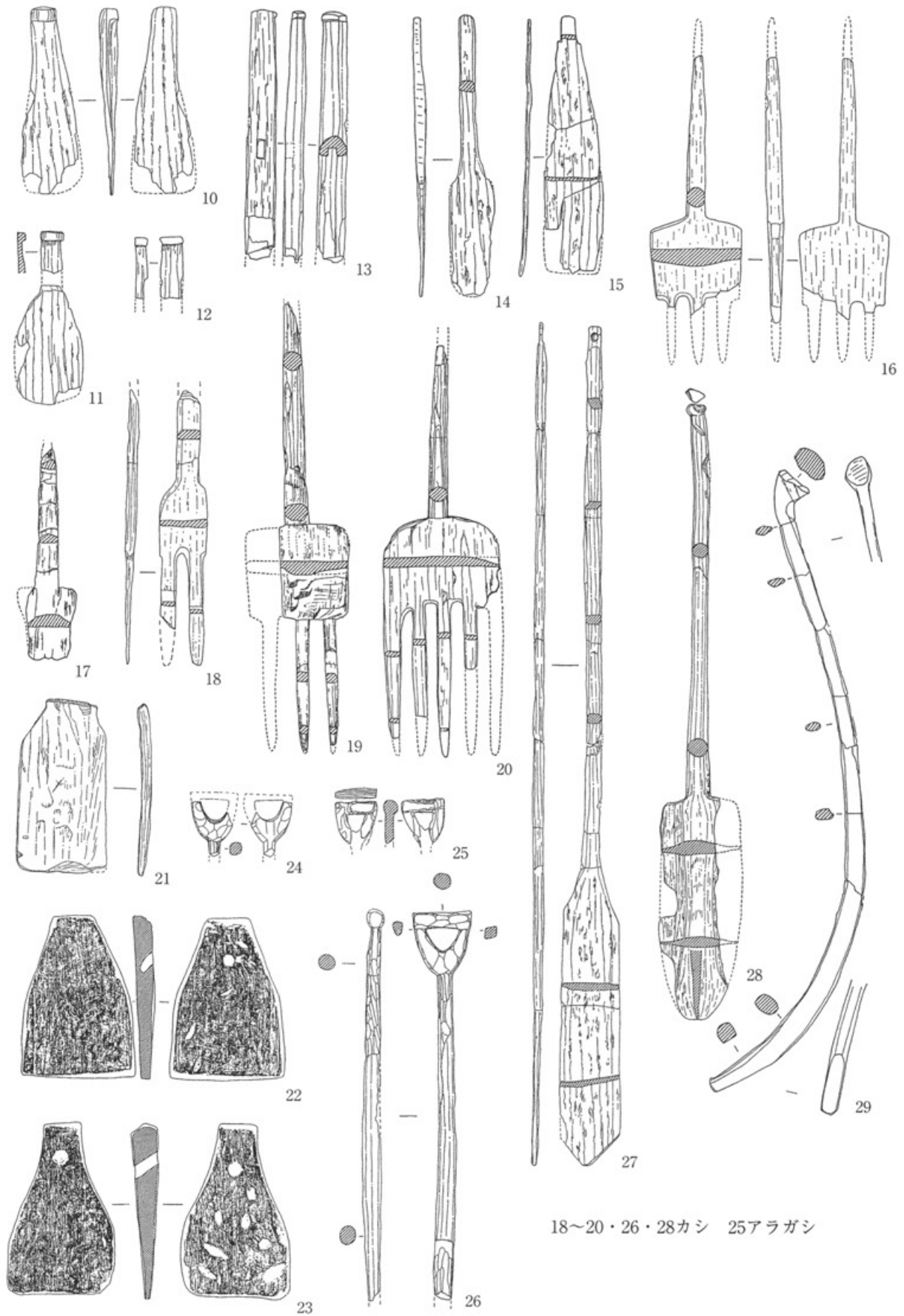
五所四反田  
 32・34・35・37アカガシ亜属  
 33ケンボナシ 36ヒノキ  
 38ヒイラギ 39クスギ属  
 40ムクロジ



菅生  
 2・5～8カシ 4アカガシ

(五所32・34・40；1/10, 33・35～38・39；1/8, 菅生1/8)

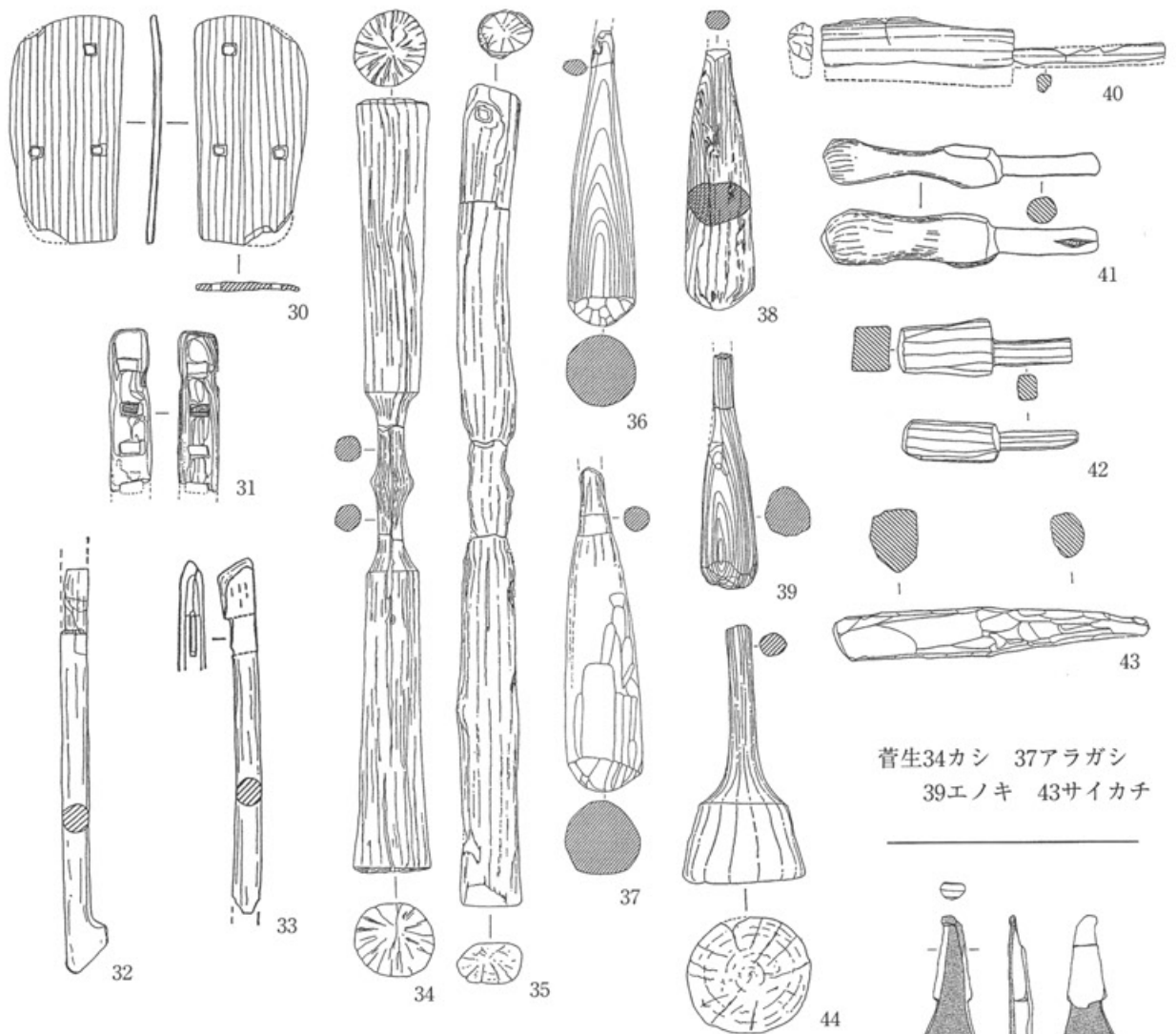
第53図 五所四反田遺跡・菅生遺跡木製品



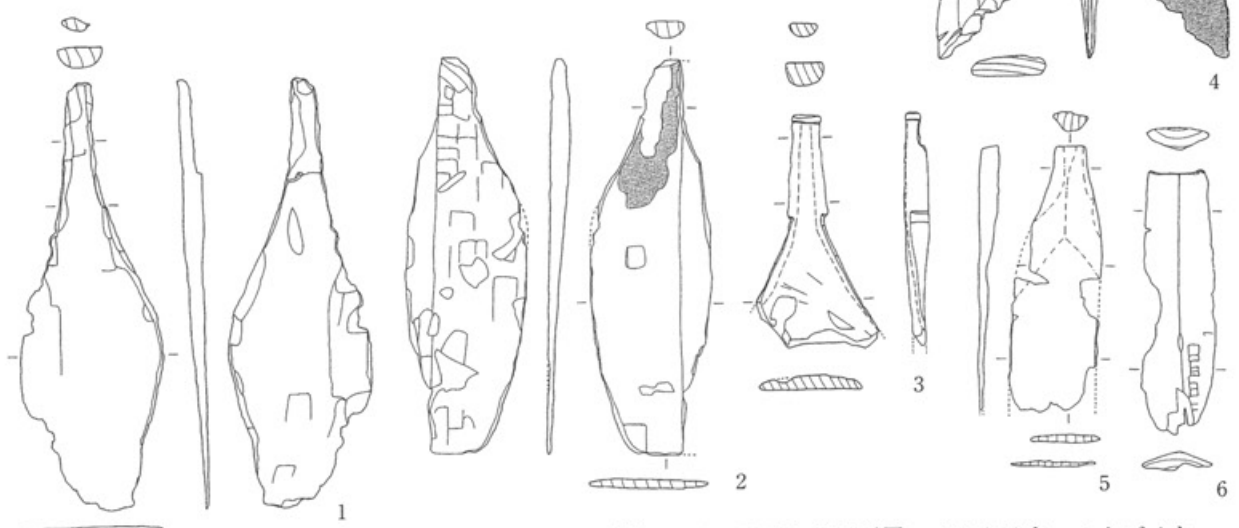
18~20・26・28カシ 25アラガシ

第54図 菅生遺跡木製品 (10~20・29; 1/8, 21~23; 1/12, 24~28; 1/10)





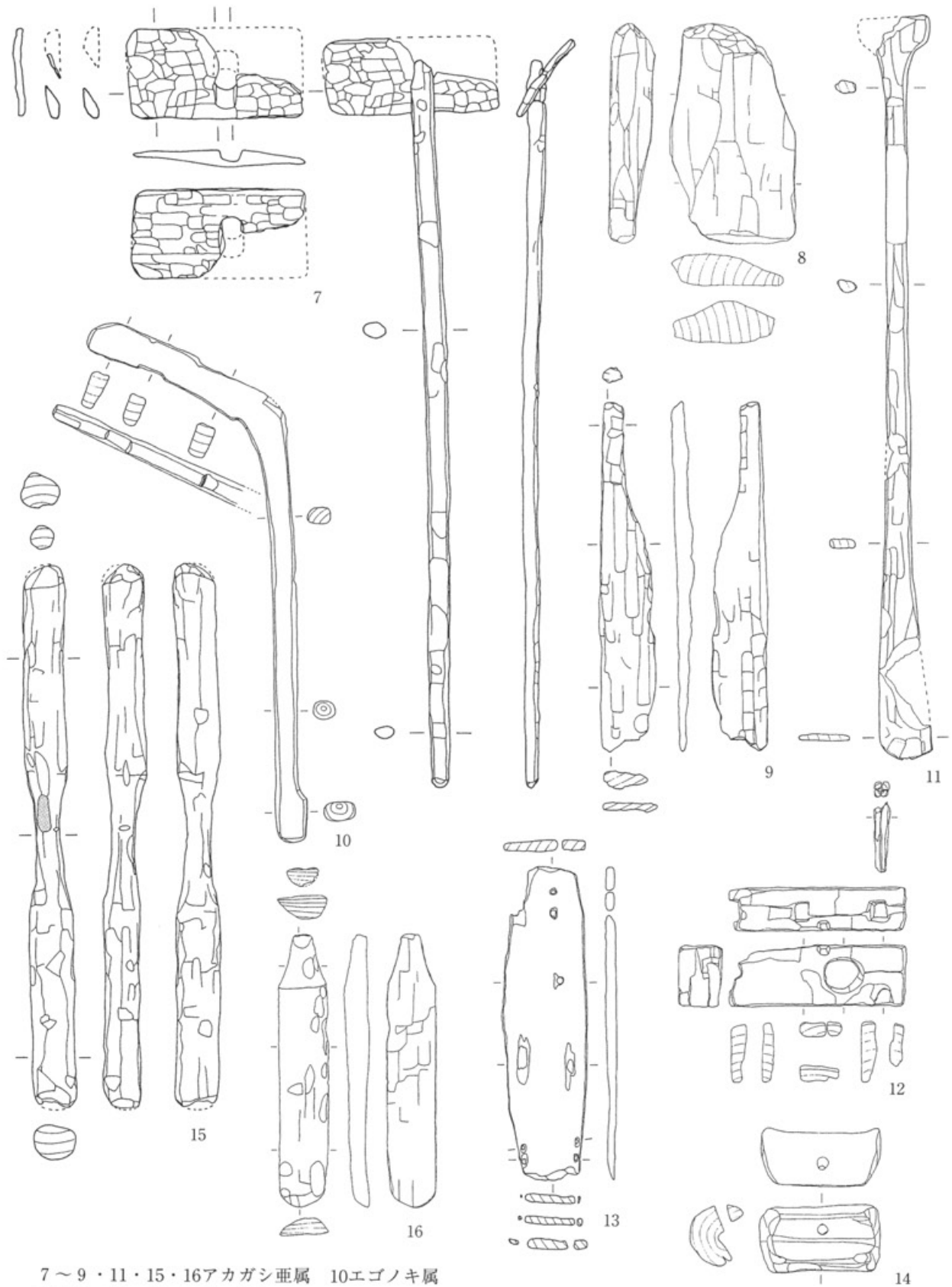
菅生34カシ 37アラガシ  
39エノキ 43サイカチ



郡1~3・5アカガシ亜属 4ムクノキ 6タブノキ

(菅生30・40~44; 1/8, 31・34~39; 1/10, 32・33; 1/6, 郡1/8)

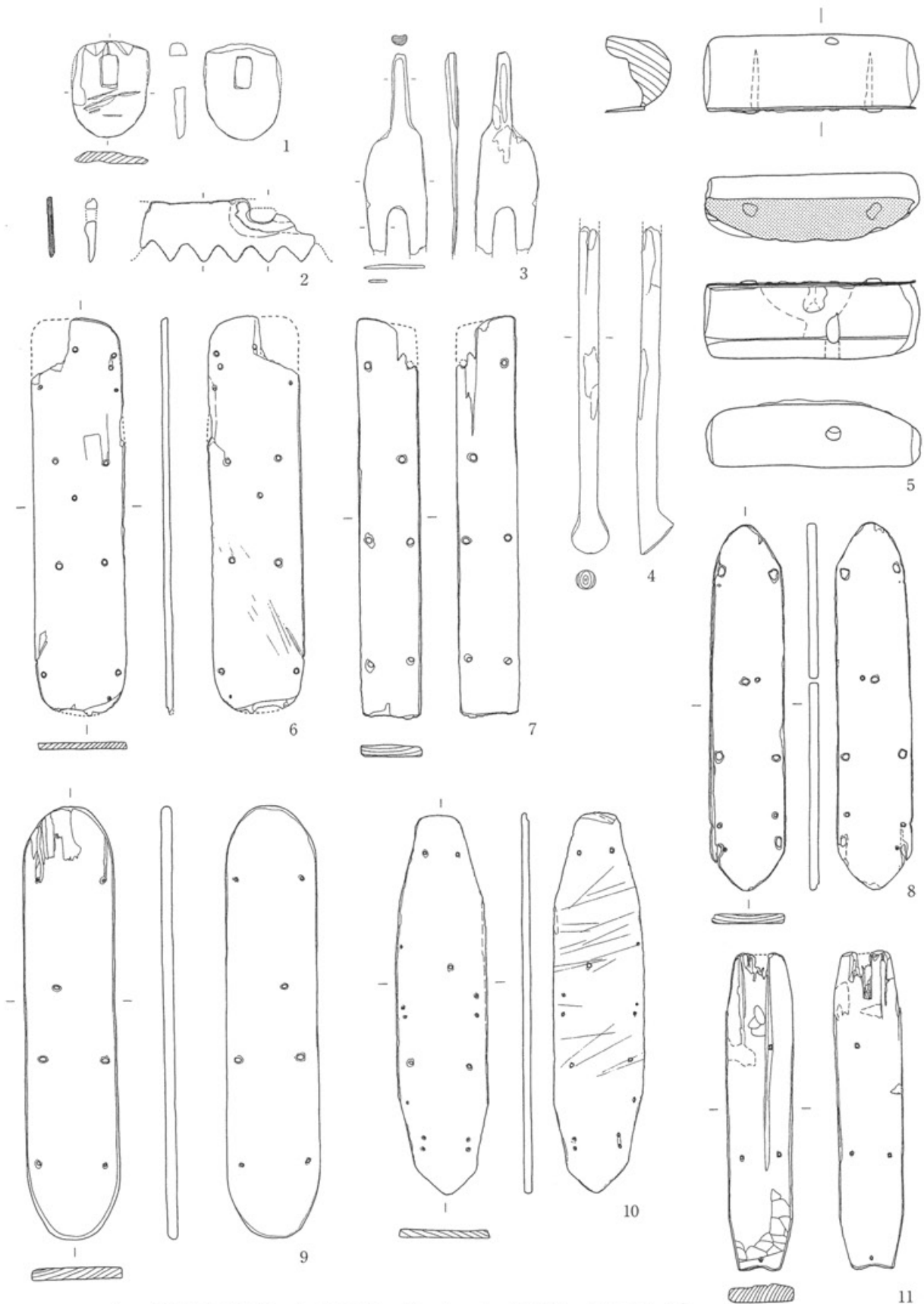
第55図 菅生遺跡・郡遺跡木製品



7～9・11・15・16アカガシ亜属 10エゴノキ属  
12クリ 13ツゲ 14イヌガヤ

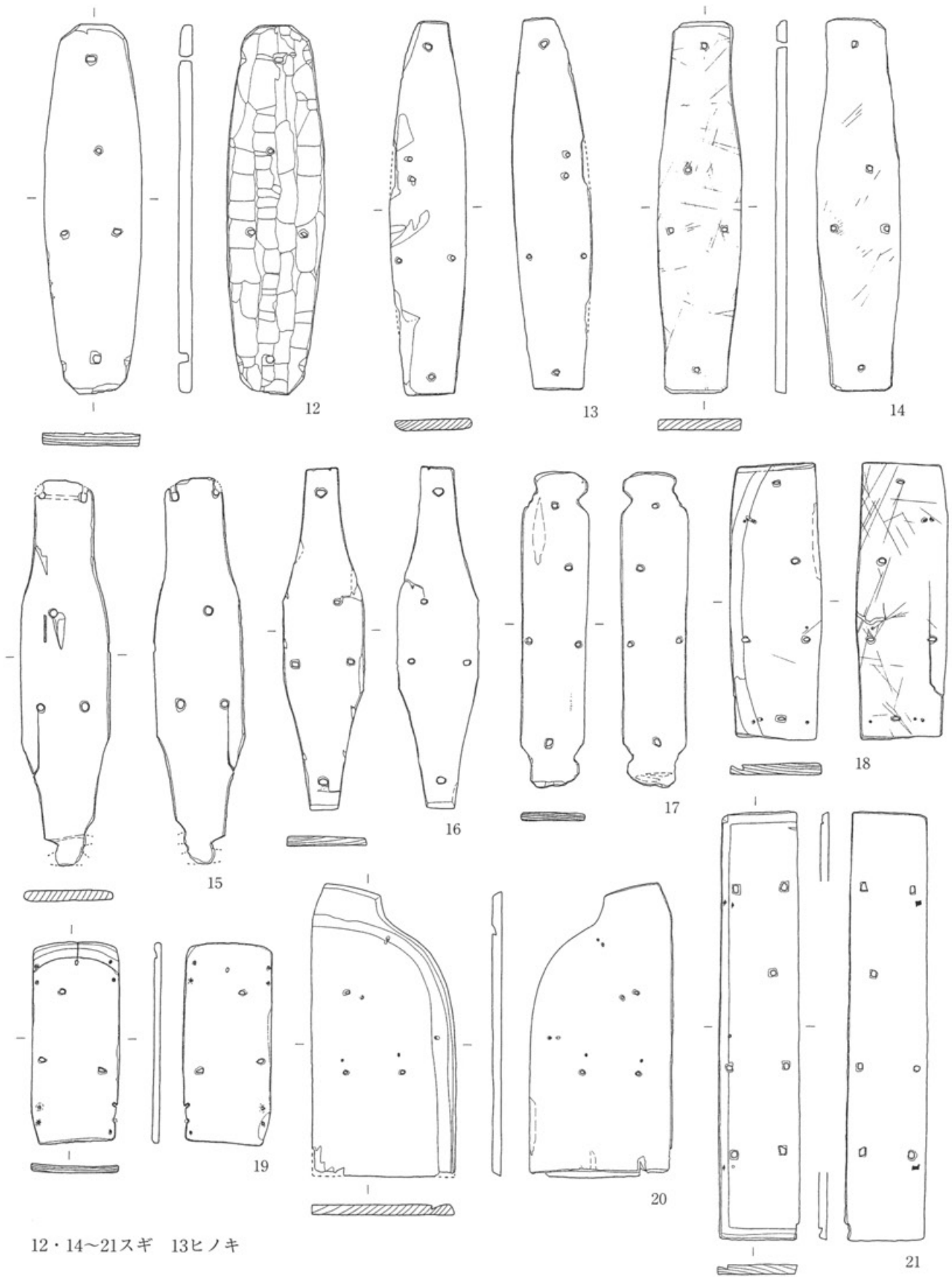
(7・10・13; 1/8, 8・9; 1/12, 11・12・15・16; 1/10, 14; 1/3)

第56図 郡遺跡木製品



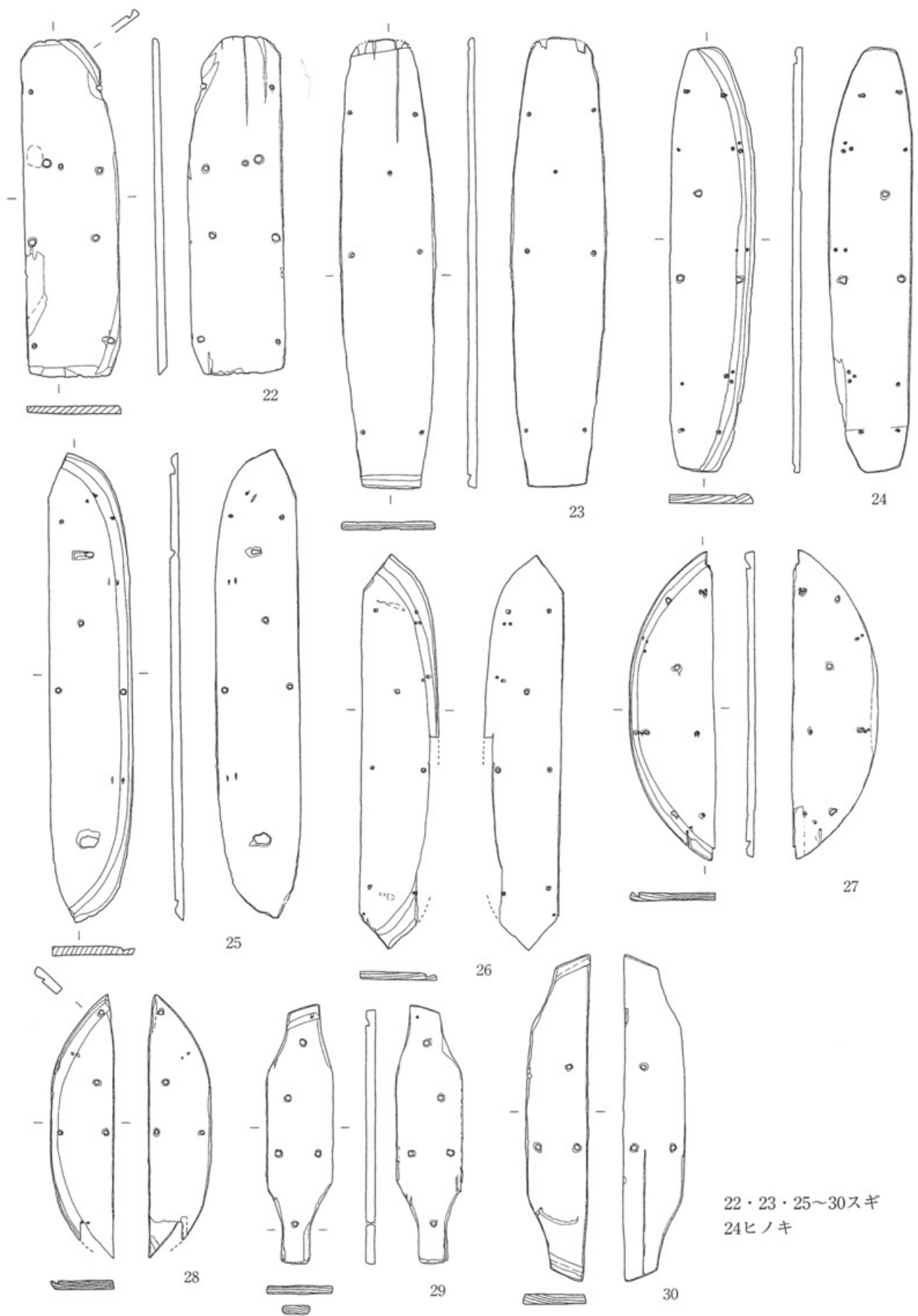
1～3アカガシ亜属 4イスガヤ 5・6・8～10スギ 7・11ヒノキ

第57図 市原条里制遺跡木製品 (1～3・6～11; 1/8, 4; 1/6, 5; 1/3)

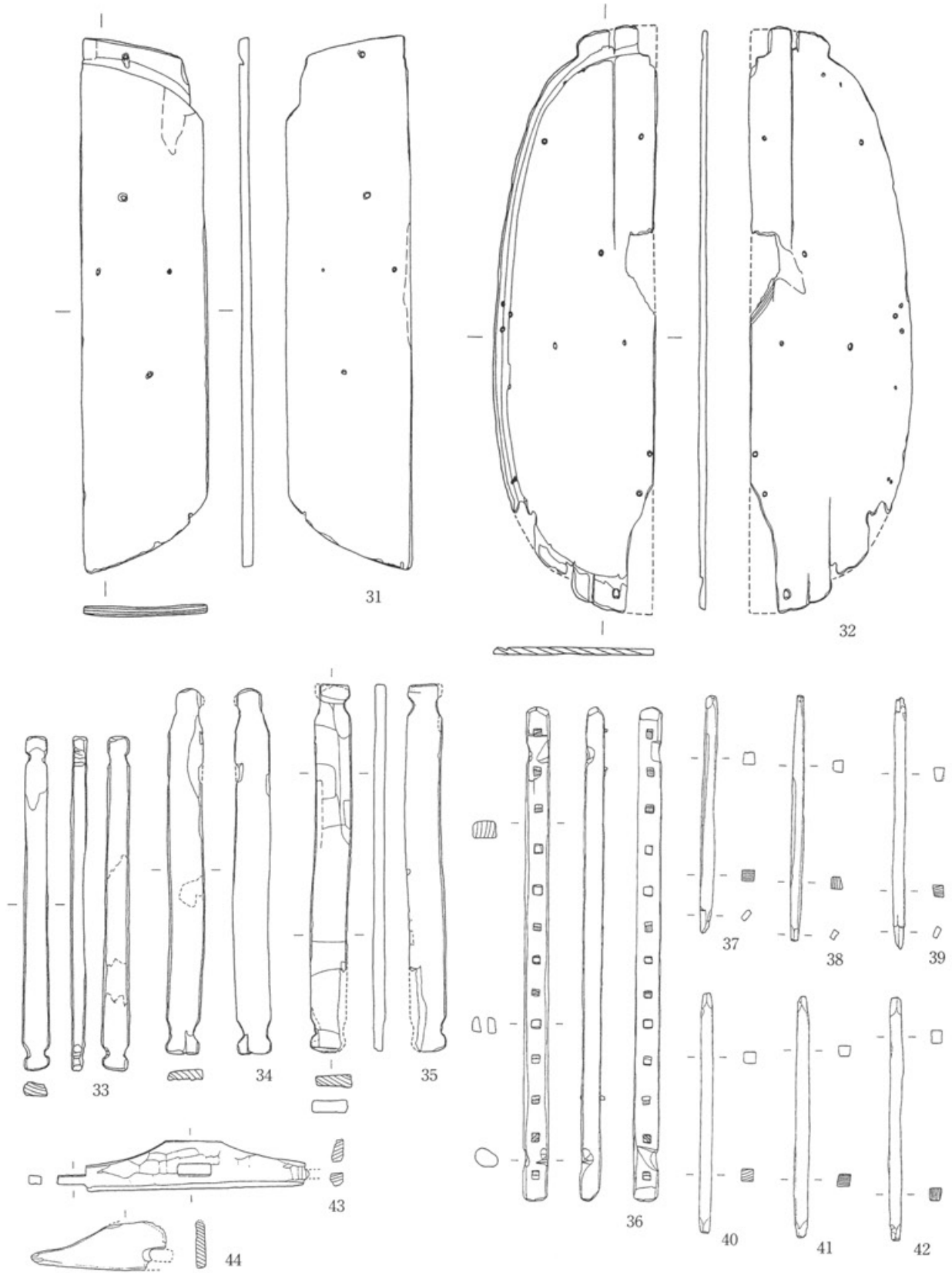


12・14～21スギ 13ヒノキ

第58図 市原条里制遺跡木製品 (1/8)

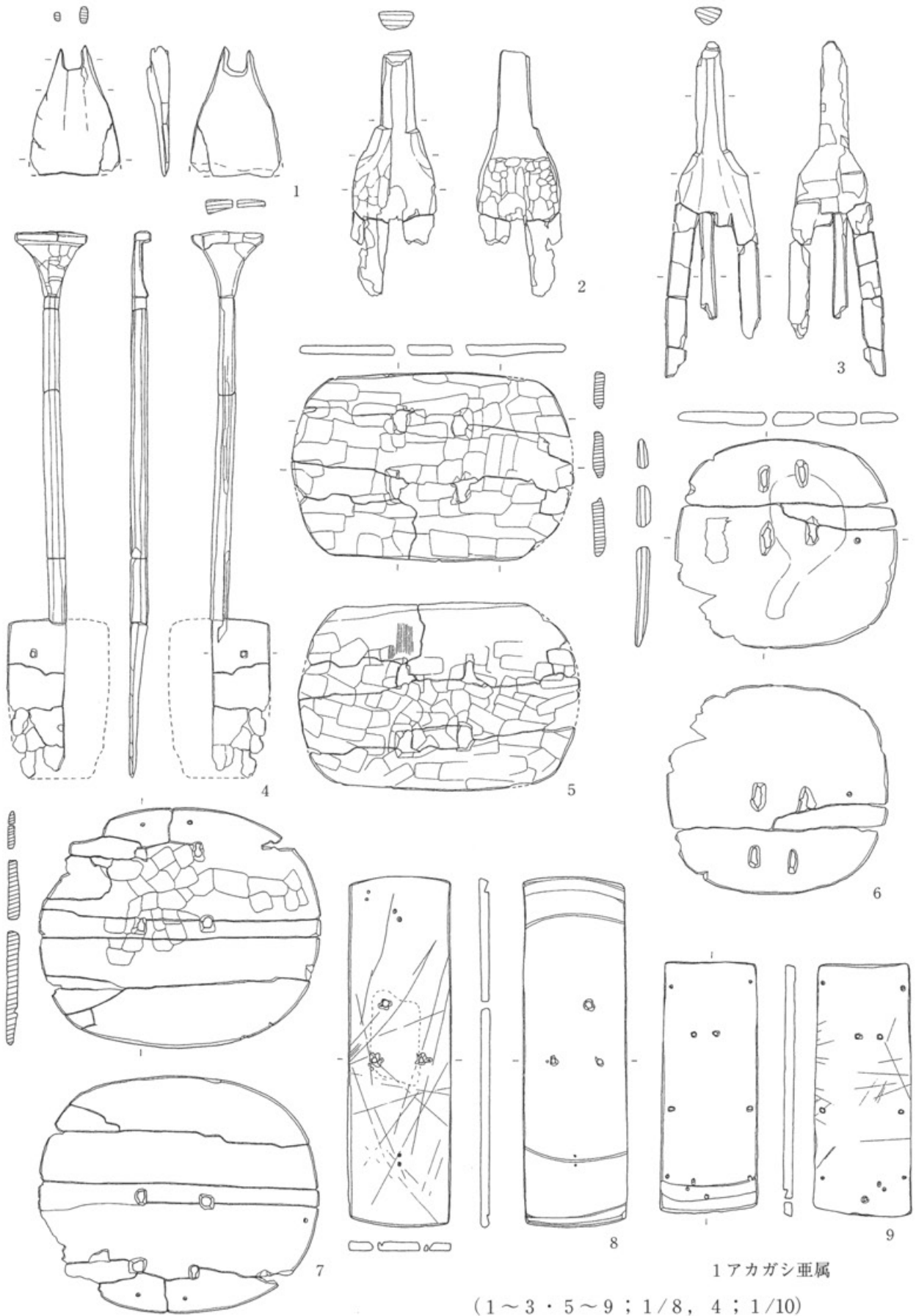


第59図 市原条里制遺跡木製品 (1/8)



31~33・36楔・44スギ 35・37~43ヒノキ 36カヤ

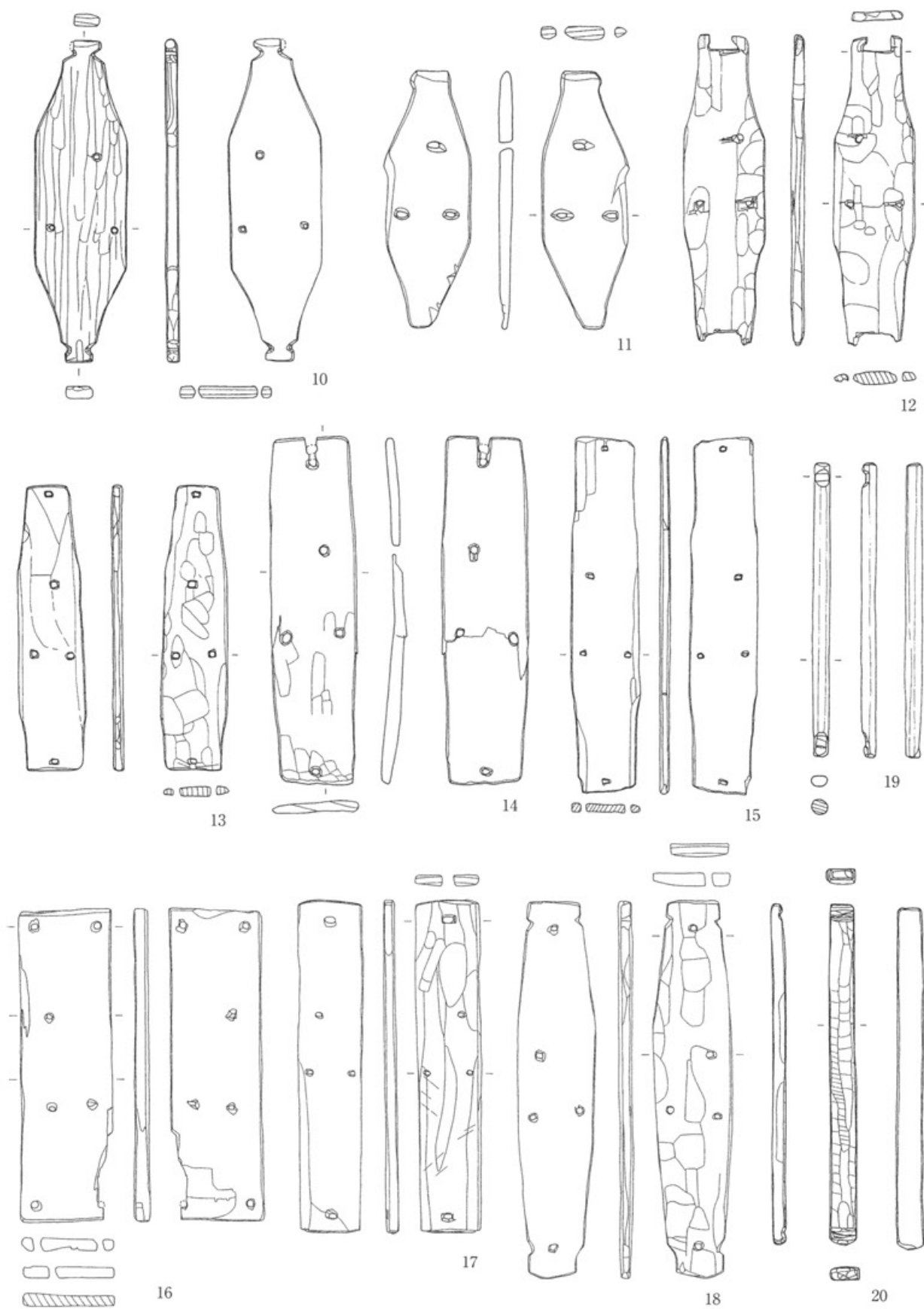
第60図 市原条里制遺跡木製品 (31~35 ; 1 / 8 , 36~44 ; 1 / 10)



1 アカガシ亜属

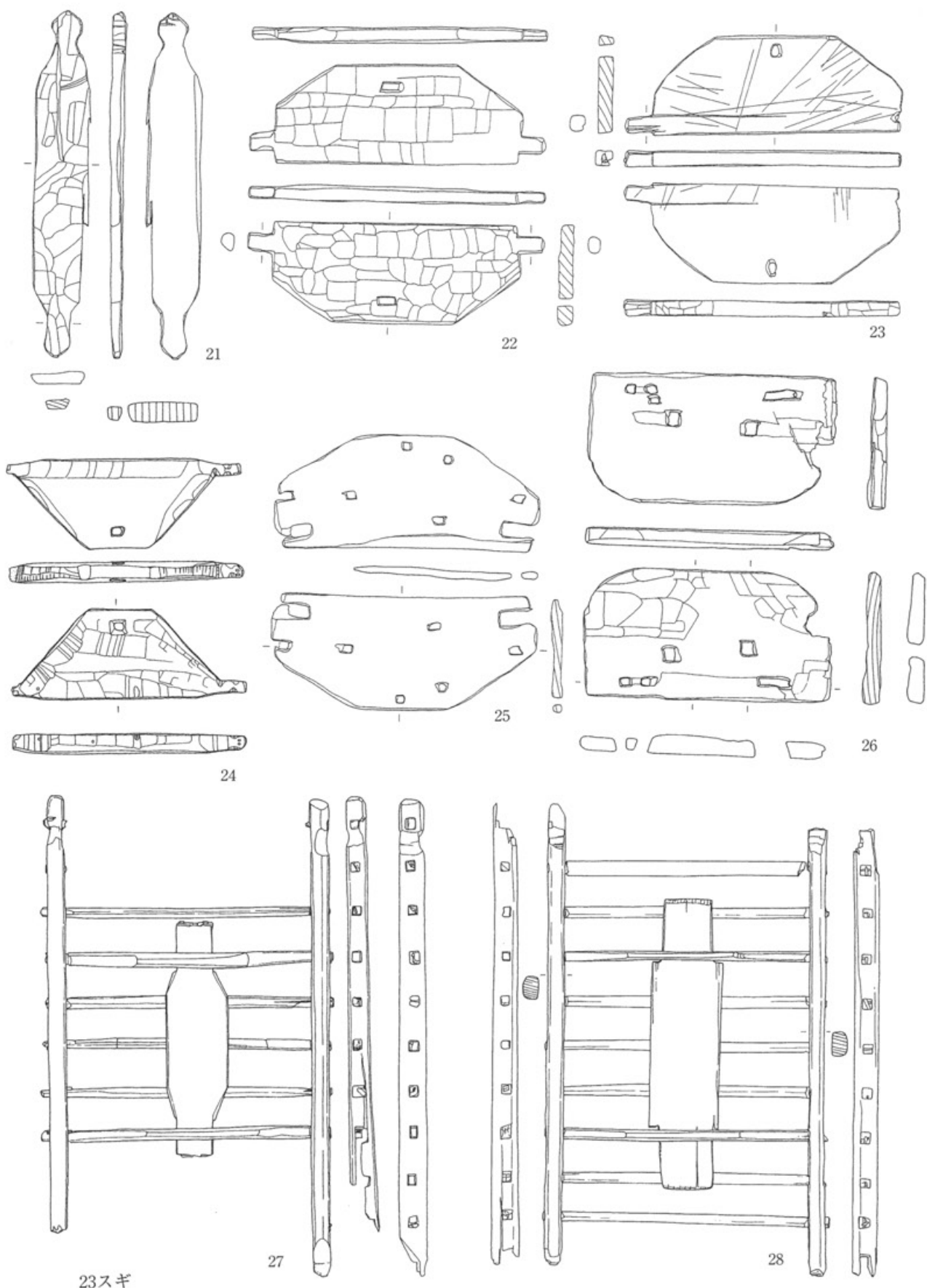
(1~3・5~9; 1/8, 4; 1/10)

第61図 三直中郷遺跡木製品

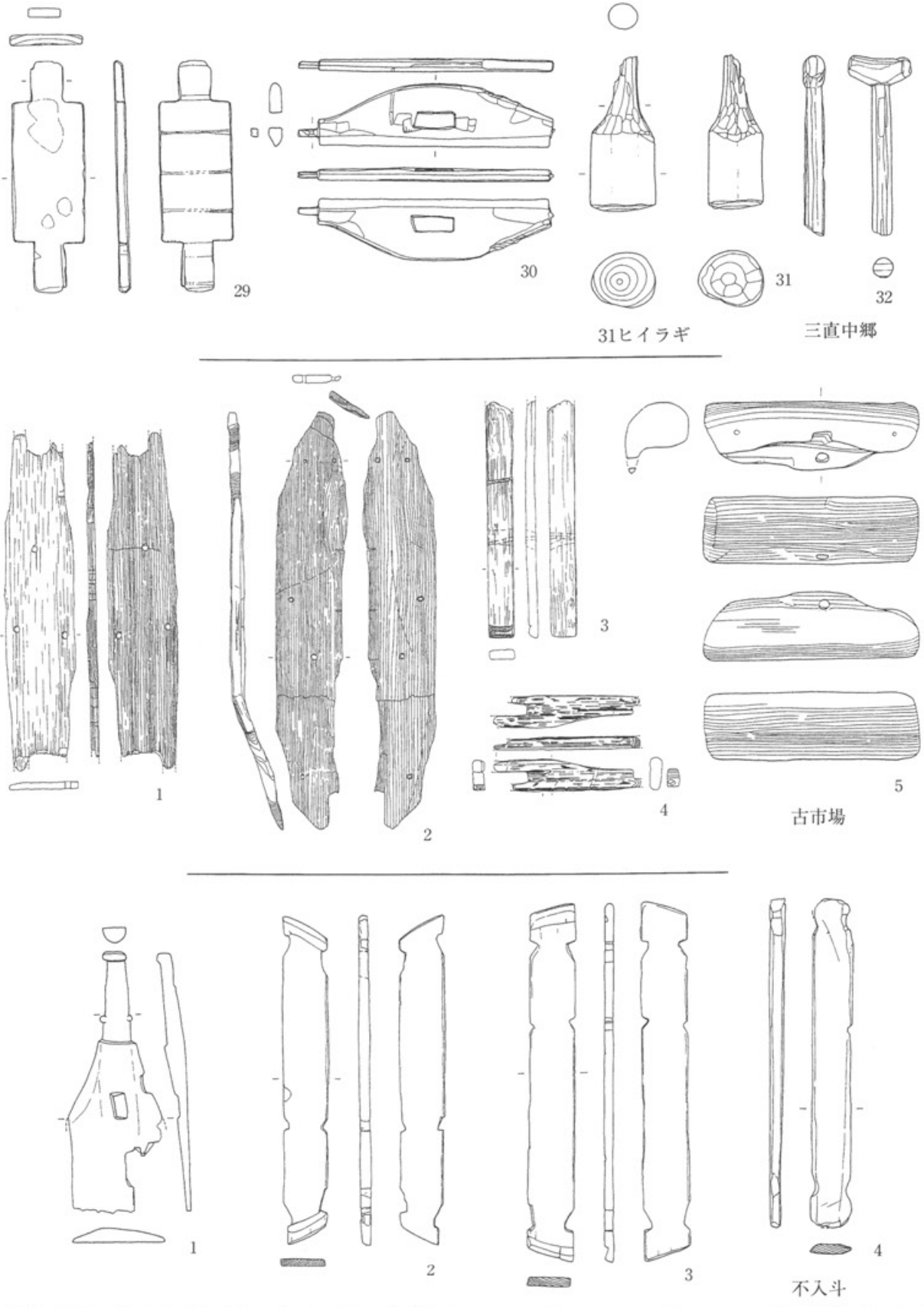


第62図 三直中郷遺跡木製品 (1/8)





第63図 三直中郷遺跡木製品 (21~26 ; 1/8, 27・28 ; 1/10)



(三直中郷29・30；1/10, 31・32；1/8, 古市場1～3；1/8, 4；1/10, 5；1/3, 不入斗1/8)  
 第64図 三直中郷遺跡・古市場(2)遺跡・不入斗遺跡木製品

## 第4章 石製農具－石庖丁状石器について－

渡 辺 修 一

### 1 問題の所在

一般に石庖丁とよばれる、弥生時代に特有の石製穂摘具は大陸や朝鮮半島の穂摘具の系譜上にある有孔磨製石庖丁と、縄文時代晩期の打製穂摘具の系譜上にある打製石庖丁に分類される。前者は突帯文期に初めて日本列島に出現する。朝鮮半島から直接的に将来されたものであることは確実で、北部九州には形態的な特徴が朝鮮半島のそれときわめて酷似するものがある。北部九州では、最初の完成された突帯文土器である山ノ寺式土器の段階で出現し、近畿でも口酒井式土器の段階には確実に存在している。では、突帯文土器から遠賀川式土器という強い共通性をもって、水田稲作文化が伝播、展開する西日本において、広く有孔磨製石庖丁が存在するわけでないこともまた周知の事実である。弥生時代全般にみて、有孔磨製石庖丁が穂摘具として普遍的に用いられる地域は、北部九州、近畿、そして東日本では南東北である。大きくみて3つの地方でしか農具として定着していないことになる。北部九州と近畿は、遠賀川式土器をもつ集団（渡来系集団）が最も拠点的に展開した地域であることによるのであろうか。東日本ではなぜ南東北に限って普遍的な穂摘具として定着したのか、その理由は依然明確とはいえない。

後者の打製石庖丁について、それらがきわめて普遍的に用いられている地域は、いうまでもなく中国地方、中部高地の二つの地域である。中国地方は、縄文時代晩期前半から打製石鎌や穂摘具と考えられる打製石器など石製農具が発達する。この現象は、縄文時代後期末から同種の石器が発達する九州の火山灰台地と共通している。これらの石器が発達する頃、同時に炭化米、粃圧痕、プラントオパールなどのイネ栽培の直接的証拠が知られている。また中部高地でも、晩期後葉と時期は遅れるものの、穂摘具と考えられる打製の横刃形石器や打製石鋏といった石製農具が急速に発達する地域である。弥生時代に打製石庖丁が普遍的に用いられる地域は、縄文時代にすでに打製穂摘具が発達した地域と重複することになる。打製石庖丁は、基本的には縄文時代の石器を引き継ぐ形で生成、展開したとみてよいだろう。

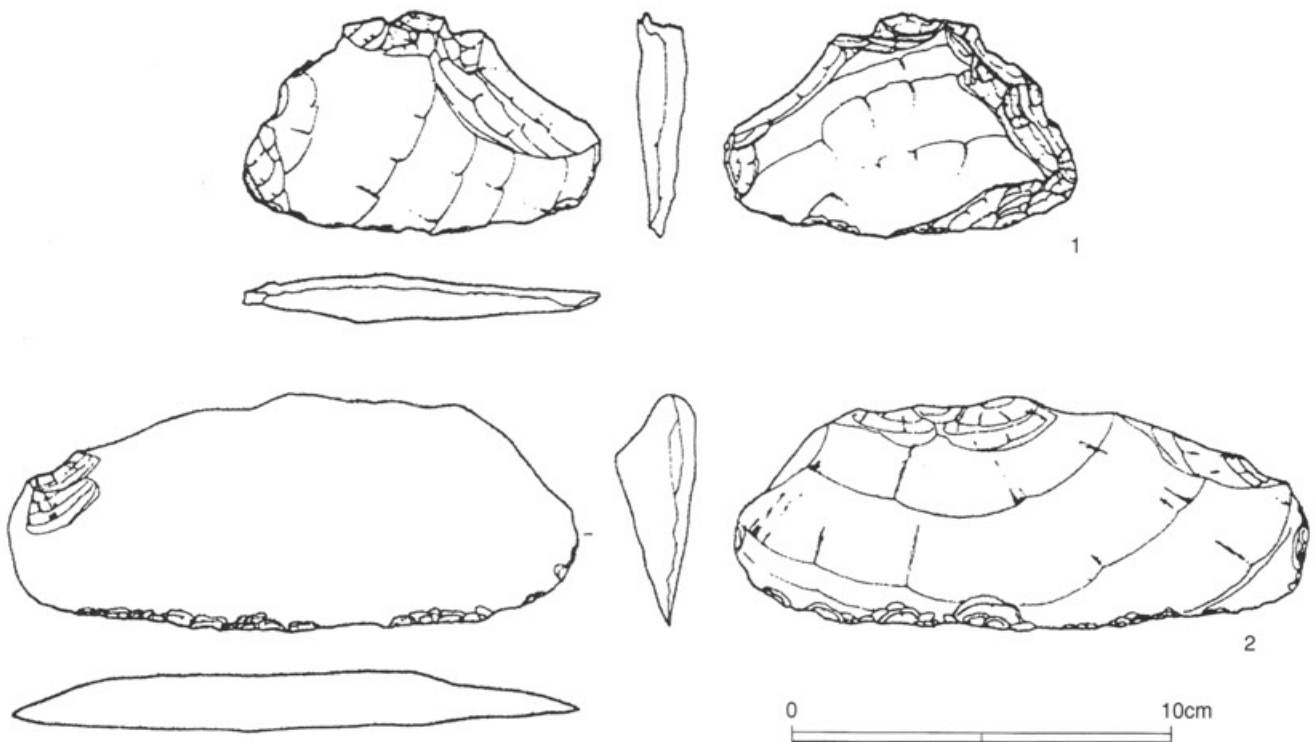
東海地方から南関東地方にかけては、数多くの弥生時代の遺跡が調査されているにもかかわらず、磨製石庖丁も打製石庖丁も主体的な農具として定着した姿はうかがえない。まったく出土しないわけではないが、決して主体的な存在ではなく、この地域は穂摘具が乏しい、あるいは不明とされてきた。とくに神奈川県、東京都、千葉県の3都県は、穂摘具が存在しないに等しい状況であった。しかしながら、かねてより穂摘具として用いられた可能性があると思われてきた石器もある。市原市大厩遺跡や千葉市城の腰遺跡で弥生時代中期後葉、宮ノ台式の竪穴住居跡から出土した砂岩製の長方形の磨製石器がそれで、報告書中にも石庖丁の可能性が指摘されている<sup>1)</sup>。そして近年、同種の石器の出土点数が増えてきた。一般に、粘板岩、砂岩、凝灰岩といった堆積岩を用い、研磨により刃部を整えた長さ数cm、幅数cmから10cm内外、厚さ数mmから1cmほどの石器である。ここではそれらを「石庖丁状石器」と命名し、その分布、時期、石材、製作技法、そして使用痕等について検討し、果たしてどの程度穂摘具としての可能性があるのかを考えてみたい。また、中部高地の打製石庖丁のような定型的なものではないが、加工された刃部をもつ横刃形の石器や大型、粗製の横長剥片の長い縁辺部に刃こぼれ状の微細剥離痕をもつものなども打製石庖丁として報告されており、それらも併せて検討してみたい。

## 2 関東地方における穂摘具の可能性をもつ石器

### (1) I期の石器

ここでは、千葉県を除く関東地方における、穂摘具の可能性をもつ石器について時期を追ってみていくが、時期の呼称については、弥生時代前期をI期、中期をII～IV期、後期をV期とする5期区分を用いておく。対応する関東地方における前期から中期の土器型式は、I期が沖式、荒海3式から4式の古い段階など、II期が岩櫃山式、荒海4式・殿内式の新しい段階、平沢式の古い段階など、III期前半が平沢式、出流原式など、III期後半が池上式、中里式など、IV期が宮ノ台式などである。なお、北関東には一部有孔磨製石庖丁が分布するが、それらについては検討対象から除外する。

I期の代表例として第 図に群馬県藤岡市沖II遺跡出土石器（若狭ほか1986）をあげる。沖式段階の遺物包含層から出土したもので、報文ではスクレイパーI類として報告されている。I類は、「刃部が緩やかな弧を描き突出するもの」と定義され、「薄手のものが多く、刃部作出のための調整はあまり行われていない。円礫への最初の打撃により得られた剥片を素材としているものが多く、表面には自然面、裏面には主要剥離面が大部分残っているものが目立つ。」とされている。第65図1は安山岩製で、長さ60mm、幅95mm、2は凝灰岩製で、長さ63mm、幅151mm、10点ほど報告されているうちの典型的な例である。刃部には細かい剥離痕が連続しているが、企図されたような整ったものではなく、刃部に加えられた加工である可能性と、使用の結果としての刃こぼれである可能性の両者を考慮する必要がある。とくに1については微細な剥離しか認められず、2については刃部中央からやや左に集中的に剥離が認められ、何らかの使用方法の反映である可能性もある。



第65図 I期の石器（藤岡市沖II遺跡）

## (2) II期の石器

II期の石器の代表例として、富岡市七日市観音前遺跡（井上1994）をあげておきたい。ここで取りあげる石器はいずれも40号住居跡出土のものである。この遺構は、3.2m×3.4mの方形で、炉跡や柱穴をもたない。出土遺物は、出土状況から、この遺構に直接伴うもの、廃絶後に覆土内に流入したもの、当遺構に重複して後からつくられた土壌内から出土したものに分けられる。土壌内出土土器には新相を示すものが含まれ、3個体の壺形土器が出土している。壺棺再葬墓と考えられている。それら以外は平沢式土器の最も古い様態を示し、第II様式期の後半に位置づけられよう。図示した石器のうち1が遺構に直接伴うもの、3、5が後から流入した覆土内出土のもの、2、4が壺棺再葬墓に納められた壺形土器の内部から出土したものである。

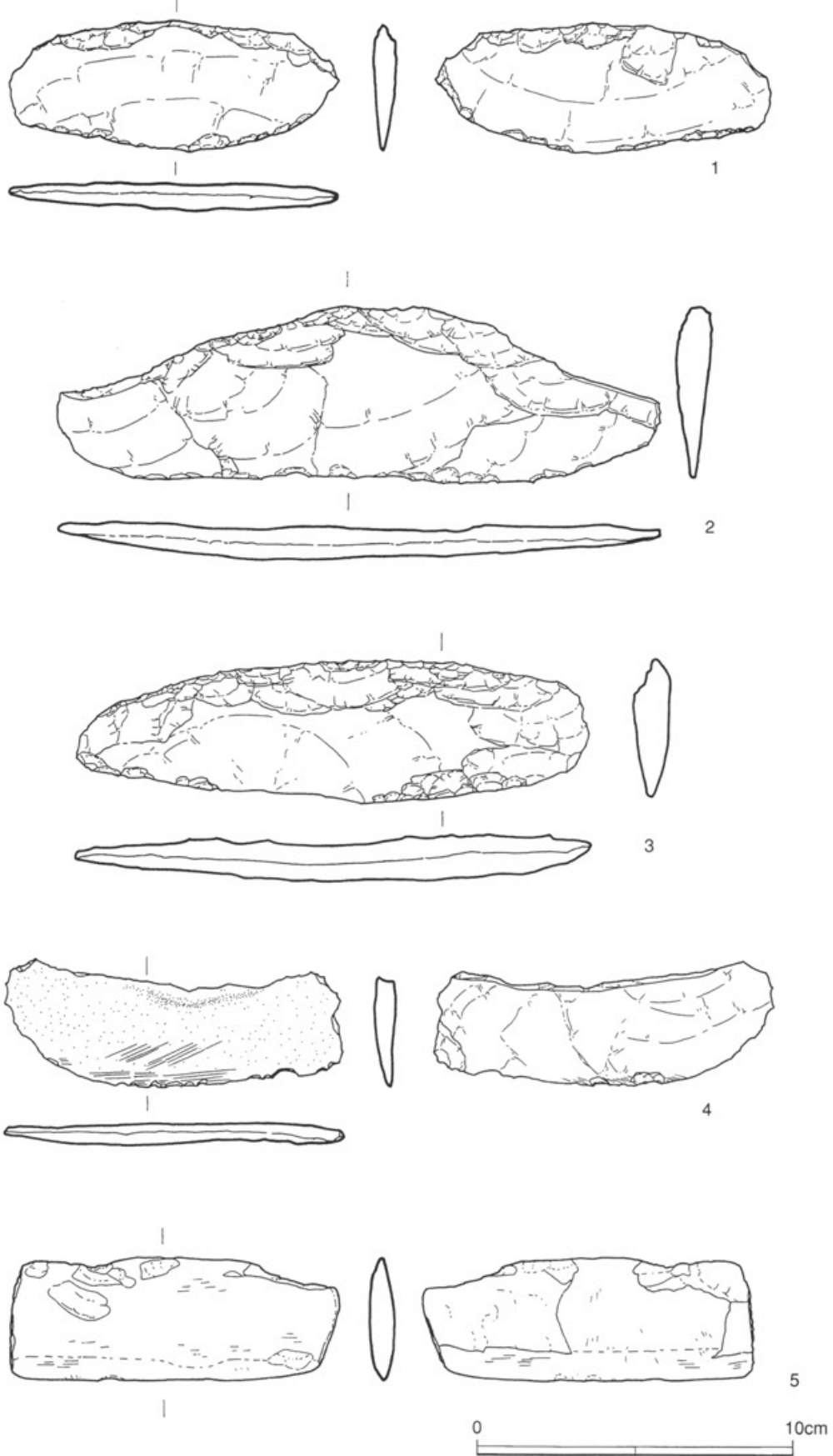
1は流紋岩の粗製剥片製で長さが4.2cm、幅が10.8cmを測る。長辺側の一辺に調整加工を加え、刃部となる対辺には細かい剥離が連続的に、しかし不規則に認められる。2、3はより大型であるが、基本的に同種の石器であると考えられる。やはりいずれも流紋岩製である。第 図では便宜上片面のみしか掲載していないが、刃部の状況は表裏とも同様で、小さめの剥離が不規則に認められる。報文ではこれらの剥離を刃部に加えられた加工と解釈しているが、必ずしもそうとは限らないといえよう。4も流紋岩製で片面前面に原礫面を残す粗製剥片を利用している。刃部の広い範囲に細かい剥離が認められる。また刃部にはそれに平行あるいは斜行する擦痕が観察される。使用痕と報告されているが、刃部の研磨痕とみるべきではないだろうか。5は最も注目される石器である。砂岩製でほぼ長方形を呈し、全面が研磨されて、長辺の一辺に両刃の刃部を形成している。ただし、使用痕は認められない。この石器は、選択される石材や形態など、東海東部から南関東にかけて出土する磨製の石庖丁状石器と同じであり、この石器がII期に帰属するとすれば、最も古い年代が与えられる点で注目される。

## (3) III期の石器

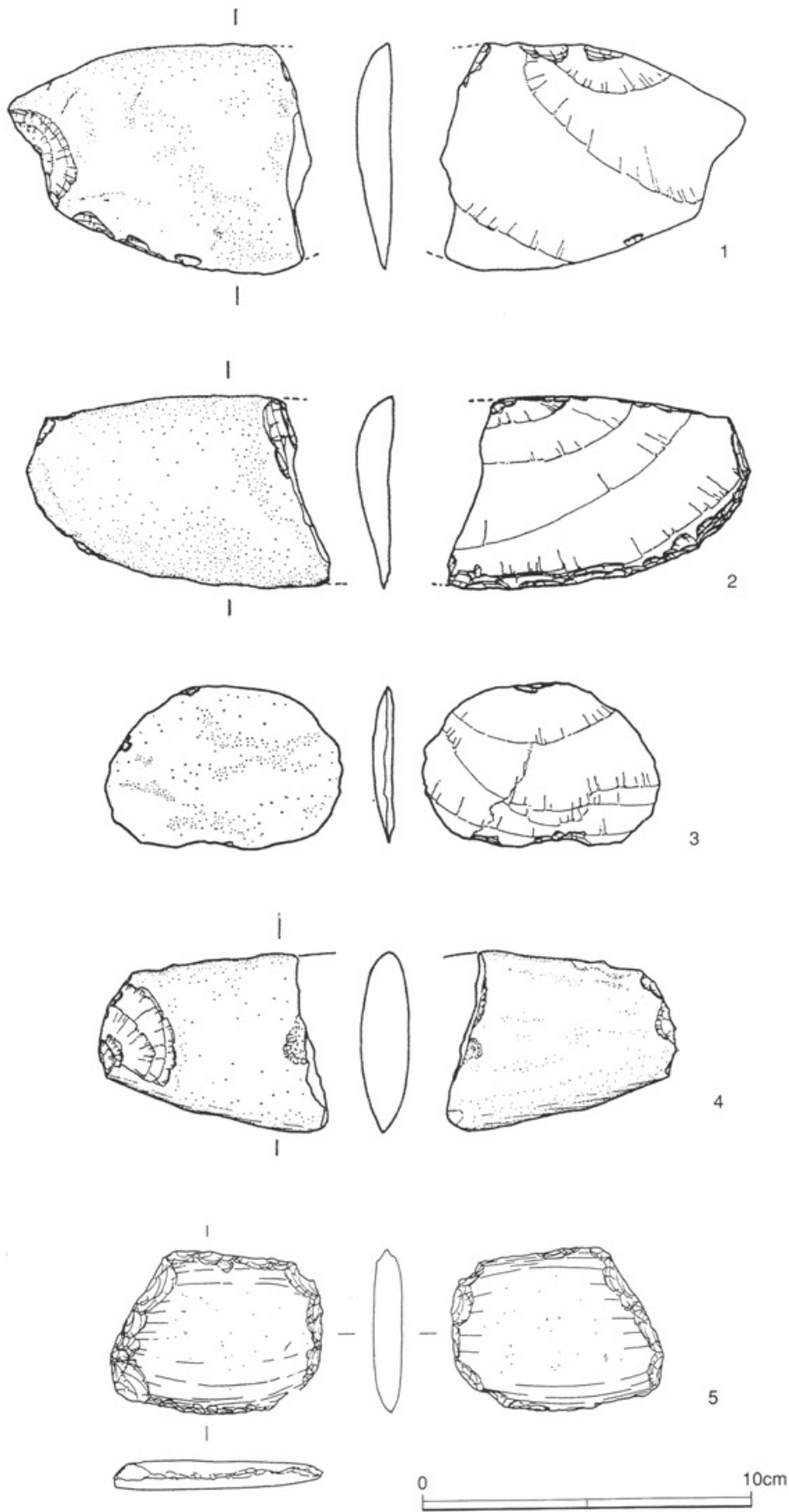
III期の石器の代表例として、熊谷市（一部行田市）池上遺跡（中島ほか1984）、秦野市砂田台遺跡（穴戸ほか1989）の例をあげる。第67図1～4が池上遺跡、5が砂田台遺跡のものである。いずれもIII期後半池上式期に位置づけられる。

池上遺跡では同種の石器が1号環濠、2号住居跡、5号住居跡、10号住居跡から出土している。ここでは10号住居跡の出土資料を例示する。このうち、1～3は打製石庖丁として報告されている。いずれも片面に原礫面を残す貝殻状粗製剥片を素材とし、末端側の縁辺部を刃部として使用している。1及び3は刃部に細かい剥離がみられるのみで、それらは刃こぼれによるものであろうと考えられる。2は腹面側末端全体に小剥離が連続しているもので、剥離角は小さく、刃部形成を目的とした加工である可能性が高い。4は磨製石庖丁として報告されている。遺存部の左端に調整痕が残されているほかは全面が研磨され、とくに下端が丁寧に研磨されて両刃の刃部が形成されている。

砂田台遺跡の資料は21号土坑から出土したものである。この土坑は、宮ノ台式期の25号住居跡によって切られており、出土土器は池上式の特徴を有するものである。土坑は約1.3m×1.2mのほぼ円形のプランをもち、報文では否定的であるが、墓壙の可能性も否定できないと考えられる。石器5は砂岩製で、幅が約6.5cmのやや小ぶりなものである。ほぼ全体が研磨され、辺に両刃の刃部が形成されている。刃部以外の縁辺部には小剥離が連続的に観察される。この石器の形状及び製作技法は、池上遺跡の4に共通するもの



第66図 II期の石器 (富岡市七日市観音前遺跡)



第67図 Ⅲ期の石器（1～4：熊谷市・行田市池上遺跡，5：秦野市砂田台遺跡）

があり、やはり注目に値する。

#### (4) IV期の石器

IV期の例として横浜市折本西原遺跡（石井ほか1980）及び逗子市池子遺跡群No.1-A地点（山本・谷口1999）出土資料をあげる。第68図1～5が折本西原遺跡、6～9が池子遺跡群No.1-A地点から出土したものである。いずれも、IV期宮ノ台式期の所産である。

1はY2号住居址から出土したもので、細粒硬砂岩製。ごく一部しか遺存していないが、全面が研磨され、とくに刃部が丁寧に研磨されている。報文中に、神沢勇一氏が無孔石庖丁の可能性を指摘したと記載されている。この石器は、千葉県で数多く出土している石庖丁状石器と同種のものである。2はY8号住居址、3はY28号住居址、4はY35号住居址から出土したもので、非常に共通性の強いものである。2が細粒凝灰岩、3、4が輝緑岩製で、いずれも片面に原礫面を残した粗製貝殻状剥片を素材としている。また、長さが5cm内外、幅が8cm内外と大きさも揃っている。2の打面部付近に調整と考えられる剥離が認められる以外は調整剥離はない。末端側が刃部となり、そこには使用痕と思われる刃こぼれ状の細かい剥離が観察される。Y36号住居址から出土した5も素材の用い方や形状では共通性があるが、刃部の作出を含む調整がほぼ全周している点が異なる。折本西原遺跡の場合、一遺構で数多くの該種石器が出土しているわけではないが、全体として池上遺跡の石器に特徴や組成が似ているといっていよう。

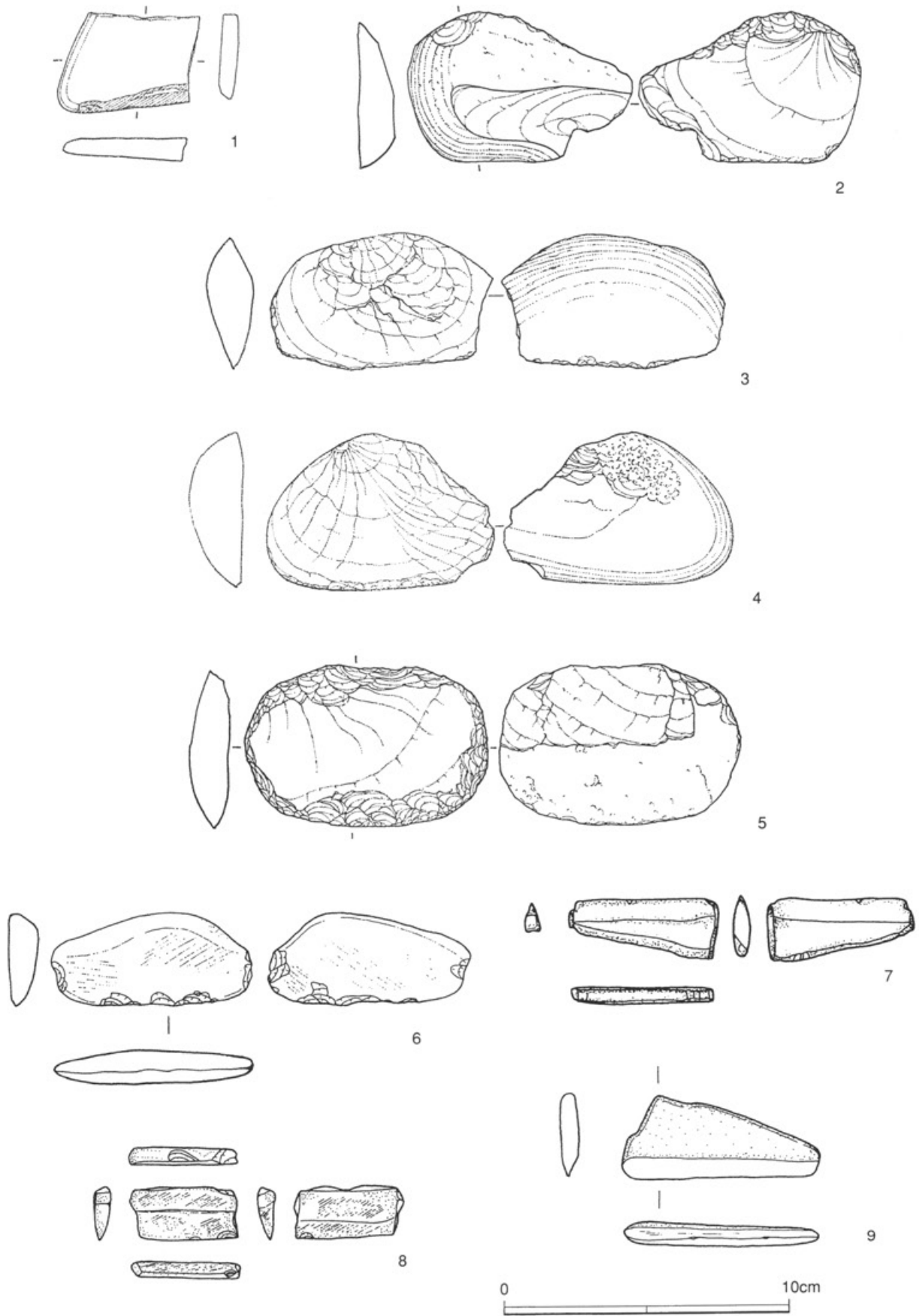
池子遺跡群No.1-A地点の場合、ここで取り上げた石器はいずれも穂摘具とは無関係な石器として報告されている。7が第2号竪穴住居址から、6、8、9は旧河道からの出土で、出土状況から宮ノ台式土器に伴うものであると考えられる。6は、ホルンフェルス自然礫の形状を生かしながら、研磨によって仕上げた石器で、左右両端に剥離を加え、刃部には不規則な小剥離が連続的に認められる。「横刃形石器とするよりか、扁平片刃石斧の原材・未製品の可能性が強い」と報告されているものの、長さ3.4cm、幅7.2cmという大きさや形状からは穂摘具の可能性も捨てきれないものである。7～9はいずれも砥石として報告されているものである。砂岩製で両刃の刃部を形成することで共通する。報文中にも「長辺部分の片側は直線的であたかも両刃状を呈し、ここを刃部として使用した横刃形石器にも思えるが、砂岩製ということもあり、おそらく骨角器等の製作時における細部の研磨に使用したととらえておく」とされている。これまでにみた他遺跡の例や千葉県出土の石器に類似するものがあるとはいえ、それらと比較するといかにも小ぶりである。とくに7、8は穂摘具として用いた場合、手になじむ大きさでない。しかし、砥石であった場合も、どのような使用法を考えるのか検討を要する。

#### (5) 静岡県の石器

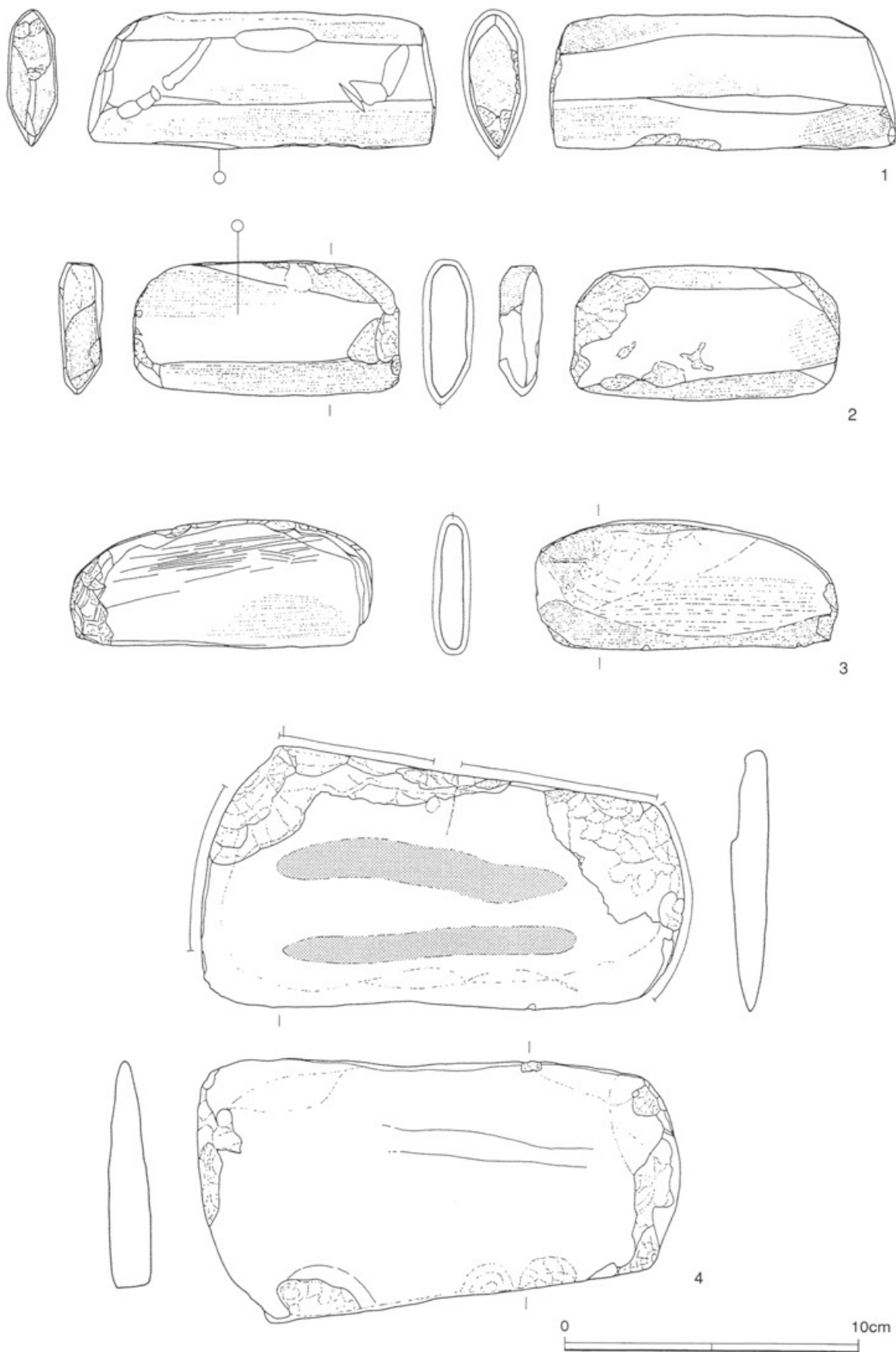
静岡県においても、有孔磨製石庖丁は主体的に分布せず、わずかに数例を除いて出土していない。それに代わるかのように、粗製の剥片を用いた横刃形の石庖丁状の石器や、研磨によって刃部が作り出された石器が数多く出土している。

同種の石器が多数出土した静岡市川合遺跡を調査した財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所は、東北大学文学部考古学研究室石器使用痕研究チームと共同で、静岡県出土の石庖丁及び石庖丁状石器の使用痕観察を行い、その結果、孔をもたない石庖丁状石器については穀物の収穫に特有の擦痕が認められず、より硬質な物質との摩擦による擦痕しか認められないという結論を出した（山田・山田1992）。ここでは、代





第68図 IV期の石器 1 (1～5：横浜市折本西原遺跡, 6～9：逗子市池子遺跡群No.1-A地点)



第69図 IV期の石器2 (1・2：藤枝市郡遺跡, 3：藤枝市上藪田・川の丁遺跡, 4：清水市能島遺跡)

表的ないくつかの資料を図示し、顕微鏡による観察結果とは別に、資料を実見した際の所見も含めてここで振りかえてみよう。なお、第69図に取りあげた石器はいずれもⅣ期、白岩式期もしくは有東式期のものである。

川合遺跡の報告時点で集成された関連資料は81点にのぼる。そのうち有孔磨製石庖丁及びそれと推定されるものは4点しかなく、ほかは粗製の剥片を用いた打製の石器、主として砂岩を用いて研磨によって刃部を形成する磨製の石器の二者が圧倒的多数を占めている。それらが高倍率の金属顕微鏡によって観察された結果、軟質かつしなやかな植物茎を擦り切った時に生じる特徴的な光沢面が形成されているのは有孔磨製石庖丁に限定されることが判明した。また、肉眼観察では同種の光沢面が形成されているように見える打製の石器、砥石に類する石材を用いる磨製の石器、いずれの場合においても、硬質な対象物との接触の痕跡しか観察されていない。

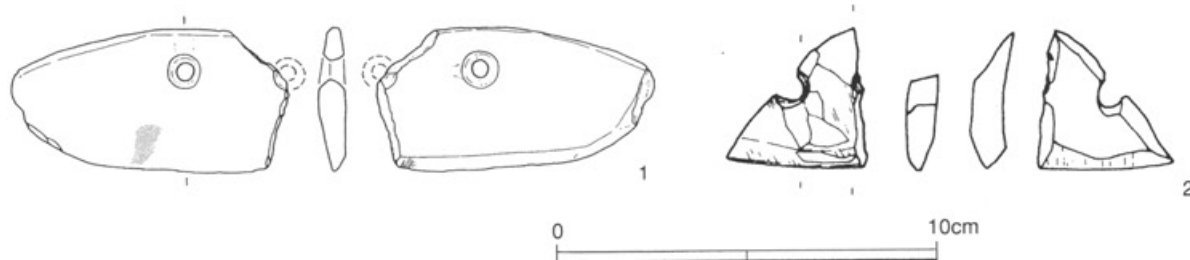
静岡県出土資料のうち、千葉県で類似品が出土している磨製の石器として、藤枝市郡遺跡、藤枝市上藪田・川の丁遺跡、静岡市川合遺跡、清水市能島遺跡の出土品を観察したところ、川合遺跡の小型品を除いて、共通する特徴を見出すことができた。第69図1は郡遺跡の出土資料である。幅12cm程度の長方形を呈する石器で、丁寧な研磨により両刃の刃部が形成されている。その刃部の中央から左寄りに緩やかな凹みが認められ、そしてそれはその部分がより強く磨耗することによって生じていると判断された。同じ石器の裏面からみると、ほぼ同じ位置に凹みが認められるが、その部分にのみ小剥離が連続している。刃部中央からやや左寄りの位置は、右手で石器を握った際に親指がかかる位置に相当する。2は同じく郡遺跡、3は上藪田・川の丁遺跡から出土したものである。これらは表面からみた左寄りのみ磨耗が強かったが、いずれにせよ、幅10cm内外のこれらの石器には、共通する強い磨耗箇所（場合によっては剥離が生じる）が存在することがわかる。4は能島遺跡の出土資料で、該種石器のなかではひときわ大型のものである。これは片手で握るにはやや持て余し気味のサイズであるが、この石器も刃部のほぼ中央に強い磨耗が観察される。強い磨耗部分はやはり握った際に親指がかかる位置とみて間違いはない。

### 3 千葉県における穂摘具の可能性をもつ石器

#### (1) 有孔磨製石庖丁

ここから千葉県の出土資料を、隣接地域の石器と比較しながらみていくこととする。まず、県内で2点出土している有孔磨製石庖丁を図示した(第70図)。

1は館山市笠名遺跡で採集されたと伝えられているものである(小高・渡辺1989)。出土地点等が明確ではないが、同遺跡はⅣ期宮ノ台式期の遺跡であるとされており、時期はⅣ期である可能性があると考えられる。粘板岩製で、遺存部の長さ3.8cm、幅7.3cmを測り、全体として長楕円形を呈し、紐穴は2孔で孔



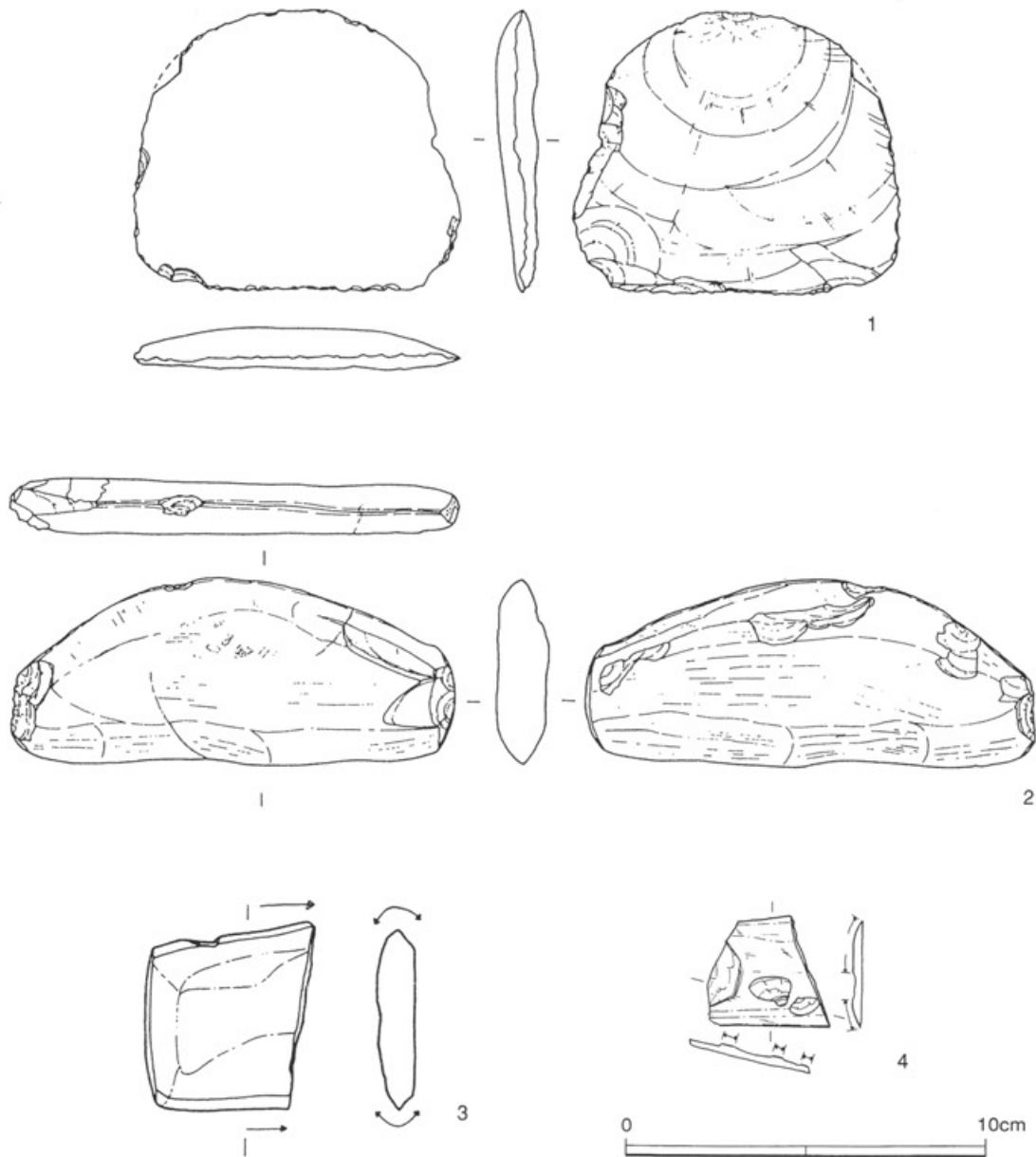
第70図 千葉県の石器1 (1:伝館山市笠名遺跡出土, 2:佐倉市六崎大崎台遺跡)

部から欠損して半分近くを欠失している。刃部は全体としては両刃としてもよいかもしれないが、刃端では片側から強く研磨されており、基本的に片刃と考えておきたい。紐擦れの痕跡や光沢面がまったくうかがえないわけではないが、それらは明確ではない。それは全体として磨耗が進んでいるからで、欠損部の稜も丸みを帯びている。おそらく手擦れと考えられ、垂飾として転用された可能性も考慮しなければならぬまい。

2は佐倉市六崎大崎台遺跡から出土したもので、唯一の発掘資料である（柿沼ほか1987）。2孔の紐穴それぞれで欠損して、刃部を含むごく一部のみが遺存したにすぎない。

(2) 常代遺跡の石器

第71図には君津市常代遺跡（甲斐ほか1997）の出土石器を図示した。1は古墳時代以降の溝状遺構から



第71図 千葉県 of 石器 2 (君津市常代遺跡)

出土したもの、2及び3がⅢ期後半からⅣ期にかけての大溝から出土したものであるが、1も本来大溝に帰属した可能性が高い。4はⅢ期後半の土坑から出土したものである。

1は珪質砂岩の大ぶりの粗製貝殻状剥片を素材としたもので、ほとんど加工はなく、末端をそのまま刃部として用いたものである。長さ7.9cm、幅9.1cmを測る。刃部は直線的で、細かい刃こぼれ状の使用痕が観察される。池上遺跡や折本西原遺跡で主体的な石器と同種のもので、千葉県では現在のところほぼ唯一に近いといえる。2は長さ5.2cm、幅12.3cmを測る磨製の石器で、砂岩製である。左右両端に剥離を加えるほかは全面が研磨されており、刃部は両刃である。左右端に剥離が加えられる点、最大長が中央にあり、端部で短いことなどは池上遺跡の磨製品によく似ている。この石器の刃部は、表面からみた場合の中央から左寄りかとくに磨耗して緩やかな凹みを形成している。3は砂岩製の両刃の欠損品。4は粘板岩製の小型品で、刃部は片刃である。

### (3) 恩田原遺跡の石器

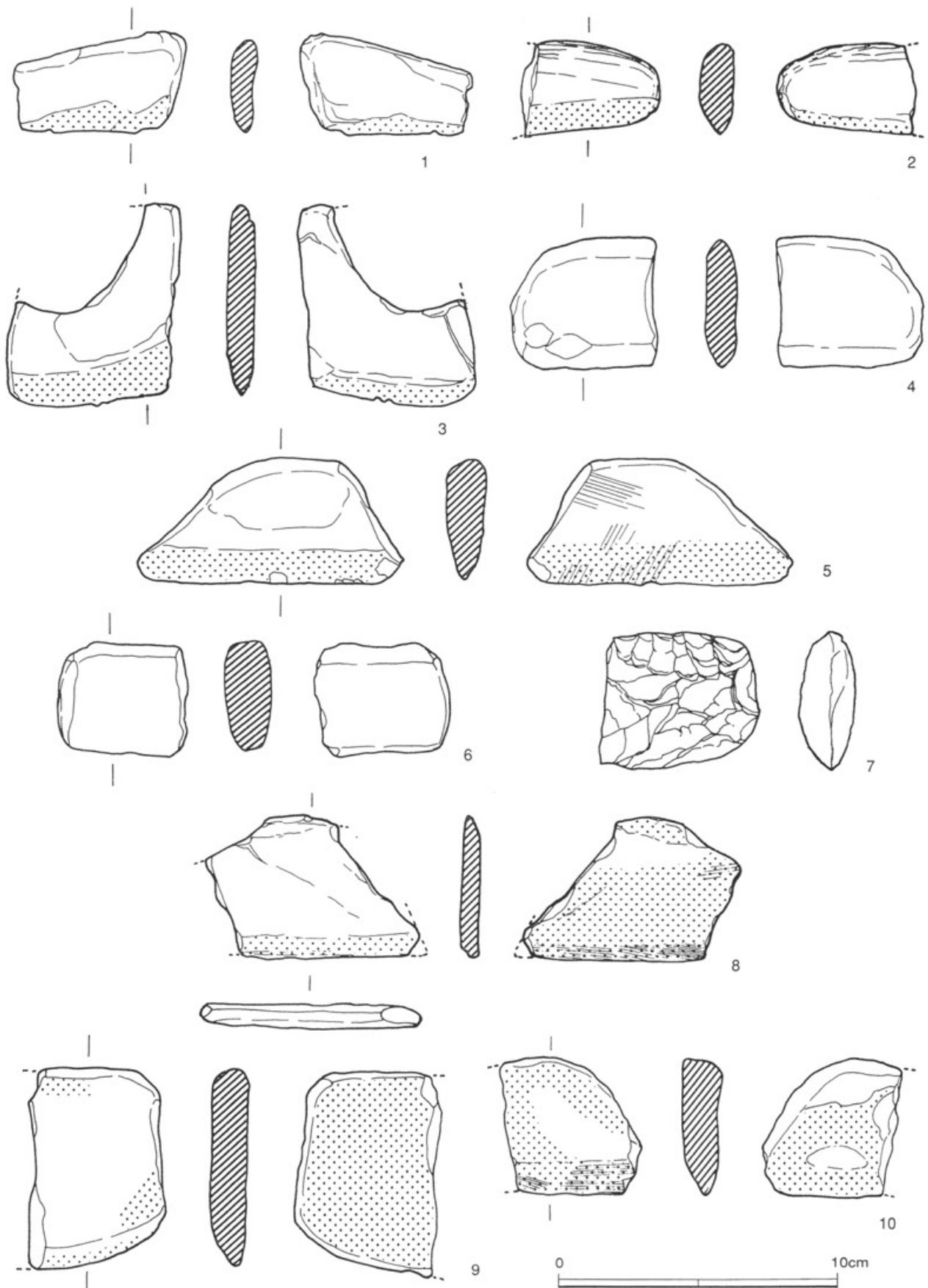
第72図には富山町恩田原遺跡（安藤・松田1998）の出土石器を示した。1は溝状遺構SD-5、8～10は祭祀跡SX-1、それ以外は遺構外から出土したものである。遺構内外から多量の宮ノ台式土器が出土していることから考えて、これらの石器はⅣ期宮ノ台式期の所産であると考えられる。

石器はいずれも房州産の砂岩製である。図示した石器のうち、刃部が形成されていない6、剥離面で覆われて研磨されていない7が未製品と報告されているほかは、全面が研磨されて両刃の刃部が形成されている。それらのなかで5は唯一の完形品で、長さ4.4cm、幅9.4cmを測る。刃部を中心に斜位の線条痕が認められ、刃部形成または刃部再生のための研磨痕と考えられる。また、刃部の表面側を観察すると、中央から左寄りにかけてやや磨耗の強い部分が認められ、使用痕の可能性はある。形態的には5、8にみられるような刃部側が長い横長の台形のもの、1、2、4など横長の長方形ないし長楕円形となるものに分類されるが、3のように刃部幅が短く縦長の長方形になるものもある。

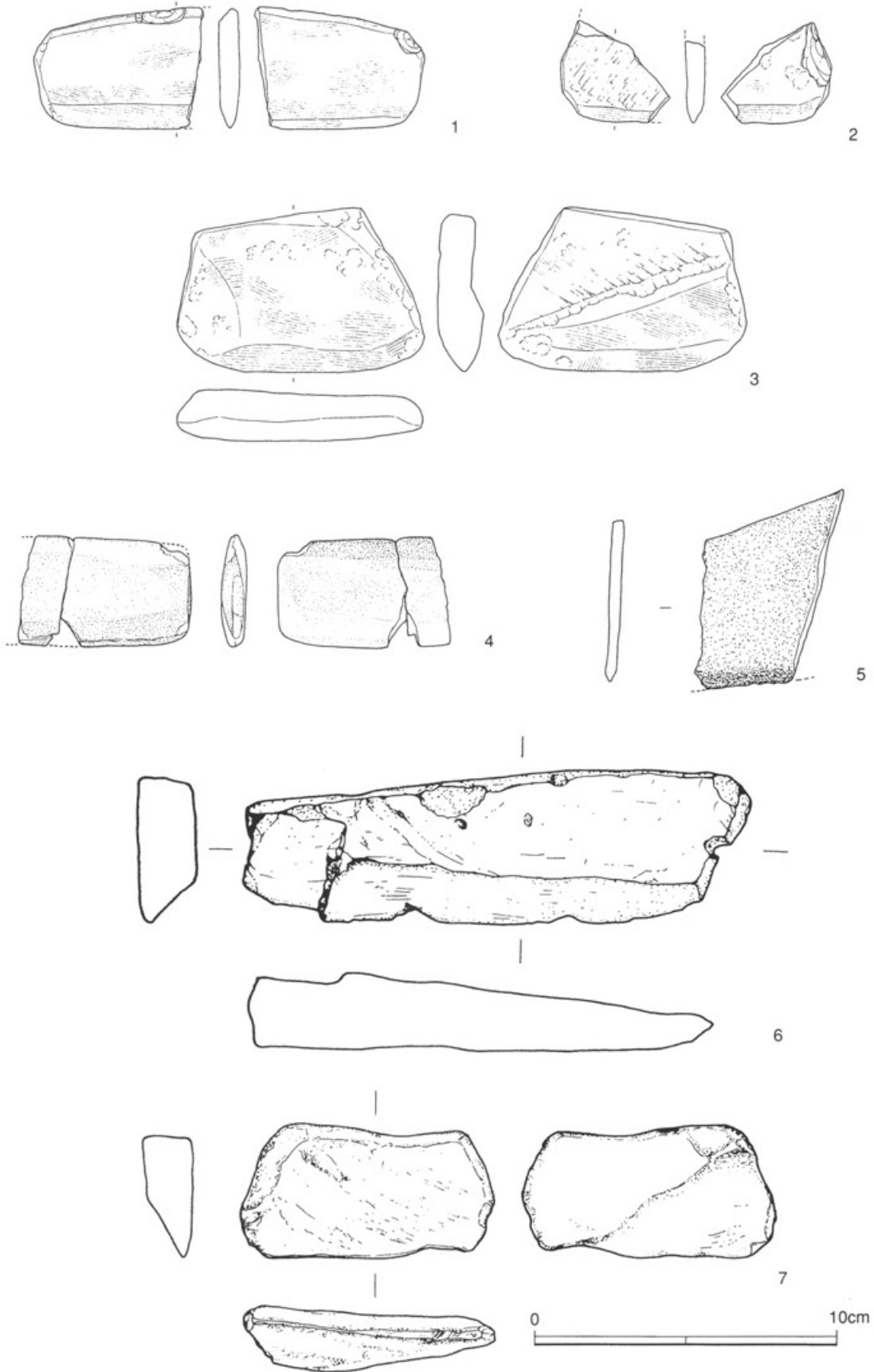
6と7が果たして他の石器と同様、磨製の刃部をもつ石器になるかどうかは判然としないが、一遺跡でこれだけの石庖丁状石器が出土したのは千葉県では初めてである。当遺跡出土資料のなかでは5及び8以外に刃部磨耗の痕跡が認められなかったが、5以外がすべて欠損品であることによるほかに、石庖丁状石器の生産拠点であったために実際に使用に供されたものが少ないという可能性がないかどうか、今後の検討課題とすべきかもしれない。

### (4) その他の遺跡の石器

第73図には、その他の遺跡の石器を図示した。1,2は千葉市城の腰遺跡出土石器（菊池ほか1978）である。1は宮ノ台式期の竪穴住居跡087号址から出土したもので、硬質な砂岩製である。両刃の刃部は直線的で背部は外湾する。おそらく完形時の幅は10cm程度であろう。表裏とも横位の研磨痕が残され、刃部にも研磨痕が認められる反面、使用痕は明確ではない。しかし、遺存部表面の中央（完形ならば刃部左寄り）に刃部の稜が後退している箇所がみられ、その部分の磨耗が進んでいると判断される。その後刃部再生が行われたため、使用痕が不明瞭になっている可能性も考慮しなくてはなるまい。2は報告書に未掲載の資料である<sup>2)</sup>。1と同種の粘板岩製の石器で、より部分的な遺存に留まる。表面のほぼ全体に層理面が残され、裏面は敲打痕と思われる痕跡がわずかに残り、その後に研磨されている。刃部は両刃で、横位



第72図 千葉県 of 石器 3 (安房郡富山町恩田原遺跡)



第73図 千葉県の石器 4 (1・2：千葉市城の腰遺跡, 3：袖ヶ浦市根形台遺跡群第VI地点, 4：四街道市御山遺跡, 5：市原市土宇遺跡, 6：鴨川市中原条里跡, 7：鴨川市根方上ノ芝条里跡)

の研磨痕がみえる。

3は袖ヶ浦市根形台遺跡群第VI地点の宮ノ台式期の竪穴住居跡S I-090から出土した石器(當眞ほか2001)である。完形で長さ5.5cm, 幅8.2cmを測り, やや不整な台形を呈する。やや粗粒の砂岩を用い, 敲打によって粗く成形した後に研磨を行ったとみられる。刃部は両刃で, 表面のやや左寄りの刃部がわずかに凹み, その部分がとくに平滑である。刃部は全体的に横位の研磨痕が観察されるが, 磨耗が進んだ上に刃部再生を行った結果とも考えられる。

4は四街道市御山遺跡のV期の竪穴住居跡S I-006から出土した石器である(渡辺ほか1994)。粘板岩製で長方形を呈すると思われるが, およそ半ばを欠失する。長辺側両縁がいずれも刃部状であるが, 報文では砥石と報告されている。5は市原市土宇遺跡のV期の第32号住居址から出土した石器である(柿沼ほか1979)。安山岩製の非常に薄い石器で, 部分的にしか遺存しないが, 片縁が刃部状となっている。

6は鴨川市中原条里跡A地点, 7は同じく鴨川市根方上ノ芝条里跡C地点で表面採集された石器である(杉山ほか2000)。いずれも砂岩製で, 穂摘具として報告されている。表面採集遺物であるゆえに時期は明確ではないが, 鴨川市根方上ノ芝条里跡C地点ではV期のまとまった集落跡が調査されている。2点ともに整った形状ではなく, 他遺跡の例に比較して刃部の整形が明確ではないが, いずれも片刃の刃部をもつものといえる。

写真1は市原市中潤ヶ広遺跡から出土した石器<sup>3)</sup>で, 未報告であるため出土遺構について明確に記すことができないが, IV期の竪穴住居跡から出土したものとのことである。砂岩製の長方形の石器で, やはり刃部中央からわずかに左寄りに磨耗の強い部分が明瞭に観察される。写真でも矢印で示した箇所に凹みが生じていることが読み取れよう。写真2も未報告資料で, 館山市長須賀条里制遺跡から出土した砂岩製の

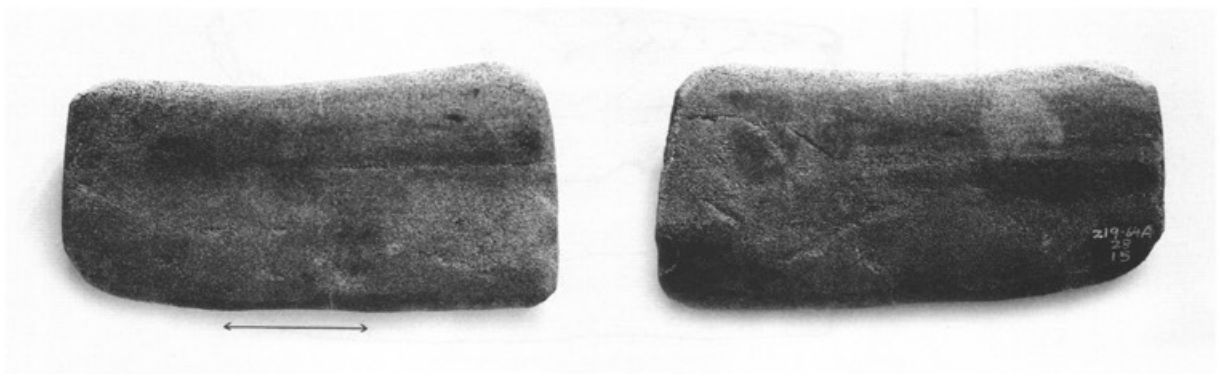


写真1 市原市中潤ヶ広遺跡出土石器



写真2 館山市長須賀条里制遺跡出土石器



石器<sup>4)</sup>である。溝状の遺構から出土し、帰属時期が判然としないが、Ⅳ期の所産である可能性があるという。この石器の刃部は片刃で、磨耗痕は観察されない。

未報告資料として最も注目されるのは、多古町塙台遺跡（志摩城跡）出土資料<sup>5)</sup>である。塙台遺跡ではⅡ期後半からⅢ期前半にかけての壺棺再葬墓群が調査されたが、そのうち2基の墓壙から合計5点の石庖丁状石器が出土している。4点が磨製の石庖丁状石器、1点が打製の刃部をもつ横刃形石器で、とくに1基の墓壙（おそらくⅡ期後半）から磨製3点、打製1点の石器が出土したという。磨製の石庖丁状石器については、いずれも刃部左寄りの磨耗痕が著しい。

#### 4 時期ごとの特徴と地域性

以上、石庖丁状石器のあり方を、関東近県と千葉県に分けて通観してきた。ここで特徴的な事象についてまとめなおしてみたい。

千葉県をはじめ南関東では明確ではないが、北関東ではⅠ期には打製石庖丁あるいは横刃形石器とされるものが存在する。それらは打製土掘具と組成するのが通例で、中部高地の縄文時代晩期後葉に顕著になる石器組成がほぼそのまま引き継がれると解釈することができる。北関東ではⅡ期にもⅠ期の石器が継続して用いられると考えてよいが、七日市観音前遺跡出土の磨製の石庖丁状石器は注目に値する。それはⅣ期に千葉県や静岡県で盛行する石器と基本的に同種のものである。千葉県でも、七日市観音前遺跡とほぼ同じ時期に塙台遺跡で出土しているばかりか、それらが主体を占めていると考えられるから、七日市観音前遺跡の石庖丁状石器は、千葉県を中心とした南関東からの搬入品である可能性もあるといえよう。また主体-客体の関係は逆転しているものの、七日市観音前遺跡及び塙台遺跡双方において、磨製の石器と打製の石器が共伴することはきわめて示唆的な事実と考えられる。なお塙台遺跡では、墓壙外ではあるが、弥生時代中期の千葉県では通常認められない大型の打製土掘具も出土している。

Ⅲ期後半については、池上遺跡と常代遺跡の対比が、Ⅱ期における七日市観音前遺跡と塙台遺跡の対比に酷似する。池上遺跡では、打製石庖丁（横刃形石器）とされる粗製剥片を素材とした打製石器が主体を占めており、客体的に磨製の石庖丁状石器が加わる。常代遺跡では出土点数が少なく、やや時間幅のある資料だけにあまり明瞭ではないものの、磨製の石庖丁状石器が主体であるなかに粗製剥片を素材とした打製石庖丁が加わる。この関係はⅡ期後半からⅢ期前半における平沢型（平沢式）土器と出流原型（出流原式）土器の動きと相まって、群馬県から埼玉県北部にかけての地域と千葉県を中心とする地域が、利根川水系を介して常態的に密接な交流をもっていたこと、そして打製石庖丁（横刃形石器）と磨製石庖丁状石器が同種の機能をもつ道具として意識されていた可能性を示唆する。

Ⅳ期になると、石庖丁状石器は南関東から静岡県まで広域に展開する。しかし、神奈川県折本西原遺跡においては打製石庖丁（横刃形石器）が主体で石庖丁状石器は客体でしかない。それに対して千葉県では打製の石器はほぼ皆無とあってよく、静岡県では両者が共存する形をとっている。また、千葉県の石器と静岡県の石器は、形状だけではなく磨耗痕が認められる位置も共通している。以上のような事実から、いわゆる石庖丁状石器は、千葉県を中心とする地域で生成した可能性があり、Ⅱ期の後半からⅣ期にかけて盛行するものと考えられる。そして地域間交流によって広範囲に移動し、Ⅳ期になると静岡県においては一定量が組成に加わるようになる。Ⅴ期には、その数が激減するとともに、定形性も失われていく。

最も大きな問題はそれらの機能である。山田しょう、山田成洋による、打製石庖丁とされる石器も石庖

丁状石器とした磨製石器も、ともに植物を擦り切った痕跡が認められないという静岡県出土石器の分析結果は重大な意味をもっている。筆者も、千葉県内の出土資料のいくつかを高倍率で観察したが、イネ科植物を収穫した際に生じるポリッシュは一切観察することができなかった。しかし、その結果にもかかわらず、石庖丁状石器が穂摘具である可能性を完全に否定し去ることは躊躇せざるをえない。その理由の第一の点は磨耗痕にある。刃部が鈍くなり凹みを生じる磨耗痕は、手で握るに適当な大きさ、形状をもつ石器にのみ残され、しかも丁度親指がかかる特定の部位に観察される。第二はそれらの石材には圧倒的に砂岩が用いられるという点である。すなわち岩石を構成する粒子が磨耗によって剥落しやすく、さらに高頻度に刃部再生が行われ、明瞭な使用痕を残さない可能性である。実際、磨耗によって凹みを生じた部位にも刃部再生によると考えられる研磨痕が残されていることが非常に多い。第三は、それらが穂摘具ではなく砥石であった場合、特定部位の緩やかな凹みを生ずる磨耗はどう説明されるのかという点である。とくにⅡ期後半にはそれらを砥石として使用する対象物が存在しないのではないか。さらにいえば、墓壙に副葬されたと考えられる事例が存在するのはなぜか。

上記にあげた諸点は、あくまで消極的な状況証拠に過ぎない。しかしながら、石庖丁状石器が穂摘具であった可能性は残されていると考えられる。ここで十分な結論が導き出せないのが残念であるが、さらに該種石器の考究に努めることを約して稿を終えたい。

#### 注

- 1) 当時出土例が少なかったこともあって、石庖丁の可能性も考えられるといったニュアンスで触れられている程度である。したがって重要な提言であるにもかかわらず、注目されるに至らなかった。
- 2) 千葉県立房総風土記の丘において実見、実測図を作成した。
- 3) 1993年度、財団法人千葉県文化財センター調査。
- 4) 1998年度、財団法人千葉県文化財センター調査。
- 5) 2000年度、財団法人香取郡市文化財センター調査。調査課長藤崎芳樹氏、調査担当者荒井世志紀氏のご好意で実見させていただいた。

#### 引用・参考文献

- 安藤杜夫・松田政基1998 『千葉県富山町恩田原遺跡 県営ほ場整備事業岩井地区埋蔵文化財発掘調査』富山町教育委員会
- 石井 寛ほか1980 『折本西原遺跡 横浜市都市計画道路新横浜元石川線折本地区埋蔵文化財発掘調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 井上 太1994 『七日市観音前遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会
- 小高春雄・渡辺修一1989 『房総考古学ライブラリー4 弥生時代』財団法人千葉県文化財センター
- 甲斐博幸ほか1997 『君津市常代遺跡群』財団法人君津郡市文化財センター
- 柿沼修平ほか1979 『千葉縣市原市土宇遺跡発掘調査報告書』日本文化財研究所
- 柿沼修平ほか1987 『大崎台遺跡発掘調査報告3』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- 菊池真太郎ほか1978 『千葉市城の腰遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 宍戸慎吾ほか1989 『砂田台遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター

杉山春信ほか2000 『千葉県鴨川市東条地区遺跡群発掘調査報告書』鴨川市教育委員会・鴨川市遺跡調査会

當眞紀子ほか2001 『平成12年度千葉県袖ヶ浦市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ 根形台遺跡群Ⅰ』袖ヶ浦市教育委員会

中島 宏ほか1984 『池守・池上 一般国道125号線埋蔵文化財発掘調査報告書』埼玉県教育委員会

山田しょう・山田成洋1992 『静岡県内出土の「石包丁」の使用痕分析』『川合遺跡 遺物編2 平成3年度静岡バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

山本暉久・谷口 肇1999 『池子遺跡群 X No.1 - A 遺跡』財団法人かながわ考古学財団委員会

若狹 徹ほか1986 『沖Ⅱ遺跡』藤岡市教育委員会

渡辺修一ほか1994 『四街道市御山遺跡（1）』財団法人千葉県文化財センター



## 第5章 鉄製農具の変遷と農耕技術の内容

加藤正信・大谷弘幸

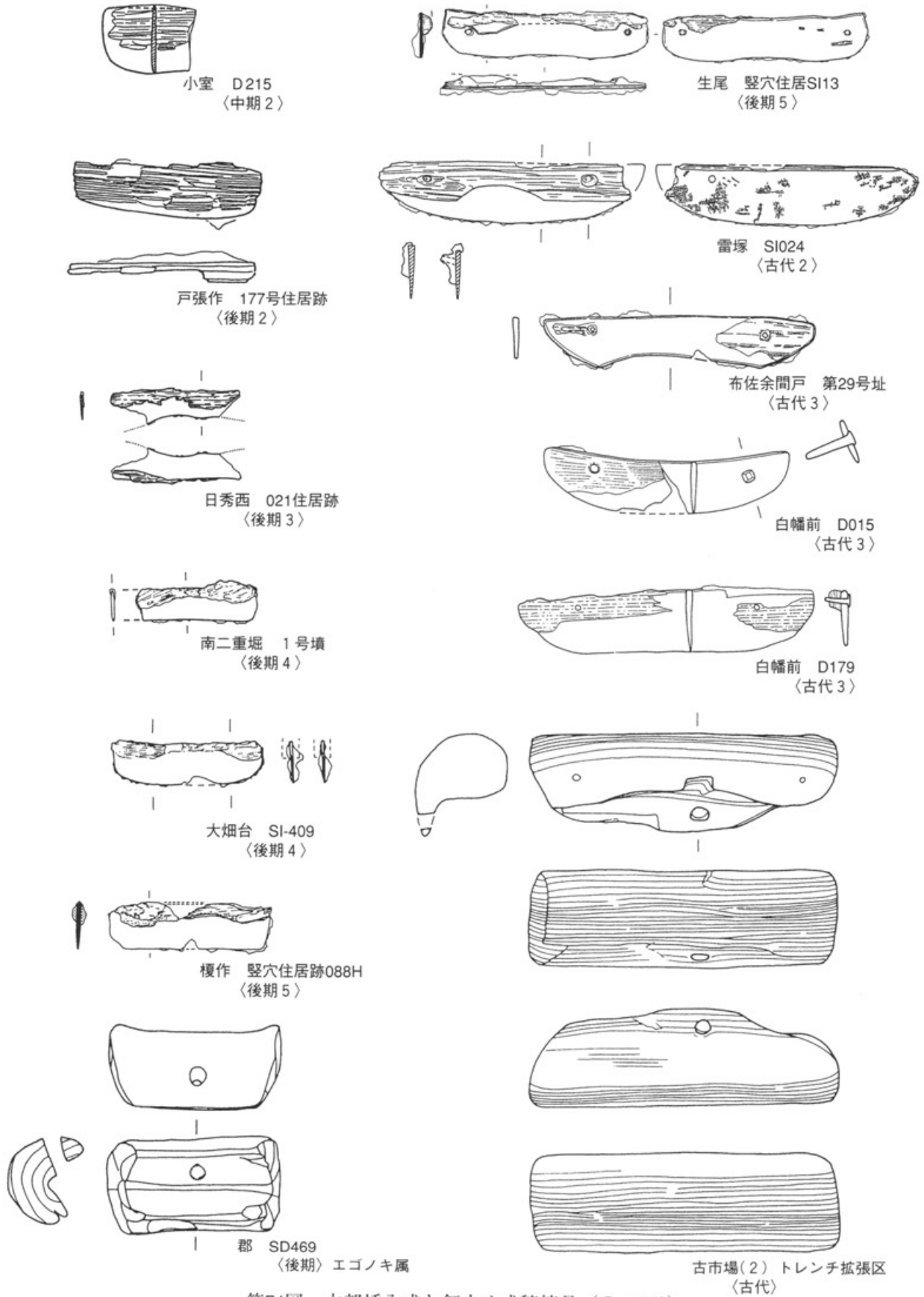
### 1 穂摘具

千葉県内ではこれまで、弥生時代を通じて収穫具が欠落することが指摘されてきた。収穫具としては、石庖丁や木庖丁、貝庖丁、鉄製収穫具などが想定されている。県内では現在までに石庖丁とされるものは、伝館山市笠名出土の1点と佐倉市大崎台遺跡の破損品が報告されているのみであり、また、砂岩質で直線的な刃部を持つ石庖丁様の石器が収穫具として使用されていたのではないかと指摘もあるが確証は得られていない。木庖丁に関しても、近年低湿地の調査事例が増え木製農耕具が多数出土するにもかかわらず、関西圏で見られるような出土例は見当たらない。木庖丁に類似するもので木製の鎌である木鎌の出土例が古墳時代前期初頭の国府関遺跡で報告されている。しかし、この資料については刃部と柄の角度が鋭角過ぎて、実用のものではないとの意見も示されている。このほか、三浦半島などで出土例の多い貝庖丁についても収穫の対象は稲などの穀類ではないのではないかと指摘もある<sup>1)</sup>。鉄製収穫具についても先の集成作業で指摘したように県内で確実に遡れるものは古墳時代前期の鉄鎌であると言える。このように千葉県では弥生時代に確実に使用が証明される収穫具は、現在までのところ発見されていない状況にある。

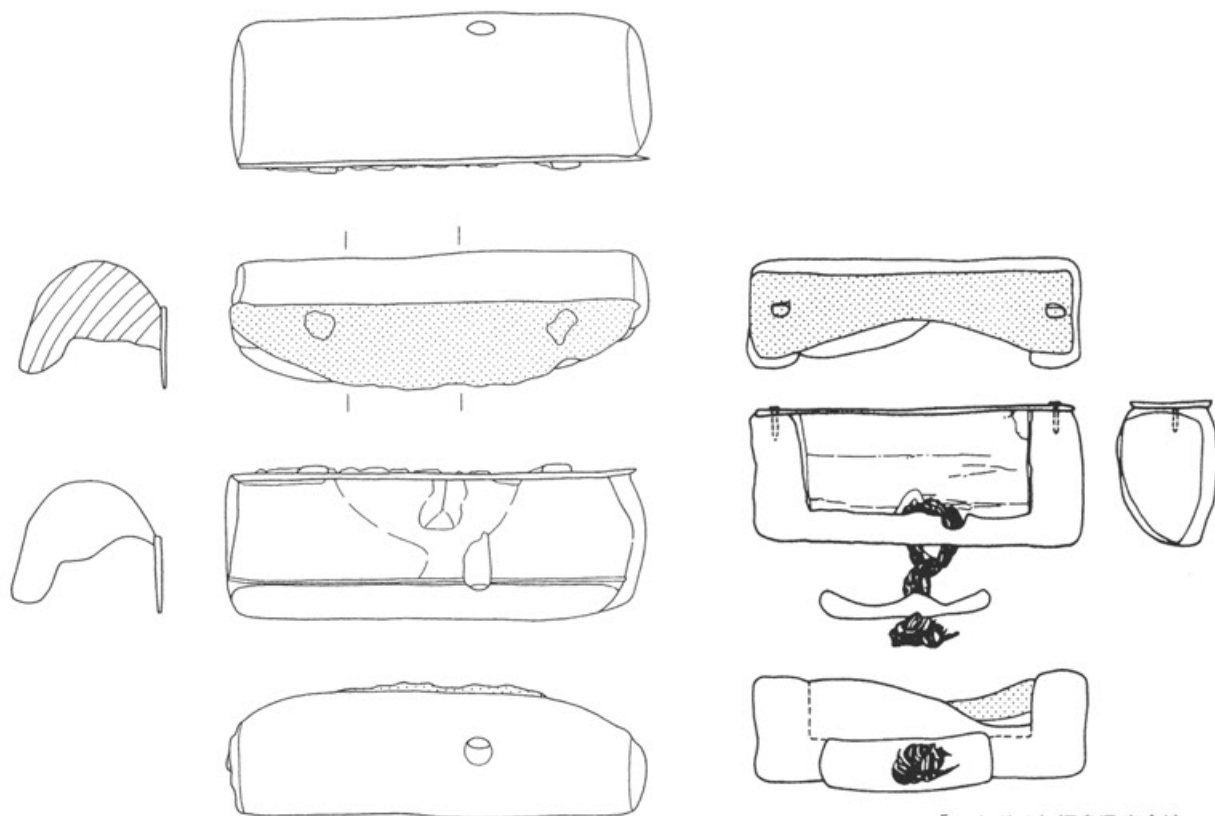
古墳時代になると鉄鎌が出現するほか、鉄製の刃部を持った穂摘具の出土例が知られるようになる。本項では県内の穂摘具出土例を集成することによって、その変遷や使用方法などについて述べることにしたい。かつて筆者は、古墳時代以降に出土する鉄製穂摘具について「木部挿入方式」と「釘止め方式」の2つのタイプに分けて論じてきた<sup>2)</sup>。ここでもそれを踏襲して話しを進めることにしたい。

木部挿入方式の穂摘具は、長さ5～6cm、幅1.5～2cm程度の長方形の板状を呈し、背部には刃部と平行する木目を持つ木質部を残している。県内の事例では、船橋市小室遺跡の竪穴住居跡D215から出土した古墳時代中期後半のものが最古であり、古墳時代を通じて僅かながら存在している。奈良平安時代では、明らかに木部挿入方式の穂摘具と認定されるものは存在しないが、その可能性を残す鉄製品が若干認められる。今回の集成では古墳時代のものとして12点確認することが出来たが、その量は多いとは言えない。このことは小型品であることから遺存率が低く、穂摘具として認定しにくいことにもよると思われる。君津市郡遺跡SD469からこの方式の木台部が出土している。エゴノキ属製のもので、長さ6.2cm、幅3.4cmを測る。断面はカマボコ形をし、内側が抉れ、握部はややへこみ、刃部には鉄歯を挿入するスリットが彫られている。また、刃部と反対の位置には指止め用の紐を通す穴が穿たれている。

釘止め方式の穂摘具は、かつて半月形鉄製品と呼ばれていたもので、長さ7～10cm、幅2cm程度の長方形または半月形を呈し、両端部に釘が打たれている。また、釘の打ち込まれた内面には刃部と平行する木目を持った木質部が残っている場合がある。この木質部を見ると袖ヶ浦市雷塚遺跡SI024出土品などのように中央部分に窪みが残るものが多い。これまでのところ県内では八日市場市生尾遺跡などの古墳時代後期後半7世紀代の資料を最古として10世紀代まで確認されている。今回の集成では総数174点を確認することができ、鉄製収穫具として一定の比率で存在していたことを示している。市原市市原条里制遺跡市原地区4区と市原市古市場(2)遺跡トレンチ拡張区から木台部が出土している。特に市原条里制遺跡例(写真図版5左下)は木台部と鉄製刃部が一体化した完全な形で出土しており、それまでの木台部復原案に決



第74図 木部挿入式と釘止め式穂摘具 (S=1/2)

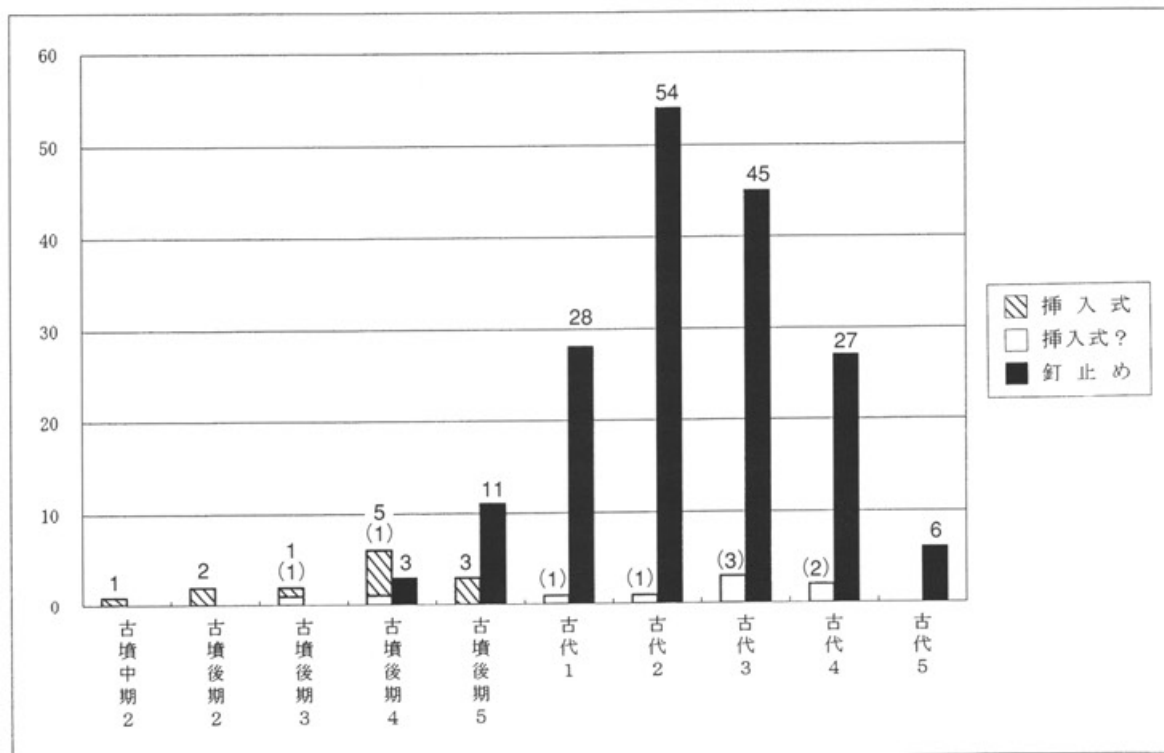


市原条里制 市原地区4区  
〈古代〉スギ

「コウガイ」福島県南会津

第75図 釘止め式穂摘具とコウガイ (S = 1/2)

第3表 穂摘具出土点数変遷表



着がつく結果となった<sup>3)</sup>。市原条里・古市場(2)両遺跡出土のものは、共に非常に似た形態を示している。市原条里例はスギ製で、全体の形状はカマボコ形を呈し、長さ約11cm、幅3.5~3.8cmを測る。刃部が付く面と反対側には土手状の削り残しが見られ、その近くに指止め用の穴が開けられている。また、内面の刃部中央部から指止め用の穴に向かって窪みが作られている。

以上のように各方式の穂摘具について概略を述べてきた。次にそれぞれの変遷について述べることにしたい。木部挿入式と釘止め式の出現状況を示したグラフが第3表である。これを見ると穂摘具全体の傾向としては、古墳時代中期以降徐々に出土件数が多くなり、古代2(8世紀後半)には54点とピークを迎え、以後次第に数を減らして10世紀段階において終息をみるのがわかる。また、その形態的な変化としては7世紀頃を境にして木部挿入式から釘止め式への転換が計られ、8世紀段階にはほぼ釘止め式に一本化され木部挿入式は姿を消すと言える。

次に形態や使用方法について考えると、先に述べたように木部挿入式と釘止め式とでは、刃部の装着方法に違いが見られるほか、前者に対して後者が大型化していることなどの違いを指摘できるが、木台部の形状などは全く同じで、両者に機能的な違いを認めることはできない。このような穂摘具と非常によく似た形態の民具が福島県奥会津地方を中心に分布している<sup>4)</sup>。第75図に示した「コウガイ」と呼ばれる農具は、焼畑農耕により栽培されたアワやキビなどの雑穀類を専ら収穫するのに使用されたものである。この「コウガイ」との類似性から見ると、刃部の反対側を開いた穴は穂摘具を手手に密着させるための紐を通した穴であることがわかる。穂摘具はこの紐で手に固定して使用され、穀物の穂などを収穫するにあたっては、まず刃部を穂に直角にあてながら強く親指で茎を内部に押し込み、しゃくり上げるようにして切断したものと考えられる。その際刃部中央にある木台部の窪みが、茎をより強く押し当てるのに有効に働いていたものと思われる。

さて、このような穂摘具を使用して収穫する植物はどのようなものが想定されるであろうか。穂摘具は第3表で示したようにかなりの量の出土が確認でき、鉄製農具の組成比率で一定の位置を占めている。また、形態や法量についても大きな偏差は認められず、かなり定形化した農具であることが伺える。先の「コウガイ」はアワやキビなどの雑穀類の穂を刈り取るために使用されたものであるが、市原条里制遺跡や古市場(2)遺跡など低地の水田跡から穂摘具が出土することを考えると雑穀以外にイネも積極的に穂摘具で収穫されていたものと考えてよいと言える。穂摘具で収穫することは穂首刈りを行っていたことになる。イネの収穫については、弥生時代の石庖丁以来穂首刈りが主流となり、鉄鎌の出現以降次第に根刈りへと移行し、8世紀段階の鉄鎌の盛行からこの頃までに根刈りが定着すると見る向きもある。しかし、8世紀の鉄製農具の盛行は鉄鎌ばかりではなく、第3表に示したように穂摘具についても言えることで、単純に全面的に根刈りが定着したことを意味するものとは言えない。また、文献上でも穂首刈りされた稲である穎が平安時代末期まで散見されることから、根刈りの完全実施はかなり遅れるものと考えられる<sup>5)</sup>。穂首刈りの残存理由としては、イネの品種的な問題や数種類の品種の混植などが考えられるほか、根刈りには収穫時に脱穀まで含めた工程が想定され、農民側の負担が増えることを嫌ったことなどが考えられる。

(大谷弘幸)

注

1) 神澤勇一 1985「貝製穂摘具」『弥生文化の研究5』 雄山閣出版



- 谷口肇 1995「貝庖丁への疑義」『古代』99
- 2) 大谷弘幸 1996「穂摘み具の変遷と稲の穂首刈り」『研究連絡誌』第46号 千葉県文化財センター
- 3) 佐々木和博 1977「半月形鉄製品について」『史館』8 史館同人
- 實川理 1995『生尾遺跡』東総文化センター
- 4) 佐々木長生 1988「奥会津の穂摘み具」『山と民具』日本民具学会論集2 雄山閣出版
- 5) 寺澤薫 1994「穂刈りから根刈りへ」『古代における農具の変遷』静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか

## 2 鎌

ここでは、収穫具のうち鎌について述べる。弥生時代における千葉県での収穫具の欠落は、前項で指摘されており、古墳時代になって鉄製の収穫具の穂摘み具と鎌が出現する。

鎌については、機能的に単なる収穫具としてだけでなく、刈り払い用の刃物としての機能を有し、より多面的な用途が考えられる。たとえば収穫具としての鎌と、除草用の鎌との使用目的による機能の違いを形状の相違で識別できれば区分することができようが、それは当初からとうてい分類できるものではなく、分類作業の結果から分析され、形状による機能の差異が導き出されるべきものであろう。分類・分析の際にその問題意識を持って、観察・考察を行うことが必要であろう。ここでは、基本的な鎌の機能として刈り取る道具ということを主体として、そのための道具という認識で鎌を取り上げる。

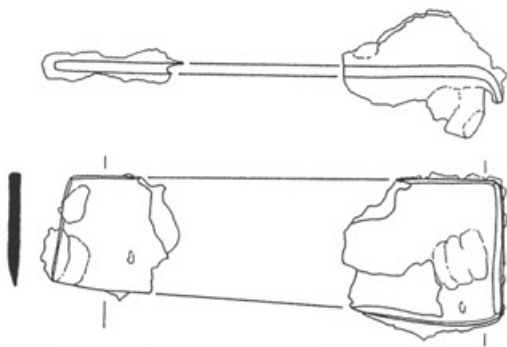
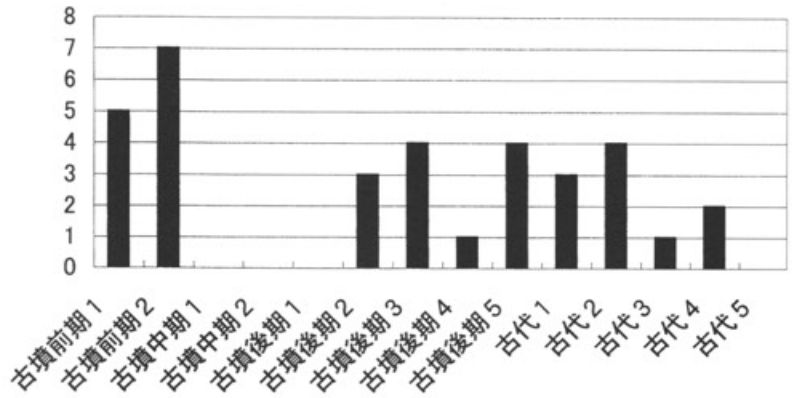
鎌は刃部と柄とに分けられ、一部に木鎌の出土も見られるがここでは鉄製の刃部を木製の柄に取り付けたものを想定して考え、そのなかで刃部の形状を主として分類している。ここでは柄に対しほぼ直角に交差し直線的に延びる刃部のものをA直刃、刃部が内側に向かって内湾する曲線のものをB曲刃、刃部が外反する曲線のものをC逆刃、A～Cで破損して不明瞭なものをA-C破損、着柄する部分が茎になっているものD茎持と分類し集成し作表した。今回の集成では、A直刃が43点、B曲刃が471点、C逆刃が17点、A-C破損が291点、D茎持7点の合計829点となった。ここではそれらの内A直刃、B曲刃、C逆刃のみを概観する。その中で時期の決定できたものを取りあげ、時期別に出土数を計数し作表した(第4～6表)。

A直刃は、古墳時代前期1の時期に初現し、形状は柄に対しほぼ直角に着柄され刃部は直線的に延びる。初現的なものは干潟町桜井平遺跡例を初めとして5例見られ、すべて竪穴住居跡からの出土品である。古墳時代前期2になると7例が見られ、その後古墳時代中期にいったん消滅し、古墳時代後期に再現し古代1～2の時期にまで継続する。初現から中断、再現と使用の時期が2時期に分けられるのは、両者の出現に道具としての継続的な必要性があるのではなく、初現時の使用目的によって使用されたものがその役割を一旦終え、その後別の用途によって再び使用されるようになったと考えるのが適切であろう。初現時の機能はイネの収穫時の主として根刈り用具であったものが、刈り取り作業の効率化ためにより機能的な形態の曲刃鎌へと変遷する事により直刃鎌の消滅を迎え、その後別の作業の用途が新たに生じ、そのための道具として再び直刃鎌が使用されるようになるという流れをここでは取り敢えず想定してみたい。

収穫方法としての穂刈りから根刈りへという流れは、前項でも指摘されており、それは8世紀の鉄鎌の盛行以降に定着していくという見方がある<sup>1)</sup>。また一方前節での指摘通り、根刈りの定着はかなり遅れるとの見方も挙げられており、単純には米の貯蔵法として籾の貯蔵倉(籾倉)と、穎の貯蔵倉(穎倉)という記載が古代文書に見られることから、完全には統一化されていなかった様である。

古墳時代前期1には香取郡干潟町の桜井平遺跡例を除くと、他の3例は君津郡内(袖ヶ浦市1・富津市

第4表 直刃鎌時期別出土状況



桜井平 598号跡<前期>



打越 210号住居址<前期>



番後台  
074A号住居跡  
<前期2>

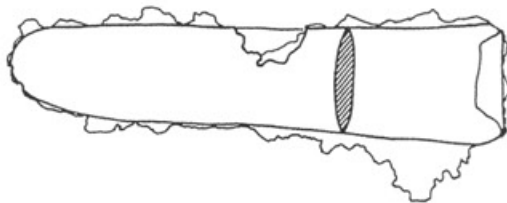
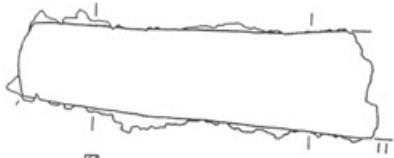


文脇  
408号住居址  
<前期2>

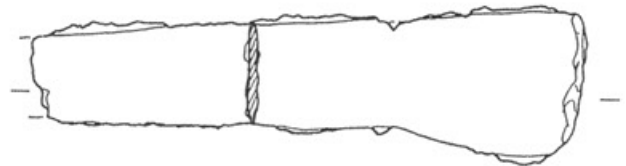


三ツ田台 SI025B号遺構<前期2>

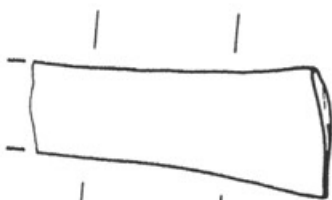
下鈴野  
18号住居跡  
<前期2>



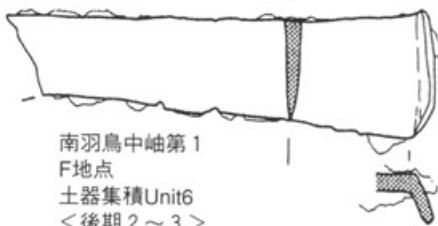
寒沢 第1地点SI037<前期2>



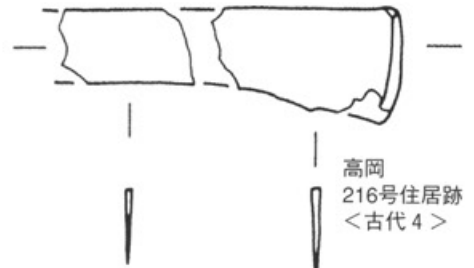
二又堀 8号墳<前期2>



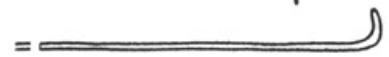
大台  
15号住居  
<後期2>



南羽鳥中岫第1  
F地点  
土器集積Unit6  
<後期2~3>



高岡  
216号住居跡  
<古代4>



第76図 鎌 直刃 (S = 1/2)

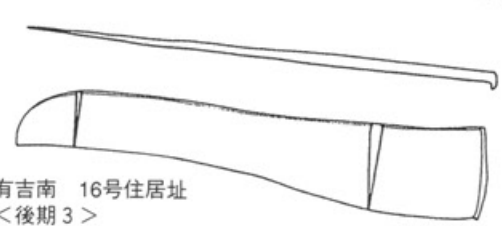
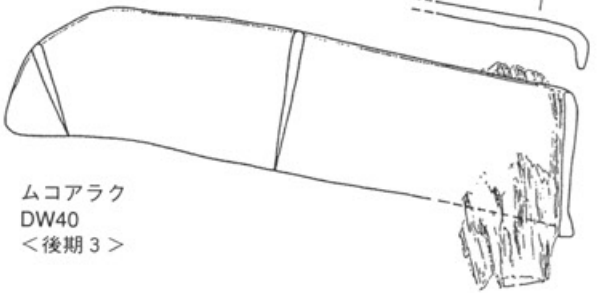
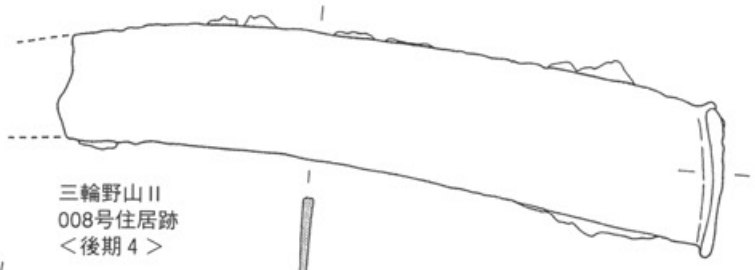
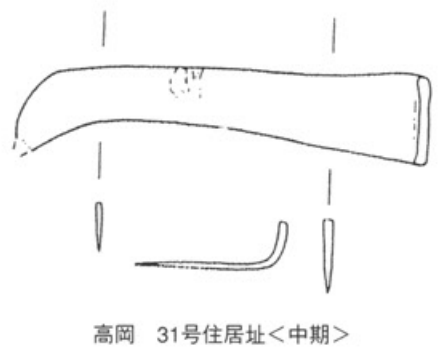
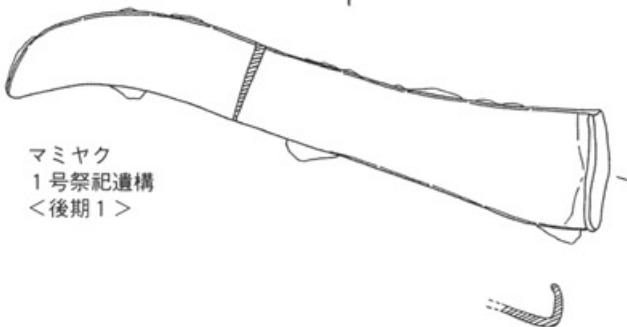
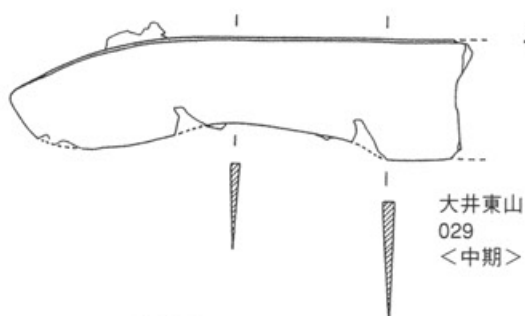
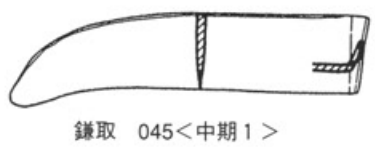
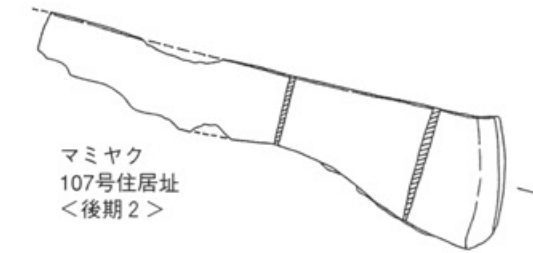
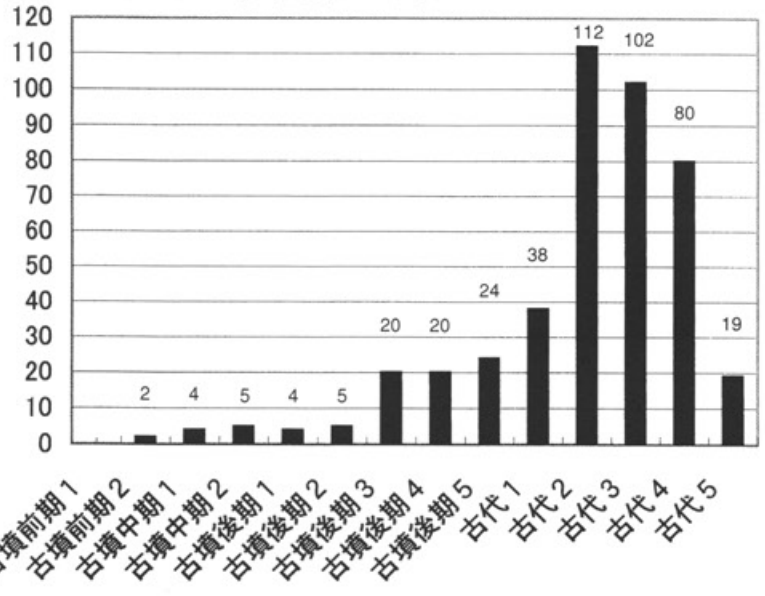
2), 1例は千葉市内からの出土である。またそれに続く古墳時代前期2には市原市2例, 袖ヶ浦市4例などが挙げられ, 出土地域的には, 東京湾岸の西上総からやや北までの地域を主とする地区での出土と見てよかろう。これは, 東京湾を横断する交通路の古東海道の着岸地域とほぼ合一し, 古くは帆立貝形状の出現期古墳の分布域の一部と重複するが, このことが房総における古墳に代表される文化の伝播と何らかの関連を持つと見ても奇異ではなかろう。その後, 古墳時代中期から後期にかけて一時的に直刃鎌はほとんど見られなくなり, その後は古墳時代後期になって再現する。初現時・再現時を含めて直刃鎌の絶対的な出土数量は, 後出の曲刃鎌と比較してはるかに少なく, 全体量としては曲刃鎌約470点に比べ, 43点と約1/10以下である。

古墳時代後期からの再現時の出土地域は, 印旛郡・匝瑳郡・千葉郡等のやや北寄りに見られるようであり, 出土域の広範化は見られるが, 逆に君津郡周辺にはほとんど見られなくなってしまう。

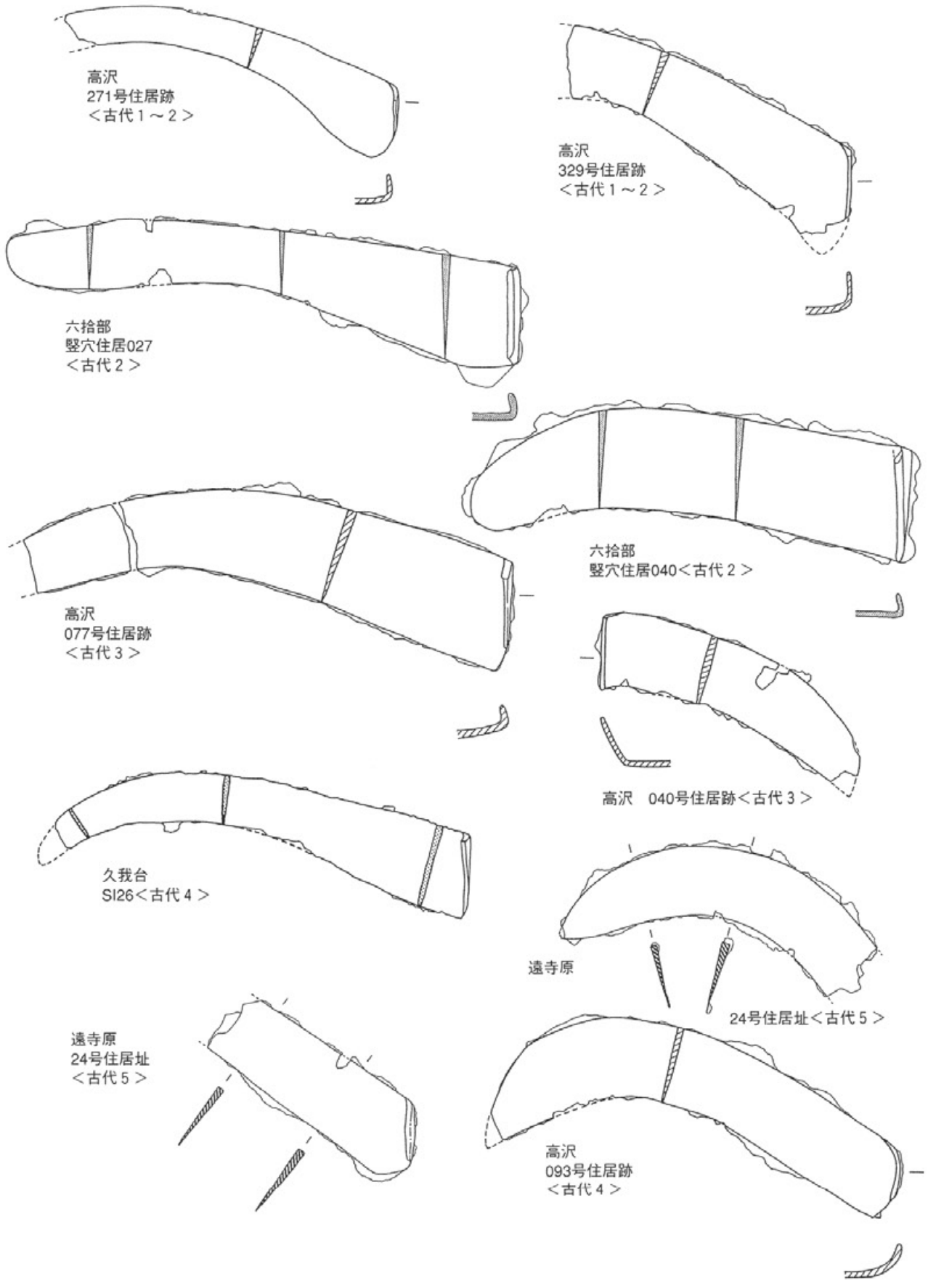
B曲刃は, 出土の全体量も500点に近く, その出土数のピークも古代1から古代2にかけて急激に上昇し, その後多数の出土が見られ, 古代末に数量を減ずる。初現は古墳時代前期2から始まり古墳時代後期まではひとけた台の少ない状況を呈するが, 古墳時代後期3から古墳時代後期5にかけてやや数量を増やし各20点前後, 古代1では38点, 続く古代2では112点と急激に出土数を増加する。古代2では全体数の約1/4を占め, その後の数量とあわせると全数の約半分に至る。この急激な出土の増加の時期は, 後述のU字型鋤先の増加の時期とほぼ符合することを考えると, 農具における鉄器の普及の画期と捉えることができよう。もちろんここでは曲刃鎌と一括りにして取り上げたが, 曲刃の内容について鎌の形状・大きさをさらに細分する必要はあるが, ここでは総体的に曲刃としてまとめ, 鎌自体の細かい分類は先人の研究等によって幾種類かが提示されていることもあり<sup>2)</sup>, ここではそれらについての検討は省くことにする。曲刃の形状は多種にわたり, その大きさも多様であるが全体的には新しい時代のものは大型化する傾向が見られるといえよう。端部の小さく折り返された部分は, 木質の遺存する例が認められたりすることからも着柄部と見られるが, その部分は一般的に幅が厚く鎌本来の幅を示していると考えられるが, 刃部の特に中央近くは, 研ぎ減りによるとみられる幅の減少を認められるものが多い。曲刃の鎌自体は古墳時代前期2にはみられ, 直刃鎌との機能的な差異は早くから認識されていたと考えられ, 直刃鎌の消滅期とあわせると直刃鎌から曲刃鎌への転換は古墳時代中期以降に行われたであろう。しかしその転換が数量の増加には直接結びつかず, 数量の増加による鉄器の普及という点からみると古代2の時期までの時間を要する。これには鉄製農具の所有形態や, 制作側から使用側への製品の流通形態の問題等が関連して, 使用者側の機能面における需要だけでは曲刃鎌が急激に普及しなかったものと考えられ, これには鉄器の供給と所有・使用・管理等の問題を内在しているのであろう。極端な表現をすると, 鉄器の所有は・使用は何らかの管理された所有形態であり, 鉄器の生産体制・流通経路に関しても管理された状況下における供給が行われていたために, 耕作者の要望に応じて容易には数量を増やしたりすることができなかったという見方ができる。耕作者を掌握していた支配階層が, 私有地確保のための新田開発を行うために, 以前よりも作業効率を上昇させるために農耕具としての鉄器を広く普及させたのであろう。

C逆刃は, 刃部が通常の鎌と異なり内湾しないで, 外反するものを指し, 内湾する通常の鎌が対象物を内側の柄の方向に刈り取りながら引き寄せせるのに対し, 刈り倒したものを着柄された外側へ刈り払うように広げる。つまり対象物を散らすような方向に刈り倒す道具とみられ, この機能の差は刈る対象物を刈った後に手前にまとめて束ねるようにするか, それとも外側へ刈り払って広げるようにするかという後処理

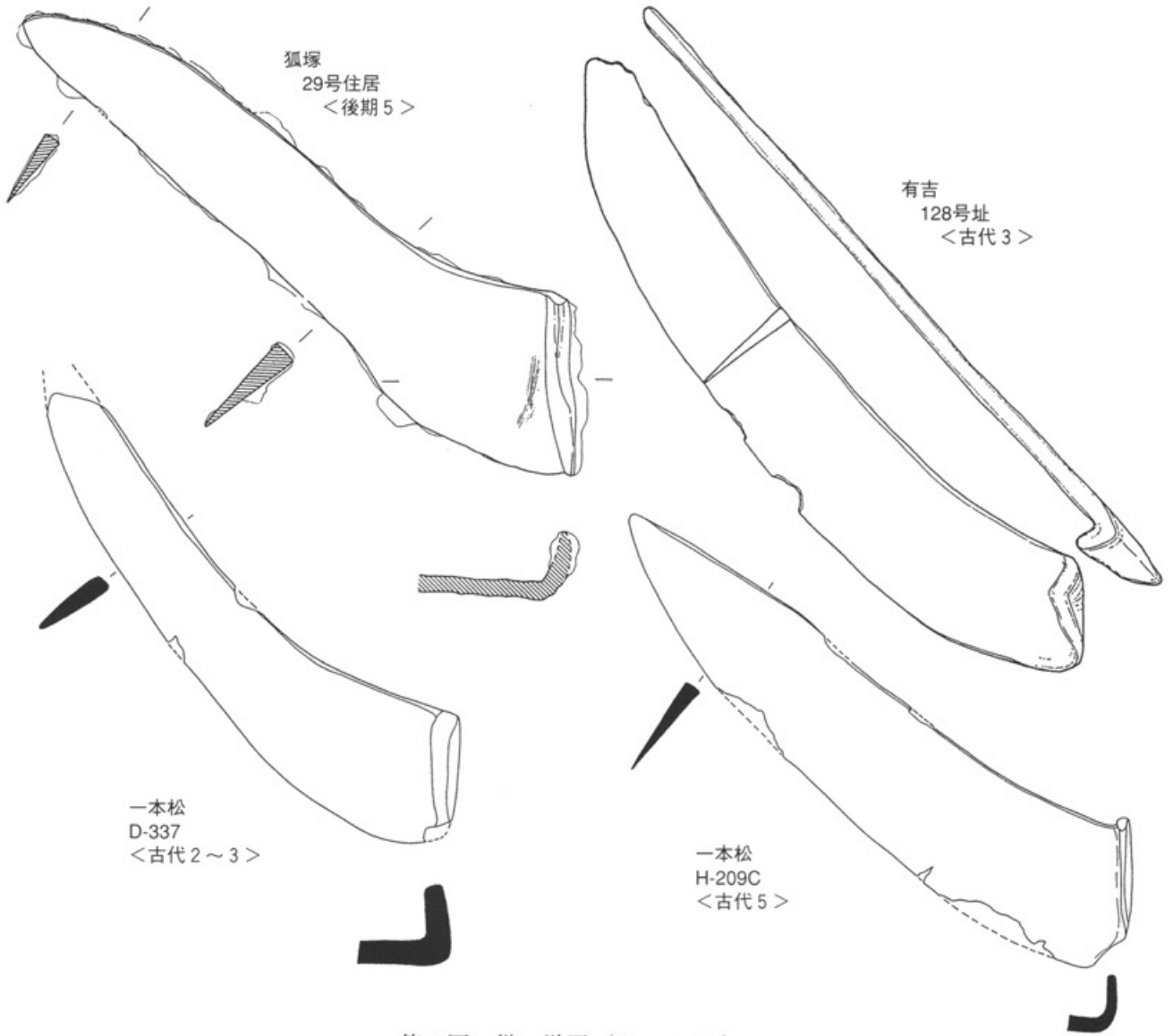
第5表 曲刃鎌時期別出土状況



第77図 鎌 曲刃 (1) (S = 1/2)

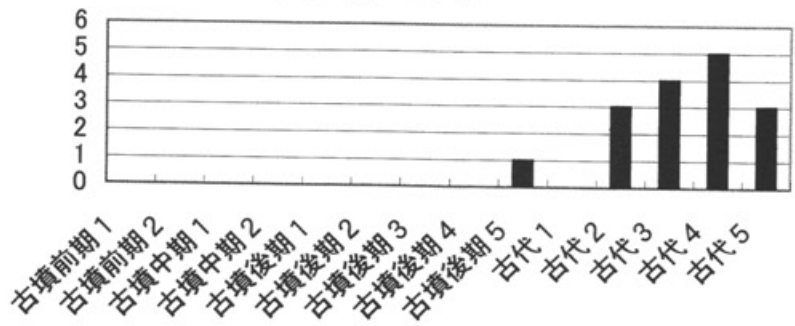


第78図 鎌 曲刃(2) (S = 1/2)



第79図 鎌 逆刃 (S = 1/2)

第6表 逆刃鎌時期別出土状況



の差によって、両者が使い分けられていたとみられる。つまり作物を収穫する際のように、後でまとめて束ねたりして取り扱う必要のあるものは、内湾する通常の鎌で刈り取る方が後処理の都合上便利であろうし、逆に雑草類を刈り払ったり、荒蕪地を刈り払いし焼却するような、後処理の必要性が少ないときには対象物が刃部にまとまらずに分散する逆刃の方が作業効率は良くなると思われる。機能の差は、使用目的の差となっているとみられるので、通常の鎌を収穫具とするのには全く異論はないが、逆刃のものは収穫具と言うよりは刈り倒し具（除草具的な）としての機能で用いられたと思われる。

逆刃の出土数は、全体的には非常に少なく、今回の集成では17点である。ただしその中でも通常の鎌の出土の傾向と同様に、古墳時代後期5の初現時では1例のみで、古代2から出土例が増加して定常化する。これも先ほどの鉄器の普及の構図に合致するとみてよいのではなかろうか。特に荒蕪地や雑草の刈り倒し等の機能のための道具とすると、新田開発に関する耕地化の為の作業用具としては重要な機材とみることができる。

（加藤正信）

### 3 耕起具（鋤鋤先）

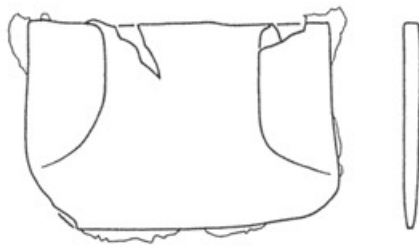
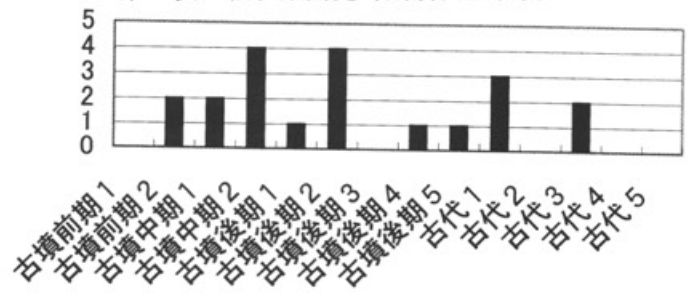
鉄製の耕起具（鋤鋤先）について述べる。耕起具は古くは木製のものが多く使われ、多種・多様のものが知られている。水田耕作における木製の耕起具は、起耕の対象となる水田土壌が軟弱なため、木製のものでも十分に機能したと見られ、材料の入手の容易さ、加工のし易さが重要な要素として長年使われた。鉄製の耕起具は鉄の部分単独では用具として完成せず、木製の装着具に装着されて刃部として機能するように組み合わせられる。本来は耕起具（鋤・鋤）としては木部と鉄部との組み合わせによって完成した形状の農具として取り上げなければならないだろうが、本書では木部は木製品の節で触れることとし、ここでは鉄製品の刃部（鋤鋤先）のみを取り扱う。出土例としては鉄部と木部の組み合わせだった状態のものは、木部の性質上残り難いため非常に少ない。耕起具は、大きく鋤・鋤に分けられるが用途と名称が、伝来された本家の中国古来の名称と入れ違う状況となっており、文献調査の際には誤解の素となる<sup>3)</sup>。

耕起具は、柄の状態、刃先の状況などによって細かく分類されており、前項木器で農耕具については触れているのでここでは触れずに、鉄製品である刃先の部分（鋤鋤先）のみを取り上げる。

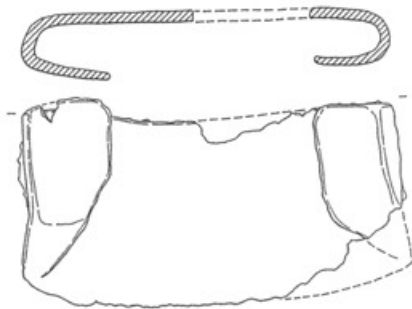
鉄製の起耕具（鋤鋤先）は、収穫具と同様に千葉県内では弥生時代には全く見られず、古墳時代前期2の時期から出現する。その形状は平坦な横長板状の鉄板の両端を折り曲げて木製基部を挟み込むように固定する板状のものと、木製耕起具の刃先の部分を覆うようにソケット状に装着したU字形のものに分類して集成作業を行った。その結果、板状のもの28点、U字形のもの85点の合計113点となった。これらの内、鎌と同様に時期の決定できたものを時期別に計数し作表した。

板状のものは、従来の木製品による耕起具の刃部の先端にあたる部分に、鉄板状の形状をした刃先金具として用いられ、平坦な横長板状の鉄板の両端を折り曲げて木製基部を挟み込むように固定したものである。これが耕起具としては初現のもので、古墳時代前期2の時期から古代に亘り数量は非常に少ないながら、継続して出現する。全体の数量が少なく、特にどの時期が盛期かは解りがたい。成形は鍛造によって行われ、幅は外側で9cmから11cm前後である。これは着柄される木製品の刃幅がほぼ同一で、着柄される農具がすでに規格化されていたことを表しているであろう。刃厚は全体に薄く、刃先がわずかに先鋭化されているといった感じで、横長の単なる鉄板の両端を折り曲げた様なものが多い。重量も後述のU字形

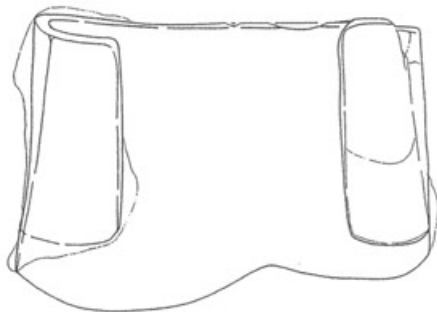
第7表 板状鋤鋤先時期別出土状況



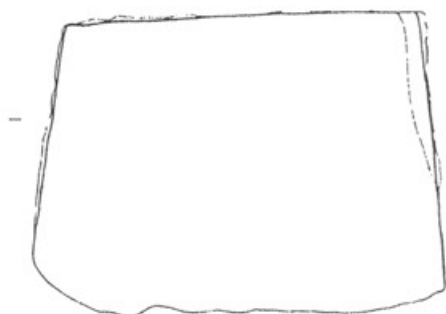
番後台 035B住居跡<前期2>



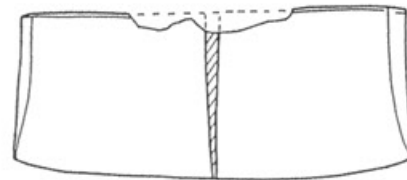
草刈 1号墳<中期1>



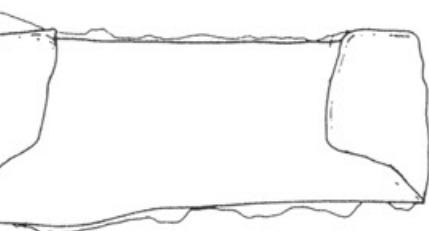
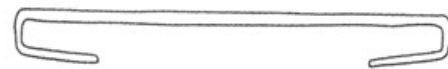
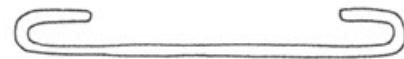
四留作第2古墳群 第1号墳<中期>



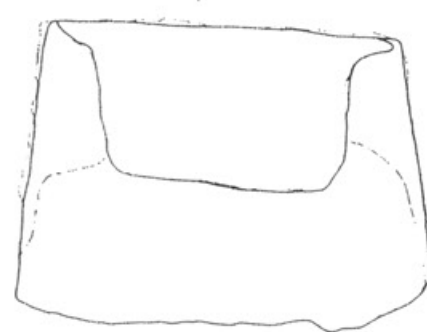
宮内 5号住居跡<中期>



野焼A SI196<中期2>



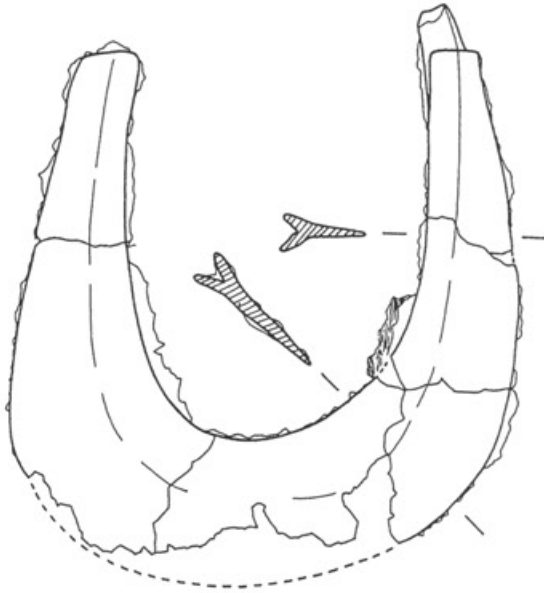
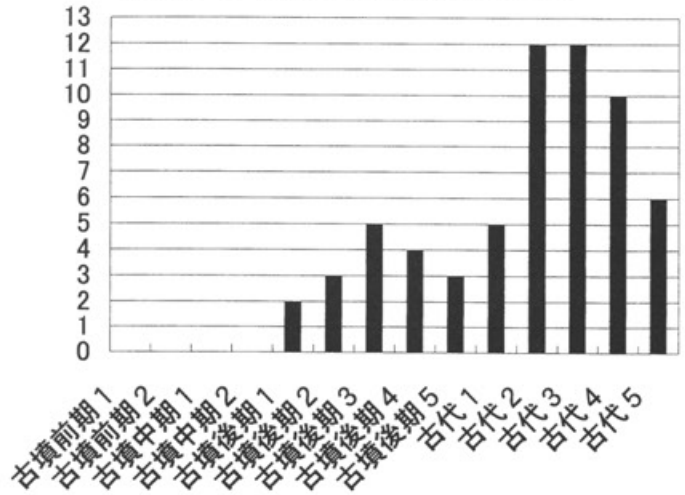
臼井田小笹台 1号住居址<中期2>



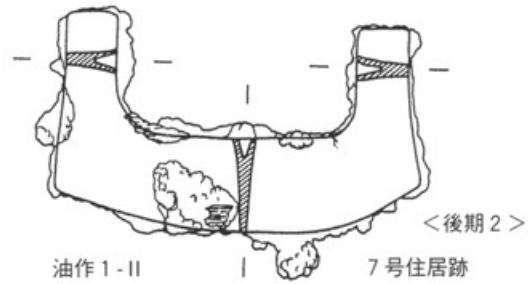
第80図 耕起具(鋤鋤先)板状 (S = 1/2)



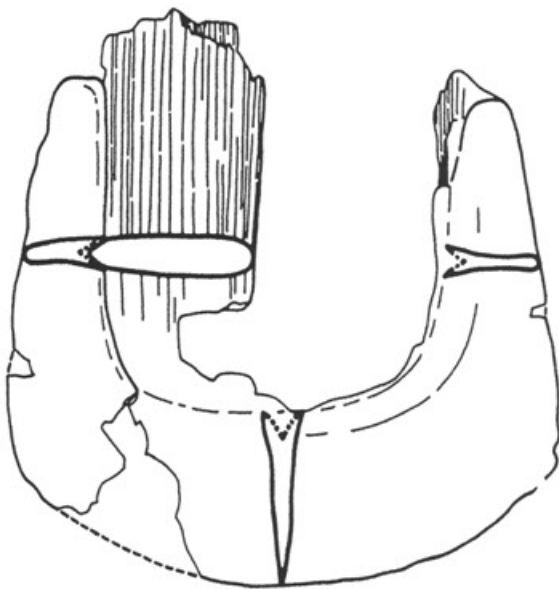
第8表 U字形鋤鋤先時期別出土状況



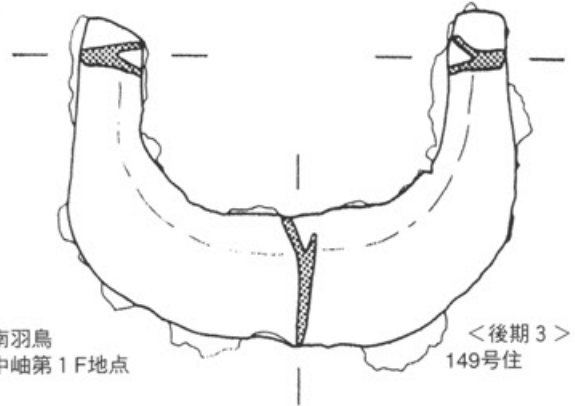
鹿島塚古墳群 6号墳<後期1>



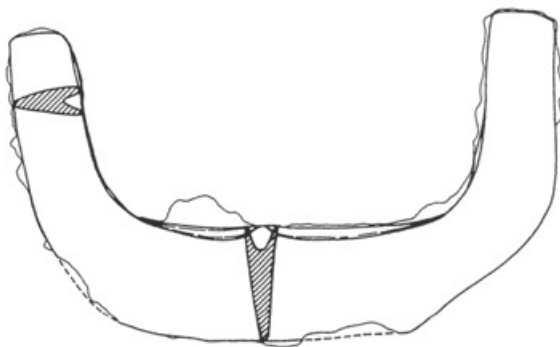
油作1-II 7号住居跡



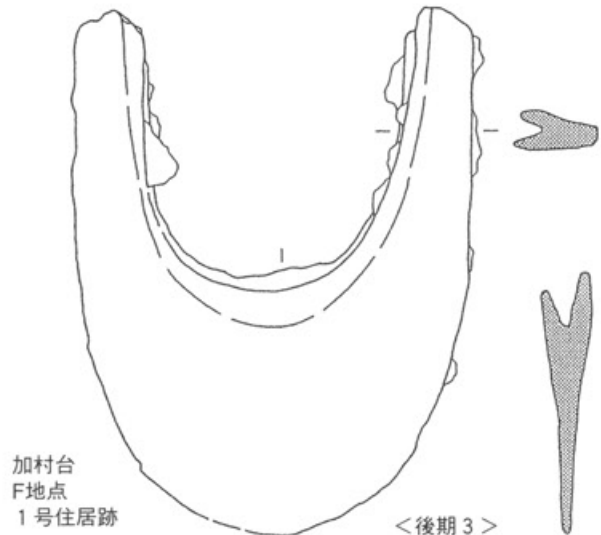
小台古墳 <後期3>



南羽鳥中岫第1F地点 149号住居 <後期3>

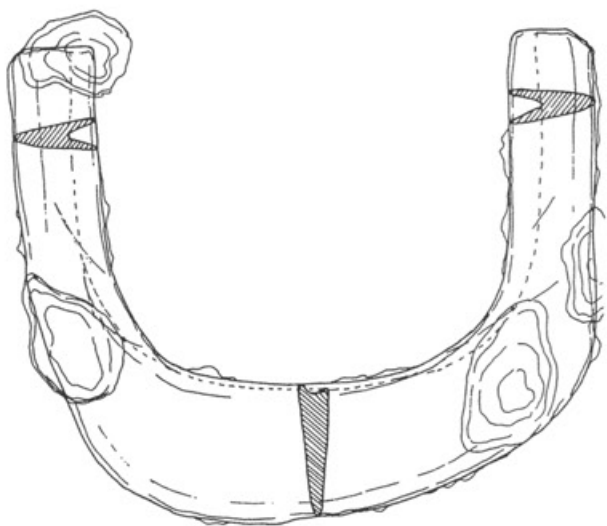


椎津茶の水 174号遺構 <後期3>

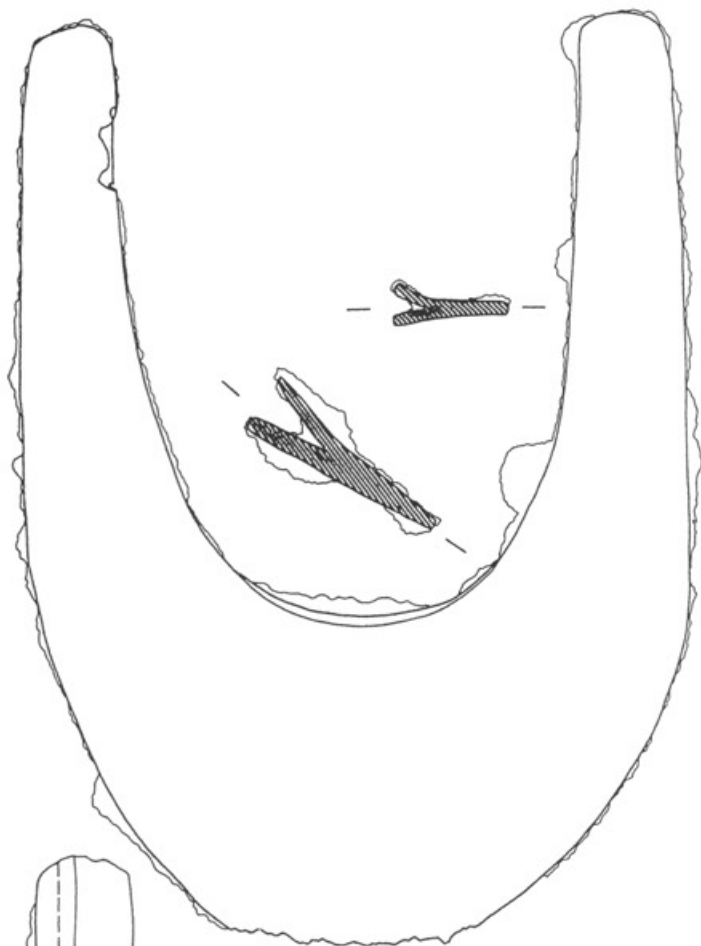


加村台F地点 1号住居跡 <後期3>

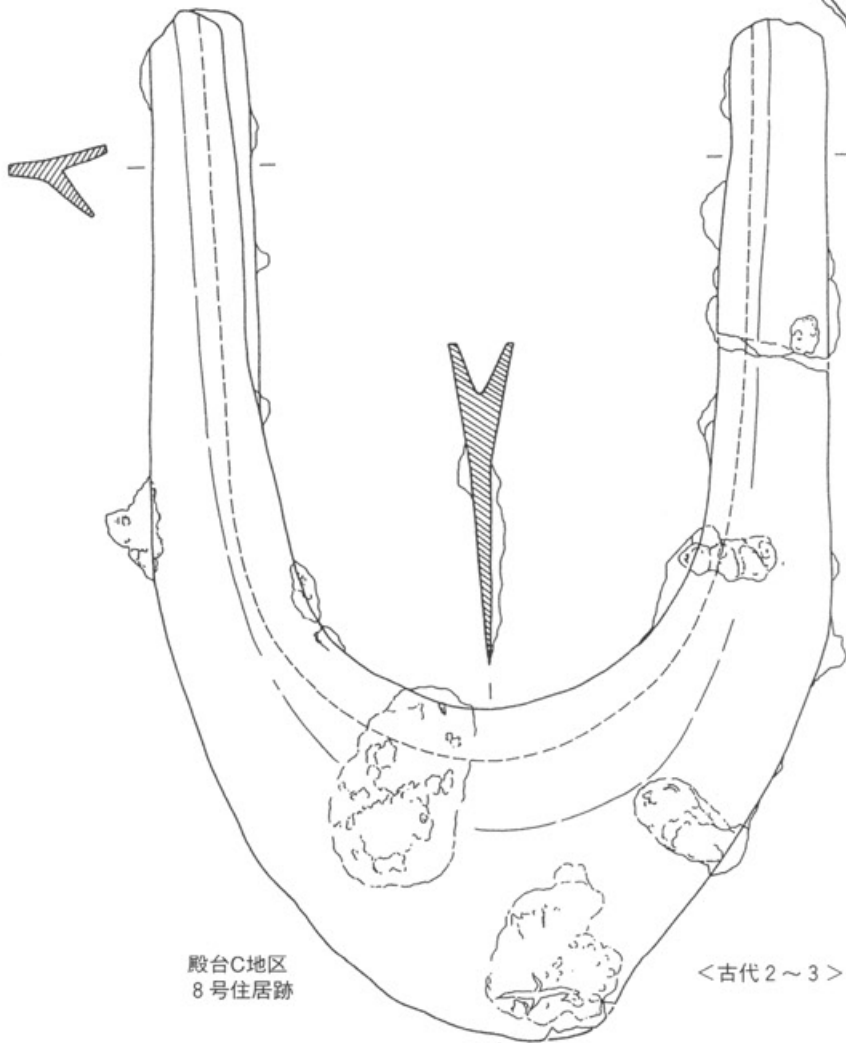
第81図 耕起具（鋤鋤先）U字形（1）（S = 1/2）



中馬場 第83号住居址<古代1>

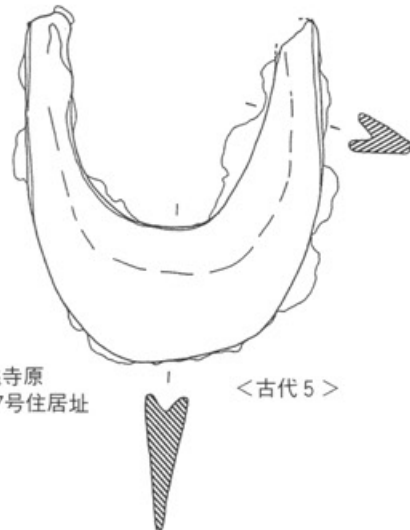


花山 181号住居址<古代2>



殿台C地区  
8号住居跡

<古代2~3>



遠寺原  
37号住居址

<古代5>

第82図 耕起具(鋤鋤先) U字形(2) (S=1/2)

のものよりかなり軽い。刃部の横幅に対する掘削方向の刃の長さは、使用の際の研ぎ減りによって減少したとみられ、本来の長さを留めているものは非常に少ないと思われ、幅の規格制に比べ一様ではない。長いものでは8cmほどのものがあり、一方短いものでは3cm程度のもも見られる。刃先の状態はほぼ直線的なものが多いが、一部でなめらかな段差を有するものも見られ、使用方法や研磨、使用者の癖等に影響されたのであろう。

一方、U字形のものは古墳時代後期1に初現し、その後継続的に見られ、古代2に急激にその出土例を増加する。形状は外形はU字形若しくは凹形で、刃先が円弧を描くものが多く、直線に近いものは少数である。刃先の円弧状と直線的なものとの違いは、内側の着柄溝の形状にも当然関連し、円弧状のものは円弧状、直線的なものは直線的となっている。これは着柄する用具の形状の差で、つまりは使用目的の差による形状の違いであろう。木製品の耕起具の先端にソケット状に嵌め込まれ、掘削の際に掘り進む部分に本製品が使用されることになる。木部への着柄部断面は、Y字状で内側に溝が掘り込まれ、そこに木部が差し込まれるようになっている。刃部全体で木部を受け固定し、前述の板状のものの着柄状況よりはるかに堅固な固定方法といえる。成形は鍛造によって作られ、刃厚も板状のものよりはるかに厚く、重量的にも十分に重く、掘削のために振り下ろす際の重量による勢いが付けやすく、力強くまた深耕し易くなっている。ここでは形態による分類や、法量による規格性の検討を行っていないので詳細は不明であり、従来の研究成果と今後の論に任せるしかないが<sup>4)</sup>、集成時の所見では全体的には古いものから新しくなるにつれて、やや大型化するような傾向が見られ、古代に属するものはかなり大型でなおかつ刃厚もあり、当然重量もある。刃部の刃先形状は円弧状で、刃部の先端部は刃長も長く鋭利で、長期の使用や研磨に十分耐えるように作られているが、刃部側面は刃長も短く鋭利さも劣る。古代でも大型のものだけではなく、同形状の小型のものも見られることから、大型のものは1刃を有する耕起具の刃先、小型のものは複数刃を有する耕起具の刃先と見られる。

古代1から古代2への時期の大幅な出土数の増加は、曲刃の鎌の数量の増加する時期とちょうど一致し、鉄器の普及という見方に適合する状況である。耕起・掘削の道具の普及は、耕作時の効率化・深耕化・省力化等に直結的につながり、同一時間内における作業量の増大、一方で消費エネルギーの減少から、余剰時間の発生若しくは同一労働力での耕作面積の拡大を生みだし、それが支配者の私有地の獲得を目指した新田開発への大きな推進力となりうるであろう。

#### 4 小結

古代1から古代2にかけての時期は、8世紀中頃でちょうど墾田永世私財法などにより私有地が公認され、新田開発が一気に進んだとされる時期であり、その時期に鉄製農具の普及も急激に進んでいることでもそれを裏付けている。ここでみてきた曲刃鎌の急激な普及、U字型鍬鋤先の普及、釘止め式の穂摘具の普及という3つの要素からは古代1から古代2の時期にかけて明らかにその数量的な画期がみられるということである。直刃鎌から曲刃鎌への転換という効率化がすぐにそのまま鉄器の普及という数量の増加には結びつかず、後の古代2の時期まで数量の増加による普及の具現は遅れる。これには鉄製農具の所有形態や制作側から使用側への製品の流通形態の問題等が関連して、使用者側の機能面における要望だけでは曲刃鎌が急激に普及する事はなかったと考えられ、鉄器の供給と使用・管理・所有との問題を内在しているのでは無かろうか。極端な表現をすると、鉄器の所有は土器などと異なり何らかの管理された所有形態

であり、鉄器の生産体制・流通経路に関しても管理された状況下における供給が行われていたために容易にはその数量を増やしたりする事ができなかったという見方ができる。それが直刃鎌から曲刃鎌への用具の改良による機能の急激な向上に伴って、普及状態も急激に展開するという事にはならず微増の状態が続き、その後農民を掌握していた階層が新田開発による土地の私有化を目指し傾注することにより鉄器の普及への大きな推進力となったと考えられ、合理的な動機付けと考えられる。

古墳出土の副葬品で、鉄製農具の出土例や農具の石製模造品の出土が認められる。これらは被葬者階層が当時の鉄製品の生産・流通や所有ないしはその使用の管理が比較的厳正に行われ、彼らが重要な役割を果たしていたことによる生前の権力・権益を示しているものとみられよう。これが前に述べた鉄製農具が古墳時代前期から中期、後期にかけて機能の向上による変更は行われても、それが数量的には急激な普及には至らなかった一因として、鉄器の厳格な管理状況があったことを示しているともみられる。

政権による私有地の公認を契機として、土地の所有を目指す階層が新田開発に資材を投じ、それまでの生産基盤から、新たな生産基盤を求めて新田開発を行った結果として、所有形態については別に考究するとしても、鉄製の農具の普及は作業の効率化から、生産量の増加をもたらしたと考えられ、新たな耕地を求めて新田開発のための集落がこの時期に数多く広範囲に展開されていったとみられる。

(加藤正信)

注

- 1) 合田茂伸 1991 「農具の変遷～収穫と脱穀の道具」『季刊 考古学』37特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣  
寺沢 薫 1994 「穂刈から根刈りへ」『古代における農具の変遷 発表要旨集』 静岡県埋蔵文化財研究所  
ほか
- 2) 山口直樹 1979 「関東地方土師器後・晩Ⅰ・晩Ⅱ期における農具について」 『駿台史学』45 明治大学駿  
台史学会  
農政調査委員会 1979 『日本の鎌・鋤・鍬』 大日本農会  
中山正典 1992 「根刈り鎌についての民具学的検討」 『民具研究』99 ほか
- 3) 川原喜久治 1980 「農具の名称に関して」 『研究紀要』3 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4) 都出比呂志 1967 「農具鉄器化の二つの画期」 『考古学研究』13-3 考古学研究会  
2) 山口直樹論文  
松井和幸 1985 「日本古代の鉄製鍬先、鋤先について」 『考古学雑誌』72-3 日本考古学会  
都出比呂志 1989 「農具鉄器化の初段階」 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店  
黒崎 直 1991 「2 水稲耕作 4 農具」 『古墳時代の研究』4 雄山閣  
古瀬清秀 1991 「農耕具」 『古墳時代の研究』8 雄山閣  
大谷弘幸 1994 「千葉県における農具の変遷」 『古代における農具の変遷 発表要旨集』 静岡県埋蔵文  
化財研究所  
古庄浩明 1994 「古代における鉄製農耕具の所有形態～6世紀から10世紀の南関東を中心にして」 『考古  
学雑誌』79-3 日本考古学会

## 第6章 炭化種子から見た農耕生産物の推定

大谷 弘 幸

### 1 炭化種子検出遺跡と遺構の概要

原始・古代の農耕技術や農耕内容の実体を明らかにするには、水田跡や畠跡といった遺構から見た側面、農具などの道具から農耕技術を類推する方法などがある。しかし、これら考古学的資料のみでは実際にどのような植物が栽培されていたのか、当時の人々の生活においてどれくらい農耕生産物に依存していたのか、また、地域ごとの生業や食生活の違いなどの諸問題について、必ずしも直接的な資料を提示するものではない。

近年、原始・古代において実際どのような作物が作られ、食されていたのかについての関心が高まりつつある。当時の作物品種や生産高・人間の摂取量などの推定にあたっては、遺構から検出されるプラントオパールや花粉などの微化石分析から推定する方法や出土人骨中の炭素と窒素の同位体比の測定から食糧構成を復元するアイソトープ食性解析法、炭化種子などの食料残渣から推定する方法などがあげられる。このうち本節では千葉県内でも比較的検出例が多い炭化種子について集成し、当時の農耕生産物やその依存率について推定することとしたい。

なお、今回集成の対象としなかった縄文時代の炭化種子については、かつて小澤清男氏が集成を行っている<sup>1)</sup>。それによると県内最古の炭化種子は、成田市木ノ根拓美遺跡6号竪穴状遺構出土の縄文時代早期のクルミ、キハダであった。また、最近の市原市武士遺跡の調査では縄文時代中後期の8軒の竪穴住居跡からオニグルミを主体とした炭化種子が出土するなど、徐々に資料の蓄積が認められる。

全国的にみると、ウォーターセパレーション法の普及によって縄文期の炭化種子検出事例も増加し、北海道函館市中野遺跡のヒエ（縄文時代早期）や青森県八戸市風張遺跡のアワ・キビ（縄文時代後期）、福井県三方郡三方町鳥浜貝塚のアズキ（縄文時代前期）をはじめ縄文時代に畑作を中心とした農耕が行われていたことを示す資料が蓄積されつつある<sup>2)</sup>。また、イネに関しても縄文時代前期の岡山県岡山市朝寝鼻貝塚におけるプラントオパールの検出を最古として、縄文時代中期以降西日本を中心として炭化種子や土器胎土中のプラントオパール検出などが多く報告されるようになった。このほか青森県青森市三内丸山遺跡のクリのDNA分析（縄文時代前期から中期）からはクリの栽培化も指摘されている<sup>3)</sup>。しかしながら本県では、成田市荒海貝塚出土の土器からプラントオパールが検出されたのが最古の栽培植物遺体であり、現在のところ縄文期に農耕が行われていたことを裏付ける証拠は得られていない。

県内における炭化種子検出遺構の集成は、弥生時代から中世を対象に行った。その結果53遺跡220遺構で炭化種子の出土をみ、内訳は弥生時代中期4遺跡15遺構、後期10遺跡32遺構、古墳時代前期7遺跡13遺構、中期5遺跡9遺構、後期13遺跡35遺構、古代16遺跡88遺構（グリッドサンプル含む）、中近世11遺跡23遺構、時期不明2遺跡5遺構であった。

しかしながら各遺構における炭化種子の検出方法については、通常の発掘作業の過程において偶然出土したものを報告書に掲載する場合は圧倒的に多く、炭化種子の検出を目的とした土壌サンプリング、ウォーターセパレーションなどを実施し炭化種子を検出した例は極めて少ないと言える。また、出土地点についても明示していない報告書が多い。ここでは、県内において明確に農耕の痕跡が認められるようになる、

弥生時代から古代にかけて炭化種子を検出した遺跡の概要を示すとともに、出土地点が明らかな資料については可能な限り図示することとした<sup>4)</sup>。

**1. 城の腰遺跡** 千葉市若葉区大宮町に所在する。都川左岸標高約23mの台地上に立地し、低地部との比高差は約13mを測る。弥生時代中期から古墳時代中期を中心とした集落と墓域で弥生時代中期の竪穴住居跡を66軒検出した。弥生時代中期宮ノ台期の037号・091号・092号・142号住居跡から炭化種子が出土している。焼失住居である037号跡では北側の柱穴と炉の間からクリと思われる種子が出土した。この種子は上下を壺の破片に挟まれた状態で検出されていることから、本来この壺に納められたものと考えられる。また、このほかに3種類の炭化種子が出土している。091号住居跡では炉の南側、142号住居跡では住居南側から炭化種子が出土したほか、092号住居跡では炉と北側柱穴の間からアワと思われる炭化種子塊が出土したが、専門的な種子同定が行われていないため樹種等は不明な点が多い。

**2. 市原条里制遺跡** 市原市市原字一ノ坪に所在する。東京湾に面した標高約5mの沖積低地上に立地している。弥生時代の水田跡、奈良平安時代から中世、近世へと継続する水田面を複数検出した。このうち並木地区に所在する弥生時代中期の溝、S D-008からイネと思われる炭化種子塊2点が出土した。また、市原地区4区の中近世の水田耕土中からも同様の炭化種子塊1点が出土した。なお、専門的な種子同定は行われていない。

**3. 常代遺跡** 君津市常代字五反歩に所在する。小糸川左岸に面した標高約16mの低位段丘上に立地している。弥生時代中期から奈良平安時代を中心とした墓域・集落で71軒の竪穴住居跡を検出したほか、弥生時代中期の方形周溝墓群と木製品を大量に含む溝を検出した。弥生時代中期の大溝S D-220からは65種の可食植物が検出されたほか炭化したイネ塊が2点出土している。このイネ塊には外穎の付着が認められた。同じ中期の方形周溝墓S Z-119の溝覆土から約200粒の外穎を含むイネが出土した。また、古墳時代後期の土坑S K-53からムクロジ、古墳後期から奈良時代の溝S D-70からカヤ、イヌガヤ、オニグルミ、イチイガシ、ムクロジ、トチノキ、エゴノキ、奈良時代の井戸S K-53からモモ、S K-118からウメ、マクワウリ、平安時代の土坑S K-161からモモ、スモモが検出された。なお、種子の同定は百原新氏が行った。

**4. 滝ノ口向台遺跡** 袖ヶ浦市吉野田字寺原に所在する。小櫃川左岸標高約48mの台地上に立地し、低地部との比高差は約28mを測る。弥生時代中期・後期の集落と古墳時代初頭の墓域からなり、弥生時代の竪穴住居跡を32軒検出した。これら住居跡のうち遺存状態の良好な19軒（中期6軒、後期13軒）について、炉の覆土を1mmメッシュの篩いを用いてウォーターセパレーションを行った。その結果中期では合計イネ4粒、ミレット状種子（イネ科雑穀類似）1粒、アブラナ科アブラナ属の可能性のある円形種子2粒が確認された。また、後期では合計イネ27粒、ミレット2点が出土した。いずれのイネも籾の付着は見られなかった。このほか中期の壺形土器9点の土器内土壌のうち5点でイネが、1点でクルミまたはモモの核破片、別の1点から円形種子が出土した。これらの多くは土器の埋没過程において炭化種子が混入したものと考えられる。なお、炭化種子の同定は松谷暁子氏が行った。

5. **本名輪遺跡** (第84図) 君津市坂田字本名輪に所在する。畑沢川左岸で東京湾に面した標高約7mの段丘上に立地した弥生時代後期の集落で、竪穴住居跡8軒を検出した。このうち弥生時代後期初頭の7号住居址から炭化米がまとまって出土した。資料の採集方法は不明であるが炭化米は炉の南東部分の0.9m×0.7mの範囲にガラス小玉4点と共に出土し、粒数は約70粒(写真から判断)である。なお、専門的な種子同定は行われていない。

6. **境遺跡第2次調査** 袖ヶ浦市下新田字白幡に所在する。小櫃川右岸の沖積低地を臨む標高約30mの台地上に立地し、低地部との比高差は約20mを測る。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落と墓域で竪穴住居跡38軒、方形周溝墓4基を検出した。弥生時代後期に属する50号・57号・59号・61号・76号・78号・82号の7軒の住居炉から合わせて17粒の炭化米と5点の種子状炭化物を検出した。また、古墳時代前期に属する58号・62号・67号の3軒の住居炉から、合わせて5粒の炭化米と2点の種子状炭化物を検出した。これらはすべて竪穴住居内の炉覆土(焼土)を水洗して検出したものである。なお、専門的な種子同定は行っていない。

7. **郡遺跡** 君津市郡字下赤磯に所在する。江川左岸に面した標高約17mの低位段丘上に立地している。古墳時代後期の豪族居館跡を検出したほか溝などが多数検出された。弥生時代後期から中近世にいたる35遺構について、発掘調査段階で出土した炭化種子を同定した。その結果13種の可食植物が確認された。なお、種子の同定は百原新氏が行った。

8. **下向山遺跡** (第84・85図) 袖ヶ浦市高谷字下向山に所在する。小櫃川中流右岸標高79mの台地上に立地し、低地部との比高差は約50mを測る。縄文時代から古墳時代前期にかけての集落遺跡で、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡を59軒検出した。弥生時代後期に属する33号住居址、41号住居址、43号住居址から炭化種子が出土している。3遺構いずれもが焼失住居であり、炭化種子は調査過程で検出されたものでブロックサンプリング等を行われていない。33号住居址では中央南西部の床面に近い焼土中から完形・半完形併せて136粒のカシ類が出土している。41号住居址では南西コーナー付近で横転した完形の小型壺(2)から37粒、同じコーナー部分の床面に近い炭層2か所でそれぞれ3粒と1粒のカシ類が出土した。43号住居址では南コーナー付近の0.5m×0.8mの範囲から201粒のカシ類が出土した。これら3住居から出土した炭化種子は、いずれも形状からイチイガシの可能性が高いと思われるが断定はできない。すべての出土炭化種子には殻斗が認められないことや41号住居址の壺内からカシ類が出土したこと、さらに41号住居址以外でも出土場所がまとまっており、当時の人々がドングリを食料として採集保存していたことを物語っている。なお、種子の同定は松谷暁子氏が行った。

9. **東峰御幸畑西遺跡** 成田市東峰字御幸畑に所在する。香取川に開析された支谷最奥部の標高約40mの台地上に立地し、低地部との比高差は約10mを測る。弥生時代後期と奈良平安時代を中心とした集落で弥生時代後期18軒、奈良平安時代8軒の竪穴住居跡を検出した。弥生時代後期の15号・19号・21号住居の覆土中から炭化種子が出土した。15号住居ではイネ、ハルタデ、シイ・カシ類が、19号住居ではシイ・カ

シ類、21号住居ではハルタデが出土しているが、数量・出土状態は不明である。種子の同定はパリノサーヴェイ株式会社が行った。

**10. 野尻遺跡** 銚子市野尻町に所在する。利根川右岸に面した標高約50mの台地上に位置し、低地部との比高差は約41mを測る。弥生時代後期と古墳時代後期の集落で、弥生時代後期10軒、古墳時代後期47軒の竪穴住居跡を検出した。弥生時代後期の第11号住居址では、中央部の炉を中心に覆土下層から床面にかけて212粒の炭化米を検出した。同じく弥生時代後期の第37号住居址でも、住居中央部の覆土中から床面にかけて336粒の炭化米が出土した。このほか、古墳時代後期の第5・7号住居跡のカマド内からも、それぞれ9粒と25粒の炭化米が出土した。なお、出土炭化米については粒径計測が行われているものの、専門的な分析・同定は行われていない。

**11. 田子台遺跡** 安房郡鋸南町下佐久間字田子台に所在する。佐久間川左岸標高約75mの台地上に位置し、低地部との比高差は65mを測る。弥生時代後期を中心とした集落遺跡で、2号住居址の床面上で押しつぶされた土器内からシイ・カシ類が出土している。なお、分析・同定は行われていない。

**12. 中郷谷遺跡** 木更津市請西字中郷谷に所在する。矢那川下流左岸標高約20mの緩斜面に立地し、低地部との比高差は約5mを測る。弥生時代後期から奈良時代にかけての集落遺跡で、弥生時代後期146軒、古墳時代中期58軒、奈良時代9軒の竪穴住居跡を検出した。このうち弥生後期の焼失住居、035号址において南東壁近くの床面上から出土した壺内よりイネ14粒とキビ22.5グラムが出土した。壺は正位の状態で出土し、胴部上半を欠失していた。イネ・キビはいずれも穎が残存しており、壺内に貯蔵されていたと考えられる。種子同定は松谷暁子氏が行った。

**13. 谷ノ台遺跡** 袖ヶ浦市神納字谷ノ台に所在する。小櫃川中流右岸標高32mの台地上に立地し、低地部との比高差は約27mを測る。縄文時代から奈良平安時代にかけての集落と墓域で、弥生時代後期6軒、古墳時代前期7軒、中期1軒の竪穴住居跡を検出した。このうち弥生時代後期SI021の炉覆土をウォーターセパレーションした結果、炭化粉（穎）1点と炭化米（胚乳）1点を検出した。種子同定は新山雅広氏が行った。

**14. 阿玉台北遺跡** 小見川町五郷内字立山に所在する。黒部川右岸標高約49mの台地上に立地し、低地部との比高差は約26mを測る。弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした集落遺跡である。古墳時代前期に属する5軒の住居跡から炭化種子が出土している。このうち005B号址では炉と考えられる中央やや北側のピット内から、023D号址では南西コーナー付近から、041号址では住居南側から炭化種子がまとまって出土している。023D号址出土のものがマメ類と見られるほかはイネと考えられる。専門的な分析・同定は行われていない。なお、005B号址、041号址出土の炭化米については長幅比計測表が示されている。

**15. 国府関遺跡** 茂原市国府関字中橋に所在する。豊田川の支流に面した標高約18mの微高地上に立地する。古墳時代前期初頭の集落と墓域・自然流路を検出し、自然流路からは大量の土器類と共に木製品が



多数出土した。このうち007流路について15か所のブロックサンプリングを行い、種子を含む大型植物化石群の分析を行った。その結果、寺沢氏の示す可食植物のうち44種の種子・葉等を検出した。このうちイネは76点出土したが外穎の炭化しているものが多く、人間が故意に流路に投棄したものと考えられる。なお、分析は百原新氏が行った。

**16. 東寺山石神遺跡** 千葉市若葉区東寺山町に所在する。葭川分流地点に近い標高約29mの台地上に立地し、低地部との比高差は約20mを測る。弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした集落と古墳時代中・後期の古墳群で、総数60軒の竪穴住居跡を検出した。2号住居址は古墳時代前期の焼失住居で、西コーナー付近の覆土中から稲藁とともに炭化米241粒とダイズ5粒が出土した。イネの分析を行った佐藤敏也氏によれば炭化米中には穎を有するものがみとめられ、出土状態から稲束として保存していたものが焼失したものと考えている。また、長幅比の計測から日本型の短粒種であるとしている。なお、ダイズの同定は大橋広好氏が行った。

**17. マミヤク遺跡** 木更津市小浜字マミヤクに所在する。烏田川と畑沢川に挟まれた標高約40mの台地上に立地し、低地部との比高差は約30mを測る。弥生時代後期から奈良時代にかけての集落で、弥生時代後期89軒、古墳時代前期78軒、中期41軒、後期59軒、奈良時代8軒の竪穴住居跡を検出した。このうち古墳時代前期の107号住居址南コーナー付近に堆積した焼土中より70から80粒ほどの炭化米が出土した。専門的な種子同定は行われていない。

**18. 山伏作遺跡** 木更津市請西字山伏作に所在する。矢那川左岸標高約53mの台地上に立地し、低地部との比高差は約30mを測る。遺跡は弥生時代後期から古墳時代中期を中心とした集落と古墳時代後期の墳墓群で構成されている。古墳時代前期のS I 045では、南西コーナーの床面付近からモモ3点出土した。なお、専門的な種子の同定は行われていない。

**19. 草刈遺跡** (第85図・写真図版5右下) 市原市草刈字大宮台に所在する。村田川右岸標高約28mの台地上に立地し、低地部との比高差は約18mを測る。旧石器時代から中世の複合遺跡で、弥生時代中期から平安時代にかけての大集落である。遺跡のほぼ中央に位置する草刈K区の住居跡、151号跡(古墳時代中期)の北東コーナー付近に横転して出土した完形の壺中から、マメ類と思われる種子が840粒(13.48g)出土した。分析・同定は行われていない。

**20. 大畑台遺跡** (第85・86図) 木更津市請西字大畑台に所在する。矢那川と烏田川に挟まれた標高約63mの台地上に立地し、低地部との比高差は約40mを測る。古墳時代前期から奈良時代を中心とした集落で、古墳時代前期11軒、中期9軒、後期7軒、奈良時代8軒、合計35軒の竪穴住居跡を検出した。古墳時代中期の焼失住居である174号住居では、南東隅にある貯蔵穴上から多量の土器類や滑石製白玉とともにモモ1点出土した。同じ中期の404号住居では住居がやや埋まりかけた時点で南西部に多量の土器・滑石製白玉とともにモモが1点出土し、429号住居でも住居のほぼ中央床面直上からモモ1点出土した。なお、専門的な種子同定は行われていない。

21. 鹿島塚A遺跡(第86図) 木更津市請西字道上谷に所在する。矢那川下流左岸標高50mの台地上に立地し、低地部との比高差は約39mを測る。弥生時代から古墳時代にかけての集落と墓域で、弥生時代47軒、古墳時代55軒の竪穴住居跡を検出した。このうち古墳時代前期の焼失住居である137号址の覆土中から炭化米304粒が出土している。形態から穎果の可能性が高いが、出土位置・層位、検出方法は不明。古墳時代中期の83号址も焼失住居で、東側の壁周溝から8点の炭化種子が出土した。いずれもモモの核(内果皮)である。調査担当者は炉が存在しないこと、焼失していること、完形土器の出土から祭祀的性格の遺構との考えを示している。同じく古墳時代中期の住居である96号址の覆土中からも炭化した粒塊が出土している。形態からイネ粒である可能性が考えられるが明確にはできない。このほかグリッド出土であるがキビの粒塊が出土した。種子同定は松谷暁子氏が行った。

22. 椎津茶ノ木遺跡(第86図) 市原市椎津字茶ノ木に所在する。椎津川左岸標高約29mの台地上に立地し、低地部との比高差は約25mを測る。弥生時代中期から奈良平安時代を中心とした集落で、合計157軒の竪穴住居跡を検出した。古墳時代中期の住居跡145号遺構の東南コーナー付近で出土した完形の壺中から炭化米約2合程を検出した。この壺は床面上から横転した状態で出土している。外面の上部に煤が付着しており、炭化米は容量の1/3程度の量である。なお、専門的な分析等は行われていない。

23. 野焼A遺跡(第87図) 木更津市請西字野焼に所在する。矢那川左岸標高約35mの台地上に立地し、低地部との比高差は約15mを測る。弥生時代後期から奈良時代を中心とした集落と墓域で、総数277軒の竪穴住居跡を検出した。S I 058は古墳時代中期の住居で、覆土中から焼土や炭化材、多量の土器類や石製模造品とともにモモ2点が出土した。出土地点は不明であるが、住居の埋没過程において行われた祭祀行為にともなって廃棄されたものと考えられている。同時期のS I 170では南西部分の覆土中層からモモ1点が出土している。同層からは手捏土器や筒形土製品が出土した。なお、専門的な種子同定は行われていない。

24. 西屋敷遺跡 千葉市若葉区大宮町に所在する。都川左岸標高約22mの台地上に立地し、低地部との比高差は約12mを測る。古墳時代中期から奈良平安時代を中心とした集落と中世の台地整形区画・墓域からなり43軒の竪穴住居跡を検出した。古墳時代後期の焼失住居である020号跡からモモ1点が出土している。出土位置・層位は不明である。なお、専門的な種子同定は行われていない。

25. 有吉北貝塚(第87図) 千葉市緑区有吉町に所在する。浜野川右岸標高約40mの台地上に立地し、低地部との比高差は約26mを測る。古墳時代後期を中心とした集落で97軒の竪穴住居跡を検出した。古墳時代後期のS B-163住居址ではセクションベルトにそって30cm角のブロックサンプルを採取し、ウォーターセパレーションを行い炭化種子を採取している。また、発掘調査過程で出土した炭化種子も合わせて種子同定を行っている。その結果、イネ25、オオムギ?23、モモ43、スモモ11、サンショウ3、カラスザンジョウ1、不明310の合計416点の同定結果が得られた。このうちモモ8点は住居南コーナー付近を中心に出土している。なお、分析・同定はバリノサーヴェイ株式会社が行った。

**26. 高沢遺跡** (第88～95図) 千葉市緑区生実町に所在する。浜野川右岸標高約33mの台地上に立地し、低地部との比高差は約26mを測る。古墳時代後期から奈良平安時代を中心とした集落で約350軒の竪穴住居跡を検出した。このうち19軒の住居跡から炭化種子が検出され、山内文氏により種子の同定が行われた。なお、種子の検出は通常の調査過程において発見されたもので、土壌サンプリング等は行われていない。19軒のうち古墳時代後期が3軒で残りの16軒が奈良平安時代に属している。古墳時代後期の住居出土の炭化種子はすべてモモであり、各1点の出土である。奈良平安時代の住居でも主体はモモで13遺構24点出土した。また、081号・324号住居からはスモモが出土しているが、特に奈良時代の324号住居ではカマド付近の覆土中層から87点がまとまって出土している。このほか平安時代の277号・297号住居からそれぞれ1点ずつコナラ属の種子が出土し、088号住居ではモモのほかムクノキの種子が1点出土した。

**27. 久我台遺跡** 東金市松之郷字久我台に所在する。九十九里平野に面した標高約60mの台地上に立地し、低地部との比高差は約30mを測る。古墳時代後期から平安時代を中心とした集落で竪穴住居跡を278軒検出した。古墳時代後期の住居S I 168からモモと思われる炭化種子が出土している。出土位置・層位は不明で専門的な種子同定も行われていない。

**28. 大井東山遺跡** (第95図) 東葛飾郡沼南町大井字東山に所在する。手賀沼に面した標高約18mの台地上に立地し、低地部との比高差は約10mを測る。古墳時代中・後期を中心とした集落で古墳時代中期2軒、後期33軒の竪穴住居跡を検出した。古墳時代後期の竪穴住居031では、住居西側の覆土中層から5点のモモが出土している。この住居からは手捏土器が4点出土している。なお、種子の同定は松谷暁子氏が行った。

**29. 千草山遺跡** 市原市能満字東千草山に所在する。養老川右岸標高約30mの台地上に立地し、低地部との比高差は約15mを測る。弥生時代後期から奈良平安時代を中心とした集落と墓域からなり、総数55軒の竪穴住居跡を検出した。古墳時代後期末葉の103号住居跡で覆土中からモモが1点出土している。出土地点・層位は不明である。なお、専門的な種子同定は行われていない。

**30. 印内台遺跡群 (19)** (第96図) 船橋市印内2丁目に所在する。東京湾に面した標高約18mの台地上に立地し、低地部との比高差は約10mを測る。古墳時代後期から奈良平安時代を中心とした集落で古墳時代後期2軒、奈良平安時代3軒の竪穴住居跡を検出した。このうち古墳時代後期の鍛冶関連工房跡と考えられる006竪穴住居跡の南東柱穴を中心に16点のモモが出土した。モモの出土層が炭化物を多く含む層であることやモモが被熱を受けていることから祭祀行為によって投棄したものと考えられる。なお、分析は辻誠一郎・辻圭子両氏が行った。

**31. 海神町遺跡** 船橋市海神に所在する。東京湾に面する標高16m前後の台地上に立地するが、現在地は特定できない。海神周辺の遺跡としては海神台西遺跡があり、古墳時代後期から平安時代の住居跡などが検出されている。海神町遺跡では古墳時代後期の竪穴住居跡出土の土器内から炭化したイネ種子塊が出

土している。この種子塊の一面には布片の付着した痕跡が認められた。種子はかなり焼けて変形していたが、穎などは認められず、玄米または多少精白した米粒と推定された。分析・同定は直良信夫氏が行った。

**32. 菅生遺跡** 木更津市菅生字長町に所在する。小櫃川中流左岸の自然堤防上および沖積低地に立地する。自然堤防上では弥生時代中期の竪穴住居跡や古墳時代後期の大溝などが、沖積低地では小区画水田跡が検出された。炭化種子は出土地の記載はないが、恐らく古墳時代後期の大溝からの出土と考えられ、イネ、モモ、ヒョウタンなど11種類が同定された。分析・同定は粉川昭平氏が行った。

**33. 山田水呑遺跡** (第96・97図) 東金市山田字水呑台に所在する。鹿島川と小野川の分水嶺に近い標高約60mの台地上に位置し、低地部との比高差は鹿島川水系支谷で約17m、小野川水系支谷で約32mを測る。奈良平安時代の集落遺跡で竪穴住居跡143軒、掘立柱建物跡52棟を検出した。このうち奈良時代の竪穴住居跡3軒から炭化種子を検出した。第57号住居址ではカマドの燃焼部からモモ1点、第121号住居址では中央部の覆土中層からモモ2点、ウメ1点、横長の長方形住居である第16号住居址では南コーナー付近を中心にモモ6点を検出した。分析を行った山内文氏によって16号住居址出土のモモのうち2点でアカネズミの歯痕が確認された。

**34. 文作遺跡** 市原市葉木字文作に所在する。神崎川右岸標高約62mの台地上に立地し、低地部との比高差は約25mを測る。古墳時代後期から奈良平安時代の集落遺跡で竪穴住居跡118軒、掘立柱建物跡34棟を検出した。奈良平安時代の掘立柱建物跡の1つの柱穴からモモ2点が出土している。専門的な分析・同定などは行われていない。

**35. 小野遺跡** 松戸市胡録台字小野に所在する。江戸川左岸標高約27mの台地上に立地し、低地部との比高差は約5mを測る。奈良平安時代の集落遺跡で、第1地点の調査では竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡3棟を検出した。奈良平安時代の竪穴住居跡である3A・3B・4D住居跡においてカマドを中心として土壌サンプリングを行った。その結果、3A住居跡からイネ・サンショウ、3B・4D住居跡からイネが出土した。このほか2号掘立柱建物跡からモモが、3号掘立柱建物跡からイネ・ササゲがそれぞれ柱穴から出土している。なお、分析・同定はパリノサーヴェイ株式会社が行った。

**36. 飯仲金堀遺跡** (第98図) 成田市飯仲字台畑に所在する。江川の左岸標高34mの台地上に位置し、低地部との比高差は約20mを測る。A地点からは奈良平安時代の竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡16棟が検出された。奈良平安時代の3号住居跡では、南東コーナー付近からモモと思われる炭化種子がやや浮いた状態で出土している。なお、専門的な分析・同定は行われていない。

**37. 小谷遺跡** (第98図) 木更津市請西字南ノ谷に所在する。烏田川右岸標高約65mの台地上に立地し、低地部との比高差は約32mを測る。奈良時代を中心とした集落と寺院跡で竪穴住居跡11軒と掘立柱建物跡8棟を検出した。奈良時代後半の焼失住居である21号竪穴住居からは、東側で床面より若干浮いて広がる焼土中ならびに焼土直上からモモと考えられる炭化種子7点が出土した。なお、専門的な種子同定は行わ

れていない。

**38. 井戸向遺跡** (第99図) 八千代市萱田字弁天作に所在する。新川左岸標高約23mの台地上に立地し、低地部との比高差は約16mを測る。奈良平安時代を中心とした集落で99軒の竪穴住居跡を検出した。9世紀初頭の住居跡D147からは三彩小壺・托、火燧金、火燧石とともに炭化米962粒、マメ類25点が出土した。炭化種子の出土した層は床面から約10cm上位から約15cmの厚みで堆積していた。炭化種子の採取は住居内を20cmのメッシュで区切り、炭化種子確認面から5cmずつの厚さでブロックサンプルし、ウォーターセパレーションする方法で行った。その結果東西2カ所の壁近くに分布のピークが認められ、出土量の変化などから住居の埋没過程において行われた祭祀などの行為によって投棄されたものと推定している。なお、炭化種子は投棄段階ですでに炭化していたものと考えられる。炭化種子の計測はパリノサーヴェイ株式会社が行ったが、種子の専門的同定は行われていない。

**39. 上総国分尼寺跡** 市原市国分寺台中央3丁目に所在する。養老川右岸標高約29mの台地上に立地する。奈良平安時代の国分尼寺跡で、東側斜面部から検出された9世紀前半の井戸跡について土壌サンプリングを行った。その結果、栽培植物と考えられるものとしてクリ、スモモ、ウメ、モモ、カキノキ属、イネ、ジュズダマ、アサ、シソ属、ナス、ヒョウタンが検出された。なお、分析・同定は南木睦彦、辻誠一郎両氏が行った。

**40. 城山遺跡** 匝瑳郡光町篠本字城山に所在する。栗山川左岸標高約33mの台地上に位置し、低地部との比高差は約23mを測る。中世城郭跡の下層遺構として古墳時代8軒、奈良平安時代39軒の竪穴住居跡を検出した。このうち9世紀代の焼失住居である1号住居跡カマド前庭部分から、炭化したマメ類とその下より同じく炭化した麻布が出土した。種子の分析は行われていないが、形状からアズキと考えられている。

**41. 須和田遺跡** 市川市須和田2丁目に所在する。国分川左岸標高約20mの段丘上に立地し、低地部との比高差は約17mを測る。古墳時代後期から奈良平安時代の集落遺跡である。平安時代の第2号住居址からオオムギ1点が出土した。なお、分析・同定は金子浩昌氏が行った。

**42. 新城遺跡** (第97図) 香取郡多古町西古内字新城に所在する。栗山川右岸に面した標高約35mの台地上に位置しており、低地部との比高差は約28mを測る。弥生時代中期から奈良平安時代にかけての集落遺跡で31軒の竪穴住居跡を検出した。このうち平安時代(9世紀後半)の15住居跡南西部分において、床上約5cmの焼土層中から塊状の炭化種子が出土した。種子塊は最大幅で64.5mm、最小幅で52.5mm、高さ45mm、重さ32.45gを測る。分析を行った永嶋正春氏によると炭化種子は短粒種のコメであり、籾殻の付着は全く見られず胚も脱落し、精米したものと見られる。また、表面に粗い布目痕(平織の麻布と思われる)が認められ、形状も布を絞りまとめた様子を示している。このことから甑で蒸した堅粥を布で包んだ包み飯と考えられている。

**43. 久野遺跡** 木更津市下郡錯綜地字西久野ヶ原に所在する。矢那川右岸標高約103mの台地上に立地

し、低地部との比高差は約60mを測る。奈良平安時代を中心とした集落と寺院跡で32軒の竪穴住居跡を検出した。9世紀後半の焼失住居S I-48からはカシ類168.38gが、S I-54からはイネ131.34gが覆土中から出土した。なお、カシ類は住居床面付近にまとまって出土していることや全て穀斗が見られないことから住居中に貯蔵されていたものと考えられる。専門的な分析・同定は行われていない。

**44. 馬場遺跡** 千葉市稲毛区園生町に所在する。汐田川左岸標高約28mの台地上に位置し、低地部との比高差は約18mを測る。古墳時代2軒、奈良平安時代10軒の竪穴住居跡が検出された。奈良時代の住居跡、S I 5の貼床下からキンエノコロ約250粒とイヌビエまたはメヒシバと思われる種子約50粒が出土した。分析の結果、人為的な集積ではないと考えられる。分析・同定は松谷暁子氏が行った。

**45. 日秀西遺跡** 我孫子市日秀字西に所在する。利根川と手賀沼に挟まれた標高約19mの台地上に立地し、低地部との比高差は約14mを測る。古墳時代後期を中心とした集落と奈良平安時代の相馬郡家正倉と考えられる掘立柱建物群を検出した。試料の採集および分析は佐藤敏也氏が行った。試料は古代の掘立柱建物跡の柱穴覆土20か所、周辺土壌のサンプル24か所から採取し、いずれも多量の炭化米を検出した。分析の結果、粒型は短粒が主体で15%前後の長粒を含んでいることが明らかとなった。

**46. 下北原遺跡** 富津市更和字下北原に所在する。湊川右岸標高約11m前後の段丘および沖積低地に立地する。平成2年度の調査では奈良時代の製鉄遺構が検出されている。炭化種子は奈良平安時代の遺物を包含する泥炭層から出土し、イネ・オオムギ・コムギなど16種類が同定された。分析・同定は直良信夫氏が行った。

## 2 炭化種子の出土傾向

これまで見てきたように、今回の集成作業において確認した炭化種子検出遺構は、弥生時代中期から平安時代のあいだで46遺跡192遺構（グリッドサンプル含む）を数える。また、出土遺跡の分布傾向としては旧下総国南部と上総国のそれぞれ東京湾に面した地域に集中しており、地理的条件や気候的条件もほぼ似た地域の資料と言えよう。

これらの遺構における炭化種子検出方法をまとめると、炭化種子採取の目的で土壌サンプリングを行い種子を検出した遺跡は10遺跡であり、発掘調査過程において炭化種子の存在を確認して種子のみを採取した遺跡は36遺跡であった。また、出土炭化種子に対して専門家による同定がなされたのは25遺跡であった。このように本県においては炭化種子検出を目的とした調査事例は極めて少ないと言える。通常の発掘調査において遺構覆土中から炭化種子を確認し得るのは、土器などの容器に納められたもののほかはモモなど大型のものやコメなど比較的種子の種類を推定し易いものに限られてくる。これに対してアワ・ヒエ・キビ・ムギなどのような小型の種子についての捕捉率は非常に低いと言える。このため後段で述べるような各時期ごとの生業や食生活の復元材料としての炭化種子には自ずと偏りが生じてくることは申すまでもない。また、出土した炭化種子についても専門的な種同定が行われず不明のままであるものや出土位置や層位などのデータが示されていないものも多く、今後調査・整理作業における炭化種子等に対する関心が高まることを期待したい。

では以上の状況を踏まえ、主な種類について出土時期・状況を概観してみたい。

1. **イネ** イネは弥生時代中期以降各時代に亘って出土している。近年、縄文時代に遡る検出例が全国各地で報告されているが、本県においては炭化種子ではないが、弥生時代前期とされる成田市荒海貝塚出土のイネプラントオパールが最古の事例となる。弥生時代から古墳時代にかけての袖ヶ浦市滝ノ口向台遺跡や境遺跡の調査によって行われた炉覆土の洗浄結果によると、若干の雑穀状の種子のほか多くのイネ種子が炉覆土中に混入していることが明らかとなった。また、古墳時代後期の銚子市野尻遺跡や奈良平安時代の小野遺跡における古墳時代後期のカマド覆土中においてもイネが出土していることから、各時代を通じて一般的に炉・カマドの覆土に炭化米が含まれる可能性は高いと考えられる。また、土器内からイネが出土した例は滝ノ口向台遺跡、木更津市中郷谷遺跡、市原市椎津茶ノ木遺跡、船橋市海神町遺跡の4遺跡8事例を数えることができるが、中でも椎津茶ノ木遺跡では古墳時代中期の完形の壺内から約2合程度の種子が出土し、明らかに貯蔵・調理段階での埋没状況を示している。また、弥生時代後期中郷谷遺跡例では胴部上半を欠失した壺からキビと共にイネが出土し、それぞれ類が残存しており貯蔵の状態を示している。このほか君津市常代遺跡、市原市市原条里制遺跡（弥生時代中期）、多古町新城遺跡（平安時代）の3遺跡からイネの炭化種子塊が出土している。

2. **雑穀類** 雑穀類は粒径の小さいものも多く同定しにくい。そのため不明としたものの多くには雑穀類が含まれているものと考えられる。オオムギでは千葉市有吉北貝塚における古墳時代後期の例が最古で、ほかに平安時代の市川市須和田遺跡例が見られるのみである。キビは同定数が少なく時期の明らかなものとしては、中郷谷遺跡出土の弥生時代後期の事例が認められるのみである。このほか千葉市城の腰遺跡092号住居跡（弥生時代中期）出土の炭化種子塊がアワであるとされるが詳細は不明である。

3. **マメ類** 千葉市東寺山石神遺跡出土の古墳時代中期のダイズ、光町城山遺跡出土の平安時代のアズキが見られる。城山遺跡例には炭化した麻布が伴っており、麻袋などに入っていたことも想定されるが、専門的な同定は行われていない。また、古墳時代中期の市原市草刈遺跡K区151号跡からは、壺に入った状態で炭化したマメ類が出土しているほか、平安時代の八千代市井戸向遺跡からも多数の炭化米に混じってマメ類が出土している。このほか小見川町阿玉台北遺跡023D号址からもマメ類が出土している。

4. **堅果類** 弥生時代では、中期城の腰遺跡でのクリ、後期袖ヶ浦市下向山遺跡、成田市東峰御幸畑西遺跡、鋸南町田子台遺跡でのシイ・カシ類、奈良平安時代では、千葉市高沢遺跡、木更津市久野遺跡でのコナラ属、シイ・カシ類の出土が認められる。このほか常代遺跡（弥生時代中期）、茂原市国府関遺跡（古墳時代前期）、君津市郡遺跡（古墳時代後期）の溝からも堅果類の出土が見られる。これらの堅果類は遺構埋没過程において周辺から混入した可能性も否定できないが、下向山遺跡41号住居例や城の腰遺跡037号跡のように壺に貯蔵された状態で出土したものや、久野遺跡S I - 48のように床面にまとまって出土したものなどは食用として貯蔵していた可能性が高いと言えよう。また、市原市上総国分尼寺の井戸跡からは、平安時代のクリが出土している。

5. **果実類** モモ、スモモ、ウメの類を果実類としてまとめることとする。弥生時代中期の常代遺跡SD-220からモモが出土しているのが最古で、古墳時代前期の木更津市山伏作遺跡SI045例以降住居跡からのモモ出土事例が急増し、古墳時代中期で5例、後期で12例、奈良平安時代で14例を数える。スモモでは古墳時代後期の千葉市有吉北貝塚例、高沢遺跡例、平安時代の上総国分尼寺跡例が見られるが、なかでも高沢遺跡324号住居跡ではカマド付近の覆土中層から87点もの種子が出土している。ウメは奈良平安時代の常代遺跡SK118（井戸）、東金市山田水呑遺跡121号住居址、上総国分尼寺井戸跡からそれぞれ出土している。このほか上総国分尼寺井戸跡からカキノキ属が検出されている。

6. **ウリ類** ウリ類は溝または井戸からの出土のみである。弥生時代中期の常代遺跡SD-220、古墳時代後期の郡遺跡SD071, 469, SK612、奈良時代の常代遺跡SK-118からマクワウリ、ヒョウタンが、平安時代の上総国分尼寺井戸跡からもヒョウタンが出土している。

以上のように炭化種子の種類ごとに概観を述べてきたが、各時代ごとの出土傾向について次に示すこととする。第9表は縄文時代から奈良平安時代を8時期に分け、各時期ごとの住居跡出土炭化種子件数を表したものである<sup>5)</sup>。先に述べたように炭化種子は住居跡以外の溝などからも多数出土している。しかし、堅果類などは人為的に採集した結果として溝に投棄したものなのか、周囲にある樹木から自然に落下して混入したものか判断するのが難しい。そこで住居跡出土の種子をもとに出土傾向を類推することとしたい。

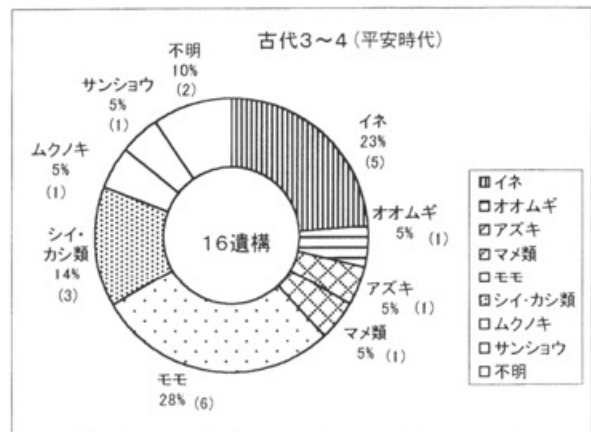
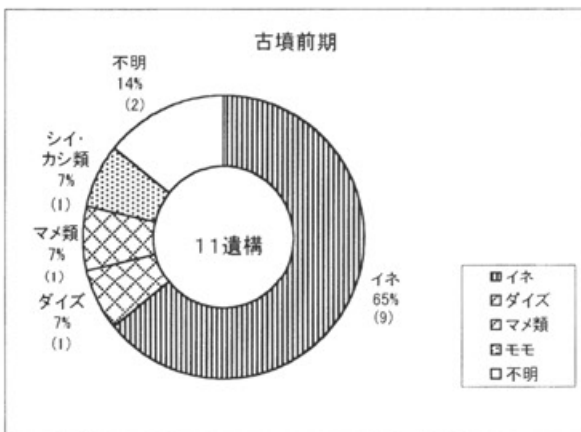
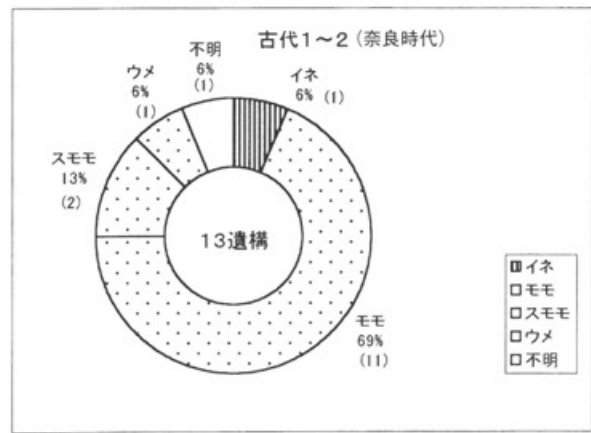
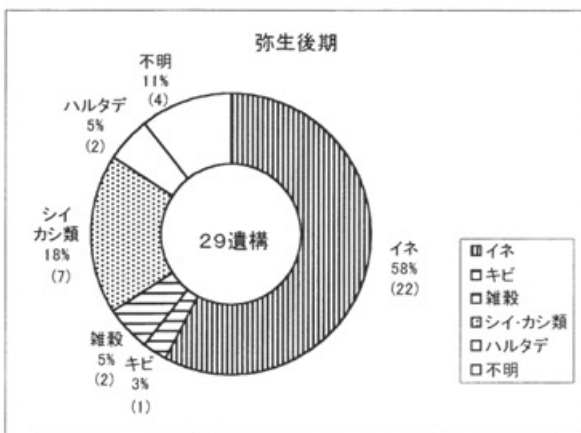
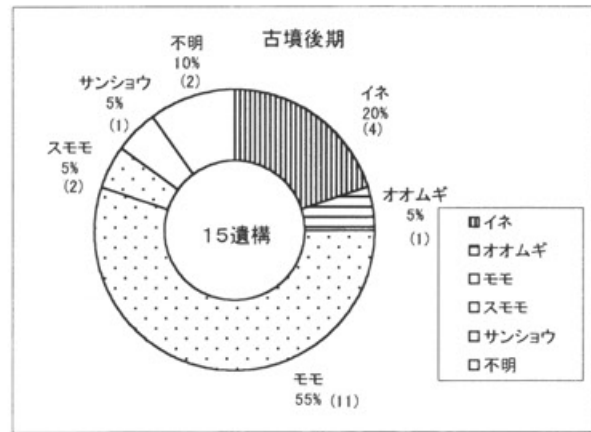
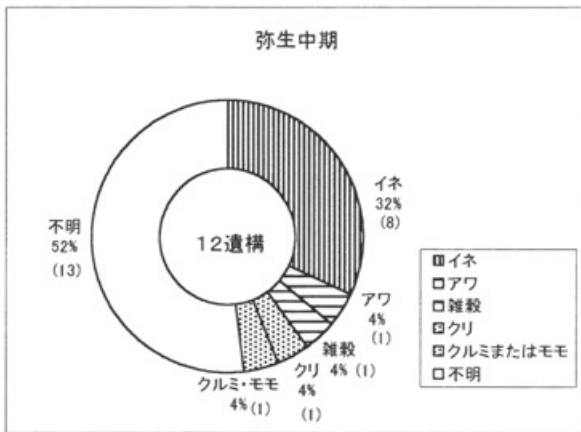
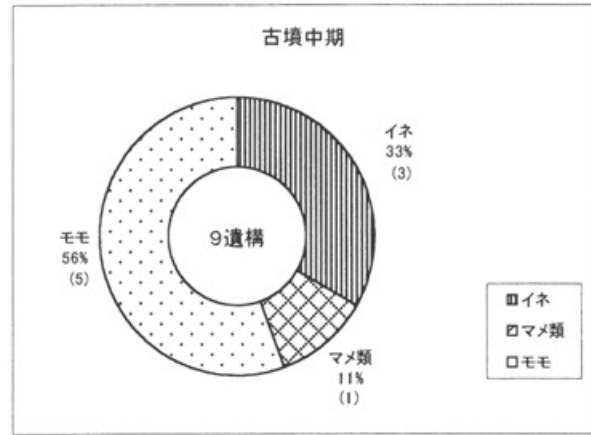
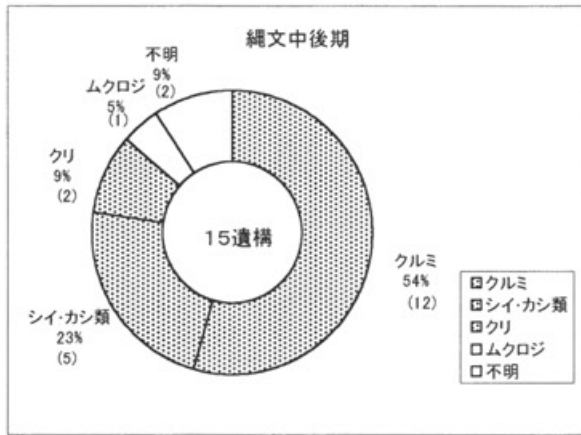
穀類としてはイネが各時期を通じて出土しているが、弥生時代に近づくほど検出事例が多くなる。これに対して雑穀類、マメ類の検出例は少なく、散発的な出土状況を示している。しかし、中郷谷遺跡035号址（弥生時代後期）壺内出土のキビのほか、定量的土壌サンプリングをした有吉北貝塚SB163住居跡（古墳時代後期）の例では、イネとほぼ同数のオオムギ<sup>?</sup>が出土しており、地域差はあるもののかかなりの割合で雑穀の生産・消費があったものと考えられる。県外の事例となるが、神奈川県横浜市高速二号線No.6遺跡（弥生時代後期）のオオムギや埼玉県志木市田子山遺跡（弥生時代後期）のアワなど堅穴住居跡内からまとめて出土する例もあり、今後一定量の比率で検出されるものと思われる。

堅果類のうちシイ・カシ類は弥生時代後期と平安時代でまとめて出土している状況である。特に壺内に貯蔵されていた下向山遺跡41号住居址（弥生時代後期）の事例や殻斗のないカシ類が床直上でまとめて出土した久野遺跡SI-48（平安時代）例などは、ドングリ類が救荒食料としての性格も含めて一定の比率で存在していることを示している。しかしながら、全体的に見ると粒径の大きさに比べると出土件数は少ないと言える。今日まで千葉県においては、西日本で見られるようなドングリ類の貯蔵穴は検出されず、貯蔵方法との関連から今後検出事例が増える可能性もある。また、モモについては県内では古墳時代前期以降急速に住居跡からの出土例が増える。ただし、モモは古来より呪術的な霊力を持つ果実として珍重されていることから、単に食料残屑として住居跡内に残されたと考えるよりも、住居廃絶に伴って行われる祭祀行為に関連して故意に投棄された資料も多いものと考えられる。

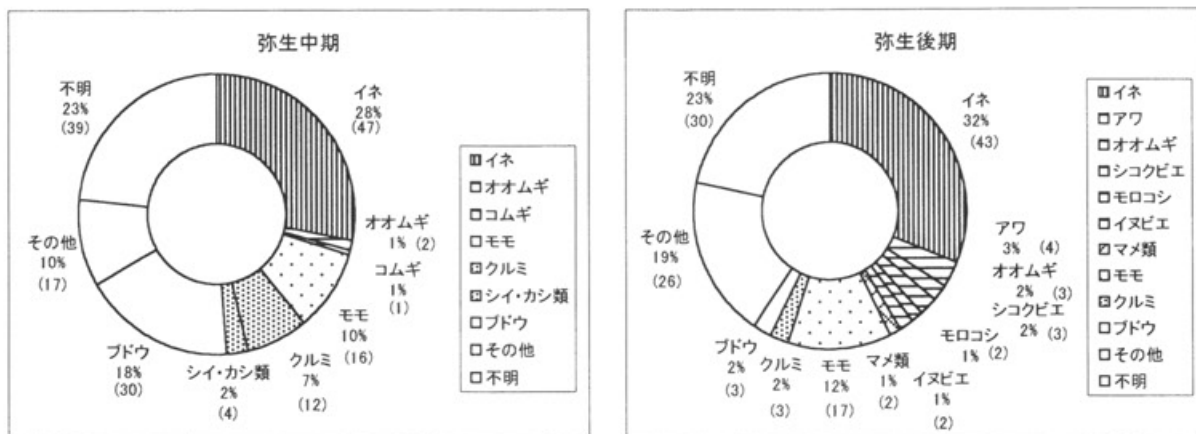
このように千葉県内の炭化種子出土状況からは、比較的バラエティー豊かな食生活、食料生産・採集活動の一端を見ることが出来る。また、祭祀性を考慮しなければならないモモを除くと各時期を通じて増減があるもののイネが20%から65%（奈良時代のみ6%）と穀物の主体であることには変わりがなく、雑穀類（5%から8%）や堅果類（7%から18%）は客体的出土状況を示していると言えよう。しかしながら



第9表 時期別食用植物比率（ ）内は遺構数



第10表 神奈川県時期別食用植物比率



資料数の制約から、各時期におけるイネと雑穀との比率の変化、地域・集落ごとの生産活動・食生活の相違といった細かな違いを指摘するには至らなかった。近年、近隣諸県においても遺跡出土の炭化種子についての関心が高まり、炭化種子検出遺構の集成などが行われている。神奈川県では弥生時代について炭化種子検出遺構と同定結果をまとめている<sup>6)</sup>。それらについて先に行ったように住居跡出土資料をまとめると、第10表のようになる。神奈川県は本県と気候風土も近く、同定件数は弥生時代に限定されたものであるが本県より大幅に多い。このような神奈川県のデータに照らしても、千葉県内において確認したよりも雑穀類やモモの同定件数が多いものの、イネが卓越し雑穀や堅果類が少量含まれるという傾向に大きな変化は見られなかった。

今回の検討ではより人間の意思が働いた可能性の高い竪穴住居跡出土の炭化種子を対象としておこなった。しかし、小面積の竪穴住居跡であっても炭化種子の遺存原因は様々であり、貯蔵していたものか調理途中でこぼれたものか、燃料として使用されたものか、宗教的な意味から投棄されたものなのかを慎重に判断する必要がある。さらに、種子が炭化する原因そのものについても究明する必要があるのではないだろうか。これらの資料操作をした後に同じ条件下で比較して初めて各時代の食料生産のあり方が明らかになるものと思われる。また、各時代相を明らかにするには、その前後を含めた広い時代幅での比較検討が必要であることは言うに及ばない。

### 3 炭化種子の出土位置と埋没過程について

ここでは炭化種子の出土状況について若干述べることにする。すでに前節においても指摘したように炭化種子の出土状況については、人為的な結果によるものか自然堆積によるものかを資料批判する必要がある。また、この検証を行うことによって当時の食料の保存状況や調理方法、祭祀内容などの解明に多少でも迫れるものと考えたい。このため、ここでは直接人間が関与した可能性が高い竪穴住居跡における炭化種子の出土傾向と種子の種類について考えることにする。これまで行ってきた集成作業から見ると出土傾向には4つのパターンを認めることが出来る。それは(1)土器などの容器内から出土するもの、(2)炬やカマドなどの覆土内から出土するもの、(3)床面上から出土するもの、(4)覆土中層・上層から出土するものである。いうまでもなく(1)がもっとも人間の意思が強く働いた結果であり、(2)、(3)といくに従って意識的に種子を残そうとしたものか結果として残ったのか、または自然の作用によって残ったも

のか判断するのが難しくなるといえる。ではつぎにそれらを個別に見ていくこととしよう。

1. 土器などの容器内から出土するもの 弥生時代中期の袖ヶ浦市滝ノ口向台遺跡040号、055号、003号住居跡、千葉市城の腰遺跡037号跡、後期の袖ヶ浦市下向山遺跡41号住居址、木更津市中郷谷遺跡035号址、鋸南町田子台遺跡2号住居址、古墳時代中期の市原市椎津茶ノ木遺跡145号遺構、市原市草刈遺跡K区151号跡、古墳時代後期?の船橋市海神町遺跡の8遺跡10遺構から検出された。このうち滝ノ口向台遺跡例は、いずれも炭化種子の量が1点から5点と少量であり、流れ込みの可能性も否定できない。また、城の腰遺跡では壺破片に挟まれた状態でクリが出土し、田子台遺跡例では大型の土器破片の下からシイ類が出土しているが、土器内とするにはやや問題が残る。海神町遺跡例では炭化種子については多く言及しているものの、土器についての詳細は不明である。

これら4遺跡の事例を除いた4遺跡4遺構の事例については、いずれも焼失住居の床面直上からの出土であり、明らかに人為的に種子が土器内に納められたものと考えて差し支えないと言える。つぎにこの4事例について子細に見てみよう。下向山遺跡41号住居址では入り口から見て左側奥の柱穴に近い部分で横転した完形の小型壺からカシ類が出土している。壺は横転した上面がかなり被熱を受け一部還元化している。内面の底部付近と一部の側面に円形の器面剥落が認められ、剥落場所と被熱箇所が一致することから円形剥落は使用によるものではなく焼失時に生じたものと考えられる。また、底部外端部分の磨滅はあまり認められない。このことから、壺そのものはあまり動かさずに使用されていたと思われ、壺周辺に種子が散乱していることを考えると壺を吊すか棚の上に置いていた可能性も指摘出来よう。

中郷谷遺跡035号址では住居南東壁近くから壺が正位の状態で出土し、中からイネ・キビが検出されている。この壺は胴部上半を欠失し、割れ口部分を磨いて再利用したものである。このため鉢に近い形状を呈している。中から出土したイネ・キビはいずれも穎が残存しており、すぐに食用に供する状態ではなく一時的な保管状況を示しているものと考えられる。また同じ容器内に違う種子が混じっている状況をどの様に考えるかなど検討課題が多い。

椎津茶ノ木遺跡145号遺構は、切り合い関係が激しく住居全体の形状を明らかにすることは困難であるが、南東コーナー付近で横転した壺からイネが出土している。この壺の上部には煤の付着がみられ、数次にわたって火に掛けられ煮炊きされていた状況を示している。しかし、炉そのものは検出されず、出土状態からは炉に置かれていたとは考えられない。また、イネ自体の分析が行われていないため、穎が含まれるかどうかは不明であるが、壺の出土位置から一時的に保管されていたものと考えられる。

草刈遺跡K区151号跡は遺存状態の悪い遺構であるが、多数の土器類や土製支脚が当時の状況そのままに出土している。このうち炉跡奥の北東側壁付近で横転した小型の壺からマメ類が出土している。壺はよくミガキ痕跡を止めており、焼失時に生じたと考えられる煤が付着しているものの煮炊きに使用した形跡は認められず、底部および内面の損耗も見られない。このことから、ある一定期間マメ類を貯蔵していたものと考えられる。

以上4例について詳細に述べたが、炭化種子が中から出土した土器の器種は、椎津茶ノ木遺跡例を使用状況から甕の範疇に入れるとしても、他はいずれも壺であり壺イコール貯蔵具であるとする解釈を示す実例と言えよう<sup>7)</sup>。しかしながら、壺自体が再利用品であったり、加熱行為の痕跡をとどめているものがあること、容量の小さい小型品が多く見られることなどを考慮すると、恒常的な貯蔵用具と考えるよりもむ

しろ、食用に供するにあたりバラバラになりやすい種子を一時的に入れておく容器としての側面が強調されていると言える。また、下向山遺跡例など加飾性の低いものが使用されていることも注目される。住居内での出土位置については、いずれも住居のコーナー付近からの出土であり、住居のコーナー部分が収蔵保管スペースとなっていたことが窺える。また、中郷谷遺跡を除く3例はそれぞれ横転した完形の小型壺からの出土であり、棚などに置かれていたものが落下した可能性も考えられる。

**2. 炉やカマド内から出土するもの** 弥生時代中期の滝ノ口向台遺跡040・043・044・045・052・058号住居跡、後期の袖ヶ浦市境遺跡50・57・59・61・76・78・82号住居址、滝ノ口向台遺跡006・008・011・014・016・018・030・034・036号住居跡、袖ヶ浦市谷ノ台遺跡S I 021、古墳時代前期の境遺跡58・62・67号住居址、後期の銚子市野尻遺跡5・7号住居跡、古代の東金市山田水呑遺跡57号住居址、松戸市小野遺跡3 A, 3 B, 4 D号住居跡の6遺跡32遺構で出土している。比較的遺跡数が少ないにもかかわらず検出住居数が多いのは、炭化種子の検出を目的として炉やカマドの土をサンプリングした結果に他ならず、他の多くの遺跡においてもサンプリングを実施すれば炭化種子の採集は容易に行われることを示している。さて、これら検出遺構のうち山田水呑遺跡例でモモが出土しているほかは、イネを主体として若干の雑穀様の種子が加わるという傾向が見て取れる。

カマドから炭化種子が検出される要因として櫛原功一氏は、(1)調理時の噴きこぼれなどから主食の実体を示す。(2)カマド内への片付けあるいは清掃。(3)飼料その他の目的での調理。(4)燃料としての植物質食料。(5)カマド祭祀の5点をあげている<sup>8)</sup>。炉やカマドの灰について分析を行った千葉市馬場遺跡や上ノ台遺跡、松戸市小野遺跡の例によるとイネの灰像が卓越して検出された結果が得られている。また、神奈川県秦野市砂田台遺跡の炉の炭化種子分析では、穎の付いたイネや果肉の付いたブドウが検出されている。このような結果から判断すると、炉やカマドからイネが多く検出される理由として、脱穀後の稲藁を燃料への点火材として利用した際、藁に残っていた種子が炉やカマドに残留したものが多くあったと想定される。そのため炉やカマドの資料のみで、当時の食生活を復元することには注意が必要である。

**3. 床面上から出土するもの** 床面直上から炭化種子が出土する事例は、弥生時代中期以降各時代を通じてあり、イネやシイ・カシ類、モモ、マメ類など種類も多様である。これらの種子については人為的な要因として、住居内に直接籠などに入れられたまま放置されたもの、天井から下げられていたものが落下したもの、または住居の廃絶に伴って置かれたものなどの事由が想定される。また、自然的な要因の強いものとしては、住居の埋没過程の初期において何らかの理由によって種子が混入するケースが考えられる。いずれにしても埋没時の土層堆積状況や出土状況が重要であり、焼失住居などにおける焼土層下出土の種子などは、住居との同時性の高い床面出土資料に相当する資料と言えよう。このほか後述のようにモモなど、それ自身に霊力が宿るとされる植物については祭祀行為を念頭に置く必要がある。また、久野遺跡のシイ・カシ類のように殻斗がないものが集積されるなどの特徴は住居に帰属するものと考えられる。

**4. 覆土中層・上層から出土するもの** 各時期を通じて検出されるケースで、種子の種類も多様である。千葉市有吉北貝塚S B 163では定量的なサンプリングを行い、イネ、オオムギ？、モモ、スモモ、サンショウ、カラスザンショウといった種子が検出されている。このような覆土中層・上層から出土する種子に

については、木更津市野焼A遺跡S I 058や八千代市井戸向遺跡D147のように共伴する遺物が多い事例を除き帰属する時期を特定できない場合が多い。共伴遺物がある場合はその内容から時期や性格などを推定することができ、先述の野焼A遺跡例や井戸向遺跡例では祭祀的な行為が想定されている。また、成田市東峰御幸畑西遺跡15・19号住居例出土のシイ・カシ類のように周辺に自生する植物種子などは、住居廃絶後の自然堆積と共に混入した可能性は否定できない。

以上のように出土状況から種子の帰属や性格について考えてきた。2項において述べた炭化種子の出土傾向についても、本来同じ条件下でないものを比較対象とすることは出来ず、このような資料批判を厳密に行った上で時期別の傾向を論議するのが当然である。しかしながら、現時点では炭化種子の出土件数自体が多いとは言えず、大雑把な傾向を述べるにとどまった。今後良好な出土資料の増加によって同じ条件下での比較検討が行われることを期待したい。

#### 4 いわゆる「おにぎり状炭化物」について

ここではイネ炭化種子が塊状に固形化したものを総称して「おにぎり状炭化物」として扱うこととする。住居跡出土以外のものを含めて県内では、弥生時代中期の市原市市原条里制遺跡並木地区S D-008（2点）と君津市常代遺跡S D-220（2点）、平安時代の多古町新城遺跡15住居跡、中近世の市原条里制遺跡市原地区4区の3遺跡6例を数えることができる。これらの出土状況は常代遺跡・市原条里制遺跡並木地区では宮ノ台期の溝跡から、新城遺跡では竪穴住居跡、市原地区では水田覆土中からの出土である。

市原条里制遺跡並木地区S D-008出土の2点の「おにぎり状炭化物」は、いずれも溝跡の上層部からの出土である。このうち遺物番号1239（写真図版7）は、長径7.87cm、短径7.65cm、最大肥厚4.48cm、重さ33.88gを測る。外形は三角形を呈し底面と2方の側面は平らで二次的に擦ったような痕跡が認められ種子の形が壊れている。側面の残る1方は割れた状態で内部に原形を止めたイネ種子が高い密度で確認できる。全体に種子密度が高く外面部分はよく発泡しており、種子の間も炭化物で埋められ糊状のもので固着している様子が窺える。肉眼で観察した限りでは穎などは見られない。また、遺物番号912（写真図版6）は、長径7.05cm、短径5.34cm、最大肥高3.46cm、重さ25.13gを測る。外形は半分に割れた碗形を呈し底面が外湾している。碗形の底面部分は特に種子の炭化状態が著しく、反対側の上面部分は種子の間を埋める糊状の炭化物が多く見られる。割れ口部分の種子は良く原形を止めており種子密度は高く穎や藁などは見られない。これに対して市原地区4区のⅡ1層下部の水田耕作土から出土した遺物番号026（写真図版8）は不整形を呈し、長径6.73cm、短径4.60cm、重さ24.73gを測る。前2例のような炭化度合いの違いは認められず、全体に種子の形状を良く止めた状態である。種子には穎が含まれ藁も見られる。

常代遺跡S D-220では2点の「おにぎり状炭化物」が出土しており、そのうちの1点は幅約4.5cm・高さ3.5cmの円筒形で、米粒は比較的本物の形状を保っており、種子間は炭化物で埋められている。また、一部に藁状の繊維や穎の付着が認められる。残りの1点についても百原新氏の分析によると穎が認められたとされている。

これらのものと若干様子が異なるものが新城遺跡15住居跡例である。長径6.1cm、短径4.6cm、重さ33.59gを測る。外形は楕円形を呈し、表面には平織りの麻布と思われる粗い布目痕が認められ、一か所には布を絞ったタワミが見られる。種子は比較的本物の形状を留めており、穎や他の種子などは見られない。

以上県内で出土した「おにぎり状炭化物」について見てきた。これらの炭化種子塊の共通する特徴は、

その構成される種子がイネのみから成っていることである。しかし、それぞれの状態には違いが見られ、大きく2つに分類することができる。一つは常代遺跡や市原条里制遺跡市原地区の例のように、穎や藁が混入しているものである。これらは食用にされたものとは考えにくく、貯蔵時や収穫時などで火を受け炭化した可能性が高いと言える。もう一つは市原条里制遺跡並木地区や新城遺跡の例である。並木地区の遺物番号912は甕の底を思わせる椀形を呈し、底面が著しく炭化しているなど、調理の過程で炭化した「おこげ」の可能性が極めて高いものや新城遺跡例のように明らかにコメを布で包み調理したものか調理したコメを包んだ様子が窺えるものなど、調理中の不注意か何かで生じた失敗作の可能性が高いものに分けることができる。

弥生時代中期の市原条里制遺跡並木地区例が「おこげ」であるとしたら、仮にマツリなどの特別な日の食事であったとしても、雑穀を混ぜたものではなく純然としたコメの飯を食する機会があったことを示していることになる。また、「おこげ」という失敗作であるとするれば、これより多くの成功例が存在したはずであり、弥生時代人がコメを食する機会は比較的多かったものと推定される。調理の方法についても種子がもとの形状をよく保っていることを考えると、粥などではなく炊いていたものと考えられる。近年、小林正史氏による甕の使用痕分析から弥生時代には炊きあげる炊飯方法が普及していたとの指摘がなされており<sup>9)</sup>、これらの結果とも一致する内容と言える。

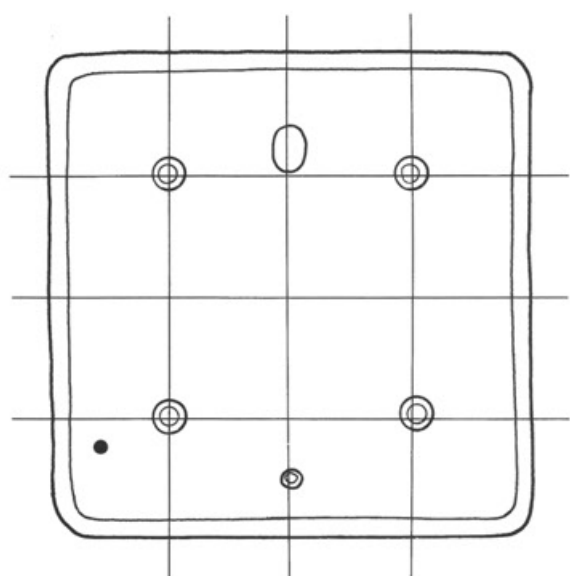
平安時代の新城遺跡例は、布にコメを包んだ状態で出土している。調理したコメを包んだものとも考えられるが、平安時代にはすでに甑が普及しており、甑でコメを蒸す場合甑の内面にコメが付着するのを防止するため布に包んでいたことも想定される。このほかイネ種子塊に布片や繊維痕が付着している例としては、船橋市海神町遺跡（古墳時代後期）や神奈川県平塚市北金目遺跡群32区S I - 008（弥生時代後期）があげられるが<sup>10)</sup>、布に包んで調理する過程で炭化したものかどうか検討する必要がある。

今回「おにぎり状炭化物」として炭化種子塊を取り上げたが、明瞭に「おにぎり」であると断定できるものはなかった。また、食用に適さないものや「おこげ」や蒸したコメの可能性などがあることを指摘した。少ない資料から判断したため推量を出ない部分も多い。従来「おにぎり状炭化物」といわれてきているものがはたして「おにぎり」や「ちまき」あるいは「おこげ」ではあるかは、調理方法も含め今後の研究の進展と資料の増加に委ねるところが大きい。

## 5 モモ核の出土状況と祭祀行為

モモは古くから『古事記』『日本書紀』における黄泉国神話などの文献にも登場する霊力のある果実として有名である。また、最近の成果においても法隆寺の五重塔や金堂、大講堂の柱上部の穴や大阪府池島福万寺遺跡の土器埋納遺構からもモモが出土しており<sup>11)</sup>、文献上に現れるモモの特殊性を示す結果となっている。さて、今回の集成でもモモは弥生時代中期から中近世に至るまで多数確認され、遺構の種類も竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・井戸と多岐にわたっている。本節ではこのうち竪穴住居跡ならびに掘立柱建物跡から出土するモモについて若干の考察を試みることにしたい。

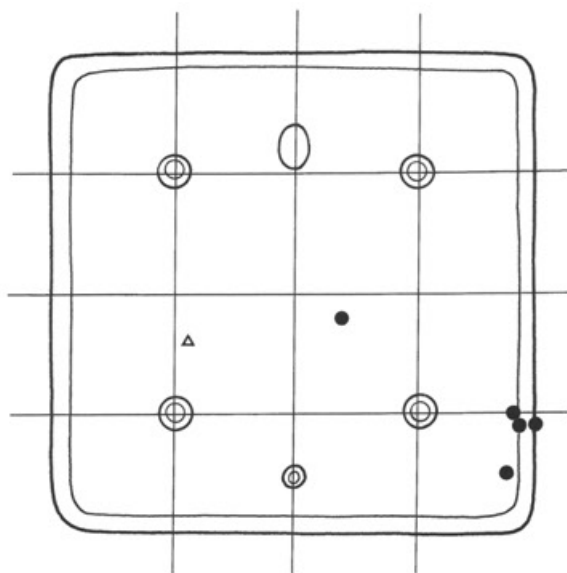
県内における最古の竪穴住居跡出土のモモは、古墳時代前期の木更津市山伏作遺跡S I 045であった。古墳時代前期以降、時代を追うに従って検出事例は多くなり、前期では1遺構3点、中期5遺構12点、後期11遺構71点、古代19遺構42点となる。このうち出土位置が明確な、前期1遺構、中期4遺構、後期6遺構、古代15遺構について出土地点・層位について検討を行った。検討方法は報告書の記載事項やドット図



古墳前期 1遺構

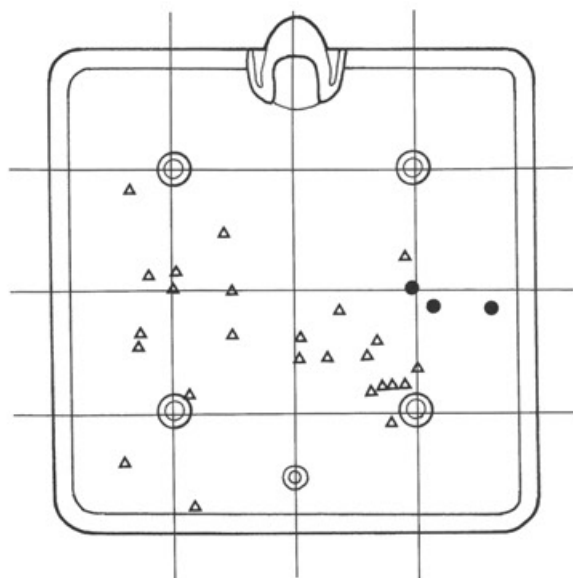
山伏作 (045) 3点

● 床直  
▲ 覆土中



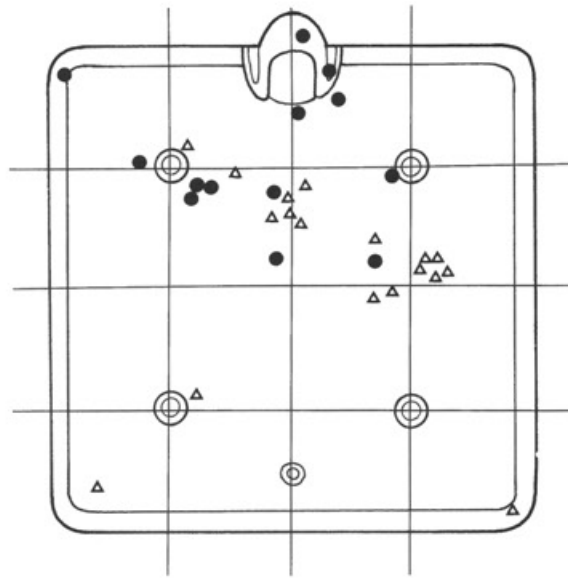
古墳中期 4遺構

大畑台 (174) 1点 (穴上)  
鹿島台A (83) 3点 (床)  
大畑台 (429) 1点 (床)  
野焼A (170) 1点



古墳後期 6遺構

有吉北貝塚 (SB163) 8点  
高沢 (190-A) 1点 (床)  
高沢 (165) 1点 (床)  
大井東山 (031) 5点  
高沢 (127) 1点 (床)  
印内台 (006) 13点



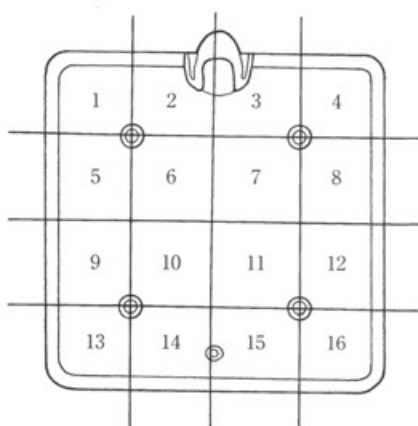
古代 15遺構

高沢 (046) 2点 (床)      飯仲金堀 (3) 1点  
高沢 (022) 1点 (床)      小谷 (22) 7点  
高沢 (186-B) 2点      山田水呑 (121) 2点  
高沢 (081) 1点      山田水呑 (57) 1点 (カマド)  
高沢 (187-B) 1点 (床)      高沢 (292) 7点 (床3)  
高沢 (088) 3点 (床2)      高沢 (170) 1点 (床)  
高沢 (330) 1点 (カマド)      高沢 (162-B) 1点 (床)  
高沢 (212) 1点

第83図 時期別桃核出土状況図

第11表 住居出土桃核一覧

遺跡名	遺構番号	時期	出土層位	モモ出土位置	石製品	金属製品	土製品	手捏	その他	焼土	炭化物	備考
山伏作	S I 045	古墳前期2	床面直上	13	—	—	—	—		○	○	
大畑台	S I 174	古墳中期1	床面直上	16	白玉50, 砥石1 紡錘車1	—	—	手捏3	土器多	○	○	白玉と混在
大畑台	S I 429	古墳中期1	覆土中	13	白玉28	—	—	—		○	○	白玉と混在
大畑台	S I 429	古墳中期1	床面直上	11	白玉1	—	—	—		○		
鹿島塚A	83号址	古墳中期1	床面直上	16	—	—	—	—	土器少	○		
野焼A	S I 170	古墳中期2	床面直上	—	砥石1	—	土錘1	—	土器多			
			覆土中	10	—	—	—	手捏2				
有吉北	S B 163	古墳後期3	床面直上	—	—	鉄鏃2	勾玉1	—	土器多	○		
			覆土中	5, 7, 9, 10, 12, 13, 14	—	刀子1, 鉄鏃1	土玉36, 玉1, 勾玉1					
高沢	190-A	古墳後期3	床面直上	12	—	—	土玉1?	—				
高沢	165	古墳後期3	床面直上	12	—	—	—	—		○		
			覆土中	—	—	—	—	手捏1				
大井東山	031	古墳後期4	覆土中	5, 6, 9, 10	—	鉄鏃1	土玉1, 土錘3 土製勾玉1	手捏4 ミナヅチ1	土器中覆土中			
高沢	127	古墳後期5	床面直上	7	—	—	—	—		○		
			覆土中	—	—	鏃子1	土玉1?					
印内台19	006	古墳後期5	覆土中	10, 11, 15	白玉1	刀子3, 鉄鏃3, 釘2 穂摘具1, 耳環2	—	—	スラグ 土器少	○	○	
高沢	292	古代1	床面直上	1, 6, 7	—	刀子1	—	—				
			覆土中	2, 7	—	—	—					
高沢	170	古代1	床面直上	3	—	刀子1, 鉄鏃1, 環状1	—	—				
			覆土中	—	—	鏃1	—					
高沢	162-B	古代1	床面直上	1	—	刀子1, 鉄鏃1?	—	—		○		
高沢	046	古代1	床面直上	6, 7	—	—	—	—				
			覆土中	—	—	鉄鏃3	—					
山田水香	57	古代1	床面直上	3	—	—	—	—	土器少			
山田水香	016	古代1	床面直上	13	砥石1, 軽石2	刀子1	—	—	スラグ、土器少	○		長方形住居
山田水香	121	古代1	覆土中	6, 7	—	刀子2, 釘2, 鉄鏃1	—	手捏1	スラグ、土器多	○		手捏と混在
小谷	S I 22	古代2	覆土中	8, 11	—	刀子2, 釘2	—	—	土器多	○		刀子は近接
飯仲金堀	3号住居	古代2	覆土中	16	—	刀子2, 鉄鏃2, 包丁1	—	—				
高沢	022	古代2	床面直上	3	砥石1	刀子1	—	—	土器少	○		
高沢	081	古代2	覆土中	2	—	刀子1, 鏃状1	—	—				
高沢	186-B	古代3	覆土中	10, 13	—	鉄鏃1	—	—				
高沢	187-B	古代3	床面直上	6	—	—	—	—				刀子は床に近い
			覆土中	—	—	刀子2, 鉄鏃5, 手錘2, 鏃2, 鏝1, 紡錘車2	—					
高沢	088	古代3	床面直上	6	—	刀子1	—	—				
			覆土中	6	—	鉄鏃1	—					
高沢	212	古代3~4	覆土中	16	—	—	—	—				
高沢	330	古代	床面直上	3	—	—	—	—				
			覆土中	—	—	—	—	切子玉1				



16分割番号表



を参考にして床直出土のものと同層位のものと同層位を大別するとともに、住居跡を柱穴・カマド・炉・はしご穴などを結んだ線により16分割して模式図を作成した。こうして作られたのが第83図である。また、共伴遺物を示したのが第11表である。その結果、資料点数が少ないものの古墳時代前中期においては、炉の反対側すなわち入り口部が想定されるコーナー周辺の床面に分布の偏りが認められ、後期になると圧倒的に覆土中からの出土が多くなり、住居の中心部に広く分布する傾向を示している。これに対して古代になるとカマドを中心とした住居の奥部に集中し、しかも床面直上からの出土が多くなることがわかる。また共伴する遺物では、古墳時代中後期では玉類や手捏土器が、古代では鉄製品（特に刀子）が同一層位から多く出土している。このような結果から見ると、古墳時代では竪穴住居跡の埋没過程において周辺で行われた祭祀行為の後に祭祀に使用した品物と共にモモが投棄された可能性が指摘できる。これに対して奈良時代以降にはカマドに対する意識が強くなり、カマド廃絶時に伴って行われる祭祀行為にモモが伴っていたものと考えられる<sup>12)</sup>。

掘立柱建物跡の柱穴からモモが出土した例は、君津市郡遺跡S B006（古墳時代後期）、市原市文作遺跡掘立柱05（奈良時代）、松戸市小野遺跡2号掘立柱建物（奈良平安時代）の3遺跡3遺構で確認されている。郡遺跡例は四面廂建物と考えられるが出土位置は不明である。文作遺跡例は2間1間の建物の南側中央の柱穴から2点のモモが出土している。柱の抜き取りは認められない。小野遺跡2号掘立柱建物は南北棟の3間3間の建物で、東側の南から2本目の柱穴から5点モモが出土している。類例が少ないものの出土した事実は注目に値する。また祭祀行為に使用されるモモは、必ずしも果肉を伴ったものであるとは断言できず、先の法隆寺の柱内や池島福万寺遺跡土器埋納遺構出土例が示すように内果皮（モモ核）が納められていた事例も存在する。

県内の少ない事例からモモの出土傾向について述べてきた。モモは祭祀に伴う遺物であるとして報告書などで簡単に扱われることが多い。しかし、実際の祭祀の内容について具体的に検証する必要が求められつつあると言えよう。

## 6 小結

これまで千葉県内で出土した炭化種子から、弥生時代から平安時代にいたる農耕生産物の内容について検討してきた。その結果多様性に満ちた食材利用の実体を垣間見ることが出来た。またその構成比率では、モモを除いて考えると各時期を通じてイネが卓越し雑穀や堅果類が少量認められる傾向が指摘できた。この傾向は弥生時代を対象とした神奈川県の結果とも合致する内容であった。これに対して長野県佐久市下聖端遺跡の分析では<sup>13)</sup>、弥生時代後期から平安時代中期にかけて共通してコムギや雑穀類の比率が高い結果となり、千葉県や神奈川県の結果と対照的である。この違いは気候風土による地域性の違いを反映している可能性も考えられる。

炭化種子から当時の食物依存率を推定しようとする試みは、弥生時代を中心に行われてきた。それは弥生時代が水稻耕作を受容し、以後続く日本農業の礎を築いた画期的時代であり、当時のイネ生産量の推定は稲作技術がどの程度の水準であったのかを決定する重要な要素の一つであったからに他ならない。弥生時代の出土炭化種子を全国的に集成し分析した寺沢薫氏は、ドングリの出土件数がイネを上回ることやイネ以外の穀物が多数認められることから、弥生時代のイネ生産量はかなり低いもので弥生人はコメを食べたいがめったに食べることが出来ない「米食悲願民」であるとの結論を提示した<sup>14)</sup>。また、当時の主食は

コメの生産量の低さを補うために雑穀を混ぜた粥であったろうとしている。先述のように今回の集成結果では、古代を含めた各時代でイネの優位性が認められたほか、構成比率においても各時代似たような傾向が見られた。また、弥生時代の「おにぎり状炭化物」が調理されたものであるならば、多くがイネのみで構成されており雑穀との混炊状態を示していないし、粒子の形状から見ても粥の炭化したものである可能性は低いと言えよう。このように今回のデータの範囲内からは、「米食悲願民」と言われるような弥生人像是導き出せなかった。

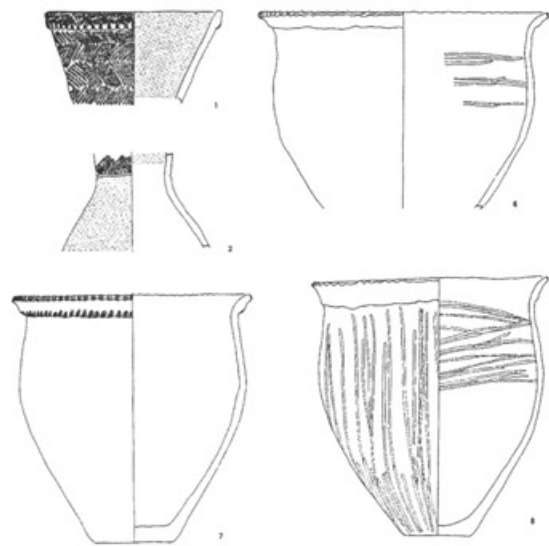
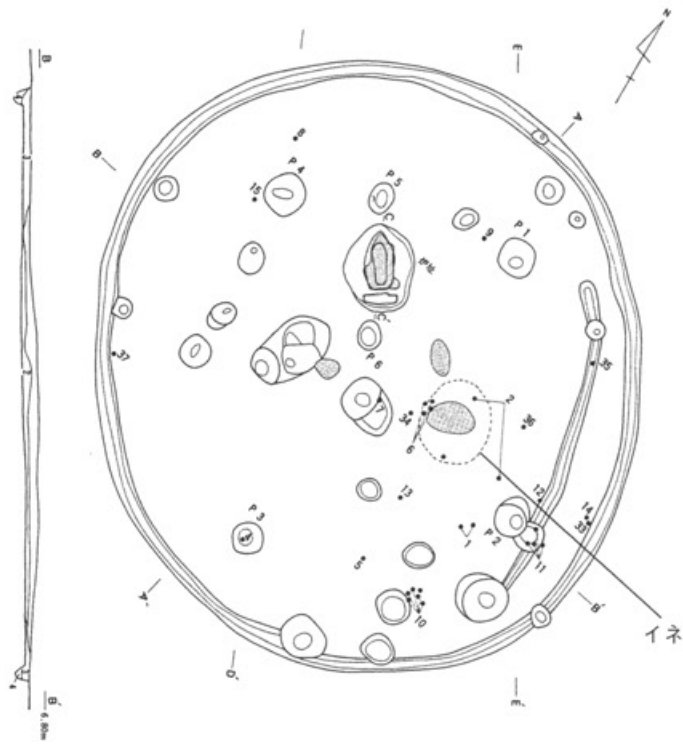
このほか堅穴住居跡における炭化種子の出土状況を分類し資料批判する過程で、モモの出土状況についても若干触れた。モモは霊力のある植物として珍重されていることはよく知られていることである。高沢遺跡の事例を中心に、時期ごとの平面分布、垂直分布、共伴遺物について調べた結果、奈良時代を境にして出土状況が大きく変化し、カマドの周辺に集中化する傾向が認められた。このことから奈良時代以降集落内において、カマド廃棄に伴うモモを使った祭祀が一般化した可能性を推定した。

いずれにしても、現段階では資料数の制約から大づかみ且つ不安定要素を多く含んだ内容となってしまった。県内では毎年何百軒という堅穴住居跡が調査されており、何の躊躇もなく住居覆土を廃棄している。近年のウォーターセパレーション実施事例からも分かるように、この覆土の中には原始・古代の農耕の実像や食生活の実体を明らかにする貴重なデータが含まれていることは言うまでもない。この小論が炭化種子に関する関心を喚起し、今後の研究の一助となれば幸いである。

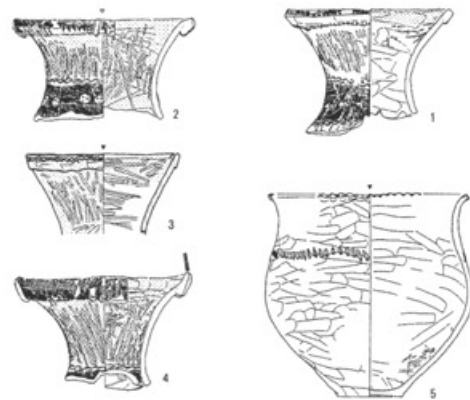
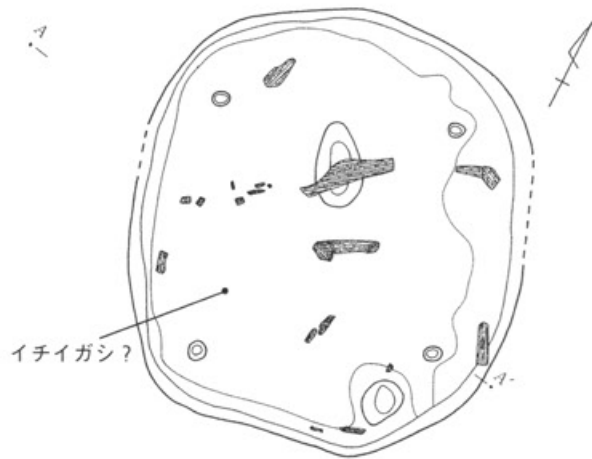
#### 注

- 1) 小澤清男 1983「房総半島における縄文時代遺跡出土の植物種子をめぐって－特に堅果類の採集から廃棄までのプロセスを中心に－」『貝塚博物館紀要』第9号 千葉市加曾利貝塚博物館
- 2) 吉崎昌一 1992「古代雑穀の検出－考古植物学調査の展開－」『考古学ジャーナル』No.351
- 3) 佐藤洋一郎 2000『縄文農耕の世界』PHP新書 PHP研究所
- 4) 可食植物については、寺沢薫・寺沢知子 1981「弥生時代植物質食料の基礎的研究」『考古学論攷』第5冊 榎原考古学研究所による。
- 5) 縄文時代中後期のグラフについては、小澤清男氏のデータに市原市武士遺跡での8住居のデータをプラスして作成した。
- 6) 弥生時代研究プロジェクトチーム 2001「弥生時代の食用植物－炭化種子及び種子圧痕について－」『研究紀要 6 かながわの考古学』 かながわ考古学財団
- 7) 群馬県有馬条里遺跡や町田小沢Ⅱ遺跡では、甕内から炭化米が出土している。相京建史 1997「食べられる植物の資料集成（その1）」『生産の考古学』同成社
- 8) 櫛原功一 1998「炭化種実から探る食生活－古代～中世を中心に－」『遺跡・遺物から何を読みとるか（Ⅱ）－食の復元－』
- 9) 小林正史・柳瀬昭彦 2002「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」『日本考古学』第13号 日本考古学協会
- 10) 直良信夫 1956『日本古代農業発達史』さ・え・ら書房  
上原正人・川端清倫 2000「平塚市真田・北金目遺跡群」『第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会ほか

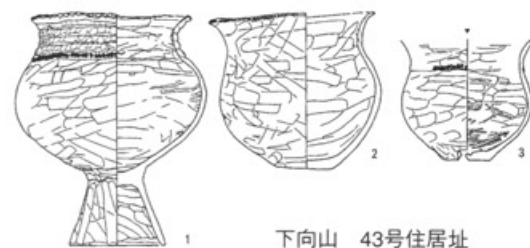
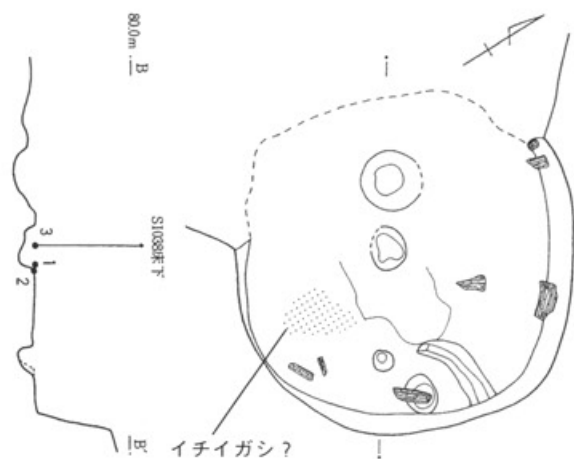
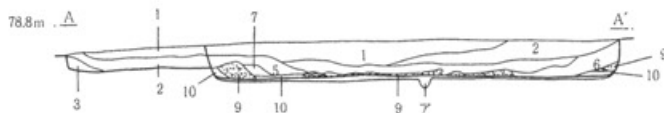
- 11) 小清水卓二 1963「古代日本の住居跡から出土する桃核について」『近畿古文化論攷』 榎原考古学研究所  
大山真充 1994「桃」『同志社大学考古学シリーズVI考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズ刊行会  
江浦洋 1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第7集』 帝京大学山梨文化財研究所
- 12) 芝山町小原子遺跡における8世紀前半の「竈神」墨書の出土などから、当時一般の集落においても竈神に対する信仰が広まっていたことが窺われる。また、カマドに対する祭祀行為についてはカマド内から出土する土器類や祭祀遺物と考えられる遺物のあり方などから総合的に理解する必要があるが、今回は特に触れることはしなかった。
- 13) 長野県立歴史館 2001『信濃の風土と歴史⑦食-とる・つくる・たべる』
- 14) 渡部忠世氏も弥生時代のコメ消費量は高くは見積れないとしている。  
渡部忠世 1987「アジアの視野からみた日本稲作」『稲のアジア史』3小学館  
寺沢薫 1986「稲作技術と弥生の農業」『日本の古代4 縄文・弥生の生活』中央公論社  
寺沢薫 1991「弥生時代の植物質食料」『各地域における米づくりの開始』 埋蔵文化財研究会



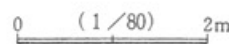
本名輪 7号住居址



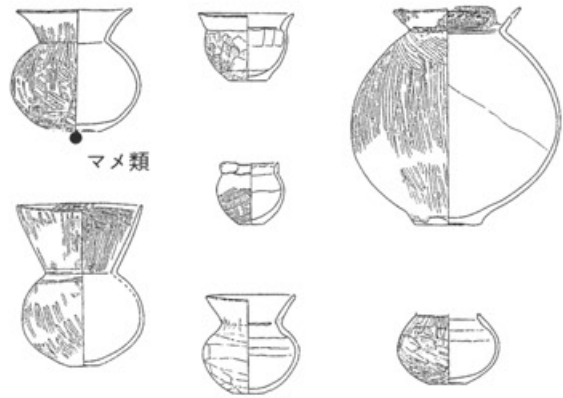
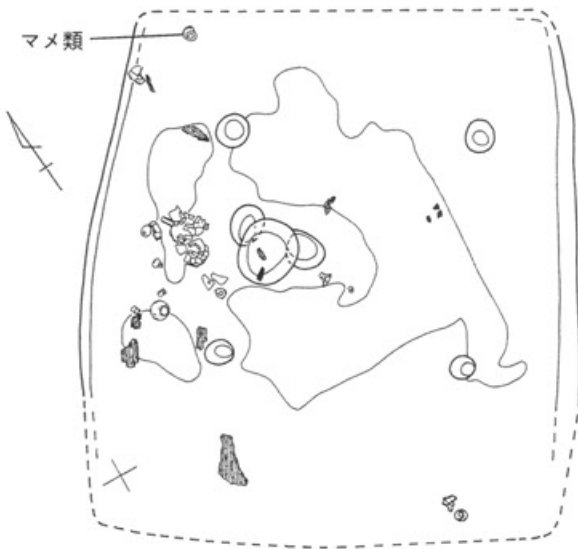
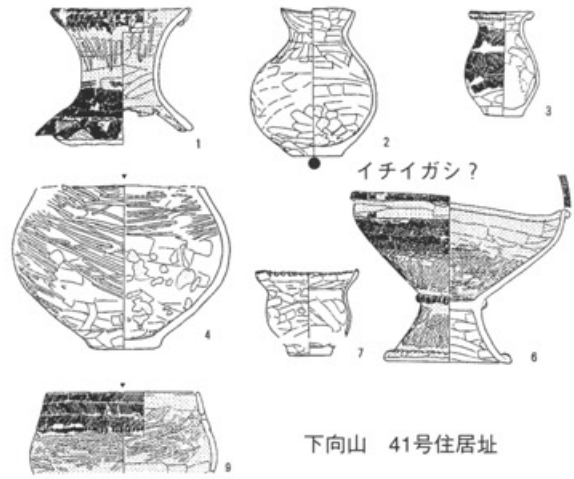
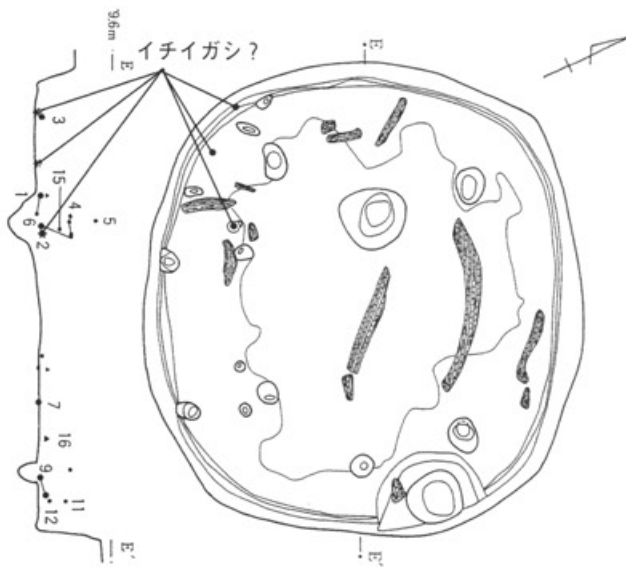
下向山 33号住居址



下向山 43号住居址

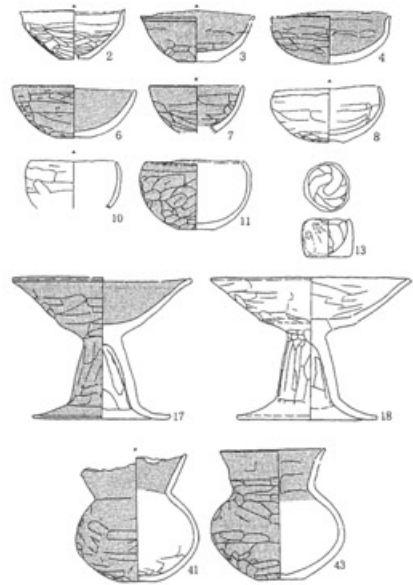
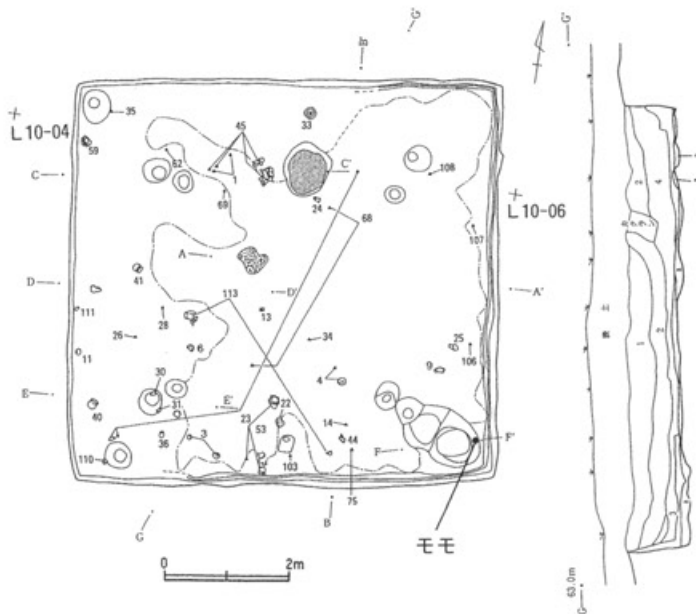


第84図 炭化種子出土遺構 (1)



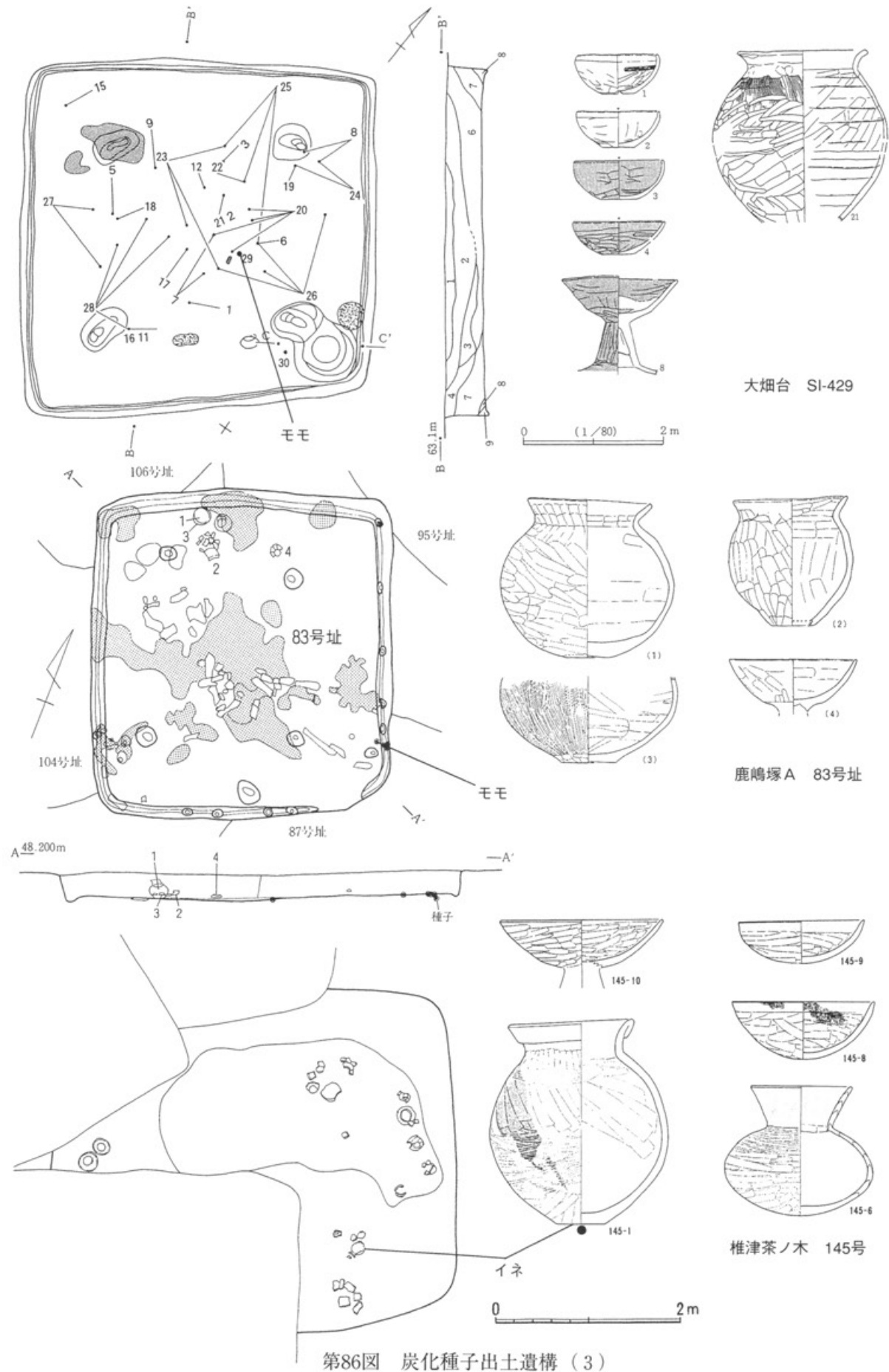
草刈K区 151号址

0 (1/80) 2m

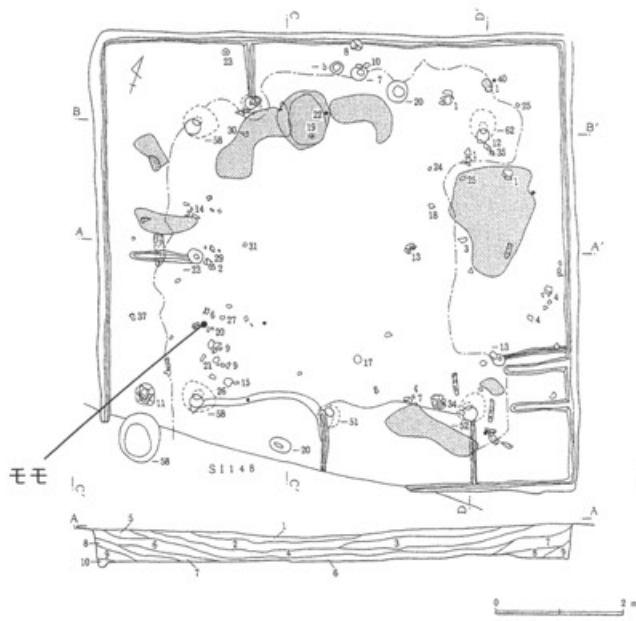


大畑台 SI-174

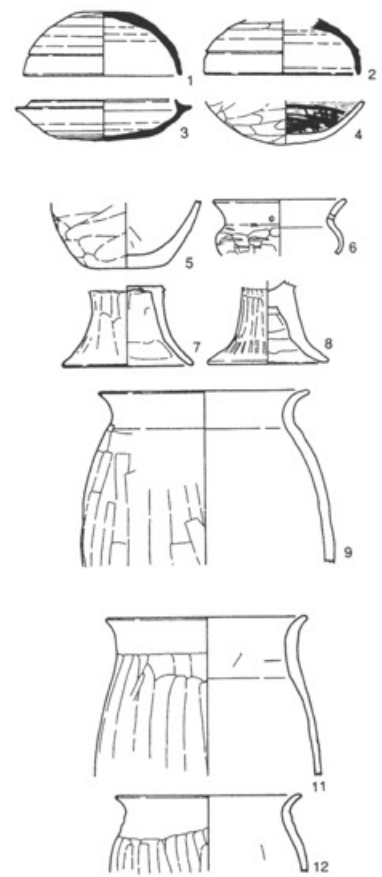
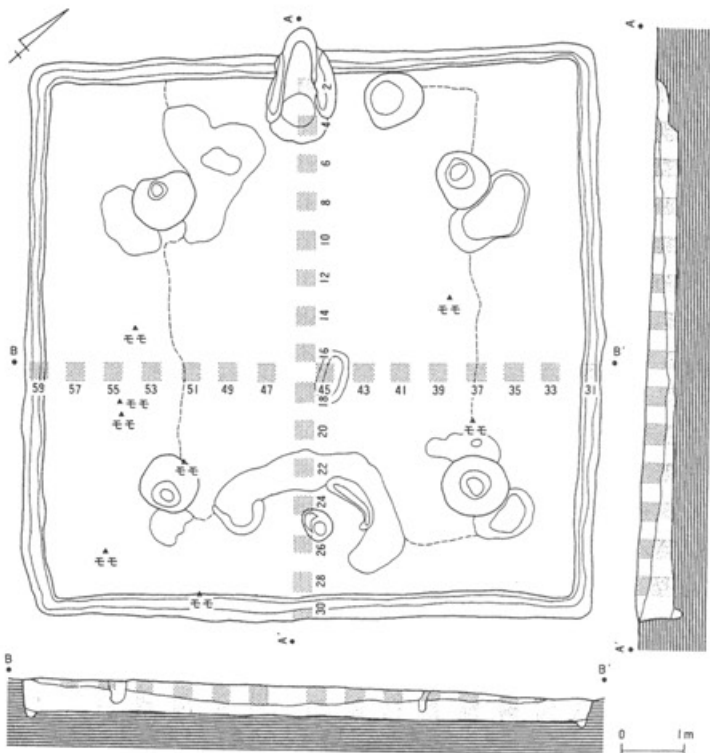
第85図 炭化種子出土遺構 (2)



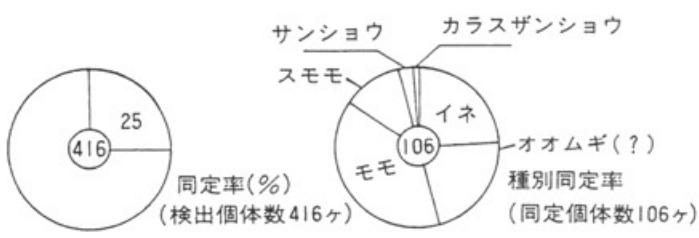
第86図 炭化種子出土遺構 (3)



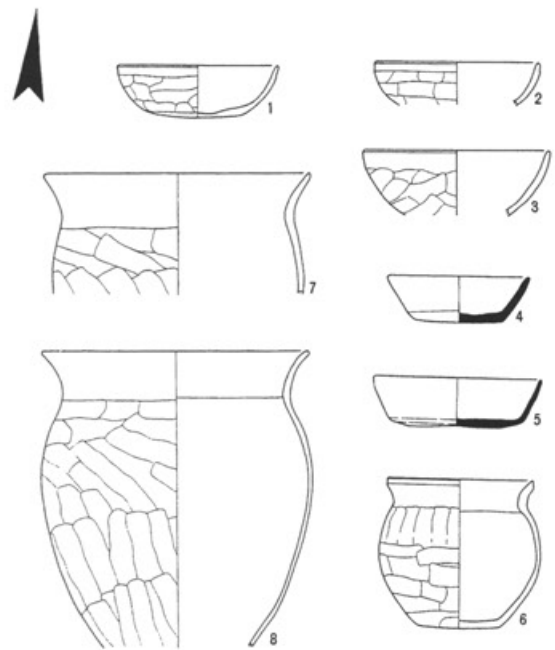
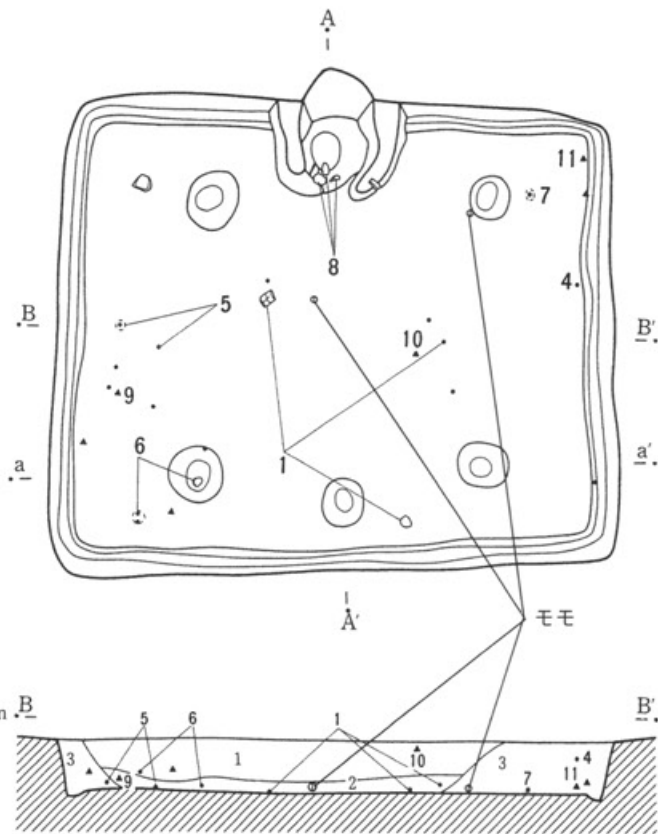
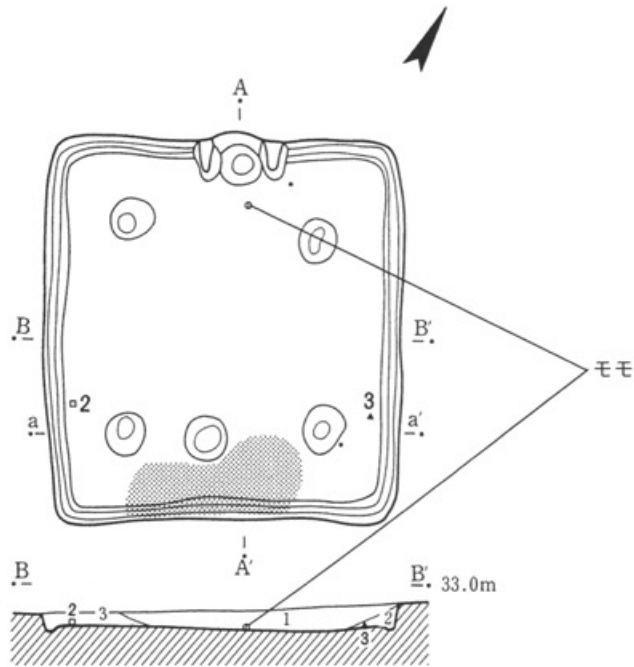
野焼A SI170



有吉北貝塚 SB-163

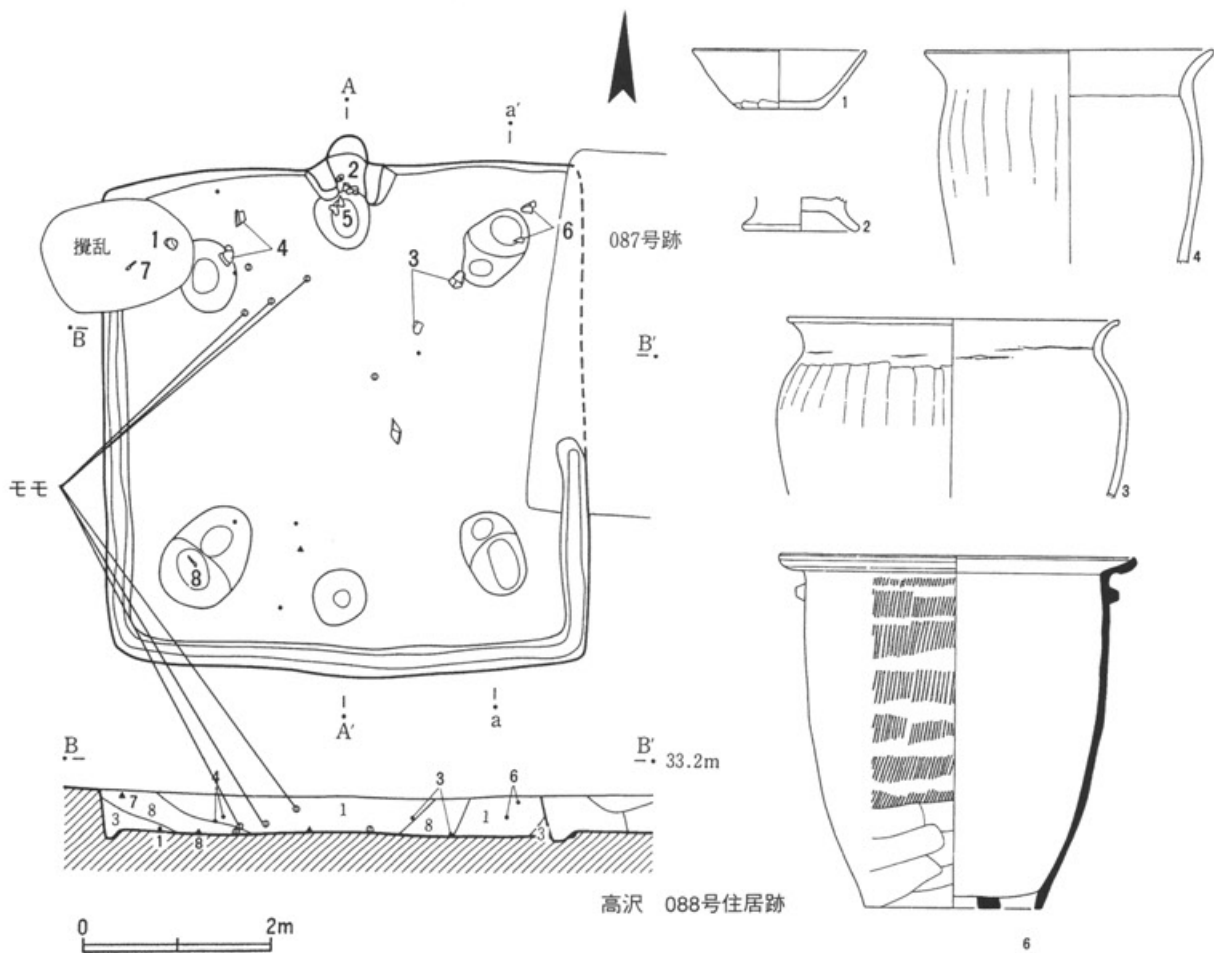
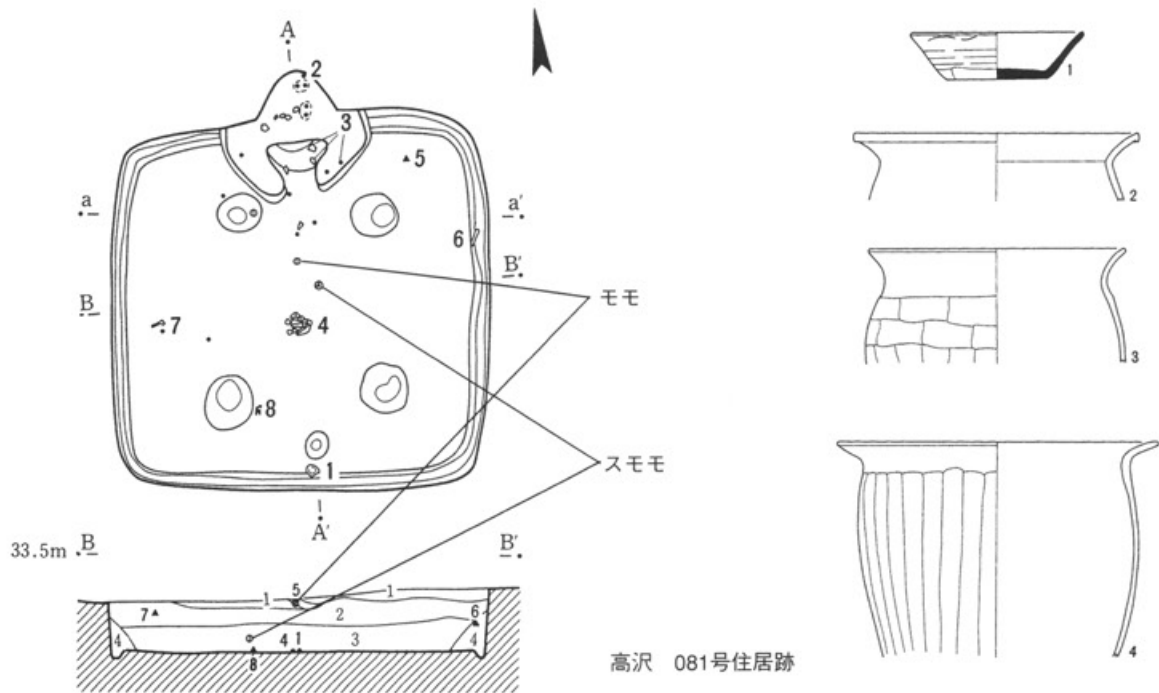


第87図 炭化種子出土遺構 (4)

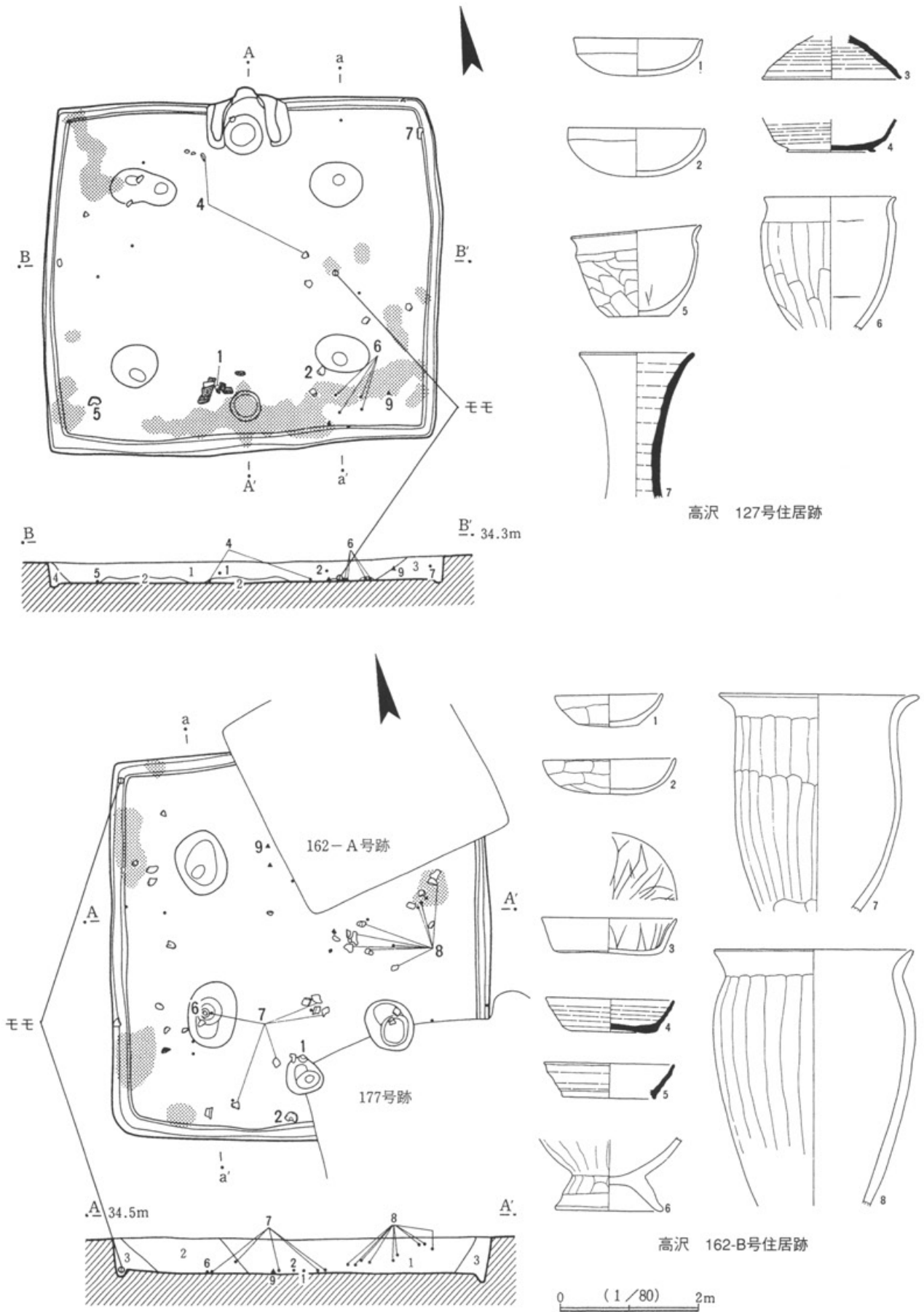


第88図 炭化種子出土遺構（5）

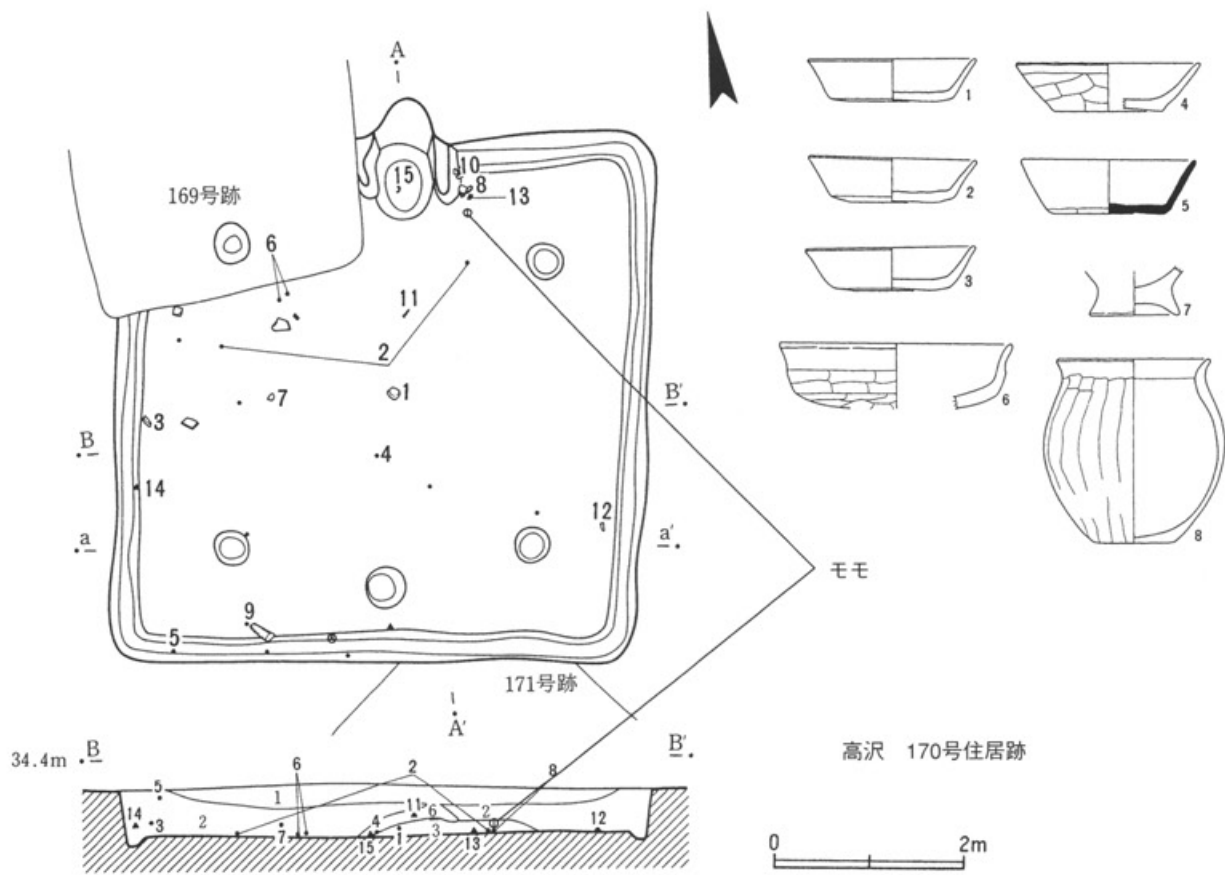
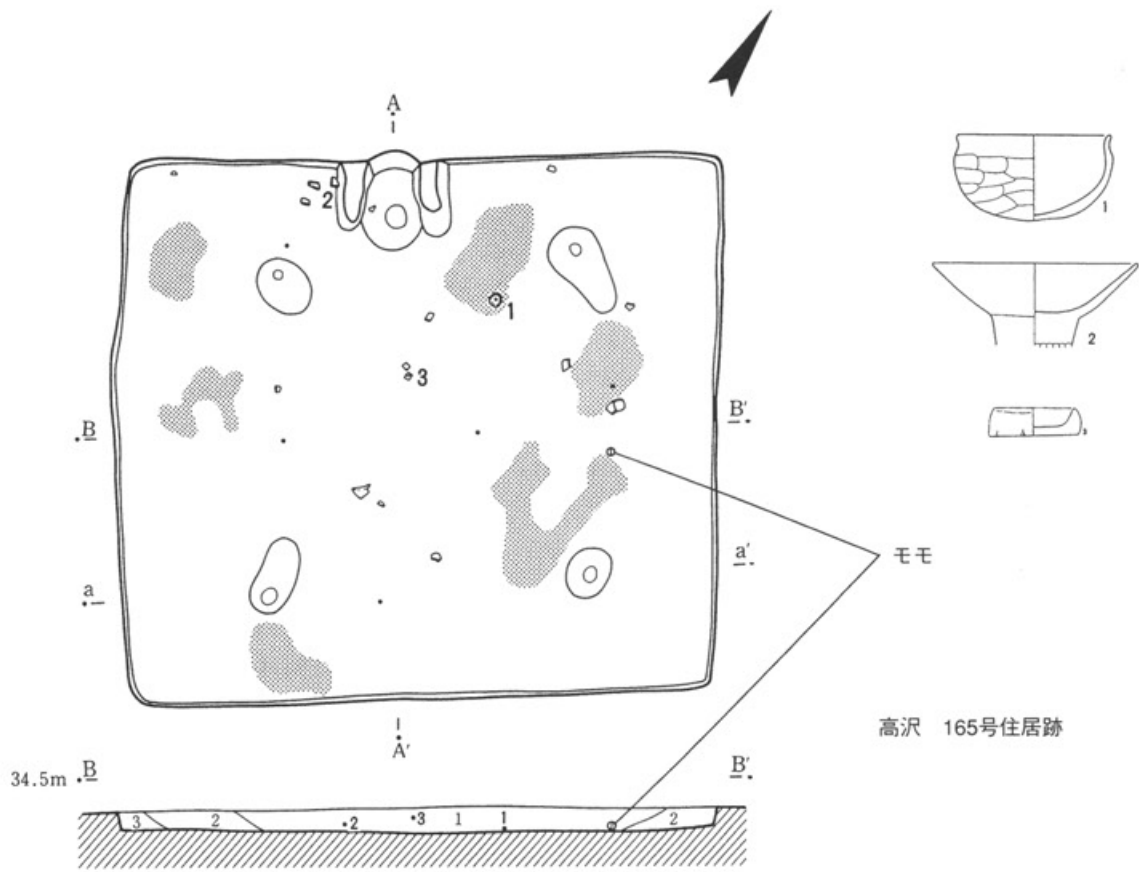




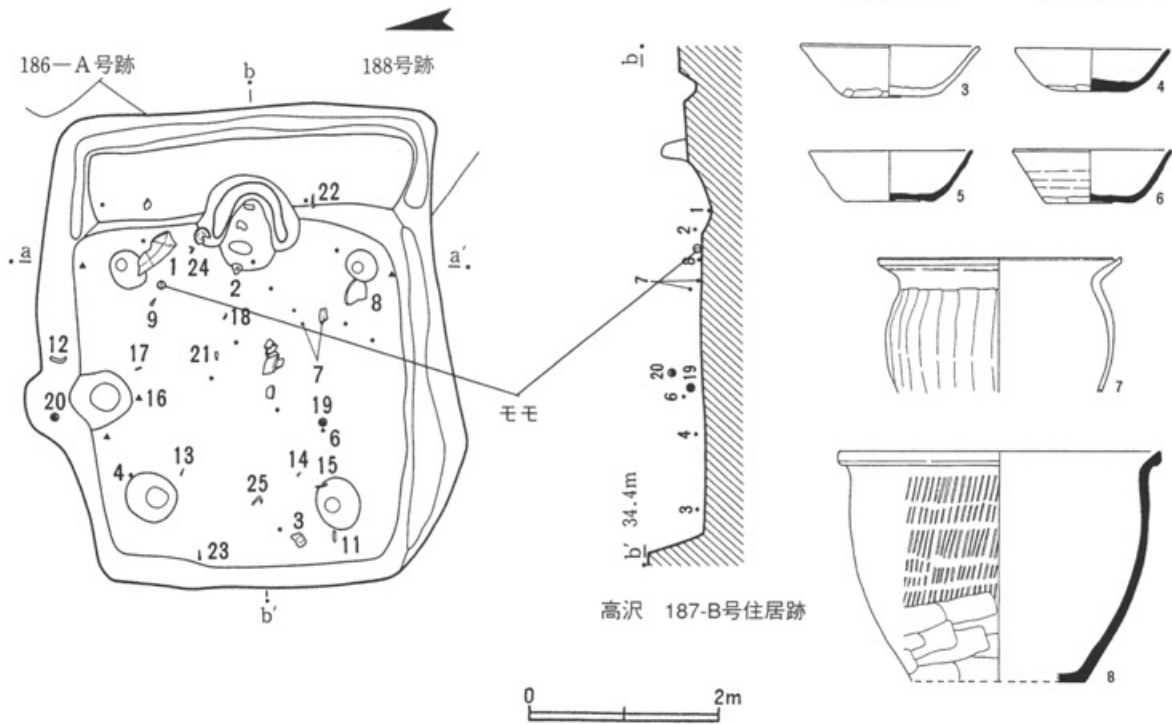
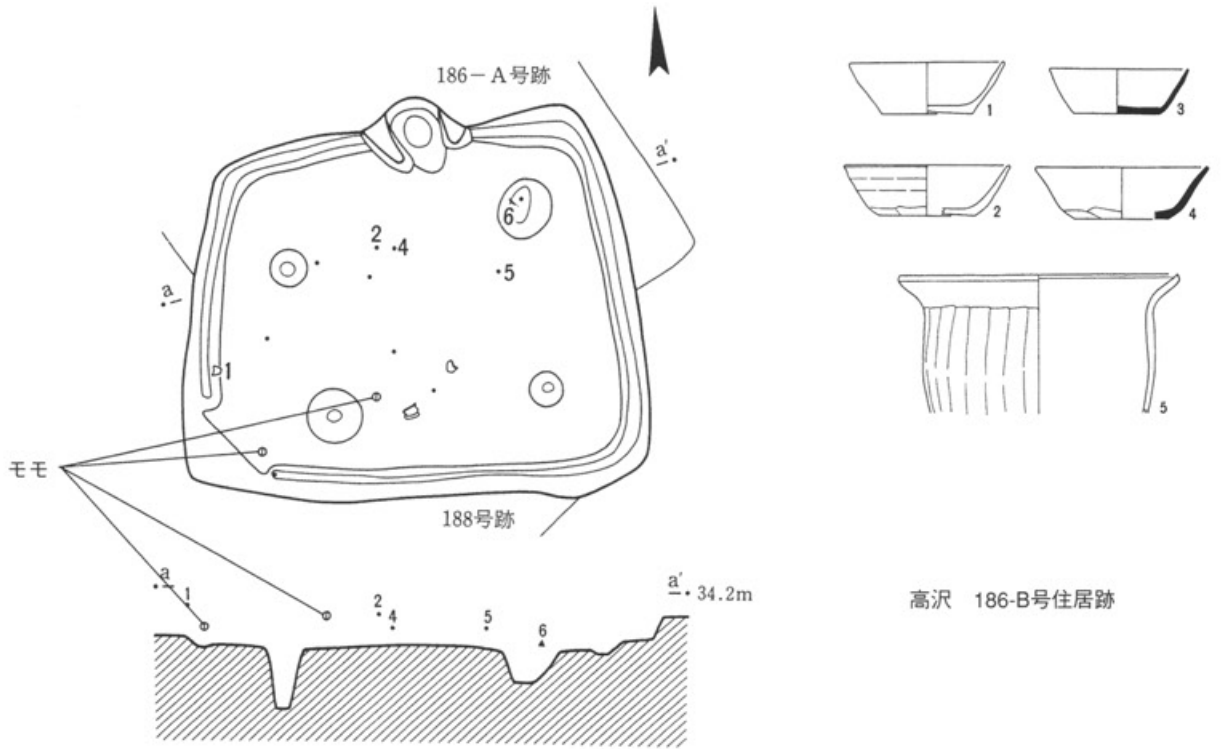
第89図 炭化種子出土遺構(6)



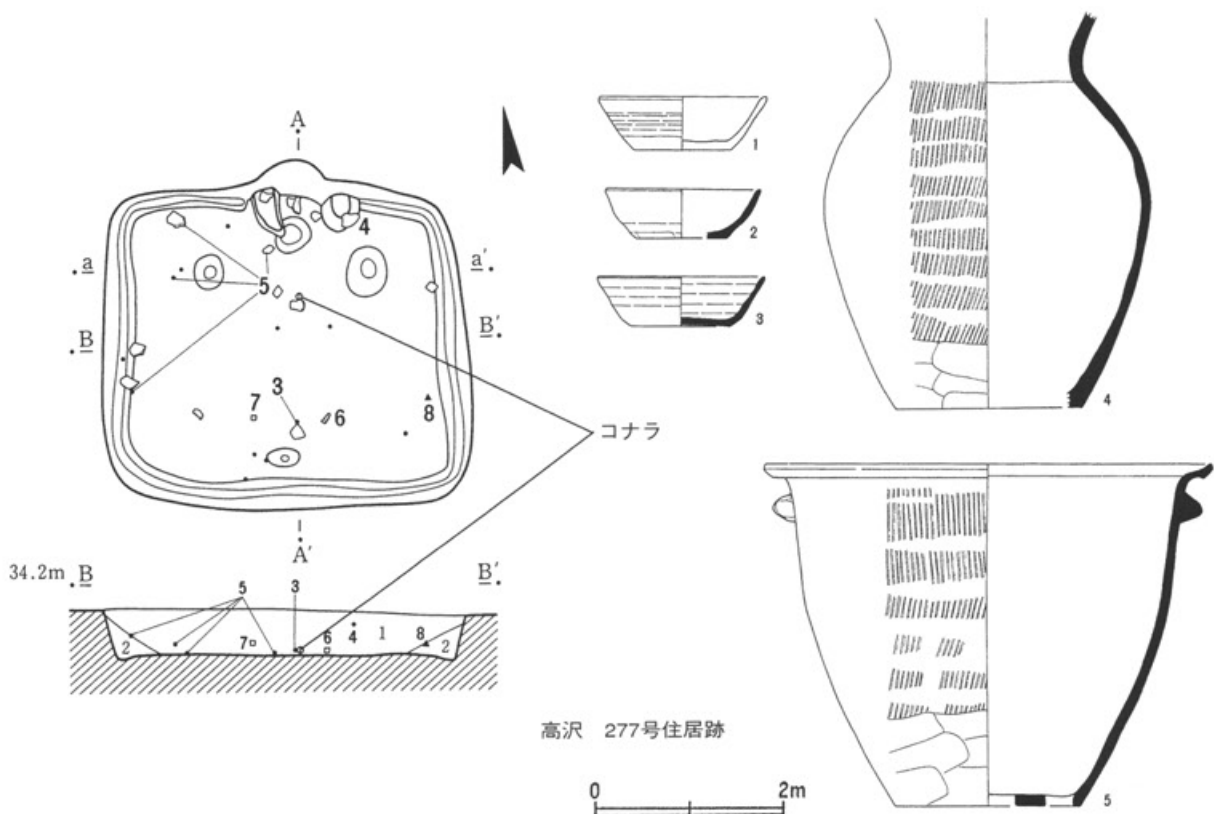
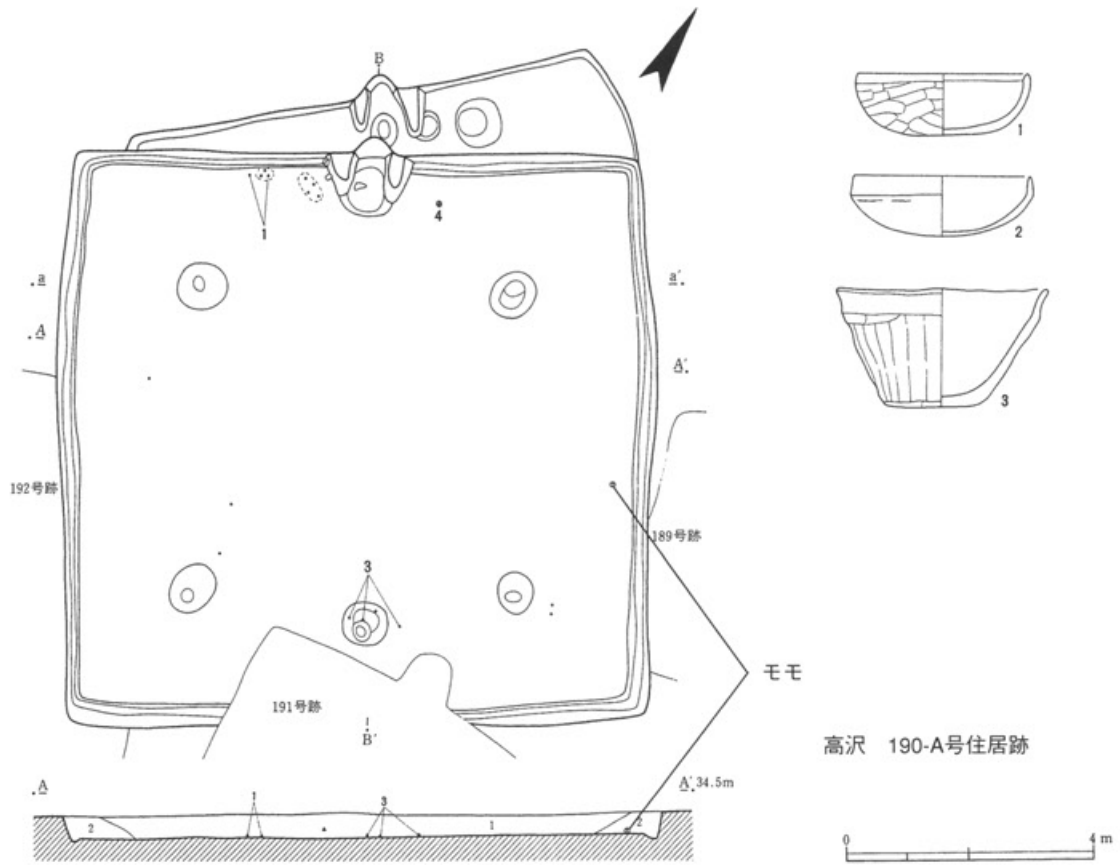
第90図 炭化種子出土遺構 (7)



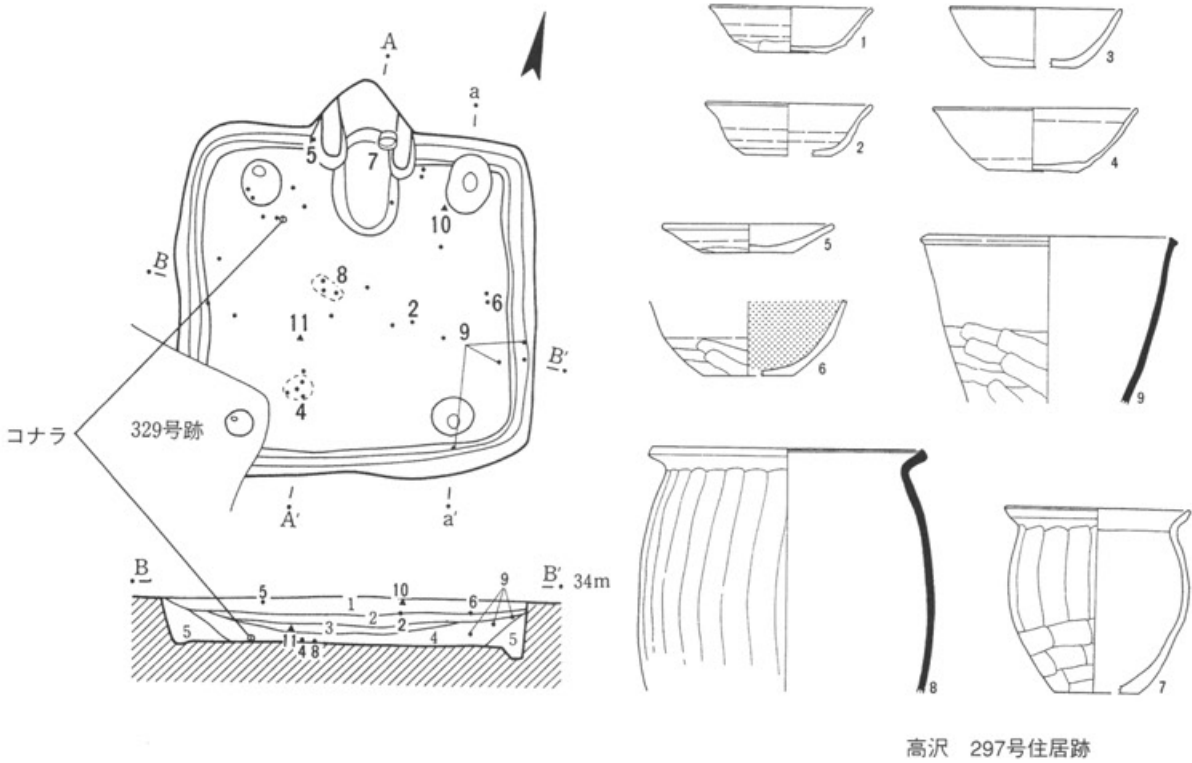
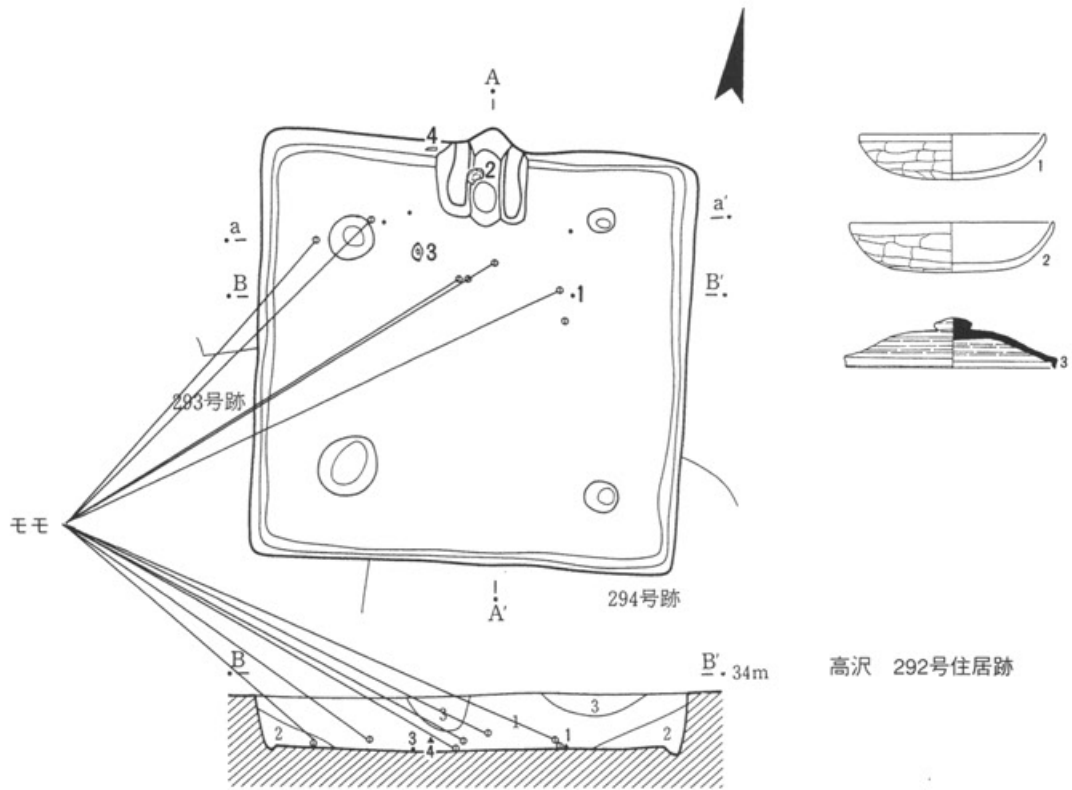
第91図 炭化種子出土遺構 (8)



第92図 炭化種子出土遺構 (9)

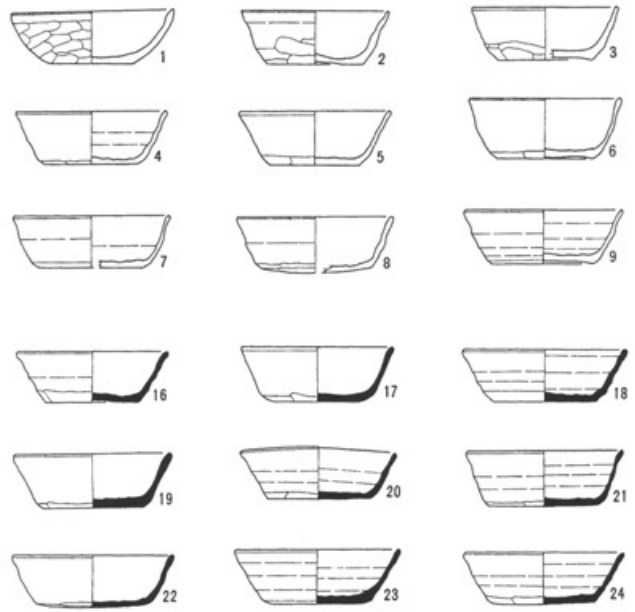
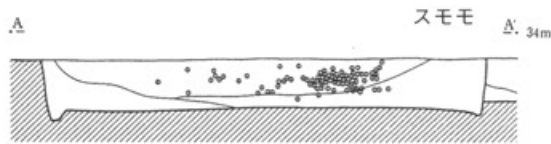
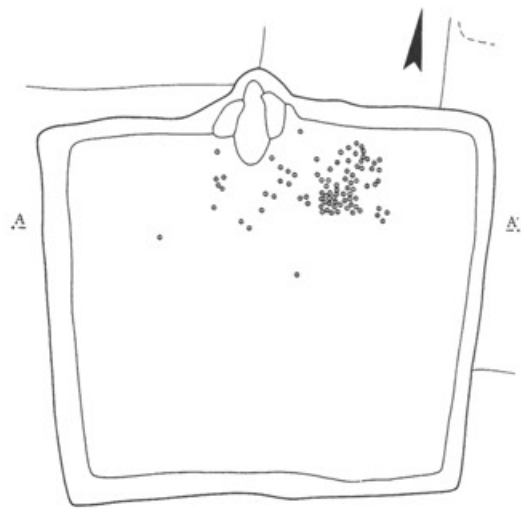


第93図 炭化種子出土遺構 (10)

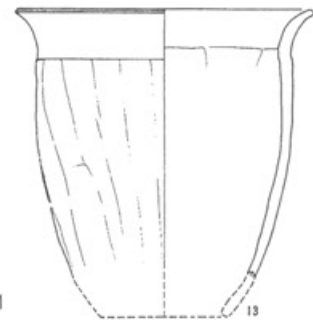
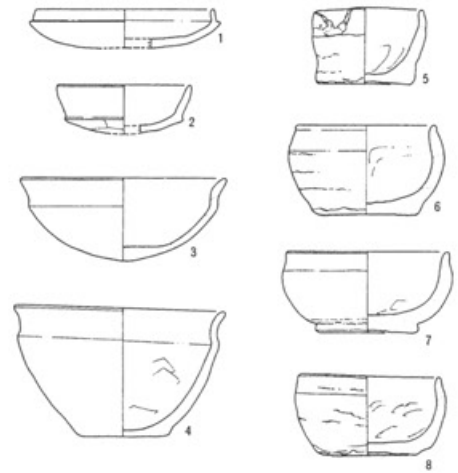
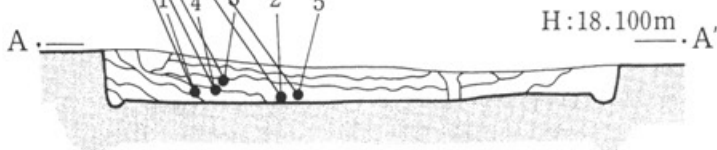
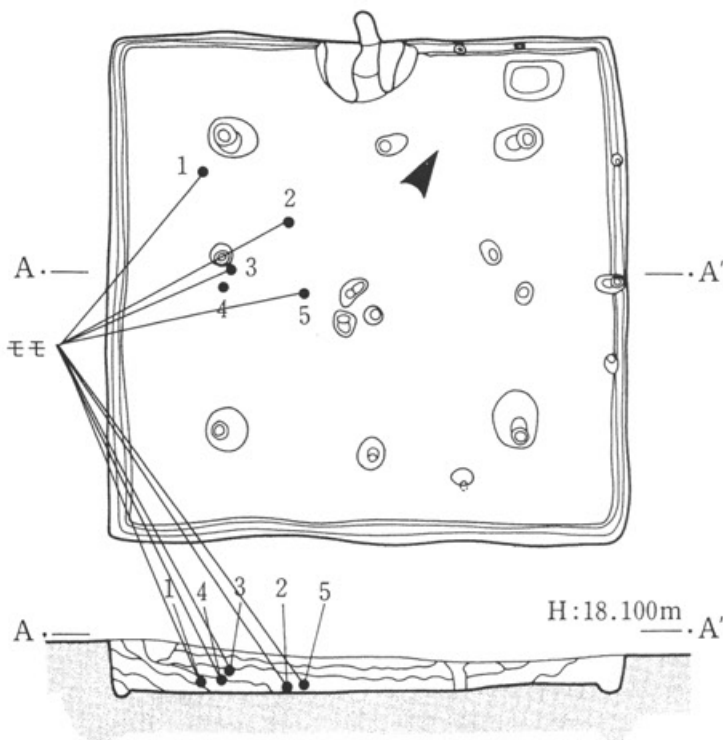


0 2m

第94図 炭化種子出土遺構 (11)

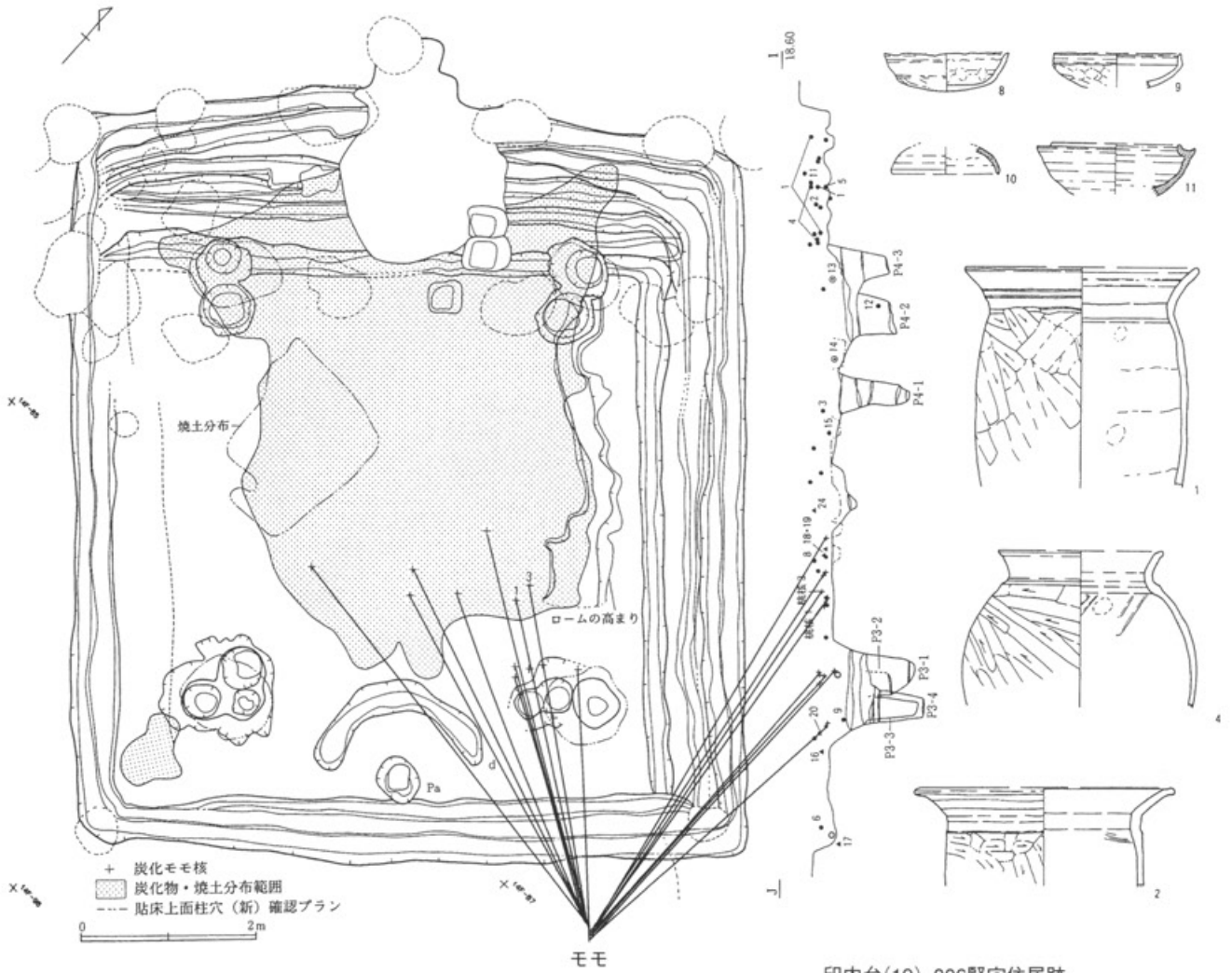


高沢 324号住居跡

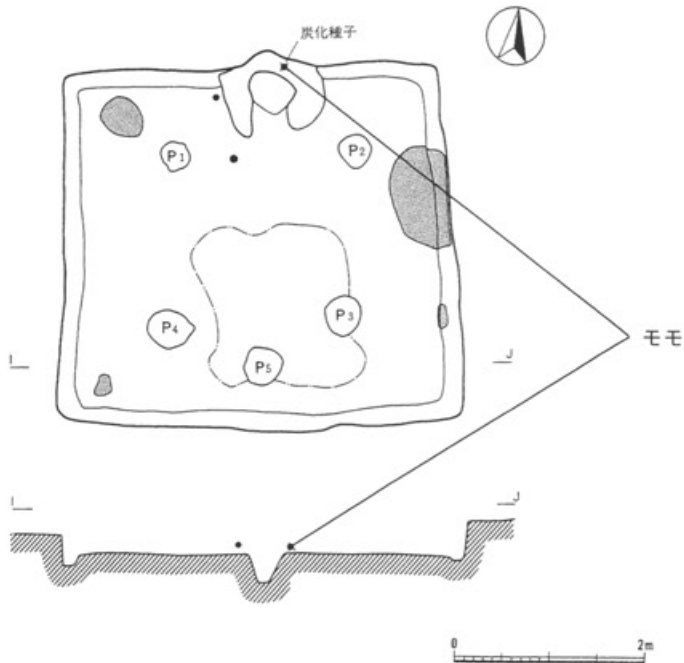


大井東山 竪穴住居 031

第95図 炭化種子出土遺構 (12)



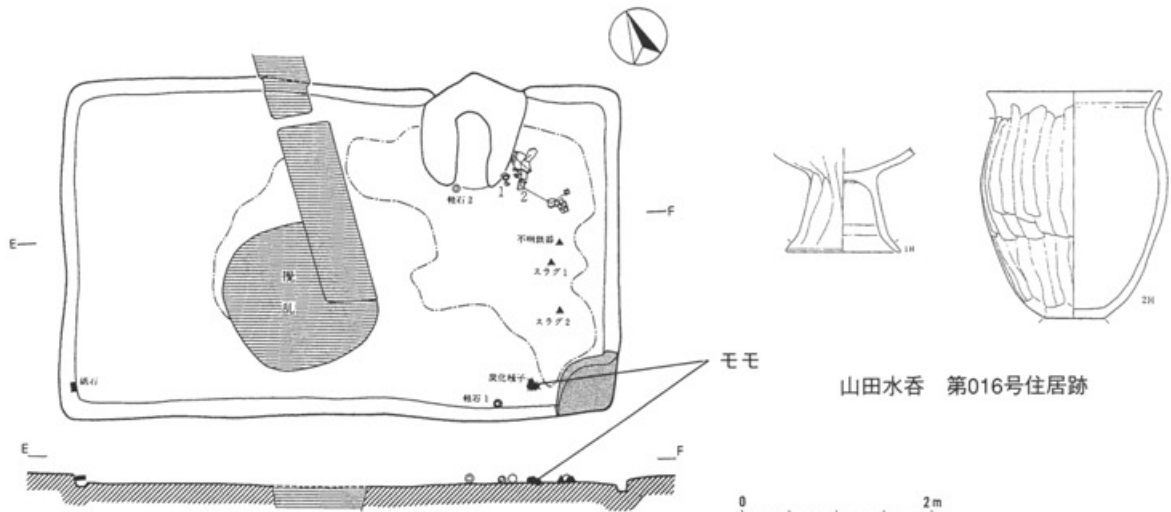
印内台(19) 006竪穴住居跡



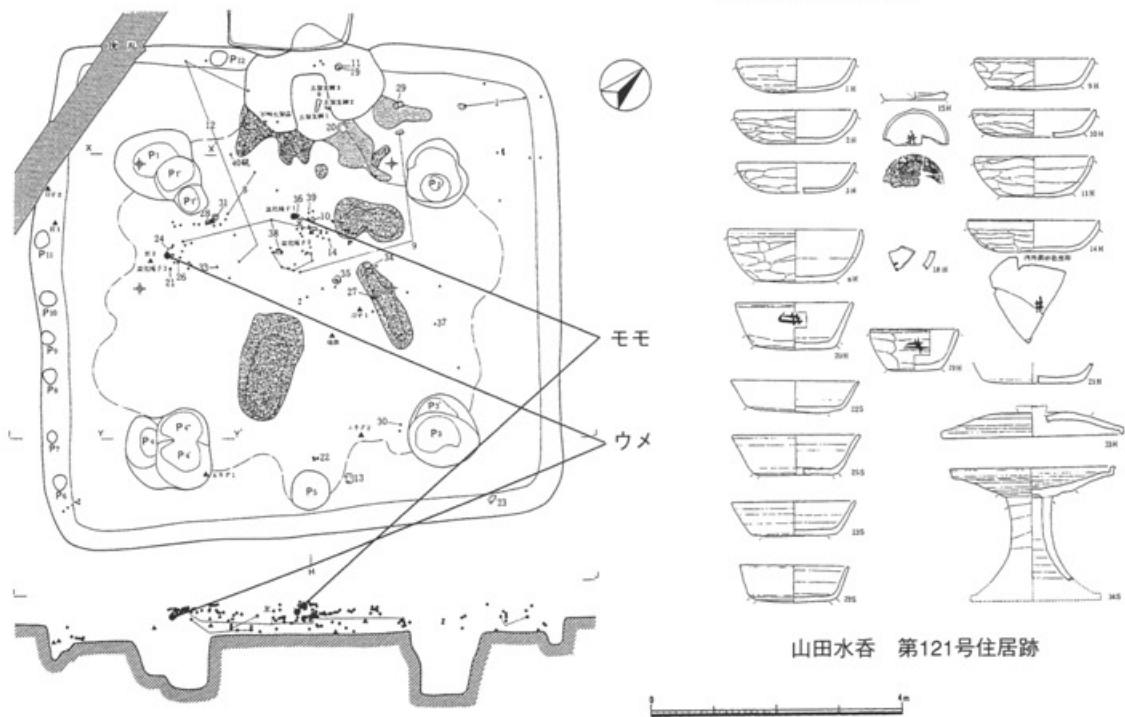
山田水香 第57号住居跡

第96図 炭化種子出土遺構 (13)

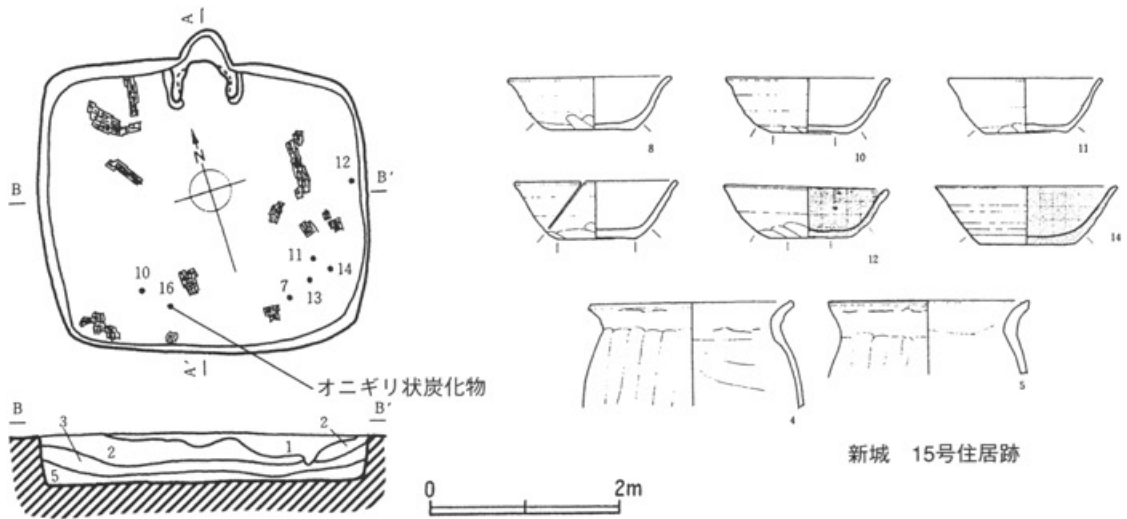




山田水呑 第016号住居跡

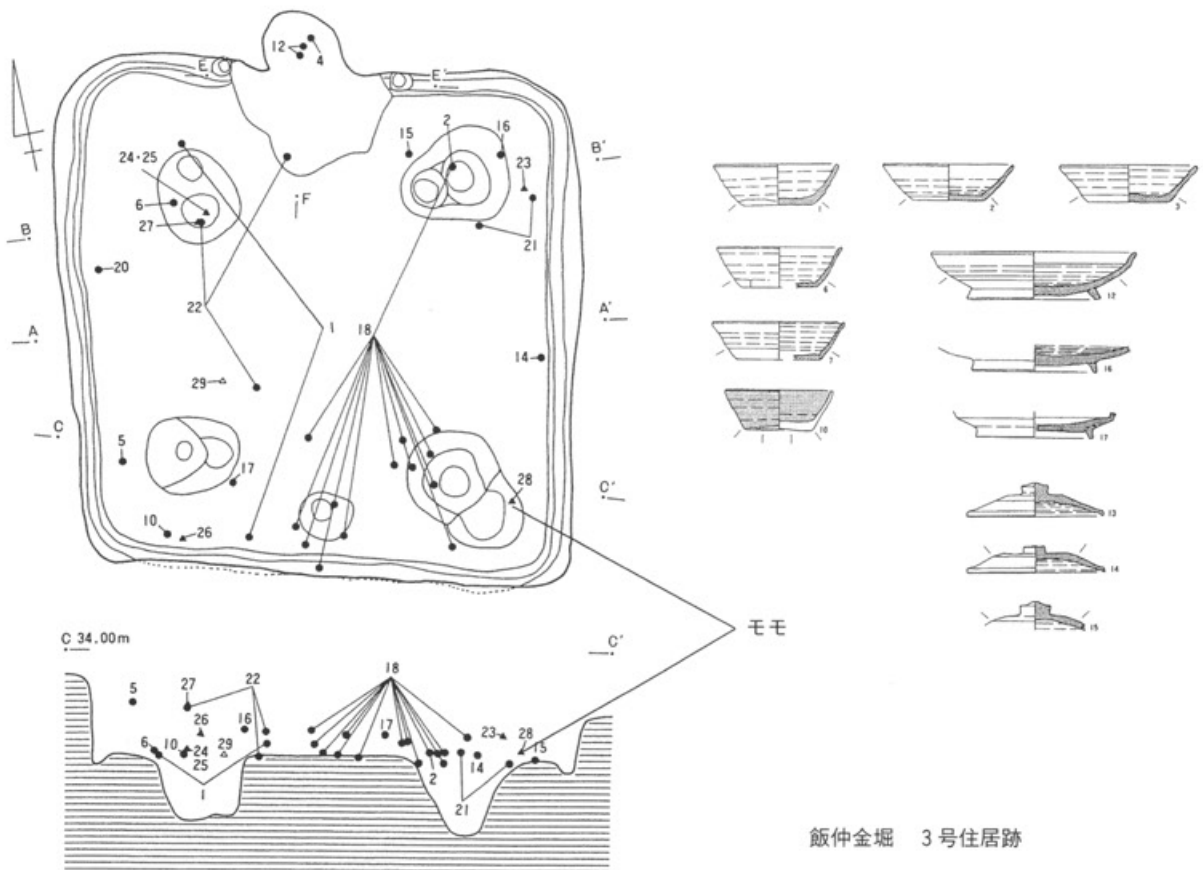
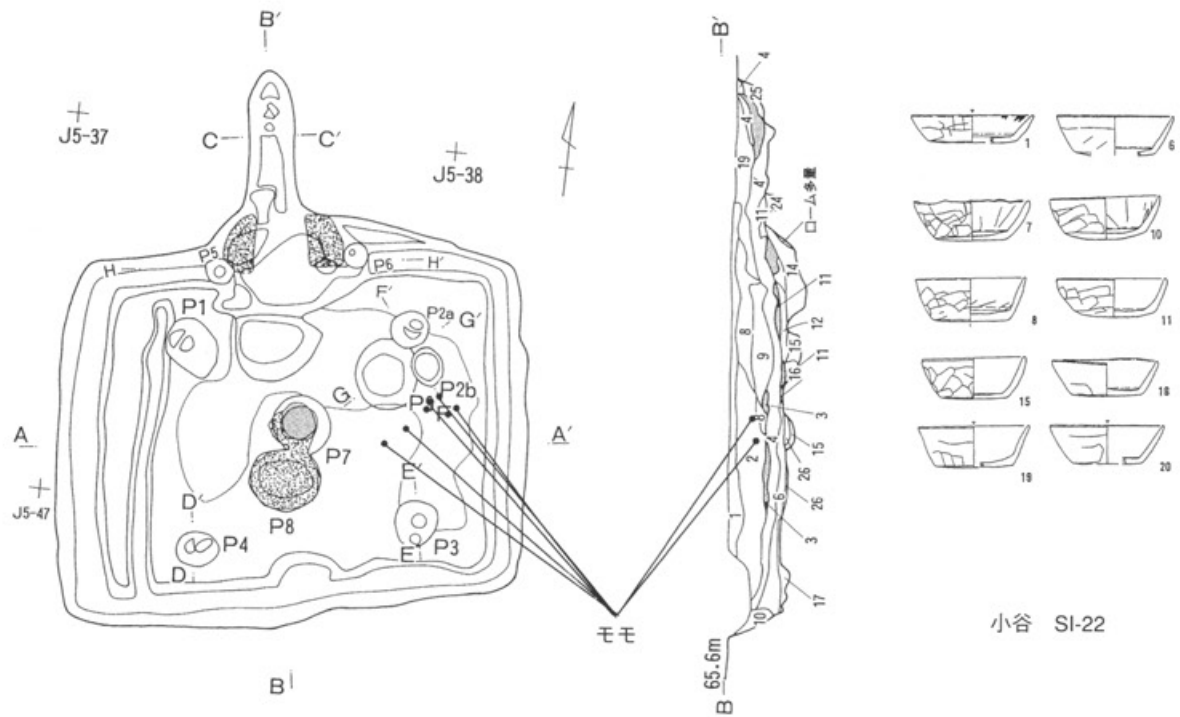


山田水呑 第121号住居跡

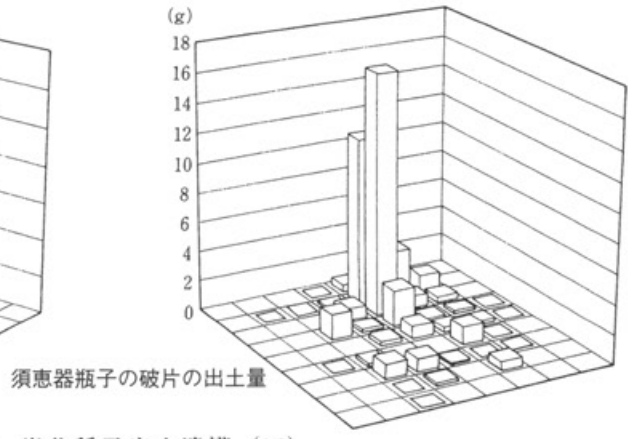
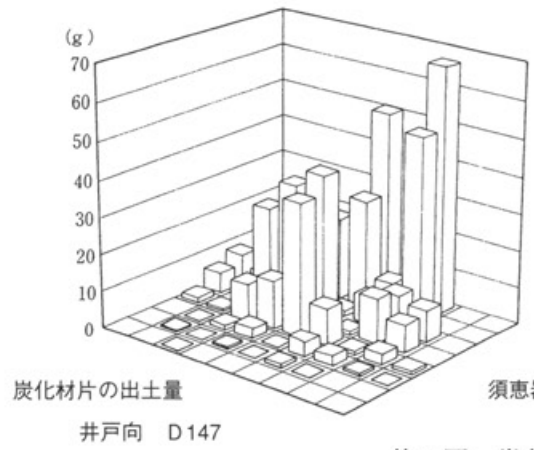
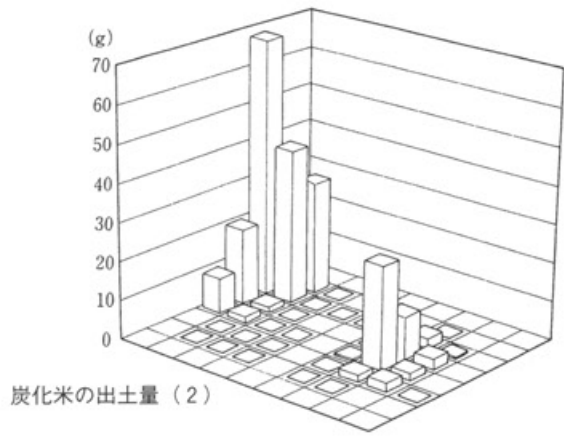
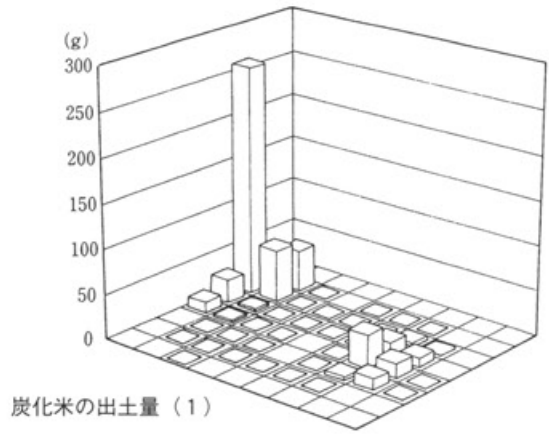
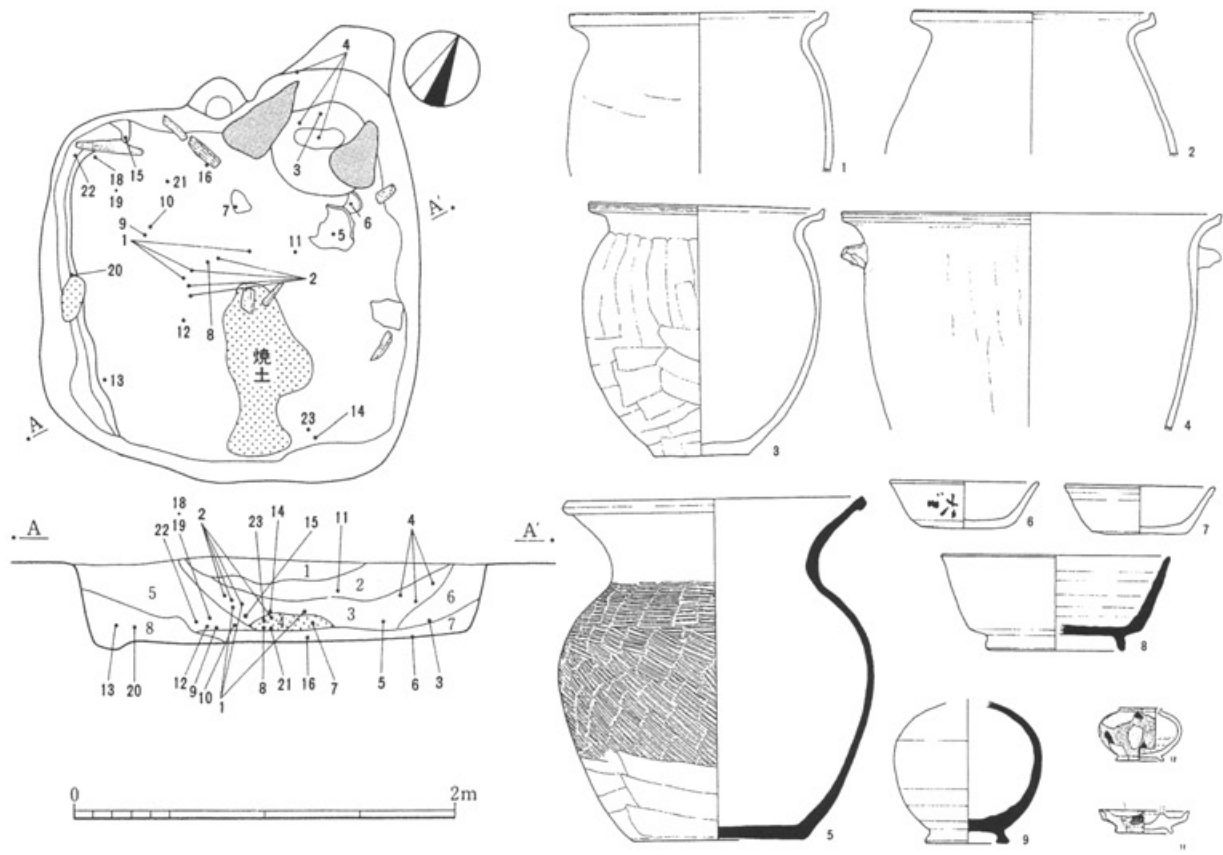


新城 15号住居跡

第97図 炭化種子出土遺構 (14)



第98図 炭化種子出土遺構 (15)



第99図 炭化種子出土遺構 (16)



## 附章 資料・データ集

資料、文献ともに、データは平成14年3月末までに管見に触れたものを掲載した。

### 1 関連資料

資料は①農耕関連遺跡、②鉄製農耕具、③炭化種子等の3項目について作成した。なお、木製農耕具と石製農耕具については資料数に比して遺跡数が少ないので、今回は作成しなかった。

時期区分については、文献目録（論文・書籍等）のカテゴリ6.-③に掲げた文献に拠った。

本表の文献コードは、行先頭の報告書コードを示す。

#### 1) 農耕関連遺跡

県内の調査例のある全遺跡について、市町村順に、農耕遺構・農耕具（木製・鉄製・石製）・炭化種子が検出されているものを掲載した。農耕遺構についてはその内容、農耕関連遺物についてはその有無を示した。○は検出されているもの、-は検出されていないものを示す。

#### 2) 鉄製農耕具出土一覧

時代順に配列した。各遺構ごとに器種別に点数を示したが、各器種の区分と形式分類については本文を参照されたい。

#### 3) 炭化種子出土一覧

時代順に配列した。内容には栽培植物種以外にも食用として利用したと考えられる種も掲載した。

分析者はそれぞれ、百原（百原新）、松谷（松谷暁子）、PS（パリノ・サーヴェイ）、新山（新山雅広）、佐藤（佐藤敏也）、山内（山内文）、辻/辻（辻圭子/辻誠一郎）、重田/北島（重田実/北島正博）、直良（直良信夫）、南木/辻（南木睦彦/辻誠一郎）、粉川（粉川昭平）、永嶋（永嶋正春）、木村（木村達明）を示す。

遺構種別は、住居（竪穴住居跡）、掘立（掘立柱建物跡）、地下坑（地下式坑）、G（グリッド）、T（トレンチ）を示す。

### 2 文献目録

#### 1) 論文・書籍等

各カテゴリ別に、年代順に配列した。原則として発掘調査報告書は除外したが、特に重要な論考などが付されているものについては掲載した。カテゴリは、1. 農耕文化・社会・生業全般に関するもの、2. 農耕に関するもの（①稲作、②畠作、③治水）、3. 遺構に関するもの（①水田遺構、②畠遺構、③治水・利水遺構）、4. 農耕具に関するもの（①鉄製農耕具、②木製農耕具、③石製農耕具、④その他農耕具）、5. 作物に関するもの（①イネ、②雑穀類、③畠作物）、6. その他（①古環境、②自然化学分析、③時期区分）である。

#### 2) 報告書等

県内各財団が発行した報告書は、財団ごとに発行（シリーズ番号）順に配列した。それ以外のは各市町村別に発行年順に配列した。報告書以外の文献（年報・資料紹介・現地説明会資料）は発行主体ごとに発行順に配列した。

例えば、B001.005.1977『京葉I ～東寺山石神遺跡』の場合、「B001」が本書における報告書コード、「005」がシリーズ番号、「1977」が発行年、「I」が書名である。

# 1 関連資料

## 1) 農耕関連遺跡

遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考
				木製品	鉄製品	石器	種子		
小中台		千葉市稲毛区小中台町	-	-	○	-	-	B043	
牛尾井		千葉市稲毛区小中台町	-	-	○	-	-	I014	
駒形		千葉市稲毛区作草部町	-	-	○	-	-	M016	
下田		千葉市稲毛区園生町	-	-	○	-	-	I015	
養輪		千葉市花見川区畑町	-	-	○	-	-	B026	
居寒台		千葉市花見川区浪花町	-	-	○	-	-	M063	
上ノ台		千葉市花見川区暮張町	-	-	○	-	-	L011	
定原		千葉市花見川区宮野木町	-	-	○	-	-	M033	
新田		千葉市中央区葛城町	-	-	○	-	-	I008	
宮崎第1		千葉市中央区宮崎町	-	-	○	-	-	A001	
大北		千葉市中央区宮崎町	-	-	○	-	-	B039	
大森第1		千葉市中央区宮崎町	-	-	○	-	-	B025,I012	
大森第2		千葉市中央区大森町	-	-	○	-	-	A001	
仁戸名	H4/5	千葉市中央区仁戸名町	-	-	○	-	-	I009	
覆作		千葉市中央区赤井町	-	-	○	-	-	B066	
荒久(i)		千葉市中央区青葉町	-	-	○	-	-	B051	
谷津		千葉市中央区花輪町	-	-	○	-	-	L012	
池田古墳群		千葉市中央区花輪町	-	-	○	-	-	B039	
瓜作		千葉市中央区花輪町	-	-	○	-	-	B039	
観音塚		千葉市中央区千葉寺町	-	-	○	-	-	B025,b002	
鷺谷津	D区	千葉市中央区千葉寺町	畦畔・水田面・水路(中世)	-	○	-	-	B025	
村田服部		千葉市中央区村田町	-	○	○	-	○	B027	
生実城跡		千葉市中央区生実町	-	-	○	-	-	I018	
種ヶ谷津		千葉市中央区生実町	-	-	○	-	-	B087	
浜野川神門		千葉市中央区生実町	畦畔(古代～中世)	○	-	-	-	B048,B053	
東寺山石神		千葉市若葉区東寺山	-	-	○	-	○	B001	
東寺山戸張作		千葉市若葉区東寺山	-	-	○	-	-	B002	
戸張作		千葉市若葉区東寺山	-	-	○	-	-	I017	
城の腰		千葉市若葉区大宮町	-	○	-	-	○	B006	
西屋敷		千葉市若葉区大宮町	-	-	○	-	○	B006	
稲荷台		千葉市若葉区大宮町	-	-	○	-	-	I005	
立山城跡		千葉市若葉区大宮町	-	-	○	-	-	I006	
山王		千葉市若葉区原町	-	-	○	-	-	I011	
根崎		千葉市若葉区原町	-	-	○	-	-	B038	
高品城跡		千葉市若葉区高品町	-	-	○	-	-	I013	
高品第2		千葉市若葉区高品町	-	-	○	-	-	A001	
海老		千葉市若葉区みつわ台	-	-	○	-	-	I016	
西唐沢		千葉市若葉区中野町	-	-	○	-	-	B082	
立木南		千葉市若葉区加曾利町	-	-	○	-	-	I002	
南二重堀		千葉市緑区生実町	-	-	○	-	-	B017	
大道		千葉市緑区生実町	-	-	○	-	-	B019,B087	
高沢		千葉市緑区生実町	-	-	○	-	○	B056	
上赤塚古墳群	1号墳	千葉市緑区南生実町	-	-	○	-	-	B018	
稚名崎		千葉市緑区稚名崎町	-	-	○	-	-	B004	
稚名崎古墳群	SX-4	千葉市緑区稚名崎町	畑(古墳後期)	-	-	-	-	N004	後期古墳墳丘下
鎌取		千葉市緑区鎌取町	-	-	○	-	-	B067	

遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考	
				木製品	鉄製品	石器	種子			
六通		千葉市緑区大金沢町	-	-	○	-	-	B012		
ムコアラク		千葉市緑区小金沢町	-	-	○	-	-	B005		
有吉北貝塚		千葉市緑区有吉町	-	-	○	-	○	B091		
有吉南		千葉市緑区有吉町	-	-	○	-	-	B021		
馬ノ口	7号墳	千葉市緑区有吉町	-	-	○	-	-	B022		
清水作		千葉市緑区辺田町	-	-	○	-	-	B007		
中鹿子第2		千葉市緑区小山町	-	-	○	-	-	I007		
有吉		千葉市緑区有吉町	-	-	○	-	-	A006		
田向		千葉市緑区土気町	-	-	○	-	-	M029		
新山		千葉市緑区平山町	-	-	○	-	-	M018		
古台		千葉市緑区下大和田町	-	-	○	-	-	I001		
直道		千葉市花見川区	-	-	○	-	-	I010		
南かんみょう		千葉市若葉区中野町	-	-	○	-	-	M045		
日秀西		我孫子市日秀	-	-	○	-	○	B008		
日秀		我孫子市日秀	-	-	-	-	○	B011		
西原	第5次	我孫子市日秀	-	-	○	-	-	L134		
				-	-	○	-	-	L136	
布佐・余間戸		我孫子市布佐余間戸	-	-	○	-	-	M027		
我孫子中学校校庭		我孫子市高野山	-	-	○	-	○	L133		
別当地	第3次 第4次 第5次 第6次 第7次 第10次	我孫子市中里	-	-	-	-	-	L130		
				-	-	-	-	-	L139	
				-	-	○	-	-	L132	
				-	-	○	-	-	L139	
				-	-	○	-	-	L137	
			-	-	○	-	-	L139		
大久保		我孫子市中峠	-	-	○	-	-	L131		
高根		我孫子市中峠	-	-	○	-	-	L135		
野守	第5次	我孫子市野守	-	-	○	-	-	L138		
水砂		柏市大青田	-	-	○	-	-	B014		
花前Ⅰ		柏市船戸	-	-	○	-	-	B024		
花前Ⅱ-1		柏市船戸	-	-	○	-	-	B014,B029		
花前Ⅱ-2		柏市船戸	-	-	○	-	-	B029		
中馬場	第3次 第4次	柏市根戸	-	-	○	-	-	M004		
				-	-	○	-	-	M008	
高野台		柏市高野台	-	-	○	-	-	L103		
殿台	C地区	柏市布施	-	-	○	-	-	M019		
宿ノ後		柏市宿ノ後	-	-	○	-	-	L101		
鴻ノ巣		柏市鴻ノ巣	-	-	○	-	-	L102		
三輪野山Ⅱ	県七 流山市	流山市三輪野山	-	-	○	-	-	A005		
				-	-	○	-	-	B079	
桐ヶ谷新田		流山市西初石	-	-	○	-	-	M020		
加村台	F地点	流山市加	-	-	○	-	-	L114		
北谷津第Ⅱ		流山市加	-	-	○	-	-	L111		
町畑	A地点 F地点	流山市加	-	-	○	-	-	L112,L113		
				-	-	○	-	-	L115	

遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考
				木製品	鉄製品	石器	種子		
大谷口小金城跡		松戸市大谷口	-	-	○	-	-	L071	
河原塚古墳		松戸市河原塚	-	-	○	-	-	M002	
大井東山		東葛飾郡沼南町大井	-	-	○	-	○	B044	
大井大畑		東葛飾郡沼南町大井	-	-	○	-	-	B044	
六釜内		東葛飾郡沼南町大井	-	-	○	-	-	L191	
双賀辺田No.1		鎌ヶ谷市中沢	-	-	○	-	-	L141	
須和田		市川市須和田	-	-	-	-	○	L035,m001,N001	
権現原		市川市北国分町	-	-	○	-	-	N001	
下総国分		市川市国分	-	-	○	-	-	L032,L033,M005	
下総国分僧寺跡		市川市国分	-	-	○	-	-	L034	
不入斗		市川市国分	-	-	○	-	-	N002	
市宮総合運動場		市川市国府台	-	-	○	-	-	L031	
山ノ後		市川市宮久保	-	-	○	-	-	L032	
海神町		船橋市海神町	-	-	-	-	○		
本郷台		船橋市西船	-	-	○	-	-	M021,M035	
印内		船橋市印内町	-	-	○	-	-	A002	
東中山台	11	船橋市東中山台	-	-	○	-	-	J004	
	12		-	-	○	-	-	J005	
	14次	船橋市西船	-	-	○	-	-	B106	
印内台	(19)	船橋市西船	-	-	○	-	○	J001	
	(22)		-	-	○	-	-	J003	
	(24)		-	-	○	-	-	J002	
	1次		-	-	○	-	-	M025	
	4次		-	-	○	-	-	M060	
	7次		-	-	○	-	-	M057	
	8次		-	-	○	-	-	M057	
夏見台	3次	船橋市夏見町	-	-	○	-	-	L041	
	4次		-	-	○	-	-	M009	
			-	-	○	-	-	M030	
夏見大塚	3次	船橋市夏見町	-	-	○	-	-	L043	
			-	-	○	-	-	L044	
外原		船橋市喜野井町	-	-	○	-	-	L042	
小室		船橋市小室	-	-	○	-	-		
鳴神山		印西市戸神	-	-	○	-	-	B100	
鳴神山Ⅱ		印西市戸神	-	-	○	-	-	B108	
西根		印西市戸神	取水堰(古墳),水路(古墳,平安)	○	-	-	-	b006,b007	
駒形北		印西市駒形	-	-	○	-	-	F020	
小林城跡		印西市小林	-	-	-	-	○	B075	
権現後		八千代市董田	-	-	○	-	-	B023,B071	
北海道		八千代市董田	-	-	○	-	-	B028,B071	
井戸向		八千代市董田	-	-	○	-	○	B042	
			-	-	○	-	-	B071	
白幡前		八千代市董田	-	-	○	-	-	B060	
上の台		八千代市董田	-	-	○	-	-	B072	
島田込ノ内		八千代市島田	-	-	○	-	-	B092	
村上込ノ内		八千代市村上	-	-	○	-	-	A003	
出口		四街道市出口	-	-	○	-	-	F019	



遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考
				木製品	鉄製品	石器	種子		
木戸先		四街道市木戸先	-	-	○	-	-	F027	
入の台第2		四街道市長岡	-	-	○	-	-	L171	
中山		四街道市和良比	-	-	○	-	-	F002	
和良比		四街道市和良比	-	-	○	-	-	F011,F012,F013	
江原台Ⅰ		佐倉市白井田	-	-	○	-	○	L083	
江原台Ⅱ		佐倉市白井田	-	-	○	-	-	B009	
江原台第1	県セ 印旛郡市	佐倉市白井田	-	-	○	-	-	B003	
			-	-	○	-	-	L084	
白井田小笹台		佐倉市白井田	-	-	○	-	-	F026	
白井南		佐倉市白井	-	-	○	-	-	M006	
白井城跡		佐倉市白井	-	-	-	-	○	L086	
大作		佐倉市神門	-	-	○	-	-	B055	
松向作		佐倉市大作	-	-	○	-	-	B065	
南広		佐倉市宮本	-	-	○	-	-	B069	
宮本宮後	B地区	佐倉市宮本	-	-	○	-	-	F015	
六拾部	県セ 佐倉市	佐倉市大作	-	-	○	-	-	B078	
			-	-	○	-	-	L087	
高岡砦		佐倉市高岡	-	-	○	-	-	B080	
高岡		佐倉市高岡	-	-	○	-	-	F021,F022,F023,F024	
高崎新山		佐倉市高崎	-	-	○	-	-	F001	
寺崎向原		佐倉市寺崎	-	-	○	-	-	M034	
坂戸		佐倉市坂戸	-	-	○	-	-	M047	
清水作		佐倉市坂戸	-	-	○	-	-	M047	
鎌木頭助尾余		佐倉市鎌木	-	-	○	-	-	M039	
将門鹿島台		佐倉市将門	-	-	○	-	-	L081	
岩富漆谷津		佐倉市岩富	-	-	○	-	-	L085	
岩富町木戸		佐倉市岩富	-	-	○	-	-		
志津西ノ台		佐倉市志津	-	-	○	-	-	M010	
直弥田屋		佐倉市直弥	-	-	○	-	-	L087	
古屋敷		佐倉市古屋敷	-	-	○	-	-	L082	
大崎台		佐倉市大崎台	-	-	○	○	-	M043	
公津原Loc14		成田市中台	-	-	○	-	○	B013	
公津原Loc17		成田市郷部	-	-	○	-	-	B013	
公津原Loc20		成田市山口	-	-	○	-	-	B013	
公津原Loc29		成田市八代	-	-	○	-	-	B013	
公津原Loc40		成田市八代	-	-	○	-	-	B013	
堀之内		成田市堀之内	-	-	○	-	-	B016	
野毛平高台		成田市野毛平	-	-	○	-	-		
木戸下		成田市野毛平	-	-	○	-	-	B057	
飯仲金堀		成田市飯仲	-	-	-	-	○	F025	
妙福寺裏		成田市大山	-	-	○	-	-	B030	
鳥内		成田市松崎	-	-	○	-	-	B035	
畑ヶ田新林		成田市畑ヶ田	-	-	○	-	-	B052	
畑ヶ田花山		成田市畑ヶ田	-	-	○	-	-	B052	
山口富士		成田市玉造	-	-	○	-	-	B049	
園護台		成田市園護台	-	-	○	-	-	F008,M059	
南園護台	第1地点	成田市園護台	-	-	○	-	-	F033	

遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考
				木製品	鉄製品	石器	種子		
上福田向台		成田市上福田	-	-	○	-	-	F029	
小菅法華塚Ⅱ		成田市小菅	-	-	○	-	-	F030	
小菅石神Ⅱ		成田市小菅	-	-	-	○	-	#001	
宗吾内野台畑		成田市宗吾	-	-	○	-	-	F036	
宗吾西鷺山		成田市宗吾	-	-	○	-	-	M049	
大袋腰巻		成田市大袋	-	-	○	-	-	F037	
南羽鳥中ノ岫	第1F地点	成田市南羽鳥	-	-	○	-	-	F038	
東和田(川栗)	2次	成田市川栗	-	-	○	-	-	F039	
入谷		成田市入谷	-	-	○	-	-	M003	
東峰御幸畑西		成田市東峰	-	-	-	-	○	B107	
神々廻宮前	B地点	白井市神々廻栗原	-	-	○	-	-	F003	
伊篠白幡		印旛郡酒々井町伊篠	-	-	○	-	-	B040	
伊篠越徳		印旛郡酒々井町伊篠	-	-	○	-	-	M036	
尾上藤木	C地区 D地区	印旛郡酒々井町尾上	-	-	○	-	-	F009	
尾上出戸		印旛郡酒々井町尾上	-	-	○	-	-	F007	
墨新山		印旛郡酒々井町墨	-	-	○	-	-	F014	
長勝寺脇館跡		印旛郡酒々井町	-	-	-	-	○	F035	
北押出し		印旛郡酒々井町本佐倉	-	-	-	-	○	F010	
岩戸広台	A地区 B地区	印旛郡印旛村岩戸	-	-	○	-	-	M038	
油作第1	Ⅱ	印旛郡印旛村油作	-	-	○	-	-	F004	
吉高浅間古墳		印旛郡印旛村吉高	-	-	○	-	-	F004	
平賀細町		印旛郡印旛村平賀	-	-	○	-	-	F016	
久能高野		印旛郡富里町久野	-	-	○	-	-	F031	
龍角寺ニュータウン		印旛郡栄町龍角寺	-	-	○	-	-	F028	
大畑Ⅰ		印旛郡栄町龍角寺	-	-	○	-	-	F034	
大畑Ⅰ-2		印旛郡栄町龍角寺	-	-	○	-	-	F005	
殖生郡街		印旛郡栄町龍角寺	-	-	○	-	-	M031	
殖生郡街Ⅱ		印旛郡栄町龍角寺	-	-	○	-	-	B033	
大台		印旛郡栄町大台	-	-	○	-	-	B034	
敷内		印旛郡栄町敷内	-	-	○	-	-	B041	
酒直		印旛郡栄町酒直	-	-	○	-	-	B046	
小台		印旛郡栄町木塚	-	-	○	-	-	F017	
宮内		印旛郡本埜村宮内	-	-	○	-	-	F018	
吉原山王		佐原市丁子	-	-	○	-	-	M046	
長部山		佐原市香取	-	-	○	-	-	M028	
青山中峰		香取郡下総町青山	-	-	○	-	-	F032	
青木富ノ木		香取郡下総町青山	-	-	○	-	-	B058	
名木天神台		香取郡下総町名木	-	-	○	-	-	H001	
名木大台		香取郡下総町名木	-	-	○	-	-	B076	
中里西口		香取郡下総町中里	-	-	○	-	-	B103	
西大須賀コモ田		香取郡下総町大須賀	-	-	○	-	-	B104	
大菅向台		香取郡下総町大菅	-	-	○	-	-	B088,M032,M040	
遠々地・上敷		香取郡下総町大菅	-	-	○	-	-	H002	
阿玉台北		香取郡小見川町五郷	-	-	○	-	○	H007	
								M054	
								L201	
								A007	

遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考
				木製品	鉄製品	石器	種子		
妙見堂		香取郡小見川町織幡	-	-	○	-	-	H004,M055	
馬洗城址		香取郡大栄町松子	-	-	○	-	○	L231	
岩部		香取郡栗原町岩部	-	-	○	-	-	H005	
谷津坂		香取郡栗原町岩部	-	-	○	-	-	L221	
仲台		香取郡神崎町大貫	-	-	○	-	-	H006	
大平		香取郡神崎町	-	-	○	-	-	L211	
南借当		香取郡多古町南借当	木樋(古代?)	○	○	-	-	B062	
仲ノ台		香取郡多古町多古	-	-	○	-	-	H003	
大原		香取郡多古町喜多大原	-	-	○	-	-	M051	
栗島台		銚子市栗島町	-	-	○	-	-	L023	
長塚十二山		銚子市長塚	-	-	○	-	-	M052	
大宮戸大新田	1地点	銚子市三崎町	-	-	○	-	-	L022	
野尻		銚子市野尻	-	-	-	-	○	L021	
岩井安町	県七 東総	海上郡海上町岩井	-	-	○	-	-	B074	
			-	-	○	-	-	K001	
池尻		匝瑳郡干潟町清和甲	-	-	○	-	-	B081	
道木内		匝瑳郡干潟町清和甲	-	-	○	-	-	B085	
桜井平		匝瑳郡干潟町桜井	-	-	○	-	-	B089	
小川台		匝瑳郡光町小川台	-	-	○	-	-	M053	
篠本城跡(神山谷)		匝瑳郡光町篠本	-	-	○	-	○	K004	
芝崎		匝瑳郡光町芝崎	畑(古代)	-	-	-	-	N009,k002,k003	
新城		八日市場市イ	-	-	-	-	○	K003	
飯倉鈴歌		八日市場市飯倉	-	-	○	-	-	M061	
生尾		八日市場市生尾	-	-	○	-	-	K002	
柳台		八日市場市飯塚	-	-	○	-	-	L091	
吉田		八日市場市吉田	-	-	-	-	○	k001	
長倉宮脇		山武郡横芝町長倉	-	-	○	-	-	L251	
八田太田台		山武郡松尾町八田	-	-	○	-	-	B045	
井上A		山武郡山武町埴谷	-	-	○	-	-	L241	
入谷		山武郡山武町椎崎	-	-	○	-	-	M050	
野出山		山武郡山武町椎崎	-	-	○	-	-	M050	
栗橋棒		山武郡山武町矢部	-	-	○	-	-	B093	
小川崎台		山武郡山武町下田	-	-	○	-	-	B101	
古内		山武郡山武町森	-	-	○	-	-	G003	
田向城跡		山武郡芝山町小池	-	-	○	-	-	G004	
小池麻生		山武郡芝山町小池麻生	-	-	○	-	-	B020	
小池地蔵		山武郡芝山町小池地蔵	-	-	○	-	-	B032,B061	
小池元高田		山武郡芝山町小池元高田	-	-	○	-	-	B037	
御田台		山武郡芝山町小池元高田	-	-	○	-	-	B064	
No.2		山武郡芝山町岩山	-	-	○	-	-	B031	
上宿		山武郡芝山町岩山	-	-	○	-	-	B097	
宮門		山武郡芝山町大台	-	-	○	-	-	B061	
洞谷台		山武郡芝山町朝倉	-	-	○	-	-	B105	
庄作(小原子)		山武郡芝山町庄作	-	-	○	-	-	M058	
上楽(小原子)		山武郡芝山町上楽	-	-	○	-	-	M058	
谷窪(小原子)		山武郡芝山町谷窪	-	-	○	-	-	M058	
清水		山武郡芝山町大宮	-	-	○	-	-	M022	

遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考
				木製品	鉄製品	石器	種子		
久我台		東金市松之郷	-	-	○	-	○	B047	
妙経		東金市松之郷	-	-	○	-	-	B073	
南外輪戸		東金市松之郷	-	-	○	-	-	M044	
海老ヶ谷(東金台)		東金市松之郷	-	-	○	-	-	M026	
海老ヶ作(東金台)		東金市松之郷	-	-	○	-	-	M026	
中谷(東金台)		東金市松之郷	-	-	○	-	-	M026	
平蔵台		東金市松之郷	-	-	○	-	-	L001	
油井古塚原		東金市油井	-	-	○	-	-	G005	
作畑		東金市油井	-	-	○	-	-	M048	
道円坊		東金市山田	-	-	○	-	-		
山田水呑		東金市山田	-	-	○	-	○	M011	
小油井台		東金市豆谷	-	-	○	-	-		
小野(小野山田)	第1地点	東金市小野	-	-	-	-	○	G006	
鉢ヶ谷(小野山田)		東金市小野	-	-	○	-	-	G006	
一本松		山武郡大網白里町餅の木	-	-	○	-	-	B084	
宮台		山武郡大網白里町釜野	-	-	○	-	-	G001	
中林		山武郡大網白里町中林	-	-	○	-	-	G002	
一本松		山武郡大網白里町小西	-	-	○	-	-	G007	
升形		山武郡大網白里町小西	-	-	○	-	-		
金谷野		山武郡大網白里町金谷郷	-	-	○	-	-		
菊間		市原市菊間	-	-	○	-	-	A004	
新皇塚古墳		市原市菊間	-	-	○	-	-	A004	
草刈	1号墳	市原市草刈	-	-	○	-	-	B083	
草刈	K区	市原市草刈	-	-	-	-	○	未発表	
草刈六之台		市原市草刈	-	-	○	-	○	B070	
西野		市原市西野	-	-	○	-	-	B054	
白山		市原市村上	-	-	○	-	-	B054	
村上		市原市村上	耕作痕(古代)	-	○	-	-	B086	
今富		市原市今富	-	-	○	-	-	B094	
今富新山		市原市今富	-	-	○	-	-	B099	
番後台		市原市養老	-	-	○	-	-	B015	
片又木		市原市不入斗	-	-	○	-	-	D001	
上総国分尼寺		市原市国分寺台	-	-	-	-	○		
郡本		市原市郡本	-	-	○	-	-	D002	
下給野		市原市潤井戸	-	-	○	-	-	D003	
下ヶ谷台		市原市大作	-	-	○	-	-	D004	
千草山		市原市能満	-	-	○	-	○	D005	
文作		市原市葉木	-	-	○	-	○	D006	
権津茶ノ木		市原市権津	-	-	○	-	○	D007	
安須古墳群	2号墳	市原市安須	-	-	○	-	-	D008	
燼木小谷		市原市燼木	-	-	○	-	-	L121	
市原条里制	並木地区 実信地区 菊間地区 郡本地区 村田川橋岡 県スタ	市原市菊間,市原,郡本,藤井	小区画水田(弥生),水路(弥生中期)	-	-	-	○	B098	
			水路(弥生中期)	○	-	-	-	B098,N007	
			条里型水田(古代)	-	-	-	-	B098	
			条里型水田(古代)	-	-	-	-	B098	
			条里型水田(古代)	-	-	-	-	B098	
			小区画水田(弥生),条里型水田(古代),水路(弥生中期)	○	-	-	○	b005,N008	

遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考
				木製品	鉄製品	石器	種子		
五所四反田		市原市五所	水路(古墳中期)	○	-	-	-	d001	
毛尻		市原市毛尻	-	-	○	-	-	M037	
南総中学校	2号墳	市原市江子田	-	-	○	-	-	M015	
萩ノ原		市原市上高根	-	-	○	-	-	M012,M014	
神納三俣台		袖ヶ浦市神納	-	-	○	-	-	C030	
鼻欠		袖ヶ浦市神納	-	-	○	-	-	M041	
雷塚		袖ヶ浦市神納	-	-	○	-	-	C036	
三王台		袖ヶ浦市神納	-	-	○	-	-	L182	
金井崎		袖ヶ浦市神納	-	-	○	-	-	c101	
谷ノ台		袖ヶ浦市神納	-	-	-	-	○	C032	
文籃		袖ヶ浦市野里	畑(~古墳後期)	-	○	-	-	B077,C016	
清水井		袖ヶ浦市高谷	-	-	○	-	-	C021	
荒久(2)		袖ヶ浦市高谷	-	-	-	-	○	B090	
清水川台		袖ヶ浦市代宿	-	-	○	-	-	C001	
上大城		袖ヶ浦市久保田	-	-	○	-	-	C023	
境	2次	袖ヶ浦市下新田	-	-	○	-	-	C002	
			-	-	-	-	○	C008	
西ノ窪		袖ヶ浦市下新田	-	-	○	-	-	M042	
西久保下		袖ヶ浦市藤波	-	-	○	-	-	C035	
向山野B		袖ヶ浦市藤波	-	-	○	-	-	L181	
西ノ谷下		袖ヶ浦市藤波	-	-	○	-	-	L181	
寒沢	第1地点	袖ヶ浦市永吉	-	-	○	-	-	C026	
遠寺原		袖ヶ浦市永吉	-	-	○	-	-	C003	
西寺原		袖ヶ浦市永吉	-	-	○	-	-	C003	
東郷台		袖ヶ浦市川原井	-	-	○	-	-	C005	
樋爪		袖ヶ浦市川原井	-	-	○	-	-	M023	
滝の口向台		袖ヶ浦市滝ノ口	-	-	-	-	○	B068	
二又堀		袖ヶ浦市大竹	-	-	○	-	-	C019	
三ツ田台		袖ヶ浦市大竹	-	-	○	-	-	C012	
西原Ⅱ		袖ヶ浦市永地	-	-	-	-	-	L183	
田向		木更津市江川	耕作痕(古墳前期),畑(古墳前期,古代)	-	-	-	-	b007	
大寺	No.1地点	木更津市大寺	小区画水田(古墳後期)	-	-	-	-	c002	
	No.8地点	木更津市下望陀	条里型水田(古代)	-	-	-	-	c002	
	No.9地点		小区画水田(古墳後期),条里型水田(古代)	-	-	-	-	c002	
芝野		木更津市下望陀	小区画水田(弥生後期)	○	-	-	-	B109	
菅生	調査会 H4-7 H9	木更津市菅生	水路(古墳)	○	○	-	○	M024	
			小区画水田(弥生後期~古墳後期),条里型水田(古代,中世~)	-	-	-	-	B095	
			小区画水田(弥生後期~古墳前期)	-	-	-	-	c003,L056	
高千穂古墳群	4号墳	木更津市菅生	-	-	○	-	-	C006	
	9号墳		-	-	○	-	-	C006	
四宝塚		木更津市長須賀	条里型水田(平安~)	-	-	-	-	B110	
四留作第1古墳群	13号墳	木更津市笹子	-	-	○	-	-	L058	
四留作第2古墳群	1号墳	木更津市笹子	-	-	○	-	-	C013	
花山		木更津市矢那	-	-	○	-	-	C007	
マミヤク		木更津市小浜	-	-	○	-	○	C009	
西ノ入	1号墳	木更津市中尾	畑(古墳後期)	-	-	-	-	c002	
	2号墳		畑(古墳前期)	-	-	-	-	L054	

遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考
				木製品	鉄製品	石器	種子		
舘西		木更津市舘西	—	—	○	—	—	L002	
大山台		木更津市舘西	—	—	○	—	—		
塚原(千束台)	24号墳	木更津市舘西	畑(古墳後期)	—	—	—	—	c002	
	25号墳		畑(古墳後期)	—	—	—	—	c002	
	26号墳		畑(古墳後期)	—	—	—	—	c002	
高部古墳群(千束台)	30号墳	木更津市舘西	畑(弥生後期)	—	—	—	—	L060	
	31号墳		畑(弥生後期)	—	—	—	—	L060	
	32号墳		畑(弥生後期)	—	—	—	—	L060	
鹿島塚古墳群	6号墳	木更津市舘西	—	—	○	—	C011		
鹿島塚A		木更津市舘西	—	—	—	○			
鹿島塚B		木更津市舘西	—	—	○	—	L052		
大畑台		木更津市舘西	—	—	○	—	L055		
中台		木更津市舘西	—	—	○	—	L059		
小谷		木更津市舘西	—	—	○	—	L057		
野焼A		木更津市舘西	—	—	○	—			
山伏作		木更津市舘西	—	—	○	—	L053		
銭賦		木更津市舘西	畑(古墳後期)	—	—	—	—	L061	
沢間		木更津市下部	畑(弥生後期,古墳～古代)	—	—	—	—	b006	下層は確認のみ
久野		木更津市草敷	—	—	○	—	○	B102	
真里谷城跡		木更津市真里谷	—	—	—	—	○	L051	
中郷谷		木更津市	—	—	—	—	○	L054	
岩出		君津市岩出	—	—	○	—	—	B036	
天神台		君津市上	小区画水田(弥生後期～古墳前期)	—	—	—	—	L153	
八幡神社古墳		君津市外箕輪	条里型水田(古代～)	—	—	—	—	B059	
外箕輪	国道127 (II) (III) (IV)	君津市外箕輪	条里型水田(古代～)	—	—	—	○	B059	
			条里型水田(古代～)	—	—	—	—	C029	
			条里型水田(古代)	—	—	—	—	C034	
			小区画水田(古墳中期),条里区画水田(古代)	—	—	—	—	c004	
常代	区画整理	君津市常代	畑(古墳後期),堰(弥生中期)	—	○	—	○	C025,C033	
	国道127		堰(弥生中期),小区画水田(古墳)	—	—	—	—	b005,b006	
郡条里	国道127	君津市郡	小区画水田(弥生～古墳)	—	—	—	—	b006	
	区画整理		水路(古代?)	—	—	—	—	C010,C017,C020	
郡	区画整理	君津市郡	—	○	—	—	○	C027,L151,L152	
	江川		小区画水田(～古墳後期)	—	—	—	—	B063	
	国道127		水田耕作土(古墳)	—	—	—	—	b006	
小山野		君津市小山野	小区画水田(古墳),条里型水田(古代,中世)	—	—	—	—	b007	
三直中郷	中郷地区 神田地区 坂ノ下地区 君津都市	君津市三直	小区画水田(古墳?)	—	—	—	—	b005	
			畦畔(古墳)	○	—	—	—	b005	
			畦畔(古墳),水路(弥生?)	○	—	—	—	b006	
			条里型水田(平安)	—	—	—	—	C037	
八重原	1号墳	君津市三直	—	—	○	—	N005		
本名輪		君津市坂田	—	—	—	○	C004		
青柳下原	(3)	君津市青柳	条里型水田(古代)	—	—	—	—	c003	
俵田荒久	(3)	君津市俵田	条里型水田(古代)	—	—	—	—	c003	
南子安金井崎		君津市南子安	—	—	○	—	—	C028	
川島	465号 君商	富津市西大和田	—	—	○	—	—	B096	
			—	—	○	—	—	C015	

遺跡名	地区等	所在地	遺構	関連遺物				文献	備考
				木製品	鉄製品	石器	種子		
内裏塚古墳		富津市二間塚	-	-	○	-	-	c001	
打越		富津市下飯野	-	-	○	-	-	C014	
狐塚		富津市青木	-	-	○	-	-	C024	
亀塚	II	富津市青木	-	-	○	-	-	C031	
			畑(平安)	-	-	-	-	L161	
下北原		富津市下北原	-	-	-	-	○	C018	
花輪上原		富津市花輪	小区画水田(古墳)	-	-	-	-	未発表	
町田		富津市岩板	水田(平安)	-	-	-	-	b005	
国府関		茂原市国府関	流路(弥生~古墳)	○	-	-	-	E003	
内野第II(柱)		茂原市柱	-	-	○	-	-	E001	
中原		茂原市猿袋	-	-	○	-	-	E004	
千代丸・力丸横穴群		長生郡長柄町力丸	-	-	○	-	-	E002	
下手II		長生郡長柄町	-	-	○	-	-	L261	
万喜城跡		夷隅郡夷隅町	-	-	-	-	○		
田子台		安房郡鋸南町	-	-	-	-	○	M001	
恩田原		安房郡富山町恩田原	-	-	-	○	-	L271	
宝珠院		安房郡三芳村府中	-	-	○	-	-	B050	
長須賀条里制	A区	館山市下真倉	条里型水田(古代)	-	-	-	-	b001,N006	白形模造品等 白形模造品等
	B区		小区画水田(弥生後期~古墳前期),条里型水田(中世~)	-	-	-	-	b001,N006	
	C区		水路・祭祀跡(古墳)	○	-	-	-	b002	
	D区		水路・祭祀跡(古墳)	-	-	-	-	b003	
	E区		小区画水田(古墳),条里型水田(古代,中世~),水路・木樋・祭祀跡(古墳)	○	-	-	○	b005	
	F区		水路・祭祀跡(古墳)	-	-	-	○	b005	
県道		条里型水田(古代)	-	-	-	-	b006		
東田	B区	館山市上真倉	水路(古墳),祭祀跡(古墳)	-	-	-	-	b004,N009	鋤先形模造品(土製)
東山		館山市南条	小区画水田(弥生?),水路(古墳)	-	-	-	-	b006	
江田条里跡		館山市江田	条里型水田(古代)	○	-	-	-	M007	
小滝涼源寺		安房郡白浜町白浜	-	-	○	-	-	M056	模造品
中原条里跡		鴨川市東条	流路(弥生~)	-	○	-	-	M064	

2) 鉄製農耕具出土一覧

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂柄具		鋤先		他	共伴遺物	備考			
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字						
縄文	馬洗城址	大栄町	14号住居址												鎌か疑問。流れ込み			
弥生後期	草刈六之台	市原市	60号住居				1								流れ込み			
古墳前期	1	桜井平	千歳町	598号跡(住居)	1													
		西ノ谷下	袖ヶ浦市	4号住居跡	1											報文では模造品		
		荒久(1)	千葉市	整穴住居030	1													
		打越	富津市	200号住居址	1													
				210号住居址	1													
	2	下鈴野	市原市	18号住居跡	1													
				番後台	035B号住居跡							1						
		マミヤク	木更津市	074A号住居跡	1													
				107号住居址		1												
		三ッ田台	袖ヶ浦市	SI 025B号遺構(住居)	1												左鎌	
		二又堀	袖ヶ浦市	SI 046(住居)									1					
				8号墳	1													
		寒沢1地点	袖ヶ浦市	SI 037(住居)	1													
	文島	袖ヶ浦市	408号住居址	1														
宿ノ後		44号住居跡	1															
2?	布佐・余間戸	我孫子市	130号址(住居)				1											
?	Loc40	成田市	046A-C号址		1													
古墳中期	1	草刈1号墳	市原市	第1主体部		1												
				第2主体部			1											
		墳丘内									1							
		中ノ台	多古町	SI -17(住居)														
		三王台	袖ヶ浦市	SA 050(住居)				1										
		種ヶ谷津	千葉市	104号整穴住居				1									左歯	
		生実城跡	千葉市	6号住居跡				1										
		養輪	千葉市	018号住居址		1												
		鎌取	千葉市	018(住居)		1												
		045(住居)				1												
	南二重堀	千葉市	23号住居址					2										
	桐ヶ谷新田	流山市	古墳時代2号住居跡								1			砥石				
	2	安須古墳群	市原市	2号墳		1											木質遺存良好	
		吉高浅間古墳	印旛村	吉高浅間古墳								1					模造品(鉄)	
		野焼A	木更津市	SI 196(住居)								1						
		高岡	佐倉市	12号住居址					1									
				31号住居址		1												
直谷田屋		佐倉市	1号住居跡		1						1							
臼井田小笹台		佐倉市	1号住居址									1						
牛尾舁		千葉市	28号住居跡							1								
大森第2		千葉市	35号B住居址			1												
小室		船橋市	D215									1						
外原	船橋市	第10号住							1									
1-2	宮内	本埜村	(古)7号住居跡								1							
	四留作第2古墳群	木更津市	第1号墳								1							
	金井崎	袖ヶ浦市	275号址(古墳周溝)					1								石製模造品(有孔円板)		
	大井東山	沼南町	029号(住居)		1													



時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂道具		鋸跡先		他	共伴遺物	備考		
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字					
古墳後期	1	草刈六之台	市原市	27号住居								1					
		油作第1	印旛村	47号住居址			1										
		鹿島塚古墳群	木更津市	6号墳第1埋葬施設									1				
		山伏作	木更津市	SI 044(住居)		1											
		マミヤク	木更津市	1号祭祀遺構		1							1			手鎌状石製品	
		鼻欠	木更津市	4号墳周溝		1											
		大作	佐倉市	2号墳周溝		1										左鎌	
	西久保下	袖ヶ浦市	5号住居				1										
	1-2	油作第1	印旛村	6号住居址	1												
		海老	千葉市	77号住居跡		1											
	2	椎津茶ノ木	市原市	139号遺構(住居)				1									
		油作第1-II	印旛村	(古)7号住居跡								1					
		大台	栄町	15号住居	1												
		野焼A	木更津市	SI 058(住居)				1								時期幅あり	
		花山	木更津市	108号住居址		1											
		小川崎台	山武町	1号墳		1											
		戸張作	千葉市	177号住居跡						1							
				2号住居跡							1						
		覆作	千葉市	竪穴住居跡092				1									
		高沢	千葉市	157号住居跡		1											
				192号住居跡		1											
		高品城跡	千葉市	37号住居跡				1									
		東寺山石神	千葉市	石神2号墳	3							4				模造品	
	南羽島中嶋1F地点	成田市	土器集積unit 2				9					1					
	町畑A地点	成田市	住居跡39号									1			土製管玉・土鏝		
	2-3	宮崎第1	千葉市	35号A住居址		1											
		上ノ台	千葉市	Z-546号住居址	1?												
南羽島中嶋1F地点		成田市	土器集積unit 6	1											土製鋸先模造品(1)		
3	日秀西	我孫子市	021住居跡						1								
			037B住居跡		1												
			050住居跡		1												
			056I住居跡				1										
	下ヶ谷台	市原市	3号住居跡		1												
	椎津茶ノ木	市原市	28号遺構(住居)				1										
			91号遺構(住居)		1												
			174号遺構(住居)									1					
	畑木小谷	市原市	32号遺構(住居)		1												
	小台	栄町	小台古墳?								1						
	名木大台	下総町	SI 22A(住居)		1												
	道木内	千鶴町	014竪穴住居跡				1								鎌か不明		
	マミヤク	木更津市	142号住居址		1												
	高千穂古墳群	木更津市	4号墳墳端部				1										
9号墳墳丘											1						
南広	佐倉市	竪穴住居001				1											
升形	大網白里町	H-044(住居)				1								直刃?			
栗焼棒	山武町	25号住居跡				2											

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	録					穂摘具		銀鋸先		他	共伴遺物	備考	
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字				
古墳後期	3	上栗(小原子)	芝山町	70号住居址		1										
	谷窪(小原子)	芝山町	182号住居址		1											
	雷塚	袖ヶ浦市	SI 091(住居)				1									
	駒形	千葉市	C-30住居址				1?									録か疑問
	谷津	千葉市	003号住居跡		1											
	宮崎第1	千葉市	21号住居址		1											
	上ノ台	千葉市	V-51号住居址	1												左録
	有吉南	千葉市	16号住居址		1											
	ムコアラク	千葉市	DW40(住居)		1											木質部あり
	高沢	千葉市	159号住居跡		1											
	東寺山戸張作	千葉市	004号住居址		1											
	海老ヶ作(東金台)	東金市	048号址(住居)				1									
	久我台	東金市	SI49(住居)				1									
	妙経	東金市	SI046(住居)		1											
	三輪野山II	流山市	046A号住居跡				1									
	野毛平高台	流山市	049号跡(住居)													
	南羽島中嶋1F地点	成田市	39号住 149号住 土器集積unit3		1							1				
	大井東山	沼南町	054号(住居)							1						
	井戸向	八千代市	D087号遺構(住居)			1										
	加村台F地点	流山市	1号住居跡									1		土玉		
	西原(5次)	我孫子市	4号竪穴建物(住居)					2								
	3?	御田台	芝山町	026号住居跡				1								
	3-4	岩井安町	海上町	3号住居址		1										
	清水	芝山町	5号住居址				1								録の一部?	
	田向城跡	芝山町	003住居跡		1											
4	日秀西	我孫子市	016A住居跡 024B住居跡 046住居跡 063A住居跡 069A住居跡	1	1		1		1			1				
	南総中学校	市原市	9号墳		1											
	草刈六之台	市原市	800号住居				1									
	文作	市原市	竪穴住居67				1									
	油作第1	印旛村	2号住居址		1											
	酒直	栄町	092号住居址		1											
	伊篠白幡	酒々井町	19号住居跡 156号住居跡				1 1									
	大平	神崎町	71号住居址													
	大畑台	木更津市	SI 409(住居) SI 268(住居)		1				1							
	中台	木更津市	SI 109(住居)						1							
	鼻欠	木更津市	3号墳周溝		1				1						穂摘具か不明	
	四留作第一古墳群	木更津市	第13号墳墳丘								1				銀先か不明	
	高岡	佐倉市	46号住居址							1						

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂筒具		鍛錬先		他	共伴遺物	備考	
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字				
古墳後期	4	古屋敷	佐倉市	22号住居址									1			
		松向作	佐倉市	竪穴住居015		1										左鎌
		一本松	大網白里町	SI 2(住居) H-122(住居)				1								
		古内	山武町	H-004(住居)		1		1								
		雷塚	袖ヶ浦市	SI 029(住居)		1										
		向山野B	袖ヶ浦市	SI 012(住居)		1										
		榎作	千葉市	竪穴住居跡118							1					
		大森第2	千葉市	40号A住居址				1								
		椎名崎	千葉市	95(038A)号址(住居)												
		小油井台	東金市	E-006(住居)		1										
		久我台	東金市	SI77(住居) SI138(住居)		1					1					
		三輪野山Ⅱ	流山市	004C号住居跡 008号住居跡 042A号住居跡		1 1		1 1							土製勾玉・土玉・土製丸玉・白玉 紡錘車・滑石勾玉・鉄鏝	
		上福田向台	成田市	1号住居址		1										
		南羽鳥中嶋1F地点	成田市	151号住									1			
		中馬場(3次)	柏市	2号住居址 20号住居址 34号住居址				1 1					1			
		印内台(7次)	船橋市	18号住				1								
		別当地	我孫子市	11A号住居跡		1										
4-5	生尾	八日市場市	竪穴住居SI 13							1						
	有吉北貝塚2	千葉市	SB040(住居) SB105(住居)				1								6c後半 6c後半	
5	文作	市原市	竪穴住居21		1											
	日秀西	我孫子市	019B住居跡 028A住居跡 032C住居跡 065住居跡 083住居跡		1 1 1 1		1					1				
	大畑Ⅰ-2	栄町	506号跡		2											
	宮内	本埜村	(古)18号住居跡				1									
	仲台	神崎町	SI -47(住居)		1											
	遠々地・上敷	下総町	20d(住居)				1									
	中里西口	下総町	SI -1(住居)				1								左鎌	
	西大須賀コモ田古墳群	下総町	SI -10(住居) SI -13(住居)													
	中台	木更津市	SI 113(住居)							1						
	花山	木更津市	66号住居址 90号住居址 103号住居址 115号住居址 173号住居址		1 2 1		1 1									
	城番塚	佐倉市	10号住居跡		1											

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂筒具		鍛鋤先		他	共伴遺物	備考	
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字				
古墳後期	5	高岡	佐倉市	457号住居址	1											
				611号住居址		1										
		一本松	大網白里町	SI 5(住居)							1					
		小池麻生	芝山町	032住居				1								
		庄作(小原子)	横芝町	62号住居址		1										
		雷塚	袖ヶ浦市	SI 089(住居)									1			
		榎作	千葉市	整穴住居跡08H						1						木質
		馬ノ口	千葉市	7号墳									1			
		有吉	千葉市	112号址(住居)	1											
		横崎	千葉市	008号住居跡		1					1					
				48号住居跡		1										
		海老ヶ作(東金台)	東金市	094号址(住居)		1										
		久我台	東金市	SI189(住居)						1						
				SI197(住居)			1						1			
				SI233(住居)												
				SI247(住居)								1				
		妙経	東金市	SI003(住居)								1				
				SI013(住居)								1				
				SI017(住居)								2				
				SI099(住居)				1								
		三輪野山Ⅱ	流山市	004C号住居跡		1										
				014B号住居跡				2								1点穴あり
		狐塚	船橋市	29号住居				1								
		飯倉鈴歌	八日市場市	1号住居址										1?		鎌か疑問
				26号住居址	1				1							
		中馬場	柏市	74号住居跡	1	1		1								
				78号住居跡								2				
印内台(19)	船橋市	006(住居)								1						
三輪野山Ⅱ	流山市	014B号住居跡								2			土鈴・滑石勾玉・白玉・耳輪・刀子	手鎌欠損品再利用か		
別当地(4次)	我孫子市	02号址(住居)		1												
別当地(6次)	我孫子市	1号整穴建物(住居)	1													
西原(5次)	我孫子市	5号整穴建物(住居)					1									
有吉北貝塚2	千葉市	SB170(住居)					1							7c中葉。鎌か不明		
		SB039(住居)							1					7c中～後半。		
1-5	宝珠院	三芳村	B区(包含層)									1				
	千草山	市原市	134号住居跡				1									
	岩戸広台B地区	印旛村	014住		1											
	岩部	栗源町	4号住居址													
	名木台	下総町	9c住居址													
	中台	木更津市	SI 54(住居)				1									
	大山台	木更津市	第21号墳(トレンチ内)									1				
	大作	佐倉市	1号墳主体部									1				
	大道	千葉市	024号住居跡		1											
	高品2A	千葉市	12号住居址		1										「京葉」	
	妙経	東金市	SI035(住居)							1						
			SI117(住居)							1						

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	録					穂道具		録先		他	共伴遺物	備考	
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字				
古墳後期	1-5	大井東山	沼南町	011号(土坑)		1										
		印内台	船橋市	87号住 124号住				1							鉄鏝 石製紡錘車	
		町畑F地点	流山市	住居跡68号	1											
		三輪野山Ⅱ	流山市	043号住居跡 046A号住居跡						1						
		?	岩出	君津市	004F号跡(住居)		1									
			宮崎1	千葉市	第17号-A住居址		1									
			千代丸・力丸横穴墓群	長柄町	36号墓(横穴墓)								1			左録
		~古代1	妙経	東金市	SI060(住居)		1		1							
			南二重堀	千葉市	1号墳主体部 1号墳墳丘					2 1						7c後半以前。 7c後半以前。
		~古代	高岡	佐倉市	151号住居址				1							
		桂名崎	千葉市	129(064)号址		1										
		畑ヶ田花山	成田市	D022号跡(住居) D025号跡(住居)							1					
古代	1	鳴神山	印西市	Ⅱ 060(住居)				1								
		平賀細町	印旛村	017C(住居)	1											
		敷内	栄町	4号住居跡		1										
		尾上藤木D地区	酒々井町	002号住居址						1						
				005号住居址												
				006大型竪穴状遺構												
				1												
		尾上出戸	酒々井町	8号住居跡		1										
		仲台	神崎町	SI-52(住居)		1										
		青木富ノ木	下総町	SI 16(住居)						1						
		大原	多古町	23号住居跡												
				44号住居跡												
				1												
		高岡	佐倉市	406号住居址							1					
				163号住居址									1			
				302号住居址 (住居)				1								
		江原台Ⅰ	佐倉市	H-33号址(住居)				1								
		金谷野	大網白里町	H-001(住居)						1						
		官台	大網白里町	H-014(住居)							3				2枚融着	
		升形	大網白里町	H-061(住居)												
		No.2	芝山町	A-10号跡(住居)												
		小池麻生	芝山町	002住居												
		清水井	袖ヶ浦市	15号住居跡												
	文臨	袖ヶ浦市	364号住居址								1					
	直道	千葉市	8号住居跡													
			11号住居跡													
			12号住居跡													
	駒形	千葉市	C-1号住居址													
	観音塚	千葉市	006号住居								1					
			007号住居													
	居寒台	千葉市	2号住居跡													

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	録					総掘具		鉄鋸先		他	共伴遺物	備考		
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字					
古代	1	大北	千葉市	010号住居跡				1			2						
				032号住居跡		1											
		根崎	千葉市	014号住居跡				1									
		山王	千葉市	2号住居跡		1											
		根崎	千葉市	33号住居跡							1						
				72号住居跡							1						
				88号住居跡								1					
		鉢ヶ谷(小野山田)	東金市	342号住居跡		1											
		久我台	東金市	SI75(住居)		1											左鎌
				SI205(住居)								1					鎌か不明
				SI210(住居)									1				
		三輪野山Ⅱ	流山市	022A号住居跡		1					1						
		山田水呑	東金市	44号住居址								1					
				122号住居址					1								
				010号住居址										1			
		作畑	東金市	149号住居址				1								表のみ、図なし	
		三輪野山Ⅱ	流山市	023号住居跡		1											
				028号住居跡				1									
		園護台	成田市	6号住居跡			1				1				鉄斧		
		大袋腰巻	成田市	11号住居跡			1						1				
				51号住居跡	1								1				
				66号住居跡				2?					1				
				68号住居跡				1									
				80号住居跡			1										
				152号住居跡					1				1				
				188号住居跡					1				1				
				194号住居跡	1												
204号住居跡											2						
150号住居跡							1										
305号住居跡											1						
Loc14	成田市	011号址(住居)								1							
		023B号址(住居)			1		1										
		049号址(住居)									1						
畑ヶ田花山	成田市	D012号跡(住居)									1				手鎌か不明		
		D026号跡(住居)										1					
川島	富津市	45号住居跡					1										
白幡前	八千代市	D052(住居)					1										
		D215(住居)					1										
柳台	八日市場市	182号址(住居)			1												
		310号址(住居)			1												
中馬場	柏市	71号住居跡			1												
		83号住居跡										1					
中馬場(3次)	柏市	53号住居址					1										
印内台(7次)	船橋市	2号住			1												
		4号住					1										
别当地(10次)	我孫子市	6号整穴建物(住居)								1							

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	竪					穂柄具		鋸跡先		他	共伴遺物	備考	
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字				
古代	1	西原	我孫子市	01号住居跡		1										
	1?	中馬場	柏市	63号住居跡		1										
		宮崎1	千葉市	20号住居址				1								
		中鹿子2	千葉市	(住居)				1								
		印内台	船橋市	80号住				2						巡方・錠		
	1-	作畑	東金市	106号住居址				2								表のみ、図なし
	1-2	駒形	千葉市	C-7号住居址				2								
		高沢	千葉市	271号住居跡		1										
				329号住居跡		1										
		作畑	東金市	10号住居址						1						表のみ、図なし
		大袋腰巻	成田市	59号住居跡				1								
		柳台	八日市場市	141号址(住居)				1								
		印内台	船橋市	2号住		1										
				57号住		1										
				98号住		1										
				102号住		1								刀子		
		村上込の内	八千代市	183(住居)		1								刀子		
		上の台	八千代市	4号住居跡								1				凹字形
	1-2?	小川台	光町	第1号土坑	1											古代1より旧
		鉢ヶ谷(小野山田)	東金市	87号住居跡				1								
	2	郡本	市原市	9号遺構(住居)		1										
		駒形北	印西市	7号住居跡				1								
				14号住居跡						2						
		鳴神山	印西市	II 045(住居)						1						
				II 118(住居)		1										
				II 137(住居)				1								
		大畑 I	栄町	K112号墳周溝		1										
	埴生郡街	栄町	SI-1(住居)				1									
	伊籬白幡	酒々井町	102号住居跡				1									
	墨新山	酒々井町	20号住居跡		1											
	岩井安町	海上町	006号住居跡								1					
	水砂	柏市	002住居跡		1											
	花前 I	柏市	004住居跡				1									
			016住居跡		1		1									
	谷津坂	栗源町	1号住居址													
	青木富ノ木	下総町	SI 21(住居)								1					
	名木大台	下総町	SI 55(住居)		1											
	池尻	千潟町	035整穴住居跡		1											
	中原桑里A地点	鴨川市	SI-52(住居)	1											左縁	
	大畑台	木更津市	SI 307(住居)				1								形態特殊	
	小谷	木更津市	SI 15(住居)						1							
	鹿島塚B	木更津市	025号址(住居)		1											
	花山	木更津市	98号住居址		1											
			111号住居址						1							
			181号住居址								2					
	常代	君津市	SI-26(住居)				1									

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	跡					穂筒具		鍬跡先		他	共伴遺物	備考		
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字					
古代	2	大崎台	佐倉市	17号住居址		1											
		白井南	佐倉市	12号住居址		1											
	高岡	佐倉市	8号住居址		1												
			127号住居址				1										
			182号住居址			1											
			313号住居址					1			1						
			325号住居址								1						
			375号住居跡					1			1						
			393号住居址								1						
			400号住居址								1						
			461号住居跡								1						
			六拾部	佐倉市	2号住居跡				1				1				
	5号住居跡										2						
	11号住居跡										1						
	16号住居跡					1											
	六拾部	佐倉市	竪穴住居007								1						
			竪穴住居010			1											
			竪穴住居013					1				1					
			竪穴住居027			1						3					
			竪穴住居029			1											
			竪穴住居032			1											
			竪穴住居036			2											
			竪穴住居040			1											
	南広	佐倉市	竪穴住居023		2			1					1				
			竪穴住居024					2									
			竪穴住居028					1									
			竪穴住居073									1					
江原台 I	佐倉市	H-14号址(住居)		1													
江原台第1	佐倉市	008(住居)		1													
高崎新山	佐倉市	038住居址															
		078住居址															
		080A-B住居址															
将門鹿島台	佐倉市	9号住居址		1													
金谷野	大網白里町	H-026(住居)		1													
一本松	大網白里町	H-006A(住居)							1								
		H-035A(住居)					1						1				
		H-048A(住居)															
		H-107(住居)			1												
一本松	大網白里町	H-210C(住居)		2													
中林	大網白里町	H-011(住居)								1							
小池元高田	芝山町	007号住居跡					1										
清水	芝山町	14号住居址		1													
庄作(小原子)	横芝町	36号住居址		1													
八田太田台	松尾町	018号址(住居)															
		021号址(住居)								1							
上大城	袖ヶ浦市	41号住居		1													



時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂柄具		蹴踏先		他	共伴遺物	備考	
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字				
古代	雷塚	袖ヶ浦市	SI 006(住居)							1					木質遺存良好	
			SI 014(住居)		1											
			SI 024(住居)								1					
			SI 041(住居)					1								
			SI 063(住居)			1										
			SI 096(住居)					1								
			SI 093(住居)					1								
	西ノ窪	袖ヶ浦市	014号跡									1				
	清水川台	袖ヶ浦市	2号住居		1											
			3号住居							1						
	遠寺原	袖ヶ浦市	48号住居址		1											
	直道	千葉市	10号住居跡		1											
	仁戸名(H1.4.5)	千葉市	025住								1					
			044号住		1											
	戸張作	千葉市	13号住居跡		1						3					
	榎作	千葉市	堅穴住居跡042B		1											
	大森第2	千葉市	18号D住居址					1								
	新田	千葉市	6号住居跡								1					
	観音塚	千葉市	017号住居					2							時期確認	
			008号住居		1											
	鷲谷津	千葉市	013号住居		1			2								
	谷津	千葉市	001号住居跡					1								
	大森第1	千葉市	14号C住居址					1?								
	定原	千葉市	21号住居址	1												
			50号住居址		1											
	立山城跡	千葉市	9号住居跡					1								
	中鹿子2	千葉市	27号住居跡				1									
高沢	千葉市	025号住居跡					1									
		030号住居跡		1												
		031号住居跡		1												
		062号住居跡					1									
		122号住居跡		1						1						
		136号住居跡		1												
		160号住居跡		1												
		170号住居跡						1								
		324号住居跡									1					
332号住居跡						1							鎌か不明			
高沢	千葉市	M04号跡(溝)		1												
大道	千葉市	003号住居跡		1												
		041号住居跡					2									
西屋敷	千葉市	058号跡(住居)					1			1				釘止めか不明		
稻荷台	千葉市	5号住居跡					1									
山王	千葉市	8号住居跡					1									
根崎	千葉市	53号住居跡		1												
長塚十二山	鎌子市	13号住居址		1												
海老ヶ作(東金台)	東金市	017号址(住居)		1												

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂柄具		鋸輪先		他	共伴遺物	備考				
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字							
古代	2 鉢ヶ谷(小野山田)	東金市	29号住居跡		1														
			40号住居跡		1														
			306号住居跡		1														
			360号住居跡								1								
	中谷(東金台)	東金市	016号址(住居)		1														
	久我台	東金市	SI35(住居)		1														
			SI56(住居)		1														
			SI241(住居)					1											
			SI95(住居)					1											
	SI109(住居)					1													
	妙経	東金市	SI058(住居)					1											
	SI064(住居)						1												
	山田水呑	東金市	14号住居址		1														
			29号住居址								1								
			07号住居址								1								
	作畑	東金市	158号住居址		1														
			3号住居址								1								
			41号住居址								1								
	三輪野山Ⅱ	流山市	030号住居跡																
	入谷	成田市	21号住居跡		2														
	野出山	成田市	18号住居址					1											
	南園護台1地点	成田市	9号竪穴住居跡							1									
	大袋腰巻	成田市	88号住居跡		1														
175号住居跡											1								
334号住居跡											1								
133号住居跡								1											
185号住居跡							1												
326号住居跡																			
127号住居跡(住居)								1											
小菅法華塚Ⅱ	成田市	11号住居跡		1															
山口雷土	成田市	2号住居跡								1									
Loc14	成田市	057号址(住居)		1															
Loc29	成田市	001号址(住居)					1												
堀之内	成田市	003号跡(住居)										1							
鳥内	成田市	018号跡(住居)					1												
狐塚	富津市	01号墓(土壌)		1								1							
亀塚	富津市	SI 008(住居)		3															
川島	富津市	SI-1(住居)					2				1								
		SI-2(住居)					1												
北海道	八千代市	D061号遺構(住居)		1															
		D148号遺構(住居)						1											
		D084号遺構(住居)										1							
		D025号遺構(住居)						1											
井戸向	八千代市	D032号遺構(住居)										1							
		D116号遺構(住居)						1											

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂積具		竪堀先		他	共伴遺物	備考	
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字				
古代	2	白幡前	八千代市	D216(住居)							1					
	柳台	八日市場市	040号址(住居) 054号址(住居) 203号址(住居)		1		1									
	出口	四街道市	014号住居跡 023号住居跡		1											
	中馬場	柏市	8号住居跡		1											
	中馬場(3次)	柏市	13号住居址		1						1					
	高野台	柏市	7号住居址		1											
	宿ノ後		23号住居跡		1											
	印内台(24)	船橋市	2号住							1						
	印内台(22)	船橋市	010(住居)		1											
	印内台(4次)	船橋市	8号住 12号住		1 1											
	夏見大塚(3次)	船橋市	4号住									1				
	東中山台(11)	船橋市	004(住居) 007(住居) 040(住居)			1 1				2						
	東中山台(12)	船橋市	006(住居)		1											
	村上込の内	八千代市	019(住居) 061(住居) 074(住居) 079(住居) 114(住居) 154(住居) 178(住居)							1 1 1 1 1				刀子・吊金具 鉄斧・刀子 磁石・刀子		
	町畑A地点	流山市	住居跡66B号	1										磁石 土製円盤・磁石		
	三輪野山Ⅱ	流山市	030号住居跡							1				紡錘車・白玉		
	別当地(4次)	我孫子市	03号址(住居)							1						
	大久保	我孫子市	4号住居跡		2											
	高根	我孫子市	01号住居跡				1									
	野守(5次)		1号土坑		1											
	双翼辺田№1	鎌ヶ谷市	4号住居跡							1						
	2?	西野	市原市	SB1047(掘立柱)		1										
		敷内	栄町	5号住居跡		1										
	2?	鎌ヶ谷(小野山田)	東金市	73号住居跡		1										
		Lcc20	成田市	014号址(住居)				1								
		別当地	我孫子市	5号住居跡		1										
2-3	権津茶ノ木	市原市	SI 4(住居)	1											鎌かどうか不明	
	高岡	佐倉市	445号住居址 683号住居跡		1					1						
	大崎台	佐倉市	7号住居址			1										
	一本松	大網白里町	H-202(住居) SH-005(住居) D-337(土坑)		1 2											
	升形	大網白里町	H-034(住居)		1		1									

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂柄具		鋸端先		他	共伴遺物	備考			
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字						
古代	2-3	駒形	千葉市	C-13住居址				2?								穂柄具破片か？		
		大森第2	千葉市	18号E住居址		1										左鎌		
		中谷(東金台)	東金市	001号址(住居)				1										
		油井古塚原	東金市	H-003(住居)				1										
		大袋腰巻	成田市	40号住居跡						1								
		殿台C地区	成田市	7号住居跡			1											
						2						1						
	3	鳴神山	印西市	I 007(住居)							1							
				II 031(住居)				1										
				IV 199(住居)				1										
				III 170(住居)			1											
		大台	采町	4号住居							1							
		尾上藤木D地区	酒々井町	001号住居址				1										
		宮内	本埜村	(平)9号住居跡			1											
		高岡	佐倉市	47号住居址			1											
				165(A)号住居址			1											
				166号住居址			1				1							
				234号住居跡			1											
				376号住居跡								1						
				542号住居跡									1					
				548号住居跡			1					1						
				650号住居跡						1								
				88号土坑											1			
				遠々地・上敷	下総町	2C(住居)		1										
		大崎台	佐倉市	9号住居址			1											
				18号住居址			1											
		岩富町木戸	佐倉市	1号住居址							1							
白井南		佐倉市	14号住居址			1												
江原台第1	佐倉市	007A(住居)			1													
江原台Ⅱ	佐倉市	H-64号(住居)			1													
六拾部	佐倉市	竪穴住居002				1												
		竪穴住居031A								1								
南広	佐倉市	竪穴住居008A					1											
		竪穴住居012								1								
		竪穴住居037C					1											
宮本宮後B地区	佐倉市	8号住居址			1													
		一本松	大網白里町	H-249(住居)				1										
				H-265(住居)							1							
		B-114(掘立柱)			1													
升形	大網白里町	H-002(住居)				1												
中林	大網白里町	H-006(住居)								1								
		H-037(住居)								1								
庄作(小原子)	横芝町	50号住居址										1						
雷塚	袖ヶ浦市	SI 016B(住居)			1													
境	袖ヶ浦市	1号住居址			1													
遠寺原	袖ヶ浦市	2号住居址					2			2		1						

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌				穂摘具		鋸跡先		他	共伴遺物	備考		
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状				U字	
古代	3	西寺原	袖ヶ浦市	23号住居址				1								
	文脇	袖ヶ浦市	185号住居址								2					
	直道	千葉市	13号住居跡		1											
	駒形	千葉市	A-3号住居址 C-5号住居址				1			1						
	榎作	千葉市	塹穴住居跡185A						1						手鎌か不明	
	観音塚	千葉市	003号住居				1									
	池田古墳群	千葉市	008号住居跡		2		1									
	大森第1	千葉市	16号C住居址				1									
	宮崎第1	千葉市	23号住居址		1											
			28号住居址		1											
			36号住居址		1											
	定原	千葉市	40号住居址						1							
			41号住居址						1?							
			52号住居址		1											
	有吉	千葉市	025号址(住居)		1											
			045号址(住居)		1											
			128号址(住居)				1									
	六通	千葉市	4(008)号跡(住居)		1											
	立山城跡	千葉市	10号住居跡							1						
			5号住居跡		1											
	ムコアラク	千葉市	DW02(住居)							1					手鎌か不明	
	中鹿子2	千葉市	4号住居跡		1					1						
			9号住居跡		1											
			12号住居跡							1						
			14号住居跡							1						
			15号住居跡				1									
			34号住居跡		1											
68号住居跡				1												
椎名崎	千葉市	58(087A)号址(住居)												鎌か不明		
高沢	千葉市	007号住居跡				1									鎌か不明	
		040号住居跡		1											左鎌	
		044号住居跡		1												
		077号住居跡		1												
		097号住居跡		1												
		187A・B号住居跡		2					2							
228号住居跡									1					四字形		
稲荷台	千葉市	15号住居跡		1												
西唐沢	千葉市	001号塹穴住居跡		1												
山王	千葉市	11号住居跡				1										
根崎	千葉市	95号住居跡						1								
鉢ヶ谷(小野山田)	東金市	31・32号住居跡		1												
		38号住居跡		1												
		105号住居跡							1?							
		305号住居跡							1							
中谷(東金台)	東金市	013号址(住居)		1												

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂柄具		鋸鉤先		他	共伴遺物	備考		
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字					
古代	3	東金市	SI059(住居)		1												
			SI092C(住居)				1										
		成田市	24号住居跡		1												
		成田市	8号竪穴住居跡					1									
		成田市	043号住居跡		1												
		成田市	5号住									1					
		成田市	009号址									1					
		成田市	6号住居跡		1												
		成田市	015号址(住居)								1						
			086号址(住居)			2											
			123号址(住居)			2											
		成田市	6号住居跡		1												
		沼南町	001号(住居)		2												
		富津市	08号住居		2												
		茂原市	12号住居跡		1												
		八千代市	D007号(住居)		2												
			D013号(住居)		1												
			D072号(住居)					1									
			D077号(住居)		1												
			D083号(住居)		1												
			D016号(住居)		1			1									
			D188号(住居)		1												
			D189号(住居)					1									
			P017号(井戸)									1					鋸か不明
			D022号(住居)					2									
		八千代市	D015号遺構(住居)		1			1									
			D050A号遺構(住居)		1												
			D051号遺構(住居)		1												
			D149号遺構(住居)									1					
		八千代市	H007B号遺構(掘立柱)									1					
	D069号遺構(住居)					1											
	D064号遺構(住居)									1							
	D147(住居)		2														
八千代市	D179(住居)		1							2					手鎌は木質部遺存。		
	D161(住居)									1							
	D165(住居)		1			1											
	D023(住居)		2														
	D248(住居)									1							
	D084(住居)		1												左鎌		
	D009(住居)		1														
	D015(住居)									1					木質		
	D003(住居)					1											
	D107(住居)									1							
	D227(住居)									1							
	D234(住居)									3							
	D236(住居)									1							

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂柄具		鍛錬先		他	共伴遺物	備考		
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字					
古代	3	柳台	八日市場市	097号址(住居)		1											
		木戸先	四街道市	9号住居跡		1		1								左鎌か	
		中馬場	柏市	61号住居跡		1											
				70号住居跡		1											
		中馬場(3次)	柏市	15号住居址				1									
		中馬場(4次)	柏市	30号住居跡							1						
				54号住居跡							1						
				79号住居跡							1						
		宿ノ後		50号住居跡		1											
		印内台(24)	船橋市	12号住		1											
		印内台(22)	船橋市	001(住居)		1											
		夏見台(4次)	船橋市	6号住		1											
		村上込の内	八千代市	006(住居)					1					2		砥石・刀子	
	013(住居)					2									鍍金・鉄鏝		
	038(住居)							1?							石製紡錘車・紡錘車芯棒		
	039(住居)							1?							丸撃		
	050(住居)					1									石製紡錘車・土製紡錘車		
	136(住居)					1					1				砥石・刀子・鉄製紡錘車		
	145(住居)								1						砥石・石製紡錘車・丸鞆・刀子		
	155(住居)								1		1?				刀子・鉄鏝		
	156(住居)												1		鉄斧・刀子・鉄鏝・鍛錬通し金具・鉄製紡錘車・巡方		
	北谷津第Ⅱ			流山市	住居跡2号							1					
	町畑A地点	流山市	住居跡35A号		1										刀子		
住居跡86号									1					釘・砥石			
住居跡231号							1			1				鉄鏝・刀子・釘・砥石・土鏝			
布佐・余間戸	我孫子市	29号址(住居)								1							
		73号址(住居)								1							
		75号址(住居)								1							
		41号址(住居)			1												
		43号址(住居)					1										
		53号址(住居)			1												
別当地(10次)	柏市	5号竪穴建物(住居)		2							1						
野守(5次)		4号竪穴建物(住居)		1													
3-	作畑	東金市	116号住居址		1												
	中馬場	柏市	10号住居跡				1										
			印内台	船橋市	109号住		1								砥石		
			115号住		1												
			120号住				1							刀子			
3?	野出山	成田市	32号住居址		1										左鎌		
	出口	四街道市	002号住居跡		1												
	大久保	我孫子市	5c住居跡		1		1										
3-4	上の台	八千代市	11号住居跡				1										
	鳴神山	印西市	I 046A・B(住居)				1										
			I 047A(住居)		1	1	1										
			II 059(住居)						1								
			II 080(住居)		1										手鎌か不明		

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂道具		鍬跡先		他	共存遺物	備考		
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字					
古代	3-4	鳴神山	印西市	II084(住居)		1											
				II110(住居)			1										
				II142(住居)								1					
	高岡	佐倉市	80号住居址														
	坂戸	佐倉市	39号住居址				2				1						
	鎌木諏訪尾余	佐倉市	H-1(住居)		2												
	西ノ窪	袖ヶ浦市	043号跡(住居)				1										
	西寺原	袖ヶ浦市	49号住居址									1					
	駒形	千葉市	C-25A住居址				1			1							
	下田	千葉市	21号竪穴住居跡		1												
	立山城跡	千葉市	10号住居跡							1							
	野出山	成田市	22号住居址		1												
	囲護台	成田市	11号住居跡		1										鉄斧		
	柳台	八日市場市	052号址(住居)		1												
	印内台(8次)	船橋市	2号住		1												
	双賀辺田No.1	鎌ヶ谷市	9号住居跡							2					短冊状鉄製品		
	4	菊岡	市原市	24号住居址				1									
				44号住居址								1					
		片又木	市原市	22号住居址			1			1							
		駒形北	印西市	13号住居跡		1											
	鳴神山II	印西市	174竪穴住居		2												
	墨新山	酒々井町	24号住居跡						1								
	花前I	柏市	040住居跡		1		1										
	大平	神崎町	72号住居址														
	遠々地・上敷	下総町	13a(住居)								1						
	高岡	佐倉市	216号住居跡	1													
			562(A)号住居跡						1								
	江原台I	佐倉市	H-24号址(住居)		1												
	江原台II	佐倉市	H-71号(住居)		1		1										
			H-97号(住居)		1												
	江原台第1	佐倉市	007A(住居)		1												
			008(住居)		1												
	志津西ノ台	佐倉市			1												
	高岡砦	佐倉市	10号住居跡				2					1				凹字形	
	寺崎向原	佐倉市	118号遺構(住居)		1				1								
			180号遺構(住居)														
			39号遺構(住居)		1												
	長部山	佐原市	SI-45(住居)									1					
			SI-100(住居)							1							
	宮台	大網白里町	H-027(住居)							1						片端部折返し	
	一本松	大網白里町	H-027(住居)		1												
			H-211(住居)						1?								
			H-232(住居)				1										
			D-007(住居)		1												
	丹形	大網白里町	H-011(住居)				1										
			H-096(住居)		1												



時期	遺跡名	市町村	遺構番号	録					穂橋具		鋸跡先		他	共伴遺物	備考	
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字				
古代	4	小池地蔵	芝山町	018号住居跡		1		1								
		宮門	芝山町	004号住居跡		1										
		長倉宮脇	横芝町	4号住居址		1										
		城山	光町	1号住居跡	1											アズキ出土
		雷塚	袖ヶ浦市	SI 019(住居) SI 020(住居) SI 078(住居)				1 1		1						
		境	袖ヶ浦市	44号住居址 46号住居址		1 1										
		西寺原	袖ヶ浦市	9号住居址 63号住居址 64号住居址			1			1		1				
		立木南	千葉市	1号住居跡		1										
		池田古墳群	千葉市	006号住居跡		1										
		大森第1	千葉市	21号住居址		1										
		宮崎第1	千葉市	22号住居址				1								
		定原	千葉市	3号住居址 20号住居址 43号住居址 59号住居址		1 1 2 2										同一個体?
		有吉	千葉市	069号址(住居) 155号址(住居)		1				1						
		立山城跡	千葉市	5号住居跡		1										
		椎名崎	千葉市	97(038C)号址(住居)				1								
		高沢	千葉市	002A号住居跡 006号住居跡 011号住居跡 093号住居跡 201号住居跡 264号住居跡				1		1 1						
		田向	千葉市	1号住居址		1										
		長塚十二山	鏡子市	29号住居址						1		1				
		鉢ヶ谷(小野山田)	東金市	98号住居跡 109号住居跡 136号住居跡 007号土坑		1 1					1 2?					
		久我台	東金市	SI26(住居)		1		1								
		南外輪戸	東金市	1号住居址 2号住居址		2 2							1			
		道内坊	東金市	H-007(住居)		1	1	1								
		山田水呑	東金市	30号住居址 01号住居址 013号住居址		1 1 1										
		油井古塚原	東金市	H-001(住居)		1										
		作畑	東金市	77号住居址 175号住居址						1						

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	録					穂筒具		銀鏡先		他	共伴遺物	備考			
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字						
古代	4	Loc14	成田市	016A号址(住居)														
	Loc20	成田市	047号址															
	内野Ⅱ(桂)	茂原市	10号住居跡															
	権現後	八千代市	D055号(住居)															
	北海道	八千代市	D119号遺構(住居)															
	井戸向	八千代市	D045号遺構(住居) D095号遺構(住居)															
	白幡前	八千代市	D177(住居) D240(住居) D192(住居) D062(住居) D202(住居) D251(住居) D073(住居) D089(住居) D012(住居)															
	上の台	八千代市	6号住居跡															
	飯倉鈴歌	八日市場市	28号住居址															
	柳台	八日市場市	235号址(住居)															
	中馬場	柏市	27号住居跡 28号住居跡 52号住居跡											1				
	中馬場(4次)	柏市	26号住居跡															
	夏見大塚	船橋市	1号址(住居)															
	村上込の内	船橋市	042(住居)													土器転用紡錘車・砥石・刀子		
	町畑A地点	流山市	住居跡22号 住居跡285号													刀子・鉄族・土玉 土錘・獣歯		
	布佐・余間戸	我孫子市	80号址(住居) 116号址(住居) 58号址(住居) 105号址(住居) 109号址(住居)															
	双賀辺田No.1	鎌ヶ谷市	10号住居跡														巡方・刀子・鉄鏃・紡錘車	
	4-	印内台	船橋市	3号土坑														
	4?	駒形	千葉市	C-18住居址														図なし
		野出山	成田市	43号住居址														
		中馬場	柏市	42号住居跡														
		中馬場(4次)	柏市	42号住居跡														
	4-5	神納三俣台	袖ヶ浦市	SI 012(住居)														
		一本松	大網白里町	H-018(住居)														
		西寺原	袖ヶ浦市	88号住居址 99号住居址														
	5	文作	市原市	竪穴住居79														
		宮内	本埜村	(平)39号住居跡														
	花前Ⅱ-1	柏市	013住居跡															
	高岡	佐倉市	192号住居跡															

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	鎌					穂橋具		鋸輪先		他	共伴遺物	備考			
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字						
古代	5	一本松	大網白里町	H-209C(住居)			1				1							
				H-210A(住居)			1											
		長倉宮脇	横芝町			1												
		西久保下	袖ヶ浦市	11号住居		1												
		筑	袖ヶ浦市	6号住居址		1												
		遠寺原	袖ヶ浦市	24号住居址		1		2			1		1					
				37号住居址									1					
		西寺原	袖ヶ浦市	26号住居址							1							
				78号住居址			1											
				89号住居址										1				
				95号住居址			1											
				1号竪穴状遺構			1											
		34号土坑			1													
		戸張作	千葉市	78号住居跡		1												
		下田	千葉市	22号竪穴住居跡		1												
	宮崎第1	千葉市	31号住居址				1											
	立山城跡	千葉市	11号住居跡				1											
	稲荷台	千葉市	11号住居跡							1								
	大宮戸大新田1地点	鎌子市	2号土坑				1											
	鉢ヶ谷(小野山田)	東金市	318号住居跡				1?											
	作畑	東金市	35号住居址				4									表のみ、図なし		
			40号住居址				2									表のみ、図なし		
	上の台	八千代市	22号土坑				1											
印内台(24)	船橋市	17号住				1												
布佐・余間戸	我孫子市	76号址(住居)		1														
5-	坂戸	佐倉市	38号住居址		2													
			生尾	八日市場市	竪穴住居SI 15		1											
5?	印内台(24)	船橋市	4号住		1													
6	東中山台(14次)	船橋市	SI 003(住居)				1											
	西寺原	袖ヶ浦市	86号住居址									1						
			105号住居址		1													
			124号住居址		1													
			130号住居址										1					
	鳴神山	印西市	II 079(住居)		1													
			II H11(掘立柱)		1													
	岩戸広台A地区	印旛村	004住		1													
	酒直	栄町	075号住居址		1													
	池尻	千鴻町	021掘立柱建物跡									1						
	久野	木更津市	IV区グリッド		1													
			遺跡一括										1					
	高岡	佐倉市	215号住居址					1										
380号住居址									1									
江原台Ⅰ	佐倉市	H-19号址(住居)		1														
江原台Ⅱ	佐倉市	H-66号(住居)		1														
		H-69号(住居)		1														
			037号(住居)		1													

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	跡					穂柄具		跡跡先		他	共伴遺物	備考		
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字					
古代	6	吉原山王	佐原市	045B住居跡									1				
		東郷台	袖ヶ浦市	グリッド										1			
		瓜作	千葉市	016号住居跡		1											
		定原	千葉市	7号住居址 28号住居址		1		1									
		高沢	千葉市	P045号土壌 P047号土壌				1			1						
		久我台	東金市	SI46(住居)		1											左録
		妙経	東金市	SI085(住居)						1							
		Loc14	成田市	122B号址(住居)		1											
		畑ヶ田新林	成田市	D004号跡(住居)		2						1					手録か不明
		亀塚	富津市	SI 021(住居)		1											
		白幡前	八千代市	D181(住居) H147(竈立柱) D050(住居)				1			1						木質部遺存
		中馬場(4次)	柏市	53号住居跡	1												
		印内台	船橋市	9号住 32号住 84号住		1		1						1		巡方・刀子 楔(1) 砥石・刀子	左録
		?	荻ノ原	市原市	グリッド									1			
高岡	佐倉市		159号住居址		1												
六拾部	佐倉市		9号住居跡		1												
寺崎向原	佐倉市		140号遺構(住居)	1													
吉原山王	佐原市		642号土壌		1											左録	
金谷野	大網白里町		H-022(住居)		1												
直道	千葉市		2号住居跡									1					
椎名崎	千葉市		113(046F)号址(住居) 141(070B)号址(住居)		1					1							
鉢ヶ谷(小野山田)	東金市		328号住居跡		1												
作畑	東金市		80号住居址		1												
城山	光町		5F-14-3(グリッド)									1				41号住(8c中)に近い	
不明	日秀西	我孫子市	064号 I・II層(包含層)		2		1		1	1							
	日秀	我孫子市	Bトレンチ				1										
	今富	市原市	包含層									1					
	今富新山	市原市	6Dグリッド								1						
	草刈六之台	市原市	グリッド		1		2										
	白山	市原市	グリッド					1									
	村上	市原市	SK25(土坑)				1										
	埴生郡衙Ⅱ	栄町	グリッド		1												
	伊篠白幡	酒々井町	グリッド						1								
	岩井安町	海上町	12号住居址				1										
	花前Ⅰ	柏市	グリッド									1					
	花前Ⅱ-2	柏市	009号住居跡									1					
	青山中峰	下総町	不明		1							1					
	青木富ノ木	下総町	グリッド					1									

時期	遺跡名	市町村	遺構番号	跡					穂橋具		跡橋先		他	共伴遺物	備考
				A	B	C	A-C	D	A	B	板状	U字			
不明	名木大台	下総町	SI 22B(住居)		1										
	名木天神台	下総町	SI 11(住居)		1										
	南借当	多古町	包含層		12		2	4				2			
	跡西	木更津市	C地点古墳周溝内		1										
	常代	君津市	SK-278(土坑)									1			四字形
	吉原山王	佐原市	M10号溝 グリッド				1			1		1			
	洞谷台	芝山町	I区グリッド				1								
	宮門	芝山町	012号住居跡				1								
	桶ヶ浦	袖ヶ浦市	土壇No.5		1										
	直道	千葉市	20号住居跡		1										
	南かんみょう	千葉市	3号住居跡	1											
	小中台	千葉市	包含層								1				
	大北	千葉市	遺構外							1					
	有吉北貝塚2	千葉市	グリッド SB233(住居)				2							1	
	大道	千葉市	表探				1								
	清水作	千葉市	2-J(グリッド) 3-D(グリッド)				1								
	新山	千葉市	不明		1										写真のみ
	根崎	千葉市	38号土坑				1								
	栗島台	銚子市	C調査区トレンチ				1								
	下手II	長柄町	1号住居跡		1										
	小油井台	東金市	溝		1										
	妙経	東金市	SK032(土坑)							1					
	山田水呑	東金市	東方住居		1										
	作畑	東金市	表探				2								表のみ、図なし
	妙福寺裏	成田市	表探		1										
	木戸下	成田市	グリッド							1					
	川島	富津市	グリッド 遺構外		1		2				1				
	島田込ノ内	八千代市	グリッド						1						
	飯倉鈴歌	八日市場市	10号住居址											1?	跡か疑問
	小台	栄町	小台古墳墳丘下?	1											
	上赤塚1号墳	千葉市	第1主体部 第2主体部	1							2				手鎌かどうか不明
	亀塚	富津市	包含層		1						1				
	打越	富津市	171号住居址 グリッド				1								
中馬場(4次)	柏市	3B-1(表探)		1											
印内台(19)	船橋市	008(掘立柱)		1											
印内台	船橋市	88号ピット 表探		1								1			
印内台(8次)	船橋市	擾乱		1											

3) 炭化種子出土一覧

時代	遺跡名	市町村	分析者	遺構番号	種別	位置等	種別(点数)		備考			
							穀類・豆類	堅果・果実類・その他				
弥生中期	城の腰	千葉市	—	037号跡	住居	下層		クリ,種不明(4種)	壺内出土			
				091号跡	住居	下層		種不明(1種)				
				092号跡	住居	覆土	アワ?	種不明(2種)				
				142号跡	住居	床直		種不明(1種)				
	市原条里制 常代	市原市	—	並木・SD008	溝	覆土	イネ(塊状2)					
				君津市	百原	SD-220	大溝	覆土		オニグルミ(2),コナラ属(32),コナラ属アカガシ亜属(62),イチイガシ(42),アラカシ(1),カヤ(11),イヌガヤ(6),ヤマグワ(63),ホオノキ(15),クスノキ(7),ケヤキ(54),コウゾ(3),カジノキ(1),マタビ(14),アサ(5),カナムグラ(45),カラムシ(6),カラムシ属A(9),カラムシ属B(4),ヤナギタデ(7),ミノソバ(6),ギンギシ(12),マルミノヤマゴボウ(1),ノミノフスマ(7),アカザ科(1),タガラシ(23),サルノシカケ科(1)		
		SD-220-2区	大溝			中層	イネ(塊状)		外穎を含む			
		SD-220-10区	大溝	覆土	イネ(200~)		外穎を含む					
	滝ノ口向台	袖ヶ浦市	松谷	S2-119	周溝墓	覆土	イネ(200~)		外穎を含む			
				040	住居	炉	イネ(1?)	円形種子(1)				
				043	住居	炉		不明				
				044	住居	炉	イネ(2)	円形種子(1)				
				045	住居	炉	イネ(1?)					
				052	住居	炉		不明				
058				住居	炉	ミレット状(1)						
040-11				住居	壺内	イネ(1)						
040-6				住居	壺内	イネ(1)						
055-1				住居	壺内	イネ(5)	オニグルミ?	モモの可能性あり				
055-2	住居	壺内	イネ(1)	円形種子(1)								
003-1	住居	壺内	イネ(1)									
弥生後期	1	本名輪	君津市	—	7号住居址	住居	床面焼土	イネ(70)	ガラス玉			
		境2次	袖ヶ浦市	—	57号住居址	住居	炉	イネ(2)	種子?(1)			
	滝ノ口向台	袖ヶ浦市	松谷	78号住居址	住居	炉	イネ(2)					
				008	住居	炉	イネ(5)					
				030	住居	炉	イネ(3),ミレット(1)					
				034	住居	炉	イネ	破片?				
				036	住居	炉	イネ(7),穀片(1)					
	2	郡	君津市	百原	SD244	溝	覆土		オニグルミ(1)			
					境2次	袖ヶ浦市	—	50号住居址	住居	炉	イネ(1)	
					59号住居址			住居	炉	イネ(7)	種子?(1)	
					61号住居址			住居	炉	イネ(2)		
					76号住居址			住居	炉	イネ(2)	種子?(3)	
					82号住居址			住居	炉	イネ(1)		
	下向山	袖ヶ浦市	松谷	43号住居址	住居	覆土下部		イチイガシ(201)				
滝ノ口向台	袖ヶ浦市	松谷	018	住居	炉	イネ(1)						
-	東峰御幸畑西	成田市	PS	15号住居	住居	覆土上層	イネ	カシ類,ハルタデ	カシ類は未熟果			
				19号住居	住居	覆土上層		カシ類	未熟果			
				19号住居	住居	覆土下層		カシ類	未熟果			
				21号住居	住居	覆土上層		ハルタデ				
				野尻	鏡子市	—	11号住居址	住居	下層	イネ(212)		
			37号住居址	住居	覆土、床直	イネ(336)						

時代	遺跡名	市町村	分析者	遺構番号	種別	位置等	種別(点数)		備考	
							穀類・豆類	堅果・果実類・その他		
弥生後期	-	田子台	安房郡鋸南町	—	2号住居址	住居	床面土器			
		中郷谷	木更津市	松谷	035号址	住居	床直壺内	イネ(14),キビ(22.5g)	共に穎残存	
		下向山	木更津市	松谷	33号住居址	住居	覆土下部			
					41号住居址	住居	床直、壺内		うち壺内出土は33点	
		滝ノ口向台	袖ヶ浦市	松谷	006	住居	炉	イネ(1)		
					011	住居	炉	イネ(2)		
					014	住居	炉	イネ(5)		
				016	住居	炉	イネ(2),ミレット状(1)			
				007	住居	床面	イヌビエ(塊状)		焼土中。粒径から	
	谷ノ台	袖ヶ浦市	新山	SI 021	住居	炉	イネ(2)		1点は粉	
弥生～古墳	郡	君津市	百原	SD199	溝	覆土		オニグルミ(25),コナラ属アカガシ亜属(20)	弥生後～古墳前	
古墳前期	1	阿玉台北	香取郡小見川町	—	005B号址	住居	床面	イネ		
					023CF号址	住居	覆土	イネ		
					023D号址	住居	床面?	マメ類?		
					027号址	住居	覆土	イネ		
					041号址	住居	床面	イネ		
		国府岡	茂原市	百原	007流路	流路	覆土	イネ(76),エノコログサ類,フジ(17)	クリ,コナラ属(69),コナラ属アカガシ亜属,イチイガシ(169),ウラジロガシ(10),ツクバネガシ(78),カヤ(3),サクラ属(1),フニイチゴ(11),キイチゴ属(11),ヤマグワ(10),ケヤキ(11),エノキ(1),コウゾ(6),マタタビ属(7),タラノキ(1),ミズキ(3),エゴノキ属(1),ムクノキ(9),アカメガシワ(12),イロハカエデ(1),カエデ属(5),ムクロジ(2),クマヤナギ(2),ブドウ属(2),クサギ(3),ムラサキシキブ属(8)	種子,葉を含む
		塚2次	袖ヶ浦市	—	58号住居址	住居	炉	イネ(2)	種子?(1)	
					62号住居址	住居	炉	イネ(2)		
					67号住居址	住居	炉	イネ(1)	種子?(1)	
		2	東寺山石神	千葉市	佐藤	2号住居址	住居	床直	イネ(158),ダイズ(5)	穎を伴う
		マミヤク	木更津市	—	107号住居	住居	床焼土	イネ(80)		
		山伏作	木更津市	—	SI -045	住居	床直		モモ(3)	
		郡	君津市	百原	SD395	溝	覆土		モモ(1)	
古墳中期	1	草刈	市原市	—	K区151号跡	住居	土器内	マメ類		
		大畑台	木更津市	—	174号住居	住居	床直?		モモ(1)	
					404号住居	住居	床直?		モモ(1)	
					429号住居	住居	床直		モモ(1)	
		鹿島塚A	木更津市	松谷	83号址	住居	床直		モモ(8)	
					137号址	住居	下部	イネ(304)	穎果	
					96号址	住居	覆土	イネ	塊状	
					145号遺構	住居	床壺内	イネ	2合程度	
		2	権津茶ノ木	市原市	—	SI -170	住居	覆土中		モモ(1)
			野焼A	木更津市	—					
	1-2	吉田	八日市場市	—		住居	覆土中	イネ	複数住居・石製模造品	
古墳後期	2	野焼A	木更津市	—	SI -058	住居	覆土中		モモ(2)	
		西屋敷	千葉市	—	020号跡	住居	覆土		モモ(1)	
		郡	君津市	百原	SD139	溝	覆土		モモ(4)	
					SD216	溝	覆土		オニグルミ(28)	
		有吉北貝塚	千葉市	PS	SB163	住居	S	イネ(25),オオムギ(23)	モモ(41),スモモ(11),サンショウ(3),カラスザンショウ(1),不明(310)	
		2	高沢	千葉市	山内	165号住居	住居	床直		モモ(1)
						190-A号住居	住居	床直		モモ(1)
		久我台	東金市	—	SI 168	住居	覆土		報文では梅	

時代	遺跡名	市町村	分析者	遺構番号	種別	位置等	種別(点数)		備考	
							穀類・豆類	堅果・果実類・その他		
古墳後期	2	郡	君津市	百原	SK543	土坑	覆土		モモ(9),不明(1)	
	3	郡	君津市	百原	SK544	土坑	覆土		モモ(2)	
	3-4	郡	君津市	百原	SD071	溝	覆土		オニグルミ(4),モモ(37),イヌガヤ(3),マクワウリ(3)	
					SD469	溝	覆土		オニグルミ(17),コナラ属アカガシ亜属(9),穀斗(2),モモ(46),スモモ(2),カヤ(5),エゴノキ(41),マクワウリ(182),ヒョウタン(2),サルノコシカケ(1),不明(6)	
					SD070, 071	溝	覆土		オニグルミ(1)	
	4	大井東山 野尻	東葛飾郡沼南町 鏡子市	松谷 —	住居031	住居	床直・中層		モモ(5)	手づくね, ミニチュア
					5号住居址	住居	カマド	イネ(9)		
					7号住居址	住居	カマド	イネ(25)		
		郡	君津市	百原	SB006	掘立	柱穴内		モモ(1)	
					SD200	溝	覆土		モモ(3)	
					SD336	溝	覆土	イネ(1)		外類を含む
					SD375	溝	覆土		モモ(1)	
					SK612	土坑	覆土		モモ(1),スモモ(1),ヒョウタン(1)	
					SE002	井戸	覆土		モモ(1)	
					SE006	井戸	覆土		モモ(20)	
	SI005	住居	覆土		モモ(1)					
	SI011	住居	覆土		不明(1)					
	5	高沢 千草山	千葉市 市原市	山内 —	127号住居	住居	床直		モモ(1)	
					103号住居	住居	覆土		モモ	
印内台(19)		船橋市	辻/辻	006整穴住居	住居	下層		モモ(16)	考察あり	
-	海神町 郡 常代	船橋市 君津市 君津市	直良 百原 百原	—	住居	土器内	イネ			
				SD476	溝	覆土		オニグルミ(2),ムクロジ(1)		
				SK-53	土坑	覆土		ムクロジ(1)		
? ~	郡 管生	君津市 木更津市	百原	SD461	溝	覆土		オニグルミ(1)		
				—	大溝?	覆土?	イネ	オニグルミ,クリ,カシ類,モモ,スモモ,イヌガヤ,カキノキ属,ムクノキ,ヒョウタン,ウリ類		
			百原	SD-70	溝	覆土		オニグルミ(3),クリ(3),イチイガシ(1),カヤ(1),イヌガヤ(3),エゴノキ(43),クロジ(2)	下限は古代2	
古代	1	高沢	千葉市	山内	046号住居	住居	床直		モモ(2)	
					162-B号住居	住居	壁際床		モモ(1)	
					170号住居	住居	カマド跡床		モモ(1)	
					292号住居	住居	床直・下層		モモ(7)	
					57号住居址	住居	カマド		モモ(1)	
	山田水呑	東金市	山内	121号住居址	住居	中層		モモ(2),ウメ(1)		
				016号住居址	住居	床直		モモ(6)	アメネズミの食痕	
	1-2	文作 常代	市原市 君津市	— 百原	掘立柱 05	掘立	柱穴		モモ(2)	
					SK-108	井戸	覆土		モモ(1)	
					SK-118	井戸	覆土		ウメ(1),マクワウリ(1)	
2	高沢	千葉市	山内	022号住居	住居	床直		モモ(1)		
				081号住居	住居	覆土		モモ(1),スモモ(1)		
				324号住居	住居	上層		スモモ(87)		
	小野・第1地点 飯仲金堀 小谷	東金市 成田市 木更津市	PS/松谷 — —	38号住居跡	住居	カマド	イネ(1)		不明(9)	
				3号住居跡	住居	柱穴		モモ(1?)		
				22号整穴	住居	焼土層		モモ(7)		



時代	遺跡名	市町村	分析者	遺構番号	種別	位置等	種別(点数)		備考	
							穀類・豆類	堅果・果実類・その他		
古代	2	郡	君津市	百原	SD070	溝	覆土		モモ(7)	
					SD095	溝	覆土		オニグルミ(1),モモ(12)	
	2-3	小野・第1地点	東金市	PS/松谷	2号独立柱建物	掘立	柱穴		モモ(5)	
					3号独立柱建物	掘立	柱穴	イネ(6),ササゲ(23),マメ(1)		
	3	高沢	千葉市	山内	087号住居	住居	覆土		モモ(1)	
					088号住居	住居	覆土		モモ(4),ムクノキ(1)	
					186-B号住居	住居	上層		モモ(2)	
					187-B号住居	住居	床直		モモ(1)	
					277号住居	住居	床直		コナラ属(1)	
		井戸向	八千代市	PS	D147	住居	覆土	イネ(962),マメ類?(25)		土壌サンプル内
		上総国分尼寺	市原市	南木/辻	—	井戸	覆土	イネ,ジュズダマ	クリ,モモ,スモモ,ウメ,カキノキ属,ヒョウタン,ナス,アサシソ属	
		小野・第1地点	東金市	PS/松谷	3A号住居跡	住居	カマド	イネ(3)	サンショウ(1),不明(3)	境内出土
					4D号住居跡	住居	カマド	イネ(4)	不明(11)	
		城山	匝瑳郡光町	—	1号住居跡	住居	床直	アズキ		布片を伴う
		郡	君津市	百原	SD451	溝	覆土		オニグルミ(13),モモ(19),カヤ(1),イヌガヤ(1),サルノコシカケ(2)	
					SD452	溝	覆土		オニグルミ(10),モモ(12),イヌガヤ(1),エゴノキ(1),ヒョウタン(1)	
	3-	須和田	市川市	—	2号住居址	住居	覆土	オオムギ(1)		
		常代	君津市	百原	SK-161	土坑	覆土		モモ(3),スモモ(14)	
	3-4	高沢	千葉市	山内	212号住居	住居	上層		モモ(1)	
		小野・第1地点	山武郡大網白里町	PS/松谷	4A号住居跡	住居	床面		モモ(1)	
	4	高沢	千葉市	山内	297号住居	住居	床直		コナラ属(1)	
		新城	匝瑳郡光町	永嶋	15号住居跡	住居	焼土	イネ(塊状)		布目痕あり
		久野	木更津市	—	SI 48	住居	覆土		カシ類(168.38g)	
					SI 54	住居	覆土	イネ(131.34g)		
	-	高沢	千葉市	山内	047号住居	住居	覆土		モモ(1)	
					330号住居	住居	床直		モモ(1)	
		馬場	千葉市	松谷	SI 5	住居	床下	キンエノコロ(約250),イヌシバ,メヒシバ(約50)		
	日秀西	我孫子市	佐藤	No.1	G	S	イネ(60)			
				No.2	G	S	イネ(60)			
				No.3	G	S	イネ(141)			
				No.4	G	S	イネ(87)			
				No.5	G	S	イネ(30)			
				No.6	G	S	イネ(6)			
				No.7	G	S	イネ(15)			
				No.8	G	S	イネ(14)			
				No.9	G	S	イネ(153)			
				No.10	G	S	イネ(66)			
				No.11	G	S	イネ(73)			
				No.13	G	S	イネ(43)			
				No.14	G	S	イネ(21)			
				No.15	G	S	イネ(10)			
				No.16	G	S	イネ(19)			
				No.17	G	S	イネ(12)			
				No.18	G	S	イネ(161)			
				No.19	G	S	イネ(36)			

時代	遺跡名	市町村	分析者	遺構番号	種別	位置等	種別(点数)		備考	
							穀類・豆類	堅果・果実類・その他		
古代	日秀西	我孫子市	佐藤	No.20	G	S	イネ(40)			
				No.21	G	S	イネ(18)			
				No.22	G	S	イネ(1)			
				No.23	G	S	イネ(12)			
				No.24	G	S	イネ(12)			
				No.25	G	S	イネ(8)			
				3号建物	掘立	柱穴	イネ(1)			
				13号建物	掘立	柱穴	イネ(167)			
				15号建物	掘立	柱穴	イネ(151)			
							イネ(156)			
							イネ(112)			
							イネ(255)			
							イネ(157)			
				20号建物	掘立	柱穴	イネ(57)			
							イネ(168)			
							イネ(162)			
				21号建物	掘立	柱穴	イネ(44)			
							イネ(69)			
				22号建物	掘立	柱穴	イネ(98)			
イネ(19)										
23号建物	掘立	柱穴	イネ(98)							
			イネ(312)							
24号建物	掘立	柱穴	イネ(113)							
			イネ(2)							
30号建物	掘立	柱穴	イネ(96)							
31号建物	掘立	柱穴	イネ(96)							
33号建物	掘立	柱穴	イネ(507)							
下北原	富津市	直良	—	層	堆積土	イネ,オオムギ,コムギ,ヒエ,ダイズ,アズキ	スモモ,ウメ,コウメ,アンズ,カキ,ヒョウタン,マクワウリ,ウリ類,トウナス,ワタ	泥炭層出土		
中世	草刈六之台	市原市	—	716号土坑	土坑	覆土	イネ		モミガラのみ。銭貨付着	
	臼井城跡	佐倉市	—	Iグリッド	G	—	イネ			
	小林城跡	印西市	—	土壘C	土壘	盛土	イネ(0.67g)			
	万喜城跡	夷隅郡夷隅町	—	第2トレンチ	T	—	イネ,ダイズ(-)			
	真里谷城跡	木更津市	重田/北島	主郭	07区	表土	イネ			
						捨場	覆土		オニグルミ	1号捨場
					二ノ郭	覆土	イネ,オオムギ,ダイズ,アズキ		炭化物集中遺構	
						建物群	柱穴	イネ,オオムギ		ウメ
						平場	覆土	ムギ,ダイズ,アズキ		1号平場
					捨場	覆土	イネ		3号捨場	
					地下坑	覆土	イネ,オオムギ			
覆土	イネ		焼土遺構							
三ノ郭	T	—	イネ		6~7トレンチ					
常代	君津市	百原	SK-132	井戸	覆土		ヒョウタン(1)			
中世以降	中世	荒久(2)	袖ヶ浦市	—	P268	P	底面土器内	イネ(初塊状)	地鎮埋納	
	長勝寺館址	印旛郡酒々井町	PS	P16	P	土器皿内	イネ(1)			
	外笈輪	君津市	PS	SE-1	井戸	覆土	イネ(231),ムギ(9842),マメ科(7),エノコログサ(7)	モモ(1),スモモ(1),サクラ属(2),ブドウ(1),アサ(145),オモナミ(1),その他(23)	13c	

時代	遺跡名	市町村	分析者	遺構番号	種別	位置等	種別(点数)		備考
							穀類・豆類	堅果・果実類・その他	
中世以降	中世 郡	君津市	百原	SE003	井戸	覆土		オニグルミ(1),カヤ(1),アカマツ(1),不明(1)	12c後半～13c前
	中近世 郡	君津市	百原	SD053	溝	覆土		オニグルミ(2)	
				SD054	溝	覆土		オニグルミ(3)	
				SD056	溝	覆土		オニグルミ(2)	
				SD059	溝	覆土		オニグルミ(3),モモ(1),カヤ(1)	
近世	市原条里制	市原市	—	市原・4区	水田	耕土	イネ?(塊状)		
不明	鹿島塚A	木更津市	松谷	C14	G	—		キビ(塊状)	
	郡	君津市	百原	SD074	溝	覆土		オニグルミ(3),コナラ属アカガシ亜属(1)	
				SD086	溝	覆土		オニグルミ(1)	
				SK141	土坑	覆土		ヒョウタン(1)	
				U25	G?	—		モモ(2)	

※ 分析者:百原(百原 新),松谷(松谷 暁子),PS(ハリノ・サーヴェイ),新山(新山 雅広),佐藤(佐藤 敏也),山内(山内 文),辻/辻(辻 圭子/辻 誠一郎),重田/北島(重田 実/北島 正博),直良(直良 信夫),南木/辻(南木 睦彦/辻 誠一郎),粉川(粉川 昭平),長嶋(長嶋 正春),木村(木村 達明)

※ 遺構種別:住居(竪穴住居跡),掘立(掘立柱建物跡),地下坑(地下式坑),G(グリッド),T(トレンチ)

## 2 文献目録

### 1) 論文・書籍等

#### 1. 農耕文化・社会・生業全般に関するもの

- 1925 山内清男 「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』44-21 東京人類学会
- 1932 山内清男 「日本遠古之文化」『ドルメン』1-8/2-9
- 1934 森本六爾 「煮沸形態と貯蔵形態～弥生式土器の蓋～」『考古学評論』1-1 東京考古学会  
森本六爾 編 「日本原始農業新論」～考古学評論 1～ 東京考古学会
- 1935 森本六爾 「日本古代生活」『歴史教養講座 ～考古学』第2部
- 1937 山内清男 「日本における農業の起源」『歴史公論』6 雄山閣
- 1938 直良信夫 「史前日本人の食糧文化」『人類学・先史学講座』3 雄山閣
- 1939 山内清男 「日本遠古之文化(新版)」『ドルメン』
- 1942 小野武夫 「日本農業起源論」日本評論社
- 1948 大場磐雄 「古代農村の復元～登呂遺蹟研究」あしかび書房
- 1951 小林行雄 「弥生時代の農耕」『日本考古学概説』
- 1955 杉原莊介 「弥生文化」『日本考古学講座』4  
金岡丈夫 「弥生人種の問題」『日本考古学講座』4
- 1956 杉原莊介 「農耕生活の発達」『図説 日本文化大系』1  
直良信夫 「日本古代農業発達史」さ・え・ら書房
- 1957 瀬川清子 「食生活の歴史」講談社
- 1959 小林行雄 「弥生文化」『図解 考古学事典』東京創元社  
藤田 等 「初期農耕の発展に関する二・三の問題」『私たちの考古学』19
- 1960 杉原莊介 「農業の発生と文化の変革」『世界考古学大系』2 平凡社  
宮本常一 「原始農業文化の残存」『世界考古学大系』2 平凡社
- 1961 杉原莊介 「日本農耕文化の生成」本文編・図録編 日本考古学協会  
杉原莊介 「日本考古学上の問題点」『日本歴史』155/156
- 1962 近藤義郎 「弥生文化論」『岩波講座 日本歴史』1 岩波書店  
和島誠一 「東アジア農耕社会における二つの型」『古代史講座』2 学生社  
千代 肇 「弥生文化の北方伝播とそれをめぐる課題」『考古学研究』9-1 考古学研究会
- 1963 杉原莊介 「日本農耕文化生成の研究」『明治大学人文科学研究紀要』2 明治大学人文科学研究所
- 1964 渡辺 実 「日本食生活史」
- 1966 和島誠一 「弥生時代社会の構造」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社  
和島誠一・田中義昭 「住居と集落」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社  
金岡丈夫 「弥生時代人」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社  
岡崎 敬 「コメを中心としてみた日本と大陸～考古学的調査の現段階」『古代史講座』13 学生社
- 1967 江坂輝彌 「稲作伝来に関する諸問題」『考古学雑誌』53-4 日本考古学協会  
江坂輝彌 「日本文化の起源」講談社  
石野博信 「弥生時代の貯蔵施設」『関西大学考古学研究年報』1 関西大学考古学研究室  
乙益重隆 「弥生時代開始の諸問題」『考古学研究』13-7 考古学研究会
- 1968 ヴェルト/敷内義彦・飯沼二郎 「農業文化の起源」岩波書店  
佐原 眞 「日本農耕起源論批判～『日本農耕文化の起源』をめぐって」『月刊 考古学ジャーナル』23 ニュー・サイエンス社  
石毛直道 「日本稲作の系譜」『史林』51-5  
賀川光夫 「日本石器時代の農耕問題」『歴史教育』16-4  
岡崎 敬 「日本における初期稲作農耕資料～朝鮮半島との関連にふれて」『朝鮮学報』49  
原島礼二 「日本古代社会の基礎構造」未来社
- 1969 坪井清足 「弥生文化の社会」『日本と世界の歴史』1～古代 学習研究社  
関根真隆 「奈良朝食生活の研究」
- 1970 森貞次郎 「弥生文化の源流と展開」『古代の日本』3 角川書店  
杉原莊介 「地方農耕社会の姿相」『古代の日本』7 角川書店  
工楽善通 「農耕文化の伝播」『古代の日本』7 角川書店
- 1971 木下 忠 「縄文と弥生」『民俗学研究』36  
佐々木高明 「稲作以前」NHKブックス 日本放送出版協会
- 1972 中尾佐助 「料理の起源」NHKブックス 日本放送出版協会
- 1973 春成秀爾 「弥生時代はいかにして始まったか～弥生式土器の南朝鮮起源をめぐって」『考古学研究』77 考古学研究会  
杉原莊介 「弥生時代の人と暮らし」『科学朝日』33-2 朝日新聞社  
和島誠一 「金属文化の輸入と生産経済の発達」『日本考古学の発達と科学的精神～輪島誠一主要著作集』和島誠一著作集刊行会  
和島誠一 「農耕牧畜発生前の原始共同体」『日本考古学の発達と科学的精神～輪島誠一主要著作集』和島誠一著作集刊行会  
大林太良 「稲作の神話」弘文堂  
宮本常一 「民俗学からみた日本人」『日本人とは何か』日本経済新聞社
- 1974 杉原莊介 「農耕文化は朝鮮半島から」『科学朝日』34-2 朝日新聞社

- 和島誠一 「農耕文化の開始と弥生時代」『図説 日本の歴史』1 集英社  
 都出比呂志 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』21-1 考古学研究会
- 1975 石毛直道・大塚 滋 「食物誌」中央公論社  
 佐原 眞 「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座 日本歴史』1 岩波書店  
 甲本眞之 「農耕民の技術と社会」『えとのす』3  
 石野博信 「弥生・古墳時代の高倉管理形態とその変遷」『橿原考古学研究所論集』 奈良県立橿原考古学研究所
- 1977 渡辺忠世 「稲の道」NHKブックス 日本放送出版協会  
 都出比呂志 「日本史研究の現状・原始」『岩波講座 日本歴史』26 岩波書店  
 杉原荘介 「日本農耕社会の形成」吉川弘文館  
 大塚 力 「食生活文化考」雄山閣
- 1978 甲本眞之 「弥生文化の系譜」『歴史公論』43 雄山閣  
 佐々木高明・小林達雄 「農耕の始まりをめぐる」『歴史公論』43 雄山閣
- 1979 八幡一郎 「弥生文化研究」『弥生文化研究～八幡一著作集』3 雄山閣  
 間壁霞子 「食生活」『日本考古学を学ぶ』2～原始・古代の生産と政治 有斐閣選書 有斐閣  
 鬼頭清明 「律令国家と農民」塙書房  
 坪井洋文 「イモと日本人～民族文化論の課題」ニューフォークロア双書 未来社  
 佐原 眞 「弥生時代の集落」『考古学雑誌』25-4 日本考古学協会  
 石野博信 「弥生時代の稲作と狩猟・漁撈」『ゼミナール日本古代史』上 光文社
- 1981 高倉洋彰 「弥生時代社会の研究」寧楽社
- 1982 佐々木高明 「照葉樹林文化の道」NHKブックス 日本放送出版協会  
 崎 敬・森貞次郎 「座談会 縄文から弥生へ」『歴史公論』74 特集 日本稲作の起源 雄山閣  
 酒井龍一 「弥生中期社会の形成～畿内社会の形成とその構造」『農耕文化と古代社会』歴史公論ブックス10 雄山閣  
 甲元眞之 「弥生時代の系譜」『農耕文化と古代社会』歴史公論ブックス10 雄山閣  
 西谷 正 「朝鮮の農耕文化と弥生時代」『農耕文化と古代社会』歴史公論ブックス10 雄山閣  
 菊地徹夫 「弥生時代の北海道～続縄文文化研究の現状と問題点」『農耕文化と古代社会』歴史公論ブックス10 雄山閣  
 佐原 眞 「弥生時代～総説」『日本歴史地図』原始古代編 上 柏書房  
 潮見 浩 「東アジアの初期鉄器文化」吉川弘文館  
 八幡一郎 「稲作と弥生文化」『稲・船・祭～松本信廣先生追悼論文集』六興出版  
 江坂輝彌 「船と稲作伝来～朝鮮半島西南部と日本列島への稲の伝来ルート」『稲・船・祭～松本信廣先生追悼論文集』六興出版  
 金関 恕 「神を招く鳥」『考古学論攷～小林行雄博士古希記念論文集』  
 森貞次郎 「縄文晩期及び弥生初期の諸問題」『末盧国』六興出版  
 坪井洋文 「稲を選んだ日本人～民俗的思考の世界』未来社
- 1983 紅村 弘 「弥生時代成立の研究」  
 瀬川芳則 「稲作農耕の社会と民俗」『稲と鉄～さまざまな王権の基盤』日本民俗文化大系3 小学館  
 佐々木高明 「日本農耕文化の源流」  
 渡辺 誠 「縄文時代の知識」考古学シリーズ4 東京美術
- 1984 紅村 弘 「縄文と弥生の間」『月刊 考古学ジャーナル』227 ニュー・サイエンス社  
 渡辺 誠 「照葉樹林文化論と縄文文化研究」『民俗学研究』49-3  
 伊東信雄 「青森県における稲作農耕文化の形成」『北方日本海文化の研究』東北学院大学  
 田中義昭 「弥生文化の成立」『日本歴史大系』1 山川出版社  
 田中義昭 「農耕社会の形成と発展」『日本歴史大系』1 山川出版社  
 高島忠平 「日本における稲作の起源」『月刊 考古学ジャーナル』228 ニュー・サイエンス社  
 小田富士雄 「九州北部における弥生文化出現序説」『九州文化史研究所紀要』31 九州大学九州文化史研究施設  
 都出比呂志 「農耕社会の形成」『講座 日本歴史』1～原始・古代1 東京大学出版会  
 小田富士雄 「弥生土器の編年と年代研究の課題」『高地性集落と倭国大乱～小野忠熙博士退官記念論集』  
 金関 恕 「縄文と弥生の間で」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所
- 1985 石野博信 「古墳出現期の研究」学生社  
 小山修三・五島淑子 「日本人の主食の歴史」『論集 東アジアの食事文化』平凡社  
 小林達雄 「縄文文化の終焉」『日本史の黎明～八幡一郎博士頌寿記念考古学論集』六興出版  
 鬼頭清明 「古代の村」岩波書店  
 酒井龍一 「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」『奈良大学文化財学報』4 奈良大学
- 1986 石岡憲雄 「縄文時代から弥生時代へ」『考古学研究』33-1 考古学研究会  
 能登 健 「里棲み集落の研究」『内陸の生活と文化』雄山閣  
 石野博信 「縄文から弥生へ」『日本の古代』4～縄文・弥生の生活 中央公論社  
 後藤 直 「農耕社会の成立」『岩波講座 日本考古学』6 岩波書店  
 石毛直道 「米食民族比較からみた日本人の食生活」『生活の方法』ドメス出版  
 泉 拓良 「縄文と弥生の間～稲作の起源と時代の画期」『歴史手帳』14-4  
 兵庫県埋蔵文化財調査事務所 「弥生人のムラと暮らし～弥生時代の兵庫」兵庫県埋蔵文化財調査事務所展示会図録3  
 坪井清足 「弥生文化論」『埋蔵文化財と考古学』平凡社  
 佐原 眞 「家畜・奴隷・王墓・戦争～世界の中の日本」『歴史科学』103 大阪歴史科学協議会  
 坪井洋文 「農耕民族の二元性」『日本の古代』4～縄文・弥生の生活 中央公論社

- 1987 佐原 眞 「弥生文化の特質」『シンポジウム 弥生人の四季』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館  
 佐原 眞 『大系日本の歴史』1～日本人の誕生 小学館  
 工業善通 「遠賀川・砂沢・水神平」『季刊 考古学』19 雄山閣  
 神崎宣武 「日本人は何を食べてきたか～食の民俗学」 大月書店  
 佐原 眞 「みちのくの遠賀川」『東アジアの考古と歴史～岡崎敬先生退官記念論集』 同朋社  
 網本善光 「稲作受容期における中部瀬戸内地域の遺跡の動向」『比較考古学試論～筑波大学創立十周年記念考古学論集』 雄山閣  
 1988 渡辺忠世 「アジア稲の起源と稲作圏の構造」 別府大学博物館  
 藤尾慎一郎 「縄文から弥生へ～水田耕作の開始か定着か」『日本民族・文化の生成～永井昌文教授退官記念論文集』 同刊行会  
 中村五郎 「弥生文化の曙光」 未来社  
 1989 能登 健・小島敦子 「関東地方における弥生時代前期集落の選地について」『研究紀要』6 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 1990 森岡秀人 「初期稲作受容期の一姿相～大阪湾岸地域の場合」『播磨考古学論叢～今里幾次先生古希記念』 同刊行会  
 村上恭通 「鉄と社会変革をめぐる諸問題～弥生時代から古墳時代への移行に関連して」『古墳時代像を見直す～成立過程と社会変革』  
 佐原 眞 『日本のあけぼの』4～米作りと日本人 毎日新聞社  
 春成秀爾 「弥生時代の始まり」UP考古学選書11 東京大学出版会  
 樋口隆康 「稲の伝来と日本の夜明け」『稲～その源流への道<中国江南から吉野ヶ里>』東アジア文化交流史研究会  
 1991 藤尾慎一郎 「水稲農耕開始期の地域性」『考古学研究』38-2 考古学研究会  
 松村恵司 「古代集落と鉄器所有」『日本村落史講座』4 雄山閣  
 小田富士雄 「北部九州弥生文化の成立～水稲農耕文化をめぐる日韓交渉」『横山浩一先生退官記念論集』Ⅱ～日本における初期弥生文化の成立 同事業会  
 高倉洋彰 「稲作出現期の環濠集落」『横山浩一先生退官記念論集』Ⅱ～日本における初期弥生文化の成立 同事業会  
 甲元眞之 「東アジアの初期稲作文化」『横山浩一先生退官記念論集』Ⅱ～日本における初期弥生文化の成立 同事業会  
 八賀 晋 「弥生人とその文化」『考古学～その見方と解釈』 筑摩書房  
 佐々木高明 「稲作文化の成立と展開」『弥生文化～日本文化の源流を探る』 大阪府立弥生文化博物館  
 田中良之 「いわゆる渡来説の再検討」『日本における初期弥生文化の成立』 文献出版  
 1993 藤尾慎一郎 「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』48 国立歴史民俗博物館  
 安達 巖 『新版 日本型食生活の歴史』 新泉社  
 佐原 眞 『騎馬民族は来なかった』NHKブックス 日本放送出版協会  
 石川日出志 「縄文と弥生をめぐる」『新視点 日本の歴史』1～原始編 新人物往来社  
 高山 博 「弥生人の集団移動はどのくらいの規模か」『新視点 日本の歴史』1～原始編 新人物往来社  
 瀬田田佳男 「鉄器は弥生文化をどう変えたか」『新視点 日本の歴史』1～原始編 新人物往来社  
 佐原 眞 「コメと日本人」『週刊 金曜日』5 金曜日  
 原田信男 「歴史の中の米と肉～食物と天皇・差別」平凡社選書147 平凡社  
 川越哲志 「弥生時代の鉄器文化」 雄山閣  
 1994 佐々木高明 「日本文化の基層を探る～ナラ林文化と照葉樹林文化」NHKブックス 日本放送出版協会  
 櫻井 秀・足立 勇 『日本食物史～古代から中世』 雄山閣  
 1995 森岡秀人 「初期水田の定着と社会の変化」『弥生文化の成立～大変革の主体は縄文人だった』角川選書 角川書店  
 佐原 眞 「米と日本文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』60 国立歴史民俗博物館  
 1996 赤塚次郎 「弥生時代から古墳時代への社会変動と地域開発」『月刊 文化財』398 文化庁文化財保護部・第一法規出版  
 佐原 眞 「食の考古学」 東京大学出版会  
 1997 広瀬和雄 「縄紋から弥生への新歴史像」 角川書店  
 酒井龍一 「弥生の世界」歴史発掘6 講談社  
 1998 岡本 勇 「縄文と弥生～日本文化の土台にあるもの」 未来社  
 1999 渡辺 誠 「弥生の食生活」『卑弥呼の食卓』 吉川弘文館  
 宮野淳一 「日本食文化の源流」『卑弥呼の食卓』 吉川弘文館  
 宮野淳一 「弥生ムラの食生活」『卑弥呼の食卓』 吉川弘文館  
 小山修三・五島淑子 「日本食史～米食の成立まで」『卑弥呼の食卓』 吉川弘文館  
 2000 寺沢 薫 「王権誕生」『日本の歴史』2 講談社  
 2001 藤尾慎一郎 「福岡平野における弥生文化の成立過程」『先史時代の生活と文化～日本および日本文化の起源に関する学際的研究』論文集  
 石川日出志 「弥生・唐古と登呂～“世紀の発見”は何を明らかにしたか」『歴史評論』615～特集 20世紀の考古学 校倉書房

## 2. 農耕に関するもの

- 1951 中島健一 「焼畑農法と稲作起源についての一考察」『地理学評論』24-5  
 1956 直良信夫 『日本古代農業発達史』 さえら書房  
 1957 筑波常治 『日本農業技術史』  
 1962 小林行雄 『古代の技術』 塙書房  
 天野元之助 『中国農業史研究』 お茶の水書房  
 1964 日本学士院 編 『明治前農業技術史』  
 小林行雄 『続 古代の技術』 塙書房  
 1966 岡本明郎 「農業生産」『日本の考古学』V 学生社

- 1969 柳田国男 「稲の日本史」上・下 筑摩書房
- 1970 篠田 統 「米の文化史」 社会思想社
- 1972 賀川光夫 「農耕の起源～日本文化の源流を探る」 講談社  
佐々木高明 「日本の稲作」 古今書院
- 1973 和島誠一 「原始時代の農業」『日本考古学の発達と科学的精神～輪島誠一主要著作集』和島誠一著作集刊行会
- 1974 森 浩一・嵐 嘉一 「原始・古代の農耕をめぐって」『古代学研究』74 古代学研究会  
鈴木重治 「原始・古代の農耕をめぐって」『古代学研究』74 古代学研究会
- 1975 飯沼二郎 「日本農業の中の朝鮮文化」『日本の中の朝鮮文化』28
- 1979 伊達宗泰・松下 勝 「農耕」『三世紀の考古学』中 学生社  
下條信行 「弥生時代の農業技術の発展」『日本考古学を学ぶ』2～原始・古代の生産と政治 有斐閣選書 有斐閣
- 1980 飯沼二郎 「古代農業革命」 筑摩書房  
福井捷郎 「火耕水耨の論議によせて」『農耕の技術』6 農耕文化研究振興会
- 1982 中村 純・藤原宏志 「植物遺体による古代農耕の研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和56年度年次報告書』  
文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班  
木下 忠 「農耕技術の展開」『農耕文化と古代社会』歴史公論ブックス10 雄山閣  
山崎純男 「縄文農耕論の現状」『農耕文化と古代社会』歴史公論ブックス10 雄山閣
- 1983 乙益重隆 「袋状堅穴考」『坂本太郎博士頌寿記念 日本史学論集 上』吉川弘文館  
高橋一夫 「集落分析の一視点～人口と集落の道」『埼玉考古』21  
渡辺忠世 「アジア稲作の系譜」 法政大学出版局  
戸沢充則 「縄文農耕」『縄文文化の研究』 雄山閣  
佐藤常雄 「農書」『講座 日本技術の社会史』1 日本評論社  
田中義昭 「古代農業の技術と展開」『講座 日本技術の社会史』1 日本評論社  
中村 純・藤原宏志 「植物遺体による古代農耕の研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和57年度年次報告書』  
文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 1984 近藤義郎 「弥生農耕の成立と性格」『前方後円墳の時代』 岩波書店  
加藤晋平 「遺跡出土の動植物遺体の季節推定と生業活動の復原」『古文化財の自然科学的研究』 同朋社  
乙益重隆 「農具と農業経営」『月刊 考古学ジャーナル』228 ニュー・サイエンス社
- 1985 木下 忠 「高床倉庫の系譜をめぐって」『日本史の黎明～八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』 六興出版  
森貞次郎 「縄文農耕」『稲と青銅と鉄』 日本書籍
- 1986 田中義昭 「弥生時代以降の食料生産」『岩波講座 日本考古学』3 岩波書店  
佐々木高明 「倭人と南からきた文化～焼畑農耕文化と水田稲作文化」『日本人誕生』 集英社
- 1987 橋口達也 「聚落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史～岡崎敬先生退官記念論集』 同朋社
- 1988 田中義昭 「弥生時代における耕地と集落」『日本考古学を学ぶ』3～原始・古代の社会 有斐閣選書 有斐閣
- 1989 都出比呂志 「農耕技術の発達と耕地の開拓」『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店  
武末純一 「農村の誕生」『古代史復元』4～弥生農村の誕生 講談社  
能登 健 「農耕集落論研究の現段階」『歴史評論』466 校倉書房  
宮瀬頼夫 「稲作・畑作の害虫」『弥生文化の研究』1～弥生人とその環境 雄山閣
- 1991 樋口隆康 「江南の稲作文化」『開館記念国際シンポジウム 稲作文化の流れ～東アジアの中の弥生文化』 大阪府立弥生文化博物館  
山崎純男 「稲作の初現～北部九州の稲作農耕」『季刊 考古学』37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣  
能登 健 「稲作と畑作」『季刊 考古学』37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣  
甲元眞之 「弥生農耕の展開」『季刊 考古学』37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣  
設楽博己 「弥生時代の農耕儀礼」『季刊 考古学』37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣  
藤尾慎一郎 「水稲耕作と突帯文土器」『横山浩一先生退官記念論集』Ⅱ～日本における初期弥生文化の成立 同事業会  
斎野裕彦 「東日本への稲作伝播を考える」『月刊 考古学ジャーナル』337 ニュー・サイエンス社
- 1993 賀川光夫 「焼畑と水田～初期稲作の問題」『考古論集～潮見浩先生退官記念論文集』 同事業会  
佐々木高明 「畑作文化と稲作文化」『岩波講座 日本通史』1～日本列島と人類社会 岩波書店
- 1994 酒井龍一 「弥生集落と水田」『古代の水田を考える～帝塚山考古学談話会第500回記念』 帝塚山考古学研究所  
高橋 護 「縄文農耕と稲作」『東アジアの古代文化』81 大和書房
- 1995 田村 孝 「古墳時代の村と畠、水田」『高崎のあけぼの』7 第8回企画展 高崎市観音塚資料館
- 1996 黒沢 浩 「弥生・古墳時代の農業」『考古学による日本歴史』2～産業Ⅰ 狩猟・漁業・農業 雄山閣
- 1999 高橋 護 「縄文文化における農耕」『日本中国考古学会第10回大会プログラム～日本中国考古学会報』 日本中国考古学会  
高倉洋彰 「弥生文化論～稲作の開始と首長権の展開」 雄山閣  
小山田宏一 「縄文農耕と弥生農耕」『卑弥呼の食卓』 吉川弘文館  
滝沢 誠 「日本型農耕社会の形成～古墳時代における水田開発」『食料生産社会の考古学』 朝倉書店

①稲作

- 1947 古島敏雄 「日本農業技術史」上
- 1948 古島敏雄 「田植農法出現の歴史的地盤」『文化史研究』1  
福島要一 「田植と直播～田植の起源と登呂遺跡の教訓」『歴史評論』3-5 校倉書房
- 1950 洞 富雄 「田植農法の起源」『歴史評論』96 校倉書房

- 1951 安藤廣太郎 『日本古代稲作史雑考』 地球出版
- 1953 清水 浩 「牛馬耕の普及と耕転技術の発達」『日本農業発達史』 1
- 1954 古島敏雄 『日本農業発達史』 2  
木下 忠 「弥生式文化時代における施肥の問題」『史学研究』 57
- 1956 古島敏雄 『日本農業史』
- 1957 近藤義郎 「初期水稲農業の技術的達成について」『私たちの考古学』 4-3
- 1959 安藤廣太郎 『日本古代稲作史研究』 農林協会
- 1961 杉原莊介 「弥生時代の稲作」『稲の日本史』 4
- 1962 近藤義郎・岡本明郎 「日本の水稲農業技術」『古代史講座』 3 学生社
- 1964 木下 忠 「田植と直播」『日本考古学の諸問題』
- 1970 佐々木高明 「シコクビエと早乙女～田植起源についての一仮説」『季刊 考古学』 1 雄山閣
- 1973 宮坂 昭 「稲の直播栽培」 農山漁村文化協会
- 1974 江坂輝彌 「稲作はいつ始まったか」『サイエンス 日本版』 4
- 1975 嵐 嘉一 「近世稲作技術史」 農山漁村文化協会  
山田龍雄 「江戸時代の稲作技術」『農業技術体系』作物編 1, 基礎編・イネ基礎編
- 1978 乙益重隆 「弥生農業の生産力と労働力」『考古学研究』 25-2 考古学研究会
- 1980 木下 忠 「田植農法の起源」『古代学研究』 94 古代学研究会
- 1982 中島直幸 「唐津市菜畑遺跡の水田跡・農耕具」『歴史公論』 74 特集 日本稲作の起源 雄山閣  
山崎純男 「福岡市板付遺跡の成立と展開」『歴史公論』 74 特集 日本稲作の起源 雄山閣  
笠原安夫 「出土種子からみた縄文・弥生期の稲作」『農耕文化と古代社会』 歴史公論ブックス10 雄山閣  
工楽善通 「東北地方における古代稲作を探る」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学～総括報告書』 同朋社
- 1984 高畑知功 「田植と収穫量」『岡山県埋蔵文化財調査報告書』 56 岡山県教育委員会  
須藤 隆 「東北における稲作の開始」『月刊 考古学ジャーナル』 228 ニュー・サイエンス社
- 1985 佐々木高明 「イネと日本人」『登呂遺跡と弥生文化』 小学館  
上山春平・渡辺忠世 『稲作文化』中公新書 中央公論社  
橋口達也 「日本における稲作の開始と発展」『石崎曲り田遺跡Ⅲ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告  
伊東信雄 「東北地方における稲作農耕の成立」『日本史の黎明～八幡一郎博士頌寿記念考古学論集』 六興出版
- 1986 高谷好一 「水田が開かれるとき」『日本古代史』 5～豊饒の大地 集英社  
寺沢 薫 「稲作技術と弥生の農業」『日本の古代』 4～縄文・弥生の生活 中央公論社
- 1987 田中耕司 「稲作の類型と分布」『稲のアジア史』 1 小学館  
工楽善通 「古代の水田跡とムラ」『稲のアジア史』 3 小学館  
佐々木高明 「稲作文化の伝来と展開」『稲のアジア史』 3 小学館  
町田 章 「中国と朝鮮の稲作」『稲のアジア史』 3 小学館  
高谷好一 「アジア稲作の生態構造」『稲のアジア史』 3 小学館  
佐々木高明 「稲作のはじまり」『週刊朝日百科 日本の歴史』 39～稲と金属器 朝日新聞社  
佐原 眞 「稲作・米食2000年」『週間 農林』 1347/1348  
金田章裕 「条里と村落の歴史地理学的研究」『稲のアジア史』 3 小学館  
黒崎 直 「耕作」『弥生文化の研究』 2～生業 雄山閣  
木下正史 「稲の貯蔵と収穫」『弥生文化の研究』 2～生業 雄山閣  
甲元眞之 「播種と収穫」『弥生文化の研究』 2～生業 雄山閣
- 1988 田辺昭三 「稲作農耕系譜～弥生時代水田跡をめぐって」『静岡県史研究』 4 静岡県  
山田昌久 「東日本における稲作技術の展開と画期」『日本における稲作技術の起源と展開～日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム資料集』 学生社  
森岡秀人 「近畿地方における稲作農耕の開始と展開」『日本における稲作技術の起源と展開～日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム資料集』 学生社  
川崎純徳 「東部弥生式農耕論～水稲農耕否定の立場から」『婆良岐考古』 10 婆良岐考古同人会
- 1989 寺沢 薫 「水田の登場」『古代史復元』 4～弥生農村の誕生 講談社  
黒崎 直 「農具の革新/水田と開拓/田に水を引く/大開拓の時代」『古代史復元』 6～古墳時代の王と民衆 講談社  
能登 健 「古墳時代の陸苗代」『農耕の技術』 12 農耕文化研究振興会  
斎野裕彦 「東北地方における初期稲作農耕様相(予察)」『地方史研究』 39-4 地方紙研究会
- 1990 森岡秀人 「稲作はどのように広がっていったか」『争点 日本の歴史』 1 新人物往来社  
平野吾郎 「東海地方における水稲耕作の開始について」『静岡県埋蔵文化財研究所 研究紀要』 3 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 1991 寺沢 薫 「2 水稲耕作 収穫と貯蔵」『古墳時代の研究』 4 雄山閣  
山田昌久 「2 水稲耕作 2 稲作技術」『古墳時代の研究』 4 雄山閣  
外山秀一・中山誠二 「稲と稲作の波及の現状」『各地域における米づくりの開始～第30回埋蔵文化財研究会』 第Ⅲ分冊 発表要旨・追加資料集 埋蔵文化財研究会  
外山秀一・中山誠二 「稲と稲作の波及」『季刊 考古学』 37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣
- 高谷好一 「東アジアから見た日本の初期稲作」『季刊 考古学』 37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣  
工楽善通 「稲作農耕のはじまり」『季刊 考古学』 37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣
- 1992 小林 茂 「南西諸島におけるイネ栽培の成立条件」『月刊 考古学ジャーナル』 352 ニュー・サイエンス社
- 1993 森岡秀人 「弥生時代の田植と稲刈」『新視点 日本の歴史』 1～原始編 新人物往来社



- 樋口隆康 「稲作は倭人が招来した」『考古論集～潮見浩先生退官記念論文集』 同事業会  
 平野吾郎 「水田耕作の始まるころ」『研究紀要』Ⅳ 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 1994 穂積浩昌 「古墳時代の湧水点祭祀について」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅣ 同志社大学  
 斎野裕彦 「東北の水田稲作農耕」『古代の水田跡を考える～帝塚山考古学談話会第500回記念』 帝塚山考古学研究所  
 工業普通 「水田稲作のひろがり」『古代の水田跡を考える～帝塚山考古学談話会第500回記念』 帝塚山考古学研究所  
 山川 均 「“米の力”考～奈良盆地における米生産力と弥生集落の相関について」『古代の水田跡を考える～帝塚山考古学談話会第500回記念』 帝塚山考古学研究所  
 高橋 護 「縄文稲作を考える」『古代の水田跡を考える～帝塚山考古学談話会第500回記念』 帝塚山考古学研究所  
 山崎純男 「北部九州における初期稲作」『古代の水田跡を考える～帝塚山考古学談話会第500回記念』 帝塚山考古学研究所  
 藤原宏志 「稲作の起源を求めて」『発掘を科学する』岩波新書355 岩波書店  
 山岸良二 「稲作を伝えた人々の墓～四隅の切れる方形周溝墓小考」『古代日本の稲作』 雄山閣  
 1995 高倉洋彰. 「古代日本への稲作伝播」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化～文部省科学研究費による国際学術研究』 佐賀大学農学部  
 中島直幸. 「日本・北部九州の古代稲遺跡」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化～文部省科学研究費による国際学術研究』 佐賀大学農学部  
 外山秀一 「稲作の波及と初期水田の立地」『古代の環境と考古学』 古今書院  
 下條信行 「農具と稲作農耕の受容」『弥生文化の成立～大変革の主体は縄文人だった』角川選書 角川書店  
 1996 石川日出志 「特別論考 南関東の弥生文化」『富士山を望む弥生の国々』 大阪府立弥生文化博物館  
 1998 中山誠二 「灌漑型水稲作の波及・定着論」分析ノート』『西相模考古』7 西相模考古学研究会  
 高橋 護 「縄文時代中期稲作の探究」『堅田直先生古希記念論文集』 同刊行会  
 井上智博 「弥生時代の水田耕作と水田経営」『弥生文化博物館研究報告』5 大阪府立弥生文化博物館  
 1999 下野敏見 「民俗学から水田遺構を見る」『民俗学から原日本を見る』 吉川弘文館  
 2001 横倉雅幸 「東南アジアにおける稲作のはじまり」『原史東南アジア世界』 岩波書店  
 新井 仁 「群馬県における平安時代の水田開発について～前橋台地南部を中心とした試論」『研究紀要』19～特集 農業開発・災害と考古学 群馬県埋蔵文化財調査事業団

②畠作

- 1950 藤森栄一 「日本原始陸耕の諸問題」『歴史評論』4-4 校倉書房  
 1965 賀川光夫 「縄文時代の農耕」『月刊 考古学ジャーナル』 ニュー・サイエンス社  
 1972 佐々木高明 「日本の焼畑」 古今書院  
 1976 畑井 弘 「奈良・平安時代の焼畑農業」『中世社会の成立』  
 1981 笠原安夫 「埋蔵種子分析による古代水田植生と農耕の起源・伝播・形態の復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年度年次報告書』 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班  
 1986 乙益重隆 「焼畑の源流」『群馬県史』しおり 資料篇二付録 群馬県  
 1988 佐々木高明 「畑作文化の誕生」NHKブックス 日本放送出版協会  
 1991 能登 健 「3畑作農耕」『古墳時代の研究』4 雄山閣  
 1993 川崎純徳 「移動式畑作農耕論～海老沢稔氏の批判に答えて」『婆良岐考古』15 婆良岐考古同人会  
 1996 木村茂光 「ハタケと日本人」中公新書1338 中央公論社

③治水

- 1985 青木伸好・伊藤安男 「灌漑技術と治水開発」『講座 考古地理学』4～村落と開発 学生社  
 1987 八賀 晋 「弥生の水田遺跡に見る開発と治水」『週刊朝日百科 日本の歴史』39～稲と金属器 朝日新聞社  
 1996 鈴木徳雄 「古代北武蔵の開発と集落～埼玉北部の灌漑方式の変化を中心に」『月刊 文化財』398 文化庁文化財保護部・第一法規出版

3. 遺構に関するもの

- 1987 工業普通 「水田と畑」『弥生文化の研究』2～生業 雄山閣  
 1989 巾 隆之 「生産跡～浅間As-C層下の畠跡、榛名Hr-FA層下の畠跡、榛名Hr-FP層下の水田跡、考察」『有馬条里遺跡』Ⅰ～弥生時代～古墳時代の集落と生産跡の調査 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 1990 神戸聖語 「農業と条里・用水路」『歴史考古学の問題点』 近藤出版社  
 工業普通 「水田の考古学」UP考古学選書12 東京大学出版会  
 1997 能登 健・小島敦子 「群馬県の水田・畠跡集成」『研究紀要』14 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 1998 河西克造 「長野県における水田跡調査の現状と問題点～主に埋蔵文化財センターの調査成果から」『第8回東日本の水田跡を考える会 資料集』 東日本の水田跡を考える会

①水田遺構

- 1933 森本六爾 「低地性遺跡と農業」『考古学』増刊号 ～日本原始農業～ 東京考古学会  
 1964 鑑山 猛 「弥生期の水田区画について(上)」『史淵』92  
 1966 鑑山 猛 「弥生期の水田区画について(中)」『史淵』95  
 鑑山 猛 「弥生期の水田区画について(下)」『史淵』96  
 1968 杉原荘介 「登呂遺跡水田址の復原」『案山子』

- 1975 服部昌之 「埋没条里研究ノート」『人文研究』27-1 大阪市立大学文学会
- 1978 稲田孝司 「古代水田遺構の発掘調査」『月刊 文化財』181 文化庁文化財保護部・第一法規出版
- 1979 八賀 晋 「水田区画にみる水稲耕作技術」『日本の黎明』京都国立博物館
- 八賀 晋 「登呂水田の問題点」『歴史と人物』中央公論社
- 1980 群馬県立歴史博物館 「新発見の考古資料 発掘された古代の水田」(特別展図録)
- 鑑山 猛 「弥生期の水田区画について」『九州古文化論叢』吉川弘文館
- 乙益重隆 「古代水田区画雑考」『鑑山猛先生古希記念古文化論叢』鑑山猛先生古希記念論文集刊行会
- 1981 坂井秀弥 「水田址からみた初期稲作技術について～<不定形小区画水田>の一考察」『関西学院考古』7 関西学院大学考古学研究会
- 1982 工楽善通 「西日本の水田遺構」『考古学研究』29-2 考古学研究会
- 高谷好一 「ふたつの小区画水田」『季刊 民族学』19 民族振興会千里事務局
- 平野進一 「北関東西部における弥生から古墳時代の水田遺構について」『考古学研究』29-2 考古学研究会
- 奈良国立文化財研究所編 「条里制の諸問題」Ⅰ 奈良国立文化財研究所
- 1983 遠藤正夫 「青森県での弥生水田発掘の意義」『東アジアの古代文化』36 大和書房
- 正岡陸夫 「弥生時代及び古墳時代の水利と水田～西日本を中心として 上」『古代学研究』98 古代学研究会
- 都出比呂志 「古代水田の二つの型」『展望アジアの考古学～樋口隆泰退官記念』新潮社
- 能登 健・石坂 茂 「赤木山南麓における遺跡群研究」『信濃』35-4 信濃史学会
- 工楽善通 「水田遺構発掘の経過と現状」『地理』28-10 古今書院
- 能登 健 「小区画水田の調査とその意義」『地理』28-10 古今書院
- 松下 勝・高橋 学 「洪水で埋もれた五つの水田址～兵庫淡路島 志知川沖田南遺跡」『地理』28-10 古今書院
- 村越 潔 「弥生期最北の水田址」『地理』28-10 古今書院
- 八賀 晋 「発掘調査からみた古代水田の土壌環境」『地理』28-10 古今書院
- 能登 健 「群馬県下における埋没水田調査の現状と課題」『群馬県史研究』17 群馬県
- 奈良国立文化財研究所編 「条里制の諸問題」Ⅱ 奈良国立文化財研究所
- 石坂 茂 「Ⅰ～Ⅲ期水田における水田面積の統計学的検討」『同道遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1984 奈良国立文化財研究所編 「条里制の諸問題」Ⅲ 奈良国立文化財研究所
- 八賀 晋 「古代の水田遺構とその開発」『東アジア世界における日本古代史講座』2～倭国の形成と古墳文化 学生社
- 藤原宏志 「プラント・オパール分析による水田址の事前探査」『古文化財の自然科学的研究』同朋社
- 藤原宏志 「プラント・オパール分析法とその応用～先史時代の水田址探査」『月刊 考古学ジャーナル』227 ニュー・サイエンス社
- 1985 条里制研究会 「条里制研究」1 条里制研究会
- 伊達宗泰 「水田遺構」『講座 考古地理学』4～村落と開発 学生社
- 松下 勝 「小区画水田に関する二、三の覚書」『兵庫史の研究』
- 1986 条里制研究会 「条里制研究」2 条里制研究会
- 宮脇 薫 「縄文晩期の水田跡」『季刊 考古学』15 雄山閣
- 1987 条里制研究会 「条里制研究」3 条里制研究会
- 松井 健 「水田土壌学の考古学への応用～ケース・スタディと提言」『土壌学と考古学』博友社
- 藤原宏志 「プラント・オパール分析による弥生時代水田遺構の検討」『東南アジア研究』25-1
- 山崎純男 「北部九州における初期水田～開田地の選択と水田構造の検討」『九州文化史研究所紀要』32 九州大学九州文化史研究所施設
- 金田章裕 「古代・中世における水田景観の形成」『稲のアジア史』3 小学館
- 八賀 晋 「水田土壌と立地」『弥生文化の研究』2～生業 雄山閣
- 1988 条里制研究会 「条里制研究」4 条里制研究会
- 山崎純男 「初期水田の立地と構造～北部九州を中心として」『地理学評論』61
- 高谷好一・工楽善通 「水田遺構集成」農耕文化研究振興会
- 1989 条里制研究会 「条里制研究」5 条里制研究会
- 工楽善通 「水田遺構発掘調査への展望」『第四紀研究』27-4 日本第四紀学会
- 松下 勝 「水田遺構と自然科学」『第四紀研究』27-4 日本第四紀学会
- 高橋 学 「埋没水田遺構の地形環境分析」『第四紀研究』27-4 日本第四紀学会
- 矢田 勝 「土壌の検討について」『低湿地遺跡の調査～発掘調査方法の改善研究』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 藤原宏志・佐々木章 「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」『考古学と自然科学』21 日本文化財科学会
- 1990 条里制研究会 「条里制研究」6 条里制研究会
- 宮村典雄 「水田跡の基本的理解～静岡県埋蔵文化財調査研究所における水田跡の検出と認定」『第3回 東日本の水田跡を考える会 資料集』東日本の水田跡を考える会
- 谷藤保彦 「群馬県における埋没水田址の検出と課題」『第3回 東日本の水田跡を考える会 資料集』東日本の水田跡を考える会
- 仙台市農耕文化勉強会 「水田跡の基本的理解～仙台市における水田跡の検出と認定」『第3回 東日本の水田跡を考える会 資料集』東日本の水田跡を考える会
- 河西克造 「古代水田跡調査の実践と問題点」『長野県埋蔵文化財センター紀要』3 長野県埋蔵文化財センター
- 1991 条里制研究会 「条里制研究」7 条里制研究会
- 広瀬和雄 「2 水稲耕作 1 耕地と灌漑」『古墳時代の研究』4 雄山閣
- 江浦 洋 「弥生時代水田の総合的理解のための基礎的作業 1」『大坂文化財研究』2 大阪文化財センター
- 山崎純男 「北部九州における初期水田～開田地の選択と水田構造の検討」『横山浩一先生退官記念論集』Ⅱ～日本における初期

- 弥生文化の成立 同事業会
- 松田隆二 「静岡平野南部における弥生時代後期(登呂層)水田址の検討」『考古学と自然科学』23 日本文化財科学会
- 井上智博 「池島・福万寺遺跡・弥生後期水田面出土遺物の検討」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ』大阪文化財センター
- 1992 条里制研究会 「条里制研究」8 条里制研究会
- 能登 健 「水田研究の一つの方向性～自然災害に対応する社会の動きを調べる」『第4回 東日本の水田跡を考える会 資料集』東日本の水田跡を考える会
- 森岡秀人 「水田址稲株痕跡の評価をめぐって」『考古学論集』4 歴文堂書房
- 江浦 洋 「水田面に残る足跡と農耕具痕～池島・福万寺遺跡における若干の事例」『大阪文化財研究』20周年記念増刊号 大阪文化財センター
- 江浦 洋 「水田跡の調査」『みる きく ふれる～原始・古代のコメ作り』大阪文化財センター
- 1993 山田成洋 「水田面で観察できるもの～足跡・耕作痕・稲(株)痕」『研究紀要』Ⅳ 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 白居直之 「善光寺平の水田遺跡の調査」『月刊 考古学ジャーナル』365 ニュー・サイエンス社
- 1994 江浦 洋 「小区画水田造成技術の変革～六角形小区画水田の提唱」『文化財学論集』文化在学論集刊行会
- 本間元樹 「大阪府池島・福万寺遺跡の弥生水田」『古代の水田跡を考える～帝塚山考古学談話会第500回記念』帝塚山考古学研究所
- 能登 健 「群馬の古墳時代の水田と陸苗代～5世紀代の水田耕地拡大の具体例と田植えの証明」『古代の水田跡を考える～帝塚山考古学談話会第500回記念』帝塚山考古学研究所
- 堅田 直 「弥生水田の老朽化」『古代の水田跡を考える～帝塚山考古学談話会第500回記念』帝塚山考古学研究所
- 岩本次郎 「古代における地割りの展開と稲作」『古代日本の稲作』雄山閣
- 外山秀一 「プラント・オブパルから見た稲作農耕の開始と土地条件の変化」『第四紀研究』33-5 日本第四紀学会
- 1995 鬼頭 剛 「濃尾平野北西部、大毛池田遺跡の古墳時代前期埋没水田について」『財団法人 愛知県埋蔵文化財センター年報』平成6年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 1996 江浦 洋 「河内平野の水田開発～小区画水田から条里型水田へ」『月刊 文化財』398 文化庁文化財保護部・第一法規出版
- 1997 条里制研究会 「空から見た古代遺跡と条里」大明堂
- 間庭 稔 「古墳時代前期の水田跡」『群馬文化』252 群馬県地域文化研究協議会
- 1998 平野吾郎 「水田の風景」『静岡県考古学研究』30 静岡県考古学会
- 齋藤英敏 「試論古代小区画水田」『古文化談叢』41 九州古文化研究会
- 工楽善通 「水田遺跡調査の視点」『第8回東日本の水田跡を考える会 資料集』東日本の水田跡を考える会
- 佐藤甲二 「擬似畦畔Bと連続耕作の水田跡について～仙台市富沢遺跡の事例から」『第8回東日本の水田跡を考える会 資料集』東日本の水田跡を考える会
- 谷藤保彦・壁 伸明 「古代水田の景観と変遷～高崎市滝榎町北遺跡の調査から」『第8回東日本の水田跡を考える会 資料集』東日本の水田跡を考える会
- 深野信之 「弥生時代における水田の変遷」『考古学論集～網干善教先生古希記念』上 同記念会
- 1999 坂口 一 「かつて大開発の時代があった～古墳時代前期の耕地拡大」『創立20周年記念公開考古学講座 資料集』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 齋藤英敏 「水田区画規模と牛馬耕についての一試論～小区画水田から大区画水田」『研究紀要』16 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 深澤敦仁 「古墳時代水田から出土する遺物についての覚書～高崎市・浜川館遺跡での調査成果を通して」『研究紀要』16 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 深澤敦仁 「水田祭祀跡に関する覚書」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズ 同志社大学
- 早野浩二・鬼頭 剛 「伝法寺野田遺跡における弥生時代中期水田跡の調査」『財団法人 愛知県埋蔵文化財センター年報』14～平成10年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 田淵俊雄 「世界の水田日本の水田」農山漁村文化協会
- 2000 中里正憲 「砂町遺跡における大畦畔の調査例」『群馬考古学手帳』10 群馬土器観会
- 2001 齋藤英敏 「小区画水田・極小区画水田の構造～群馬の水田跡から見た古代東アジア」『研究紀要』19～特集 農業開発・災害と考古学 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ②島遺構
- 1998 佐藤甲二 「島の畝間と耕作痕～仙台市域の考古学的事例から」『人類史集報』1998 東京都立大学考古学報告3 漆利用の人類誌調査グループ・飛騨山峡の人類誌調査グループ
- 山田昌久 「佐藤甲二論文へのコメント」『人類史集報』1998 東京都立大学考古学報告3 漆利用の人類誌調査グループ・飛騨山峡の人類誌調査グループ
- 佐藤甲二 「リコメント」『人類史集報』1998 東京都立大学考古学報告3 漆利用の人類誌調査グループ・飛騨山峡の人類誌調査グループ
- 1999 下野敏見 「民具学・民俗学から島遺構を見る」『民俗学から原日本を見る』吉川弘文館
- 井上智博 「島島の考古学的研究～池島・福万寺遺跡の事例の再検討」『光陰如矢～荻田昭次先生古希記念論集』同刊行会
- 2000 日本考古学協会 「シンポジウム「はたけの考古学」～日本考古学協会2000年鹿児島大会資料集1」日本考古学協会
- ③治水・利水遺構
- 1958 牧 隆泰 「日本水利施設進展の研究」土木雑誌社
- 1970 松井 健 「岡山県津島遺跡における弥生時代の灌漑水利用の存在について」『考古学研究』16-4 考古学研究会
- 1980 菅原康夫 「弥生系農業における水利施設の意義と展開(上)/(下)」『古代学研究』92/93 古代学研究会

- 1982 菅原康夫 「初期農業水利の技術的段階について」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ 同志社大学  
 1984 高畑知功 「水路と井堰」『えとのす』24  
 1988 広瀬和雄 「堰と水路」『弥生文化の研究』2～生業 雄山閣  
 1994 木下晴一 「井堰と瀬の祭祀」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅣ 同志社大学  
 1998 東日本埋蔵文化財研究会 「治水・利水遺跡を考える～人は水とどのようにつきあってきたか」第7回東日本埋蔵文化財研究会  
 第Ⅱ分冊 発表要旨・紙上発表編 東日本埋蔵文化財研究会

#### 4. 農具に関するもの

- 1919 広部達三 『農具論』  
 1936 木村靖二 『日本農具発達史』  
 1942 乙益重隆 「上代に於ける農具の意義」『日本文化』76 日本文化協会  
 1948 大場磐雄 「千葉県木更津市菅生遺跡の研究」『上代文化』18 國學院大學考古学会  
 1963 木下 忠 「弥生時代農具の伝統」『物質文化』8 物質文化研究会  
 1964 鋤方貞亮 『農具の歴史』  
 1966 岡本明郎 「弥生時代の生活と社会～労働用具」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社  
 岡本明郎 「工具」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社  
 木下 忠 「農具」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社  
 1967 有光教一 「朝鮮～三国時代の農具と工具」『日本の考古学』Ⅵ 河出書房新社  
 都出比呂志 「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13-3 考古学研究会  
 1974 近藤義郎 「農具のはじまり」『世界考古学大系』2 平凡社  
 1976 飯沼二郎・堀尾尚志 『ものと人間の分化史 農具』法政大学出版局  
 1977 大蔵永常 「農具便利論」『日本農業全集』15 農山漁村文化協会  
 1979 山口直樹 「関東地方土師時代後・晩Ⅰ・晩Ⅱ期における農具について」『駿台史学』45 明治大学駿台史学会  
 農政調査委員会 『日本の鎌・鋤・犁』大日本農会  
 1980 町田 章 「古墳時代農具の問題点」『平城宮跡発掘調査報告』Ⅹ 奈良国立文化財研究所  
 1983 伊井孝雄・山崎貞治 「農業技術史～弥生時代収獲具」『大阪大学附属高等学校池田校舎 研究紀要』15  
 1984 川越哲志 「弥生時代農具鉄器化の諸段階」『たたら研究』26 たたら研究会  
 1985 田辺 悟 「民具の分類」『民具研究ハンドブック』雄山閣  
 乙益重隆 「千把以前～脱穀の歴史」『論集 日本原史』吉川弘文館  
 1986 川原喜久治 「農具の名称に関して」『研究紀要』3 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 町田 章 「石から鉄への技術革新」『日本古代史』5 豊饒の大地 集英社  
 1988 渡辺 武 「中国古代犁耕田再考～漢代画像に見える二つのタイプの犁をめぐって」『古代文化』40-11 古代学協会  
 山田隆一 「近畿弥生社会における鉄器化の実態について」『網干善教先生華甲記念考古学論集』網干善教先生華甲記念会  
 黒沢 直 「西日本における弥生時代農具の変遷と展開」『日本における稲作技術の起源と展開～日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム資料集』学生社  
 篠原 徹 「苗族の穂摘具」『考古学と関連科学～鎌木義昌先生古希記念論集』同刊行会  
 潮見 浩 「図解 技術の考古学」有斐閣  
 1989 都出比呂志 「農具鉄器化の諸段階」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店  
 宋 湛慶 「中国古代の農具の発展とそのすぐれた伝統」『中国農業の伝統と現代』農山漁村文化協会  
 1990 朴 虎錫 「韓国の在来農具」農業機械化研究所  
 河野通明 「馬鋤の伝来～古墳時代の日本と江南」『列島の文化史』7 日本エディターズスクール出版部  
 1991 上原真人 「稲作の道具とまつり」『季刊 考古学』37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣  
 合田茂伸 「農具の変遷～収獲と脱穀の道具」『季刊 考古学』37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣  
 黒崎 直 「2 水稲耕作 4 農具」『古墳時代の研究』4 雄山閣  
 古瀬清秀 「農具」『古墳時代の研究』8 雄山閣  
 下條信行 「農具の変遷」『弥生文化～日本文化の源流をさぐる』大阪府立弥生文化博物館  
 河野通明 『日本農具史の基礎的研究』  
 1993 高橋 護 「農具の成立に関する問題点～打製石庖丁と犁」『岡山県立博物館研究報告』14 岡山県立博物館  
 1994 大谷弘幸 「千葉県における農具の変遷」『古代における農具の変遷 発表要旨集』静岡県埋蔵文化財研究所  
 上原真人 「西日本の農具の変遷」『古代における農具の変遷 発表要旨集』静岡県埋蔵文化財研究所  
 山田昌久 「関東地方北部における農具の変遷」『古代における農具の変遷 発表要旨集』静岡県埋蔵文化財研究所  
 1995 黒崎 直 「農具研究の諸課題」『展望考古学～考古学研究会40周年記念論文集』考古学研究会  
 1996 黒崎 直 「古代の農具」日本の美術357 至文堂  
 下野敏見 「民具学・民俗学から遺跡を見る」『鹿兒島民具』12 鹿兒島民具学会  
 1997 田崎博之 「農具から見た長江下流域の農耕文化と弥生文化」『福岡からアジアへ』5～長江に見る弥生の源流 西日本新聞社  
 瀬田田佳男 「石から鉄へ～鉄器化の評価をめぐって」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究会発表要旨集 鉄器文化研究会  
 1999 森井貞雄 「コメ作りの道具」『卑弥呼の食卓』吉川弘文館  
 2001 大田区立郷土博物館 『ものづくりの考古学～原始・古代の人びとの知恵と工夫』大田区立郷土博物館

#### ①鉄製農具

- 1920 後藤守一 「上代における鎌」『考古学雑誌』11-1 日本考古学協会
- 1929 両角守一 「上代における鎌」『人類学雑誌』44-21 東京人類学会
- 1933 両角守一 「再び上代における鎌について」『考古学』増刊号 ～日本原始農業～ 東京考古学会
- 1953 西井俊蔵・中村忠次郎 「日本鎌に関する研究」『農林省四国農業試験場特別報告』1 農林省四国農業試験場
- 1956 岡崎 敬 「日本における初期鉄製品の諸問題～沓岐ハルノツジ、カラカミ遺跡発見資料を中心として」『考古学雑誌』42-1 日本考古学協会
- 田辺昭三 「生産力発展の諸段階～弥生時代における鉄器をめぐって」『私たちの考古学』11
- 1958 岡本明郎 「鉄をめぐる問題」『私たちの考古学』16
- 1960 近藤義郎 「鉄製工具の出現」『世界考古学大系』2 平凡社
- 1961 岡本明郎 「弥生時代における金属生産の技術的・社会的諸問題」『古代吉備』4
- 原田大六・森貞次郎 「九州出土石廬丁形鉄器の撤回」『考古学研究』7-4 考古学研究会
- 1968 川越哲志 「鉄及び鉄器生産の起源をめぐって」『たたら研究』14 たたら研究会
- 野上文助 「古墳時代における鉄及び鉄器生産の諸問題」『考古学研究』15-2 考古学研究会
- 松本正信 「U字形鋤(鋤)先論」『考古学研究』15-4 考古学研究会
- 1971 土井義夫 「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」『物質文化』18 物質文化研究会
- 1973 窪田蔵郎 「鉄の考古学」考古学選書9 雄山閣
- 小田富士雄 「貝廬丁と鉄廬丁～五島列島民具探訪録」『考古学論叢』I
- 1974 橋口達也 「初期鉄製品をめぐる二、三の問題」『考古学雑誌』60-1 日本考古学協会
- 古瀬清秀 「古墳時代鉄製工具の研究～短冊形鉄斧を中心として」『考古学雑誌』60-2 日本考古学協会
- 伊達祥子 「律令社会における鉄鋤の生産と流通について」『寧楽史苑』20
- 藤田 等 「鉄器の出現は何を物語っているか」『たたら研究』14 たたら研究会
- 村上英之助 「弥生時代鉄生産の始期について」『たたら研究』14 たたら研究会
- 寺沢(炭田)知子 「“手鎌”についての雑考」『古代学研究』74 古代学研究会
- 木下 忠 「古代の鎌」『農業』107 大日本農会
- 1975 川越哲志 「弥生時代鉄製工具の研究(I)～板状鉄斧について」『広島大学文学部紀要』33 広島大学文学部
- 甲本真之 「鎌による収穫法」『えとのす』3
- 1976 高橋一夫 「製鉄遺跡と鉄製農具」『考古学研究』22-3 考古学研究会
- 土井義夫 「鉄性能工具研究ノート～古代の竪穴住居址出土資料を中心に」『季刊 どんめん』10 JICC出版局
- 1977 佐々木和博 「半月形鉄製品について～住居址出土例を中心に」『史観』8
- 川越哲志 「弥生時代の鉄製収穫具について」『考古論集～松崎寿和先生退官記念論集』松崎寿和先生退官記念事業会
- 1979 川越哲志 「金属器の普及と性格」『日本考古学を学ぶ』2～原始・古代の生産と政治 有斐閣選書 有斐閣
- 1980 柳田康雄 「青銅製鋤先」『鑑山猛先生古希記念古文化論叢』鑑山猛先生古希記念論文集刊行会
- 川越哲志 「弥生時代の鑄造鉄斧をめぐって」『考古学雑誌』65-4 日本考古学協会
- 1982 東 潮 「東アジアにおける鉄斧の研究」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』
- 片岡宏二 「弥生時代の鉄鎌について」『みくに』2 小郡考古学研究会
- 1983 橋口達也 「ふたたび初期鉄製品をめぐる二、三の問題」『日本製鉄史論集』たたら研究会
- 川越哲志 「弥生時代の鉄刃農耕具」『日本製鉄史論集』たたら研究会
- 1984 橋口達也 「弥生文化と鉄」『季刊 考古学』8 雄山閣
- 下條信行 「東アジアにおける鉄器の出現とその波及」『東アジア世界における日本古代史講座』2～倭国の形成と古墳文化 学生社
- 1985 鶴間正昭 「武蔵国における鉄鎌の型式分類とその編年の予察」『法政考古学』10
- 寺沢知子 「鉄製穂摘具」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣
- 川越哲志 「鉄器の生産」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣
- 松井和幸 「鉄鎌」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣
- 松井和幸 「鉄の鋤・鋤先」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣
- 松浦宥一郎 「凹字形金属製農具について」『日本史の黎明～八幡一郎博士頌寿記念論文集』六興出版
- 岩崎卓也 「鉄製鋤・鋤先の周辺」『日本史の黎明～八幡一郎博士頌寿記念論文集』六興出版
- 藤井純夫 「鎌を持つ手の左右性」『弥生』15 東京大学考古学研究会談話会
- 松井和幸 「日本古代の鉄製鋤先、鋤先について」『考古学雑誌』72-3 日本考古学協会
- 1986 朝岡康二 「第3章 鎌と鋤と鋸」『鉄製農具と鍛冶の研究』法政大学出版局
- 1988 野崎 進 「古代の鉄製U字型鋤・鋤先をめぐって」『古代集落の諸問題～玉口時雄先生古希記念考古学論集』
- 飯塚武司 「後期古墳社会における鉄器所有形態の再検討」『法政考古学』13
- 卜部行弘 「鉄鋤(鋤)先小考」『網干善教先生華甲記念考古学論集』同刊行会
- 1989 中田 英 「『左鎌』について」『國學院大學考古学資料館紀要』5 國學院大學考古学資料館
- 1990 松井和幸 「日本と朝鮮半島の鉄と鉄製品」『季刊 考古学』33 雄山閣
- 1991 白 雲翔 「弥生時代の鉄製刃先とそれをめぐる諸問題～弥生時代の鉄刃先及相關問題」『筑波大学 先史学・考古学研究』2 筑波大学
- 1992 中山正典 「稲刈り鎌についての民具学的検討」『民具研究』99
- 1994 古庄浩明 「古代における鉄製農耕具の所有形態～6世紀から10世紀の南関東を中心にして」『考古学雑誌』79-3日本考古学協会
- 寺沢 薫 「穂刈りから根刈りへ」『古代における農具の変遷 発表要旨集』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 1996 大谷弘幸 「穂摘み具の変遷と稲の穂首刈り」『研究連絡誌』46 千葉県文化財センター

- 大村 直 「鉄製農具の組成化」『史館』28 史館同人  
 1997 岩永省三 『金属器登場』歴史発掘7 講談社  
 大村 直 「南関東地方における鉄器の普及過程」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究会発表要旨集  
 鉄器文化研究会

②木製農具

- 1913 田中作治郎 「本邦の古代に於ける須岐、久波及び加良須岐の区別に就きて(一)(二)」『考古学雑誌』4-5 日本考古学協会  
 1939 大場磐雄 「上総菅生遺跡の一考察」『考古学雑誌』29-3 日本考古学協会  
 1941 田中作治郎 「我が国の犁の起源及び明治維新迄の発達経路に就いて」『農業機械学会誌』5-3  
 1942 小林行雄・末永雅雄 「木器及び植物製品」『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学考古学研究所報告 第16冊  
 1949 関野 克 「木工具の考察」『登呂』  
 1954 関野 克 「木材の加工法 補遺」『登呂 本編』  
 1960 白木原和美 「クワヤスキについての研究ノート」『歴史評論』118 校倉書房  
 1964 潮田鉄雄 「千葉県の田下駄」『民俗学研究』29-2  
 1966 潮田鉄雄 「続・千葉県の田下駄」『民俗学研究』31-1  
 1967 潮田鉄雄 「千葉県の田下駄～分布と仕様」『民俗学研究』32-1  
 潮田鉄雄 「田下駄図集～千葉県篇」(自主コピー刊行)  
 1968 木下 忠 「おおあし～代踏み用田下駄の起源と機能」『民具論集』1 慶友社  
 潮田鉄雄 「田下駄の変遷」『民具論集』1 慶友社  
 潮田鉄雄 「茨城県の田下駄」『物質文化』12 物質文化研究会  
 1970 黒崎 直 「木製農具の性格と弥生社会の動向」『考古学研究』16-3 考古学研究会  
 1974 中村一夫 「様式別に整理した弥生木製農具～畿内地方を中心として」『古代学研究』74 古代学研究会  
 町田 章 「木工技術の展開」『古代史発掘』4～稲作の始まり 講談社  
 1975 木下正史 「古代脱穀具の系譜」『日本文化史学への提言』弘文堂  
 木下正史 「古代の犁」『農業』109 大日本農会  
 1976 根木 修 「木製農具の意義」『考古学研究』22-4 考古学研究会  
 黒崎 直 「古墳時代の農具～ナスビ形着柄鋤を中心として」『研究論集』Ⅲ 奈良国立文化財研究所  
 中村俊亀智 「シロフミ田下駄の諸系列～用具論的に」『国立民族学博物館研究報告』1-1 国立民族学博物館  
 1978 鈴木隆夫 「着柄鋤の出土」『静岡県考古学研究』1 静岡県考古学会  
 岩井宏貴 「曲物の用途」『大阪市立博物館研究紀要』大阪市立博物館  
 1979 松本 昶・堤 寿一 「遺跡から出土した木材および木製品の研究」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学～昭和53年度年次報告書』15 同朋社  
 町田 章 「木器の生産と役割」『日本考古学を学ぶ』2～原始・古代の生産と政治 有斐閣選書 有斐閣  
 1980 町田 章 「SD6030出土の木製品の検討」『平城宮跡発掘調査報告』X 奈良国立文化財研究所  
 1982 須藤 護 「暮らしの中の木器」ぎょうせい  
 山田昌久 「木工技術の変化と特徴的な着柄鋤・鋤について」『日高遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書5  
 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 1983 島倉巳三郎 「木質遺物にみる技術と生活の知恵」大阪書籍  
 埋蔵文化財研究会第14回研究会事務局 「木製農具について」埋蔵文化財研究会第14回研究会資料 埋蔵文化財研究会  
 山田昌久 「木製品」『縄文文化の研究』雄山閣  
 奈良国立文化財研究所 「木器集成図録」～近畿古代編 奈良国立文化財研究所  
 1984 松本 昶 「北部九州の遺跡から出土した木材及び木製品～主として弥生時代の鋤について」『古文化財の自然科学的研究』同朋社  
 山口譲治 「木製品にみられる鉄製品使用について」『弥生時代から古墳時代初期における鉄製品をめぐる』埋蔵文化財研究会  
 第16回研究会発表要旨・資料集 埋蔵文化財研究会  
 成田寿一郎 「木の匠～木工技術史」鹿島出版会  
 1985 木下 忠 「日本農耕技術の起源と伝統」考古学選書24 雄山閣  
 渡辺 誠 「ヨコヅチの考古・民具学的研究」『考古学雑誌』70-3 日本考古学協会  
 兼康保明 「田下駄」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣  
 黒崎 直 「農具 くわとすき」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣  
 工楽善通 「木製穂摘具」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣  
 町田 章 「木器の生産」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣  
 1986 山田昌久 「新保遺跡出土木製品・加工材」『新保遺跡』I～弥生・古墳時代大溝編 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査  
 報告書10 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 1987 井之本泰 「ウワセ～代踏み田下駄」『京都府埋蔵文化財論集』1 京都府埋蔵文化財団  
 応地利明 「犁の系譜と稲作」『稲のアジア史』1 小学館  
 潮田鉄雄 「田下駄の変遷」『物質文化』物質文化研究会  
 黒沢 直 「クワとスキ」『弥生文化の研究』2～生業 雄山閣  
 1988 山口譲治 「福岡における弥生木製農具」『月刊 考古学ジャーナル』292 ニュー・サイエンス社  
 木村有作 「東海地方出土の弥生時代木製品について」『月刊 考古学ジャーナル』292 ニュー・サイエンス社  
 宮原晋一 「石斧、鉄斧のどちらで加工したか～弥生時代の木製品に残る加工痕について」『弥生文化の研究』10～研究の歩み

- 雄山閣
- 1989 樋上 昇 「木製農耕具の地域色とその変遷～勝川遺跡出土資料を中心として」『財団法人 愛知県埋蔵文化財センター年報』4  
～昭和63年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 1990 吉田秀則 「弥生時代～古墳時代の木製農耕具について～滋賀県下の動向」『滋賀県文化財保護協会紀要』4 滋賀県文化財保護協会  
樋上 昇 「弥生時代中期における木製農耕具の器種組成について」『岡島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告14 愛知県埋蔵文化財センター
- 1991 山口譲治 「弥生文化成立期の木器」『横山浩一先生退官記念論集』Ⅱ～日本における初期弥生文化の成立 同事業会  
上原真人 「農具の変遷～鋤と鋏」『季刊 考古学』37～特集 稲作農耕と弥生文化 雄山閣  
河野通明 「クワとスキの変遷～Part①～③」『弥生文化～日本文化の源流をさぐる』大阪府立弥生文化博物館  
渡辺 誠 「木製品の民具学的研究」『月刊 考古学ジャーナル』335 ニュー・サイエンス社
- 1992 荒井 格 「東北地方の木製農耕具～古墳時代以前の様相」『加藤稔先生還暦記念・東北文化論のための先史学歴史学論集』
- 1993 中山正典 「曲物の製作技法と形態」『生活用具と民具』雄山閣  
秋山浩三 「『大足』の再検討」『考古学研究』40- 考古学研究会  
樋上 昇 「木製農耕具研究の一視点～ナスビ形農耕具の出現から消滅まで」『考古学フォーラム』3  
樋上 昇 「弥生・古墳時代の木製農耕具～春日井市勝川遺跡のナスビ形農耕具から」『教育愛知』40-12 愛知県教育委員会
- 1994 中山正典 「静岡県における弥生時代・古墳時代の木製農耕具」『瀨名遺跡』Ⅲ(遺物編Ⅰ)本文編～静岡バイパス(瀨名地区)埋蔵文化財調査報告書3 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告47 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
中山正典 「田下駄の形態変遷と機能」『瀨名遺跡』Ⅲ(遺物編Ⅰ)本文編～静岡バイパス(瀨名地区)埋蔵文化財調査報告書3 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告47 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
樋上 昇 「耕作のための道具～ナスビ形農具を中心に」『季刊 考古学』47 雄山閣
- 1995 小川浩一 「五所四反田遺跡検出の木製農耕具について」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅲ 市原市文化財センター
- 1996 大村 直 「鉄製農耕具の組成比」『史館』28 史館同人
- 1999 飯塚武司 「東日本における古墳出現期の木工集団(上/下)」『古代文化』51-5/6 古代学協会
- 2000 穂積裕昌 「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について～三重県内の木器出土遺跡からの素描」『研究紀要』9～特集 見えの生産遺跡 三重県埋蔵文化財センター  
樋上 昇 「『木製農耕具』ははたして『農耕具』なのか～新たな機能論的研究の展開を考える」『考古学研究』47-3 考古学研究会  
樋上 昇 「東海系曲柄鋏再論」『考古学フォーラム』12  
樋上 昇・永井邦仁 「豊田地区出土の木製品について」『研究紀要』1 愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター  
山崎頼人 「木製穂積み具の研究(上)～木製穂摘具における二者」『大阪文化財研究』19 大阪文化財センター
- 2001 廣瀬英典 「古代木製農具の変遷に関する一考察」『Mie history』12 三重歴史文化研究会

## ③石製農耕具

- 1889 江藤正澄 「石庖丁」『東京人類学会雑誌』4-37 東京人類学会  
若林勝邦 「石庖丁」『東京人類学会雑誌』4-39 東京人類学会
- 1934 樋口清之 「一種の石庖丁様打製石器」『史前学雑誌』6-5  
森本六爾 「石庖丁の諸形態と分布」『考古学評論』1-1 東京考古学会  
山内清男 「稲の刈り方」『ドルメン』3-2  
山内清男 「石庖丁の意義」『ドルメン』3-11
- 1937 小林行雄 「石庖丁」『考古学』8-7
- 1941 八幡一郎 「石鋏」『考古学雑誌』31-3 日本考古学協会
- 1954 近藤義郎・岡本明郎 「石庖丁の歴史的意義」『考古学研究』29 考古学研究会
- 1964 藤田 等 「大陸系磨製石器～とくに磨製石鎌について」『日本考古学の諸問題』
- 1967 山内清男 「貝庖丁と石庖丁」『先史考古学論文集』4  
賀川光夫 「縄文晩期農耕の一問題～いわゆる扁平石器の用途」『考古学研究』13-4 考古学研究会  
松本正信・加藤史郎 「手斧鋏考」『考古学研究』13-9 考古学研究会
- 1974 関 俊彦 「関東地方の石庖丁について」『古代学研究』74 古代学研究会  
下條信行 「石器の製作と技術」『古代史発掘』4～稲作の始まり 講談社  
酒井龍一 「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』20-2 考古学研究会
- 1975 下條信行 「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』21-1  
下條信行 「木製石器よりみた弥生時代前期の生産体制」『九州考古学の諸問題』
- 1977 佐原 眞 「石斧論～横斧から縦斧へ」『考古学論集～松崎寿和先生六十三歳論文集』松崎寿和先生退官記念事業会  
下條信行 「九州における大陸系磨製石斧の生成と展開」『史淵』114
- 1978 立平 進 「弥生時代、片刃石斧の実態」『物質文化』31 物質文化研究会  
小林公明 「石庖丁の収獲技術」『信濃』30-1 信濃史学会
- 1980 下條信行 「東アジアにおける外湾刃石庖丁の展開」『鑑山猛先生古希記念古文化論叢』鑑山猛先生古希記念論文集刊行会  
上村佳典 「石庖丁製作における工具について」『地域相研究』9
- 1981 芹沢長介・梶原 洋 「実験使用痕研究とその可能性」『考古学と自然科学』14 日本文化財科学会  
梶原 洋・阿子島香 「頁岩製石器の実験使用痕研究～ポリッシュを中心とした機能推定の試み」『考古学雑誌』67-1 日本考古学協会
- 1982 佐原 眞 「石斧再論」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』  
松井和章 「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐる」『考古学雑誌』68-2 日本考古学協会

- 1983 下條信行 「弥生時代石器生産体制の評価」『古代学論叢～角田文衛博士古希記念』  
 蜂谷晴美 「終末期石器の性格とその社会」『古文化論叢～藤沢一夫先生古希記念』  
 立平 進 「弥生時代、片刃石斧の実態(再考)」『人間、遺跡、遺物』
- 1984 松尾奈子 「弥生時代の磨製石鎌について」『山口大学考古学研究報』3 山口大学  
 金子浩之 「石の刃の威力」『縄文から弥生へ』 帝塚山考古学研究所  
 東北大学使用痕研究チーム 「石器の使用痕分析法に関する実験研究」『古文化財の自然科学的研究』 同朋社
- 1985 乙益重隆 「有肩打製石器小考」『日本史の黎明～八幡一郎博士頌寿記念考古学論集』 六興出版  
 須藤 隆・阿子島香 「東北地方の石庖丁」『日本考古学協会第5回総会研究発表要旨』 日本考古学協会  
 神村 透 「石製耕作具」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣  
 水島稔夫 「石鎌」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣
- 1986 乙益重隆 「石庖丁研究の現状と展望」『月刊 考古学ジャーナル』260 ニュー・サイエンス社  
 山田しょう 「使用痕研究の現状と進路」『歴史』57  
 下條信行 「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開」『九州文化史研究所紀要』31 九州大学九州文化史研究施設
- 1987 武末純一 「石庖丁の計測値～北九州市域出土例を中心に」『東アジアの考古と歴史～岡崎敬先生退官記念論集』 同朋社  
 下條信行 「東アジアにおける擦切技法について」『東アジアの考古と歴史～岡崎敬先生退官記念論集』 同朋社
- 1988 熊野正也・黒沢 浩 「関東・東北の弥生石器」『月刊 考古学ジャーナル』 ニュー・サイエンス社  
 下條信行 「日本石庖丁の源流～弧背弧刃系石庖丁の展開」『日本民族・文化の生成～永井昌文教授退官記念論文集』 同刊行会
- 1989 野本孝明 「東日本の磨製石庖丁」『國學院大學考古学資料館要覧』5 國學院大學考古学資料館  
 御堂島正 「有肩扇状石器の使用痕分析～南信州弥生時代における打製石器の機能」『古代文化』41-3 古代学協会  
 御堂島正 「「抉入打製石庖丁」の使用法～南信州弥生時代における打製石器の機能」『古代文化』41-6/8 古代学協会
- 1990 御堂島正 「「横型石庖丁」の使用痕分析～南信州弥生時代における打製石器の機能」『古代文化』42-1 古代学協会  
 佐藤由紀男 「駿河湾周辺における弥生系磨製石斧の生産と流通」『考古学論究』7  
 麻生敏隆 「弥生時代の石製農具～石鎌と石庖丁」『研究紀要』7 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1991 御堂島正 「磨製石庖丁の使用痕分析、磨製石庖丁～南信州弥生時代における磨製石器の機能」『古代文化』43-11 古代学協会  
 平野進一・相京健史. 「群馬県出土の磨製石庖丁」『群馬県立歴史博物館研究紀要』12 群馬県立歴史博物館  
 平井 勝 「弥生時代の石器」考古学ライブラリー64 ニュー・サイエンス社  
 下條信行 「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開～宇木汲田貝塚1984年度調査出土石器の報告を兼ねて」『横山浩一先生退官記念論集』Ⅱ～日本における初期弥生文化の成立 同事業会  
 下條信行 「大型石庖丁について」『愛媛大学人文学会創立15周年記念論集』 愛媛大学人文学会
- 1992 瀬田田佳男 「近畿地方の石斧の鉄器化」『弥生文化博物館研究報告』1 大阪府立弥生文化博物館  
 埋蔵文化財研究会 「弥生の石器～その始まりと終わり」第31回埋蔵文化財研究会 発表要旨・追加資料 埋蔵文化財研究会
- 1993 合田茂伸 「近畿地方出土の石庖丁について」『考古論集～潮見浩先生退官記念論文集』 同事業会  
 斎野裕彦 「弥生時代の大形直縁刃石器(上)」『弥生文化博物館研究報告』2 大阪府立弥生文化博物館
- 1994 石川日出志 「東日本の大陸系磨製石斧～木工具と穂摘み具」『考古学研究』41-2 考古学研究会  
 斎野裕彦 「弥生時代の大形直縁刃石器(下)」『弥生文化博物館研究報告』3 大阪府立弥生文化博物館
- 1996 斎野裕彦 「板状石器の形態と使用痕」『中在家南遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書213 仙台市教育委員会
- 1997 安藤広道 「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館紀要』2 横浜市歴史博物館  
 馬場伸一郎 「弥生時代の石器製作技術～横浜市大塚遺跡を例に」『利根川』18 利根川同人  
 弥生時代プロジェクトチーム 「弥生石器の基礎的研究(1)」『研究紀要 かながわの考古学』3 神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団
- 1998 弥生時代プロジェクトチーム 「弥生石器の基礎的研究(2)」『研究紀要 かながわの考古学』4 神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団  
 安藤広道 「南関東地方における石製利器の終焉をめぐる」『月刊 考古学ジャーナル』433 ニュー・サイエンス社  
 丑野 毅 「関東地方の打製石庖丁について～用土・平遺跡 補遺」『堅田直先生古希記念論文集』 同刊行会
- 1999 斎野裕彦・松山 聡. 「大型石庖丁の使用痕分析」『古文化談叢』42 九州古文化研究会
- 2000 竹内英昭 「伊勢地方の弥生中期社会のフラグメント～石斧製作遺跡の発見」『研究紀要』9～特集 三重の生産遺跡 三重県埋蔵文化財センター
- 2001 田口明子 「弥生時代の大形打製石器は農耕具か～山梨県出土事例をもとに」『研究紀要』17 山梨県立考古学博物館・山梨県埋蔵文化財センター  
 馬場伸一郎 「南関東弥生中期の社会(上/下)～石器石材の流通と石器製作技術を中心に」『古代文化』53-5/6 古代学協会

④その他農耕具

- 1970 神沢勇一 「貝庖丁に関する二、三の考察」『神奈川県立博物館研究報告書』1 神奈川県立博物館  
 1981 神沢勇一 「貝庖丁の再検討」『神奈川県立博物館研究報告書』9 神奈川県立博物館  
 1985 神沢勇一 「貝製穂摘み具」『弥生文化の研究』5～道具と技術1 雄山閣  
 1988 佐々木長生 「奥会津の穂摘み具」『山と民具』日本民具学会論集2 雄山閣  
 1995 谷口 肇 「貝庖丁への疑義」『古代』99

5. 作物に関するもの

- 1933 明峰正夫 「日本における作物の種類～補遺第3」『農業及び園芸』8-3  
 1943 前川文夫 「史前帰化植物について」『植物分類地理』13



- 1966 中尾佐助 「栽培植物と農耕の起源」岩波新書 岩波書店  
 1972 笠原安夫 「山野草、人里植物、帰化植物、雑草及び作物の種類群との相互関係」『雑草研究』12  
 1975 渡辺忠世 「作物生産に関する境界領域分野の総合的研究」  
 1977 渡辺忠世 「食用作物学概論」農山漁村文化協会  
 笠原安夫 「発掘種子から見た農耕形態」『季刊 どんめん』13 JICC出版局  
 1979 松下典之 「出土遺物と現存する野生および栽培植物との関連性について」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和53年度年次報告書』15 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班  
 笠原安夫 「古代遺跡の発掘植物とくに種子から見た利用植物と農耕形態の復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和53年度年次報告書』15 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班  
 1981 寺沢 薫 「弥生時代植物質食料の基礎的研究」『考古学論攷』榎原考古学研究所紀要5 奈良県立榎原考古学研究所  
 小山修三・松山利夫 「『斐太後風土記』による食料資源の計量的研究」『国立民族学博物館研究報告』6-3 国立民族学博物館  
 1984 笠原安夫 「埋蔵種子分析による古代農耕の検証(2)～菜畑遺跡の作物と雑草の種類および渡来経路」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』同朋社  
 木越邦彦・恒内信子 「植物体を作る炭素の起源」『古文化財の自然科学的研究』同朋社  
 1986 甲元眞之 「弥生人の食料」『季刊 考古学』14～特集 弥生人は何を食べたか 雄山閣  
 笠原安夫 「栽培植物の伝播～日本海をめぐる文明史」『季刊 考古学』15 雄山閣  
 1987 笠原安夫 「作物及び田畑雑草種類」『弥生文化の研究』2～生業 雄山閣  
 1991 寺沢 薫 「弥生時代の植物質食料」『各地域における米づくりの開始～第30回埋蔵文化財研究集会』第三分冊 発表要旨・追加資料集 埋蔵文化財研究会  
 1996 相京健史 「食べられる植物の資料集成<その1>～群馬県内の弥生時代遺跡出土種実からみた植物」『生産の考古学～倉田芳郎先生古希記念』同記念会  
 1998 廣川達麻 「縄文時代における野生植物の栽培化～静岡県周智郡森町 坂田北遺跡の調査から」『静岡県考古学研究』30 静岡県考古学会  
 吉崎昌一 「穀物 異なる穀物を携えた様々な人びとが日本列島にやってきた」『逆転の日本史～日本人のルーツここまでわかった』洋泉社MOOK 洋泉社  
 榎原功一 「炭化種実から探る食生活 ～古代～中世を中心に」『遺跡・異物から何を讀みとるか』Ⅱ～食の復元  
 1999 宮野淳一 「発掘された弥生の食材」『卑弥呼の食卓』吉川弘文館  
 辻誠一郎 「歴史資料としての植物遺体」『考古学と歴史学～慶応大学セミナー』吉川弘文館  
 2001 弥生時代研究プロジェクトチーム 「弥生時代の食用植物～炭化種子及び種子圧痕について」『研究紀要～かながわの考古学』6 かながわ考古学財団

①イネ

- 1928 加藤茂苞 「雑種植物の結実度より見たる稲品種の類縁について」『九大農芸誌』3 九州大学農学部  
 1967 盛永俊太郎 「アジアの栽培稲の生まれ故郷はどこか」『農業』990 大日本農会  
 1968 浜田秀男 「日本稲の系統」『日本民族と南方文化』平凡社  
 1971 佐藤敏也 「日本の古代米」考古学選書1 雄山閣  
 1974 嵐 嘉一 「日本赤米考」雄山閣  
 中村 純 「イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として」『第四紀研究』13 日本第四紀学会  
 1975 星川清親 「解剖図説 イネの成長」農山漁村文化協会  
 1977 中村 純・鈴木功夫 「稲科花粉の堆積に関する基礎的研究、稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究 中間報告」  
 1982 佐藤敏也 「弥生時代の米」『農耕文化と古代社会』歴史公論ブックス10 雄山閣  
 1984 星川清通 「我国の古代稲作についての作物学的な観察と二、三の実験」『古文化財の自然科学的研究』同朋社  
 中村 純 「古代農耕とくに稲作の花粉分析学的研究」『古文化財の自然科学的研究』同朋社  
 1985 大塚昌彦 「群馬県渋川市中村遺跡におけるミニ水田出土のイネモミ資料」『考古学研究』31-4 考古学研究会  
 1986 佐藤敏也 「日本稲の系譜」『論争学説 日本の考古学』4～弥生時代 雄山閣  
 田崎博之 「弥生時代の食料 コメ」『季刊 考古学』14～弥生人は何を食べたか 雄山閣  
 1987 佐藤敏也 「弥生のイネ」『弥生文化の研究』2～生業 雄山閣  
 梁瀬昭彦 「米の調理法と食べ方」『弥生文化の研究』2～生業 雄山閣  
 1989 佐藤敏也 「中国先史のイネ～探採ノート」『月刊 考古学ジャーナル』308 ニュー・サイエンス社  
 1990 佐藤洋一郎 「日本におけるイネの起源と伝播に関する一考察」『考古学と自然科学』22 日本文化財科学会  
 中川原捷洋 「遺伝学からみた稲の系譜」『稲～その源流への道<中国江南から吉野ヶ里>』東アジア文化交流史研究会  
 中山誠二・外山秀一 「プラント・オパールから中部日本の稲作をさぐる」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』10 帝京大学山梨文化財研究所  
 春成秀爾 「縄文が弥生か～荒海貝塚から稲作の証拠」『歴博』39 国立歴史民俗博物館  
 藤原宏志 「プラント・オパール分析(形状解析法)による稲系統の歴史の変遷に関する研究」『考古学雑誌』75-3 日本考古学協会  
 1993 渡辺忠世 「稲の大地」小学館  
 西谷 大 「日本の稲と稲作の系譜をさぐる」『新視点 日本の歴史』1～原始編 新人物往来社  
 1994 佐原 眞 「揺れに揺れる古代米」『VESTA』18 味の素食の文化センター  
 1995 和佐野喜久生 「東アジアの古代稲と稲作起源」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化～文部省科学研究費による国際学術研究』佐賀大学農学部  
 藤原宏志 「稲作起源を求めて」『古代に挑戦する自然科学』第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会

- 佐藤洋一郎 「稲とはどんな植物か～コメ再考」 三一書房  
 1998 藤原宏志 「稲作の起源を探る」岩波新書554 岩波書店  
 1999 森井貞雄 「イネの系譜」[卑弥呼の食卓] 吉川弘文館  
 佐藤洋一郎 「遺伝子が明かすイネのルーツ」[卑弥呼の食卓] 吉川弘文館  
 佐藤洋一郎 「日本の稲 ～その起源と伝播」[新書の研究] 4. 弥生文化と祭祀 にひなめ研究会・第一書房  
 茨城県農業総合センター 「水稻の栽培密度が収量・品質に及ぼす影響」[平成10年度農業研究所試験成績概要書] 茨城県  
 2001 松岡有希子 「赤米栽培～復元水田における研究」[月刊 考古学ジャーナル] 479 ニュー・サイエンス社

②雑穀類

- 1964 亀田隆之 「作物～雑穀栽培」[産業史 I] 大系日本史叢書10 山川出版社  
 福留照尚 「農作物～雑穀・余剰を生み出す雑穀」[産業史 I] 大系日本史叢書10 山川出版社  
 1977 鏑方貞亮 「日本古代穀物史の研究」 吉川弘文館  
 1988 坂本寧男 「雑穀のきた道」NHKブックス546 日本放送出版協会  
 1992 吉崎昌一 「古代雑穀の検出」[月刊 考古学ジャーナル] 355 ニュー・サイエンス社  
 1996 吉崎昌一 「東はヒエ、西はイネ～縄文時代の栽培植物」[歴史街道] 10

③畠作物

- 1964 大石直正 「作物～畠地の作物・畠作法の概観」[産業史 I] 大系日本史叢書10 山川出版社  
 1974 鳥倉巳三郎 「古代遺跡から出るソバの花粉」[古代学研究] 72 古代学研究会  
 1980 山田悟郎 「縄文晩期層のソバ属花粉」[季刊 どんめん] 27 J I C C 出版局  
 松下典之 「本邦各地の遺跡から出土したウリ科栽培植物の遺体について」[考古学・美術史の自然科学的研究] 日本学術振興会  
 1984 松下典之 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷その利用法」[古文化財の自然科学的研究] 同朋社  
 梅本光一郎 「縄文期のリョクトウ類について」[古文化財の自然科学的研究] 同朋社  
 1986 寺沢 薫 「弥生時代の食料～畑作物」[季刊 考古学] 14～弥生人は何を食べたか 雄山閣

④その他

- 1963 小清水卓二 「古代日本の住居跡から出土する桃核について」[近畿古代文化論攷] 吉川弘文館  
 1967 金子浩昌 「洞穴遺跡出土の動物遺存体」[日本の洞穴遺跡の研究] 平凡社  
 1974 渡辺 誠 「ドングリのアク抜き～野生堅果類利用技術伝承に関する事例研究 1」[平安博物館紀要] 5 平安博物館  
 1975 渡辺 誠 「縄文文化の植物食」 雄山閣  
 1977 江坂輝彌 「縄文の栽培植物と利用植物」[季刊 どんめん] 13 J I C C 出版局  
 1979 渡辺 誠 「古代遺跡出土のトチの実」[日本古代学論集]  
 1981 渡辺 誠 「トチのコザワシ」[物質文化] 36 物質文化研究会  
 松山利夫 「もうひとつの食べ物～ドングリの民族学」[季刊 考古学] 15 雄山閣  
 1982 松山利夫 「ものと人間の文化史47 木の実」 法政大学出版局  
 渡辺 誠 「縄文人の食生活」[季刊 考古学] 1 雄山閣  
 1986 渡辺 誠 「弥生時代の食料～堅果類」[季刊 考古学] 14～弥生人は何を食べたか 雄山閣  
 1990 桃崎祐輔 「桃呪術の比較民俗学(一)～日本の事例を中心として」[比較民俗研究] 2 筑波大学比較民俗研究会  
 大山真充 「桃」[考古学と信仰] 同志社大学考古学シリーズIV 同志社大学

6. その他

①古環境

- 1962 市瀬由自 「平野の形成と海岸段丘」[資源科学研究所報] 46/47  
 原秀三郎 「八世紀における開発について」[日本史研究] 日本史研究会  
 1967 塚田松雄 「過去一万二千年間：日本の食性変遷史」[植物学雑誌]  
 中尾佐助 「X II 農業起源論～自然－生態学的研究」[今西錦司博士還暦記念論文集] 中央公論社  
 1968 八賀 晋 「古代における水田開発～その土壌的環境」[日本史研究] 96 日本史研究会  
 杉原莊介 「登呂遺跡の古地理学的調査」[案山子] 3  
 1969 上山春平 「照葉樹林文化」中公新書 中央公論社  
 遠藤邦彦 「日本における沖積世の砂丘の形成について」[地理学評論] 42  
 1971 八賀 晋 「古代の農耕と土壌」[古代の日本] 2 角川書店  
 1975 安田喜憲 「環境考古学事始」NHKブックス 日本放送出版協会  
 1976 上山春平・佐々木高明 「続・照葉樹林文化」中公新書 中央公論社  
 1977 辻誠一郎・鈴木 茂 「九十九里平野北部の沖積世干潟層の花粉分析的研究」[第四紀研究] 16-1 日本第四紀学会  
 1978 江坂輝彌 「縄文時代の大陸渡来植物」[時事叢書] 523  
 1979 鳥倉巳三郎 「三世紀の植物」[三世紀の考古学] 上 学生社  
 1980 日浦 勇 「昆虫遺体の研究と考古学」[考古学と自然科学] 13 日本文化財科学会  
 那須孝梯 「花粉分析からみた二次林の出現」[関西自然保護機構会報] 4 関西自然保護機構  
 1981 江坂輝彌 「渡来植物から見た縄文時代の地域性」[地理] 26-9 古今書院  
 藤下典之 「出土遺物と現存する野生および栽培植物との関連性について」[自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年度年次報告書] 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班

- 市原寿文・井関弘太郎。「縄文後・晩期における低湿性遺跡の研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年度  
年次報告書』 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 粉川昭平・島倉巳三郎。「植物遺体による古環境の復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年度年次報告書』  
文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 日浦 勇・宮武頼夫。「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究(中間報告)」『古文化財に関する保存科学と人文・  
自然科学～昭和55年度年次報告書』 同朋社
- 佐々木章・藤原宏志。「プラント・オパール分析による遺跡植生の復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年  
度年次報告書』 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 1982 粉川昭平・辻誠一郎。「植物遺体による古環境の復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和56年度年次報告書』  
文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 市原寿文・村越 潔。「縄文後・晩期における低湿性遺跡の特殊性と昆虫遺体の鑑定・保存に関する研究」『自然科学の手法による  
遺跡・古文化財等の研究～昭和56年度年次報告書』 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 中村 純。「花粉からみた縄文から弥生」『歴史公論』74 特集 日本稲作の起源 雄山閣
- 1983 遠藤邦彦・関本勝久。「関東平野の沖積層」『アーバンクボタ』21 クボタ鉄工
- 粉川昭平。「植物遺体による古環境の復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和57年度年次報告書』 文部省科  
学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 広瀬和夫。「古代の開発」『考古学研究』30-2 考古学研究会
- 辻誠一郎・南木睦彦。「縄文時代以降の植生変化と農耕～村田川流域を例として」『第四紀研究』22-3 日本第四紀学会
- 市原寿文・村越 潔。「縄文後・晩期における低湿性遺跡の特殊性と昆虫遺体の鑑定・保存に関する研究」『自然科学の手法による  
遺跡・古文化財等の研究～昭和57年度年次報告書』 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 井関弘太郎。「弥生時代～古代における稲作の地形環境」『地理』28-10 古今書院
- 能登 健。「利根川の瀬替えと遺跡の立地」『地理』28-12 古今書院
- 1984 市原寿文・村越 潔。「縄文後・晩期における低湿性遺跡の特殊性と昆虫遺体の鑑定・保存に関する研究」『自然科学の手法による  
遺跡・古文化財等の研究～昭和58年度年次報告書』 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 遠藤邦彦・高野 司。「関東平野の軟弱地盤」『月刊 地球』6 地人書館
- 日浦 勇・宮武頼夫。「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究」『古文化財に関する保存科学と人文、自然科学  
～総括報告編』 同朋社
- 原田恒弘・能登 健。「火山災害の季節」『群馬県立歴史博物館紀要』5 群馬県立歴史博物館
- 那須孝悌。「環境考古学の定義と課題」『日本文化財科学会報』6 日本文化財科学会
- 1985 井関弘太郎。「弥生時代以降の環境」『岩波講座 日本考古学』2 岩波書店
- 町田 洋。「垂柳遺跡における火山堆積物」『垂柳遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書88 青森県教育委員会
- 1987 加藤芳郎。「古環境解明のために土壌学は何を寄与しうるか」『土壌学と考古学』博友社
- 1988 森 勇一。「昆虫化石と古環境」『弥生文化の研究』10～研究の歩み 雄山閣
- 辻誠一郎。「縄文と弥生 自然環境」『季刊 考古学』23 雄山閣
- 1989 能登 健。「古墳時代の火山災害～群馬県同道遺跡の発掘調査を中心として」『第四紀研究』27-4 日本第四紀学会
- 1991 藤原彰夫。「土と日本古代文化～日本文化のルーツを求めて 文化土壌学試論」 博友社
- 1993 坂口 一。「火山噴火の年代と季節の推定法」『火山灰考古学』 古今書院
- 1994 田崎博之。「弥生文化と土地環境」『第四紀研究』33-5 日本第四紀学会
- 1996 高橋 学。「稲作の発展を支えた舞台～地形環境と土地利用」『季刊 考古学』56 雄山閣
- 高橋 学。「古代の地形環境と土地開発・土地利用」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』7 帝京大学山梨文化財研究所
- 坂井秀弥。「遺跡が語る開発と村の歴史」『月刊 文化財』398 文化庁文化財保護部・第一法規出版
- 鶴岡正昭。「多摩丘陵の古代開発」『月刊 文化財』398 文化庁文化財保護部・第一法規出版
- 市川秀之。「狭山池の築造と南河内の開発」『月刊 文化財』398 文化庁文化財保護部・第一法規出版
- 1997 辻誠一郎。「関東平野における弥生時代以降の植生史と人間活動」『国立歴史民俗博物館研究報告』 国立歴史民俗博物館
- ②自然科学分析
- 1967 杉原荘介。「登呂遺跡に関する放射性炭素による年代決定」『案山子』1
- 1968 中村 純。「花粉分析」 古今書院
- 1969 藤 則雄。「岡山県津島遺跡の花粉学的研究～花粉による日本稲作の起源を求めて」『考古学研究』16-2 考古学研究会
- 藤 則雄。「花粉学palynologyと考古学」『考古学と自然科学』2 日本文化財科学会
- 1970 徳丸治朗。「考古学と花粉分析～特に高槻周辺の遺跡に関して」『考古学と自然科学』3 日本文化財科学会
- 1976 藤原宏志。「古代土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出」『月刊 考古学ジャーナル』125 ニュー・サイエンス社
- 藤原宏志。「プラント・オパール分析による古代栽培植物の探索」『考古学雑誌』62-2 日本考古学協会
- 1979 笠原安夫・武田満子。「岡山県津島遺跡の出土種実の種類同定の研究～日本各地遺跡間の残存種子の比較とそれからみた農耕の伝  
播と形態の推定」『農学研究』3-4
- 藤原宏志・佐々木章。「プラント・オパール分析の方法的確立と遺跡土壌の分析」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～  
昭和53年度年次報告書』15 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 中村 純・塚田松雄。「稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和53年  
度年次報告書』15 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 松谷暁子。「灰像および組織による植物遺残の研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和53年度年次報告書』15  
文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班

- 粉川昭平・島倉巳三郎 「植物性遺物による古代人の生活と環境についての研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和53年度年次報告書』15 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 梅本光一郎 「生物組織低温プラズマ灰化法による出土植物種の同定ならびに古代植性の推定」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和53年度年次報告書』15 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 山田昌久 「木製遺物分析に際しての覚え書き～研究史の整理と技術分析について」『駿台史学』45 明治大学駿台史学会
- 1980 島倉巳三郎 「古代人に使用された木質遺物の樹種」『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会
- 安田喜憲 「花粉分析による古代人の生活と環境の復元」『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会
- 中村 純 「花粉分析による稲作史の研究」『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会
- 粉川昭平 「遺跡に伴う種子類について」『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会
- 藤原宏志・松谷暁子 「プラント・オパール分析法及び灰像法による古代植物遺物の研究」『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会
- 1981 中村 純・畑中健一 「農耕史の花粉分析学的研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年度年次報告書』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 工業善通 「分析結果の考古学的検討」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年度年次報告書』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 藤原宏志 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(4)」『考古学と自然科学』14 日本文化財科学会
- 松谷暁子 「遺跡出土植物遺物の組織(灰像と炭化像)による同定」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年度年次報告書』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 梅本光一郎 「灰像法および埋蔵種子分析法による出土遺物の同定」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年度年次報告書』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 星川清親 「出土種子および植物遺体の分類と同定」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究～昭和55年度年次報告書』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 1982 笠原安夫 「埋蔵種子分析による古代農耕の検証」『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会
- 藤原宏志 「プラント・オパールからみた縄文と弥生～縄文晩期から弥生初頭における稲作の実証的検討」『歴史公論』74 特集 日本稲作の起源 雄山閣
- 1984 佐々木章 「焼畑山地土壌のプラント・オパール分析～宮崎県椎葉村向山」『古文化財の自然科学的研究』同朋社
- 小林裕美・寺田和夫 「樹木年輪のC14濃度測定」『古文化財の自然科学的研究』同朋社
- 町田 洋 「テフラと日本考古学～考古学研究と関係するテフラのカタログ」『古文化財の自然科学的研究』同朋社
- 松田隆嗣 「遺跡より発掘された木製遺物の樹種について」『古文化財の科学』26
- 松谷暁子 「走査電顕像による炭化種実の識別」『古文化財の自然科学的研究』同朋社
- 千浦美智子 「炭化植物破片分析」『古文化財の自然科学的研究』同朋社
- 1986 藤 則雄 「花粉学と考古学」『日本考古学論集』1 吉川弘文館
- 1987 藤 則雄 「考古花粉学」考古学選書27 雄山閣
- 藤原宏志 「プラント・オパール分析による農耕跡の追求」『弥生文化の研究』2～生業 雄山閣
- 中村 純 「花粉」『弥生文化の研究』2～生業 雄山閣
- 1988 杉山真二 「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用」『考古学と自然科学』2 日本文化財科学会
- 1989 藤原宏志 「プラント・オパールと水田」『新しい研究報は考古学に何をもたらしたか』クバプロ
- 赤沢 威・南川雅男 「炭素・窒素同位体に基づく古代人の食生活の復元」『新しい研究報は考古学に何をもたらしたか』クバプロ
- 南川雅男 「安定同位体対比による食生態研究」『モンゴロイド』1 モンゴロイド編集委員会
- 光谷拓実 「年輪年代法による清洲城下町遺跡・勝川遺跡出土木製品の年代測定について」『財団法人 愛知県埋蔵文化財年報』4～昭和63年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 1990 南川雅男 「アイソトープ食性解析からみる先史モンゴロイドの食生態」『モンゴロイド』2 モンゴロイド編集委員会
- 1998 杉山真二・松田隆二 「植物珪酸体(プラント・オパール)分析による農耕史研究の動向」『第8回 東日本の水田跡を考える会 資料集』東日本の水田跡を考える会
- 早田 勉 「埋没田畠研究におけるテフロクロノロジー利用上の注意」『第8回 東日本の水田跡を考える会 資料集』東日本の水田跡を考える会
- 1999 佐藤洋一郎 『DNA考古学』東洋書店
- ③時期区分
- 1987 郷堀英司 「下総に対するコメント」『房総における歴史時代時の研究』房総歴史考古学研究会
- 笹生 衛 「安房・上総に対するコメント」『房総における歴史時代時の研究』房総歴史考古学研究会
- 1992 小沢 洋 「上総地域の鬼高式土器」『月刊 考古学ジャーナル』342 ニュー・サイエンス社
- 1995 小沢 洋 「房総の古墳後期土器～杯の変遷を中心として」『東国土器研究』4～特集 東国における律令制成立までの土器様相とその歴史的動向 東国土器研究会
- 1997 田所 眞・松本太郎 「千葉県の須恵器編年」『東国の須恵器～関東地方における歴史時代須恵器の系譜』古代生産史研究会'97シンポジウム 古代生産史研究会
- 1999 小沢 洋 「房総の古墳中期土器とその周辺」『東国土器研究』5～特集 東国における古墳時代中期の土器様相と諸問題 東国土器研究会
- 2001 高花宏行 「下総地域における弥生時代後期から古墳時代前期の様相」『弥生から古墳へ～時代の終わりと始まり』上高津貝塚ふるさと歴史の広場

## 2) 報告書等

県内各財団が発行した報告書は、財団ごとに発行順に配列した。それ以外の報告書は、各市町村別に発行順に配列した。報告書以外の文献(年報・資料紹介等)は発行年順に配列した。

## I. 報告書(財団発行)

## A. (財)千葉県都市公社

- A001. 1973. 『京葉 ～京葉道路第四期・一般国道16号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- A002. 1973. 『小金線 ～小金線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
- A003. 1974. 『八千代市村上遺跡群』
- A004. 1974. 『市原市菊間遺跡 ～市原市菊間地区における公営住宅建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』
- A005. 1974. 『柏市鴻ノ巣遺跡』
- A006. 1975. 『千葉東南部ニュータウン3 ～有吉遺跡(第1次)』
- A007. 1975. 『阿玉台北遺跡』

## B. (財)千葉県文化財センター

- B001.005. 1977. 『京葉Ⅰ ～東寺山石神遺跡』
- B002.008. 1977. 『京葉Ⅱ ～千葉市 東寺山戸張作遺跡』
- B003.009. 1977. 『佐倉市 江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ ～第1次・第2次調査～』
- B004.019. 1979. 『千葉東南部ニュータウン6 ～椎名崎遺跡』
- B005.021. 1979. 『千葉東南部ニュータウン8 ～ムコアラク遺跡・小金沢古墳群』
- B006.022. 1979. 『千葉市 城の腰・西屋敷遺跡』
- B007.023. 1979. 『千葉市 奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡』
- B008.024. 1980. 『千葉県我孫子市 日秀西遺跡発掘調査報告書』
- B009.025. 1980. 『佐倉市 江原台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- B010.027. 1980. 『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
- B011.029. 1980. 『我孫子市 日秀遺跡遺構確認調査概報』
- B012.030. 1981. 『千葉東南部ニュータウン9 ～六通遺跡・御塚台遺跡』
- B013.037. 1981. 『公津原Ⅱ』
- B014.044. 1982. 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ ～館林・水砂・花前Ⅱ-1』
- B015.046. 1982. 『市原市 番後台遺跡・神明台遺跡』
- B016.054. 1983. 『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ(堀之内遺跡)』
- B017.056. 1983. 『千葉東南部ニュータウン12 ～南二重堀遺跡』
- B018.057. 1983. 『千葉東南部ニュータウン13 ～上赤塚1号墳・狐塚古墳群』
- B019.059. 1983. 『千葉市 大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』
- B020.063. 1983. 『主要地方道成田松尾線1 ～小池麻生遺跡・小池向台遺跡』
- B021.068. 1984. 『千葉東南部ニュータウン14 ～バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第3次)・有吉南遺跡』
- B022.069. 1984. 『千葉東南部ニュータウン15 ～馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡』
- B023.070. 1984. 『八千代市権現後遺跡 ～萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
- B024.071. 1984. 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ ～花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ』
- B025.074. 1984. 『千葉急行線内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ ～鷲谷津遺跡・観音塚遺跡・山ノ神遺跡・大森第一遺跡・荒立遺跡』
- B026.082. 1985. 『千葉市養輪遺跡 ～サニータウンみのわ台造成に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- B027.084. 1985. 『千葉市村田服部遺跡 ～一般国道16号村田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- B028.086. 1985. 『八千代市北海道遺跡 ～萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- B029.087. 1985. 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書3 ～花前Ⅱ-Ⅰ・花前Ⅱ-2・矢船』
- B030.088. 1985. 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ(成田地区)～妙福寺遺跡・他』
- B031.089. 1985. 『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅴ ～No.2遺跡・No.10遺跡』
- B032.091. 1985. 『主要地方道成田松尾線2 ～小池新林遺跡・小池地藏遺跡』
- B033.093. 1985. 『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財調査報告書』
- B034.094. 1985. 『栄町 大畑Ⅰ-2遺跡 ～県単道路成田安食線埋蔵文化財調査報告書』
- B035.095. 1985. 『主要地方道成田安食線道路改良地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ ～成田市烏内遺跡』
- B036.101. 1986. 『君津市 岩出遺跡・岩出城跡 ～県道長浦・上総線特殊改良第1種工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- B037.104. 1986. 『主要地方道成田松尾線4 ～小池元高田遺跡・柳谷遺跡・上宿遺跡・井森戸遺跡』
- B038.107. 1986. 『千葉都市モノレール埋蔵文化財発掘調査報告書 ～五味ノ木古墳・殿山堀込遺跡・廿五里城跡・根崎遺跡・京頼台遺跡・柳沢遺跡』
- B039.111. 1986. 『千葉急行線内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ ～大北遺跡・谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群』
- B040.114. 1986. 『酒々井町伊篠白幡遺跡』
- B041.119. 1986. 『栄町 殖生郡衙跡確認調査報告書』
- B042.123. 1987. 『八千代市 井戸向遺跡 ～萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
- B043.125. 1987. 『千葉市 小中台遺跡 ～千葉都市計画道路3・4・43号磯辺・茂呂町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書2』
- B044.126. 1987. 『大井東山遺跡・大井大畑遺跡 ～一級河川手賀沼河川浄化に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- B045.130. 1987. 『主要地方道成田松尾線5 ～中台貝塚・松尾東雲遺跡・八田太田台遺跡』

- B046.133. 1987. 『栄町植生郡衙跡確認調査報告書Ⅱ』
- B047.137. 1988. 『東金市久我台遺跡～房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- B048.138. 1988. 『千葉市浜野川遺跡群』
- B049.142. 1988. 『成田新住宅市街地内埋蔵文化財調査報告書～山口雷土遺跡』
- B050.150. 1988. 『古代寺院跡(宝珠院)確認調査報告』
- B051.153. 1989. 『千葉市 荒久遺跡(1)～住宅・都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
- B052.158. 1989. 『成田市畑ヶ田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- B053.159. 1989. 『千葉市浜野川神門遺跡(低湿地貝塚の確認調査)～都市小河川改修事業(促進 浜野川)に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- B054.161. 1989. 『市原市西野遺跡・白山遺跡・村山遺跡発掘調査報告書』
- B055.172. 1990. 『佐倉市大作遺跡～佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』
- B056.175. 1990. 『千葉東南部ニュータウン17～高沢遺跡』
- B057.177. 1990. 『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅵ～成田市木口下遺跡・富里町七栄古込遺跡』
- B058.178. 1990. 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ～佐原市吉原山王遺跡』
- B059.180. 1990. 『君津市 外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書～一般国道127号拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査』
- B060.188. 1991. 『八千代市白幡前遺跡～萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
- B061.192. 1991. 『主要地方道成田松尾線6～芝山町小池地蔵Ⅱ遺跡・宮門遺跡』
- B062.195. 1991. 『多古町 南借当遺跡～県単橋梁架換(借当橋)事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- B063.198. 1991. 『君津市 郡遺跡発掘調査報告書～(二)江川住宅宅地関連公共施設整備促進事業に伴う埋蔵文化財調査』
- B064.209. 1992. 『主要地方道成田松尾線7～御田台・小池新林遺跡』
- B065.215. 1992. 『佐倉市松向作遺跡～佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』
- B066.216. 1992. 『千葉市榎作遺跡～千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』
- B067.222. 1993. 『千葉東南部ニュータウン18～鎌取遺跡』
- B068.232. 1993. 『袖ヶ浦市滝ノ口向台遺跡・大作古墳群～一般県道君津平川線県単道路改良(幹線道路網整備)工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- B069.236. 1993. 『佐倉市南広遺跡～佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ』
- B070.241. 1994. 『千原台ニュータウンⅥ～草刈六之台遺跡』
- B071.243. 1994. 『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡～萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』
- B072.245. 1994. 『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡 他～東葉高速鉄道埋蔵文化財発掘調査報告書』
- B073.246. 1994. 『東金市妙経遺跡・井戸谷9号墳～房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- B074.247. 1994. 『海上町岩井安町遺跡～海上キャンプ場改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- B075.250. 1994. 『印西市小林城跡～一般県道印西印旛線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- B076.265. 1995. 『下総町新シ山・柳和田台遺跡・青山中峰遺跡・青山宮脇遺跡～主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
- B077.266. 1995. 『袖ヶ浦市文脇遺跡～主要地方道千葉鴨川線県単道路改良(幹線道路網整備)工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- B078.267. 1995. 『佐倉市六拾部遺跡～佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅠ』
- B079.276. 1996. 『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書～流山市 南割遺跡・上貝塚第Ⅱ遺跡・上貝塚第Ⅰ遺跡・上貝塚貝塚・下花輪第Ⅲ遺跡・三輪野山第Ⅱ遺跡』
- B080.279. 1996. 『一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書2～佐倉市 高岡砦跡・大蛇麻賀多脇遺跡』
- B081.280. 1996. 『主要地方道多古笹本線埋蔵文化財調査報告書2～干潟町 池尻遺跡・茄子台遺跡』
- B082.281. 1996. 『千葉市西唐沢遺跡～かずさアカデミアパーク代替用地埋蔵文化財調査報告書』
- B083.295. 1997. 『千原台ニュータウンⅦ～草刈遺跡F区1号墳』
- B084.300. 1997. 『県道山田台大綱白里線埋蔵文化財調査報告書1～大綱白里町一本松遺跡・山田台No.6-2遺跡・東金市山田水呑遺跡・山田新田Ⅲ遺跡・山田新田所在馬土手』
- B085.303. 1997. 『主要地方道多古笹本線埋蔵文化財調査報告書3～干潟町道木内遺跡・椎木遺跡』
- B086.309. 1997. 『村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書～市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡』
- B087.317. 1998. 『主要地方道生実・本納線埋蔵文化財調査報告書2～笹目沢遺跡・種ヶ谷津遺跡・大道遺跡』
- B088.319. 1998. 『下総町名木大台遺跡～主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』
- B089.321. 1998. 『干潟工業団地埋蔵文化財調査報告書～干潟町諏訪山遺跡・十二殿遺跡・茄子台遺跡・桜井平遺跡』
- B090.323. 1998. 『主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書2～袖ヶ浦市荒久(2)遺跡』
- B091.325. 1998. 『千葉東南部ニュータウン20～有吉北貝塚2(古墳時代以降)』
- B092.328. 1998. 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1～八千代市島田込ノ内遺跡』
- B093.330. 1998. 『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書1～山武町 栗焼棒遺跡』
- B094.336. 1998. 『東関東自動車道(千葉富津線)埋蔵文化財調査報告書1～市原市今富遺跡』
- B095.337. 1998. 『一般国道409号(木更津工区)埋蔵文化財調査報告書～木更津市菅生遺跡・祝崎古墳群』
- B096.339. 1998. 『富津市 川島遺跡～一般国道465号埋蔵文化財調査報告書』
- B097.353. 1999. 『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書2～山武郡芝山町上宿遺跡・大堀切遺跡』
- B098.354. 1999. 『市原市市原糸里制遺跡～東関東自動車道千葉富津線・市原市道80号線埋蔵文化財調査報告書』
- B099.356. 1999. 『東関東自動車道(千葉富津線)埋蔵文化財調査報告書4～市原市今富新山遺跡・古市場2遺跡・千葉市古市場1遺跡』
- B100.358. 1999. 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ～印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡』
- B101.362. 1999. 『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書3～山武町小川崎台遺跡』
- B102.364. 1999. 『矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書2～木更津市久野遺跡』
- B103.370. 1999. 『下総町青山富ノ木遺跡・鎌部長峯遺跡～主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』

- B104.371. 1999. 『下総町名木天神台遺跡～主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』
- B105.372. 1999. 『主要地方道成田松尾線Ⅸ～芝山町大台西藤ヶ作遺跡・深田台遺跡・洞谷台遺跡・大堀切遺跡』
- B106.377. 2000. 『船橋市東中山台遺跡群第14次調査地点～県単耐震橋梁緊急架換事業埋蔵文化財調査報告書』
- B107.385. 2000. 『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ～成田市東峰御幸畑西遺跡(空港No61遺跡)』
- B108.392. 2000. 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ～印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡』
- B109.409. 2001. 『東関東自動車道(千葉富津線)埋蔵文化財調査報告書7～木更津市芝野遺跡』
- B110.447. 2001. 『木更津市四宝塚遺跡～木更津(11)長須賀宿舎埋蔵文化財調査報告書』
- C. (財)君津郡市文化財センター
- C001.002. 1983. 『清水川台遺跡発掘調査報告書』
- C002.008. 1985. 『境遺跡』
- C003.012. 1985. 『永吉台遺跡群』
- C004.016. 1986. 『本名輪遺跡』
- C005.017. 1986. 『東郷台遺跡(川原井廃寺)』
- C006.020. 1986. 『高千穂古墳群』
- C007.038. 1988. 『花山遺跡』
- C008.042. 1989. 『境遺跡～第2次調査』
- C009.044. 1989. 『小浜遺跡群Ⅱ～マミヤク遺跡』
- C010.052. 1990. 『君津市郡条里遺跡発掘調査報告書』
- C011.057. 1991. 『木更津市請西遺跡群Ⅱ～鹿島塚古墳群』
- C012.061. 1991. 『袖ヶ浦市笄田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群(1)～大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
- C013.063. 1992. 『木更津市四留作第2古墳群第1号墳 四留作第1号塚・第2号塚』
- C014.064. 1992. 『富津市打越遺跡・神明山遺跡』
- C015.066. 1992. 『富津市川島遺跡発掘調査報告書～県立君津商業高等学校代替野球場整備に伴う埋蔵文化財調査』
- C016.069. 1992. 『袖ヶ浦市文臨遺跡』
- C017.073. 1993. 『君津市郡条里遺跡Ⅱ』
- C018.074. 1992. 『千葉県富津市下北原遺跡』
- C019.083. 1993. 『袖ヶ浦市大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 二又堀遺跡・大竹古墳群～藤田観光ゴルフ場建設工事に伴う埋蔵文化財調査』
- C020.089. 1994. 『君津市郡条里遺跡Ⅲ』
- C021.092. 1993. 『袖ヶ浦市清水井遺跡』
- C022.098. 1994. 『君津市外箕輪遺跡』
- C023.100. 1994. 『袖ヶ浦市上大城遺跡』
- C024.105. 1996. 『富津市狐塚遺跡発掘調査報告書』
- C025.112. 1997. 『君津市常代遺跡群』
- C026.116. 1997. 『袖ヶ浦市寒沢遺跡・寒沢古墳群・愛宕古墳群・上用瀬遺跡』
- C027.117. 1997. 『君津市郡条遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』
- C028.123. 1996. 『九十九坊廃寺関連 南子安金井崎遺跡～八重原公民館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- C029.126. 1998. 『君津市外箕輪遺跡Ⅱ』
- C030.129. 1998. 『袖ヶ浦市神納三俣台遺跡』
- C031.130. 1998. 『富津市亀塚遺跡』
- C032.137. 1998. 『袖ヶ浦市谷ノ台遺跡Ⅱ』
- C033.146. 1999. 『君津市常代遺跡Ⅱ』
- C034.153. 2000. 『君津市外箕輪遺跡Ⅲ』
- C035.156. 2000. 『西久保下遺跡～携帯電話用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財調査』
- C036.159. 2000. 『袖ヶ浦市雷塚遺跡』
- C037.168. 2002. 『君津市三直中郷遺跡』
- D. (財)市原市文化財センター
- D001.003. 1984. 『千葉県市原市片又木遺跡』
- D002.014. 1987. 『千葉県市原市郡本遺跡』
- D003.016. 1987. 『千葉県市原市下鈴野遺跡』
- D004.018. 1987. 『千葉県市原市下ヶ谷台遺跡』
- D005.029. 1989. 『千葉県市原市千草山遺跡・東千草山遺跡』
- D006.030. 1989. 『千葉県市原市文作遺跡』
- D007.049. 1992. 『千葉県市原市椎津茶ノ木遺跡』
- D008.050. 1993. 『千葉県市原市安須古墳群』
- E. (財)総南文化財センター
- E001.008. 1990. 『桂遺跡群発掘調査報告書』 (財)長生郡市文化財センター
- E002.012. 1991. 『千代丸・力丸横穴群』 (財)長生郡市文化財センター
- E003.015. 1993. 『千葉県茂原市国府岡遺跡群』 (財)長生郡市文化財センター
- E004.025. 1994. 『千葉県茂原市中原遺跡』 (財)長生郡市文化財センター
- F. (財)印旛郡市文化財センター
- F001.009. 1987. 『千葉県佐倉市高崎新山遺跡発掘調査報告書』

- F 002.011. 1987. 『四街道市四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書』  
 F 003.016. 1988. 『船橋カンントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書 ～神々廻遺跡群』  
 F 004.017. 1988. 『岩戸広台遺跡A地区・B地区発掘調査報告書』  
 F 005.019. 1988. 『千葉県印旛郡富里町 久能遺跡群発掘調査報告書 ～富里町久能カンントリー倶楽部ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査』  
 F 006.021. 1988. 『下台遺跡・尾上藤木A・B地区発掘調査報告書』  
 F 007.023. 1988. 『酒々井町 尾上藤木遺跡D地区発掘調査報告書』  
 F 008.034. 1990. 『千葉県成田市 囲護台遺跡発掘調査報告書 ～セコム独身寮建設に伴う埋蔵文化財調査』  
 F 009.035. 1990. 『尾上藤木遺跡C地区発掘調査報告書』  
 F 010.036. 1990. 『長勝寺脇館跡』  
 F 011.043. 1991. 『和良比遺跡発掘調査報告書Ⅰ』  
 F 012.043. 1991. 『和良比遺跡発掘調査報告書Ⅱ』  
 F 013.043. 1991. 『和良比遺跡発掘調査報告書Ⅲ』  
 F 014.051. 1991. 『尾上出戸遺跡』  
 F 015.056. 1992. 『宮本宮後遺跡B地区発掘調査報告書』  
 F 016.057. 1990. 『油作第1遺跡発掘調査報告書 ～印旛村立平賀小学校建設予定地内埋蔵文化財調査』  
 F 017.059. 1992. 『栄町立栄中学校校舎増築に伴う埋蔵文化財調査報告書 ～千葉県印旛郡栄町 大台遺跡』  
 F 018.060. 1991. 『敷内遺跡発掘調査報告書』  
 F 019.067. 1993. 『上野遺跡・出口遺跡発掘調査報告書 ～四街道総合運動公園事業地内埋蔵文化財調査』  
 F 020.069. 1993. 『駒形北遺跡発掘調査報告書 ～印西町立小林小学校運動場拡張に伴う埋蔵文化財調査』  
 F 021.071. 1991. 『佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)』  
 F 022.071. 1991. 『佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)』  
 F 023.071. 1991. 『佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)』  
 F 024.071. 1991. 『佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ)』  
 F 025.075. 1994. 『公津東遺跡群Ⅰ ～成田市公津東土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』  
 F 026.078. 1994. 『白井田小笹台遺跡発掘調査報告書 ～ファースト用地内埋蔵文化財調査』  
 F 027.079. 1994. 『木戸先遺跡 ～御成台団地宅地造成事業地内埋蔵文化財調査』  
 F 028.082. 1994. 『吉高浅間古墳発掘調査報告書 ～印旛村立吉高地区土取工事に伴う埋蔵文化財調査』  
 F 029.089. 1994. 『上福田向台遺跡発掘調査報告書 ～成田市上福田向台ガソリンスタンド建設予定地内埋蔵文化財調査』  
 F 030.092. 1994. 『成田ビューカンントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査(Ⅰ)』  
 F 031.095. 1994. 『油作Ⅰ-Ⅱ遺跡発掘調査報告書 ～印旛村立平賀小学校運動場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査』  
 F 032.097. 1994. 『宮内遺跡発掘調査報告書 ～本埜村総合運動場建設に伴う埋蔵文化財調査』  
 F 033.106. 1995. 『南囲護台遺跡(第1地点) ～(仮)スターツ株式会社宅地造成地内埋蔵文化財調査』  
 F 034.114. 1996. 『平賀細町遺跡 ～印旛村立平賀細町地区土取事業に伴う埋蔵文化財調査』  
 F 035.130. 1997. 『ホソヤミート調理食品工場造成地内埋蔵文化財調査 ～墨新山遺跡』  
 F 036.131. 1997. 『千葉県成田市 宗吾内野台畑遺跡 ～成田市農業協同組合公津支所新築予定地内埋蔵文化財調査』  
 F 037.135. 1998. 『成田市公津東土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査 ～公津東遺跡群Ⅲ 大袋腰巻遺跡』  
 F 038.145. 1999. 『成田カンントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) ～南羽鳥中舢第1遺跡F地点』  
 F 039.152. 2000. 『ドゥ・スポーツカンントリー成田ゴルフ場造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) ～東和田・子ノ神遺跡』  
 G. (財)山武郡市文化財センター  
 G 001.005. 1989. 『千葉県大網白里町 宮台遺跡』  
 G 002.009. 1991. 『千葉県大網白里町 中林遺跡』  
 G 003.020. 1994. 『千葉県山武町 古内遺跡』  
 G 004.021. 1994. 『千葉県芝山町 田向城跡』  
 G 005.025. 1995. 『千葉県東金市 油井古塚原遺跡群』  
 G 006.065. 2000. 『千葉県東金市 小野山田遺跡群Ⅰ(鉢ヶ谷遺跡)』  
 G 007.069. 2000. 『千葉県大網白里町 一本松遺跡』  
 H. (財)香取郡市文化財センター  
 H 001.005. 1991. 『佐原市 長部山遺跡』  
 H 002.007. 1991. 『香取郡下総町 中里西口遺跡』  
 H 003.018. 1993. 『香取郡多古町 仲ノ台遺跡』  
 H 004.028. 1994. 『香取郡小見川町 織幡妙見堂遺跡』  
 H 005.032. 1995. 『香取郡栗源町 岩部遺跡』  
 H 006.036. 1995. 『香取郡神崎町 仲台遺跡』  
 H 007.053. 1997. 『香取郡下総町 西大須賀コモ田古墳群』  
 I. (財)千葉市文化財調査協会  
 I 001.004. 1988. 『平川遺跡群』  
 I 002.007. 1988. 『立木南遺跡』  
 I 003.008. 1988. 『千葉市 広南遺跡』  
 I 004.010. 1989. 『千葉市 山ノ神遺跡』  
 I 005.017. 1990. 『稲荷台遺跡』  
 I 006.024. 1992. 『千葉市 立山城跡』



- I 007.028. 1992. 『千葉中央ゴルフ場遺跡群発掘調査報告書』  
 I 008.034. 1993. 『千葉市 新田遺跡』  
 I 009.044. 1995. 『千葉市 仁戸名遺跡 ～平成4・5年度調査報告書』  
 I 010.045. 1995. 『直道遺跡』  
 I 011.046. 1995. 『千葉市原町遺跡群発掘調査報告書Ⅰ～山王遺跡』  
 I 012.048. 1996. 『柴谷津遺跡・大森第1遺跡』  
 I 013.055. 1997. 『千葉市 高品城跡』  
 I 014.059. 1997. 『千葉市 小仲台A遺跡・牛尾外遺跡』  
 I 015.060. 1998. 『千葉市 下田遺跡』  
 I 016.064. 1999. 『千葉市 榎作遺跡・網田遺跡・宇津志野遺跡群・海老遺跡・荒屋敷貝塚』  
 I 017.065. 1999. 『千葉市戸張作遺跡Ⅱ』  
 I 018.070. 2000. 『千葉市 生実城跡』
- J. (財)船橋市文化・スポーツ財団 埋蔵文化財センター  
 J 001.004. 1997. 『千葉県船橋市 印内台遺跡群(19)』  
 J 002.008. 1999. 『千葉県船橋市 印内台遺跡群(24)』  
 J 003.011. 1998. 『千葉県船橋市 印内台遺跡群(22)』  
 J 004.013. 2000. 『千葉県船橋市 東中山台遺跡群(11)』  
 J 005.014. 2000. 『千葉県船橋市 東中山台遺跡群(12)』
- K. (財)東総文化財センター  
 J 001.006. 1995. 『海上町 岩井安町遺跡～滝のさと自然公園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
 J 002.007. 1995. 『八日市場市 生尾遺跡～配水池築造工事に伴う埋蔵文化財調査』  
 J 003.016. 1998. 『八日市場市 新城跡～天神山公園埋蔵文化財調査』  
 J 004.021. 1999. 『光町 篠本城跡・城山遺跡～ひかり工業団地内埋蔵文化財調査』
- II. 報告書(区市町村教委)
- L 00.千葉県 L 001.1971. 『東金平蔵台遺跡発掘調査概報』 千葉県教育委員会  
 L 002.1974. 『木更津市請西遺跡～予備調査概報』 千葉県教育委員会
- L 01.千葉市 L 011.1981. 『千葉・上ノ台遺跡』 千葉市教育委員会  
 L 012.1984. 『谷津遺跡』 千葉市遺跡調査会
- L 02.銚子市 L 021.1979. 『銚子市野尻遺跡発掘調査報告書』 銚子市教育委員会  
 L 022.1988. 『大宮戸大新田第1地点調査報告書』 銚子市教育委員会  
 L 023.1991. 『千葉県銚子市 粟島台遺跡発掘調査報告書』 銚子市教育委員会
- L 03.市川市 L 031.1981. 『埋蔵文化財発掘調査報告』昭和55年度 市川市教育委員会  
 L 032.1983. 『埋蔵文化財発掘調査報告』昭和57年度 市川市教育委員会  
 L 033.1990. 『埋蔵文化財発掘調査報告』平成元年度 市川市教育委員会  
 L 034.1994. 『下総国分寺跡～平成元～5年度発掘調査報告書』 市川市教育委員会・市川市立市川考古博物館  
 L 035.1994. 『平成4年度市川市内遺跡発掘調査報告書』 市川市教育委員会
- L 04.船橋市 L 041.1968. 『夏見台～古墳時代集落址・工房址の発掘調査』 船橋市教育委員会  
 L 042.1972. 『外原～古墳時代集落址・滑石工房址の発掘調査』 船橋市教育委員会  
 L 043.1972. 『夏見大塚遺跡～夏見台地における弥生時代集落址の調査』 船橋市教育委員会  
 L 044.1975. 『夏見大塚遺跡(第2・3次調査)～夏見台地における弥生時代・奈良・平安時代集落址の調査』 船橋市教育委員会
- L 05.木更津市 L 051.1984. 『真里谷城跡』 木更津市教育委員会  
 L 052.1991. 『千葉県木更津市 請西遺跡群発掘調査報告書Ⅲ～野焼B遺跡・野焼古墳群第2号墳・鹿島塚B遺跡・中郷谷遺跡』 木更津市教育委員会  
 L 053.1994. 『千葉県木更津市 請西遺跡群発掘調査報告書Ⅴ～山伏作遺跡』 木更津市教育委員会  
 L 054.1997. 『中尾遺跡群発掘調査報告書』Ⅲ 木更津市教育委員会  
 L 055.1997. 『千葉県木更津市 大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅱ～大畑台遺跡』 木更津市教育委員会  
 L 056.1998. 『千葉県木更津市内遺跡群発掘調査報告書～椿古墳群・菅生遺跡・金鈴塚古墳』 木更津市教育委員会  
 L 057.1998. 『千葉県木更津市 大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅲ～小谷遺跡』 木更津市教育委員会  
 L 058.1999. 『千葉県木更津市 笹子遺跡群発掘調査報告書Ⅰ～四留作第一古墳群第12・13号墳 四留作遺跡(下層遺構)』 木更津市教育委員会  
 L 059.2001. 『千葉県木更津市 大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅴ～中台遺跡』 木更津市教育委員会  
 L 060.2002. 『千葉県木更津市千東台遺跡群発掘調査報告書Ⅵ～高部古墳群Ⅰ』 木更津市教育委員会  
 L 061.2002. 『千葉県木更津市大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅳ～銭賦遺跡』 木更津市教育委員会
- L 07.松戸市 L 071.1970. 『大谷口～松戸市大谷口小金城跡発掘調査報告』松戸市文化財調査報告第2集 松戸市教育委員会
- L 08.佐倉市 L 081.1975. 『将門鹿島台～将門鹿島台遺跡発掘調査報告』 佐倉市教育委員会  
 L 082.1977. 『間野台・古屋敷 遺跡発掘調査報告書』 佐倉市教育委員会・日本歴史出版  
 L 083.1979. 『江原台～土地区画整理事業に伴う千葉県佐倉市江原台第1遺跡2区の発掘調査報告書』 佐倉市教育委員会

- L.084.1979. 『佐倉市文化財調査報告 江原台第1遺跡発掘調査報告』4 佐倉市教育委員会  
 L.084.1983. 『岩富・漆谷津』佐倉市教育委員会  
 L.085.1984. 『白井城跡発掘調査報告書～千葉県教育委員会発行『千葉県中近世城跡研究調査報告書』第4集抜刷』佐倉市教育委員会  
 L.085.1986. 『六拾部遺跡発掘調査報告書』佐倉市教育委員会  
 L.086.1998. 『平成8年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書～直弥田屋遺跡・直弥大谷遺跡・太田長作遺跡』  
 L.09.八日市場市 L.091.1986. 『飯塚遺跡発掘調査報告書』八日市場市教育委員会  
 L.10.柏市 L.101.1992. 『柏市埋蔵文化財調査報告』22 柏市教育委員会  
 L.102.1998. 『柏市埋蔵文化財調査報告書』35～宿ノ後遺跡 柏市遺跡調査会・柏市教育委員会  
 L.103.1999. 『柏市埋蔵文化財調査報告書』38～中馬場遺跡(第4次) 柏市教育委員会・柏市遺跡調査会  
 L.11.流山市 L.111.1989. 『加地区遺跡群Ⅰ～北谷津第Ⅱ遺跡・北谷津第Ⅰ遺跡・若宮第Ⅱ遺跡・若宮第Ⅰ遺跡A地点・若宮第Ⅰ遺跡B地点』流山市教育委員会  
 L.112.1991. 『加地区遺跡群Ⅱ～町畑遺跡A地点・町畑遺跡B地点・町畑遺跡C地点・町畑遺跡D地点』流山市教育委員会  
 L.113.1994. 『加地区遺跡群Ⅲ～町畑遺跡A地点』流山市教育委員会  
 L.114.1997. 『平成8年度流山市内遺跡発掘調査報告書～Ⅰ.市野谷地蔵谷遺跡B地点・Ⅱ.古間木茱萸木谷遺跡・Ⅲ.加村台遺跡F地点』流山市教育委員会  
 L.113.2000. 『加地区遺跡群Ⅳ～町畑遺跡F地点・町畑遺跡G地点・町畑遺跡H地点』流山市教育委員会  
 L.12.市原市 L.121.1999. 『平成10年度市原市内発掘調査報告～畑木小谷遺跡・郡本遺跡(第5次)・五所居下遺跡・新堀小鳥向遺跡』  
 L.13.我孫子市 L.130.1982. 『我孫子市埋蔵文化財報告第2集～日秀遺跡遺構確認調査・別当地遺跡発掘調査』我孫子市教育委員会  
 L.131.1985. 『大久保遺跡』我孫子市埋蔵文化財報告5 我孫子市教育委員会  
 L.132.1985. 『別当地・南久保作・北久保作遺跡』我孫子市埋蔵文化財報告6 我孫子市教育委員会  
 L.133.1985. 『我孫子中学校校庭遺跡』我孫子市教育委員会  
 L.134.1986. 『西原遺跡・根戸城跡』我孫子市埋蔵文化財報告8 我孫子市教育委員会  
 L.135.1987. 『高根遺跡』我孫子市埋蔵文化財報告9 我孫子市教育委員会  
 L.136.1999. 『西原遺跡～第2～6次発掘調査報告書』我孫子市埋蔵文化財報告21 我孫子市教育委員会  
 L.137.2000. 『別当地遺跡～第6次発掘調査報告書』我孫子市埋蔵文化財報告23 我孫子市教育委員会  
 L.138.2001. 『平成12年度市内遺跡発掘調査報告書～五郎地遺跡第1次・野守遺跡第5次』我孫子市教育委員会  
 L.139.2002. 『別当地遺跡～第3・5・7・8・9・11次発掘調査報告書』我孫子市埋蔵文化財報告26 我孫子市教育委員会  
 L.14.鎌ヶ谷市 L.141.1988. 『双賀辺田No.1遺跡発掘調査報告書』鎌ヶ谷市教育委員会  
 L.15.君津市 L.151.1988. 『郡遺跡確認調査報告書～団体営土地改良総合整備事業(一般)に伴う埋蔵文化財調査(小山野地区)、郡遺跡確認調査』君津市教育委員会  
 L.152.1994. 『郡遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』君津市教育委員会  
 L.153.1998. 『平成10年度君津市内遺跡群発掘調査報告書』  
 L.16.富津市 L.161.1999. 『平成10年度富津市内遺跡群発掘調査報告書～亀塚遺跡Ⅱ・狐塚遺跡Ⅱ・飯野陣屋本丸跡・青木亀塚遺跡・稲荷山古墳』富津市教育委員会  
 L.17.四街道市 L.171.1990. 『入ノ台第2遺跡発掘調査報告書』四街道市教育委員会  
 L.18.袖ヶ浦市 L.181.1996. 『平成8年度千葉県袖ヶ浦市内遺跡群発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会  
 L.182.1998. 『平成10年度千葉県袖ヶ浦市内遺跡群発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会  
 L.183.1999. 『平成11年度千葉県袖ヶ浦市内遺跡群発掘調査報告書Ⅱ～西原遺跡Ⅱ』袖ヶ浦市教育委員会  
 L.19.沼南町 L.191.1984. 『六盃内遺跡～大井東部地区遺跡群第1次調査概報』沼南町埋蔵文化財小報1 沼南町教育委員会  
 L.20.下総町 L.201.1984. 『千葉県下総町文化財調査報告書』Ⅱ 下総町教育委員会  
 L.21.神崎町 L.211.1987. 『千葉県神崎町大平遺跡発掘調査報告書』神崎町教育委員会・大平遺跡調査会  
 L.22.栗源町 L.221.1987. 『千葉県栗源町谷津坂遺跡発掘調査報告書』栗源町教育委員会  
 L.23.大栄町 L.231.1989. 『千葉県大栄町馬洗城址発掘調査報告書』大栄町教育委員会  
 L.24.山武町 L.241.1992. 『平成3年度山武町内遺跡群発掘調査報告書』山武町教育委員会  
 L.25.横芝町 L.251.1983. 『長倉宮脇遺跡～千葉県横芝町長倉宮脇遺跡確認調査報告書』横芝町教育委員会  
 L.26.長柄町 L.261.1998. 『千葉県長生郡長柄町下手Ⅱ遺跡』長柄町教育委員会  
 L.27.富山町 L.271.1998. 『恩田原遺跡群』富山町教育委員会

### Ⅲ. 報告書(調査会等)

- M001. 1954. 『田子台遺跡』早稲田大学考古学研究室・千葉県教育委員会  
 M002. 1959. 『河原塚古墳』國學院大學考古学研究室  
 M003. 1970. 『東関東自動車道(千葉-成田線)関係埋蔵文化財発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会  
 M004. 1972. 『中馬場遺跡 妻子原遺跡』日本国有鉄道常磐線複々線工事関係遺跡調査団  
 M005. 1974. 『下総国分の遺跡』和洋女子大学  
 M006. 1975. 『白井南～千葉県佐倉市白井南遺跡調査報告書』佐倉市遺跡調査会・佐倉市教育委員会  
 M007. 1975. 『千葉県館山市 条里遺構調査報告書～館山市安房中央東部地区ほ場整備事業地内所在の三ツ塚・埋没条里遺構の調査』館山市条里遺跡調査会

- M008. 1976. 『中馬場遺跡 ～第3次発掘調査報告書』 日本国有鉄道常磐線複々線工事関係遺跡調査団  
M009. 1976. 『夏見台(第3次)』 夏見台遺跡第3次発掘調査団  
M010. 1976. 『佐倉市埋蔵文化財調査報告(2) ～志津西ノ台遺跡』 志津西ノ台遺跡調査団  
M011. 1977. 『山田水呑遺跡 ～上総国山邊郡山口郷推定遺跡の発掘調査報告書』 山田遺跡調査会  
M012. 1977. 『千葉県萩ノ原遺跡』 日本文化財研究所  
M013. 1977. 『国分寺』 安房国分寺調査団  
M014. 1977. 『千葉県萩ノ原遺跡の調査』 日本文化財研究所文化財調査報告5 日本文化財研究所  
M015. 1978. 『千葉・南総中学遺跡 ～先史10』 駒沢大学考古学研究室・市原市教育委員会  
M016. 1978. 『千葉市作草部町 駒形遺跡 ～第1次・第2次発掘調査報告書』 駒形遺跡発掘調査団  
M017. 1978. 『岩部遺跡』 岩部遺跡調査団  
M018. 1978. 『千葉市平山町新山遺跡発掘調査概報 ～土砂採取に伴う緊急発掘調査』 新山遺跡発掘調査団  
M019. 1979. 『高野台遺跡発掘調査報告書』 高野台遺跡調査会・柏市教育委員会  
M020. 1979. 『桐ヶ谷新田遺跡』 流山市桐ヶ谷新田遺跡調査会  
M021. 1979. 『本郷台 ～奈良・平安時代を中心とした集落址および墓址の調査』 本郷台遺跡調査団  
M022. 1979. 『成田用水 ～水資源開発公団成田用水関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 芝山町高田権現・大台西・上吹入遺跡調査会  
他  
M023. 1979. 『樋爪 樋爪遺跡発掘調査報告書』 樋爪遺跡発掘調査団  
M024. 1980. 『上総菅生遺跡』 中央公論美術出版  
M025. 1980. 『印内台 ～古墳、奈良・平安時代の集落址、墓址の発掘調査概報』 印内台遺跡調査団  
M026. 1980. 『東金台遺跡』 I 東金台遺跡調査団  
M027. 1981. 『布佐・余間戸遺跡』 我孫子市布佐・余間戸遺跡調査会  
M028. 1981. 『小台遺跡発掘調査報告書 ～古墳群と集落址の調査』 小台遺跡調査会  
M029. 1981. 『千葉市土気・田向遺跡発掘調査報告書』 千葉市遺跡調査会  
M030. 1982. 『夏見台第4次』 船橋市夏見台<第4次>遺跡調査団  
M031. 1982. 『龍角寺ニュータウン遺跡群』 龍角寺ニュータウン遺跡調査会  
M032. 1982. 『名木大台遺跡』 名木大台遺跡調査会  
M033. 1982. 『定原遺跡』 千葉市遺跡調査会  
M034. 1983. 『寺崎遺跡群発掘調査報告書』 寺崎遺跡群調査会  
M035. 1983. 『本郷台II』 船橋市遺跡調査会  
M036. 1983. 『伊篠越徳遺跡調査報告』 山武考古学研究所・酒々井町伊篠越徳遺跡発掘調査会  
M037. 1983. 『千葉県市原市 毛尻遺跡発掘調査報告書』 毛尻遺跡調査会・山武考古学研究所  
M038. 1984. 『北押し遺跡調査報告書』 酒々井町北押し遺跡発掘調査会  
M039. 1984. 『鍋木諏訪尾余遺跡』 鍋木諏訪尾余遺跡調査会  
M040. 1984. 『千葉県下総町文化財調査報告書II』 下総町遺跡調査会  
M041. 1984. 『鼻欠遺跡』 鼻欠遺跡調査会・袖ヶ浦町教育委員会  
M042. 1985. 『西ノ窪遺跡』 西ノ窪遺跡調査会・袖ヶ浦町教育委員会  
M043. 1985. 『佐倉市大崎台遺跡群I』 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会  
M044. 1985. 『東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡、滝木浦II遺跡発掘調査報告書』 菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡調査会  
M045. 1985. 『南かんみょう遺跡発掘調査報告書』 千葉市遺跡調査会  
M046. 1986. 『酒直遺跡発掘調査報告書』 酒直遺跡発掘調査会  
M047. 1986. 『坂戸遺跡』 坂戸遺跡埋蔵文化財発掘調査団・坂戸遺跡調査会  
M048. 1986. 『千葉県東金市 作畑遺跡発掘調査報告書』 作畑遺跡調査会  
M049. 1986. 『宗吾西鷲山遺跡』 宗吾西鷲山遺跡調査会  
M050. 1986. 『荒追遺跡群』 荒追遺跡群調査会  
M051. 1986. 『大原遺跡 ～県営畑地帯総合土地改良事業(成田地区)』 多古町遺跡調査会  
M052. 1987. 『長塚十二山遺跡』 長塚十二山遺跡調査会  
M053. 1987. 『小川台遺跡発掘調査報告書』 光町小川台遺跡調査会  
M054. 1988. 『大菅向台遺跡』 下総町遺跡調査会  
M055. 1989. 『織幡地区遺跡群発掘調査報告書』 小見川町埋蔵文化財調査会  
M056. 1989. 『小滝涼源寺遺跡』 朝夷地区教育委員会  
M057. 1990. 『印内台遺跡第7次第8次』 船橋市遺跡調査会  
M058. 1990. 『小原子遺跡群』 山武考古学研究所  
M059. 1990. 『成田市都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 成田市囲護台遺跡発掘調査団  
M060. 1991. 『印内台遺跡第4次』 船橋市遺跡調査会  
M061. 1992. 『千葉県八日市場市 飯倉鈴歌遺跡発掘調査報告書』 飯倉遺跡発掘調査会  
M062. 1996. 『立木南遺跡』 千葉大学文学部考古学研究室  
M063. 1997. 『千葉県千葉市 居寒台遺跡 ～共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査』 居寒台遺跡発掘調査団  
M064. 2000. 『東条地区遺跡群発掘調査報告書 ～ほ場整備事業(大区画)東条地区に伴う埋蔵文化財調査』 鴨川市遺跡調査会

IV. 報告書以外

N. 資料紹介等

- N001. 1971. 杉原莊介・小林三郎 他 「六 古墳文化～土師時代」『市川市史』1 市川市  
 N002. 1981. 市川博物館 「IV.奈良・平安時代」『収藏品図録I』 ～市川市川博物館図録10  
 N003. 1988. 大谷弘幸・笹生 衛 「関東地方の条里」『月刊 考古学ジャーナル』310 ニュー・サイエンス社  
 N004. 1988. 小高春雄 「東南部地区における古代農業資料」『研究連絡誌』23 千葉県文化財センター  
 N005. 1989. 古墳時代研究会 「古墳時代研究」Ⅲ 古墳時代研究会  
 N006. 1996. 『館山市長須賀条里制遺跡現地説明会資料』(財)千葉県文化財センター  
 N007. 1997. 大谷弘幸 「穂摘み具の変遷と稲の穂首刈り ～市原条里制遺跡の鉄製穂摘み具から」『研究連絡誌』46 (財)千葉県文化財センター  
 N008. 1998. 佐藤 隆・新田浩三 「市原条里制遺跡(県立スタジアム)の調査成果 ～大規模低湿地遺跡の調査方法の検討」『研究連絡誌』49 (財)千葉県文化財センター  
 N009. 1999. 城田義友・吉野健一 「安房の古墳時代祭祀 ～館山市東田遺跡の事例」『研究連絡誌』53 (財)千葉県文化財センター  
 N010. 2000. 『ネギ畑の下に古代の畑発見! ～光町芝崎遺跡現地説明会資料』(財)東総文化財センター

逐次刊行物

- b 001.020. 1994. 『千葉県文化財センター年報』No20 ～平成6年度 (財)千葉県文化財センター  
 b 002.021. 1995. 『千葉県文化財センター年報』No21 ～平成7年度 (財)千葉県文化財センター  
 b 003.022. 1996. 『千葉県文化財センター年報』No22 ～平成8年度 (財)千葉県文化財センター  
 b 004.023. 1997. 『千葉県文化財センター年報』No23 ～平成9年度 (財)千葉県文化財センター  
 b 005.024. 1998. 『千葉県文化財センター年報』No24 ～平成10年度 (財)千葉県文化財センター  
 b 006.025. 1999. 『千葉県文化財センター年報』No25 ～平成11年度 (財)千葉県文化財センター  
 b 007.026. 2000. 『千葉県文化財センター年報』No26 ～平成12年度 (財)千葉県文化財センター  
 c 001.001. 1983. 『(財)君津郡市文化財センター年報No1・研究紀要I』(財)君津郡市文化財センター  
 c 002.015. 1996. 『(財)君津郡市文化財センター年報』No15 平成8年度 (財)君津郡市文化財センター  
 c 003.016. 1999. 『(財)君津郡市文化財センター年報』No16 平成9年度 (財)君津郡市文化財センター  
 c 004.017. 2000. 『(財)君津郡市文化財センター年報』No17 平成10年度 (財)君津郡市文化財センター  
 c 101.000. 1991. 『千葉県君津群袖ヶ浦町 金井崎遺跡発掘調査報告書』研究紀要別冊 (財)君津郡市文化財センター  
 d 001.001. 1994. 『市原市文化財センター年報』平成2年度 (財)市原市文化財センター  
 f 001.006. 1990. 『財団法人印旛郡市文化財センター年報』6 平成元年度 (財)印旛郡市文化財センター  
 j 001.001. 1997. 『(財)東総文化財センター年報』No1 平成3・4年度 (財)東総文化財センター  
 j 002.006. 2000. 『(財)東総文化財センター年報』No6 平成11年度 (財)東総文化財センター  
 j 003.007. 2001. 『(財)東総文化財センター年報』No7 平成12年度 (財)東総文化財センター  
 m001.001. 1984. 大村 直 「市川市須和田遺跡出土の鉄製品」『昭和58年度市川市考古博物館年報』 市川考古博物館

# 写 真 图 版



芝野遺跡空中写真



芝野遺跡土器配列遺構



菅生遺跡空中写真



市原条里制遺跡古代水田跡



西根遺跡堰検出状況



長須賀条里制遺跡E区SD-1木樋





椎名崎古墳群SX-4畠跡



芝野遺跡農具未製品出土状況



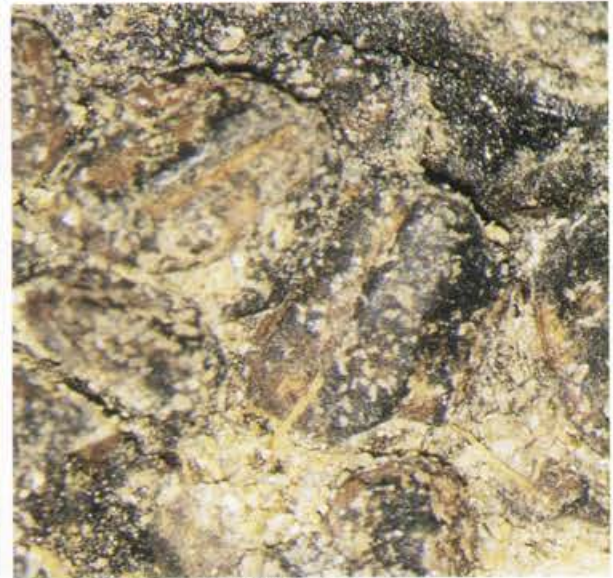
国府関遺跡木製品 (財団法人総南文化財センター提供)



市原条里制遺跡穂摘具出土状況



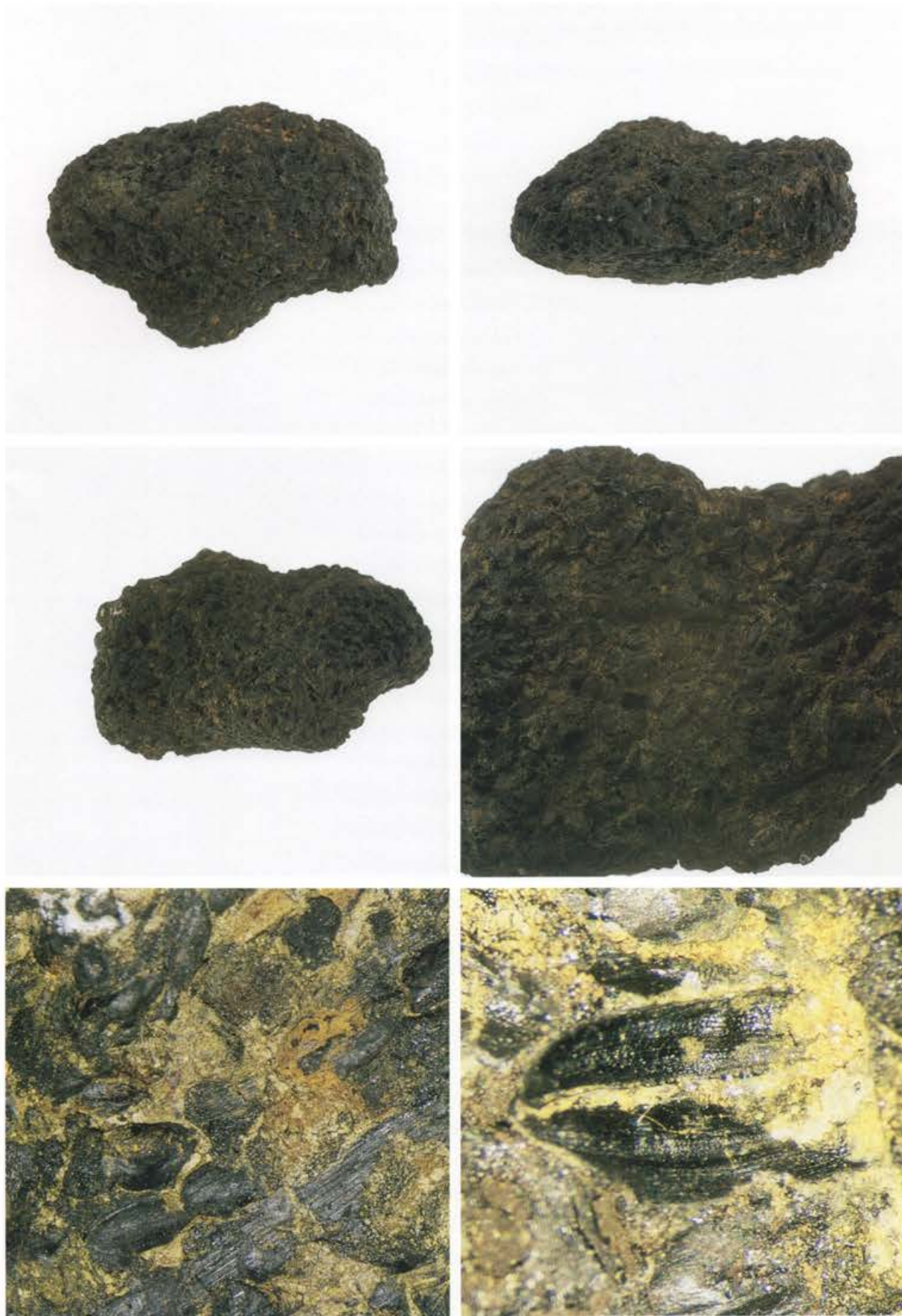
草刈遺跡K区151号住居出土マメ類



市原条里制遺跡並木地区SD008-912「おにぎり状炭化物」



市原条里制遺跡並木地区SD008-1239 「おにぎり状炭化物」



市原条里制遺跡市原地区 4区3E026「おにぎり状炭化物」

千葉県文化財センター研究紀要23

---

平成14年9月30日 発行

発行者 財団法人 千葉県文化財センター

千葉県四街道市鹿渡809-2

電話 043 (422) 8 8 1 1

印刷所 株式会社 弘文社

市川市市川南2-7-2

---